

NERV航空隊隊長綾波

浩介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は2015年

突如現れた謎の巨大生物

国連軍に所属する「彼」も出動する

そしてそれに伴うNERVへの転属命令

チルドレンではないもう一人の「綾波」の一年間

目次

本編

| | | |
|------|-------------|-----|
| 第0話 | 10年後 | 1 |
| 第1話 | 転属 | 9 |
| 第2話 | ようこそNERV江 | 25 |
| 第3話 | サードチルドレン | 47 |
| 第4話 | 綾波の一日 | 60 |
| 第5話 | 初出撃 | 84 |
| 第6話 | 家出 | 100 |
| 第7話 | 陰に見えるもの | 110 |
| 第8話 | 月の笑み | 125 |
| 第9話 | 陰謀 | 146 |
| 第10話 | エースパイロットの条件 | |

ア

| | | |
|------|---------------|-----|
| 第1話 | 過去 | 163 |
| 第2話 | 心と心 | 201 |
| 第3話 | 平和な日々 | 226 |
| 第4話 | 人の敵は | 246 |
| 第5話 | 招待状 | 272 |
| 第6話 | 中心教義の奥 | 291 |
| 第7話 | 人の定義 | 312 |
| 第8話 | それぞれの価値 | 326 |
| 第9話 | 新たなる任務 | 351 |
| 第10話 | 人として | 372 |
| 第11話 | ハードウェアとソフトウェア | 395 |

| | | | | | | |
|-----|-------------|--------------|-----|------|-------------|------|
| 654 | 第30話 | 総員、第一種戦闘配置 | 631 | 第42話 | 明けの明星 | 1022 |
| | 第29話 | 現実と理想 | 590 | 第41話 | 結成！NERV交響楽団 | 998 |
| | 第28話 | 奪う者、創る者 | 556 | 第40話 | 生きるということ | 938 |
| | 第27話 | 失う怖さ | 522 | 第39話 | 人の歴史 | 898 |
| | 第26話 | 綾波家へご招待 | 491 | 第38話 | 選択 | 865 |
| | 第25話 | 未来への一步 | 466 | 第37話 | お守り | 832 |
| | I can redo. | | | 第36話 | 大切なもの | 802 |
| | 第24話 | I was wrong. | 443 | 第35話 | 綾波と第二使徒 | 772 |
| | vance. | | | 第34話 | 黒幕 | 743 |
| 420 | 第23話 | I cannot add | | 第33話 | 歌と想い | 719 |
| | 第22話 | I am alone. | | 第32話 | 表と裏 | 691 |
| | | | | 第31話 | 覚醒 | |

| | | |
|---------|-------------|------|
| 第20・55話 | シン・第一次NER | 1258 |
| 第43話 | 綾波の想い | 1052 |
| 第44話 | パンドラの箱 | 1080 |
| 第45話 | Ambivalence | 1107 |
| 第46話 | 綾波のいかり | 1139 |
| 第47話 | 意思 | 1180 |
| 第48話 | とある特務一尉の日常 | 1203 |
| 第49話 | 綾波とアルコール | 1233 |

| | | |
|---------|-------------|------|
| 第20・55話 | シン・第一次NER | 1258 |
| 第38話 | If 選択 | 1508 |
| EX4 | 行き違い | 1482 |
| EX3 | コウノトリはいつ来るの | 1456 |
| EX2 | 荒波 | 1417 |
| EX | 綾波の災難 | 1380 |
| と・・・ | | 1357 |
| 第32・5話 | もう一人の綾波さん | 1319 |
| 第27・5話 | 処分の行方 | 1304 |
| 第26・5話 | 変わる私 | 1277 |
| V | 対人訓練 | |

I
F
綾波カルテット



1567

本編

第0話 10年後

そこには一人の男が立っていた。

彼の視線の先には、太古に生まれ大地というものが生まれた時から止まることなく活動を続ける水と塩分、ミネラルなどが混じったものが映されていた。

「あの時」にも活動していたそれは現在も変わらない

彼の足もとには五つの吸い殻が落ちている。

「ごみはゴミ箱に！」と書かれた看板に一瞥くれるが、感銘を受けることなく蒼い海に視線を戻す。

「あの時から10年か……」

少し物思いにふけながら新しい煙草を取り出した。

ふと背後に人の気配を感じる。

振り返るとそこには黒い髪の女性とも思える人が立っていた。だが、薄いオレンジ色のポロシャツに少し黒いズボンをはいている人物はあいにくにも女性ではなかった。

「お久しぶりです。…綾波特務一尉」

「おいおい、もう軍人ではないんだから一尉はやめてくれ。」

「そうでしたね。綾波……さん。」

彼は少し困ったようにそう訂正した。

「まだ慣れないのか。10年前にコウスケでいいと言ったろ？」

「一応成人ですし、そう呼んだほうがいいかと……」

「彼女がもう綾波ではないからかな？」

綾波と呼ばれた男はそういうと少しにやけていた。

「あやなみ！」

「もう！ からかわないで下さいよ。」

「すまん。久しぶりに会えたから少し浮ついていたようだ。」

そういうと声もなく笑った。

「しかし随分とたくましくなったな。碇シンジ。」

「そうですね？ まあ、綾波さんより背がおおきくなったかな？」

「こいつ……人が気にしてることを……」

「あれっ！ そうだったんですか？」

「まあ、嘘だな。」

「やっぱり変わりませんね。」

「当たり前だ。」

互いに笑いあう男たち。

「彼女は元氣か？」

「ええ。随分と明るくなりましたし、料理もうまくなりましたよ。」

「そうか。」

「ただ…」

「ただ？」

「ほかの女性と話していると…」

「あの眼でじつと睨んでくるってか？」

「ええ…」

（あの眼からは逃げられんからな。）

などと思いつつあの紅い眼を思い出す。

生命の神秘さを表すような紅い眼ににらまれば、逃げ出すのも至難の技だろう。

「あいつは嫉妬深いからな…」

「そのあとのご機嫌取りも大変ですよ。」

「そのうち後ろからグサツとか」

「やめてくださいよ！ 縁起でもない！」

「ははは、すまんすまん。」

「僕は彼女を愛すると誓ったんです。今更ほかの人になびくなんてありえないです。」

「はいはい、十分に分かってるよ。でも、こんなところで愛の告白とはな……」

そういうとシンジは真っ赤になっていた。

「相変わらずだな。その様子なら大丈夫そうだな。」

「……………」

いまだにシンジは赤くなっている。

「大丈夫だと思うが……彼女を泣かせるようなことはするなよ？ 俺の大事な娘なんだからな。」

そういつて新しい煙草に火をつける。

「まだ止めてなかったんですね。」

「当たり前だ。」

「体が壊れますよ？」

「まだまだ大丈夫だ。」

「そうはいつてもレイが心配してましたよ。」

「お前は心配してくれないのか？」

「僕はあきらめましたよ。」

ミサトさんのビールみたいなものでしょと言ひシンジは困った顔をする。ふとシンジは何かに気づいたように後ろを振り返った。

遠くから人がシンジたちの方に歩いてくる。

シンジが手を振ると少し小走りになった。

徐々に大きくなる人影は白かった。

今日は白いワンピースを着てきたようだ。

「待った？」

「ううん。僕も今来たところだよ。」

「そう。」

そういつて安堵の表情を浮かべる。とはいっても表情自体はさほど変わらないように見える。

それがわかるのはごく一部の人間だけだろう。

「久しぶりだな。レイ。」

「こんにちは。特務一尉」

「おいおい、もう軍人じゃ……ってさつきも似たようなことがあつたな。」

そう言つて苦笑いを浮かべた。

「綾波特務一尉。」

「それじゃ変わらんだろ。」

「……………コウスケさん」

「…まあいいか。」

やれやれとあきらめられたように彼「綾波コウスケ」はつぶやいた。お父さんと呼んで欲しかったのだ。

とは言っても24歳と39歳

15歳差というのは何とも微妙だった。

兄というには離れすぎてるし、父と呼ぶには近すぎた。

法律上では一応父であったが

「さて、そろそろ行くか。」

「そうですね。」

彼女は空のように蒼い髪を縦に振った。

・・・

「運命の日」、所謂最終決戦より10年

気候はセカンドインパクト後と変わらないが、人類社会はセカンドインパクト以前にまで復旧した。

いまだにSEELEの残党や地域間での紛争は絶えないが、混乱初期に立ち直った日

本では平穏な日々を送っていた。

レストランへと向かう途中、綾波コウスケは二人を見やった。

(あの日から10年……あの一年間は一生忘れられんな。)

ふとあの一年間を思い出す。

2015年

この年は人類の大きな転換期であつたし、綾波コウスケにも少なくない影響を及ぼした年であつた。

あれがなければ彼はここにいなかっただろうし、軍人をやめることもなかっただろう。

娘となつた綾波レイにも出会うことはなかっただろう。

(運命か……)

運命などという言葉を嫌つていた。

自分の意志で生きるといふ人の本能みたいなものを超越的な存在が否定しているように思えるからだ。

この時ばかりは運命というほかに言葉がないように思える彼であつた。

(あの時は大変だつたな……)

そう思うと彼は煙草をポケット灰皿にしまい込み、再びあの一年間を思い返してい

た。

思い出される数々のシーン。
煙はいまだに青い空を漂っていた。

第1話 転属

時に2015年

世界は俗にいうセカンドインパクトを乗り越え再び繁栄へと続く階を駆け上がり、それが永遠に続くものだと思われていた。

だが、それは人類が生み出したひと時の夢物語でしかなかった。

蒼く透き通った太平洋の中を悠遊と泳ぐそれは人類が抱いた幻想を打ち破るには十分すぎる「力」を持っていた。

「太平洋にて未確認物体接近！」

「物体に金属反応なし。」

「総員第一種警戒体制」

定まったマニュアルに従い人々が慌ただしく動き回る。

それは2000年以降に起こった地獄での教訓をもとに作成されたものである。

「しかし金属反応がないとはいったいどういうことか？」

それはごく一般的な疑問かもしれない。

人類が何かを創造するとなれば金属を使用するのが主流であるからだ。

無論バイオテクノロジーというのもありうるだろう。

だが、「それ」はあまりにも大きすぎた。

未来ではどうかはまだわからないが、この時の人類では「それ」を生み出す力も余裕もなかった。

いや、厳密に言えば国連の非公開組織「NERV」では違うのであるが、非公開ゆえに「機密」を盾に情報が公開されていないのだ。

「ともかくここを目指しているのは間違いない。」

「湾岸の部隊配置はどうか？」

「すでに配置が完了しています。」

「では目標が射程圏内に入り次第攻撃を開始せよ。」

この時すでにあらゆる手段を講じて「それ」にコンタクトを試みていたが、すべて無駄に終わっていた。

直接接触を試みた潜水艦が一隻「それ」によって破壊されていた。

乗員の生還は絶望的だろう。

「目標がレッドゾーンに突入します。」

「攻撃開始！」

司令官の号令とともに湾岸に配置された部隊が一斉に火を噴いた。

「目標に着弾を確認！」

「やったか？」

しかしその希望はあっさりと打ち破られた。

「目標依然健在！」

「なに！」

爆煙の中から現れる「それ」を見て驚愕する一同

「攻撃を継続せよ！」

スクリーンからは休みなく「それ」に破壊の雨を降らしていた。

突如白い光が映し出される。

発令所に響く轟音

「どうした！」

「目標からの攻撃を確認！」

「湾岸の戦車部隊壊滅！」

「ばかな……」

「第二波来ます！」

再び怪しく光る白い仮面

湾岸の指揮を任された司令官がみる最後の光景であった。

とある航空基地

彼は大変不機嫌そうであった。

「どうした？　しかめっ面なんかして。」

「当たり前だろう。せつかくの休暇がパーになったんだ。」

「そいつはご愁傷様。」

「この野郎……」

「しかしいきなりスクランブルとは大事だな。」

「ここのところ平和だったからな。」

「まあ何せよ急ごう。」

「ああ。」

ブリーフィンググループ

「今回は……」

そういうと基地司令はオペレータを促した。

スクリーンを見た隊員たちは驚愕の表情を浮かべる。

無理もない。

人智をはるかに超える「それ」を見て驚くなというほうが無理だろう。

「突如出現した正体不明の生命体の迎撃に当たる。」

スクリーンには友軍機がちらほらと映っている。

見たところ成果を上げていないようだ。

「見て分かるようにいまだに敵生体にダメージを与えていない。諸君らも迎撃に加わり敵生体の撃破が今回の任務である。何か質問は？」

一人が手を上げる

「この生体は何なんでしょうか？」

「残念ながらいまだにわかっていない。」

「……………」

「わかってるのはこれ以上進行を許せば一般市民に被害が出るということだ。」

野太い司令の声に一同は静まりかえる。

謎の生命体の進行。

それはいまだに宇宙人との邂逅を果たしていない人類にとってあくまで娯楽の一部であった。

しかし夢でも虚構でもない現実で起こっているのだ。

「ほかに質問は？」

よくわからないものに対して何を聞けばいいのか？

一瞬のしかし永遠とも思える静寂が部屋を包み込んだ。

「以上で解散する。諸君の健闘を祈る。」

...

「しかしたまげたな謎の生命体か…」

「……」

「なんにせよやれることはやるか。」

「そうだな。」

「お互いに生きてかえってこような。」

「そうだな。」

「なんだよ辛気くせえな。うちのエースらしくないぜ。」

そう彼は綾波コウスケにいった。

彼とコウスケは3年来の付き合いであった。

いまだに紛争の絶えない世界で幾度となく死線を潜り抜けお互いに戦友と認識するまで時間はかからなかった。

「そうだ。今回の任務が終わったら飲みに行こうぜ。」

「楽観的だな。」

「そうじゃなきや、やってられねえよ。」

「そうだな。」

コウスケは表情を緩める。

「ここであれこれ考えても仕方ないのだ。」

「またな戦友！」

それがコウスケの見た戦友の最後の姿であった。

・
・
・

S u — 3 7

それがコウスケの愛機である。

技術の進歩で旧式になりつつある愛機をコウスケは手放すつもりはなかった。

幾度となく新型への乗り換えを勧められたが、すべて断っていた。

長年をかけて調整したバランス、操縦桿、コクピット

それらがすべて気に入っているのは無論であり、何よりも彼にも信条があった。

それは

「機体の性能の差が戦力の決定的な差にはならない」

であった。

実際経験の浅い新兵を最新機に乗せても使いこなせない。

それは熟練兵もそうだろう。

いや、熟練兵だからこそその辺をわきまえていると思われる。ならば無理に新型に乗るよりは使い慣れた機体に乗ったほうが生還率は高いと考えるのだ。

コウスケはそう考え愛機のチェックを行っていた。

・・・

未知の生命体と戦闘が開始されてすでに数時間

コウスケも戦闘区域を飛んでいた。

「こちらアロー3目標を確認。」

「了解。攻撃を開始せよ。」

「了解。」

攻撃命令を受け愛機を操る。

うまく側面に回り込み機銃を打ち込むが効果がない。

「こちらアロー3効果がない。」

「攻撃を継続せよ。」

「……了解。」

(死に行くようなものだな…)

先ほどから友軍と連携して攻撃しているがまったく効果がない。

人型をしている「それ」はまるで見えない壁のようなものに遮られ攻撃が届かない。「それ」は腕からパイルバンカーのようなものを友軍機にぶつけている。

火を噴く友軍機たち

そんな友軍機を「それ」は障害物のようにしか思っていないようだった。

まるで道端に落ちていている石のように

(いったいどうすればいいんだ?)

そう思うのは彼だけでないだろう。

栓無き事とはいえそう思うのをやめられない。

機銃、ミサイル、特殊兵装すらも効かない。

「……………」

そんな相手にどうすればいいのか?

知らずのうちに焦りを感じる。

(いかな…)

そう思うと焦りを抑え込み冷静になる。

戦場で、ましてや個人戦となる傾向の強い空中戦で焦るものは長く生きていられな

い。

どのような戦場でも焦りは無への回帰、いわば死に直結する。

とりあえず有効だと思える方法を試す。

が効果がない。

ふと警報が聞こえる。

(なんだ?)

そう思うとビルから突如巨人が現れた。

紫の装甲を纏うそれは現世に現れた鬼ともとれた。

紫の鬼は「それ」に突進する。

「それ」は鬼に気を逸らしたように思えた。

(!)

コウスケはスロットルと操縦桿をうまく操り「それ」の背後に回り込む。

トリガーを引きそれに合わせるように愛機は破壊の雨を降らせる。

雨は「それ」の背後に吸い込まれる。

すると雨が着弾したところから青い液体、血のようなものが噴き出る。

「アロー3からHQへ……目標への着弾を確認！ ダメージを与えている。」

通信機から歓喜の声上がる。

勝てる!!

そう思っても不思議ではない。

いままで傷一つつけられなかったのだ。

数時間の努力の末、勝利への一步を踏み出したと思つた。

通信機越しに希望という名の勝利への興奮が伝わってくる。

しかし現実は甘くなかつた。

「それ」と取っ組み合いをしていた鬼が「それ」に突き飛ばされ、轟音とともにビルの中に沈んでいた。

慌ただしく收容される鬼

そこに通信がはいった。

「全機戦闘区域を離脱せよ。」

突然の撤退命令。

少々いぶかしげに思いつつもコウスケは空域を離脱する。

すでに愛機の残弾が残りわずかであつたのだ。

空域を離脱しつつ基地へと帰る彼が見たものは「それ」とともに爆発に飲まれる街があつた。

・
・
・

基地に帰るとそこはボロボロになつた建物たちであつた。

戦闘中に「それ」の攻撃を受けたのだ。

直撃を避けたため滑走路は生きていたが、そこらじゅうに人が横たわっていた。不意に戦友が気になりあたりあたりを見回す。

「どうやらないようだ。」

そこにオペレーターの一人が通りかかった。

あまりにも負傷者が多いため治療班に合流していたようだ。

「あいつはどうした?」

オペレーターは訝しげな表情をするが、コウスケの顔を見ると途端に暗くなった。

「あいつはどうした?」

オペレーターの表情から嫌な予感が脳裏に横切った。

杞憂であると思ひ込みたがったが現実には彼を裏切った。

「……戦死なさいました……」

「……そうか」

戦死

軍人ならばいつかは来ようそれはいつでも覚悟の上であった。

しかし戦友の死、ましてや死線とともに潜り抜けてきた戦友とあつては無情にもなれない。

一瞬怒りと憎しみが生まれるが、理性で抑えた。

戦場で負の感情を出したものは生きて帰れないからだ。

負の感情を背負ったまま爆散していく同僚をコウスケは幾度となく見てきた。

(じゃあな、戦友……また会おう。)

それはもう果たされることのない約束

戦友と大切だった人との約束を胸に彼は前へ進んでいく。

気持ちを落ち着かせコウスケはゆつくりと自分の部屋へ戻っていくのであった。

彼の手には火のついた煙草がもうもうと白い煙を吐いていた。

・
・
・

しばらく戦闘待機が続く中「それ」が倒されたとの報告があった。

ゆえに戦闘待機は解除され張りつめた空気が解放された。

しかし重苦しい空気は変わらなかった。

街一つ、戦死者、負傷者

それらを考えるととても明るくはなれない。

それでも未知の生命体を倒したという事実が人々を空元気へと導く。

数日もすれば元どおりであろう。

謎の生命体に対しては厳しい箝口令が敷かれた。

・
・
・

二日後コウスケは司令室に呼び出された。

コンコン

「失礼します。」

中には当然ながら司令が待っていた。

「綾波二尉参りました。」

「ごくろう。そこにかけてまえ。」

「……はっ」

コウスケはあてがわれた椅子に座る。

「先日はご苦勞であった。」

「……………」

相変わらずの野太い声ではあったが少々生気が足りない。

どうやら少しやつれているようだ。

「先日の戦闘で目標にダメージを負わせたのは事実か？」

「はい。目標への着弾を確認後、血のようなものを確認しました。」

「さすがはうちのエースだ。」

「……………」

ほめているのだろうか失ったものを考えると素直に喜べないコウスケであった。

「ところで今日は重要な話がある。」

コウスケは身構えた。

「こういう場面を何度か経験したコウスケは転属であることを正確に読み取った。
(また海外派遣かな…)

「何度か紛争地域に派遣されたことのあるコウスケはそう予測した。」

「ここに詳細な資料がある。」

「といって司令官は資料を渡してきた。」

資料を手に取り読み始めるコウスケは驚きを隠せなかった。

「これは…」

「それ以上は言うな。」

「……………」

「ともかくいままでご苦労であった。ここで君に出会えたことは誇りに思う。」

「……………」

「明日には出発するように。」

「……………了解。」

「下がりましたませ。」

「失礼します。」

コウスケは司令室を後にした。

(まさかこうなるとはな…)

コウスケの手には転属命令書が握られていた。

そこにはこう書かれている。

綾波コウスケ二尉

2015年5月9日付で「特務機関NERV」への転属を命じる

簡素に書かれた命令書

それが彼の運命を変えることになるとはだれも思わなかった。

第2話 ようこそNERV江

セカンドインパクトにより地球の軸がずれて早15年

温帯の中にあつた日本は寒さを忘れた地域になつていた。

その中に生きる彼は今、熱いとは無縁の人工物の中にいた。

「……がNERVか……」

NERVへの転属命令を受けた綾波コウスケはゲートの前に立っていた。

まるで駅の改札口を思わせるゲートは一面白で統一されており無言のプレッシャーを与えているかのように見えた。

そこに黒い服を着てサングラスをかけた男が一人立っていた。

「失礼、……へ転属してきた綾波ですが……」

汗一つかかずに立っている黒服は正直不気味であつた。

「……綾波二尉ですね？お待ちしてました。どうぞこちらへ」

そういつて改札にカードを通した。

認証音の後に開いたゲートは軽い音を立てて開いた。

コウスケは黒服の後に続いてNERVへ一歩踏み出した。

（ここはわかりづらい構造をしているな…）

黒服の後に続いて歩くコウスケはそう思った。

長いエスカレータ、白く塗装され大変入り組んでいる通路

（こんなところで生活していたら気が狂いそうだな）

などと感想を述べつつ黒服の後に続く。

永遠に続くと思われたが、黒服がドアの前で止まった。

ここが目的地らしい。

「綾波二尉をお連れしました。」

「……入りましたまえ。」

ドアが開いた。

部屋は薄暗く無意味に広い空間だった。

奥には二人の男がいた。

長身の男がうなずくと黒服は部屋を出ていった。

「綾波コウスケ二尉転属命令を受け参りました。」

「遠路はるばるご苦労だった。」

長身の男がそう告げる。

「私はNERV副司令の冬月コウゾウだ。」

「……………総司令の碇ゲンドウだ。」

二人は対照的だった。

茶色い服を着る白髪の老人は人懐っこそうな雰囲気ですぐ争い事には向かなそうに見えた。

椅子に座る顎鬚の男は黒い服を着ている。

顔の前に手を組んでおり、サングラスも着用しているので表情がわかりにくく、なかなか威圧的に見えた。

「今日から君にはここで勤務してもらおう。正式な辞令は明日1000に交付する。」

「了解。」

これ以上話すことはないのか、グラサン男は沈黙した。

「君にはここで今までどうりパイロットとして働いてもらおう。所属はNERVの航空隊だ。と言っても君一人だ。」

「……………」

「また我々の主力兵器を率いてもらう。権限は作戦部長の次となる。よって作戦部の副部長も兼任になる。階級も特務二尉となる。」

「！」

驚くなどというほうが無理だろう。パイロットが隊長どころか参謀にもなったのだ。普通ならあり得ない。

「驚くのも無理もない。ここはもともと研究機関として発足した。そのため技術畑の強いここでは戦い慣れた人間が少ない。先日のあれを君も見ているだろう。」

忘れるわけがない。

あまりにも巨大な力を見せつけられたのだ。

「我々は謎の未知の生命体：便宜上「使徒」と呼称している。その使徒を殲滅するのが目的だ。」

使徒

神の使い

人智を超える力を持つ生命体にはびつたりの名称と思えた。

「現在、使徒に対抗できるのは我々の持つ主力兵器「EVANGELION」のみだ。」
(EVANGELION：あの鬼はそういうのか：)

ビルから現れた紫の鬼を思い浮かべる。

「しかし君は通常兵器で使徒にダメージを負わせた。」

「あの一撃だけですよ。」

「それでも事実には変わりはない。よってEVANGELIONの支援要員として今後

の戦いにも出てもらう。」

「今後ということは使徒がまたあらわれるということですか？」

「現状では何も言えん。だが、ありうるだろうと我々は考えている。」

「……………」

「ここには迎撃用の兵器があるが起動力がない。」

「…つまりは陽動、おとりになれということですか。」

「場合によっては威力偵察もありうるな。」

「……………」

「そして君には現場の判断で指揮をできる権限が与えられる。」

（つまりはとっさの判断で戦闘を有利にしろということか。）

そう思うと不思議はない。

発令所には最新のデータがひっきりなしに届くが、それでも多少のタイムラグが発生してしまう。

そのタイムラグで致命的なダメージを負い敗北するということはたびたびあるものだ。

なればこそ現場の判断が優先されるのはおかしくない。

「我々は使徒との戦いで負けることはできません。敗北すればセカンドインパクトの二の舞

だからな。」

「セカンドインパクトは大質量隕石によるものではないのですか?」

「公式の発表はそうなっているが、セカンドインパクトは使徒によつて引き起こされたのだ。」

「そんな…」

「これは事実だよ。」

(セカンドインパクトは使徒が原因…)

「使徒がなぜここに襲来するかはいまだにわからないが、その目的はセカンドインパクト級の災害を起こすためだと考えられている。」

「つまり我々が負ければ…」

「人類の絶滅ということになるな。」

「……………」

「以上だがなにか質問はあるかね?」

「……………」

「ではこれからよろしく頼む。これはここのIDカードだ。中にはキャッシュカードの機能もある。」

すると沈黙していたグラスン男が起動した。

「後のことは赤木博士に聞きたまえ。」

いつの間に入ってきたのか、一人の女性が立っていた。年齢は自分と変わらないだろうか。

女性は金髪なのだが眉毛は黒く白衣を着ていた。

「技術局一課課長、E計画担当者の赤木リツコです。」

「綾波コウスケです。」

リツコは実験動物を見るような眼で見ってくる。

外見からおおよその情報を得て分析でもしているのだろうか。

実に科学者らしかった。

「……では下がりましたまえ。」

「失礼します。」

リツコの後に続き部屋を出る。

部屋は再び二人の空間に戻る。

「碇いいのか？」

「問題ない。」

「UNのスパイかもしれないぞ。」

「……だとしても我々は使徒を殲滅せねばならない。」

「……………」

「そのためには駒が多くあれば有利に進められるだろう。使えなければ切り捨てるだけだ。」

「自分の息子もそうか？」

「……………」

「まあいい。俺はお前の計画に乗ったんだからな。」

「今はそれでいい。」

「……………」

「……………」

「今からあなたに見てもらいたいものがあります。」

「そういつてリッツコはモニターを起動する。」

「第三使徒との戦闘記録よ。」

「使徒との戦闘記録を見続ける」

「……………」

「感想はどうかしら？」

「前半はまるで素人だな。敵を前にして転ぶなんて殺してくださいと言ってるようなものだ。」

「ちなみに初号機のパイロットはこの子よ。」

この子という言葉に違和感を感じたが、すぐに払拭された。

サードチルドレン 碓シンジ 年齢：14歳 性別：男

黒い短髪に中性的な顔立ち、細い腕

とてもじゃないが争い事が得意とは言えない。

「……………子供？」

「中学生よ。ここに来るまでは普通の少年だったわ。」

「なぜ子供がパイロットなんだ？ 少年兵は違法だろう。」

「EVAは特殊だね。パイロットになれるのは14から17歳ぐらいの選ばれた子供だけなの。だから特務機関の権限で彼をパイロットに登録したの。」

もつともパイロットを選定するのは別の組織だけだねと付け加える。

「……………」

「それが今のテクノロジーの限界。」

「この子は今どうしてる？」

「学校に登校してるわね。」

「学校？」

「中学生だから」

「ああ、なるほど。」

14歳といえば中学の義務教育の途中だ。

いくら特務機関とはいえそこまでは無視できないのかと思いつつた。

「この子は素人だな。」

「ええ。」

「なぜこんな子を訓練もなしに乗せたんだ?」

「ファーストCHILDレンは起動実験と先の戦闘で重傷、セカンドCHILDレンはドイツにいるの。そしてサードCHILDレンが選定されたのはごく最近だったのよ。」

「……となれば前半の動きは納得いくな。」

いきなり呼び出されてわけのわからないものに訓練もなしに乗せられたのだ。

転んでも文句は言えまい。それは初めて二足歩行を行う幼子と一緒に一緒だ。

「だとすれば後半は納得できない。」

パイルバンカーで頭部を撃ち抜かれた初号機

人間ならば即死だろう。

だというのに再帰動し圧倒的な戦闘力を見せた。

「その時はパイロットの制御下じゃなかったわ。つまりは暴走ね。」

「そんなものの兵器として使えるのか?」

「でも使徒は殲滅しているわ。」

「……………」

兵器に求められるものは信頼性だ。

いくら火力が高くてもたびたび暴発、事故を起すようなら使い物にはならない。

そんなものは危険すぎて使えないからだ。

「ともかくEVAについてはさつき渡した資料がすべてよ。」

「わかった。」

信頼はできないが使徒を倒せるものはEVANGELIONのみ

どんなに危険でも人類の命運がかかっている以上文句は言えまい。

「それでこれなんだが……………」

第三使徒が発生させた正六角形のを指す。

「ATフィールドね。」

「ATフィールド?」

「使徒の持つバリヤーよ。NNも防げる強固なものよ。ATフィールドの前では通常兵

器はまず効かないわね。」

「なるほど……………」

(だからあれほど砲火を浴びせても無駄だったのか。)

ふと疑問に思う。

「では、どうやって初号機はATフィールドを無効化したんだ？」

「EVAはATフィールドを持つてるの。ATフィールド同士をぶつければ中和するところができるわ。」

「ならATフィールドを通常兵器にも搭載すれば……」

「それは無理ね。ATフィールドの発生原理はいまだに解明されてないの。」

「……………」

テクノロジーの限界

それを実感する。

「まだ聞きたいことはあるかしら。」

「サードチルドレンに会いたい。」

「午後には来るわ。ただ実験とかで遅くなると思うけど。」

「そうか。」

「じゃなきゃ家を訪ねてみたら？」

「どこに住んでるんだ？」

「ミサトの家よ？」

「ミサト？」

不意に聞き覚えがあるなと思った。

「そう、葛城ミサト。あなたの上司よ。」

「かつらぎ……あいつか！」

「知り合い？」

「ちよつと昔にね……」

葛城ミサト

シユミレーターを使った訓練で会ったことがあった。

戦闘機による一騎打ち

空の戦場でそうなることはまずないが、個人の技量を上げるために行われていた。

そんな中で彼女と対決することになった。

二人は対照的で情報と冷静な判断で戦うコウスケと野生の勘で動くミサト

勝敗はコウスケのものとなった。ただ苦戦に苦戦の辛勝であったが

不意にドアが開いた。

「どうリツコちよ………てあんたは！」

「その節はどうも。」

ミサトが入ってきた。

「なんであんたがここにいるのよ。」

「彼ねここに転属したのよ。作戦局一課の副課長になるのよ。」

「今度、作戦局一課副課長兼航空隊隊長に任命された綾波コウスケであります。」

そういつて敬礼した。

リツコと態度が違うがそれはミサトが軍人であることを知っているからだ。

「そんなに固くならなくていいわ。有事じゃないし。」

「そうか。」

彼も堅苦しいことは嫌いであつた。

「それにしても綾波ね……彼女とはどういう縁なの？」

「彼女？」

「そつ、ファーストチルドレン綾波レイのことよ。」

（ファーストチルドレンは綾波レイというのか……）

資料はさつき渡されたのでまだ読んでなかった。

「ただの赤の他人だ。」

「嘘おつしやい。同じ苗字なのに赤の他人はないでしょ。」

「赤の他人よ。」

リツコが遮る。

「無断で申し訳ないけどDNA鑑定の結果他人と出たわ。」

「そう……うーんレイにも家族か親族がいたとおもったのに……」

ミサトは残念そうに言う。

「まっ、これからはよろしくねん。」

「よろしく。」

軽く挨拶を返した。

「これで一通り説明は終わるけど。」

「機体は？」

「前に使っていたものを持ってきてもらったわ。」

「わかった。」

「あんまり壊さないでね。ここの予算あんまりないから。」

「安心しろ。無意味に壊したりしない。」

「もしかしたら新兵器の試験とかするかもしれないからその時はよろしく頼むわ。」

「ああ。」

リツコはモニタに視線を戻した。

「失礼する。」

「ちよつと。どこに行くの？」

「今日来たばかりだからな見回ってくるのさ。」

「ふーん。あつそうだ。今日の夜あいてる？」

「あいているが？」

「じゃあ、パーツとやりましょう。」

「何を？」

「あなたの歓迎会。私の家でやりましょう。ついでにリツコもどう？」

「あいにく私はいけないわ。」

「そう。じゃあ今度の機会に飲みにも行きましょう？」

「また今度ね。」

「じゃあね。私行くから。」

「あつ、時間……」

ミサトは部屋を出ていった。

「台風だな。」

「そうねおかげでここはいつもびしょ濡れになるけど。」

(ミサトは頻繁に来るみたいだな。)

「それじゃ施設を見回るんで失礼する。」

「これミサトの住所、わからないでしょ。」

「ありがとう。」

そういつて部屋を後にした。

・
・
・

NERV本部内を探索するうちにオペレータとの顔合わせ、整備員への挨拶を済ませ愛機の無事を確認した後、休憩室で一休みすることにした。

(そういえばまだチルドレンに会ってないな。)

時間を見ると3時を差していた。

(サード、碓シンジはまだ学校か…セカンドはドイツとなると…)

ファーストチルドレン 綾波レイ 年齢：14歳 性別：女

過去の経歴は抹消済み

E V A N G E L I O N 零号機専属パイロット

それ以外には特に書かれてなかった。

(抹消済みね…)

それに疑問を感じる。

戦災孤児だったとしてもどこでどうしたかという経歴は残る。

なのにそういつた記述が見当たらない。

写真を見るとそこには少女の顔が映し出されていた。

蒼い髪に紅い眼

それだけで他人とは違うことがうかがえる。

(アルビノというやつか…)

今は施設内の病院に入院中とのことだった。

(会いに行ってみるか。)

そう思い休憩室を後にした。

・
・
・

ナースセンターで綾波レイの病室の場所を聞き、今はその前に立っている。

コンコン

「……………」

(寝ているのか?)

病室に入るかどうか迷っていた。

(改めて訪ねるか? 相手は微妙な年頃の女の子だしな…)

一歩間違えれば犯罪者になりかねない。

(着任の挨拶に来たと言えればいいか。)

と自己完結しドアを開けた。

病室は白で統一され、パイプ椅子、ベット、窓とカーテン以外見当たらなかつた。

ベットには包帯でぐるぐる巻きにされた少女が一人寝ている。

コウスケは足を進めた。

顔にも包帯が巻かれていたが髪と目から彼女であることを確信する。

(これは……女神とやらがいたらこんな感じかな?)

などと思っていた。

「……あなた……誰?」

「俺は綾波コウスケ特務二尉……今度から君たちの上司になる。」

「……あやなみ……」

「同じ姓だが赤の他人だ。血のつながりはない。」

「……そう」

と言ってレイは視線を天井へと向けた。

(やりづらいな……まったくの無関心か……)

「まるで人形みたいだな……」

おもわず声が出てしまった。

するとレイの目がコウスケに向いた。

まるで睨んでいるように見えた。

「……私は人形じゃない。」

先ほどの言葉よりも明確に聞こえた。

「失礼、あまりにもそっけないものだから……人に人形なんていうものじゃないな。」
「……………」

レイは押し黙っている。

何やら複雑な心境のようだが、会って間もないコウスケにはわからなかった。

「とにかくこれからよろしく。お互いに頑張ろう。」

「…………それは命令ですか？」

「命令って……」

（普通、命令なんて思うか？）

「命令ではないよ。挨拶みたいなものだ。」

「…………そう」

レイは視線を天井に戻した。

「……………」

「……………」

沈黙が続く。

それを破ったのはコウスケであった。

「じゃ、俺は行くからな。」

「……………」

コウスケは病室を後にした。

・
・
・

(いったいどうすればあんなになるんだ?)

残念ながら綾波レイは普通ではないと思わざるおえなかった。

(思春期の娘とは思えないな……まるで……)

人形だ

なんて思いつつも人形じゃないというレイの言葉が脳内に響く。

(あの時は確かに意思を込めていた……だが……)

何事にも無関心

(わからん……あんな子を戦場に駆り立てるなんて……何を考えているんだ?)

思えばそれがNERVを疑う第一歩だったかもしれない。

命令ですか?

少女が発する言葉とは思えない。

(「命令ですか」か……命令には従順なのか……?)

兵士としては合格だろう。

しかし人としてはどうなのか?

「……………ふう」

思わずため息がこぼれる。

(まあ、これからだな。)

今後は戦友として立つことになるのだ。

これからの考えるとまだ一歩目に過ぎないと考えるコウスケであった。

(……何かお見舞い品でも持っていくか。)

ふと何も無い病室が目に見えかぶ。

(あの部屋には誰も来ないのかな?)

それでは寂しすぎる。

そういう同情心から明日も見舞うかなどを考えていた。

・
・
・

それがコウスケとレイの初めての邂逅であった。

第3話 サードチルドレン

午後7時40分

腕時計にはそう表示されていた。

NERVでの探索を終え、あてがわれた家へ一時帰っていたコウスケは荷物の整理を終えてとあるマンションに向かっていた。

コンフォート17

彼が向かう先の名前であった。

(歓迎会ね。)

午前中ミサトの独断で行われることとなった就任パーティー
彼は律儀にも参加することにしたのであった。

(そういえば葛城の家にはサードチルドレンがいたな。)

午前中に見た彼の写真を思い浮かべる。

(綾波レイと同じだったらどうしようか…)

などと考え少々うつな気分になる。

(でも数日前まで民間人だったのだから大丈夫かな?)

考えが堂々巡りになる。

(まっ、大丈夫だろう。)

そう思い足を進めた。

・・・

ピンポーン

「はい。」

プシューウー

と音を立ててドアが開く。

目の前には男の子が立っていた。

「あの一。どちらさまでしょうか？」

「綾波コウスケだ。」

「……ああ、綾波さんですね。どうぞ。」

「お邪魔します。」

彼の後に続き中に入った。

リビングではミサトが待っていた。

「おっそーい。」

「部屋を片付けていたんだしやうがないだろう。それに何時に来いとは言わなかっただ

ろう。」

「うっ…」

「だからまだ常識的な時間に訪ねたんだ。」

「ごめん。」

「……はあ」

（ほんとにこいつは軍人なのか？）

軍人も人なので律儀な奴、おちやらけた奴、何かたくらんでそうな奴などいろんな人がいるが、時間についてはずぼらなものはいなかった。

なぜなら数秒で有利から不利になりえる戦場で時間を守らないなど自殺行為に等しい。

なので時間だけは守るように皆なっていたのだ。

（……考えないようにしよう。）

とミサトについては考えることを放棄した。

テーブルを見るといろいろな料理が並んでいる。

正直感心した。

「これは葛城が作ったのか？」

「いえ。シンちゃんが作ったのよ。」

「シンちゃん？」

「そつ。碓シンジ君。シンジだからシンちゃん。」

「……………」

「なによ。」

「葛城…お前はそういう趣味なのか？」

「なつ…………バカなことを言わないでよ！」

「そうか、よかった。」

「中学生相手に手なんか出さないわよ。」

「……………」

「なによ。」

「…………別に」

（ほんとに大丈夫か？）

などと一抹の不安を感じる。

「…………それにしてもシンジ君がこれを作ったのか。」

「そうよん。シンジ君の料理はすごいおいしいのよ。」

「葛城、お前は作らないのか。」

「あたしだって作るわよ。」

「……そうか。」

(たぶん無理なんだろうな。)

などと思ひ、後日リツコに聞いてみようと思つた。

「料理もそろつたし始めましょうか。」

そういつてミサトはビールを渡してくる。

シンジはお茶のようだ。

「では綾波コウスケ特務二尉の転属に……乾杯！」

「乾杯。」

三つの缶がテーブルの上でぶつかり合う。

コウスケは料理に手を伸ばす。

「……うまいな。」

「でしょ?」

「お前が自慢げに言うなよ。」

「でへへ。」

「シンジ君はすごいな。」

「そうですか?」

「ああ。君の才能と言つていい。」

「そこまで褒めなくてもいいですよ。」

「いや、本気だ。いっそのこと料理人を目指したらどうだ。」

「ちよつと、うちのパイロットになんてこと言うのよ。」

「彼は14歳だろう？ EVAは17歳くらいまでしか乗れないらしいから。だから一つの道を示したままだ。」

「そう……そうよね。」

ミサトの顔が少し暗くなる。

「何せよまだ時間はあるんだ。それにやらなくちゃいけないことがあるだろう。それが終わった後でもいいだろう。」

「そうね。」

少し明るくなる。

「ところでシンジ君。本気で料理人にならないか？」

「僕はまだ何になりたいのか考えてないんで……」

「そうか。もし料理人になるなら全力で応援するぞ。」

「ありがとうございます。」

「そーいや自己紹介がまだだったな。俺は綾波コウスケ、階級は特務二尉、作戦部の副部長兼航空隊長だ。隊長と言っても俺ひとりだが」

「僕はサードチルドレンの碓シンジです。」

「なにせよ使徒が来たらともに肩を並べて戦うことになるからな。今後ともよろしく。」

「はい。よろしくお願ひします。」

「戦闘になったらお前らだけに負担をかけるようなことはしないよ。全力でサポートするからな。」

「はい。」

そういつてシンジは笑顔を見せた。

(こりゃ………天然のジゴロになれそうだな。)

中性的で整った顔立ちで屈託のない笑顔を見ながらコウスケはそう思った。

「すごいや碓つてどこかで聞いたな……」

コウスケはゲンドウのことを名前よりも格好で覚えていた。

「ああ、碓司令のこと？」

「そうだ。司令の名前だったな。」

「シンちゃんも碓司令の息子よ。」

「そうなのか？」

「あつ、はい………」

シンジは暗い表情になる。

「……何があったかは聞かないがあまり思いつめなくていいぞ。とはいっても難しいか。」

「……そうですね。」

「暗い！ そうやって物事を悪い方向にもっていくのは美德ではないよ。」

「そうよん。せっかくのパーティなんだから。」

「そうですね。」

少し明るくなったようだ。

(でも根本的な解決にはなっていないな。)

コウスケの目には少年が無理しているように見えた。

「……少しいいことを教えよう。碇司令はすごいプレッシャーをかけてくるがあれは見せかけだ。」

「見せかけ？」

「そう。俺もいろんな人を見てきたが、ああいう人は他人に対して臆病なだけだ。」

二人は目を丸くしている。

「他人に拒絶されるのが怖いからこそつちから先に拒絶する……まあ、あまり大人とは言えないな。」

二人は唾然としている。

そこまで考えが及ばなかったのだろう。

「だからこっちは拒絶するつもりはないと意思表示していけば変わるかもしれない。時間はかかるだろうが……」

シンジは複雑な表情を浮かべている。

「どうするかはシンジ君次第だな。ゆっくり考えるんだな。」

そういつてビールを一口

「それよりも料理はいいのか？せっかくのごちそうが台無しになっちゃう。」

「そうね。時間はあるし難しいことはゆっくり考えましょうシンちゃん。」

「……そうですね。」

そういつて食事が再開した。

学校はどうか、恋人はいるのかなど他愛のない会話をしながらパーティーは続いた。

「……シンジ君はレイとあったのか？」

「レイ？」

「そうだ。綾波レイ、君と同じEVAのパイロットだ。」

「一回だけ……」

「どうだった。」

「どうだったと言われても……あの時はそんな暇ありませんでしたから。」
「あの時?」

ミサトは苦い顔をしている。

「ええ、突然呼び出されてパイロットになれと言われて……何が何だかわからないうちに彼女がストレッツチャーで運ばれてきたんです。すごい怪我でした。」

「……………」

シンジは顔を俯けた。

「そしたら……父さんがその子に乗せようとして……だから僕が代わりに乗ったんです。」

「その時、碓司令以外に誰かいたか?」

「父さんとリツコさんとミサトさんです。」

「葛城、今の話は本当か?」

「ええ。事実よ。」

ミサトは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「……ひどい茶番だな。」

「茶番ですか?」

「ああ、レイは美人と言えるだろう。いや美少女か。そんな子が大怪我を負って、しかも

EVAに乗せられるかもしれないなんて思ったら、大抵の男の子は自分が代わりになんて考えるだろう。」

「……………」

「でも君の選択は間違いではないだろう。もしあんな状況でレイがEVAに乗ったら、間違いなく死んでただろうからな。そういう意味では君はレイの恩人でもあるかな？」

「恩人だなんて…そんな……………」

「それが事実だろ。まあレイ自身がどう思っているかはわからんがな。」

「その子はどういう子なんですか？」

「それは君自身が決めることだな。…そうだ明日お見舞いに行くつもりだがシンジ君も来るか？」

「いいんですか？」

「もちろんだ。同じパイロット同士顔くらいは知っておかんといけないだろう？」

「わかりました。僕も連れて行ってください。」

「なになに？ シンちゃんもレイに興味があるの？」

「なっ…………そうじゃありませんよ。ただ怪我がひどいみたいだから心配だけで…………」

「そっか、おつとのこだもんね。」

「ミサトさん！」

シンジの顔は赤い。

(思春期だもんな…)

コウスケはビールを飲み干す。

(それに比べればレイは…)

思わず二人を比較してしまう。

(もしかしたらシンジ君ならレイを救い出せる………?)

と考えて慌ててやめる。

(危ない危ない。俺は何を考えているんだ?)

二人の関係がどうなるかがそれは二人で決めるものだ。

他人が口出ししていいものではない。

「明日は学校があるだろう。」

「ええ、ただ土曜日なので午前中で終わりですが」

「なら決まりだな。明日午後2時にゲート前で会おう。」

「わかりました。」

・
・
・

パーティは家主がつぶれたためお開きとなった。

片付けも手伝おうとしたがシンジに断られたため帰ることにした。

(綾波レイと碓シンジか…)

今日会った二人のチルドレンのことを考える。

いまだに14歳

勉強、部活、恋愛など様々な経験を積み始める年頃だろう。

そんな子供たちを戦場に駆り立てる大人たち

そんな子供たちと肩を並べて戦場に出るコウスケ

正直気が重い。

(まっ、俺は二人を全力でサポートする。それしかないな。)

人類の命運を14歳の少年少女に預ける。

二人を支えられるのは戦場に立つ俺だけだろう

そんな独善的なことを考えるコウスケであった。

(なににせよ、なるようにしかならんか。)

そう思いコウスケは暗い夜道を歩いていく。

その先に見えるのは希望か絶望か

暗い夜道はまだまだ先の見えない未来を映しているかのように見えた。

第4話 綾波の一日

チツチツチツ

部屋の中には時を刻む音のみが支配していた。

カチツ

ピピピピピピピピピピピピピピ

ピッ

チツチツチツ

「朝か…」

少々忌々しげにコウスケは目を覚ました。

時刻は5を差していた。

・
・
・

綾波コウスケの朝は早い。

5時には起床、のちにランニングへと向かう。

これは軍人になってからの習慣で彼には欠かせない日課になっていた。

20分のジョギングと40分の走り込みを終えて帰宅、のちにトレーニングを30分

ばかり行う。

朝のトレーニングが終わればシャワーを浴びる。

身長は165cmとさほど高くはないが、引き締まった体に無数の傷が彼が歩んだ人生の軌跡が決して楽ではないことを教えてくれる。

シャワーの後は食事、満腹になるまで食べない。

満腹になった腹に銃弾を浴びると腹膜炎を起こす可能性が高まるからだ。

これもコウスケの習慣の一つだ。

この地点で時刻は8時

新しく支給された制服を身にまといテレビをつける。

ニュースをメインにチャンネルを変え様々な情報を得る。

とはいっても真実とはかけ離れ、各テレビ局が得られた情報をもとに無責任な推論をそれっぽく語っているだけであるが

コウスケはテレビを消した。

灰皿には3つの吸い殻が残っていた。

時刻は8時半

コウスケは出勤するために玄関へと向かった。

玄関にはかつての戦友たちの写真が誇らしげに飾ってあった。

10時には辞令と階級章を受け取った。

そのあと愛機のもとに行き今日も健在であることを確認する。

格納庫には愛機のほかに見当たらない。

なぜなら航空隊と言っても一人しかいないからだ。

タイヤ、銃口、翼、コックピット

様々な場所を整備員とともにチエックしていく。

機体の次は武装のチエックを行う。

戦闘中に武装でエラーなど死んだも当然だ。

そのため念入りにチエックを行う。

異常なしと結論付け整備員にお礼を言い、格納庫を後にする。

時刻は正午を示している。

・
・
・

食堂は人であふれかえっていたが、一人分のスペースを確保するなど簡単なことであった。

彼の前にはカレーライスが一つ

NERVに来て間もない彼はとりあえず当たりはずれの少ないメニューを注文する

ことにした。

料理に特に感心することもなく食事を進める彼の前に紅いジャケットが立っていた。

「おはよう。綾波君。」

「……おはよう。葛城。」

「前いいかしら。」

「どうぞ。」

ミスアトはコウスケの前に座った。

「あんだけ飲んだのに……化け物だな。」

「失礼ね。あんなの飲んだうちに入らないわよ。」

「……15本空けたのにか？」

「あら、あれでもセーブしたのよ？」

「まじか……」

ケロツとしてゐるミスアトを見るとおそろく本気なのだろう。

（飲み比べでこいつに勝てる奴がいるのか？）

ミスアトの体は90%ビールで出来ているのではなどと本気で思案していた。

「どう？ もう慣れた？」

「慣れたも何もまだ2日目だぞ。」

「それもそうね。」

「この地理を一日も早く覚えんとな。」

「そうよね。ここって複雑すぎるのよね。」

「確かに。一般人をここに放り込んだら三日は出てこれんな。」

「まっ、テロ対策のためにこうなってるからね。」

「そうだな。テログループにあっさり発令所を落とされましたなんて冗談にもならんからな。」

「慣れるしかないわね。」

「そういつて食事を再開する。」

「そーいや、昨日の様子から見るとお前、家事をシンジ君に押し付けてるだろ。」

「うっ……」

「もしかしてできないのか?」

「失礼なことを言わないでよ!ただ、ちよつち……」

「つまりはできないんだな。」

「……」

ミサト轟沈

「なんにせよ、過労でパイロットが倒れましたなんてならないようにな。」

「わかってるわよ！」

できないことを指摘されてちよつと興奮気味のようだ。

コウスケは話題を変えることにした。

「……綾波レイってどういう子だ？」

「あら、綾波君も興味あるの？」

「……何を考えているかは知らんがそういう対象ではないからな。」

「ちえつ。」

「おいおい、俺を犯罪者にしてうれしいのか？」

「違うわよ。ただそうなったら面白いななんて思っただけで……」

「はあー…………」

（まったくこの女は……）

「……綾波君って呼び方も彼女とかぶってるな。だからコウスケでいい。」

「わかったわ。コウスケ君」

「それでレイはどういう子なんだ。」

「昨日シンジ君には自分で確かめろって言ったじゃない。」

「ああ、シンジ君は初対面だろう？だから変な先入観を持たせたくなかったんだ。」

「ふーん。」

「で、昨日俺は綾波レイにあったんだが……」

「？」

「いまいちつかめなかったんだ。」

「え！ 碓司令に対してあんだけ語ったあんたが？」

「あまりにも透明すぎてわからなかった。だから葛城に聞いてみたんだが……」

「私もいまいちわからないのよね。」

「そうか。」

「リツコなら何か知ってるかも。あたしより長くここにいるし……あとは司令と副司令かな？」

「その二人はパスだな。となると赤木博士か……」

「リツコが一番無難じゃない？」

「そうだな。」

「ところでいいの？」

「何が？」

「時間。」

時計を見ると1時半を示していた。

「そろそろ行くか。」

「シンジ君のことよろしくね。」

「ああ。」

コウスケは食器を片付け食堂を後にした。

・
・
・

時刻は1時50分

待ち合わせの10分前だがコウスケはNERVのゲート前にいた。

これもコウスケの習慣で待ち合わせの10分前には必ず着くようにしていた。

(まだ来てないか。)

待つこと5分

「お待たせしました。綾波さん。」

「いや、今来たところだ。」

シンジはすまなそうな顔をしている。

「別に大丈夫だ。俺は習慣で時間より早く来るようにしているからな。シンジ君のせいでは無いし、時間どうりに来ているんだからそんな顔をするな。」

安堵の表情を浮かべる。

(他人のことがそんなに気になるか……父親と似ているな。)

他人に拒絶されるのが怖い二人

そういう意味では似ているのであろう。

ただ、表現の仕方が違うだけだ。

そう思うコウスケだった。

「では行くか。」

「はい。」

「そうだ。葛城にも言ったんだが、綾波では彼女と区別しにくいからこれからはコウスケと呼んでくれ。」

「わかりました。コウスケさん。」

「よろし。」

「そういえばコウスケさんは綾波レイとどういう関係なんですか？」

「赤の他人だ。」

「同じ苗字なのに？」

「DNA鑑定で他人とでた。俺もレイなんて子はここに来るまで知らなかったからな。」

「そうですか。」

そういつてシンジはコウスケの後に続くのであった。

・
・
・

コンコン

「入るぞ。」

「しつ失礼します。」

シンジは緊張しているようだ。

まあ当然だろう。

自分と同じ年齢のしかも女性の部屋に入るのだ。

コウスケはベットまで近づく。

シンジも促されるように続いた。

「よう。元気か？」

「……問題ありません。」

「とりあえず元気そうだな。これ見舞い品だここに置くぞ。」

見舞い品を机に置く。

「それともう一つ……」

シンジを前に立たせる。

「ほら、緊張してないで自己紹介くらい自分でしろ。」

「さ、サードチルドレンの……い、碇シンジです。」

すこしどもっていた。

コウスケは思わず笑いそうになるが、ぐっとこらえる。

「……………いかり?」

「そう、碓司令の息子だ。」

「……………そう。」

（おや?）

碓司令という言葉に反応したように見えた。

（綾波レイと碓司令の関係か…）

かなり危ない考えをしたが、それはないと切り捨てる。

臆病者であるがゆえに他者の領域に自分から踏み込むなど考えられないからだ。

もし他人の領域に踏み込んで拒絶などされたら再起不能になるだろう。

コウスケはそう評価していた。

ちなみに冬月の評価は似非紳士である。

「なにか食うか? 果物くらいならいいと医者も言っていた。」

「……………かまいません。」

「なにがいい?」

「……………」

「……………」

レイは果物をじっと見つめている。

(拒絶ではないな……この感じは……何がいかわからないのか?)

「とりあえずりんごにするか。シンジ君。」

「はい。」

コウスケはシンジの耳の近くでささやく。

「君が剥いてやれ。」

「ええ！」

「こういう時は男を見せてやるときだぞ。」

と言って果物ナイフをシンジに渡した。

「わ、わかりました。」

ちよつと赤い。

「じゃ、俺は外で待つてるからな。」

「え！」

「何かあつたら呼んでくれ。」

「ちよつ、コウスケさん！」

シンジが止めるがお構いなしに外に出るコウスケ

病室にはシンジとレイのみになった。

(さて、シンジ君はどうするか?)

とりあえず果物できっかけを作ったが、それが途切れればシンジは逃げてくるだろう。

そうコウスケは推測した。

(15分くらい待ってみるか。)

そう思い喫煙所に向かうことにした。

...

「入るぞ」

病室に入ると相変わらず無関心のように見えるレイとどうすればいいか困惑しているシンジの姿が見えた。

(予想どうりだな。)

などと意地の悪いことを考える。

「りんごは食べたか？」

「……はい。」

「どうだった。」

「……わかりません。」

「……うまかったか、まずかったか？」

「……わかりません。」

「……………嫌だったか？」

「……………いいえ。」

「そうか。」

そういつてやさしく微笑むコウスケ

「あとののくらいで退院できる？」

「……………五日と聞きました。」

「わかった。」

(退院できても包帯とギプスは外れんか。)

「じゃそろそろ行くな。シンジ君行くぞ。」

「あつ……………はい。」

「またな。」

「……………」

「……………綾波」

「……………なに？」

「また来ていいかな？」

「……………別にかまわない。」

「うん、じゃあまた来るよ。」

「さよなら。」

「おいおい、今生の別れじゃないんだから。」

「……………」

「シンジ君、おまえならどう答える？」

「え！ ……またねですかね。」

「だな。ほら言ってみろ。」

「……………またね。」

「うん。」

「……………」

「よし！ 行けどシンジ君。」

「はい。」

そういつて二人は出ていった。

一人残されたレイはまたもや複雑な心境になったのだが、残念ながら表情に出ることはなかった。

．．．

「とうだった？」

「なんか人形のように見えました。」

「それを言ったら怒られたよ。」

「え！ 誰にですか？」

「レイに」

「……………」

「人形じゃない！ …てな」

「……………」

うっむくシンジ

「…おそらくレイはほかの物事に無関心なんだと思う。」

「無関心？」

「そうだ。 じやなきや知らないかだ。」

「知らないって、そんな…」

「あくまで憶測に過ぎないがな。」

「……………」

「人はわからないことに対しては反応できないからな。 誰が育てたかはわからないが酷

いことをする。」

「……………」

「あれでは虐待だな。」

「虐待ですか……」

「……レイを救えるのはシンジ君かもしれない。」

「僕がですか？」

「ああ、俺もできることは全力ですが、いかんせん歳が離れているからな。」

「僕なんか……」

「無断で悪いがシンジ君の経歴もある程度知っている。いい環境とは言えないな。」

「……」

「だが、傷つけられた人は痛みがわかる分他人にも優しくできる。」

「……」

「まあ、あまり思いつめるな。時間はあるんだ。退院すれば学校で会えるだろうし、NE RVでもそうだろう。ゆっくり考えればいい。俺も相談くらい乗ってやれるからな。」

「わかりました。」

「そう、ゆっくりでいい。焦ってもいい結果は出ないからな。」

（今はこれでいいか……）

途端にコウスケの顔が変わる。

「でっ、レイはどうだった？」

「へっ？ どういう意味ですか？」

今、言いましたよねと言いたげだ。

「女の子としてだよ。」

「えっ……それは……その……」

「ふーん。」

「いや……あの……」

「かわいかったか。」

「……はい」

シンジはたいへん小さく答えた。

「そうか、そうか！」

「……」

「いつの間にか綾波と呼んでたし、また来ていいかと聞いてたしな。」

シンジは真っ赤だ。

「レイのことよろしくな。パイロット同士としてもそうだが、人としてもな。」

「わかりました。」

「うむ、それでよろしい。」

（とりあえずマイナスでないようだからな。）

「つと葛城にも報告しとくか。」

「へっ?」

「シンジ君はレイのことがお気に入りってな。」

「ちよっ…コウスケさん!」

「ははは…」

「もう!」

(からかいがいのあるやつだな。)

「じゃ、俺はこれからいくところがあるから。」

「はい。」

「じゃあな。」

手を振ってコウスケは病院を後にした。

...

「というわけで綾波レイについて教えてくれ。」

コウスケはリツコに会っていた。

「資料にあるのがすべてよ。」

「嘘だな。」

「あら心外ね。」

「どうやったらあんな子になる。」

「どうって過去の経歴は抹消されているからわからないわ。」

（教える気はないってことか…）

「どうしても知りたいなら碇司令のところに行けば？」

「……………」

「じやなきやあまり深く入り込まないことね。」

「どういう意味だ？」

「そのままよ。」

「……………わかった。」

（収穫はあったな…）

「すまないな。忙しいのに。」

「そうね。」

「じゃあな。」

「ええ。」

コウスケは部屋を後にする。

「思ったより彼は危険ね…」

…

「以上が綾波コウスケに関する資料です。」

「……………」

「彼は危険分子と判断できません。スパイの線は有りませんが下手をすれば…」

「……今は保留とする。」

「いいのか？ 碇。」

「問題ない。」

「だが…」

「あの推理力、洞察力は今後の使徒戦で有意義になるだろう。」

「……………」

「しよせん一人だ。すべてが終われば処分すればいい。」

「………わかった。」

「そういうわけだ。赤木博士。」

「わかりました。」

そういうとリツコは出ていく。

(すべてが終わるまでか……その時に厄介なことになっていなければいいがな。)

冬月は一抹の不安を覚えるのであった。

・
・
・

コウスケはシュミレーターで第三使徒との戦闘を行った。

無論勝てるわけがないのだが、使徒に対して有意義な戦闘を行えるようにするのが目的であった。

主力はあくまでもEVAであり、決定的なダメージを負わせることはなくともどうサポートするのか、それをシュミレートしていた。

時刻は5時

(そろそろ行くか。)

コウスケはNERVを後にした。

・
・

(……………後ろに3人か。)

帰路についたコウスケは黒服の気配を感じていた。

長年戦場にいた為、気配を察知できるのは当然だろう。

無論黒服もスペシャリストだがプロにはプロの雰囲気がある。

(こつちに危害を加えるつもりはないみたいだな。)

おそらくは碇司令だろうとおおよその見当をつけるコウスケ

(まっいいか。)

とりあえず無視することにした。

・
・

「はあー……」

コウスケは髪の毛を拾いながらため息をつく。

玄関にはいつも自分の髪の毛を人知れずはさんであるのだ。

それが落ちていたということは誰かが中に侵入したということだ。

これもコウスケの習慣の一つだ。

(昨日より多いな。)

無論「目」と「耳」のことだ。

コウスケは念入りに部屋を調べ「目」と「耳」を破壊した後燃えないゴミの袋に無造作に突っ込んだ。

(ここまで来るとNERVを信用するのは危険だな。)

碇司令の姿が目には浮かぶ。

(無茶をするのは趣味じゃないが……)

生き残るため、何より「約束」のためにはやるしかない。

(敵だらけだな……)

ファーストチルドレン 綾波レイ

その一つだけでもNERVは何か隠している。

(正義の味方というよりは悪の組織のほうがお似合いだな……)

(司令があんなんじゃないか…)

(ともかく情報がなければ動けないな。)

すでにMAGIへのハッキングを考えるコウスケ

しかし下手をすればこっちの身が危ない。

(協力者が必要だな…)

などと思い、いつものトレーニングを開始するコウスケ

時刻は6時半

2時間かけトレーニングを終えたコウスケはシャワーを浴び夕食にした。

レトルトなどではなくちやんと調理する。

食事が終わるとすでに9時半

テレビをつけ情報収集

無論煙草も忘れない。

テレビを消すと10時半を回ったところになった。

リビングを消灯し寝室に向かう。

戦士というのは休めるときに休む。

こうしてコウスケの一日が過ぎていった。

第5話 初出撃

第三使徒襲来から三週間ほどたっていた。

使徒は依然発見されないため、特務機関NERVでは平穏な日々が続いていた。

そんな中コウスケはUNからの転向者という評価からスタートし、持ち前の真面目さ、勤勉さから整備員を中心に意外な支持を受けていた。

ただ、煙草をこよなく愛するコウスケは喫煙所にいることが多く、マナーの悪い喫煙者を注意したり、喫煙所の清掃を好んでやっている姿から「喫煙所の番人」と呼ばれているのをコウスケは知らない。

コウスケはというとNERVに対する不信感を払拭できず、ちまちまと情報を集める日々を送っていた。

しかし成果は一向に現れない。

末端の職員に聞いてもわからぬの一言で終わるのだ。

せいぜい噂程度のものばかりであった。

(上層部でないと無理か…)

ここ数日で出した結論だった。

(あともう一人くらいいれば…)

しかし容易ではない。

(焦ることはないか。)

そう焦ってはならない相手も人間だ。

いずれは隙を見せるだろう。

それはまるで獲物を追うハンターのように見えた。

・
・
・

通路の向こうからレイが歩いてるのが見えた。

いまだにギプスが取れていないようだ。

「レイ、こんにちは。」

「……こんにちは。特務二尉」

「特務二尉って言う呼ばれ方は好きじゃないんだがな。」

「……………」

「レイがそう呼びたいのならいいか。」

「ここ数日で大変な進歩だろう。」

「最初は無視されていたのだから。」

しかしコウスケの度重なるアプローチによって、今では簡単な会話くらいはするよう

になった。

それこそ妙な噂が流れるくらいに

「今日はどうした？」

「……これから実験です。」

「そうか。頑張れよ。」

「はい。」

レイは去って行った。

いまだにギプスが取れないためシユミレーターを使った実験である。

(まだまだだな。)

コウスケは微々たる情報からレイの保護者が碇ゲンドウであることを知っていた。当初怒りが先行したが、同時に納得もした。

(まったく……臆病ものらしいな。)

つまり他人の心が怖いならば心をなくせばいい。

心のない人形なら怖がる必要はないからだ。

だがそれはその人を認めていない。

結局それは虐待と変わらないのだ。

人形のように育った人をどうすればいいのか？

まずは自分に素直になることだろう。自分に心があるということを教える。

それは大変困難な作業だが、これを突破せねば次には進めない。そう結論付けたのだ。

シンジは自分なりにアプローチしているみたいだった。自爆が多いのはご愛嬌だろう。

(焦ることはない。)

そう時間はあるのだから。

そう思いコウスケはシミュレータールームへと急いだ。

・・・

それは突如起こった。

時間どろろにNERVに出動したコウスケはけたたましいアラート音を格納庫にて聞いた。

『総員、第一種戦闘配置。繰り返し、総員、第一種戦闘配置。』

『第三新東京市戦闘形態に移行します。』

(来たか。)

コウスケは発令所に向かった

「綾波特務二尉、参りました。」

発令所に向かうと各オペレーター、作戦部長、技術課長がすでにいた。

モニターを見ると茶色いイカのようなものが空を飛んでいた。

応戦する国連軍

しかしまったく意に介さないように使徒は向かってくる。

「税金の無駄遣いだな。」

老人がつぶやく。

「綾波特務二尉。あなたにも出てもらうわ。」

ミスルトが厳かに告げる。

「了解。」

そういつて愛機のもとに向かった。

...

「こちら綾波。機体に搭乗。これより機体チェックを行う。」

燃料、武装、無線機、操縦桿、モニターなどを念入りにチェックする。

「機体に異常なし。」

『了解。綾波特務二尉、射出口へ移動せよ。』

「了解。射出口へ向かう。」

機体を射出口に移動させる。

『最終チェック完了。これより射出する。グッドラック。』
すさまじいGがコウスケを襲う。

カタパルトはEVAのリニアを改造したもので、ジオフロントから地上までほぼ垂直に移動する。

重力に真つ向から逆らうのだから当然Gもかかる。

が、毎日の訓練が裏切られることはなかったようだ。

無事に大空へと飛び立った。

空に出るとすぐさま機体を水平に戻し状況を確認する。

使徒は市内に入っていた。

「綾波特務二尉。これより状況を開始します。」

『了解。今からEVAを出します。EVAの攻撃に連携して当たってください。EVAはパレットトレイフルを装備しています。』

「了解。」

すると初号機がビルから出てきた。

「シンジ君……行くぞ！」

「はい。」

初号機はビルから躍り出る。

コウスケは使徒の後ろにまわる。

同時に発射される弾

煙で使徒が見えなくなる。

『バカ！弾着の煙で敵が見えない。』

ミサトが叫ぶ。

コウスケは使徒と距離をとる。

(やったか?)

「はっ！」

何かに驚くシンジ

初号機が後ろにこける。

真つ二つになる。パレットライフル

『予備のライフルを出すわ。受け取って。』

動かない初号機

「大丈夫か！ シンジ君！」

コウスケは再び使徒に接近する。

打ち込まれる機銃

効果はない。

「伊吹二尉。ATフィールドの反応はあるか？」

『反応は有りません。フィールドは無展開です。』

「……外皮が固いのか。」

そうしてる間に初号機は使徒の攻撃を受けている。

「葛城！ ライフルじゃダメだ。」

『じゃどうするのよ！』

作戦部長らしくない発言に憤りを感じるがそれどころではない。

「ナイフでコアを一突きしかないだろう。」

『……わかったわ。』

「シンジ君。ナイフで近接戦闘だ。」

「……………」

「シンジ君？」

「ああ……………」

「まずい。恐怖に身を取られているのか。」

再び使徒の攻撃を受ける初号機

アンビリカルケーブルが切れた。

(まずい。)

アンビリカルケーブルがなければEVAは5分しか動けない。

使徒が鞭で初号機の足を絡み取る。

吹き飛ばされる初号機。

山に仰向けになっていた。

「しっかりしろ。」

突然モニターに二人の子供が映し出される。

「シンジ君のクラスメート?」

初号機の近くを確認する。

左手の近くでうずくまる子供たちを見つめる。

「こちら綾波。二名の民間人を肉眼で確認。」

使徒は追撃をかけようと初号機の近くに寄っていく。

振られる鞭

それを初号機は掴んだ。

融解していく手

コウスケはスピーカを起動した。

「そののふたり早く逃げろ。」

動かない二人

「こちら綾波。二人は恐怖で身動きがとれない。」

『二人をプラグに乗せるわ。』

『越権行為よ！ 葛城一尉！』

『全責任は私がとります。』

排出されるエントリープラグ

『そののふたり乗って。』

死に物狂いで走る二人

無事に乗り込んだようだ。

『エントリーリスタート。』

『神経系統に異常発生。』

『異物を二つも挿入したからよ。』

初号機が鞭を思いつきり投げ飛ばした。

それにつられる使徒。

初号機はゆっくりと立ち上がった。

『今よ後退して。』

「ダメだ!」

『ちよっ……綾波特務二尉!』

「シンジ君…危険な賭けだが、山の斜面を利用してコアをつくんだ。」

コウスケに促されるようにナイフを装備する初号機。

『ちよっ……あたしの命令を聞きなさい!』

ピー

活動限界が1分を切った。

「行け!」

『うわああああああああああ!』

雄たけびを上げるシンジ

鞭が初号機の腹部に突き刺さる。

『うおおおおおおおおお!』

ナイフがコアに突き刺さった。

『活動限界まで10秒!』

『9, 8, 7, 6, 5, 4』

永遠とも思えるひととき

(だめか……)

『3, 2』

コアが色を失う。

『1』

コアの割れる音がした。

『活動限界です。』

『パターンブルー消滅。』

「ふうー……状況終了。綾波特務二尉帰還します。」

『了解。C-118から帰還してください。』

「了解。」

コウスケは誘導に従いNERVへと帰って行った。

・・・

パイロットルームに行くとシンジがいた。

「よくやった。シンジ君。」

「コウスケさんも……」

「俺は特に出番がなかったからな。」

「いえ。コウスケさんが指示をくれたからですよ。」

「そうか。」

パイロットルームにミサトが現れた。

「シンジ君。どうして私の命令を聞かなかったの。」

「ごめんなさい。」

「あなたの作戦責任者はあたしでしょ。」

「はい。」

「あなたには私の命令に従う義務があるの。わかるわね。」

「はい。」

「今後こういうことの無いように。」

「はい。」

「あんた本当にわかってんでしょうね。」

「おい、葛城。」

「なに！」

「そこまでにしろ。」

「何言ってるのよ！」

「それにあの時指示したのは俺だ。お前も聞こえてただろう。」

「あなたにはそんな権限ないでしょ。」

「お前……資料を見てないのか？ 俺には現場で指揮できる権限があるんだぞ。」

「ちよっ……聞いてないわよ!？」

「副司令に確認してみろ。」

「……だとしても、なんであの時、特攻を命じたの。」

「他に方法がなかったからさ。」

「一度体制を立て直せばいいじゃない。」

「そんなことしてたら使徒はここまで来てただろうな。EVAが使ったりニアを使つて。」

「……………」

「それにシンクロ率も落ちていた。あの鞭から逃げ切れるとも思えん。」

「……………」

「すこし頭を冷やせ。葛城。」

「そう……ね。」

「そうだ。」

「ごめんなさい。シンジ君。」

「いえ、いいんです。」

「今日は帰ってゆつくり休んでちょうだい。」

「はい。」

ミサトは出ていった。

「じゃあな、俺も行くから。」

「はい。お疲れ様です。」

「お疲れ。」

コウスケは部屋を後にする。

すると誰かがいるのを感じた。

あたりを見回すとレイがいた。

「どうした？」

「……なんでもありません。」

そういつてレイは去って行った。

「他人に関心を持つようになったか。」

シンジかそれともコウスケか判断はつかないが

(シンジのほうが個人的にはいいんだがな…)

などと野暮なことを考える。

「帰るか…」

そういつてコウスケは帰って行った。

・
・
・

総司令執務室にて冬月は誰かと連絡を取っていた。

「第四使徒の戦闘記録は見たか。」

……

「しかし、危うく初号機を失うところだったんだぞ。」

……

「そうだなこの程度の被害で済んだのは幸いだな。」

……

「わかった。」

そういつて冬月は回線を切りモニターに目をやる。

モニターにはコウスケが映し出されていた。

第6話 家出

平穏な日々

世界では一人また一人と命を落としているものがあるだろうが、コウスケの住む日本では平穏な日々を送っていた。

NERVもそれにもれることはなかった。

(軍人が暇なのはよいことだ。)

生真面目な軍人が聞けば怒り狂うだろうことを思いつつコウスケは休憩室にいた。

NERV本部は地下に造られているため煙草を吸える場所は限られてた。

その数少ない場所でコウスケは何本目かわからない煙草を口にしていた。

PPPPP

携帯電話が鳴る。

「もしもし、綾波ですが……はあ!! シンジ君が家出した!! お前は何かやってんだよ!

……わかった。諜報部が見張ってるんだな。じゃ。」

(監督日誌を見られたか……ずぼらすぎるぞ。)

などと上司の悪態をつく。

(家出から三日か…)

「()三日間シンジに会っていないことを思い出す。

(ちよつと行つてくるか…)

「もしもし…」

・
・
・

(ここにいいのか。)

コウスケは山の中腹にいた。

そこにはテントが一つ立っていた。

テントに近づくと眼鏡をかけ、迷彩服を着た一人の少年が立っていた。

「たしか君は…」

「NERVの方ですね。先日はお騒がせしました。」

「ああ、あの時の…」

「相田ケンスケです。」

「俺は綾波コウスケだ。」

「あやなみ?」

「ああ。」

「あの……綾波レイとはどういう関係で?」

「よく聞かれるな。上司に当たるが血のつながりはない。」

「そうですか。」

「ところで碓シンジ君はいるか？」

「碓なら……」

「ケンスケ、誰かいるの？」

シンジが出てきた。

「コウスケさん……」

「よっ、元気か？」

「……連れ戻しに来たんですね。」

「おいおい、そのつもりなら一人で来ないよ。」

「そうですか……」

「ケンスケ君、ちよつとシンジ君と話したいから二人きりにさせてくれないか？」

「はい。」

ケンスケはテントに戻った。

「どうしたんだ？ 家出なんてして。」

「……」

「まあ、座れ。」

「はい。」

「子供の前で悪いが一服するぞ。」

「ウスケは煙草に火をつけた。」

「……煙草吸うんですね。」

「ああ、なるべく子供の前では吸わないようにしているがな。」

「……」

「監督日誌のことか？」

「はい。」

「……裏切られたと思ってるんだろう。」

「！……どうして」

「どうしてわかるかって？」

「はい。」

「簡単だ。君の性格と正確な情報があればな。」

「……」

「シンジ君は優しすぎるな。ゆえに傷ついた時の傷も大きい。」

「……」

「だが、もう少し考えなきやいけないな。」

「どういうことですか？」

「なに、表面だけで判断するなということだ。」

「……………」

「葛城があんなことをしたいと思うか？ ずばらな彼女だぞ。シンジ君ならわかるだろう。」

「……………」

「だが、シンジ君といるために監督日誌をつけることを義務化されてんだろう。もしそれをさぼればシンジ君は葛城のもとにいられないだろう。」

「それって……………」

「そういうことだ。」

「……………」

「人は完全には分かり合えない。だが、わずかでもその穴を埋めるために会話というものがあるんだろう。」

「……………そうですね。」

「……………」

「コウスケさんはすごいですね。」

「別にすごいことはない。」

「すごいですよ。それに比べ僕は……」

「おつとそこまでだ。あるとき俺が言ったこと覚えているか？」

「……物事を悪い方向に考えるのは美德ではない……ですか？」

「そうだ。シンジ君は14歳だろう？ 失敗なんてたくさんするものだ。」

「……」

「これもその一つさ。そしてその経験を次に生かせばいいだろう。」

「そうですね。」

「わかればよろし。」

「……ミサトさんと話してみます。」

「戻るのか？」

「はい。」

「そうか……ケンスケ君にちゃんとお礼を言わないとな。」

「はい。」

「ところで……」

「？」

「ウスケの顔が変わった。」

「レイとはどうだ？」

「なっ……」

「なめてもらっちゃ困る。いろいろ聞いているからな。」

「……………」

「……難しいだろう。」

「はい。」

「……レイの保護者は碇司令だった。」

「父さんが？」

「シンジ君にはつらいだろうが事実だ。」

「父さんが……」

シンジはつらそうな表情だった。

「……………」

「……でも表面だけで判断しちゃいけないですよね。」

「お、俺の言ったこと覚えてるな。」

「当たり前ですよ。」

「うれしいこと言ってくれるね。」

「……父さんともちゃんと向き合ってみます。」

「難しいだろうが、頑張れよ。」

「はい。」

シンジは明るく答えた。

「じゃ、俺は行くな。」

「コウスケさん……ありがとうございます。」

「なに、礼には及ばんよ。」

コウスケはNERVへ戻って行った。

・
・
・

NERVに戻るとレイと出会った。

どことなく不安そうに見えた。

「……どうしたレイ。」

「……碓君……最近会わないので……」

「シンジの奴なら大丈夫だ。今日中に戻るだろう。」

「……そうですか。」

（ほう、こんな表情ができるようになったか。）

相変わらずの無表情だが、コウスケには安堵しているように見えた。

（父VS息子か……こりゃ面白い……）

かなり不謹慎な想像だろう。

「明日から会えるから心配するな。」

「?」

レイはきよとんとしていた。

(わかってないのか…)

「今のレイの気持ちを心配するとうんだ。」

「……………」

「詳しい意味は辞典でも調べてみる。まあ、感情なんてものは辞典じゃわからないがな。」

「……………そうしてみます。」

「じゃあな。」

「……………またね。」

「……………」

「どうしました?」

「またねという言葉は年長者には使わないんだ。」

「……………」

「宿題な。年長者と別れるときはどういえばいいのか。」

「わかりました。」

「じゃ。」

コウスケは去って行った。

・・・

翌日

「もしもし綾波ですが……なんだ葛城か。何の用だ？」

……………

「別に特別なことはしてないよ。ただアドバイスしただけだ。」

……………

「こんどお前のおごりで手を打とう。」

……………

「じゃあな。」

携帯電話の電源を切る。

「雨降って地固まるか……」

煙草を取り出す。

「さて、仕事するか……」

・・・

今日もNERVでは平穏な日々が続きそうだ。

第7話 陰に見えるもの

「これが使徒か…」

コウスケはつぶやいた。

「こんなものとよく戦っているな…」

コウスケは第四使徒の解体現場にいた。

「お、葛城とシンジ君も来てたのか。」

「そうよん。使徒がどんなものか見に来たの。」

「僕はミサトさんに誘われて。」

「そうか。しかし庄巻だな。」

「ええ。常識を疑うわ。」

上にはリツコがいた。

「コア以外は原型を留めているわ。ありがたいわね。」

リツコはご満悦のようだ。

(マッドの気があるな。)

コウスケのリツコに対する評価に新しい二つ名が加わった。

・
・
・

モニターには601という数字が出ていた。

「何よこれ？」

「解析不能を示すコードナンバー。」

「つまりわけわかんないってこと？」

「そつ。使徒は粒子とと波、両方の性質を備える光のようなもので構成されているのよ。」

「で、動力源はあつたんでしょ？」

「らしきものはね。でもその作動原理がさっぱりなのよ。」

「まだまだ未知の世界が広がってるのね。」

「とかくこの世は謎だらけよ。」

（謎だらけね……NERVにも言えるな。）

「たとえば……ほら。」

リツコがモニターに何かを映し出す。

「使徒独自の固有波形パターン。」

モニターを見る。

「……これって」

「そう構成素材には違いがあっても、信号の配置と座標は人間のそれと酷似しているのよ。99.89%ね。」

「99.89%って」

「そうあたしたちの知恵の浅はかさってものを思い知らされるわ。」

シンジが外を食い入るように見ている。

「どしたの？」

「あの……別に……」

「シンジ君。こんな時ははつきり言ったほうがいいぞ。」

「……父さんの手に火傷してるみたいんだけど……」

「火傷？」

「どうしたのかなって……」

「リツコ何か知ってる？」

「あなたがここに来る前に……」

そういつてリツコが説明した。

零号機の起動実験でレイを乗せたエントリープラグが射出され、それを助けるためにゲンドウが負ったものであったという。

(碓司令がね……ちよつときな臭いな……)

「……そういえば赤木博士。」

「何かしら。」

「使徒と人間は99.89%酷似しているのだろうか?」

「ええ。」

「では、EVAはどうなんだ?」

リツコが若干強張る。

「……調べてみないとわからないわね。」

「そうか。」

(なにかあるな……)

あらためてNERVに胡散臭さを感じるコウスケであった

・・・

(レイと碓司令か……)

レイがゲンドウを見ると、明らかに他者とは違う反応を見せている。

零号機のことを考えると納得もいく。

(だが……)

なぜ、屋内でプラグが射出されたのか?

なぜ、医療班よりもゲンドウのほうが到着が早いのか?

(それに……)

リツコがそのことを話した時の目

何か複雑な感情が見えた。

(なにかあるな……)

そう思わずにはいられないコウスケであった。

・
・
・

NERVに帰り自販機の並ぶ休憩室でレイと出会った。

相変わらず包帯とギプスが痛々しい。

「よう。実験か？」

「はい。今は休憩中です。」

「そうか。なら少し話せるか？」

レイは顔を縦に振った。

コウスケは自販機で紅茶を買った。

「……やっぱりまずいな。」

「？」

「いずれわかると思うよ。」

「はい。」

コウスケは椅子に座った。

「レイも立ってないで座ったらどうだ。」

「わかりました。」

レイはコウスケの隣に座った。

「レイはなぜEVAに乗るんだ？ 実験で大怪我もしたんだろう？」

「……絆だから。」

「碇司令か？」

「みんなとの」

「ふーん。」

「……他には何もありませんから。」

「……他に何もないか。」

コウスケは不機嫌だった。

こんな少女を戦場に立たせることしかできない大人に

しかしそれだけではなかった。

コウスケはむしろレイに怒りを覚えた。

「じゃあ、EVAが無くなればレイはどうするんだ。」

「わかりません。」

「……考えてないんだろう。」

「……………」

「つまりはファーストチルドレンという価値しかないということか。バカだな。」

「意味が分かりません。」

「綾波レイとしての価値がないということだ。」

「……私はチルドレンですが」

「それは役職だろ。」

「はい。」

「お前の名前はファーストチルドレンか？」

「いいえ。」

「だがお前はファーストチルドレンとしてしか考えてない。ただ大人の言うとおりにな。」

「……………」

「それじゃ、ただの人形だ。」

レイは無表情で見つめてくる。どうやら怒っているようだった。

「……人形じゃないってか？ だがやっていることは人形そのものだ。なにが違う。自分で立つことのできない人形と。」

レイは顔を顰めている。

「もう少し自分で考えてみるんだな。ファーストチルドレンじゃなく、綾波レイとしてな。」

コウスケは空になった缶を捨てた。

「すまん。こんな話をしてそろそろ時間だろう。」

「はい。」

「じゃあな。」

「……………」

レイは難しそうな表情（と言っても無表情にみえる）をしていたが、コウスケは構わずその場を離れた。

・・・

数日後

コウスケはミサトに食事に来るように勧められた。

特に断ることもなかったので御呼ばれすることにした。

ミサトの家に行くトリツコがすでにいた。

「おそいわよ。」

「はあ。時間指定しろって言ってるだろう。」

中に入るとシンジが料理をよそっていた。

カレーのようだ。

ミサトはカップ麺にカレーを入れていた。

「……信じられんな。」

「何言ってるのよ。これがおいしいんじゃない。」

「ご満悦のミサト。」

「それじゃいただくとするか。」

カレーを食べる。

すると何とも言えない味がする。

コウスケは理性を総動員して気絶するのを抑えた。

「これ作ったのミサトね……」

「わかる?」

「味だね……」

「そうだな……」

それ以外にもはや何も言えない。

「……赤木博士……これを兵器に転用できるか? 対テロ用の……」

「……難しいわね。これを作り出すことはできないわ。」

「……残念だ。新しい非殺傷兵器ができると思ったのだが……」

「何よ！」

「残念だが。葛城……不味すぎる！」

「へっ？」

「この原料はなんだ！」

「レトルトよ。」

「バカな……レトルトだと……」

「どうして？」

「………一種の天災だな……」

「褒めなくてもいいじゃない。」

「褒めてない！」

何か倒れるような音が鳴ったのでその方向を見てみるとペンギンが倒れていた。

葛城家の同居人のペンペンである。

動物ですら気絶するカレーは避けて食べることにした。

コウスケも命が惜しいのだ。

「………そういえばこれ。」

と言ってリツコがIDカードを取り出した。

「レイのIDカード。」

それをシンジに渡す。

「更新したのだけど、レイに渡すのを忘れてたのよ。」

「ふーん。赤木博士がね……」

「何よ。私も人間よ。」

「意外な側面を見たな。」

「失礼しちゃうわ。」

「これは失礼。」

（重要な人物のIDカードを渡し忘れる？ 赤木博士が？）

コウスケはまたもやきな臭さを感じた。

その後の会話はほとんど右から左に通り返して行った。

・・・

夜も遅いということでコウスケはリッコを送っていくことにした。

「この前言ったEVAの件はどうなった。」

「まだ調べてないわ。」

「そうか。」

.....

「なにが目的だ？」

「何のこと？」

「IDカード。」

「渡し忘れただけよ。」

「そうか。」

.....

コウスケは少しカマをかけてみることにした。

「碇司令はやたらとレイにこだわるな。」

リツコの表情が強張るのがわかる。

「……貴重なサンプルだからよ。」

「そうか。」

「あなた、レイにちよつかい出してるでしょ。」

「ダメか？ 戦友のことを気にかけるのが。」

「……あまり詮索しないほうがいいわ。これは忠告。」

「二回目だな。ありがとさん。」

「じゃ、私はこれで。」

「じゃあな。」

目的地のマンションの前で別れた。

・
・
・

(赤木博士は何かにこだわっているな。)

コウスケは自室で物思いにふけていた。

(レイか……碓司令か……)

嫌な三角関係が見える。

(いまだに真実は闇の中か……)

そう思いもう寝ることにした。

・
・
・

コウスケはNERVであてがわれた執務室で調べ物をしていた。

碓ゲンドウについてだ。

・
・
・

碓ゲンドウ

旧名：六分儀、入籍後碓に改名、京都大卒業、ゲヒルンの所長、NERVの総司令

1999年 碓ユイと結婚、碓に改名する

2001年 第一子碓シンジをもうける

2004年 妻：碓ユイとは死別

(妻ね…)

碓ユイ

京都大卒業、ゲヒルンの技術課長「E」 計画責任者

1999年 六分儀ゲンドウと結婚

2001年 第一子碓シンジをもうける

2004年 実験により死亡

・
・
・

大雑把だがわかったことはこれだけだ。

そして碓ユイの写真を探す。

これはゲンドウの妻になる人がどういう人間か単に興味を持ったただけだ。

だが

(出てこない…)

どんなに検索しても出てこない。

(なぜ隠したがるんだ?)

これほどの地位にいた人間の顔写真がないなど到底信じられない。

誰かが故意に消したのだろう。

(碓ユイ……想像以上に重要人物みたいだな。)

ともかくコウスケは碓ユイに関して情報を集めることにした。

・
・
・

この行為が後ほどどんな影響を及ぼすかコウスケにはまだわからなかった。

第8話 月の笑み

(今日は零号機の起動実験日か…)

一通りの調べ物を終えたコウスケは通路にいた。

(シンジはうまくやってるかな?)

二人に何があったのかまではわからないコウスケだがシンジが慌ててることだけは容易に想像できた。

「あれは…」

シンジとレイだ。

だが、レイが去っていくのがわかった。

「おーい。シンジ君。」

「あつ……コウスケさん。」

「ん? 頬が赤いぞ。」

「ちよつと……」

「……叩かれたか。」

「……ええ。」

「なにかおいたでもしたのか？」

「いえ……ただ父さんのことで……」

「……まつ、言わなくていい。まだまだチャンスはあるだろうからな。」

「……はい。」

「そういえばシンジ君。お母さんのことを覚えているか？」

「いえ。」

「顔とか……」

「わからないんです。父さんが写真とか全部捨てたと聞きました。」

「そうか……すまん。変な質問して。」

「いえ。」

（碓司令がね……）

「今日は零号機の起動実験だろ。うまくいくといいな。」

「そうですね。」

シンジはちよつと複雑なようだ。

「見に行くのか？」

「はい。」

「じゃあ、一緒に行こう。」

そういつて実験場に向かった。

・
・
・

実験場ではいそいそと零号機の起動実験が進められている。

正直重苦しい雰囲気は漂っていた。

前回の起動実験は失敗、被験者は事故に巻き込まれ重傷を負っている。

今回は失敗ができないうえ、あの碓司令まで来ているのだ。

重苦しくなってもしようがないだろう。

というより重苦しい雰囲気の80%はゲンドウのせいだろう。

オペレーターが次々と状況を知らせてくる。

モニターにはレイが写っていた。

着々と進む実験

「ボーターライン突破しました。零号機起動します。」

「続いて連動試験を行います。」

安堵の声が聞こえる。

突如鳴り響く呼び出し音

冬月が電話を手を取った。

「……未確認飛行物体接近中だそうだ。第五の使徒だな。」

「実験中止。総員第一種戦闘配置。初号機は？」

「380秒で準備できます。」

「レイ。起動は成功した。戻れ。」

慌ただしく走っていく職員たち

ゲンドウはシンジに一言もくれることなく持ち場に戻って行った。

(こつちもまだまだか…)

そう思いコウスケは格納庫へ急いだ。

...

「状況は？」

『目標は第三新東京市に向け進行中。』

「戦自からは？」

『攻撃しておりません。また使徒に関する情報もありません。』

「……押し付けやがったな。」

『これが目標です。』

コックピットのモニターに使徒が映し出される。

使徒は正八面体のクリスタルのように見えた。

「……使徒じゃなきや高く売れそうだな。」

『敵の攻撃パターンはいまだに不明です。』

「そりゃ軍隊がさぼったからだろう。」

『綾波特務二尉には偵察を要請します。』

「了解。」

といつて愛機を射出口に移動させた。

「綾波……出る。」

...

「こちら綾波。目標を肉眼で確認。」

使徒は悠々と進行してきている。

「目標に変化は？」

コウスケは伊吹に使徒の反応を聞いてみた。

『ありません。』

「……やりにくいな。」

ミサトから通信が入った。

『今、EVAを出すわ。』

「おい、大丈夫か？ 敵がどう出てくるかわからないんだぞ！」

『それを知るためにも出すのよ。』

「……了解。」

（決戦兵器を状況もわからずに出すか？）

コウスケは一抹の不安があった。

その不安は最悪の形で実現することになる。

『発進！』

ミサトの号令とともに射出される初号機。

するとその時を待っていたかのようにスリットに変化が起こる使徒

『目標に高エネルギー反応！』

『なんですって！』

初号機は地上に出た。

『よけて！』

使徒から光線が発射された。

『うわあああああああああああああああ！』

『シンジ君！』

『くそっ！』

コウスケは使徒の側面に回り込みミサイルを放った。

使徒は射撃をやめ、ATフィールドを展開した。

「葛城！急げ！」

『リニア戻して！』

初号機が収容された。

途端に悪寒を感じるコースケ

「……………！ やばい！」

機体を急旋回させた。

すると元いたところに光線が通り過ぎた。

「こちら綾波……………撤退する。」

コースケは再度使徒に向かい合いミサイルを撃ち込んだあと、全速力で戦域を離脱した。

…

「葛城……………お前はここで何してる。」

コースケはICUの前でミサトを見つけた。

「私はシンちゃんが心配で……………」

「使徒を放り出してか？」

「……………」

「今、何をしなきゃいけないのか考えろ！」

「……そうよね……………」

ミサトは去って行った。

「……そこに突っ立ってても何もできんぞ。」

陰からレイが出てきた。

「……碓君……………」

「心配なのはわかるが、あとは医者に任せるしかない。」

「……………」

「なに、死んでるわけじゃないんだ。よくなるさ。」

「……はい」

「レイも休んでおけ。レイが倒れたらシンジ君が心配するぞ。」

「……はい」

レイも去って行った。

「……俺も行くか。」

そういつてコウスケは会議室に向かった。

・・・

会議室では使徒に対する様々なデータが送られていた。

作戦部の副部長であるコウスケもその場にいた。

「目標は一定範囲内に侵入する外敵を自動的に排除するものと推察されます。」

「目標のATフィールドを突破するには、NN航空爆雷の攻撃方法でNERV本部ごと破壊する分量が必要と出ました。」

日向がさらりと恐ろしいことを言う。

「松代のMAGI2号も同じ結果だったわ。いま日本政府と国連軍はNERV本部ごとの自爆攻撃を提唱中よ。」

リツコが資料を手にしながら、さらに重要なことをさらりと言つてのける。

「対岸の火事だと思つて無茶行つてくれるわね。」

ミサトはやるべきことを理解したのか真面目モードになっていた。

「現在使徒はボーリングマシンのようなものでジオフロントに進行中。全装甲突破までおおよそ10時間です。」

「初号機は？」

「損傷が思つたよりも軽微よ。綾波特務二尉がいなかったらもつとひどい結果になるわね。」

「おおよそ1時間足らずで換装作業が完了します。」

「零号機は？」

「起動時自体は問題ありませんが、フィードバックに誤差が出ています。」

「実戦はまだ無理ね。」

「初号機専属パイロットの様子は？」

「身体には問題ありません。神経パルスが0.8上昇していますが許容範囲内です。」

「……状況は芳しくないわね。」

「白旗でもあげますか？」

「その前に……ちよつちやってみたいことがあるの。」

（さて、葛城作戦部長さんはどういう作戦を立てるのかな？）

……

「ヤシマ作戦か……無茶な作戦だな。赤木博士はどう思う？」

「……無茶ね。」

「なによ。残り9時間足らずで実行可能、しかも一番勝率の高い作戦よ。」

「9.1%がか？」

十回に一回成功するかしないかの確率だ。

「エネルギーはどうするんだ？」

使徒のATフィールドを貫くのに一億八千万kWのエネルギーが必要と出たのだ。

「決まってるじゃない。日本中よ。」

（スケールがでかいな。）

「…ま、やれることはやるか。」

コウスケは囃役になっていた。

エネルギーをためる間使徒の目を引き付けるのだ。

だが一歩間違えれば愛機もろとも蒸発してしまう。

しかしコウスケは与えられた役割に満足していた。

愛機の加速力と起動力なら逃げ切れるだろうと思っていたし、何より子供たちに危険が及ばないようにすることができるといえるのだ。

そう思えば俄然やる気が出てくるというものだ。

「…そうだ。俺の機体に無誘導爆弾を積んでほしい。」

「どうして?」

「真上から攻撃してみるのさ。」

「危なくない?」

「使徒は真下には撃つてこないだろう?だから真上にも撃てないと思う。」

「…なるほどね。」

「というわけでよろしく頼む。」

「わかったわ。」

「じゃ、俺は行くな。」

コウスケは病室に向かった。

・・・

病室に向かう途中でレイと出会った。

「ん？ どうしたこんなところで。」

「……スケジュールの伝達に来ました。」

「ああ、シンジ君にか。」

「……はい。」

「じゃ、俺もシンジ君に会ってくるよ。またな。」

「……さよなら。」

去っていくレイ。

「レイ。その答えは赤点だ。もう一度宿題のやり直しだな。」

「……わかりました。」

・・・

「入るぞ。」

コウスケは病室に入った。

「あつ、コウスケさん。」

「元気か？」

「おかげさまで。」

「そりゃよかった。」

「……………」

「すまん。シンジ君。」

「へ？」

「俺がもつと強くいつていれば、こんなことにはならなかったかもしれん。」

「……………」

「すまん。」

頭を下げるコウスケ。

「いえ、コウスケさんのせいじゃないですし…それに僕を助けてくれたんでしょ。ありがとう…ございます。」

「……………そういつてくれるならありがたい。」

「……………僕、怖いんです。情けないですよね。」

「……………」

「また死ぬ目に合うんじゃないかと思うと…」

「それは情けないことじゃない。」

「でも……………」

「俺だって死ぬのは怖いさ。」

「コウスケさんも?」

「当たり前だ。……人に限らず生きているものなら死に対する恐怖が必ずある。」

「……………」

「だが死は避けることができない……ならそれまで精いっぱい生きようとする。それが生命の神秘つてところだろう。」

「……………」

「今度の作戦で俺は囮役だ……死ぬ確率が一番高い。」

「そんな……………」

「だが、俺は死ぬつもりはない。第一、こんなところで死んだら戦友たち……それと「あいつ」が納得してくれんだろう。子供たちを置いて引退かなんて言われちゃう。」

「……………」

「それにお前たちの未来が気になるからな。こんなところで死んでられるか。」

シンジが顔を上げる。

「確かに一番怖いところにお前たちがいる。だが、俺も含めみんながそれを少しでも和らげようとしている。いわば戦友たちがいるということをお忘れなほしい。」

「コウスケさん。」

「湿っぽい話だな。」

「そうですね。」

「じゃ、俺は行くな。愛機の調節をやっておかんといかんからな。」

「コウスケさん。ありがとうございます。」

「なあに。礼には及ばんよ。」

手を振ってコウスケは病室を後にした。

・・・

ヤシマ作戦の概要が伝えられていく。

「本作戰における各担当を伝達します。シンジ君。初号機で砲手を担当。レイは零号機で防御を担当して。綾波特務二尉は陽動を担当。」

その後リツコがいろいろ説明する。

重要な点は再充電に20秒かかること。

盾は17秒持ちこたえられること。

(一発勝負か……)

ミサトが顔を引き締めた。

「時間よ。」

・・・

コウスケは愛機のもとにいた。

「無誘導爆弾の搭載が終了しました。ただ一発のみですので。」
「わかった。」

コウスケはコックピットに乗り込む。

いつもどおり機体チェックを済ませる。

「綾波……出る。」

コウスケは大空に飛びだった。

・
・
・

着実に作戦の準備が進められている。

通信機から電力システムに異常がないことが報告される。

『第三次接続！』

『綾波特務二尉お願いしますわ。』

ミサトから作戦開始の合図をもらう。

「了解。状況開始。」

コウスケは使徒に向かう。

「派手にやらせてもらう。」

ミサイルを放つ。

使徒がATフィールドで防ぎ、加粒子砲を放つ。

回避するSu-37

砲撃が止むのを待ち機銃で掃射する。

使徒、再びATフィールドで防御。

そんなやり取りを続けていた。

(狙いがどんどん正確になってやがる…)

いつ直撃を受けてもおおかしくはなかった。

『最終安全装置解除。』

『撃鉄起せ。』

(……準備が終わったか。)

コウスケは最後のミサイルを放ち、逃げ回る。

『綾波特務二尉。射線上より退避してください。』

「了解。」

コウスケは射線上より退避する。

『発射!』

ミサトの号令とともにトリガーを引く初号機。

青い光線が使徒に突き刺さる。

「やった。」

作戦は成功

のはずだった。

『目標に高エネルギー反応！』

「なに！」

『そんな、このタイミングで……』

使徒から放たれる加粒子砲。

加粒子砲は直撃を避け、初号機背後の山にぶつかった。

響き渡る悲鳴とアラート音。

『ミスった。』

通信機から漏れるミサトの声。

『第二射急いで！』

すでに再充電の準備が進んでいる。

『再び高エネルギー反応！』

『まずい！』

使徒が再び加粒子砲を放った。

その射線上に零号機が移動していた。

盾ではじかれる加粒子砲。

『あやなみ！』

『盾が持たない。』

通信機からシンジとリツコの声が聞こえた。

途端に盾がはじけ飛んだ。

加粒子砲にさらされる零号機。

「くそー！」

コウスケは急上昇し、使徒の真上にいた。

「最後の一発だ！」

無誘導爆弾を放った。

使徒は砲撃を止めATフィールドを張った。

『発射！』

その時を待っていたかのようなミサトの号令。

再びトリガーを引く初号機。

青い光線は使徒を貫通した。

燃え上がる使徒。

『パターンブルー消滅。』

通信機越しに使徒の殲滅を知らせる報告と歓喜の声上がる。

「……………零号機は？」

零号機に目をやるとひどく融解していた。

初号機は零号機のエントリープラグを引き抜き地面にそつと置いた。

シンジが救出に向かったようだ。

零号機のエントリープラグの電源はまだ生きているようだ。

『大丈夫か？ あやなみ！』

『うっ……………』

どうやらシンジは泣いているようだ。

『……………自分には……………自分にはほかに何も無いって……………そんなこと言うなよ。』

『……………』

『別れ際にさよならなんて……………悲しいこと言うなよ。』

シンジの泣き声が続く。

『……なに泣いてるの？』

『……………』

『……ごめんなさい。……こういう時、どんな顔すればいいのかわからないの。』

『……笑えばいいと思うよ。』

しばらくして、零号機のエントリープラグから二人が出ていた。

(どうやら無事のようにだな……)

ふと空を見ると満月が笑っていた。

コウスケにはそう見えた。

「……………状況終了。綾波特務二尉、帰還する。」

そういつてコウスケは愛機とともに興奮の止まない格納庫へ戻って行った。

第9話 陰謀

コウスケは京都にいた。

正確には京都大であった。

(ここに手がかりがあるかな?)

コウスケは第五使徒との戦闘で一番危険な囚役を引き受けたため、一週間ほど休暇を
申付けられた。

彼が京都大に来たのは、碓ユイに関する情報を得るためであった。

校門の前には警備員がいた。

初老に差し掛かった男性のようだ。

「すみません。」

「誰だい? あんたは。」

「昔、冬月先生にお世話になったものなのですが……」

「冬月先生? ……ああ、あの人か。」

「今もいらつしやいますか?」

「今はいないよ。」

「そうですか……どこにありますでしょうか？」

当然ながらコウスケは本人がどこにいるのか知っている。

「わからないね。突然おやめになったからね。」

「では、冬月先生のお部屋はまだご健在でしょうか？」

「あー、たしか誰も使っていないはずだよ。」

「少し邪魔してよろしいでしょうか？」

「なんでなんだい？」

「実は、今度冬月先生にお世話になった連中で慰労会を開こうと思ひまして……でも肝心の冬月先生がどこにおらつしやられるのかわからないので、手がかりでもと……」

「そうかい。あんたみたいな人に思われて冬月さんもいい弟子を持ったね。」

「いえ、自分なんてまだまだです。」

「ほんとはダメなんだろうけど……特別に許可するよ。」

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

「では、失礼します。」

「頑張りなよ。」

（よし。）

コウスケは校舎に向かった。

・
・
・

「1999年は……これか……」

コウスケは資料室にいた。

ページをめくり細かくチェックしていく。

彼は卒業生の顔写真を一つ一つ確認していた。

「ふう……さすがに量が多いな。」

それでも手は止めない。

時間がゆつくりと過ぎていく。

部屋にはページをめくる音

「……………あった……………」

ようやく目的の人物の名前を見つけた。

（さすがの碓司令もここまででは手を回せなかったか。）

顔写真をみる。

すると妙な既視感を感じた。

（なんだ？ 覚えがある……………？）

当然ながらコウスケは碓ユイと会ったことはなく、その存在を知ったのはごく最近で

ある。

(なんだろう……誰かに似てる……)

じつと会ったことのある人たちを思い浮かべる。

(……………!)

とある人物が頭にヒットする。

(……綾波レイ……………)

蒼い髪に紅い眼をした少女を思い浮かべる。

髪の色、眼の色は違うが、それ以外は似ているどころかそっくりそのままであった。

(……………偶然か?)

この世には似た人が3人はいると言われている。

だが、ここまでそっくりそのままなんて人はいるだろうか?

(レイと碓ユイと碓ゲンドウか……)

ユイの写真はゲンドウがすべて捨てたとシンジが言っていた。

それはこのことを隠すためのものだったのではないか。

(レイと碓ユイには何か秘密がある。)

そう確信するコウスケであった。

(……………とりあえず当初の目的は果たしたか。……………このことはシンジにはまだ黙っていた

ほうがいいだろう。」

そう思いコウスケは資料室の管理人に礼を言い部屋を後にした。

・
・

（ここが副司令の研究室か…）

コウスケは冬月の元研究室にいた。

部屋はきれいにかたされており、誰かが使ってる様子はなかった。

「……とりあえず探してみるか。」

机、本棚などを手あたり次第探してみるが、成果はなかった。

（……無駄足かな？）

ふと本棚に目を止めた。

下をのぞくと一枚の紙……茶色く風化した手紙みたいなものが見つかった。

それを拾うと端に小さく碓ユイの文字が目に入った。

裏返すと碓ゲンドウの名前が真ん中に書いてあった。

「なんでこんなものが？」

などと言いつつ回収するコウスケ。

中身を見ようなどと思わずには思わない。

コウスケは部屋から出ることにした。

・ ・ ・
京都大を訪ねてから一週間。

コウスケはリツコに呼び出されていた。

「あなたに見てもらいたいものがあるの。」

そういつてリツコは資料を差し出す。

「……ジェットアローン？」

「そう。今回対使徒専用開発されたロボットよ。」

コウスケはJAのスペックを確認する。

「……ゴミだな。」

「あら、そう言い切れるの？」

「こんなもん使えるか。」

「そうね。」

「こんなものEVAがなくとも破壊できるな。」

「でもそれがわかってないのよね。」

「……でどうする気だ？」

「何のことかしら？」

「こんなものを俺に見せたということは何かやらせたいんだらう？」

「さすがね。……今回模擬戦をやることになったのよ。」

「……EVAと？」

「いえ。」

「……まさか俺か？」

「そう。あなたがやるの。」

「なんで？」

「使徒との交戦経験が多いから。」

「……なるほど。俺を倒せなきや使徒なんかもつてのほかということか。」

「そういうこと。」

「わかった。」

そういつてコウスケは出ていった。

……

(俺を殺す気かな？ それとも……)

模擬とは言っても実弾を使用するようだ。

NERVにしてみればどっちに転んでも痛くはなかった。

コウスケが負ければ解任、下手すれば打ち所が悪くて死亡することもある。

おそらくJAを使えないようにする第二案もあるのだろう。

一方J Aが負ければ計画は頓挫する。

(切り札は早めに切ったほうがいいかな?)

そう思いコウスケは喫煙所へと向かった。

・
・
・

第28 放置区域

かつて日本の中枢を担った東京は現在そう呼ばれていた。

セカンドインパクトが起こって世界に大混乱が襲った。

東京も例外ではなく新型爆弾―のちにNN爆弾が投下された。

首都としての機能はもちろん都市としても活動は不可能となった。

このことがきっかけで日本には自衛のための組織「戦略自衛隊」が発足した。

ともかくコウスケは二人の女性―ミサトとリツコともにかつての東京の上にあった。

「着いたわよ。」

「なにもこんな所でやらなくてもいいのに。」

「ここは放置されてるからな、やりやすいんだろう。」

「……でこの計画に戦自は絡んでるの?」

「戦略自衛隊? いいえ介入は認められずよ。」

「どうりで好きにやってるわけね。」

(計画自体には介入しなくても技術提供、供与くらいはあり得るかもしれないな。)

「コウスケ君は今日模擬戦をやるんでしょ?」

「ああ。」

「大丈夫なの?」

「心配しなくてもあんなポンコツにはやられないよ。」

「でも核分裂炉には気を付けてね。」

「わかってるよ。」

...

「本日はご多忙のところ、我が日本重化学工業共同体の実演会にお越しいただき、誠にありがとうございます。」

(まったく大人げないな。)

ネルフ御一行様と書かれたテーブルには真ん中にビールの瓶が数本置いてあった。

他のテーブルには様々な料理が置いてある。

(主催者の品がしれるな。)

「ご質問がある方はどうぞ。」

リツコが手を挙げる。

リツコと時田は問答を繰り返すが、徐々にリツコが冷静でなくなるのがわかる。

「赤木博士。落ち着け。」

「そうね……」

リツコは座った。目も据わっていたが

「他にいますか？」

コウスケが手を挙げた。

「これはNERV航空隊のエース、綾波特務二尉ではありませんか。」

「ここには料理がありませんが……これは我々と敵対するという意思表示でよろしいのですね。」

「これは失礼。どうやら手違いがあつたようです。」

「非公開とはいえ我々も国連の一組織です。つまりはあなた方は国連と敵対したい……
そうとつてよろしいか？」

時田は青ざめた。

「いえ、そうではありません。おい早くお出ししろ。」

「結構、今更出されても中に毒なんか入ってたら洒落になりませんからな。」

「毒だなんて……」

コウスケは無視した。

「では質問です。JAは格闘戦を主体になさってますね。」

「ええ、そうです。」

「あなたは我々の機密情報をいろいろ知っているようだが、第五使徒はご存知ですね？」

「ええ。」

「あのように遠距離からの攻撃にはどう対処なさるおつもりで？」

「それに耐えられるように設計されています。」

「EVAですら溶かしてしまうような砲撃にJAが耐えられるとでも？」

「はい。」

時田は自信満々のようだ。

「それにATフィールド。あなたは時間の問題と仰ったが、日本中のエネルギーを集めてやっと破壊できるものをどうするつもりですか？」

「それは……その………」

「まさか、自爆特攻させる気ですか？」

時田は答えに瀕した。

「まあ、兵器としては最強かもしれませんが。」

「はっ。」

「こんなものが歩いてきたら、放射能が怖くて攻撃できませんからな。戦略兵器としては価値があるのでは？」

会場は静まり返っていた。

「二足歩行ではなく、無限軌道のほうがいいのでは？ ……ついでに肩に戦車砲でも付けて。」

（なんかセカンドインパクト前のアニメに出てきそうだな………ていうかよく考えるとEVAそのものがアニメの世界みたいな話だな。）

「この後、模擬戦がありますな。せいぜい楽しませてください。」

「……………」

時田は押し黙った。

・
・
・

コウスケは控室にいた。

（物がポンコツなら作った者もポンコツだな……）

時田は少なくとも無能ではないだろう。

仮にも今回の発表で責任者なのだ。

各業界のお偉いさんが来るのに下手な人間は送れないだろう。

ただ、人間ができて無かった。

（まあ、叩きのめしてやるか。）

そう思っていると横の部屋から破壊音が聞こえ、何か焦げ臭いにおいがした。

(こつちも大人げないな……)

ドングリの背比べみたいなのというのがコウスケの感想だった。

...

「こちら、綾波。準備完了。」

『了解。JAはすでに指定の場所で待機中です。』

「了解。……出る。」

コウスケは愛機とともに飛び立つ。

すぐにJAが見えた。

(悪趣味だな。使徒のほうはまだ好感が持てる。)

などと身も蓋もないことを考える。

『これより模擬戦を開始します。』

「了解。状況開始する。」

(まずは様子見だな。)

JAがパンチを放つが、遅い。

コウスケは悠々と回避した。

今度は裏拳を放つが、遅い。

(格闘戦でこんなに遅くていいのか?)

しかも動作に挙動があるので、攻撃がいつ来るかわかってしまうのだ。もう少し様子を見たかったが、つまらなくなつた。

(もう潰すか。)

コウスケは愛機をJAに向け、機銃を放つた。

胴体は狙わない。万が一、核分裂炉に直撃しようものなら爆発どころの騒ぎではない。

装甲にダメージを負わせるが致命傷ではないようだ。

「……自慢することのだけはあるな。」

愛機を大きく旋回させ、再び正面に捉えた。

狙いは足もと。

コウスケはミサイル発射ボタンを押す。

が途端にエラーが出た。

(!? …バカな。ここに来る前のチェックでは異常なしのはずだ。となると………)

途端に機銃に切り替える。

JAに火花が散る。

(こうなれば……)

コウスケは足の付け根を狙つた。

J Aの黒い足の付け根に飛び込む銃弾。
するとJ Aの片足が折れた。

人で言う間接に当たるところなので、装甲も柔らかいものだった。

前かがみになり転ぶJ A。

J Aはじたばたとみつともなく残った手足を動かす。

途端に動かなくなった。

「こちら綾波。状況終了。」

管制室は静寂に包まれた

………一人の女性を残して。

...

「よくやったわ。おかげですつきりした。」

ミスアトがにこにこでそう言った。

「無様ね。」

リツコは満足そうに告げる。

「そういえば、なんでミスアイルを使わなかったの？」

「核分裂炉に当たれば危ないからな。」

リツコを見ると少し動揺したように見えた。

「そうね。」

ミサトは納得してくれたようだ。

「何せよ帰りましょう。」

「そうだな。」

(もうやばいか……)

帰路に立ちながらコウスケは身の危険を感じるのであった。

・・・

「……以上です。」

静寂に包まれた部屋には三人の人がいた。

「今回の件に関して綾波特務二尉は感づいている可能性があります。」

「……………」

「どう対処なさいますか?」

「現状維持だ。」

「わかりました。」

「下がりましたまえ。」

「失礼します。」

そう言うと女性が退出した。

「いいのか？」

「……ああ。」

「彼が休暇中に京都大に行ったとの報告が入ってるぞ。」

「………」

「もしかしたら気づいているかもしれないぞ。」

「問題ない。」

「……お前がそういうならいいが。」

「………」

「………」

再び部屋に静寂が訪れた。

第10話 エースパイロットの条件

コウスケはヘリの操縦席にいた。

今は太平洋上にいる。

後ろにはミサト、シンジ、トウジ、ケンスケそしてレイがいた。

ケンスケはビデオカメラを手にして興奮していた。

トウジはしきりにミサトに話しかけていた。

シンジはというと・・・固まっていた。

レイはシンジの横に引っ付いていた。

「碇君は私のもの！」という怖いオーラが立ち込めている。

無論レイにそこまでの意識はない。

レイは第五使徒との戦闘以降、人（というよりはシンジ）に関心を持つようになったようだ。

ミサトはそんな様子のシンジをからかっているようだ。

からかうたびにレイの目が薄く細くなっていたが・・・

「しかし、あなたがあの綾波二尉だったなんて感激です。」

ケンスケは言う。

「そうか？」

「そうです！」

「コウスケさんってそんなに有名なの？」

シンジが問う。

「お前は何も知らないんだな。」

ケンスケは自慢げに

「綾波二尉と言ったらコードネーム「アロー3」国連軍のエースじゃないか。」

「そうなの？」

「参加した作戦は数知れず、成功率はほぼ100%、愛機はS u r 37、通称「サジタリウスの矢」、これをエースと言えずに何という。」

「そうなんだ。知らなかった。」

「それが今や人類の危機を救うために戦ってる……くく憧れるな。」

「そうだったんだ。」

「ひどい奴だな。一緒に戦ってるんだらう。」

「うん。」

「なら少しくらい知ついてもいいんじゃないか？」

「そうでもないよ。」

コウスケが遮る。

「知つてもいいことなんかない．．．ましてやエースなんて代物はな。」

「またまたご謙遜を。」

「人は知らないほうがいいこともあるんだよ。」

そういうコウスケは重い表情だった。

．．．

オーバー・ザ・レインボウ

国連軍が持つ最大級の空母の名前だ。

今や老朽化しつつある船だが、いまだに現役であることに疑問を感じさせない。

行き届いた整備．．．それだけで乗艦するクルーたちの誇らしい姿が目につく。

そんな船にコウスケたちは降りたつた。

すると彼らの前に黄色いワンピースを着た見知らぬ少女が立っていた。

赤みのかかったロングヘアーに蒼い瞳が彼女が日本人ではないことを証明している。

少女は吹き飛ばされたトウジの帽子を踏んでいた。

「ハロー。ミサト元気してた？」

「まあね。あなたも背伸びたんじゃない？」

「そつ。ほかのところもちゃんと女らしくなってるわよ。」

トウジは少女の足もとでじたばたしている。

「紹介するわ。EVANGELION式号機専属パイロット、セカンドチルドレン惣流・アスカ・ラングレーよ。」

不意に風が吹いてきた。

めくれるスカート。

と同時に乾いた音が三つ聞こえた。

トウジ、ケンスケ、シンジがビンタされたのだ。

レイはアスカを見ていた。(実は睨んでいる。)

「なにすんのやー!」

「ああ、カメラが・・・」

「見物料よ。安いもんでしょ。」

「なんやて? そんなもんこつちも見せたるわ。」

そういつて下のジャージを脱ぐトウジ。

はずみで最終防衛ラインまで脱いでしまった。

「!!なにすんのよ!!」

唸るアスカの手。

アスカの手はトウジに直撃した。

「で？噂のサードチルドレンはどれ？まさか今の・・・」

きつい目つきでトウジをにらむアスカ。

トウジは完全に意気消沈していた。

「違うわ。この子よ。」

「ふーん・・・」

アスカは値踏みするようにシンジを見る。

レイの目が一層険しくなる。

「・・・冴えないわね。」

「むっ。」

「・・・そんなことはないわ。」

レイが介入する。

いつの間にかシンジの真横にいた。

「・・・あんたがファーストチルドレンね。」

「・・・」

「仲良くしましょ。」

「なぜ?？」

「そのほうが都合がいいから。」

「・・・命令ならそうするわ。」

「こちら。」

コウスケは介入することにした。

「レイ。」

「はい。」

「それも宿題な。人と初めて会うときどうすればいいのか。」

「・・・わかりました。」

ちよつとふてくされているように見えた。

「それと・・・惣流」

「なに。」

「その高圧的な態度はやめろ。」

「なんでそんなこと言われなきやけないのよ。それにあんた誰！」

「俺は綾波コウスケ特務二尉だ。作戦部副部長兼航空隊隊長だ。」

「へー・・・わかりました。特務二尉殿。」

「はあー」

（これはまずいな・・・）

これがアスカとの初邂逅であつた。

・
・
・

艦橋に移つたコウスケたちは提督と対面していた。

「海の上は我々の管轄だ。黙つて従つてもらおう。」

ミサトの顔は暗い炎を宿していた。

(まづいな・・・)

嫌だつたが、コウスケは口出しすることにした。

「失礼。提督。」

「君は？」

「綾波コウスケ特務二尉です。」

「・・・おお！君か。」

「御無沙汰しております。」

「あの時は迷惑をかけたな。」

「いえ。お助けできて幸いでした。」

「それでどうしたのかね。」

「出来れば弐号機をお渡し願います。」

「なぜかね？」

「不測の事態に備えてです。」

「そのために我々がいるのだろう?」

「失礼ですが、この艦隊にはNN爆弾以上の火力がありますか?」

「残念だがない。」

「使徒はNNでは撃破できません・・現に第参使徒が出現した際、NN地雷をしましたが、効果が認められませんでした。」

「なに?!」

「そして使徒を撃破したのはあのEVAのみです。」

「・・・わかった。NERVに譲渡する。」

「ありがとうございます。」

「いやいや、こちらも意固地になっていたようだ。」

「こちらもいろいろ失礼しました。」

「今度どうかね?」

提督は何かを飲むようなしぐさをしている。

「平和になった時にいたしましょう。」

「わかった。」

そうやって提督はサインをした。

不意に通路から男の声がした。

「あいかわらず凜々しいな。」

「あつ加持先輩。」

嬉しそうにアスカが言う。

対照的にミサトはゲツという顔だった。

「うえー・・・」

「加持君。君をブリッジに招待した覚えはないぞ。」

「それは失礼。」

ミサトの顔がみるみる変形していった。

・・・

コウスケはブリッジに留まった。

提督と思いい話をしていた。

「しかし君がNERVにいたとは・・・世界は狭いな。」

「そうですね、提督。」

「所属は空戦隊か？」

「ええ。隊長です。とは言っても一人ですが。」

「どうなのかね？」

「EVAが無ければだめですね。」

「そうか。」

「人類の命運が14歳にかかっている・・・なかなか苦しいですよ。」

「そうだな・・・」

「自分も全力は尽くすのですが・・・サポートで精いっぱいです。」

「君でそうなら我々では無理だな。」

「否定できないのが心苦しいです。」

「となれば我々も無事に輸送できるようにするしかないか。」

提督との世間話が続いてゆく。

突然船が揺れた。

「どうした!」

「未確認物体の攻撃です。」

「おそらく使徒ですな。」

「なんてこった。」

そうしている間に友軍艦が沈んでいく。

「提督。戦闘機をお貸し願いたい。」

「・・・わかった。」

「ありがとうございます。」

コウスケは敬礼をした後ブリッジを出ていった。

・・・

「提督からは許可をもらっている。予備の機体をくれ。」

命令がすでに届いていたのだろう、すぐに案内された。

S u—33だった。

コウスケはすぐにチエックを開始した。

「異常なし。」

エレベータを使いカタパルトに出る。

「綾波・・・出る。」

コウスケはカタパルトから出撃した。

・・・

友軍艦は一隻また一隻と沈んでいった。

発射される魚雷。

コウスケも機銃を放つが効果がない。

「・・・この程度じゃだめか。」

（やはりEVAしか・・・）

「葛城。EVAを出せ。」

「今起動中よ。」

「了解。」

すると通信が入った。

「オセローより入電。EVA式号機起動。」

すると使徒は式号機に突進した。

空を舞う式号機。

式号機は友軍艦を足場に使っていた。

（あいつは何を考えているんだ。）

コウスケは怒っていた。

いくら足場がないとはいえ、退避勧告もなしにEVAの足場にすれば被害が出るだろう。しかもそれを見せつけるように少し遠回りしていた。

「EVA式号機、着艦しまゝす。」

「うわあああああああ．．．」

シンジの絶叫が聞こえる。

「．．．シンジ君も乗ってるのか。」

レイがしかめっ面をしているのが目に浮かぶ。

そうしているうちに式号機は空母に乗り移った。
バランスが崩れる空母。

海に落ちる戦闘機たち。

海から躍り出る使徒。

カジキのようなフォルムだが巨大すぎた。

飛行甲板はたちまち使徒の陰に隠れてしまった。

空母のバランスがまた崩れるが何とか立て直す。

持ちこたえる式号機。

だが式号機はエレベータを踏み抜き海に落ちた。

(B型装備で水中戦は無理だ。)

つながれたケーブルのコードが生き残った戦闘機たちを海に叩き落とす。

「再建に時間がかかるな。」

海に入れないコウスケはなすべがなかった。

それでも通信機越しに状況はわかった。

「くち〜!」

「使徒だからね。」

(・・・冷静だな、シンジ君)

「EVA式号機、目標体内に侵入。」

「・・・食われた・・・」

なすすべなく過ぎていく時間

だが、空母の一つのエレベーターが動いていた。

「おーい葛城。」

「加持?!」

「届け物があるんで、俺先に行くわ。」

啞然とする一同。

「か〜じ〜! コウスケ君やつちやいなさい!」

ミサトは号令を飛ばす。

「・・・了解。」

(葛城、やけにこだわってないか?)

機体をYak-38改に向ける。

「悪く思うなよ。」

ターゲットロックオン

モニターに映し出される。

「うわっ! ちよ・・・ちよっと待ってくれ。」

加持が慌てて降りてきた。

・
・
・

結局使徒は艦隊の援護を受け殲滅した。

コウスケは空母に着艦し提督のもとに急いだ。

ブリッジからエントリープラグから出るシンジとアスカが見えた。

シンジはケンスケとトウジにからかわれている。

レイは赤いプラグスーツを着たシンジを見て固まっていた。

コウスケは提督から一つ書類をもらいブリッジを後にした。

・
・
・

甲板にでるとプラグスーツを着たアスカが誇らしそうにいた。

ミサトは加持を折檻していた。

「あんたつてやつは〜！」

「おい、葛城ちよつとタンマー！」

ケンスケとトウジは式号機を見ていた。

「すごい。すごすぎる〜！」

「ほえ〜。式号機は赤いんやな。」

シンジはレイに引っ付かれています。腕でも折りそうな勢いだ。

「あつ綾波！痛いよ！」

「問題ないわ。」

レイは………

恐ろしいオーラを振りまいていた。

どうやらエントリープラグと一緒に乗っていたのとおそろいのプラグスーツが気に食わないようだ。

「ダメだよ綾波！」

「問題ないわ。」

「やめてよ！」

「問題ないわ。」

「せめてほかの人がいない所で」

「も、ん、だ、い、な、い、わ。」

「あつあやなみく！」

シンジが着るプラグスーツを脱がそうとしている。

ちなみに元着てた服は海の底だ。

（ほかの人が居なければいいのか？……完全に動転しているな。）

シンジ君、がんばれよ。」

心の中でシンジに声援を送るが、コウスケ自身は楽しんでた。

コウスケはアスカの前に立った。

「どう？ EVAのエースパイロットの華麗なる操縦は？」

「……」

「なによ。」

「これを見ろ。」

副官からもらった資料を渡す。

資料には「ご丁寧にも名前まで書いてあった。

「……使徒の攻撃で犠牲になった人？」

「違う。」

「じゃ、何よ。」

「お前が踏みつぶした人たちだ。」

アスカの顔が青くなる。

「華麗なる操縦とやらで出た被害だ。」

「……しようがないじゃない。」

「確かに……だが死んだ人間はそう思わない。使徒にではなく味方に殺されたんだか

らな。」

「……」

「それにエースパイロットと言ったか？」

「……そうよ。」

「エースパイロットって何だ？」

「決まってるでしょう。操縦がうまくて一番敵を倒しているパイロットよ。」

「何もわかってないな。」

「どういう意味よ！」

「……エースパイロットと言うのはな……一番生き物を殺している人のあだ名なんだよ。」

「よ。」

「……」

「一番殺してる人って言われて満足しているのか？そういう意味なら君がエースパイロットだな。」

「どういう意味よ……」

「シンジ君は3つ、レイは0、君は使徒1つにその人数……」

「……」

「奪った生命の数では惣流が一番なんだからな。」

「そんな・・・」

「エースというのにこだわりがあるみたいだが、ちやんと考え直すんだな。」

コウスケはシンジたちのもとに去って行った。

「そんな・・・あたしはただ・・・」

アスカはただうわごとを述べていた。

・・・

第11話 過去

「綾波特務二尉参りました。」

コウスケは敬礼を交えてそう言う。

コウスケがここに来るのは二回目であった。

目の前には男が二人―碓ゲンドウと冬月コウゾウである。

(しかしここは相変わらず辛気臭いな。)

十人に聞けば同じ答えが返ってきそうな感想だ。

冬月が告げる。

「綾波特務二尉、先日の使徒戦で友軍を撃とうとしたのは事実かね？」

「はい。」

「なぜそんなことをしたのかね？」

「葛城一尉の命令があつたためです。」

「ふむ。」

「それと敵前逃亡は重罪でしょう。」

「ここは軍隊ではないのだが……」

「NERVは使徒を殲滅するのが目的でしょう。では、加持一尉の行動は敵前逃亡になります。」

ゲンドウが起動した。

「……加持一尉には密命があった。それに従っただけだ。」

「ほう。それを知っていれば違う行動もとれたのですが……」

「……………」

「まあいい。正しく伝達しなかった我々にも落ち度がある。」

そういつて冬月は不問にすると告げた。

「それと……この前の休暇中に京都大に行ったとの報告があるが……」

(ばれてますか。)

「なぜそんなところに行ったのかね？」

「……………」

「君は他の大学にいたはずだが。」

「……………」

「京都大に友人がいたとは聞いてないがね。」

「……………」

無言が続く。

(そこまで調べてるのか……賭けに出てるしかないな。)

「……碇ユイなるものの存在を調べるためです。」

二人は緊張したようだ。

……と言つてもゲンドウは微動だにしないが。

「なぜだね?」

「単なる興味本位ですよ。」

「興味?」

「シンジ君の経歴を調べるうちに、母親について調べてみようとしただけです。作戦部副部長として知っておいても損はないかと。」

「……そんなこと必要あるまい。」

「……………」

コウスケにかかるプレッシャーが一段と重くなった。

(まずいな……下手すれば死ぬかな? ……出すか。)

「……ここにある手紙があります。……碇司令宛の」

「そんなことはどうでもいい。」

「ほんとによいのですか?」

「……………」

「差出人が碇ユイでも？」

「!？」

ゲンドウは明らかに動揺したようだ。

(妻には弱いのか……碇司令も人間なんだな。)

「……渡してもらおう。」

「いいですよ。」

コウスケは手紙を渡す。

冬月はその手紙を見ると驚いていた。

「なぜここにがある」と言いたげだ。

「ご安心を……手紙の中身は見えておりません。」

ゲンドウは封を切り手紙を読んでいた。

……

……

……

……

沈黙が痛い。

不意に一筋の涙が見えた。

(碓司令も泣くんだな。)

「……綾波特務二尉。」

「これをどこで手に入れた。」

冬月の顔が強張る。

「……それについては話せません。」

「そうか。」

コウスケに向けられたプレッシャーがなくなったように感じた。

「……下がりましたまえ。」

「はっ。失礼します。」

コウスケは敬礼をして退出した。

沈黙が訪れる。

「ユイ……………」

ゲンドウは人知れず泣いていた。

・
・
・

「早まったかな……………」

コウスケは今更ながら後悔していた。

「…………でも、あの雰囲気はやばかったしな……………」

心の声がただ漏れであった。

彼らしくもなく先ほどのやり取りを思い返していた。

「へたすりや……」

死ぬかもしれない

そんな思いが脳内に響く。

当のグンドウはそんなつもりはないが、そんなことがコウスケにわかるわけない。

しよせんコウスケも人である。

(まだ死ぬわけにはいかないんだよな……)

(誰かに打ち明けとくか?)

と考えたが、即座に放棄する。

そんなことをすればその人の周りが被害をこうむるからだ。

「……」一応警戒しとくか。」

などと考え事をするうちに前から人影が見えた。

「……赤木博士どうした?」

「碇司令に呼ばれたのよ。」

「ふーん。」

EVAの整備、武装開発、MAGIの管理を任される彼女が司令に呼び出されるのは

不自然ではなかった。

だが、先ほどのやり取りがある。

コウスケは緊張していた。

「なら早くいったほうがいいな。」

「ええ。」

「じゃ。」

リツコは総司令執務室に向かった。

(生きた心地がしないな。)

するとまた人影が見えた。

コウスケはある意味、疑心暗鬼に駆られている。

先ほどのやり取りで、NERV本部をほぼ敵地と認識し始めているからだ。

次に現れた人影は制服を着ていて、蒼い髪をしていた。

レイである。

「……こんにちは。レイ。」

「こんにちは。」

コウスケは去ろうとしたが、レイがモノ言いたそうな顔をしているのが見えた。

「……シンジ君か？」

シンジとレイ

最初はシンジが一方的に話すのがよく見えたが、この前の作戦「ヤシマ作戦」以降レイもシンジに興味を示していた。

もつともほかの人（コウスケ以外）に対する態度は変わらないが……

そのおかげか、レイがシンジに引っ付いているのを見たことがる。

一、二回ではない。

……おかげでシンジをからかうネタには困らなくなつたが。

コウスケはレイがシンジを通して心を知ろうとしているように見えた。

特にセカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーが来てからは如実に出てきた。

だが、レイはおそらく無意識なんだろうと考えていた。

時々、自分に戸惑っているように見えるからだ。

ともかくレイが一番固執しているものの一つ「碓シンジ」の名前がコウスケの口から出てもおかしくはなかった。

「……いえ。」

「ならどうしたんだ？」

「特務二尉に」

レイはコウスケを「綾波」とも「コウスケ」とも呼ばなかった。いつの間にかこうい

う呼び方が定着していた。

特務二尉なんてコウスケ以外いないので不便ではないが。

「俺に用か？」

「はい。」

（子供の前でズドンとかは……無いと祈ろう……）

「……ちようど昼時だし、食堂に行くか。」

「はい。」

．．．

NERVの食堂は食券を購入し、カウンターにて料理と交換するシステムである。

料理自体はすばやく出るため、食券を購入したらカウンターで待つていれればいいのだ。

そんなNERVの食券販売機に不可解なメニューがある。

コウスケはそれを押している人を見たことがない。

普通人気のないメニューは早々と取り潰されるのだ。

だが、そのメニューだけは取り潰されることなく現存している。

聞いたところによるとそのメニューはコウスケが来たと同時に現れたらしい。

そのメニューとは

「綾波定食」

である。

そのためこのメニューがコースケと何らかの因果関係が有ると噂された。

これが出たとき興味本位で注文したとある眼鏡をかけた整備員は泣いたという。

その時の感想は

「まるでウサギになつた気分だ……」

などと意気消沈して述べていたという。

ちなみに記念すべき第一号さんは夜、友人とともに焼肉を食べに行つたという。

友人のおごりで……

それはものすごい食べっぷりだったらしい。

それ以降そこに手を触れるものはいなかった。

のだが一人だけこのメニューのボタンを押す者がいた。

……綾波レイだ。

「……なるほど。これは泣くな。」

「？」

「おいしいか？ それ……」

「はい。」

「……ならいいんだ。」

レイの前には茶碗に盛られたご飯と、皿に盛りつけてある野菜たちであった。ドレッシングは一応かかっているみたいだった。

動物性タンパク質などかけらもない……

ご飯とともに野菜をもしやもしや食べるレイをみてコウスケは

(ウサギだな……)

などと思つたという。

(もしかして……レイの名前から取つたのか?)

この推察は残念ながら外れることになる。

ある程度、食事が終わったところにレイが話しかけてきた。

「特務二尉。」

「なんだ?」

「……どうして私に構うんですか?」

「変か?」

「他の人は係わらないので。」

「そんなに不思議なことか?」

「はい。」

(他の職員は何やってんだ？ 大人げないな。)

「シンジ君と変わらないと思うがな。」

「碓君は……」

ちよつと赤いレイ

「わかった、わかった。」

「……」

「なんで俺がレイに係わるか？ 愚問だな。」

「ぐもん？」

「バカな質問ということだ。」

「……」

「使徒との戦いで俺は何をやってる？」

「私たちの支援です。」

「なら、俺は君たちの戦友ということになるな。」

「せんゆう？」

「そう、戦友だ。戦いに友と書いて戦友。戦場でともに戦う人のことをそう呼ぶんだ。」

「戦友……」

「まあ、これも一つの絆だな。14歳に向けて言う言葉ではないがな。」

「絆……」

（絆に反応するか……不器用な奴だな。）

「そんな戦友の一人を気にして何がおかしいんだ。」

「……………」

「うーむ……レイ、シンジ君についてどう思うんだ？」

「碓君は……」

「……………」

「パイロットです……」

とレイは表情を変えずに言う。

（あらら……）

「……………まあいい。そのシンジ君について何か思うことはあるか？」

「……………はい。」

「それと似たようなものだ。」

（少し違うけど……まあいいか。）

「わかりました。」

すでに料理は食べ終わっていた。

「これから実験があるので」

「ああ。わかった。」

「……失礼します。」

「レイ。一つ目の宿題は合格だ。」

「はい。」

レイは心なしか嬉しそうであった。

・
・

いつもこなす訓練を終えるとアスカが待っていた。

「よう。どうしたんだ。」

「……………」

「そんなに睨まれてもどうもできんが。」

あの空母での邂逅以来、コウスケとアスカは疎遠になっていた。

というよりはアスカが一方的に無視しているようだったが……

「綾波特務二尉に聞きたいことがあるのよ。」

「なんだ？」

「あのとき……エースパイロットの話。」

「ああ、あんときはすまなかつた。」

コウスケはあの時後悔していた。

激情に任せ、たかが14歳の子供につらく当たってしまったのだ。

「いいえ。」

「ならいいが……」

「なんであの時、あんなに怒っていたのか知りたいのよ。」

「……………」

「……………」

睨み合いが続くがコウスケのほう折れた。

「…………ふうー。わかった話そう。だが、ここじゃない方がいい。俺の執務室に来てくれ。」

…

コウスケの執務室には当然彼と招かれた客アスカがいた。

コウスケは紅茶をアスカに差し出した。

「俺がエースパイロットと呼ばれていたのはもう知ってるな。」

「ええ。国連軍航空隊所属、コードネーム「アロー3」、「サジタリウスの矢」、作戦遂行率はほぼ100%なんですよ。」

「それくらいは調べれば簡単に出てくるだろう。」

「まあね。」

「……だが何があつたかまでは記録されない。公式記録なんてそんなものだ。」
「……………」

「あれは俺がエースパイロットと呼ばれる前の話だ。今から5年前、あんどきは若かつたな……初めてアロー3のコードネームを名乗った時だったな。」

アスカは真剣に聞いていた。

「セカンドインパクトからだいたい復旧していたが、紛争、テロが続いていた。俺も国連軍だったからないろんな地域に行つた。そんな中である医療兵に恋をしていた。」

「……………」

「そんな中どこで手に入れたのかは知らんが、あるテログループがNNの爆破装置を持っていることが判明した。治安が悪かつたからな。闇ルートで手に入れたんだろ。」

コウスケはその時の状況を思い出していた。

「だがそいつらは医療兵を人質に脱出を図つた。その時、動けるのは俺だけだった。」

「……その医療兵つて」

「そう。俺の想い人だったさ。」

「そんな……………」

「俺の攻撃に焦つたのか、テログループはNNを爆破すると言つてきた。当然そうなればその街一つ消えることになる。その民間人も一緒にな。」

「……………」

「チャンスは一回きり……機銃で狙うことも考えたが戦闘機でそんな器用なまねはできない。……経験も浅い俺はミサイル発射装置に手をかけた。」

「うそ……」

「後に残ったのは赤い池と彼女のドックタグだけだった。……俺は帰ったら英雄と言われたよ。……彼女はテログループに殺されたということになった。」

「……………」

「だが、俺にそんな言葉はいらなかった……」

紅茶にはコウスケの顔がゆらゆらと映っていた。

「綾波ってどういう意味か知ってるか？ ……重なり合って寄せくる波のことを綾波というそうだ。今は使われていないみたいだが」

アスカは何故そんな話をと聞いたげだった。

「家族もセカンドインパクトで死んだ。親族も……その時の俺が知る限り「綾波」は一人だった。」

コウスケの目は何か遠いものを見るような態度だった。

「そして思い人も……それ以降、心を鬼にした。いや、無にしたんだ。敵なら女子供関係なく殺していった。そうして俺はエースと呼ばれるようになった。」

「……………」

「サジタリウスの矢」なんて呼ばれたが、敵対組織からは「ブラッディアロー」なんて呼ばれてたな。まあ、血塗られたこの手にはお似合いだな。」

コウスケは自嘲するように静かに笑った。

「二人の「綾波」。むなしいだけだ。このまま生きていてどうする？ そんな問いかけをする毎日だった。だが……………」

紅茶を一口

「夢で彼女に出会った。相当自分を追い詰めていたんだな。今考えると馬鹿げているとは思う。だが、彼女は透き通った笑顔だった。そして一つの約束をした。それを糧に今生きている。」

「約束って?」

「平和な未来を創る。それが俺の心の支えだ。」

「……………」

「……………惣流はあの時華麗なるテクニクと言ってたな。それは別にいい。生き残るにはプラスになるからな。だが、エースパイロットと呼ばれるようになった後のことをまるで考えていないようだったからな。俺の空白の期間となく被って見えたんだ。」

コウスケは煙草を取り出す。

「失礼するよ。」

火をつけて一服。

「……ゆつくり考えろ。使徒をすべて打ち滅ぼした時に自分に何が残るのか。」

「わかりました。」

「考える時間はあるはずだ。ゆつくり整理すればいい。」

「はい。」

「大学を出てると聞いたが、もう一度勉強しなおすのもいいかもな。」

「……」

「辛気臭い顔だな。若いんだからしやきつとしてろ。相談事があるなら聞いてやるか

ら。」

「はい。」

「……ああ、そうだ。これから俺のことはコウスケと呼んでくれ。綾波だともう一人の

「綾波」とかぶるからな。……これからよろしく。」

「わかったわ。コウスケさん。私もアスカでいいわ。よろしく。」

アスカは部屋を後にする。

「……そう。まだ死ねないんだ。」

コウスケは煙草を啜えたままじつと天井を見つめていた。

第12話 心と心

コウスケはリツコのいるモニタールームを目指していた。

今後の使徒戦で有効となりえる装備の確認のためだ。

部屋に入るとリツコ、ミサト、加持の3人がいた。

どうやら加持がリツコにちよっかい出してミサトが折檻しているようだった。

「・・・お楽しみのところすまないが」

「コウスケ君！」

「待ってたわ。綾波特務二尉。」

「これが新装備か？」

「ええ。NNミサイルよ。威力は地雷に比べれば劣るけど、戦艦くらいなら一発で落とせるわ。」

「それでも使徒の足止めにはかならないか。」

コウスケは市内では使えないなと考えた。

「・・・つとあんたは確か・・・」

コウスケは加持に顔を向けた。

「知らなくていいわ。こんなバカ。」

ミサトは吐き捨てるように言う。

「つれないな葛城。あんときは世話になったな。俺は加持リョウジ。今度本部の特殊監査部に転属になった。よろしく綾波特務二尉。」

「ああ、空母の・・・よろしく。」

（・・・食えない男だな。）

突如アラームが鳴り響く。

「使徒!」

「だな。」

コウスケたちは発令所に急いだ。

・・・

「こちら綾波。目標を肉眼で確認。」

「了解。現在EVA2機が湾岸にて待機中。」

「了解。」

待機しているのは初号機と式号機だ。

零号機は第五使徒との戦闘で大破し改装作業中だった。

だがコウスケが最後にはなった攻撃で致命的な損傷は避けられたらしく、あと二日も

あれば終わるそうだな。

(使徒は突然来るからな……)

使徒が来るたんびにスクランブルである。

(来る時期さえ分かればな……無理か。)

などと取り留めもないことを考えているうちに使徒はEVAが待機する地点に接近した。

「式号機が先行、初号機と綾波特務二尉は援護して。」

「了解。」

「わかったわ。」

「はい。」

「先に行くわね。」

式号機がソニックグレイブを持って、崩れたビルの上を飛んでいく。

初号機はパレットガンでけん制する。

コウスケも使徒の背後から強襲する。

着弾する弾と飛び出る青い血

(変だな。)

コウスケは違和感を感じた。

「もろすぎんる。」

その違和感を拭えきれないうちに式号機が使徒に飛び掛かった。

上段から振り落とされるソニックグレイブ

使徒は半分に裂けた。

「どう？ サードチルドレン。戦いは常に無駄なく美しくよ。」

アスカが誇らしげに言った。

だがコウスケは嫌な予感が体から離れなかった。

「・・・青葉二尉！ 使徒の反応は？」

「あつはい・・・」

青葉が言い終わる前に使徒は二つに分かれて復活した。

「何よこれ〜！」

「なんていんちき〜！」

通信機から聞こえてくるアスカとミサトの声（十何かが割れる音）

使徒が式号機に襲い掛かる。

よける式号機。

初号機もパレットガンで援護する。

着弾するが効果なし。

式号機もソニックグレイブで応戦するが、使徒の傷は瞬時にふさがる。

「ダメ！効果がない！」

「こつちもだ。まるで効かないよ。」

「・・・撤退よ。」

ミサトが悔しそうに命令する。

「嫌！」

「アスカ！」

「アスカ！撤退しろ。このままいてもやられるだけだ。」

コウスケは下唇を噛みながら言った。

「・・・わかったわ。」

「シンジ君も全力で逃げるんだ。」

「はい。」

「葛城。虎の子の使用許可を。」

「わかったわ。EVAの離脱と同時にお願い。」

「了解。」

EVAはアンビカルケーブルをパージし全力で後退した。

それを追う使徒。

だが使徒の動きは鈍かった。

コウスケはEVAが安全圏に離脱したのを確認した。

「少しの間眠ってもらうぞ。」

そう言つてコウスケは特殊兵装の発射装置に手をかけた。

愛機から飛び出る一本のミサイル

これは新装備のNNミサイルであつた。

・
・
・

「本日午前10時57分28秒目標は二手に分かれ活動再開。同58分15秒攻撃を再開するも効果は認められず。」

暗い部屋にはコウスケのほかにパイロット三人、伊吹、加持、冬月がいた。

モニターには使徒との戦闘写真が写っている。

伊吹二尉が淡々と解説をしている。

「これに対するE計画担当者のコメント。」

「無様ね。」

「好き勝手言ってるな。」

コウスケはリツコのコメントに対して憤りを感じながらつぶやいた。

「同59分30秒を持つてNERVは作戦遂行を断念。綾波特務二尉のNNミサイルに

より目標を攻撃。」

「また地図を書き直す事態には至らなかつたようだな。」

冬月は少し安心してしているようだ。

伊吹が続けて解説する。

「構成物質の28%の焼却に成功。」

「やったの？」

アスカが尋ねる。

「足止めにはすぎん。再度侵攻は時間の問題だよ。」

「まっ立て直しの時間を稼げただけでも儲けものつすよ。」

加持がおどけて言う。

すると冬月が立った。

「いいか君たち。君たちの仕事は何なのかわかるか？」

「EVAの操縦。」

アスカが当然のように言う。

「違う。使徒を倒すことだ。」

スクリーンには内部電源が切れ、活動停止したEVAを回収する写真が写っていた。

「こんな醜態をさらすために我々NERVは存在するのではない。」

使徒に負けたことが思ったよりも悔しかったようだ。

「くつくつくつ……」

部屋に笑い声が聞こえた。

「何かね。綾波特務二尉。」

冬月が睨めつけるようにコウスケを見た。

「失礼。子供たちが命がけで戦っているときに副司令は何をなさっていたのかと思いますし。」

「何が言いたい。」

「俺と子供たちが戦ってる時に副司令は発令所でただ見ているだけ……そんな指揮官を幾度となく見てきたのでね。」

「……もういい。」

冬月は逃げるように去って行った。

「どうしてみんなすぐに怒るの?」

「大人はさ、恥をかきたくないのさ。」

アスカに対してフォローする加持。

「あの、ミサトさんは?」

作戦部長たるミサトがここにいないのを不思議に思うシンジ。

「責任者はとるべき責務を果たしているよ。」

「と言ひ書類の山に埋もれるミサトを想像するコウスケ。」

「ともかく作戦が決まらないと何にもならないな。というわけで解散。お疲れ二人とも。」

・・・

「葛城。反省会が・・・こりやすごいな・・・」

「ミサトの執務室に訪れたコウスケは机の上に置かれた書類の山を見て驚いた。

中にはリツコもいた。

「関係各省からの抗議文と被害報告書。広報部からの苦情もあるわよ。」

「ふくん。」

「ちゃんと目に通しておいてね。」

「読まなくてもわかってるわよ。喧嘩するならここでやれっつんでしょ。」

「今回は打つ手がなかったからな。」

「うっさいわね〜」

「ミサトはたまつたもんじゃないと言いたげだ。」

「使徒は私が必ず倒すわ。」

「コウスケは妙な引っかかりを感じた。」

「私が？」

「そう。」

「・・・」

「なによ。」

「・・・別に。」

コウスケは妙な感触がなぜか離れなかった。

「副司令はカンカンだったわよ。」

リツコが遮るように言った。

「わかってるわよ。・・・碓司令がいない時でよかったわ。」

「司令が居たらクビね。これを見るまでもなく。」

「そうだな。」

「・・・で私のクビをつなげるアイデアを持ってきてくれたんでしょ。」

「一つだけね。」

リツコは一つのUSBメモリーを取り出した。

「さつすが赤木リツコ博士。やっぱり持つべきものは心優しき旧友ね。」

ミサトがメモリーを取ろうとする。

「残念ながら旧友のクビを救うのは私じゃないわ。」

リツコがミサトにメモリーを見せる。

「加持君よ。」

途端にミサトの顔が変わるが、何かを慈しむような目になった。

(ふーん。葛城がね・・・)

などと野暮つたいことを考えるコウスケであった。

・・・

「なるほど。二点同時の荷重攻撃か。」

コウスケとミサトは加持がくれた案を検討していた。

ちなみに書類は一枚も減っていない。

「これなら行けるわね。」

「確かに。」

「となると誰をペアにしようかしら。って決まってるわね。」

「誰にするんだ？」

「シンちゃんとアスカ。」

「・・・」

「どうしたのよ。」

「レイは？」

「レイはまだ動けないじゃない。」

「はあく」

「何よ。」

「零号機は二日もすれば直るぞ。」

「そうだったけ。」

「そうだ。」

「じゃあ、援護に回せばいいじゃない。」

「・・・」

「コウスケ君はどうなの？」

「俺はレイとシンジ君だと思うな。」

「なんで？アスカのほうが成績いいじゃない。」

「だからだ。」

「？」

「シンクロー率を見てもアスカのほうがいい。だがほかの二人は似たり寄ったりだ。シンクロー率はEVAの機動性にも関わってくるんだらう？」

「うん。」

「だったらアスカには攪乱に回ってもらった方がいいだろう。戦闘機と爆撃機を無理に

「組ませない方がいい。」

「なるほど。でも・・・」

「なんだ？心配事か？」

「アスカは納得するかしら。」

「俺に任せろ。」

「自信があるみたいね。」

「まあな。ただ、ほんとに説得が必要な時だけだぞ。」

「わかった。その時は任せるわ。」

「任せられました。」

・・・

「というわけなのよ。」

ミサトが今回の作戦の説明をした。

今パイロット三人とコウスケ、ミサトはNERV所有のマンションにいた。

コンフォート17より広い。

「ええ。なんで私がメインじゃないの。」

「アスカは二人よりも素早く動けるからよ。」

「だったら・・・」

「これは命令よ。」

(はあく。もつと言い方があるだろう。)

コウスケはため息をついた。

「とにかくこれから使徒が再侵攻するまで、ここで三人には過ごしてもらおうわ。」

レイは異論がないようだ。

シンジは戸惑っている。

アスカは膨れている。

「それとこれもやってもらおうわ。」

所謂ツイスターゲームというやつだった。

「これで完璧なユニゾンを目指すのよ。」

ミサトは大張り切りだった。

・
・
・

ユニゾン訓練が始まって四日

三人は同じ服を着て訓練をしていた。

が、いまだに訓練の成果は出ない。

コウスケがコンビニから帰るとドアの前にシンジのクラスメート三人がいた。

すると

「不潔よ〜！」

一人の少女―洞木ヒカリの叫び声が聞こえた。

(これ、対テロ兵器に使えないかな。)

などと、とある料理を食べたことと同じことを考えていた。

「取りあえず上がったらどうだ。」

コウスケは事態を收拾すべく三人を部屋に招いた。

・・・

「それでどうなんですか？」

洞木が尋ねる。

が訓練の様子を見て三人とも落胆した。

シンジとレイはいい感じに仕上がっていた。

だがアスカが加わると一人でペースを上げるのだ。

それにレイがついていくが、シンジが追い付かない。

それに気づくレイが今度はシンジに合わせようとしてミスが出る。

その繰り返しだった。

「もうやってらんない！」

アスカが怒鳴る。

「もう時間がないんだがな。」

「こんな奴らに私が合わせるのが無理なのよ。」

「はあ〜」

もはやため息しか出ない。

「・・・コウスケ君。」

「なんだ？葛城。」

「できる?」

「・・・わかった。」

コウスケはミサトの意図を正確に把握した。

「アスカ。代われ。」

コウスケはアスカからヘッドホンを受け取った。

「いいか二人とも。俺に合わせようとするな。俺を感じる。」

「はい?」

シンジはいまいちわかっていないようだった。

「・・・はい」

レイも同じようだった。

「EVAとシンクロするようなものだ。・・・行くぞ。」

コウスケに変わりユニゾン訓練を開始した。
最初はいまいち揃わなかったが

(この感じは・・・シンジ君か・・・)

いつの間にかシンジとコウスケの動きが重なる。

(ん?・・・これは・・・レイか)

それにつられるようにレイが合わさる。

三人がびったりと合わさる。

「・・・少しペースを上げるぞ。」

コウスケがペースを上げる。

二人は戸惑うもコウスケに合わさった。

息をのむ傍観者たち

「・・・これは式号機じゃなくてコウスケ君をサポートに出した方がいいかな？」

ミサトが挑発するかのように言った。

途端にアスカの顔が屈辱にまみれる。

「もういいー！」

アスカは外に飛び出した。

「あっちゃー！」

ミサトが失敗したという顔になった。

「アスカさん！」

洞木が止めるも間に合わない。

「いゝかゝりゝくゝん」

洞木はなかなか恐ろしい表情だった。

「追いかけて！」

シンジがわけもわからず追いかけてようとする。

「待て。」

コウスケがとめた。

「シンジ君が追いかける理由がない。」

「え．．．でも。」

「俺が行く。二人は休んどけ。」

コウスケはミサトにアイコンタクトを送りアスカを追いかけた。

．．．

コウスケは第三新東京市を一望できる公園に行った。

そこにはアスカが呆然と景色を眺めていた。

「アスカ。」

「・・・」

「横に座るぞ。」

コウスケはアスカの横に腰かけた。

「今回の役に相当不満なんだな。」

「・・・あたり前でしょ。」

「この作戦で式号機をサポートに回したのは俺だ。」

アスカは驚いている。

「どうして！私が一番うまく操縦でいるでしょ！」

「だからだ。」

アスカは納得できないようだ。

「確かにアスカはよく動ける。先日の戦闘でそれはわかった。」

「なら！」

「最後まで聞け！」

「・・・」

「よく動けるが、ほかの二人がダメなんだ。シンジ君は素人、レイは戦闘訓練をアスカと同じくらい受けてはいるがシンクロ率が低い。いわば自動車と自転車なんだ。」

「それって・・・」

「そう。無理に自動車が自転車に合わせれば遅くなる。なら最初から自転車同士で走ったほうが数倍いい。」

「・・・」

「それにこの訓練は動きを合わせるんじゃない。なぜ俺とあの二人が合わせられたかわかるか？」

アスカは何となく感じ取ったようだ。

「そう。心だ。俺とレイとシンジ君、互いが心を合わせようとしたからだ。」

「だから俺を感じろと言ったの？」

「そうだ。メインはあの二人だがサポートする人が合わせられなきゃどこかで躓く。」

「・・・」

「この作戦は三人が揃って初めて成功するものなんだ。誰か一人が良ければいいというものじゃない。」

「・・・そうね。」

「それにこだわりすぎだ。」

「何に？」

「一人でやらなきゃいけないことに。」

「・・・そう、やらなきゃいけないのよ。」

「そんなことはない。現にお前一人でEVAを起動できるか？修理は？発進は？」
「……」

「そう、人ひとりでは何もできん。エースと呼ばれた俺も周りに手伝ってくれる人がいたからこそなんだ。」

アスカは考え込んでいる。

「……似てるな。三人とも。」

「誰が？」

「アスカとレイとシンジ君だ。」

「？」

「アスカは自分を見てほしい。だから「一人」にこだわる。シンジ君も誰かに必要としてもらいたい。だからEVAに乗る。」

「……ファーストは？」

「レイも同じだ。EVAがなきや存在する意味がないと考えてるんだろう。そんなこと無いのにな。」

（EVAに乗れる条件か……）

「……」

「俺の価値は戦闘機乗りということだけか？」

「そんなことはないわ。」

「だろう？ わかったな。」

「ごめん。ありがとう。」

「ならない。まあ、焦ることはない。ゆっくり考えてみる。．．．ほら二人も来たぞ。」

後ろからレイとシンジが来ていた。

「惣流さん。」

「．．．式号機パイロット。」

「サード、ファースト。．．．よし。やるわよ！ ミサトに受けた屈辱を10倍にして返すわよ！」

ベンチの上でアスカが仁王立ちする。

「フフツ」

(そういうところは美点だな。)

コウスケは思わず笑みがこぼれる。

「あたしのことはアスカでいいわ！ あたしもシンジとレイって呼ぶから。」

シンジとレイはきよんととしていたが、優しく微笑んだ。

「おっ。レイが笑ってる。」

レイの笑顔を見るのは初めてであるコウスケは感心していた。

「それとコウスケもやるのよ！」

「ん?!俺！」

「そうよ。あの二人が出来てあたしが出来ないなんて悔しいじゃない！」

「・・・」

「何よ。」

「そうだな。今日から俺も混じるとするか。」

コウスケは微笑んでいたが

「・・・ん?ということは、俺もそれを着るのか?」

コウスケは嫌な予感がした。

「当たり前じゃない！」

「そうなりますね。」

「・・・一人だけ違うのは訓練になりません。」

見事に的中。

「・・・・・・・・・・そうだよな〜・・・・はあ〜。」

(言わなきやよかった・・・)

ミサトの嬉しそうな顔が浮かんで意気消沈する。

「墓穴を掘ったか・・・まつやるか！」

そういつてコウスケは三人とともに帰って行った。

・
・
・

あれからコウスケを交えて訓練が再開された。

訓練中心が合わさるのが心地いいのか、四人とも満足のいく結果になった。そして使徒再度侵攻日。

使徒を真つ二つに裂いたあと、うまく立ち回りサポートする式号機

息を合わせて使徒に攻撃する初号機と零号機

三機とも使徒に隙を見せず翻弄していた。

ミサトの号令とともに起動する兵装ビル。

爆音とともに煙で視界を遮られる使徒。

式号機の蹴りで再び合体する使徒。

空に高く飛び同時にキックを繰り出す初号機と零号機。

コウスケは発令所で一部始終を見ていた。

キックで割れていく使徒のコア

途端に爆発が起きた。

「バッテリー消滅。」

青葉が報告する。

「お疲れ様。三人とも。」

ミサトがねぎらうが返事がない。

「?どうしたの?」

「三人とも寝ています。」

伊吹が報告する。

零号機と初号機は仰向けで、式号機は直立不動のまま動いてなかった。

「疲れたのね。・・・EVAの回収急いで。」

「・・・葛城。すまん。俺も仮眠をとる。」

「あの三人に付き合っていたものね。わかったわ。」

「すまん。」

(三人ともよくやった。)

コウスケは心でそっくりい伝え仮眠室に向かった。

第13話 平和な日々

ユニゾン作戦の後あとアスカはミサトに引き取られた。

レイも元のマンションに戻って行った。

それから既にひと月がたとうとしていた。

・
・
・

コウスケは自分の執務室にいた。

使徒が来なければ日々平穏であるNERVでも、書類の決裁という形式ばかりだが、重要な仕事はほぼ毎日あるのだ。

装備の点検、兵装ビルの修理と設置、愛機のチェック、防衛計画の草案などなど忙しい毎日である。

無論一つ一つの確認を怠らない。

怠れば使徒との戦闘で有利になることなどないからだ。

と言っても通常兵器でできることなど限られているが・・・

デスクワークは苦手ではないものの長い間椅子の上というのは疲れるものだ。

「もう昼時か・・・」

コウスケは気分転換もかねて上の街―第三新東京市にすることにした。

・
・
・

「……どこにしようかな。」

街に出たものの何を食べようか迷うコウスケであった。

コウスケには行きつけの店がない。

ただその時の気分で店を選ぶだけなのだ。

すると前に見覚えのある二人が見えた。

「よう。アスカに加持じゃないか。」

「あっコウスケ。」

「よう。綾波。」

「何だ？デートか？」

「そうよ。」

「んにゃ。ただの買い物さ。」

「……お前がたらしつてのはほんとなんだな。」

「おいおい、人聞きが悪いな。」

「そうよ！加持さんはそんなじゃないわ。」

「はいはい。」

横では加持が乾いた笑いを見せていた。

取りあえずコウスケは話題を変えることにした。

「そーいや、何を買に行くんだけ？」

「水着よ。」

「水着？」

「今度の修学旅行で使うのよ。」

「修学旅行か……」

コウスケは苦い顔になる。

「コウスケも行ったんでしょ？」

「いや、俺たちにはそんなもん無かったよ。なあ加持。」

「そうだな。セカンドインパクトがあつてそれどころじゃなかったからな。」

加持も何かを思い出しているようだ。

「なんにせよお邪魔して悪いな。もう行くよ。」

「じゃあね。コウスケ。」

「またな綾波。」

コウスケは二人と別れた。

「……修学旅行か。青春だね……」

などつつぶやっていた。

・
・
・

翌日

コウスケは発令所にいた。

「浅間山の観測データは可及的、速やかにBaltasarからMelchiorに提出してください。」

MAGIの淡々とした声が響く。

オペレータ席にはちゃんと三人が座っている。

伊吹は何かの文庫本を読んでいる。おそらくは恋愛ものだろう。

日向は漫画を読んでいた。時折笑い声が聞こえる。

青葉はエアーでギターを弾いていた。鼻歌も聞こえる。デスクにはギターの本が置いてあった。

対使徒戦を任される場所としてはいささか頼りなく見えるが、休みなど有って無いNERVではささやかな休憩時間くらいは自由を満喫できるのだ。

「修学旅行? こんな時世に暢気なものね。」

リツコは何かの資料を読んでいた。おそらくは新装備に関することだろう。

「(こんな)時世だからこそ、遊べるときに遊びたいのよ。あの子たち。」

「だろうな。何といてもまだ子供だしな。」

「そうね。」

「その子たちは今、どこにいるんだ？」

「NERVのプールにいるわよ。」

「・・・葛城も大変だな。」

修学旅行に行けない代わりにプールを開放するために奔走したミサトの苦労がコウスケには伝わった。

「こういう時くらいは羽を伸ばしてもらいたいわ。」

「プールか・・・」

「どうしたの？」

「いや、最近泳いでないからな。」

「なら、行って来れば？ どうせ暇だし。」

「そうするか。ついでに監視もするか。」

そういつてコウスケはプールへと向かった。

・・・

「へ〜以外ね。」

アスカが感心したように言った。アスカはビキニタイプの赤と白の縦しま模様の水

着を着てた。

「まあな。海の上で撃墜されて溺れたなんてみつともないからな。訓練で泳ぎの練習は必死にやったよ。」

コウスケは重い装備のせいで何度も溺れかけたことを思い出しながら言った。

プールサイドを見ると制服姿のシンジがいた。

「シンジ君は泳がないのか？」

「ほんつと、つまらない奴。プールに来たのにお勉強なんかしてるわ。」

「レイは？」

「レイならあそこよ。」

と言ってプールを指していた。

レイはプールの中をすいすい泳いでいた。昔のスクール水着を白くしたような水着を着ていた。

「水の中が好きなんだろうな。．．以外と無駄な動きが無いな。」

などと感心したコウスケはシンジのところまで行った。

「何してるんだ？」

「理科の勉強です。」

「たく、お利口さんなんだから。」

アスカが茶化すように言った。

「そんなこと言ったってやらなきゃいけないんだから……」

途端にシンジの顔が赤くなった。

「……初々しいな。」

「どれどれ何やってんの？ちよつと見せて。」

アスカがPCのモニターを覗いた。

シンジは心なしか鼻の下が少し伸びている。

何気にこつちを見るレイが怖い。

「こんな数式も解けないの？……はい、できた。」

シンジは気を取り直したようだ。

「こんな難しい数式は解けるのに、何で試験は悪いの？」

「なんて書いてあるかわからないのよね。向こうの大学では漢字なんて習わなかったし。」

「大学？」

「そうだ。シンジ君。アスカは大学を出てるんだぞ。」

「ウスケが補足する。」

「へっ？」

「それにレイも本部で勉強しているからな。知識なら大学並だろう。」

何といつても人類の最新技術が駆使されている所だ。

専門分野のエキスパートたちに学べば超一流になれるだろう。

ちなみにコウスケは並である。

「綾波も？」

「勉強を教わるなら二人から教えてもらえばいい。」

「そうなんだ・・・」

「別に気を落とす必要はないよ。シンジ君だつてちゃんとやればできるはずさ。」

「・・・そうですよね。」

「ところでシンジ君・・・なぜ君は泳がないのかな？」

「え・・・いや、宿題がありますし・・・」

「こんな時に遊ばないなんてもつたいない。」

「そうよ。シンジ。」

アスカも同調した。

「いや・・・その・・・」

(泳げないんだな・・・)

「まあ、シンジ君がそれでいいなら別に構わんが。」

「・・・はい。」

シンジはほっとして、宿題に取り掛かった。

そんなシンジを見てコウスケはニヤリと笑った。

「アスカ、レイ。」

コウスケはシンジから離れて二人を呼んだ。

「いいか?・・・」

コウスケはシンジに聞こえないように二人に言う。

「いいな?」

「はい。」

「わかったわ。」

「よし、作戦開始。」

コウスケは再びニヤリと笑った。

レイがシンジに近づいていた。

「碇君。」

「なに?あやな・・・」

シンジはレイの水着姿を見てまたもや赤くなっている。

「なぜ泳がないの?」

「いや・・・宿題が・・・」

「それは家でもできるわ。」

「いや・・・その・・・」

「一緒に泳いでくれないの？」

心なしかレイの目がうるんでるように見える。

(・・・あれは反則だな。意外とやり手か？・・・いや無意識だな。)

コウスケはそう分析した。

「あの・・・」

シンジの脳内はすでにショートしていた。

「あの目は予定外だが・・・いけるな・・・よし第二段階だ。」

「わかったわ。」

アスカもシンジに近づいた。

「そうよ。レイの言うことに一理あるわ。」

「アスカまで・・・」

完全にシンジは固まっている。

「意外と最初の一発が効いてるか。行けるな・・・最終段階スタート。」

コウスケはシンジの背後にひっそりと近づいた。

「一緒に行きましよう。」

「あんたも来なさいよ。」

「えっ……いや……」

徐々にシンジに近づくと二人。

シンジは二人に気を取られている。

純情なる少年だ。美少女しかも水着姿の二人に迫られて動けるわけない。

「とうわけだ。シンジ君。行くぞ。」

シンジの真後ろに来ていたコウスケが声をかける。

「え？」

シンジはコウスケに持ち上げられた。

そのままプールにダイブするコウスケ。

「うわああああ。」

シンジの情けない声が響く。

どぼん！

アスカは笑っている。

レイは心配そうな表情だった。

「ひどいですよ。コウスケさん！」

「ははは、すまん。後日何かおごってやるから。」
「もう！」

「泳げないと思っていたが、そうでもないんだな。」
「へっ？」

シンジは自分が浮かんでいることに気付いたようだ。

「浮かんでる。」

「初めてか？」

「はい。」

「EVAの訓練をするうちに無意識で出来るようになったんだろう。なら、泳げるようになるな。」

「碇君。」

いつの間にかレイが近くにいた。

「ごめんなさい。」

「いいよ。綾波。」

「でも……」

堂々巡りになりそうだったのでコウスケは介入することにした。

「じゃあ、レイがシンジ君に泳ぎを教えるっていうのでどうだ？・なあシンジ君。」

「へっ?」

「レイじゃダメなのか。」

「そう・・・ダメなのね・・・」

心なしかレイの周りが暗い。

「ダメってことはないよ。でも・・・その・・・」

後半は小さくてよく聞こえなかった。

「いいじゃない。素直に教えてもらいなさいよ。」

「はい、決まりだな。じゃあシンジ君は着替えて来い。」

「・・・はい。」

そういつてシンジは着替えに行った。

その後シンジはレイに泳ぎを教えてもらい普通に泳げるようになっていた。

レイは何となく嬉しそうだった。

アスカも修学旅行でできなかったことを一通りできて満足していた。

コウスケは訓練が終わるとプールサイドの監視員よろしく三人を見守っていた。

・・・

コウスケは呼び出されていた。

向かう先は総司令執務室である。

「綾波特務二尉参りました。」

ドアが開く。

中は変わらず暗い部屋だった。

「綾波特務二尉。浅間山で使徒が発見されたのは知っているな？」

冬月が尋ねる。

「はい。」

「それで現場で指揮を執る葛城一尉がA—17を要請してきた。」

「A—17ですか？」

A—17とはこちらから打って出るための特別処置だ。

ただ、そこには日本中の現資産の凍結が含まれている。

「大事ですな。」

「だから君に意見を聞きたいのだ。」

A—17が発令されれば日本の経済は大打撃を被る。

それだけにNERV首脳部が慎重になっているのだろう。

「私はA—17発令には反対ですな。」

「なぜかね？」

「あまり利益が無いからです。無駄に恨みを進んで買うことはないでしょう。」

(それにそれだけで何万人のも餓死者が出る。・・・特に子供が・・・)

コウスケは続けた。

「使徒はいまだに幼体、ということとは十分に自己防衛ができないものと考えられます。ならば成体になる前に殲滅がよろしいかと。」

「ならば捕獲も可能では無いかね?」

「捕獲も可能でしょう。しかし捕獲後ここに輸送中に孵化すれば迎撃に時間がかかりま
すし、何よりここにきて孵化した場合最悪の結果が待っているでしょう。ならば殲滅し
た方がいいと考えます。」

だがこの時使徒が未知の生命体であることにコウスケの考えが及んだ。

「使徒のサンプルにちようどよいと考えるが・・・」

「今の使徒は幼体との判断ですが、もしかしたら擬態なんてこともあり得ます。」

「擬態か。」

「はい。その可能性があるならばやはり殲滅がいいでしょう。」

冬月とコウスケのやり取りを聞いていただけのゲンドウが口を開いた。

「よかろう。A-17は発令しない。」

「碇!」

「使徒は殲滅せよ。」

「はい。」

「では下がりましたまえ。」

コウスケは敬礼をして出ていった。

「いいのか？ 貴重なサンプルになりえるものを・・・」

「綾波特務二尉が言ったことは可能性の一つだ。」

「ならば・・・」

「だからこそ万全を期せねばなるまい。」

「・・・そうだな。わかった。」

・・・

「で、結局A―17は撤回、使徒は殲滅するわけね。」

「ああ、上層部でそう判断した。」

「うまくいけば貴重なサンプルになるのに。」

「賭けにしてはリスクが大きすぎるな。」

浅間山の研究所にはコウスケ、ミサト、リツコとオペレーターがいた。

「まあいいわ。碇司令がそう判断したなら。」

ミサトは使徒の殲滅に意欲を見せた。

「で、どうやって殲滅する？ コウスケ君ならどうする？」

「俺なら冷却剤を交えた爆弾で一発だな。」

「EVAは？」

「万が一のために待機つてところだな。」

「ちなみになぜ冷却剤なの？」

「マグマの中に使徒はいるんだろう？なら急激に冷やしてやれば自滅するんじゃないかな？」

「なるほどね・・・」

ミサトは考え込む。

「リツコ。うちにそういうものある？」

「確か・・・綾波特務二尉の機体用に一発あるはずよ。」

「なら確定ね。」

「すぐに取り寄せるわ。」

「じゃ、コウスケ君。後はお願いな。」

「ああ。」

・・・

使徒はコウスケの放つ冷却機雷により自滅した。

浅間山の火山活動に若干影響を及ぼしたものの、問題なしとの報告が入った。

・
・
・

「今日は楽でよかった。」

コウスケたちは浅間山近くの温泉に来ていた。

太陽は西に沈みかけていた。

「そうですね。」

EVAに乗って待機していたシンジが答えた。

EVAは全機出撃でアスカやレイも当然来ていた。

近くには一羽のペンギンがいた。

ミサトの家にいるペンペンである。

ペンペンは温泉を気持ちよさそうに泳いでいる。

「やっぱり温泉はいいな。」

「ええ、風呂がこんなに気持ちいいなんて知りませんでした。」

「また来たいな。」

「そうですね。」

反対側から声が聞こえてきた。

「葛城たちも来たな。」

「ええ。」

すると反対側から呼び声がした。ミサトだ。

「シンジ君。聞こえる?」

「はい!」

声が上がっていた。

「ボディーシャンプー投げてくれる?」

「持ってきたの無くなっちゃった。」

「うん。」

シンジはボディーシャンプーを持って塀の近くにより反対側に投げた。

「いたっ! バカね、どこに投げてるのよ下手くそ!」

「ごめん。」

「変なところにあてないでよね。」

「どれどれ?」

途端に危ない雰囲気になった。どういふことが起こっているのかはご想像に任せるしかない。

「アスカの肌ってぶくぶくしてて気持ちいい」

「・・・おやじか? あいつは・・・」

シンジは少し赤くなっていた。

しばらくミサトとアスカのやり取りが続いた。

「そんなこと言ったらレイだつて……」

ミサトの矛先がレイに向いたようだ。

「確かに……えい！」

「!!!」

「あたしも！」

「!!! いやっ……助けて碓君！」

思わずシンジに助けを求めたようだ。

「……ごめん……綾波ごめん……」

と言いつつ真つ赤になりながら温泉でブクブクしていた。

「……後で慰めてやれよ。葛城！アスカ！いい加減にしてやれ！」

と外からフォローするコウスケ

「……まあ、平和だね。」

こんな日々が続けばいいと願わずにはいられないコウスケだった。

第14話 人の敵は

NERVの休憩室

そこは当然NERV職員が休むためのものであり、自動販売機、ベンチ、トイレ、そして喫煙所がある。

「喫煙所の番人」ことコウスケはいつものことながら煙草を吸っていた。

そこに一人の男が現れた。

加持リョウジである。

彼も喫煙者の一人であった。

「よう、加持。お前も休憩か？」

「ああ。」

「ちようどよかった。加持に聞きたいことがあったんだ。」

「なんだ？」

「……じゃちよつとな……」

加持は真剣にコウスケを見つめた。

「……わかった。吸い終わったら俺の部屋に行こう。」

「で、俺に何の用だ？綾波。」

「ここは大丈夫か？」

「目」と「耳」のことだ。

「ああ、その点は安心してくれ。」

「・・・わかった。」

「で、何の用だ？」

「何、お前さんと取引がしたいと思ってな。」

「何の？」

加持は不思議そうにコウスケを見ていたが目が真剣そのものだった。

「ここについていろいろ調べているだろう？」

「なんのことだ？」

とぼける加持

「とぼけるなよ。日本政府内務省の加持リョウジさん。」

「・・・ばれてたか。」

「これでも国連軍にいたんだぞ。」

「さすがはエースってやつか。」

「同じ名前なんてうかつすぎだろう。」

「これはこれで意外とばれないもんなんだ。まさか同じ名前で来るとは思わないだろう。」

「それもそうだな。」

「・・・で？」

「・・・本題に入るか。」

「コウスケは煙草を取り出した。」

「別にいいだろう？」

「ああ。」

「加持も煙草を取り出す。」

「・・・お前さんNERVについていろいろ調べているだろう？」

「まあな。」

「ならあるよな？カード。」

「・・・」

「一枚くれ。できるだけ権限が高いやつ。」

「それだけでいいのか？」

「ああ。」

「わかった。」

加持はカードを一枚取り出す。

「まだ使つてない奴だ。」

「感謝する。」

「なら一つ頼まれてくれるか？」

「いいぞ。」

「近々俺はNERVの電源を止める。」

「・・・つらいな。コウモリは。」

「まあな。で、その時戦自の特殊作業員を数名ここに案内するんだが・・・」

「わかった。子供たちだろう？」

「ああ、戦自はプロだからな。もし停電中にチルドレンに遭遇したらどうなるかわから

ない。子供たちには危害を加えたくないからな。」

コウスケにはそれが本心だと思った。

「わかった。・・・もし遭遇したら？」

「処理しても構わない。」

「・・・取引成立だな。今後よろしく頼むよ。」

「ああ。」

・
・
・

加持が工作を行う日

コウスケは第三新東京市に出ていた。

その目的はチルドレンの保護だ。

NERV本部の停電中にチルドレンに何か有れば誰も助けに来れないし、何より加持との取引もあつた。

「よう。」

「こんにちは、コウスケ。」

「こんにちは、コウスケさん。」

「・・・こんにちは。」

アスカ、シンジ、レイが挨拶を返す。

「今から本部に行くのか?」

「ええ、そうよ。」

「なら俺も一緒に行こう。」

もちろんコウスケは三人が来るのを待っていたのである。

「ん?シンジ君。浮かない顔だな。」

「ええ、ちよつと・・・」

「どうした？」

「・・・実は今度進路相談があることを・・・父さんに伝えたんです。」

「ほく。シンジ君。一步踏み出したな。」

「なんですけど・・・突然切れて・・・」

「切れた？」

「はい。」

「碓司令、本当に忙しかっただけだと言ってるんだけどね。」

アスカが言う。

「でも、なんか変な感じだったんだ。」

「変？」

（まさか・・・加持、もうやらかしたのか・・・）

コウスケは信号を見た。

信号は色が消えていた。

（おいおい、やり過ぎだろう。）

などとコウスケは加持を批判した。

「・・・ただ事じゃないな。」

「どうしたんですか？」

シンジが尋ねる。

「・・・電気。」

レイは気づいたようだ。

「へ？」

「・・・そういえばモニターも信号もついてないわね。」

アスカも気づいたようだ。

「・・・ほんとだ。」

「本部が心配だな。」

「ええ。」

「少し急ぐぞ。三人とも。」

コウスケと三人は駆け足でNERV本部に向かった。

・・・

「やはりダメか・・・」

コウスケたちはいつものゲートの前にいた。

ゲートは完全に沈黙していてカードを通してウンともスンとも言わなかった。

「中に入れませぬね。」

「・・・連絡は取れたか？」

「ダメ。有線も切れてるわ。」

「非常用端末もダメです。」

（本格的にやってくれたな。加持。）

するとレイは鞆の中を探し出した。

アスカも何かに気が付いたように探し出す。

「ねえ、何してるの？」

シンジがアスカの鞆の中を覗こうとする。

「あんたバカ？緊急時のマニユアルよ。」

「・・・とにかく本部に急ぎましょう。」

「レイの言うとおりだな。」

そう言つてコウスケたちは非常用出入口に向かった。

・・・

「コウスケつてすごいわね。いつの間に覚えたの？」

コウスケを先頭にアスカ、シンジ、レイの順番で歩いていく。

「撃墜されてジャングルを彷徨うなんてこともあると思つて、訓練で方向感覚を養つたんだ。」

「意外と努力家なのね。」

「まあな。」

歩いていくとゲートが閉じていた。

手動では動かないようだ。

「行き止まりか。」

「・・・仕方ないわ。ダクトを壊して進みましょう。」

レイは近くにあった鉄パイプを手にした。

「・・・レイって偽善者ね。目的のためなら手段を選ばないタイプだわ。」

「みたいだな。シンジ君が浮気したら大変な目にあいそうだ。」

「かもね。」

「浮気ってそんな・・・」

「冗談だよ。」

「もう!」

「レイ。そんなことする必要はない。」

「?」

「これがある。」

「ウスケはC4を取り出した。」

「なんでそんなもの持ってんの?」

「非常時のためさ。」

そういつてゲートにC4を設置した。

「三人ともあそこの陰に隠れる。」

全員が隠れたのを確認し起爆する。

爆音とともに破壊されるゲート

「いいの？」

「非常時だ。始末書くらいで何とかなるだろう。」

そう言つてコウスケは足を進める。

・・・

「そういや、お前たち。使徒との戦いが終わつたらどうするんだ？」

コウスケは前々から思つていたことを三人に聞いてみた。

「戦いが終わつたらつて・・・」

「使徒とて無限に来るわけではないだろう。」

「・・・考えてないわね。」

「僕も・・・」

「・・・」

「はあく。14歳の若者がそんなんでどうする。やりたいことか無いのか？」

「「……」」

三人は黙ってしまった。

「……まあ、今はやることがあるからな。でも将来のこととかちやんと考えないとダメだぞ。」

「将来か……」

シンジがつぶやく。

「そうだ。それに希望、夢を持てば俄然とやる気が起きるってもんだ。そしてそういうやつほどしぶとく生き残るもんだ。」

「……そうね。」

アスカが同意した。

「ほら、レイはどうだ？」

「ありません。」

「即答だな。まあ、今は中学生だしゆっくり考えればいいさ。」

「……」

「なんか言いづらそうだな。」

「何でもありません。」

「そうか。」

(何か思い悩んでるように見えるが・・・)

「まあ、何か相談事でもあれば気軽に聞いてくれ。」

そういつてコウスケは足を進めた。

地下に潜れば潜るほど明かりが無くなってきた。

三人―特にシンジは歩きづらそうにしていたが、目が慣れてきたようだった。

「ん？」

「・・・声」

レイにも聞こえていたようだ。

「だな。」

遠くから日向の声が聞こえてきた。

「・・・現在、使徒接近中！」

「こんな時に使徒か・・・」

「大変だ。」

「とにかく急ぎましょう。」

「そうね。」

「よし、行くぞ。」

・・・

四人は着実に発令所へと進んでいた。

「?.....!」

コウスケは嫌な予感がした。

「三人ともその陰に隠れろ!」

そう言つてコウスケは三人を守るように影へと移動させた。

途端に聞こえる銃声。

「ぐっ……」

右肩に痛みを感じるがこらえる。

「……大丈夫か?三人とも。」

「はい。」

「ええ。」

「問題ありません。」

「そうか、よかつた。」

「今のは何なんですか?」

「多分ここの発電システムを破壊した奴らだろう。……おそらくは戦自だな。」

(……既に何人かやられてるか。)

「戦自が?」

アスカが驚いていた。

「こんな暗い場所で正確な射撃……どう見てもプロだ……そんな奴らは、ここ日本では戦自だけだろう。」

（まあ、加持にあらかじめ聞いていたからな。）

時々銃声が聞こえる。威嚇射撃で炙り出すつもりなのだろう。

「なんで……」

シンジは理解ができないようだった。

「NERVは強権でやりたい放題やったからな……恨んでるやつはいっぱいということだろう。」

事実戦自のみならず国連軍もNERVを金食い虫と罵っていたのをコウスケは聞いていた。

「……」

またも数発撃ち込まれる。壁に跡がついていく。

「それよりここを何とか突破しないとな……下手したらお前らが危ない。」

「へ？」

「チルドレン……それだけで価値があるんだ。他人から見たらな。」

「……」

「一番危ないのはシンジ君、次にレイ、それでアスカだな。」

「なんで僕が？」

「碓司令の息子だし、何より戦闘訓練を一番受けてないからな。」

「なんであたしよりレイが危ないのよ。」

「レイは見た目でアルビノとわかる。．．．つまり体が弱いと判断されるからだ。それにファーストチルドレンだからな．．．NERV本部の情報をいろいろ知っていると考えられるだろう。」

「なるほどね。」

「．．．どうするんですか？」

レイがコウスケに尋ねる。

「なに、相手も同じ人だ。人には悪い癖がある。」

「[?」

三人ともわからないようだ。

「まあ、見てろ。三人とも目を閉じていろ。」

銃声が止むタイミングを計らい、コウスケは丸いものを取り出し、相手がいるだろう方向に投げた。

途端に強烈な光が襲う。

「フラツシユグレネード」

アスカが正確に言い当てる。

「そうだ。」

「でもなんで？」

「相手はプロだろう。ということとはここが暗くなるのは当然織り込み済みだろうから、そのための装備を使うだろう。」

「・・・ああ、なるほど。」

アスカは理解したようだ。

「どういうことですか？」

シンジはいまいちわからないようだ。

「・・・暗くても見えるようにするものがあるということですね。」

レイが補足する。

「そうだ。人は便利な道具に頼りすぎるからな。そんな装置を使ってさっきの光を見れば、まあ網膜が焼けるかな？」

「動けないのは確かだね。」

「・・・」

シンジは俯いている。

「シンジ君。言いたいことはわかるが、下手したらこっちがやられていた。安心しろ、別に死んでるわけじゃない。」

「でも……」

「シンジ君のそういうところは好きだが、人なら覚悟を決めないといけない時がある。そうじゃないと守れないものもあるんだ。」

「……」

「と言つてもすぐには理解できないか……まあ、心に押しとどめておいてくれ。」

「……はい。」

「じゃ、行くぞ。……ぐっ……」

フラツシユグレネードを投げたときに肩に過度の負荷がかかったのだろう。

「特務二尉。肩……」

「！コウスケさんさっきの……」

「すごい量じゃない！」

「心配するな。今は発令所に行くのが先だ。」

（弾は抜けてるな……でも二発もらったか……まあ、俺が流させた量に比べれば……）

コウスケは冷静に傷の分析を終えて軽く手当をした後、心配する三人を叱咤し発令所に急いだ。

・ ・ ・
発令所に行くとEVAの発進準備をしていた。

「あなたたち。」

リツコが出迎えた。

「リツコさん。EVAは？」

「出来てるわ。」

「・・・すごい何も動かないのに。」

「手動で準備したのよ。碓司令の案よ。」

「父さんが・・・」

「碓司令はあなたたちが来るのを信じていたのよ。」

(赤木博士・・・どこことなく・・・恍惚とした・・・表情だな。)

コウスケは激痛に耐えているので考えがとぎれとぎれになるが、表立っては平静にしている。

また、NERV本部は停電しているので、傷が暗くてよく見えない状況だった。

「葛城は？」

「まだよ。と言っても発令所も動かないからいてもどうしようもないけど。」

「そうか。今回は俺も出れないな。」

「そうね。」

「すまん。三人とも。後を頼む。」

「任せなさい！」

「はい。」

「了解。」

そう言つて三人はEVAに乗つて行つた。

(ちつ．．．思つたより．．．血を．．．流し過ぎたか．．．)

三人が無事に出撃したのを見届けたコウスケはゆつくりと倒れた。

．．．

(．．．この匂いは．．．アルコール．．．病院か．．．)

コウスケはゆつくりと目を開いた。

前には白い天井が見えた。

「．．．生きてる．．．三人ともやつてくれたんだな。」

どうやら弾を受けた右肩は包帯が巻かれているようだった。

「あつ！コウスケさん。」

「よう。シンジ君。」

「よかつた．．．」

「目を覚ましたのね。コウスケ！」

「アスカ・・・」

「特務二尉。」

「・・・レイ・・・こういう時は名前前で呼んでほしかった。」

ドアが開きリツコが入ってきた。

「あら、目を覚ましたのね。」

「赤木博士。迷惑をかけたようだな。」

「いいのよ。あなたが居なかったらこの子たちも危なかっただろうし。」

「そう言ってもらえれば助かる。」

「出血が酷かったけど、神経に異常はないわ。」

「そりやよかった。」

「今日は安静にしてなさい。」

「そうだな。」

「あなたが撃退した戦自はうまく拘束したそうよ。」

「そうか。」

「じゃ、行くわね。」

「ああ。」

リツコは出ていった。

「でも、ほんとはよかった・・・」

「ちよつと血が出過ぎただけだよ。」

「すみません。僕たちのために・・・」

「そういうな。俺は戦友を守れてよかつたと思ってるし、こんなところで死んでられんからな。」

「・・・そうそう、あの時の話の続きなんだけど、コウスケの夢ってあるの？ って前に言ってたわね。平和な世界がどうのって・・・」

アスカは執務室での話を思い出しているようだ。

「あの時の話か・・・俺は平和な世界を作りたいと思ってるんだ。それが戦友たちとの約束だしな。それに・・・」

「それに？」

「お前たちがどう生きるのか見てみたいからな。」

「なんかジジ臭い。」

「ほつとけ！」

「でもいいですね。」

シンジが言う。

「なにが？」

「夢って。」

「人は現実の中で夢と言う希望を追う生き物なんだろう。だから人は強くなれるし、他人とも分かり合えるんだろう……まあ、それでぶつかり合うこともあるがな。」

「そうですね。」

コウスケはレイに顔を向けた。

「レイは望むものがあるのか？」

「望むもの？」

「こうしたい、ああしたいというものだ。」

「碓君と一緒に居たい……」

心なしか赤く見える。

「あつあやなみ！」

「ほく。言うね。」

「約束したから。碓君を守るって。」

「……ああ、一緒に居なきや守れないもんな。」

と無理やり解釈しつつもコウスケは少しにやついている。

「ぼつ僕だって綾波を守るよ。」

「あたしは？」

「もつもちろんアスカだって・・・」

そう言つてシンジは真つ赤になった。

レイは面白くなさそうにしていた。(当然無表情に見える。)

「やるね。この色男！」

「茶化さないで下さいよ！」

「すまんすまん。・・・こうやって身近な人を守る・・・それだけでも人は強くなれるかな。不思議だよな。」

などと話しているうちに誰かがやってきた。

黒い服を着てサングラスをかけた男―碓ゲンドウだ。

「父さん・・・」

「これは、碓司令。」

「そのままがいい。」

「失礼します。」

「今回チルドレンを守ってくれたそうだな。」

「はい。」

「感謝する。」

「・・・司令としてのお言葉ですか？」

「そうだ。」

シンジが俯いていた。

「それと・・・」

「？」

「子供たち、レイ、アスカ君、そしてシンジを守ってくれて感謝する。」

「！・・・父さん。」

「これからもよろしく頼む。」

「了解しました。」

ゲンドウは去って行った。

「・・・シンジ君。よかったな。」

「・・・はい。」

「やっぱりあの時は忙しかったただけじゃない。」

「あの時？」

「電話。」

「・・・ああ。」

「・・・あの時は停電してたのよ。」

レイが冷静に突っ込む。

「そういえばそうだったわね。」

「でも、碇司令のあの言葉には重みがあった。」

「……」

「……まつ。そういうことだな。」

「そうですね。」

ほっとした雰囲気の流れた。

「さて、お前たちも疲れただろう。早く帰って休んどけ。」

「そうですね。じゃ、行きます。」

「早く元気になりなさいよ！」

「……失礼します。」

「おう、また明日な。」

三人は去って行った。

コウスケは再びベットに倒れる。

「……いるんだろう?」

「ばれてたか。」

「当たり前だ。」

どこからか加持が出てきた。

「今回はやばかったな。」

「だな。加持から聞いてなかったら、間違ひなく死んでたな。」

「じゃあ、俺は命の恩人になるのかな？」

「今度何かおごつてやる。」

「・・・楽しみにしておくよ。」

「楽しみにしておけ。」

加持は去って行った。

「今回は何とかなったが・・・次はわからないな・・・」

コウスケは戦自がチルドレンがいるにも関わらず撃ってきたことに危機感を感じていた。

「人の敵は・・・何だろうな・・・」

そう呟きながらコウスケは眠りについた。

第15話 招待状

「最近レイは変わったわね。」

部屋に煙が漂う。

行き場がなくなつただけ漂う煙は彼女の心のようにだつた。

「確実に心が芽生えている。」

「そのきつかけは・・・シンジ君」

「・・・そして綾波コウスケ。」

「計画はすでに放棄されている。でも・・・」

「あの人は見てくれない・・・」

「真実を知れば・・・」

煙はいまだに漂っている。

・・・

「特務一尉か・・・」

コウスケは肩の傷も治り、普通に暮らしている。

そんな時に昇進の辞令をもらった。

「・・・まあ、返すほど無欲ではないからな。貰つとくか。」
実際に戦闘で活躍しているのは子供たちである。

コウスケも戦闘機でサポートに回るが、あくまでもメインはEVAである。
「もつと負担を減らせるようにならんとな。」

と新たな決意をするのであった。

・・・

「よう、葛城。」

「あら、コウスケ君。」

「仕事・・・押し付けたな？」

「ギクッ！」

普段ずぼらなミサトなので少しカマをかけて見たのだが、凶星だったようだ。

「あんまり日向二尉に迷惑かけるなよ。」

ミサトが仕事を押し付ける相手は日向二尉なのだ。

おかげで日向の事務処理能力は一段と冴えることになったが・・・

「えへへ・・・」

ミサトは引きつつている。

ふとコウスケはミサトの階級章に目をやった。

「ん?・・・葛城も昇進したのか。」

「ええ、そうよ。」

と言つても嬉しそうじゃなかった。

「・・・やっぱ、子供たちのことか・・・」

「まあね。」

(どうも違うみたいだな。)

「でも、できることは限られてるだろう。つらいだろうけど全力で支援するしかないな。」

「そうね。」

・・・

「あつコウスケさん。」

通路にてコウスケはシンジとあつた。

「おう。どうした?シンジ君。」

「今度の土曜日にミサトさんの昇進祝いがあるんですけど、コウスケさんも来ませんか?」

(昇進パーティーか・・・)

コウスケはパーティーがあまり好きではなかった。

それに酒も好きではない。

なので必ず酒が出される場というのが苦手なのだ。

だが、誘われて断るほど嫌というものではないのだ。

ましてや戦友からの誘いだ。

「そういうのも悪くないな。」

「じゃあ・・・」

「俺も行こう。」

「わかりました。」

「準備は？」

「友達と一緒にやるので大丈夫です。」

「わかった。なるべく早く早く仕事を済ませるよ。」

「はい。」

・・・

休憩室に行くとレイがベンチに座っているのが見えた。

何となく悩んでいるように見えた。

「よう、レイ」

「こんにちは、特務二尉。」

「もう二尉じゃない。」

「・・・特務一尉」

「で、どうしたんだ？こんなところで。」

「・・・何でもありません。」

レイが無表情で答える。

普段ならここで会話は終わるが、コウスケはなぜか終わらせてはならないと感じた。

「嘘だな。」

「・・・」

「そんな雰囲気でしたら、何か悩んでるなんてすぐにわかる。」

「そうですか・・・」

「やっぱり感情表現が苦手なだけか。」

コウスケはもしかしたらと思っていたことであつた。

「感情表現？」

「人だけでなく動物なら痛い、嬉しい、怒るといったことを体、顔、しぐさで表すものなんだ。」

「・・・」

「そういつたことをレイはなかなか表せないが、雰囲気でわかるんだな。」

「・・・変ですか？」

「変じゃないだろう。そんな人はいっぱいいるしな。」

「・・・」

「まあ、それを含めて綾波レイだろう？」

レイの目がピクリと動いたような気がした。

「人なんてひとくくりにするけど、生い立ち、経歴が同じ人なんているか。碓シンジ、葛城ミサト、惣流・アスカ・ラングレー・・・人にもいろいろいるんだ。感情表現が苦手なんて個性の一つだな。」

はた目からではわかりにくいのが、レイは感心しているように見えた。

「で、何を悩んでたのかな？」

「・・・葛城三佐の昇進パーティーの参加です。」

「それで？」

「・・・断ろうかと。」

「それは綾波レイとしての判断かな？」

「・・・」

「・・・ファーストチルドレンとしての判断か・・・綾波レイとしては？」

「・・・行ってみたいです。それに・・・」

「それに？」

「碓君。」

「・・・シンジ君と一緒に居たいのか。」

「はい。」

そういうレイはうつすらと赤くなっている。

「なら行くべきだろう。シンジ君はファーストチルドレンに言ったんじゃないからな。」

「なぜ、わかつたのですか？」

「何となくだ。多分どもりながら言ったんだろう。」

（そして周りに冷やかされたな。）

「はい・・・」

その時のことを思い出しているようだった。

「早くシンジ君に言ってやれ。」

「はい。」

「もう少し自分に素直になれよ。もう一人の綾波さん。」

コウスケは仕事に戻った。

・・・

ミサトの昇進祝賀パーティの日

コウスケはNERVでの仕事を終え、会場であるミサトのマンションに寄る前にレイのマンションに寄っていた。

レイと話した日から何となく気になっていたコウスケは諜報部の力を借り、レイがどこにいるのか探し出していった。

レイのマンションは再開発のため取り壊しが決められていたが、使徒襲来による都市部の復旧のため延期になっていた。

402綾波と書かれた表札の前に立ったコウスケはインターフォンを鳴らすが、反応がない。

仕方ないのでドアを叩くことにした。

「・・・おかしいな。ここにいるはずなんだが・・・」

少々ためらわれたがドアノブに手をかけた。

「・・・カギは空いているか。・・・綾波コウスケだ。入るぞ。」

そう言っただけでドアを開けた。

部屋に入ると人が暮らしている感じがしなかった。

むき出しのコンクリート、散らばったプリント、暗い部屋・・・

何となく部屋全体が綾波レイを表しているようにコウスケは思えた。

(普通なら耐えられんな。こんなところ・・・)

コウスケがそのまま進むとベットに腰かけているレイが見えた。

「こんなところで何してる。」

レイは答えなかった。

「・・・はあく。素直になれと言ったが・・・」

「・・・」

「行くぞ。」

「・・・」

「お前さんはどうしたいんだ？」

「・・・行ってみたいです。でも・・・」

「なら行くぞ！」

そう言ってコウスケは無理やり連れていくことにした。

・・・

ミサトのマンションについたコウスケとレイは、本日貸切と書かれた紙が張られているドアの前に立っていた。

コウスケがインターフォンを鳴らした。

ドアが開くとシンジが迎え入れてくれた。

「コウスケさん。それに綾波も。」

「すまん。遅れた。」

「いいですよ。それにしてもよかった・・・」

「何が？」

「綾波が来てくれて。」

そう言つて笑顔を見せるシンジ

「早く上がってください。綾波も。」

そう言つてシンジは先に入った。

「よかつたろ。」

「はい。」

レイはともうれしそうに見えた。

「・・・あ、ありがとう・・・ございます。」

照れながらつぶやくようにレイが言った。

「礼には及ばんよ。」

そう言つてコウスケたちは中に入った。

・・・

中に入るとミサトにアスカそしてクラスメート三人組がいた。

「なんだ。加持さんじゃないの。」

「加持でなくて悪かったな。」

テーブルを見るとなかなか豪華な料理が並んでいた。

「ほう。これは全部シンジ君が用意したのかな？」

「いえ。洞木さんにも手伝ってもらったんです。」

と言つて洞木ヒカリのほうに向いた。

当然ながらコウスケはシンジのクラスメートの顔は全員覚えていて。

「ふむ……なかなかよい嫁さんになりそうだな。」

「そんな……」

ヒカリは赤くなっていた。

ちらちらと鈴原トウジを見ているのがわかった。

「……ふむふむ。なるほどね。」

(わかりやすいな。)

「？」

トウジは気がつかないようだ。

「……洞木さんも大変だな。」

「……」

ばれてしまったというような顔のヒカリであった。

「ほらほら、そんなところに突っ立ってないで早く座りなさい。」
ミサトが促す。

コウスケとレイは手近な場所に腰かけた。

「ああ!」

ケンスケが吠えた。

「綾波特務に・・・一尉も昇進したんですね。」

ケンスケはコウスケのことを綾波特務二尉と呼んでいた。

なので今日から呼び名が変わるのだ。

「まあな。」

「しまった!もつと早く知っていれば・・・」

「気持ちだけでいいよ。」

そうしているうちにビールがコウスケの前に差し出された。

「それでは葛城三佐と綾波特務一尉の昇進をお祝いして・・・」

いつの間にかコウスケの昇進も加えられていた。

「」「乾杯!」「」

するとレイだけきよんとしていた。

「どうした?」

「乾杯って何ですか?」

「・・・お祝い事があるときに飲み物を入れだグラスを互いに軽くぶつけることを乾杯というんだ。」

「・・・?」

「まあ、やってみろ。グラスを割らないようにな。相田君、レイは初めて乾杯するらしい。」

「了解しました。」

ケンスケは咳払いをした。

「では、気を取りなおして」

「[[「乾杯!」]]」

「・・・乾杯。」

こうして宴会が始まった。

「どうだった?初めての乾杯は。」

「・・・暖かいです。」

「そうか。」

コウスケは満足そうにした。

ミサトはビールを飲む。

その横でペンペンも一緒に飲んでる。

(ほんとにペンギンか?)

などとコウスケは考える。

爪で器用にプルタブを開き、ごくごくとビールを飲むペンギンなんているだろうか。

いや、いまい。

アスカはちよつと騒がしい。

シンジはこの雰囲気が苦手なのかちよつと冷めた顔だった。

トウジは料理に夢中だ。

ケンスケは昇進したミサトに謝辞を送っていた。(コウスケには無い。)

ヒカリもアスカとの会話に楽しんでいた。

レイは……

「……」

黙々とフライドポテトに侵攻していた。

(気に入ってたんだな。)

そんな時インターフォンがなった。

「きつと加持さんだわー!」

アスカの言う通り加持が現れた。

同時にリツコも一緒だ。

「本部から直なんですね。そこで一緒になったんだ。」

「怪しいわね。」

ミサトとアスカがシンクロする。

「あら、やきもち?」

「そんなわけないでしょ。」

ミサトが拗ねるように言う。

「にしてもレイがここにいるなんてね。」

リツコが嫌な顔で言う。

レイが少しおびえているように見えた。

「俺が無理やり連れてきたんだ。それにレイが居ちやまずいのか?」

「あら、別にそんなつもりで言ったんじゃないわよ。」

リツコはごまかすように言う。

(嘘つけ。)

コウスケはそう思った。

「しかし、司令と副司令がそろって日本を離れるなんて前例のなかったことだ。これも留守を預けた葛城を信頼してることさ。」

「父さんはどこにいるんですか？」

シンジがもつともな疑問を問いかける。

「今は南極にいるわ。」

「・・・南極ね・・・あんなところに何しに行ったんだか。」

コウスケはつぶやくように言った。

ふと見るとミサトが苦い顔をしている。

南極という言葉に反応しているようだった。

「さあね。私にもわからないわ。」

（ほんとにそうかな？赤木博士。）

リツコは何かを隠している。そうコウスケは思うのであった。

・・・

宴会も進んでいき終わりが見えてきたころ、コウスケはシンジの横にリツコがいるのを見た。

よく見ると何かを話しかけているようだ。

（・・・レイ・・・秘密・・・知りたくない・・・）

コウスケは読唇術を駆使し、何を言っているのかを読んだ。

なぜコウスケが読唇術を使えるのか？

それはコースケの訓練のたまものだった。

(明日・・・夜・・・NERVゲート・・・)

その時のリツコの顔は嫌な顔に見えた。

(なかなかすごいものが見えるかもしれない・・・)

レイを見ると黙々とフライドポテトを食べていた。

「・・・レイ、そればつかな・・・気に入ったのか？」

「はい。」

「そうか。」

(レイの秘密ね・・・)

コースケは好奇心に駆られていた。

・・・

宴会が終わりコースケはレイを送り届けることになった。

ほんとはシンジに行ってもらいたがったが、片づけをする人がいないのと、コースケが無理に連れてきたということでそう決まった。

「どうだった？」

「・・・心が弾んでいるように感じました。」

「そうか。楽しかったんだな。」

「楽しい・・そう楽しかったのね。」

「もつと素直になれよ。自分に。」

「・・・はい。」

いつの間にかレイのマンションについた。

「・・レイはここに居ても感じないのか？」

「命令ですから。」

「そうか。」

（命令最優先ですか・・）

「で、どう思ってるんだ？」

「・・・胸が痛いです。」

「・・・寂しいんだな。」

「・・・」

（ここに一人か・・碇司令に持ち掛ければ・・無理か。）

「・・・じゃ、また明日な。」

「はい。・・・」

「ん？どうした。」

「・・あ、ありがとうございます。」

「またもやつぶやくように言うレイ。」

「フツ。案外かわいい奴だな。」

「！」

「そういうレイは嫌いじゃないよ。じゃあな。」

「コウスケはレイのマンションを後にした。」

「・・・」

「・・・レイの秘密か・・・」

「リツコがシンジに言っていたことを思い出す。」

「何が隠れているかな？」

「そう言ってコウスケは自分の家に帰って行った。」

第16話 中心教義の奥

コウスケはいつもの居場所―喫煙所にいた。

「よう、加持。お前も休憩か？」

「ああ、そうだ。」

加持は煙草を取り出す。

「この売店って煙草売ってないんだよな。」

「だな。わざわざ外に行かなきゃならんからな。」

「ここに「カード」で買える自販機を置いてくれないかな。」

コウスケはわざとカードを強調した。気づかれない程度に。

「碇司令」や「副司令」に上申書を出してみようかな。」

「そりゃ「無理」だろう。あのおふた方は吸わないからな。」

加持も気づいたようだ。

「そうか。」

「「赤木」ならどうだ？」

「彼女も喫煙者だったな。「行ける」かな？」

「うまく説得すれば、「行ける」んじゃないかな？」

「・・・ダメもとでやってみるか。」

「うまく」やってくれよ。」

「わかった。あまり期待はするな。」

・・・

「ん？アスカ。今日は上りか？」

NERVの通路にてコウスケはアスカと出会った。

「あら、コウスケ。そうよ。」

「シンジ君はどうしたんだ？」

「先に帰ったわ。」

「そうか。」

「でも、今日はジャージのところに泊まるって言ってたわ。」

「ジャージ？」

「鈴原よ。」

「・・・ああ、鈴原君か。確かにいつもジャージだな。」

数度しかトウジとは会ってないがいつも同じジャージだったのを思い出した。

「まさか、学校でもあの恰好じゃないよな・・・」

「あの恰好よ。」

「・・・私服なのか？」

「聞いてみればいいじゃない。」

「・・・それが早いか。」

（何着持つてるんだ？）

「じゃ、もう行くわね。」

「ああ。」

アスカは帰って行った。

「・・・うまく騙したわけだ。シンジ君は・・・」

・・・

コウスケは暗い通路に立っていた。

加持から教えてもらったターミナルドグマへの道に彼は立っていた。

監視カメラがあつたが、加持に頼んでダミーの映像が流されていた。

足もとが見えなくなるような暗さだったが、夜目に慣れているコウスケには苦でもなかつた。

遠くからハイヒールの音が聞こえる。

コウスケは身を隠し音が止まるのを待った。

やがて音が止まるのを確認し、その人物の背後に回って銃を突きつけた。

「あら、こんなところに何のようかしら。」

リツコが意外そうに言う。

「なに。昨日シンジ君に渡した招待状を分けてほしくてな。」

「・・・加持君ね。」

「まあな。」

「でもどうしてわかったのかしら。」

「唇を見ればな。赤木博士はわかりやすかった。」

「読唇術ね。」

「ああ。」

「・・・まあいいわ。あなたにも見てもらいたいし。」

そう言つてリツコはカードを通した。

横にいたシンジは不安そうな表情だった。

・・・

ライトアップされた場所は真ん中にベット、様々な薬品、むき出しのコンクリート、そしていろんな文字が書かれていた。

「まるで綾波の部屋だ。」

シンジがつぶやく。

コウスケは昨日見たレイの部屋を思い浮かべていた。

「綾波レイの部屋よ。彼女の生まれ育ったところ。」

「どこが？」

「そう、生まれたところよ。レイの深層心理を構成する光と水はこのイメージが強く残っているのね。」

「赤木博士。シンジ君に見せたいのはこんなものじゃ無いだろう。」

「そうよ。綾波特務一尉。」

...

次に案内されたところは頭と骨ばかりが廃棄されている場所であった。

「EVA？」

「最初のね。失敗作よ。10年前に廃棄されたわ。」

「EVAの墓場。」

シンジが的確に言ってくれた。

「ただのゴミ捨て場よ。あなたのお母さんが消えたところでもあるわ。覚えてないかもしれないけど、あなたも見ていたはずなのよ。お母さんの消える瞬間を。」

シンジはおびえたような目をしていた。

「でも、これも違うんだろ。さっさと本命に案内しろ。」

リツコは冷めた顔だった。まるでこの後になにが起るかわかっているかのように……

次に案内されたところは巨大な脳みそのような場所だった。

真ん中にはオレンジ色のチューブがあつた。

人ひとりを入れそうだった。

「……ここが本命か。」

「ええ。ここは今開発中のダミープラグの生産工場よ。」

「ダミープラグの……」

コウスケもダミープラグのことは知っていた。

無人でEVAを操ることができるシステム。

それができればチルドレンに無駄な犠牲を強いることができなくなると考えていた。

「……真実を見せてあげるわ。」

そういつたリツコはニヤリと嗤ったように見えた。

ボタンを押すリツコ

途端に周囲がオレンジ色に明るくなった。

中に無数の人のようなものが見えた。

コウスケはあまりの事態に脳が追い付かなかった。

「綾波……レイ……」

シンジがつぶやく。

途端にシンジに振り向く無数の「綾波レイ」

「!!」

シンジの目は完全におびえていた。

「……まさか、ダミープラグの資材にしているのか!」

「そう。ダミーシステムのコアとなる部分、その生産工場よ。」

「そんな……ばかな……」

「ここにあるのはダミー。そしてレイのためのパーツにすぎないのよ。」

リツコが話を続ける。

「人は神様を拾ったので喜んで手に入れようとした。だから罰が当たった。それが15年前。」

(セカンドインパクトか……)

「折角拾った神様が消えてしまったわ。でも今度は神様を自分たちの手で復活させようとしたの。それがアダム。そしてアダムから神様に似せて人間を造った。それがEVA。」

「人……人間なんですか？」

シンジがおびえながら聞いた。

（そういや、人造人間って言ってたな。）

「そう、人間なのよ。本来魂のないEVAには人間の魂が宿らせてあるもの。みんなサルーベージされたものなの。魂の入った入れ物はレイ、一人だけなの。あの子にしか魂は生まれなかったの。ガフの部屋は空っぽになってたの。ここに並ぶレイと同じものは魂がない、ただの入れ物なの。」

（入れ物ってことはレイが死ぬと新しいレイが出てくるのか？）

リツコの目が変わった。

「まだこんなものじゃ足りないわ。」

その眼は狂気に彩られていた。

（まだ何かするつもりか……）

「……どうりで経歴が抹消されていたわけだ。こんなものいくら超法規で守られているとはいえ、許されざることだからな。」

コウスケは銃をリツコに向けた。

「で、碓ユイと何の関係が有るのかな？」

「そう……そこまで気づいたの？」

「いくらなんでもそっくりそのままだなんて、疑ってくださいと言っているようなものだろう。」

「・・・綾波レイを作るのに遺伝子をもらったのよ。」

（作るか・・・創造主のつもりか？）

「クローンってわけか。」

「ただのクローンではないわ。使徒の遺伝子も使っているもの。」

（アルビノはそのせいかな？）

「使徒・・・」

シンジは裏切られたと言いたげだった。

「でもそんなものにも勝てなかった・・・あの人のことを考えるとどんなことにも耐えられた。でもあの人は・・・あの人は・・・」

リツコの嗚咽が続いた。

コウスケはリツコの今までの挙動から一人の人物をはじき出した。

「・・・碓ゲンドウか・・・」

「父さんが・・・」

「そうよ！」

（なるほど、女の嫉妬というところか・・・それと、どんなことにも耐えられたね・・・）

「・・・で、それが綾波レイとどう関係が有る。」

「・・・」

「答えろ！」

「・・・ないわ。」

「だろうな。と言いたいがそうじゃないんだろう。」

「・・・」

「最初は碓ゲンドウに近いレイが憎かったんだろう。碓ユイにも似ているしな。それだけならまだよかったのかもしれない。だが、そんなレイが心を持ち始めた・・・」

「・・・」

「人形として育てたのに俺やシンジ君が接触したために心を持ち始めた。それが気に入らなかったんだろう？」

「違うわ。」

「ふん！自分は人形に成り果てたのに、作った人形が心を持つことに耐えられなかったんだろう。」

「ここはコウスケのカマかけだった。」

「違うわ！」

というリツコの言葉に確信に変わった。

「それでシンジ君にこれを見せて、レイからシンジ君を取り上げようとしたのか！」
「……」

「で、シンジ君とレイを壊そうってのか。碓夫妻の代わりに。」

「……」

「見上げた根性だな！抵抗できない少年、少女をいたぶって楽しもうとしたんだろう！」

「……そうよ。」

コウスケは銃を下したが、拳がなわなわと震えていた。

「覚えておけ。俺の戦友をいたぶろうとした罪は重いからな。」

「あれは人じゃないのよ。」

「今の綾波レイは人になろうとしている。無意識だろうがな。それだけで十分だ。それにあんたよりは人らしいよ。人でありながら人形に成り下がったあんたよりはな。」

リツコは何かに衝撃を受けたように倒れこんだ。

「もうこんなものはいらないだろう。いや、あつてはならない。」

コウスケは水槽の近くにあつたバルブに手をかけた。

「何をやるの！」

リツコが飛び掛かるが、一瞬で払いのけられた。

「今言っただろう？……人形は人形らしくおとなしくしてな。」

コウスケはバルブを回した。

途端に崩れだす「綾波レイ」たち

「…すまん。助けることができなくて。せめて安らかに眠ってくれ。」

その声に反応するかのように笑い声が響いた。

それは感激しているようにも聞こえた。

「…そうか。ありがとう。」

コウスケは何となくそう言わねばならないと思った。

「シンジ君。もう行くぞ。」

「…はい…」

コウスケはリツコを放置し、部屋を後にした。

女性のすすり泣く声を背景にして

…

シンジを自分の家に招待し空いている部屋を貸した後、コウスケは自室に帰った。

シンジのどうすればいいかわからないといった顔が思い浮かぶ。

「…綾波レイか…」

最近心を持ち始めた少女。

その知られざる秘密。

「・・・人は誰しも自分の生まれる場所を選べんからな。」

綾波レイがどんな生い立ちなのかなんて正直どうでもよかつたのだ。

なぜなら綾波レイは確かに存在するからだ、人の世界に人として。

だが、そういう風に納得できる者ばかりではないというのも知っていた。

そういう意味ではシンジが心配だった。

「・・・」

もはや何も言えない。

コウスケはそのまま眠ることにした。

・・・

シンジの変調はすぐに出た。

シンジはコウスケの家を出た後学校に登校したが、明らかに顔色がよくなかつた。

シンジの様子が気になったコウスケはミサトの代わりに午後のシンクロテストを見

学していた。

今頃ミサトは泣く泣く書類を整理しているだろう。

リツコが黙々と準備をしている。

何となくどこか吹っ切れたような感じだった。

「アスカは依然好調ね。」

「そうですね。それに比べシンジ君は。」

「落ちてゐるわね。」

「ええ、起動指数はクリアしてませんが、あまり高いとは言えません。」

伊吹が報告を行う。

コウスケは前のデータを見せてもらった。

「・・・こんなに違いが出るのか？」

シンジのデータは前回に比べガクツと落ちていた。

「EVAとのシンクロにはパイロットの精神の安定が必要なのよ。・・・シンジ君には悪いことをしたわ。」

コウスケは昨日の出来事を思い出す。

14歳の少年には処理しきれない問題だろう。

「それと・・・」

と言つて伊吹がレイのデータを差した。

「あまり変わらないように見えますが、レイも落ち気味です。」

「レイが？」

コウスケは何かあつたのかを何となく推察できた。

「・・・多分、学校でシンジ君がレイを避けたんだろう。あからさまに。・・・赤木博士の

思惑通りに。」

「・・・そうなのね。」

リツコはどうすればいいかという顔だった。

「後悔しているみたいだな。」

「あの後冷静になってみれば、レイにはなんにも関係がないってわかったのよ。いや、わかつてはいたのよ。・・・バカだったわ。」

リツコは自嘲していた。

「あんたより人らしいか・・・確かにそうかもしれないわね。」

「・・・ならいい。」

伊吹は何の話やら分からないと言いたげだった。

・・・

「どうした？シンジ君。」

コウスケはテスト終了後シンジと会っていた。

シンジはすでに制服に着替えていた。

「いえ・・・」

「レイのことだろう。」

「はい・・・」

「・・・」

「あんなこと言われて、綾波とどう会えばいいのかわからないんです。怖いんです。」

「だろうと思ったよ。今まで通りにできないのか。」

「だって綾波は人じゃないんでしょ！」

なかなかの大声だった。

使徒とは言わなかったのはここがNERVだからだろうか。

「・・・それが本心か。」

「だってそうじゃないですか！」

「・・・ならなぜ迷ってる。嫌なら嫌だとはつきり言えばいいじゃないか。」

(まあ、それをしたら・・・レイの心は死ぬな。)

「・・・」

「違うんだろ。今までに見てきたレイを見て。」

シンジは俯いている。

(14歳の少年には荷が重すぎるか。)

「シンジ君、人って何だ？」

「それは・・・」

「いや、人間って何だ？　どういう風を書くんだ？」

「人の間と書きます。」

「だな、つまりは人の形をして、人の心を持ち、なおかつ人の間に生きるものを人間というんだろう。」

「・・・」

「テスト後に悪いな。もう帰って休んでくれ。」

「はい・・・」

シンジが帰ろうとするとレイが近くにいた。

「・・・碓君。」

シンジは顔を背け去って行った。

レイはとても寂しそうに佇んでいた。

・・・

数日たったが相変わらずシンジはレイを避けていた。

学校、NERV問わずレイを見ると逃げ出すのであった。

それに伴いシンクロテストもはつきり言って最悪のものとなっていた。

シンジは一向によくなくなる気配がない。

レイも心が不安定なのが目に見えてわかるようになっていた。

アスカは依然好調なのだが、二人が気になってしょうがないようだ。

「ちよつとーテスト中よ二人とも集中しなさい！」

ミサトが喝を入れるが、変化はない。

「いったいどうしたのよ。コウスケ君、わかる？リツコは何も答ええないし。」

それは二人を見ていた人たちの代弁をしていた。

コウスケとリツコは当然ながら理由を知っていたが、答えるわけにはいかない。

「わからん。」

と答えるしかなかった。

「こんな状況で使徒が来たら大変よ。」

「原因がわかればな・・・」

(知ってるけど。)

ミサトは腕を組んだ。

「シンジ君ね。」

「なんでそう思うんだ？」

「シンジ君の態度を見てればわかるわよ。っていうかあからさまに避けてるでしょ。」

実際チルドレンを守るガードからもそう報告があった。

もはや、シンジがレイを避けているというのは皆が知っていることだった。

「そうだな。」

「問い詰めても何も答ええないし。」

(言えないな。あんなこと。)

「どうにかならないかしらね。」

「パイロットの管理は葛城の管轄だろ？」

「正直お手上げよ。」

ミサトは両手を上げていた。

(だろうな。)

「なにかいい手がない？」

「・・・シンジ君が・・・」

「なに？」

「いや、なんでも無い。」

「あんたもお手上げか・・・」

(レイのことを人だと思えば変わるかな?)

などとコウスケは考えるのであった。

・・・

「赤木博士。入るぞ。」

コウスケはリツコの研究室に入って行った。

「ごめんなさい。忙しいのに。」

「なんだ。何か用か？」

リツコは決心を固めたようにコースケの瞳を見た。

「あの二人のことよ。」

「シンジ君とレイか。」

「ええ。」

「どうしたいんだ？」

「どうにかならないかしら。」

「どうにもならんよ。」

コースケは両手を上げた。

「あれはシンジ君が解決しないことにはどうにもならんよ。」

「やっぱりそうなのね・・・」

リツコは視線を落とした。

「後悔先に立たずとはこういうことを言うのね。」

「・・・きつかけがあればあるいは・・・」

「きつかけ？」

「ああ、シンジ君はレイが人じゃないということに悩んでいるように見える。・・・レイの

体は人なのか？」

「髪と眼の色は特殊だけど、問題ではないわ。」

リツコは断言した。

「なら、シンジ君がそれをわかるようになればいい。」

「そんな簡単に行くかしら。」

「他の人と同じだということを解ればいい。」

「・・・方法があるの？」

ぼりぼりと頭を掻くコウスケ

「うくん・・・正直成功すると言えないな。」

「そう・・・」

ともかく何とか現状を打破できないか

その思いはまだ一部の人のみが抱えるものだった。

第17話 人の定義

数日たつても状況は良くならず、かえって悪化する一方であった。

シンジはというところの一件以降アスカとともに行動することが多くなった。

アスカも最初はさほど気にしていなかったが、シンジがレイと離れようとしていることに感づいていた。

それを問いただしたのだが見事に無視され、アスカの機嫌は最悪のものとなっていた。

レイはぼーっとしている時間が増え、以前に増して無表情でいることが多くなった。

三人で合同訓練を行った際もフォーメーションが乱れたり、ちよつとした隙を作りやられるなどといったことが起きていた。

正直使徒が来たら負けるのではないか？

そんな考えがNERV職員には濃厚になっていた。

そのため職場では何とも言えないピリピリした雰囲気立ち込めていた。

「も、どうすりゃいいのよ……」

ミサトが疲れ切った声で言う。

「使徒が来れば終わりだな。」

「わかっているわよ！そんなこと！」

「葛城。気持ちはわかるが俺に当たらないでくれ。」

「ごめん。コウスケ君。」

ミサトはぼつが悪そうに言った。

「しかし、実感するな。」

「なにが？」

「世界の命運が14歳の子供たちに掛かっているということに。」

三人の顔がモニター越しに窺えるが、何とも言えない顔だった。

「なりふり構ってられないか……」

この状況を打破しなければ明日など見えない。

それがわかるからこそ焦りも出る。

「……葛城。ちよつといいか？」

・
・

NERVを退勤した後、コウスケは車を借りちよつとした「もの」を回収した後、レイのマンションに向かった。

すでに月が出ていた。満月だった。

「綾波コウスケだ。入るぞ。」

コウスケはドアを開け中に入った。

部屋は月の光で満たされており、その中にレイがぼけっと座っていた。

「どうした、レイ？」

「・・・」

「大方シンジ君のことだろう。」

「・・・はい。」

「突然避けるようになって戸惑っているんだろう。」

「・・・はい。」

がっくりとうなだれるレイ。

相当シヨックだったみたいだ。

（鬼が出るか蛇が出るか・・・）

「・・・数日前、俺はとある場所に行った。ターミナルドグマというところだ。」

レイはびくつと反応した。

「そこでとある部屋・・・そーいやここに似てたな。それと大きな脳みそみたいな場所に行った。」

よく見るとレイは震えだしていた。

(怖いだろうな、正体を知られたのが・・・だが、それが人である証なんだがな。)

「お前ならわかるんだろう?・・・そこでたくさんの「おまえさん」を見た。そこにシンジ君もいた。それだけだ。」

レイが振り向いた。目が見開いている。

「・・・知られたのね。」

「ああ。」

「・・・そう。」

レイは俯いてる。もう泣き出しそうに見えた。

(そうやって苦悩するのは、すでに人である証拠だがな。・・・それに気づかんか。)

「・・・碓君。」

レイがつぶやくように言った。

「・・・綾波レイ、どうしたいんだ?」

「・・・無に帰りたい。」

(死にたいってか?)

「なぜだ。」

「・・・もう他に何もないから。」

(これを聞いてシンジは何を思うかな?)

「・・・ならこれを貸す。」

コウスケは銃の中身を確認した後、レイの足もとに放り投げた。

「これで頭を撃つんだ。そうすりゃ、望み通りになるぞ。」

レイは動かなかつた。

(予想通りだな・・・まあ、自殺しそうになったら止めてたが・・・)

「自分を殺すのは難しいからな・・・」

コウスケは銃を拾う。

「俺が代わりにやっつてやるよ。」

銃をレイに向ける。

「・・・ああ、言い忘れてたが、あの素体たちは全部壊しておいたよ。」

「え・・・」

レイの目が見開いていた。

「おまえで最後だ・・・じゃあな。」

(悪役だな、俺。)

コウスケは銃の引き金を引いた。

乾いた音が鳴るが銃弾はベツトに吸い込まれた。

「・・・よけるなよ。折角願いを叶えてやるって言ってるのに。」

(まあ、わざと外したから当たりはせんがな。)

レイはとつきに横に転んでいた。

「……」

「もういいんだろ？綾波レイという存在はここで終わる。」

這いつくばるように逃げるレイ

「怯えなくていいぞ。痛いのは一瞬だからな。」

(……変な趣味に目覚めないことを祈ろう。)

じりじりとレイを追い詰めるコウスケ

「往生際が悪いぞ。お前を殺して早く逃げなきゃいけないんだ。あまり手を煩わせるな。」

とうとう部屋の角に追い詰められるレイ。

「もう逃げられないな。「碓君」ともお別れだな。」

レイの目が怯えていた。

「……いや……」

「……さよなら。」

「!!……いや、いやあ、いかりくん!」

叫びながら、頭を抱えうずくまるレイ

コウスケは無情にも引き金を引いた。

パン

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
?」

音は鳴ったのに痛みを感じないことを変に感じるレイ。

「空砲だよ。」

コウスケは銃を下す。

「そんな風に感情があるじゃないか。苦悩もして・・レイが人だという証拠だ。」

レイは何が何だかわからない様子だ。

「ふう、もういいだろう。シンジ君入ってこい！」

シンジが入ってきた。

「いかりくん・・・」

「シンジ君、もう分つたろ。レイが人だつてことが。生い立ちがどんなものであれ、ちゃんと人の心がある。人の形だし、人の間に生きている。」

「あやなみ・・・」

「今のを聞いていたろ？それにレイがお前さんに見せた表情、しぐさ、感情・・それは人と何が違うんだ？」

シンジがレイのもとに駆け寄り、抱きしめていた。

さすがのコウスケも驚いた。

(おお、あのシンジが・・・)

「・・ごめん綾波、ほんとにごめん。」

「・・・いかりくん?」

「そうだよな。よく考えたら綾波だって普通の女の子じゃないか。いつも冷静で、無愛想に見えるけど笑顔はきれいで・・・どこにでもいるような普通の女の子なのに・・・なのに僕は・・・」

シンジは泣いていた。

「・・・綾波だって好きでそう生まれたんじゃないんだよな。」

「いかりくん・・・」

レイも泣き出していた。

「・・・涙・・・私泣いてるの? 悲しくないのに。」

「悲しくなくても涙は出るんだよ。」

シンジは泣きながら言う。

「・・・知られて、もうだめだと思った。」

「うん。」

「・・・だから新しく代われれば、こんな思いをしなくていいと思った。」

「うん。」

「・・・でも、壊されたと聞いたとき、怖かった。」

「・・・」

「自分も壊される、無くなる、存在が消える、もう会えなくなる、忘れられる。：怖かった。・・・特務一尉の目が怖かった。」

「そりや、悪かったな。」

コウスケはばつが悪そうにした。

「もう大丈夫だよ。どんなことがあっても僕が守れるようにするから。綾波のあんな悲しい声・・・もう聞きたくない。」

「いかりくん。」

「あやなみ。」

見つめ合う二人。

（なんだ？ものすごく腹が立つんだが・・・）

「ウオツホン！」

コウスケは咳払いをした。

「それ以上は二人っきりの時にやってくれるか？」

「あつ」

「！」

二人ともとつさに離れた。

顔が赤いのはご愛嬌だろう。

「すみません。コウスケさん。」

「・・・」

「つたく、こんなこと俺にやらせるなよ。」

ぼりぼりと頭をかくコウスケ

「まあ、これでいいのか・・・」

「・・・」

レイは怯えている。

(よほど怖かったんだな。・・・当たり前か。)

演技とはいえ軍人の殺気100%の視線に見つめられていたのだ。

大人でも耐えるのはつらいだろう。

「もう大丈夫だよ。もともと殺す気はなかったんだから。」

コウスケの優しい目つきにレイは安心したようだ。

「おまえさんは綾波レイだ。それ以上でも以下でもない。」

「・・・はい。」

うつすらと微笑んだように見えた。

「じゃあ、俺は行くな。シンジ君も帰るだろ?」

「あつはい、僕も・・・」

と言いかけて止まった。

レイがシンジのシャツを引つ張っていた。

フルフルと首を振っていた。ちよつと目が潤んでいる。

「・・・フツ、ここに居ろシンジ君。葛城には俺の家に泊まると言っておく。間違つてはいいのだろうか？俺も綾波だからな。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「変なこととはするなよ。」

（と言つても無理かな？・・・出来んだろ。シンジだし・・・）

「な！」

「じゃあな。シンジ君ともう一人の綾波さん。」

コウスケは手をひらひらと振り、レイのマンションを後にした。

・・・

次の日のシンクロテストでシンジとレイは最高記録を更新した。

悔しがっていたアスカは二人の様子を見て何となく納得していた。

「いったいどうしたの？あの二人。なんか気味が悪いわ。」

「しょうがないだろう。二人とも不器用だからな。」

「・・・昨日何があったの。」

「そりゃ・・・」

「・・・」

「秘密だ。」

「なによそれ！」

「言えることは、お互いがさらに理解しあう存在になったということだな。」

（いづれアスカにも言うのかな？・・・それはレイ次第か。）

「ふくん。」

シンジとレイは二人だけの空間を見事に作り上げ、ミサトにからかわれることになった。
た。

・・・

「やってくれたのね。」

コウスケはリツコに呼び出されていた。

「まあな。」

「ちよつと過激すぎない？」

「あそこまでやりたくなかったけどな。」

コウスケは頭を掻いていた。

「つて見てたのか！」

「音声だけなら拾えるもの。」

「うかつだった。」

「それだけ余裕が無かったのね。安心して消去しておいたから。」

「そりゃ、助かった。」

コウスケは煙草を取り出した。

「どうだ？」

「女性に煙草を薦める？まあ、もらっておくわ。」

と言ってリツコは煙草に火をつけた。

「強いのね。」

「まあな。」

沈黙が続いた。

部屋に煙が漂うが、すぐに消えて無くなっていった。

第18話 それぞれの価値

使徒というものは突然やってくる。

宣戦布告もなければ予兆なんてものもない。

そう思えばある程度予測できる台風のほうが幾万倍もましだというものだろう。

被害を受ける地区の人たちにはたまったものじゃないが・・・

「使徒を衛星軌道上にて確認。モニターでます。」

人工衛星から送られてきた映像がメインモニターに映し出される。

「こりやすーい。」

日向がみなを代表し口にする。

「常識を疑うわね。」

「こういうのは・・・芸術的あるいは前衛的とも言えはいいのか？」

「独特なセンスの持ち主ってことには違いはないわね。」

映し出された使徒ははつきり言って目というほか表現のしようがなかった。

「目標と接触します。」

衛星からNN爆雷が放り込まれるが、効果がない。

突如モニターが砂嵐に変わった。

「破壊されたか。」

「ATフィールド?」

「新しい使い方ね。」

ほかの衛星から使徒の映像が送られてきたとき、使徒の一部が地球に落下した。

・
・
・

落下した使徒の一部は太平洋に大きく外れた。

会議室に移ったコウスケたちはその破壊力を目の当たりにする。

太平洋には海底の土で出来た大きな輪があった。

「こりや、NN以上だな。」

「さっすがATフィールド。」

伊吹が補足する。

「落下のエネルギーをも利用しています。使徒そのものが爆弾みたいなものですね。」

「初弾は太平洋に大外れ。以後に時間ごとに修正しているわ。」

リツコが使徒の動向を言ってくれた。

「学習してることか。」

「いきなり来なくてよかったよ。」

「そうね。」

（使徒が学習か・・・敵もバカじゃないってことだな。）

「以後使徒の消息は不明です。」

「・・・まあ行先はわかるな。」

「来るわね。ここに。」

「次は本体ごとね。」

「その時は第三芦ノ湖の誕生かしら？」

「富士五湖が一つになって太平洋につながるわ。本部ごとね。」

「楽しくない未来図だな。」

「コウスケはリツコの言うことを想像してぞっとした。」

「碇司令は？」

「使徒が放つ強力なジャミングのため連絡不能です。」

「ジャミングまで放てるのか・・・厄介だな。」

「MAGIの判断は？」

「全会一致で撤退を推奨しています。」

「衛星軌道上の使徒に攻撃できる兵装は無いのか？赤木博士。」

「残念ながら、こんな事態を想定していないから無いわ。」

(まあ、予算不足もあるだろうな。)

NERVは国連から多額の予算を貰っているが、ほとんどがEVAの修理、維持に吸い取られている。

腕一本やられただけで途方もない金額の予算が使われている。

「どうするの？今の責任者はあなたよ。」

司令、副司令ともに不在であるため、作戦部長のミサトが最高責任者になるのだ。

ちなみにコウスケはその次である。

「・日本政府各省に到達。NERV権限における特別宣言D-17、半径50Km以内の全市民は直ちに避難、松代にはMAGIのバックアップを頼んで。」

「ここを放棄するんですか？」

日向が問う。

「いいえ、ただみんなで危ない橋を渡ることはないわ。」

「・・・そうだな。」

・
・
・

コウスケは一時休憩となりいつもの喫煙所にいた。

「・・・非戦闘員およびD級勤務者の退避完了しました。」

合成音声が淡々と告げる。

「早いね。逃げ足だけは一流ってか？」

コウスケは最後になるかもしれない一服をしていた。

「しかし無茶な作戦だな．．．いや、作戦とも呼べんか。」

ミサトが立てた作戦

EVA3機により使徒を受け止めること。

成功確率は0.00001%

まさに奇跡を願うようなものである。

こんなものは本来作戦とは言えない。

「でもこれ以外に思い浮かばないな。」

衛星軌道から飛来する使徒を迎撃するなんてことを想定していない。

いや、想定はしていてもそのための装備がNERVには無い。

「あの三人にはつらい思いをさせるな。」

下手をすれば、いや高い確率でEVAは無事ではないだろう。

「．．．時間か。」

．．．

パイロット三人がそろい、作戦の説明がされた。

「え〜！手で受け止める？」

アスカが悲鳴のような声を上げる。

「そう。落下予測地点にEVAを配置、途中から綾波特務一尉の支援を受けながらATフィールド全開であなたたちが使徒を直接受け止めるのよ。」

「使徒がコースを大きく外れたら？」

シンジがもつともな疑問を聞いた。

「その時はアウト。」

「機体が衝撃に耐えられなかったら？」

アスカも聞いた。

「その時もアウトね。」

「勝算は？」

「神のみぞ知るつてところね。」

「これでうまくいったらまさに奇跡ね。」

アスカがぼやくように言う。

「奇跡つてもものは起してこそ初めて価値が出るものよ。」

「つまり何とかして見せろつてこと？」

「まあ、そういうことだな。最初から奇跡をあてにするようじゃ、作戦とも言えんな。」

「だけどこれしか方法がないの。」

静まり返る会議室。

「嫌なら辞退もできるわ。」

.....

「みんな、いいのね？」

無言の返答

「一応規則だと遺書を書くことになってるけど・・・どうする？」

「おいおい、最初から死ぬこと前提に話すなよ。」

「コウスケの言う通りよ。」

「私も死ぬつもりはありません。」

「僕もです。」

「すまないわね。・・・終わったらステーキをおごるから。」

(ステーキ・・・だと！)

「なに！ほんとにか！ちゃんと覚えておけよ。」

コウスケは興奮気味に言う。

そんなコウスケを見てパイロット三人はジト目だった。

ミサトは嬉しそうだ。

「約束する。」

「うっしや〜！」

「うわ〜い。」

シンジの気の抜けるような返事。

「忘れないでよ。」

「期待してて。」

と言つてミサトは出ていった。

途端に子供たちの顔が変わつた。（一人は無表情のままだったが・・・）

「・・・ごちそうと言えばステーキで決まりか。」

シンジが嬉しくなさそうに言つた。

「今どきの子供がステーキで喜ぶと思つてるのかしら。」

「なんだと？ステーキの何が悪い！」

（こいつら、ステーキの価値がわからんのか！）

興奮しすぎるコウスケ。

「これだからセカンドインパクト世代つて貧乏くさいのよね。」

「ぐぬぬ・・・」

セカンドインパクトが有つて一番大変だったことは食糧であつた。

気候の変化、海面の上昇による土地の減少、人口の減少により食糧の絶対的な生産量

が減ってしまったからだ。

地域の紛争の理由の主だった原因でもあった。

そんな環境にいたのだからステーキと言えば一つのステータスのようなものだった。

「仕方がないよそんなの」

「しっシンジ君……」

と言ってレイに目を向けた。

「……私も嫌。」

「そんなレイまで……」

レイはただ単に肉が嫌なだけなのだが、そんなことを知らないコウスケはこれがジエネレーションギャップというやつかと思っていた。

「さてと。」

と言ってどこから出したのかアスカはグルメマップを取り出していった。

「折角ご馳走してくれるっていうんだもの。どこにしようかなって。」

嬉々として店を選び始めるアスカ。

「レイも来るのよ。」

「私、行かない。」

「どうして?」

「・・・肉、嫌いだもの。」

「食べたことはあるのか？」

「ウスケはなんとか再起動を果たした。」

「はい。」

「・・・じゃあしようがないな。」

（残念だ・・・）

「なら、何なら行くのよ。」

「・・・」

「あの、ラーメンとか。」

シンジは無難なものを提案したようだ。

「ラーメン?!」

「んん、ラーメンならどうだ？」

「大丈夫です。」

「仕方ないわね。じゃあ、ラーメンにしましょう。だからレイも来なさいよ。」

・・・

発令所では作戦を詰めるためにあらゆるデータ収集が行われていた。

パイロット三人はすでにプラグスーツに着替えている。

「使徒による電波かく乱のため、目標喪失。」

伊吹が報告する。

「正確な位置の特定は出来ないけど、LOST直前までのデータからMAGIが算出した使徒落下予想地点がこれよ。」

リツコがモニターを操作した。

モニターには赤い円が描かれており第三新東京市全体どころか、周囲の山岳部にまで張り巡らされていた。

「広いな。」

「こんなに範囲が広いの?」

「端っこまで随分ありますよ。」

もつともな意見だろう。

「目標のATフィールドをもつてすれば、そのどこに落ちても本部を根こそぎえぐるこ
とができるわ。」

「希望無き解説、ありがとう。」

「ですから、EVA三機をこれらの場所に配置します。」

EVAの配置は赤い円の外縁部にちょうど正三角形を書けるような位置だった。

「そして綾波特務一尉は……。」

そこは円の中心部だった。

「この配置の根拠は？」

レイが尋ねる。

「勘よ。」

「勘!?!」

「そ、女の勘。」

「・・・大丈夫か？」

コウスケが怖々と言った。

「何たるアバウト。ますます軌跡ってのが遠くなつてくイメージね。」

「ミサトさんのくじつて当たったことないんだ。」

皆不安を隠せなかった。

すると通信が入った。

「外部から通信が入っています。」

「つないで。」

モニターにJAの開発者である時田シロウが出てきた。

「お久しぶりです。」

「誰？」

アスカが尋ねた。

「対使徒戦のロボットの開発者だよ。」

（えくと・・・なんだっけ・・・農協？）

「へへ。」

「そのロボットは俺が叩きのめしたがな。」

（何しに来たんだ？）

役に立たなそうという表情をアスカは隠さなかった。

「相当お困りのようなので、少しでもお役に立てればと思ひまして。」

「それは感謝します。」

ミサトが嬉しくなさそうに謝辞を述べた。

「こちらが新たに開発した兵器です。」

映し出されたのはJAとは違かった。

胴体はJAなのだが、足はキヤタピラ、そして肩に主砲らしきものが見えた。

「あれって・・・この前、俺が冗談で言ったやつだよな。」

（ほんとに作ったのか?!）

「ええ、覚えているわ。」

リツコは少々引き気味だった。

「名付けて・・・アローンタンク。」

時田が自慢するように言った。

「ということはATになるのかな？」

「そうです。」

「・・・」

「いや、綾波特務一尉には感謝しております。」

「嬉しくないな。」

コウスケはぼそつと言う。

「ATへの主管システムアクセスコードは希望です。何なりとお使いください。」

「感謝します。」

「では。」

モニターから時田が消えた。

「・・・どう？ミサト。」

リツコが作戦部長としての意見を聞いた。

「あの肩のキャノン砲は使えそうね。」

ATについているキャノン砲は下手な戦車の主砲より大きかった。

「だな、あれで使徒に攻撃すれば速度が落ちるかもしれん。」

「・・・なら落下予想範囲外から砲撃ね。」

「少しは奇跡が見えたかな？」

「かもしれないわ。」

・・・

コウスケは格納庫にいた。

コウスケの役割はEVAを落下地点まで誘導、NNミサイルで使徒を攻撃することだ。

「あまり下手に近づけないが・・・うまくやれば負担が減るな。」

『落下予測時間まであと120分です。』

MAGIから報告が流れた。

「あと110分後に出撃だな。」

コウスケは愛機の調整に集中した。

・・・

「EVA全機配置、充電完了。」

通信機から作戦準備が整ったことを告げられる。

「こちら綾波。現在第三新東京市上空にて待機中。」

「了解。」

すると青葉から報告が入る。

「目標を最大望遠で確認。」

「距離おおよそ250000!」

日向が距離を報告する。

「おいでなすつたわね。EVA全機スタート位置!」

EVAがクラッチングスタートの準備をする。

「目標は光学観測による弾道予測と綾波特務一尉の情報からしか位置を割り出せないわ。よって距離100000までは光学観測、そのあとは綾波特務一尉の情報をもとに4000まで誘導します。後は各自の判断に任せるわ。」

「使徒!おおよそ200000」

「行くよ。」

シンジが厳かに告げる。

「・・・スタート!」

シンジの合図とともにアンビリカルケーブルを外し、疾走するEVAたち。

EVAが走った後はいろいろなものが壊れていた。

吹き飛ばされる車、電車。

えぐられる道路。

そんなものに構わず走り続けるEVA。

さすがに電線は飛び越していた。

そんな様子をコウスケは上空から眺めていた。

「こりゃ、大変だね。」

そうしているうちに使徒はだんだん落ちてくる。

「綾波特務一尉。頼むわ。」

「了解。」

コウスケは愛機を使徒に向け、NNミサイルを時間差で放つ。

使徒はとっさにATフィールドを展開した。

「使徒の落下速度が落ちました！」

「続けて、AT攻撃開始。」

ATが使徒に向け砲撃する。

MAGIの援護を受けたATは百発百中であつた。

「使徒の軌道が変わりました。」

「一番近いのは・・・零号機です。」

「こちら綾波。これ以上は危険だ。危険区域から離脱する。」

コウスケは使徒から離れた。

使徒のATフィールドに触れて爆発などたまったものではない。それにここまで近づいてしまつてはコウスケに打つ手がない。

下手をすればEVAに被害が行くからだ。

使徒は山岳部に落ちていった。

そこに零号機が到達する。

「ATフィールド全開」

零号機が使徒を受け止めた。

落下速度が落ちたので思ったより衝撃が少なかったようだ。

だが……

「くっ……」

レイの苦悶に満ちた声が聞こえた。

零号機の足が少し地面に埋まっていた。

「まずいわ。零号機の機体強度は他の二機に比べたら弱い。このままだと持たないわ。」

リツコが解説するように言った。

「踏ん張れ！レイ！」

コウスケは思わず叫んだ。

「つづれんじやないわよ！レイ！」

アスカも声援を送る。

「あやなみ！」

「初号機のシンクロ率が上がっていきます。」

伊吹が報告した。

見ると初号機は風のようなものをまもっていた。

「・・・音速を超えた！」

戦闘機乗りなら経験したことがあるかもしれない。

コウスケは何度か経験したことから初号機が音速を超えたことを肌で感じた。

零号機のもとにたどり着く初号機。

初号機も加わり使徒が若干押し戻された。

そこに式号機も到達する。

ATフィールドをプログナイフで切る初号機。

切れ目からナイフを使徒に刺す式号機。

途端に使徒がぐにやりと曲り、EVAを包み込んだ。

そして爆発。

コウスケは爆発が止むのを確認し愛機を近づけた。

見るとEVA全機を確認した。

「こちら綾波。EVAを肉眼で確認。座標を送る。」

「了解。」

「状況終了。帰還する。」

こうして奇跡に近い作戦は幕を閉じた。

・
・

発令所に戻るとミサトとパイロット三人がいた。

みんな誇らしそうだった。

「通信機能回復。南極の碇司令より通信が入っています。」

「おつなぎして。」

小さなモニターにSOUND ONLYのロゴが表示された。

「申し訳ありません。私の勝手な判断でEVA三機とも破損してしまいました。責任はすべて私にあります。」

『構わん。使徒殲滅がEVAの使命だ。その程度の被害はむしろ幸運と言える。』

冬月が満足そうに言った。

後にゲンドウが続いた。

『ああ、よくやってくれた。葛城三佐。』

「ありがとうございます。」

そこで通信は終わらなかった。

『ところで初号機のパイロットはいるか?』

「はい。」

『話は聞いた。よくやったなシンジ。』

「へっ? あっ・・・はい。」

シンジは驚いていた。

『では葛城三佐。後を頼む。』

「はい。」

通信は切れた。

・・・

コウスケは後処理を終えてミサトとの約束を果たすために帰路に立っていた。

リニアのシートにはコウスケ、レイ、シンジ、アスカ、ミサトの順で座っていた。

何となくレイとの心の距離に見えるのはコウスケの考え過ぎだろう。

街を見ると道路が車で大渋滞が起きていた。

リニアも帰省する人たちでごった返していた。

だが、人々の顔には一面に安堵と書かれていた。

そんな人々を見ると小さいながらも守れたのだなとコウスケも安心するのであった。
「さあ、約束は守ってもらおうよ。」

アスカが再度確認する。

「はいはい、大枚下してきたからフルコースだつて耐えられるわよ。」

と言ったミスアの顔は少し青かった。

「給料日前なんだけどつていう顔だな。」

「い、いやね。大丈夫よ。」

・・・

五人が言った場所は屋台のラーメン屋だった。

「ミスアの財布の中身くらいわかってるわ。無理しないでいいわよ。レイもラーメンなら付き合うつて言うしき。」

ミスアはほけーとしていた。おそらく皆の気づかずに感激でもしたのだろう。

「とにかく座ろうぜ。」

屋台特有の長椅子に五人は腰かけた。

少し狭かったが・・・

「私、ニンニクラーメン、チャーシュー抜き。」

レイが先陣を切った。

「ニンニクね・・・」

「？」

コウスケはニヤリと笑う。

「シンジ君。ニンニクにおいては好きか？」

「へ？・・・どちらかというと苦手ですかね。」

「ふーん。」

と言いつつちらりとレイを見た。

「・・・変更します。醤油ラーメン、チャーシュー抜き。」

レイがメニューを変えた。

そんな様子をコウスケはニヤニヤと、他の三人は啞然と眺めていた。

「レイ、お前さんはわかりやすいな。」

「？」

その一言で気づいたのか、シンジが赤くなっていた。

「よかったわね。シンちゃん。」

「そうよね。」

ミサトとアスカがうししと笑っていた。

「まあ、こんなところだろう。」

コウスケは咳ぼらいをした。

「碇君はニンニクのおいが苦手、ニンニクを食べた私、碇君に嫌われる。そんなの嫌！」

コウスケがレイの真似をしながら言う。

あまり似てないが・・・

レイは目を見開いて赤くなつた。

「シンジ君と席を変わろうか？」

コウスケはあえてそう言った。

レイはふいっと首を振り一言

「・・・特務一尉のいじわる。」

と言われたので、コウスケは標的を変えた。

「というわけでシンジ君、席を変わろう。」

「いや・・・あの・・・」

シンジは相当恥ずかしいのだろう。

「なに？ シンちゃんはレイの横が嫌なの？」

ミサトも参加した。

「別にそういうわけでは・・・」

「なんだよ、シンジ君。この前、俺の目の前で抱き付いていたのに。」

「ちよ、コウスケさん！」

「事実だろ？それと二人で見つめあつてたしな。あのままだったら、どうなつていたのかな？」

コウスケのニヤニヤは止まらない。

「意外と手が早いよね。シンちゃんは。」

「なら横に座るくらいわけないじゃない。」

などと外野がはやし立てる。

（こんな風にじゃれあつて生きられるんだから、悪くは無いだらう。）

五人がラーメンを食べるにはもう少し時間がかかった。

第19話 新たなる任務

「のんびりと歩くのはやっぱりいいね。」

そう独白するコウスケは、第三新東京市をただ当てもなく歩いていった。

そんな彼を年寄りなんて言う人もいるが、コウスケ自身はあまり気にしていなかった。

道端に咲く花、見たことのない野良猫、新しく掲載されている看板……

休日になんか違った微妙たる町の変化を見つけることが何よりの楽しみだった。

そんな彼は一つの変化を感じた。

「……嫌だな。」

それは悪寒というものだった。

コウスケはひそかにあたりを見回した。

感じた悪寒を気のせいと受け流すことを彼自身が拒んだ。

よく見るとわずかながらこの雰囲気になんか違和感を感じた。

コウスケは注意深く、だがさりげなく観察するとわずかながら殺気を感じる。

その殺気がどこに向いているのかさりげなく見ると、第一中学校の制服を着た少女に

向いていた。

髪の色は空色だった。

「・・・まずいな。」

彼女は本屋に立ち寄った。

コウスケは彼女を追うため同じ本屋に入った。

・・・

「よう、何か探し物か？」

「はい。」

空色の髪の少女―レイが答えた。

「何を探してるんだ？」

「人の心理に関するものです。」

よく見るとレイの手には人の心理に関する本が握られていた。

タイトルから研究者が読むようなものだろう。

「なるほど。だが、それよりももっと良いものがあるぞ。」

（・・・まだ見張ってるか。）

と言つてコウスケは一つの小説を取り出した。

「それはあくまでも学術研究のためだろう？人の心理をもっと知るには、小説や漫画を

読むほうがいいかもしれん。」

(護衛は・・・やられてるな。)

レイはきよとんとしている。

「なんだ？ 読んだことないのか？」

「はい。」

「そうか。」

(俺を警戒しているのか。)

「・・・ダメですか？」

「別にそういう本がダメなわけじゃないが、こういったものを読むのも勉強になるってことだ。」

(単独じゃないな。)

「それより、これからどうするんだ？」

「自宅で待機します。」

(・・・まずいな。)

ガードがやられてる以上、自宅で待機など危険なだけだった。

「なら、俺に付き合ってくれ。レイももつと外の世界を知らないとな。」

(何とかして本部と連絡せんとな。)

「・・・わかりました。」

・・・

本屋を出たが、やはり見張っていた。

幸いにもこつちが気づいていることは、まだ知らないようだった。

おそらく油断しているのだろう。

だが、コウスケの正体が知られている以上時間の問題だろう。

取りあえずコウスケは適当な店に入って物色することにした。

そこはアクセサリーなどを扱う店だった。

コウスケがレイにいろいろ見せるが、特に関心を示さなかった。

不意にレイの足が止まる。

「どうした?」

レイの視線の先には船の錨を模したキーホルダーがあった。

「・・・わかりやすいな。」

レイは動かない。

「いかりだな。それ。」

びくりと反応した。

「欲しいか?それ。」

僅かながら顔が立てに揺れた。

「・・買ってやるよ。付き合ってくれた礼だ。」

といってコウスケはキーホルダーをレジに持っていき清算した。

「ほら。」

コウスケはキーホルダーをレイに渡した。

「なくすなよ?」

「はい。ありがとうございます。」

「かばんにでもつけておけ。」

（明日の学校でどうなるかな?）

「はい。」

と言ってレイは早速かばんにキーホルダーをつけた。

（もう限界だろう。）

すると携帯電話が鳴った。

「はい。綾波です。」

『コウスケ君。』

ミサトからだった。

『レイも一緒に居るでしょ?そのまま本部まで連れてきて。』

おそらくガードが消えたことに不安を感じたのだろう。

「わかった。」

コウスケは電話を切った。

「レイ。このまま本部に行くぞ。呼び出した。」

「はい。」

コウスケたちはそのまま駅に向かい何とか事なきを得た。

・
・
・

コウスケはNERVについた後、発令所に向かった。

「よう、葛城。助かった。」

「無事でよかったわ。レイは？」

「一応、控室に行くように言ったよ。」

「そう。」

ミサトは安心したようだ。

「他の二人は？」

「本部に来るように言ったわ。」

「それが安全だな。」

「今、MAGIを使って背後関係を調べてるわ。」

「と言つても簡単に尻尾はつかめないだろうな。」
「でしようね。」

どう考えてもプロだった。

そんな連中が簡単に尻尾を出すはずがない。

「それよりもこれからだな。」

ミサトの顔には？が浮いていた。

「レイだよ。あいつは一人だろう？」

「・・そうか、うちのガードは簡単にやられちゃったしね。」

「多分狙われるだろう。」

「・・でもうちの管轄じゃないのよね。」

「そこが難しいな。」

レイの管轄はゲンドウなのだ。

ゲンドウが首を縦に振らなければ、どんな嘆願も実行できない。

NERVの総司令は絶対的な存在なのだ。

すると黒服が現れた。

「綾波特務一尉、碇司令がお呼びです。」

「わかった。」

「なに？何かしたの？」

「おまえじゃないんだから。でも気になるな。」

「まあ、いつてらっしゃい。」

コウスケは黒服の後に続いた。

・
・
・

「綾波特務一尉をお連れしました。」

ドアは「入れ。」という言葉とともに開いた。

相変わらず暗くて辛気臭い部屋だった。

（よく見ると天井に樹のようなものが書かれているな。）

などと少しは部屋のインテリアに気を回す余裕ができているコウスケだった。

「綾波特務一尉、参りました。」

目の前には二人の男。ゲンドウと冬月がいる。

「今日から新しい任務に就いてもらう。」

ゲンドウが顔の前で手を組みながら言う。

ゲンドウから紡がれた言葉に啞然とするコウスケ

「申し訳ありません。新たな任務についてもう一度伺いたいのですが・・・」

「・・・ファーストチルドレンの保護者代理だ。それに伴いファーストチルドレンと同居し

てもらおう。場所は葛城三佐の隣だ。」

（レイの保護者代理？意味が解らん。・・って同居?!）

「なぜ自分なのでしょうか？」

あくまでもコウスケは冷静に答えた。

「他の人間には無理だからな。」

ゲンドウが満足そうに言った。

（よくわからん。自己完結しているのか？）

「仰る意味が解りません。」

「碓。それで納得しろとは無理な話だろう。」

冬月がフォローする。

が、ゲンドウは何も答えない。少し不満そうだ。

（碓司令って口下手なんだな。）

冬月がため息をついた。

「代わりに私が説明しよう。」

「お願いします。」

「レイについてはもう知っているな？」

どのレベルでという疑問がつくが、コウスケは大凡のことならミサト以上に知ってい

る方だろう。

だが、それをここで出すわけにもいくまい。

「ファーストチルドレンということと、経歴くらいしかわかりませんが・・・」

「そんなはずあるまい。セントラルドグマに行ったのだろうか？赤木博士と。」

（まあ、知られてるわな。）

「・・・」

「最近チルドレンを狙う組織が多くてな。」

今日のことを考えれば言われなくてもわかる。

「シンジ君とアスカ君は葛城三佐と同居しているからいいのだが・・・」

「なるほど、レイは一人・・・だからですか。」

「話が早くて助かるよ。」

「では、なぜ自分なのでしょう？同居するなら同性の、例えば赤木博士とか、伊吹二尉とか・・・」

普通に考えればコウスケの言うことの方が正しいだろう。

「ダメだ。二人はダミーシステム開発に携わるからな。」

（なるほど、レイを見て平然としていられないということか。）

ダミーシステムと聞いてなぜと答えなかった地点で、何が行われているかを知ってる

と二人に言っているようなものなのだが、コウスケはそこまで考えが及ばなかった。

「ならば、他の職員にでも・・・」

「それこそダメだろう。」

「なぜです?」

「レイの経歴が複雑すぎるからだ。下手をすれば他に漏れかねないからな。」

既に冬月はコウスケがレイのことを知っていると確信して話している。

無論ゲンドウもだ。

(だな、人のクローン・・・叩かれるには十分すぎる。)

「それに他の職員がレイのことを知ったとき、レイを忌避する可能性がある。」

(十分に考えられるな。)

セカンドインパクトを経験したもので構成されるNERV。

そのためセカンドインパクトを起こしたという使徒に対して、少なからず思うことがあるはずだ。

その使徒とのハイブリットである綾波レイ。

下手をすればとんでもない勘違い、筋違いの果てに殺される、あるいは他の研究機関に誘拐される可能性がある。

「だが、レイのことを知る君ならばそんなことはあるまい。」

「それで自分ですか。」

「そうだ。」

沈黙が訪れる。

コウスケは必死に状況を整理していた。

二人はそんなコウスケの反応をうかがっているようだ。

「・・・お二人は何を成そうというのですか？」

コウスケは別に期待はしていなかった。

だが、思わぬ人物から思わぬ返答を得た。

「我々の目的は人類補完計画にあった。」

「人類補完計画？」

「碇。いいのか？」

「構わん。・・・人為的にサードインパクトを起こすことだ。」

「な！」

NERV職員はそのサードインパクトを阻止するのが目的なのだ。

だが、実際やっていることがそれを起こすためと聞いて驚かすにはいられない。

「人は群体生物だ。それゆえに心に空いたものがある。それを一つにまとめ完全なる単体生物として人工的に進化させる。それが人類補完計画だ。」

「それでは今までやってきたことは無駄だったと・・・」

「いや無駄ではない。使徒を放置すれば人類は駆逐されることになるだろう。」

「・・・確かに。」

使徒が放置されれば何年かかっても否応なしに人類は絶滅だろう。

「それに人類補完計画はSEELEの考えるシナリオだ。」

「SEELE?」

「世界を裏で操るものたちだ。国連の人類補完委員会はそのメンバーで構成されている。」

人類補完委員会の名前は国連軍にいたコウスケも聞いたことがある。

何でも国連の諮問機関で決定権を持っているほどの組織であった。

「・・・なるほど、人類補完委員会というのは隠れ蓑というわけですか。」

コウスケは危機感を感じていた。

サードインパクトを起こそうという連中が国連の決定権を持っているなど、悪夢ではない。

「SEELEがということとはあなたたちは違うのですか?」

目的が同じならわざわざSEELEを出す必要はない。

それがコウスケには引っかかった。

「我々の目的はそれを利用し、ユイに会うことだった。」

(ユイ?・・碓ユイか)

「既に死亡しているのでは?」

「公式ではそうなっているが、実際はいる。初号機の中に。」

その言葉にリツコの「EVAには人の魂が宿らせてある」という言葉を思い出していた。

「だから初号機にはシンジしか乗れん。」

コウスケはもしやと思うものがあつた。

「弐号機には・・まさか。」

「アスカ君の母親がいる。」

(母親とその子供・・専用機なのはそのためか)

「レイはどうなのでしょう? 親がないはずですが・・・」

「レイこそ特殊だろう。他の二人には無いものがある。」

「・・使徒の遺伝子ですか。」

今まで知りえたものから答えをはじき出すコウスケ。

「それと第二使徒の魂と呼べるものだ。」

「第二使徒?」

「最初に会敵した使徒は三番目だ。第一はアダム。第二をリリスという。」

(第二使徒の魂・・・ということは地下にあるのは・・・)

「・なるほど、使徒はリリスを目標しているということですか。囿というわけですか。」
「そうだ。そしてアダムは今、我々の手の内にある。そして人類補完計画の要であるロ
ンギヌスの槍も。」

(ロンギヌスの槍って何だ?)

「切り札はそろっているということですか。」

ゲンドウは微動だにしないが、コウスケはそれを是と受け取った。

「それで何を成そうとこののですか? どうやら目的が変わったような印象を受けます
が・・・」

「ユイの意志を受け継ぐ。子供たちに未来を見せる。」

「どのような未来ですか?」

「人が人として生きていく未来だ。群体生物として。」

(つまりは人類補完計画をつぶすということか。だが・・・)

コウスケいまいち信用できなかつた。

「碇司令。司令の仰ることはわかりますが、信用ができません。」

冬月は当然だと言いたげだつた。

「なので、サンングラスを外していただだけますか？」

「・・・わかった。」

冬月が驚いていた。

ゲンドウがサンングラスをする理由が何かを知っているからだ。

ゲンドウがサンングラスを外した。

その中にはしつかりとした視線でコウスケを見る目があった。

「なるほど、わかりました。どうやら思った以上に信頼していただけなのですな。」

ゲンドウは無言だったが、目が肯定と言っていた。

「となると、これからが大変ですな。」

世界を牛耳る相手と喧嘩するのだ。

「それは我々に任せてもらう。」

「わかりました。」

コウスケはゲンドウを見た。

人相が確かに悪いが・・・

「シンジ君は司令に似ているのですな。」

この発言には二人も驚いていた。

シンジは母親に似ているのだと噂話で聞いているが、ゲンドウからサンングラスと髭を

取り除けば、やはりゲンドウのほうに似ていると思うコウスケだった。

「となると全力でレイを守らないといけませんな。シンジ君に司令と同じ道を歩かせるわけにはいきませんから。」

「なかなか痛いな。礎。」

と冬月が言うがゲンドウは無視した。

「では・・・」

「新たな任務については承知しました。・・・でレイはどうすればいいでしょうか？」

「レイは我々の計画のために存在した。そのため人として必要なことを教えていない。」

最初に出会った時のことをコウスケは思い出していた。

自分というのがないレイ

「それは私の罪だ。だが私では出来ないのだ。それを君に頼みたい。」

「つまりは普通に接していればいいということですか。」

「それは君に任せる。」

(おいおい、いくらなんでも無責任すぎだろ。)

と思うが、顔には出さない。

「しかし、今聞いた話を自分が他人に話すとは思われないのですか？」

「それも君に任せる。だが加持一尉はダメだ。」

「・・・日本政府とつながっているからですか？」

「それだけではない。・・・SEELIEに知られるわけにはいかない。」

（加持・・・そこまで節操なしだったのか。）

NERV、日本政府、そしてSEELIEのトリプルスパイ

今の話はコウスケを驚かせるのに十分だった。

「わかりました。」

（となると・・・葛城にも黙っておくか。）

コウスケの返答を聞き、ゲンドウはカードを取り出した。

「これを持っていたまえ。」

「これは？」

「最高レベルのカードだ。私と冬月、赤木博士、そしてレイのみが持っているものだ。」

（レイも持っているか・・・計画の要というのは嘘じゃないんだな。）

「自分で五人目ですか。」

「ああ。」

「・・・ありがたく頂戴します。」

コウスケはカードを受け取った。

「MAGIのデータベースにあるすべての資料を閲覧可能だ。必要に応じて使いたま

え。」

コウスケはそれを信頼の証と認識した。

「以上だ。」

「何か聞きたいことはあるのかね。」

冬月がゲンドウに促されるように聞いた。

「ここが戦場になるというのはすでに織り込み済みなのですね？」

「ああ。」

「ということは使徒があと何体来るかもご存じなのでは？」

「当然だ。使徒はあと7体と1体来る。最後の使徒はすでに分かっている。」

（7体と1体・・・わざわざ分ける必要があるのか？）

「最後の1体はどういうものでしょうか？」

「同じ人間だよ。」

「は？」

「人も使徒なのだ。第二使徒から生まれた18番目の。」

（人も使徒？・・・嘘じゃないんだな。）

「ということは壮大な兄弟げんかということですか。」

「喧嘩ではない戦争だよ。お互いの生存の権利をかけた。」

「チップが大きすぎますな。」

「だから負けられないのだ。」

「ちなみに最後の使徒・・人間に負けた場合はどうなるのでしょうか？」

「SEELIEのシナリオどおりになるだろう。」

（サードインパクトですか・・・）

「となるとその日まで対人戦を想定した部署が必要ですね。」

「それについては検討してある。」

（伊達に司令はやってないか・・・）

「自分からは以上です。」

（必要なら調べられるからな。）

「レイのことをよろしく頼む。」

・・・

総司令執務室を後にしたコウスケはいつもの場所にいた。

「まさかこうなるとは・・・」

今日知りえたことは正直信じられないものだった。

これが一般人から聞いたものなら妄想と片付けられるが、ゲンドウから聞いたのであるならばそうは言ってられない。

「何にせよ、やれることはやっとなかないとな。」
と言いつつもコウスケは煙草をふかすだけであつた。

第20話 人として

「・・・というわけでこれから一緒に暮らすことになる。」

コウスケはテストが終わった後、レイに会っていた。

横にはシンジとアスカ、ミサトがいた。

「これからはお隣さんだな。」

「そうですね。」

「よろしくね。コウスケ。」

シンジとアスカが言った。

「でも、大丈夫なの？」

と聞いてきたミサトの顔はニヤニヤだった。

「お前と一緒にするな。」

「でも、よく碓司令が許したわね。」

「碓司令からよろしく頼むと言われたんだ。」

皆が意外そうな顔をしていた。

いや、よく見るとひとりだけ不安そうな雰囲気だった。

「今日はもう何もないだろう？」

「・・・はい。」

レイの返事はいつもと比べれば妙にはつきりしない返答だった。

(そういえば碇司令が計画のためにいたと言っていたか・・・)

「・・・そのことについては後で話すよ。後から碇司令からも話が来るかもしれん。」

レイには聞こえるような声でコウスケは言った。

レイはなぜ知っているのかと言いたげであった。

「なにになに？二人だけの秘密ってか？」

何も知らないミサトがニヤニヤとしながら言った。

「嬉しそうに言うな。それにそんなものじゃない。」

「またまたく、照れちゃって。」

(面倒だな・・・よし。)

コウスケは携帯電話を取り出した。わざとスピーカを最大にして皆が聞こえるよう

にした。

『私だ。』

それはゲンドウの声だった。

一同が驚愕する。

「綾波です。」

『どうした。』

「葛城三佐がレイとの同居にいらぬ疑惑を抱いているようです。」

「ちよ・・コウスケ君。」

さすがのミサトも焦っていた。

『どのようなものだ。』

「自分とレイにただならぬ関係が有るとのことです。」

『・・・わかった。こちらで対処する。』

「ありがとうございます。」

コウスケは電話を切った。

途端に館内放送が流れる。

『葛城三佐。至急、総司令執務室にお越しく下さい。』

「よかったな。葛城。」

「よくないわよー！」

と言ってミサトは走って部屋を出ていった。

「なんで父さんと・・・」

とシンジが聞いてきた。

「そりや、レイを預かるからな。前の保護者と連絡できるようにしておいた方がいいだろう。」

「でも、碓司令とのホットラインがあるなんて普通じゃないわ。」

アスカが疑うようにコウスケを見ていた。

(俺と碓司令の関係か……)

「いわば……同志みたいなものだな。」

皆の目が点になっていた。

いや、一人は明らかに動揺していた。

その一人はコウスケを何か怖いもので見ると見るような目であった。

「どうした?レイ。」

「……何でもありません。」

(計画に加担していると思っているのか。)

「……計画は破棄されたよ。」

二人は何ののかか解らずにいたが、レイは気づいたようだった。

「計画って何よ。」

アスカがおずおずと尋ねる。

「いずれわかるだろう。いや、俺が話す。」

コウスケの真剣な目にアスカは押し黙った。

「・・・コウスケさん。」

「何だ？ シンジ君。」

「信じてもいいんですか？」

期待と不安が絡み合う表情だった。

「ああ、いいぞ。もし俺が裏切ったのなら、EVAで踏みつぶしてくれてもいい。」

「・・・わかりました。」

と言ってシンジは考え込んでしまった。

(疑ってるか・・・まあ、しょうがない。)

「別に悪いもんじゃないから、それは安心しろよ。」

だが、納得がいかない。

顔にそう書いてあった。

「今日は帰ろう。レイも荷物をまとめなきゃいかんだろう。」

・・・

ちなみにミサトはゲンドウから減俸を言い渡されたらしい。

・・・

コウスケは途中でトランクケースを買い、レイとともにレイのマンションに行った。

部屋ではいそいそとレイが荷物をトランクケースに詰め込んだ。

途中で業者が入り込み、ベツトを持って行った。

ふとレイの手が止まる。

レイの手の先には眼鏡があつた。

眼鏡はひびが入っており、フレームも少し歪んでいた。

「レイのものか？」

レイは答えなかつた。

コウスケが眼鏡を見ると、そこにはG・I k a r iと刻まれていた。

「・・・碇司令の眼鏡か。」

(ここに置いてあるつてことは相当大切なものなんだろうな。)

レイはやはり答えなかつた。

「持つて行かないのか？」

「・・・もう、私には必要ありませんから。」

寂しそうにレイは答えた。

(必要ないか・・・)

「なぜそう思う。」

「計画は破棄された・・・もう私はいらぬ。」

(思ったより根が深いな・・・)

「・・・だとしたらなぜレイは無事にいるんだ？」

「・・・意味が解りません。」

「レイは計画に必要だった。そのために禁忌を冒してまで生み出した。」

レイは俯いた。

「いわば、レイの存在はNERVにとって、碓司令にとって罪の証なんだよ。だが、計画は破棄された。となると一番厄介なのはレイなんだ。」

コウスケはレイを見つめながら淡々と言う。

レイはいっそうに暗い雰囲気醸し出していった。

「碓司令は子供たちに未来を見せたい・・・そう言った。この意味が解るか？」

レイが振り返りコウスケを見るが、目には怯えが含まれていた。

(先日のあの件が思い出されたか。変に深読みしすぎだな。)

コウスケがレイに向かって発砲した時のことだ。

「勘違いしているようだな。そんなものじゃない。」

コウスケは優しく言った。

「・・・碓司令はレイに綾波レイとして生きろと・・・そう言っているんだ。」

レイの目が大きく開かれた。

「俺は碇司令に人として預かってもらいたいと頼まれたんだ。」

「私は・・・望んでいいんでしょうか・・・」

その言葉は不安で彩られていた。

「それはレイ次第だな。人として生きるかどうか、それは自分で決めるんだ。それが人というものだ。」

それでもレイは不安そうだった。

「少しの違いが何だかって言うんだ？人にもいろいろいると云ったろ？俺が会ってきた人の中には手足が無い者、遺伝性の持病を持つ者もいたぞ。そんな人たちは普通の人に比べれば確かに違う。」

コウスケは続けた。

「俺の昔の友人にもいたな。確か・・・若年性の糖尿病だったか？彼は薬なしでは一日と生きていられない体だった。」

レイはなにが言いたいのかという顔だった。

「普通の人と比べれば確かに違う。注射器を見るたびに他人とは違うということを思い知らされると常々言っていたな。だが、それでも生きている。今はどこにいるか知らんが、たしかに生きている。」

コウスケは懐かしそうに言った。

「レイの場合はもつと複雑だが・・・まあ、結局は人として生きる意志があるかないかということだな。」

コウスケはレイに視線を戻した。

「・・・その眼鏡は大切なものなんだろう？なぜ大切なんだ。」

「・・・絆をくれた最初の人だったから。」

コウスケは過去形で話したのが気になった。

（碓司令を否定し始めたか・・・そんなつもりはないんだけどな。）

「その人がレイに人として生きてほしいと言っている。」

レイは眼鏡を見ていた。

「それにシンジ君の言葉を覚えているか？普通の女の子という・・・これはシンジ君がレイのことを知っても人として見ているということだろう？」

レイは何かに気づいたようにピクリと動いた。

そしてコウスケを見た。

（シンジのほうが上なのか・・・）

「あなたは・・・」

すこし躊躇っていたが

「あなたは どう見ているんですか？」

期待と不安が見て取れた。

「・バカだな。戦友という言葉は人にしか使わないよ。動物とか道具だったら相棒がせいぜいだ。だから俺は愛機を戦友とは呼ばない。少なくとも俺はな。」

いつの間にか不安という言葉が消えていた。

「レイを不当に扱う者がいたら、碇司令、副司令が政治的に、俺が物理的に叩きのめしてやる。ついでにシンジ君にもEVAで暴れてもらうか。」

というところコウスケは少し顔をしかめた。

「・・・シンジ君なら喜んでやりそうだな・・・」

コウスケの脳内では初号機が咆哮していた。

「まあ、そういうことで少なくともレイを人だという者が4人はいるんだ。・ああ、赤木博士を忘れてたな。」

「赤木博士？」

「レイとシンジ君をどうにかしてほしいと言っていたからな。」

レイは驚いているように見えた。

(・・・赤木の悪意を何となく感じていたのか？以外と鋭いのかもれんな。)

「そんなことはどうでもいいな。それでレイはどうする？」

「・・・これからよろしくお願ひします。」

その顔は髪の色に似て晴れ晴れとしていた。

「よろしく。レイ。」

そして荷造りを再開した。

だがレイは眼鏡を持って行こうとしなかった。

「持つて行かないのか？」

「はい。」

(碓司令へのわだかまりがまだあるのか?)

レイは眼鏡のほうに向いておりコウスケからはレイの顔が見えなかった。

「・・・形として見える物だけが絆じゃないもの。」

意外な答えを得た。

「そうだな。」

コウスケは嬉しく思っていた。

絆というものを形あるものでしか求めることができなかった少女。

それがEVAであり、またゲンドウの眼鏡でもあった。

だが、それだけが絆のあり方ではない。

むしろ目に見えないものの方が多い。

(過去への区切りか・・・成長しているんだな。・・・俺はどうだろうか・・・)

「・・・じゃ、行くか。」

「はい。」

コウスケとレイはマンションを後にした。

チエストに置かれた眼鏡はいびつに歪んではいたが、太陽の光を浴びてキラキラと輝いていた。

・・・

「なんとまあ、手際のいいことで・・・」

コウスケたちは一度コウスケの家に行ったのだが、待っていたのはガランとした部屋だけだった。

ご丁寧に清掃もされていた。

もしかよと思い、あてがわれた新居に行ってみたら玄関で戦友たちの写真が迎えてくれた。

「断るとは思わなかったのか・・・」

家具の配置なども終わっていた。

部屋の間取りは依然見たミサトの家と同じだった。

「まあいいか。」

取りあえず手間がかからなかっただけかもしれませんだと思ふことにした。

コウスケの部屋は葛城邸というアスカの部屋（旧シンジの部屋）になり、レイはミサトの部屋となった。

これはコウスケが狭い部屋のほうが落ち着くからという理由だった。

「しかし、恐ろしいほど私物が無いな。」

コウスケはレイの部屋を見ながら言った。

実際レイの部屋はクローゼット、ベット（以前コウスケがあげたもの）、机、本棚以外見当たらない。

本棚には何やら難しそうな本が数冊あるのみで、机には教科書とノート以外見当たらない。

クローゼットに至っては学校の制服が数着ぼつんとぶら下がっているだけだ。

クローゼットの引き出しには下着も有るが、コウスケは開けて確認するつもりはない。

「変ですか？」

というレイの顔は暗かった。

（ちよつと配慮が足りなかったか・・・）

「・・・これから増やせばいいだろう。時間はある。」

「はい。」

(とはいっても俺ではどうしようもないな．．．葛城は却下。赤木．．．同じく却下。伊吹二尉．．．気後れする可能性があるな。アスカ．．．不安だな。)

女性にしかわからないことを誰に頼むかコウスケは迷った。

(洞木さん．．．俺と接点がない．．．)

ヒカリが一番適任かと思つたが、コウスケ自身とあまり接点がないのがためらわれた。

(他に誰がいるんだ?)

と考えて

(いっそのことシンジとか．．．ダメだな。司令と副司令は時間ができないだろう。加持．．．絶対にダメだ。許さん。)

加持はなぜだめなのか。

それは加持にまつわる女性関係のせいだった。

ほとんどが噂だが、NERVでの彼を見ると確信に迫るものがあつたのだ。

そんな男にレイを任せると考えるとどんな悪影響があるかわからない。

もちろん加持もそこまでバカではないが用心に越したことはない。

「誰かいらないかな．．．」

「?」

レイが不思議そうな顔をする。

「・・・ああ、女性にしかわからないものがあるんだ。それを誰に頼むか・・・」
と言ってコウスケはぴんと来る人物を見つけた。

「この前、赤木のところにいた職員・・・名前が出てこない。」
童顔で茶色のショートカットというのは思い出されるが、肝心の名前が出てこなかった。

ちなみに白衣を着ていたことから上級職員であることはわかる。

「・・・後日赤木に聞けばいいか。」

ということでは保留することにした。

「そういえば、もう夕食の時間だな。」

時計を見ると6時を回っていた。

・・・

コウスケは冷蔵庫から余っている食材を取り出して簡単に調理したものをテーブルの上に並べていた。

ちなみに料理は野菜を中心としたものであった。

レイは椅子にちよこんと座って待っていた。

「よし、食事にするか。」

「はい。特務一尉。」

「・・・」

「どうしました？」

「家で特務一尉はやめてくれ。気が休まらない。」

「はい。」

と言ってレイは考え込んでいた。

(なんて呼ばれるかな?)

とコウスケは少し期待していた。

「・・・お兄ちゃん」

「ブホッ！」

コウスケは思いつきり咳込んだ。

「大丈夫ですか？お兄ちゃん。」

(何だ？何か罪悪感が・・・)

「なぜその呼び方なんだ？」

「同じ綾波だから大丈夫だと聞きました。それにお兄ちゃんのほうが喜ぶとも聞きました。」

コウスケのこめかみには青筋が浮かんでいる。

「・・・誰に。」

「葛城三佐と赤木博士。」

「あいつらく!!!」

二人の名前が出てきて帰り際にレイに何か言っていたのを思い出した。今頃二人は大笑いでもしているのだろう。

ちなみにこれが原因で一騒動起きるのだが、それは別の話である。

「その呼び方はダメだ。」

「ダメですか？」

「ダメだ！止めるんだ！命令だ！」

「はい。」

レイがしゅんとしているのは気のせいだとコウスケは思うことにした。

(なんか、疲れた・・・)

「・・・特務一尉でいい。」

コウスケさんと呼ばせてもよかったのだが、コウスケはそこまで考えが及ばなかった。

よほどお兄ちゃん発言が効いたのだろう。

「はい。」

「とにかく食事にしよう。」

と言つてコウスケは気を取り戻した。

するとレイは何かを取り出した。

「なんだ？それ？」

見るとカプセルを取り出していた。

「食事です。」

「はあ？」

「食事です。」

レイは変わらない口調で淡々と言う。

「・・・誰にもらつたんだ？」

「赤木博士です。」

「あいつは・・・」

とはいつてもリツコはレイにカプセルを渡すつもりはない。

だが、それしか知らないレイが要求するので仕方なく渡しているだけだ。

(レイが細身なのはこれのせいなのか？)

「それは今すぐに廃棄だ。」

と言つてコウスケはカプセルをゴミ箱に放り込んだ。

「これからはあれを飲まなくていい。」

「なぜですか？」

「食事というものはあんなものじゃない。」

「？」

「こういうった料理を楽しみながら食べるのを食事というんだ。」

「？」

（こうして人と食べることがなかなかな．．．あつたな。俺と。確か綾波定食だったな。）

忌々しい定食が頭に浮かぶがすぐに取り去った。

「まあ、食べてみろ。」

コウスケは茶碗をレイに渡した。

レイは普通に食べていた。

「どうだ？」

「カプセルよりおいしいです。」

「当たり前だ。カプセルよりまずい料理なんて．．．」

と言ってコウスケは一人の女性が思い浮かんだ。

思わず頭を抱え込むコウスケ。

「あつたな．．．非殺傷兵器が．．．」

コードネーム「MC」

思い出すだけでも恐ろしいものだ。

(違う。あれは兵器だ。兵器なんだ。兵器以外の何物でもない！)

このままでは思考のループに入りそうだったので話題の転換をすることにした。

あくまでも平静を装って・・・

「これからはこういうものを食べるからな。」

「はい。」

「まあ、シンジ君の方がもつとすごいからな。」

「碓君?」

「ああ、シンジ君の才能だな。修行すればいい料理人になれる。」

「・・・食べてみたい。」

「家は隣だからな。頼めばやってくれるんじゃないかな?」

と言つてコウスケは気づいた。

「そういえば、シンジ君は隣だったな。」

「!」

「よかつたな。碓君の近くに来て。」

ニヤニヤが止まらない。

こうなったコウスケはミサトと同類になってしまふ。

唯一の違いはビールが無いことだろう。

レイの箸が止まっていた。

「学校にも一緒に登校できるな。」

みるみる赤くなっていくレイ

「ん〜？もしかして一緒に登校する場面を想像したのか？」

何も答えないレイ

「ほら、答えてみろよ。」

「・・・お兄ちゃんのいじわる。」

それはレイの反撃だった。

思わぬ痛手を負ってしまったコウスケ

「すまん。レイ。俺が悪かった。だからそれは許してくれ・・・」

とこのように夕食の時間は過ぎていった。

・・・

コウスケは食後の紅茶を飲んでいた。

レイは風呂に入っている。

（そういえば、寝間着はあるのか？）

最初に気づくべきであった。

(・・・期待はできないな。)

レイの私物を見れば容易に想像できた。

(今日は俺のを貸すか。)

となるのだが、嫌な予感がした。

(・・・待て。じゃあレイは脱衣所に何を持って行ったんだ?)

猛烈に嫌な予感が襲ってくる。

(服を・・・)

時は待ってくれなかった。

「ブホッ！」

コウスケはまたもや咳込んだ。

「大丈夫ですか？特務一尉。」

なぜなら

「なんて恰好をしてるんだ！」

首にタオルをかけただけの恰好だった。

「？」

「ちよっと待ってろ！」

と言ってコウスケは自分の部屋に大急ぎで駆け込んだ。
そして服を持って来た。

「ドアを閉めてこれに着替えろ。」

コウスケはレイを押し戻した。

（なんてこつたい・・・碇司令、赤木・・・恨みますよ。）

するとレイは着替えて戻ってきた。

服が大きくぶかぶかであつたが・・・

「レイ。風呂に入ったら必ず着替えて出て来い。」

「なぜですか？」

「・・・簡単に裸を見せちゃいかん。」

「・・・はい。」

しぶしぶながらレイは了承した。

（思ったより大変だな、こりや・・・）

こうして共同生活の一日目が終わった。

多くの課題を残しながら・・・

第21話 ハードウェアとソフトウェア

レイとの同居生活が始まりすでに数日が経っていた。

一般常識というものが著しく欠如していた。

それはレイに罪があるわけではなく、その保護者だった者の罪である。

それでもコウスケのできる限り教えるものの、男性と女性の壁はさすがに突き抜けなかった。

だが以外にも救いの手は近くにあった。

横の葛城家に住むアスカである。

一度何を思ったのか綾波家を訪れたことがあるのだ。

その時レイの部屋を見て驚愕したのであった。

「レイ！明日はあたしに付き合いなさい！」

そのあとと帰ってきたコウスケが見たものは女性に必要な日用品を持ってポクとしているレイだった。

そのあとも何かしらレイの面倒を見るアスカを頼もしく思うが、高級品ばかり選ばないでくれとは言わずじまいであった。

一方、葛城家のもう一人の同居人であるシンジもレイに料理を教えている。同居初日目に料理の味を占めたレイは恐ろしいほどの大食いになっていた。

相変わらず肉はダメなのだが、その食べる量はコウスケと同じくらいであった。

成人男性しかも軍人と食べる量が同じ・・・

それでもって体型は変わらないのだ。

(しようがないか、食事の楽しみを覚えたばかりだからな・・・)

もしかしたら碇ユイも似たようなものだったのではと考えるコウスケであった。

そしてレイはただ食べるだけでは飽き足らず料理を試してみたいと言うのであった。

その講師役にコウスケはシンジを選んだのだ。

シンジは意気揚々と快諾した。

「よかつたなシンジ君。」

「なつ何がですか？」

「レイに堂々と会えるチャンスじゃないか。」

「・・・」

「シンジ君はレイのことどう思っているのかな？」

この時シンジは嵌められたと思ったそうだ。

ちなみに煙草はペランダで吸っている。

コウスケがレイに配慮したためだ。

喫煙所の番人はそこらへんのマナーもちゃんとしていた。

NERVはというと組織の体系に一部変更があった。

作戦部として一括りにあったものが作戦局として再編された。

それに伴い一課、二課、三課と分かれた。

一課は作戦の立案、課長にミサト。

二課はEVA以外での支援行動、課長にコウスケ。

三課は市民の避難誘導およびシエルターの管理となった。

そして作戦本部として各課の課長と副課長が選ばれた。

作戦本部長にミサト、副部長にコウスケが選ばれた。

それに伴いコウスケはミサトと同じ形のジャケットを着ることになった。

色は緑だ。

なぜ作戦部が再編されたのか

これは組織体系を見直すことにより、より効率的に運用するというのが目的であった。

だが、一課、二課、三課の他に「零課」が存在するらしい。

零課は対人戦闘を行う部署であるらしい。

らしいというのは、それは噂以上のものではなかったからである。

一課課長で本部長を務めるミサトですら知らないものである。

総司令たるゲンドウなら知っているだろうが、それを表立って確認する者などいない。

加持などもそんなものはないと断言するほどだった。

・
・
・

コウスケは朝のトレーニングを終えて朝食の準備をしていた。

料理を覚えたレイも夕食の準備を手伝うが、朝はコウスケだけが行っていた。

なぜならレイは朝によく葛城家にお邪魔しているからだ。

コウスケは時間を確認する。

「そろそろ行くか。」

コウスケは家を出る。

NERVに行くのではない。

「・・・痛い。」

レイはつねられた頬をさすりながら言う。

「行くぞレイ。朝食だ。」

つねった本人であるコウスケが言う。

(今日は葛城か・・・)

当のミサトは爆睡している。

かなりだらしのない寝相だった。

(はあく、29の女性なのか?こいつ・・・)

そしてレイはよく無事だったなとも思った。

ちなみに昨日はシンジ、一昨日はコウスケだった。

(明日はアスカだな。)

などと予想を立てることのできるコウスケだった。

・・・

「今日は本部で試験があったな。」

「はい。」

「遅れると赤木がうるさいから時間だけは気を付けろよ。」

「はい。」

黙々とレイは朝食を平らげる。

(ほんとによく食うな。)

「・・・レイにはつらい思いをさせるな。」

今日行う試験は裸でEVAとシンクロするというものだった。

それが何を意味しているのか？

つまるところダミーシステム、ダミープラグの開発にかかわることだった。

コウスケとしては代わられるものなら代わりたい。

だが、コウスケではEVAにシンクロできない。

「問題ありません。」

「・・・そうか。」

というコウスケの顔はすぐれなかった。

試験そのものがレイが人ではないということを言っているからである。

なぜならダミープラグにはレイの素体が使われているからだ。

レイをよく見ると問題ないという割には嫌そうな顔をしていた。

「今回と、次の試験で終わりだ。それまですまないが耐えてくれ。」

コウスケはそう言うしかなかった。

万が一パイロットが出撃できないとなった時、それは使徒に対する手段を失うと同意

義であった。

そしてそれは人類の滅亡。

楽しくない未来図である。

それはコウスケの望むものではないし、レイ自身もやつと人として生きようとするの

に邪魔なものだった。

だからこそレイは気丈にふるまえると考えるコウスケだった。

・・・

NERVに登庁したコウスケを待っていたものは忙しく動き回る技術局の人たちであつた。

今日はMAGIの定期検診の日なのだ。

「どう？リツコ。MAGIの診察終わった？」

「大体ね。約束通り今日のテストには間に合わせたわよ。」

「さっすがリツコ。同じものが三つもあつて大変なのに。」

と言つてミサトは近くにあつたマグカップを手に取りコーヒーを飲んだ。

「・・・冷めてるわよ、それ。」

ミサトの顔がうえつという顔になる。

「赤木。わざとやつたら。」

「ミサトが悪いのよ。勝手に飲むから。」

「だな。」

ミサトは無言だった。

『MAGIシステム再起動後、自己診断モードに入りました。』

『第127次定期検診異常なし。』

『了解。みんなテスト開始まで休んでちょうだい。』

「ほんとに頑張ってくれてるな。」

「まあね、手抜きして使徒にやられたなんて冗談じゃないもの。」

「ミサトはいいな。使徒が来ないと仕事が無いもんな。」

「違うわ。ミサトの場合は押し付けてるのよ。」

「そんなわけないでしょ！あたしだっていろいろ・・・」

「その割には忙しそうに見えるな。」

「代わりに日向二尉が忙しそうだけど。」

「ミサトは押し黙ってしまった。」

・・・

コウスケは執務室にいた。

二課の課長になり書類決済しなければならぬものが増えたのだ。

とはいっても兵装ビルに関するものが多く、さほど時間はとられなかった。

「課長。」

と声をかけてきたのは榛名ミツヒサである。

実を言うとコウスケを課長とは誰も呼ばない。

特務一尉と呼ばれるのが普通である。

そっちの方がわかりやすいのだ。

特務一尉なんてコウスケ以外ないからである。

「どうした？」

「部隊の編成が大方終了しました。一班から四班まであります。」

「そうか。」

「できれば実戦訓練を行いたいのですが・・・」

「それは無理だな。シミュレーターによる訓練しかできないだろう。」

「ですな。」

「それでも実戦経験が多く、また戦自にも引けをとらない人材を選べたんだ。100人も、これ以上は望み過ぎだろう。」

「なら、彼らの勤が鈍らないように訓練を施します。」

「やってくれ。それと・・・」

「ばれないようにですよ。わかってますよ。」

「頼む。」

ミツヒサが出ていった。

「荷重勤務だなこりや・・・」

軍人にはふさわしくないことを述べるコウスケであった。

彼の手元には矢を模したバッジが輝いていた。

・
・
・

今テストが開始されたところだ。

テストが開始されるにあたってこんなお触れがあった。

「パイロットの人権を侵害するものは厳罰に処する。」

そもそもテスト自体が人権侵害に値するが、そんなことに気を留めることなくそういうゲンドウ。

それにパイロットの少年は感心していたそうだ。

少年の同居人は嫌がっていたとか……

ともあれ、まずシンジが乗り込みそのあとに残る二人が乗り込むようになり、画像による記録は一切禁止となった。

コウスケもそれ自体には賛成なのだが、ゲンドウがわざわざお触れを出した理由が知りたかった。

「レイの体が見ず知らずの男の目に触れていいというのか？」

とサンガラスを輝かせながらコウスケに言った。

横では冬月も頷いていた。

(それが本音かよ・・・)

ゲンドウにとつてレイはユイとは別人とはいえ、やはり似ているのだろう。

冬月とて同じなんだろう。

それは感情の面でどうしようもなかったのだ。

・・・

コウスケはミサトの代わりに発令所にいた。

「確認してるんだな。」

冬月が厳かに告げる。

「ええ、一応。」

(一応だど?)

「青葉二尉。報告は正確に行え。」

コウスケが毅然とした態度で言う。

少し怒気も含まれていた。

軍人である彼は報告を正確に伝える重要性をよく知っていた。

一応という言葉は便利に思うが、それはどつちか解らないということをや曖昧に誤魔化してしまうのだ。

「すみません。確認しています。ここです。」

映し出されたモニターにはシグマユニットD-17第87タンパク壁とあった。

「三日前に搬入されたパーツです。・・ここですね、変質している場所は。」

「第87タンパク壁か。」

青葉がモニターを操作し拡大する。

「拡大するとシミのようなものが確認できます。何でしょうね？これ？」

「浸食だろ？温度と伝導率が若干変化しています。無菌室の劣化はよくあるんです。最近。」

日向がデータを基に分析していた。

「工期が60日近く圧縮されましたから、また気泡が混ざっていたんでしょ。ずさん

ですよ、B棟の工事は。」

「そこは使徒が現れてからの工事だからな。」

冬月の言葉には現状の苦い現実が含まれていた。

「無理ないっすよ。みんな疲れていますからね。」

「それは理由にならないぞ。日向二尉。」

とコウスケが言った。

「疲れているが理由で使徒に負けたらどうする。第一、一番負担がかかっているのは子供たちなんだからな。」

「そうですね。失言でした。」

(少し言い過ぎたかな。)

「まあ、これが終わったらみんなで飲みに行くか。」

「お、やった。」

と喜ぶのは青葉だった。

「子供たちも連れていくから無茶するなよ。よろしいですね副司令。」

「まあ、いいだろう。息抜きは必要だ。」

「というわけだ。もう少し踏ん張ってくれ。俺のおごりだ。」

「やった〜!」

「明日までは処理しておけ。碇がうるさいからな。」

「了解!」

青葉と日向が元気よく返答する。

その裏では・・・

「副司令。経費でいくばくか落とせますか?」

「しようがない。領収書を忘れないでくれたまえ。」

・・・

「葛城も喜びそうだな・・・ただ酒だし。」

だが、冬月のお墨付きはもらったし大丈夫だと考えることにした。

なにを言おうNERVの資金関係は冬月が見てた。

その大蔵省から許可が出たのだ。

恐れる事はない。

ちなみにコウスケはミスアトよりも高給なのだ。

なぜかというのと、戦場に出るので危険手当がつくからである。

基本給はミスアトより低い、危険手当がそれを補っている。

ともかくコウスケが飲み会の資金について考えているうちに警報が鳴った。

「なんだ!」

『シグマユニットAフロアに汚染警報発令!』

『第87タンパク壁が劣化。発熱しています。』

『第6パイプにも異常発生。』

「何が起きたんだ?」

「第87タンパク壁の浸食部が増殖しています。」

青葉がモニターを回した。

爆発的なスピードで浸食が広がっていた。

浸食を抑えようとパイプが閉鎖されるが

「ダメです。壁伝いに浸食が広がっています。」

（実験場に近いな。）

「副司令。実験を中止なさるべきです。」

コウスケが言う。

「だが……」

重要な実験である手前、簡単に中止にはできない。

「既に必要なデータは抑えてあるはずです。それに子供たちに何かあれば……」

「……わかった。赤木博士に連絡しろ。」

……

浸食は使徒だった。

レーザーによる攻撃が行われたがATフィールドではじかれたのだ。

セントラルドグマはすでに物理的に閉鎖された。

警報はゲンドウの命により誤報ということになったが、使徒はいまだに活動している。

だが、場所がまずかった。

（アダムに近いな。）

これはコウスケが最高レベルのカードで得た情報だった。

EVAは地上に射出された。

EVAが使徒に乗っ取られるなど悪夢でしかない。

使徒に関するデータからオゾンに弱いとのことで使徒に対抗したものの、すぐに効果がなくなった。

「すごい。進化しているんだわ。」

リツコは感心するように言った。

「厄介だな。」

コウスケがつぶやく。

この短時間で爆発的な進化を遂げる使徒。

今後どうなるかわからないが、厄介な相手というのは間違いなかった。

すると警報が再び鳴り始めた。

「どうしたの?」

ミサトが確認をした。

「サブコンピュータがハッキングを受けています。侵入者不明。」

「くそ!こんな時に!Cモードで対応!擬似エントリー展開!」

「擬似エントリーを回避されました。」

次々に防壁を展開するが突破されてしまう。

「逆探に成功。この施設内です。」

（加持か？）

コウスケはそう予想するも外れだった。

「B棟の地下・・・プリブノーボックスです！」

その間に使徒の模様が変化した。

電子回路にそれは見えた。

ミサトの指示で次々と使徒を妨害するが効果なし。

「保安部のメインバンクに侵入されました！メインバンクを読んでいます。」

日向が現状を報告する。

「奴の目的は何だ？」

冬月が皆が知りたいことをつぶやいた。

（保安部のメインバンク・・・電子回路・・・）

「まさか！」

コウスケは気づいた。

「このコードは・・・やばい！MAGIに侵入するつもりです！」

青葉が使徒の目的を報告した。

ゲンドウの命でI/Oシステムをダウンさせようとしたが無理だった。

そしてMelchiorは使徒に占拠された。

MelchiorはNERVの自立自爆を提訴した。

残る二つが否定したためすぐには行われぬが、今度はBalthasarに浸食を開始した。

止まらない使徒。

焦る人たち。

そんな中

「ロジックモードを変更。シンクロコードを15秒単位にして。」

リツコの機転により使徒の侵攻が一時的ながら収まった。

・・・

会議室で使徒に関する分析が行われた。

珍しくゲンドウもいた。

「進化し続ける相手か・・・嫌だな。」

「MAGIの物理的排除が一番簡単なんだけど・・・」

ミサトがそういった。

「無理言うなよ。MAGIがなくなったら本部も終わりだぞ。」

「そうよね。」

(NERV本部はハードウェアに頼り過ぎだな。)

「赤木に任せるしかないだろ。」

・・・

今回は使徒に自滅プログラムを送り込むことになった。

リツコはミサトとともにCasperの内部にいる。

(MAGIか・・・)

コウスケの得た情報にはMAGIに関することもあつた。

人格移植OSであるMAGIにはリツコの母親である赤木ナオコのデータがインプットされている。

それも三つとも同じものではない。

Melchiorには科学者

Balthasarには母

Casperには女

人が持つジレンマをわざと残したのだろう。

人はその時の立場によって考え方が変わるものだ。

それをOSに利用するなんてなかなか考え付かない。

そしてそれをシステムアップし、更新をつづけるリツコ。

やはりリツコも只者ではないと思うコウスケだった。

・・・

「来ました！Balthasarが乗っ取られました！」

日向が報告する。

『人工知能により自立自爆が決議されました。』

「始まったか・・・」

こうなつてはコウスケの出る幕はない。

「BalthasarさらにCasperに侵入！」

「押されているぞ！」

冬月が焦る。

それは職員全員そうだろう。

いや、コウスケとゲンドウは冷静になっていた。

（人間ダメなときはダメなもんさ。しかし・・・）

『自爆装置作動まであと20秒。』

（今回のことでハードウェアに頼り過ぎだということがよく解った。あの部署の設立は正解かもしれない。MAGIだけだと侵入者に対処できないかもしれない。）

「いかん！」

冬月がたまらずに叫ぶ。

一秒一秒が長く感じられる。

(赤木は約束は守る人だ。大丈夫だろう。)

不意にミサトの声が聞こえた。

相当焦っているのだろう。

なかなか大きな声だった。

「一秒って・・・」

「一秒あれば十分だな。」

一秒

それが意味するもの

戦場に長くいたコウスケにはその価値がわかっていた。

その一瞬さえあれば優位に立てるのだ。

逆に不利になることだつてある。

(間に合うな。)

長らく戦場にいた勘からそう予測するコウスケ

そうしている間にもカウントダウンは進んでいく。

『6秒』

伊吹の声が聞こえた

「行けます！」

『5秒』

『4秒』

『3秒』

『2秒』

伊吹の手が動いた。

『1秒』

『0秒』

.....

沈黙が続いた。

すべての時が止まったようだった。

爆発音は聞こえない。

メインモニターが動きだす。

赤く染まっていたMAGIがクリアされていく。

『人工知能により自立自爆が解除されました。』

あちこちから聞こえてくる歓喜の嵐。

皆が生還の喜びをかみしめている。

・
・
・

「お疲れさん。」

コウスケはリツコに労いの言葉をかけた。

リツコの顔は青いが、安心したようだった。

ミサトもコーヒーを持ってきていた。

「それじゃ、俺は行つてくるよ。」

「どこに?」

「子供たちだよ。」

・
・
・

コウスケはプラグが射出された地底湖にいた。

0という数字からレイはおそらくここにいるだろうと思っていた。

タオルを手にしプラグに近づぐが、ハッチが開いており無人だった。

「どこに行つたんだ?」

(まさか湖に落ちたのか?)

すると通信が生きていることに気付いた。

『綾波・・・もう少し離れて・・・』

『嫌。』

『もくどうなっているのよ!』

通信からシンジのプラグはアスカのプラグとつながっていないことを知った。

(・・・今、裸だよな・・・)

「シンジ君。無事か?」

『コウスケさん!』

シンジの声は喜びと焦りの半々だった。

「レイもいるんだろ?」

『・・・』

沈黙がすべてを語っている。

(暗いプラグで一人・・・寂しいのはわかるが・・・)

「後でお仕置きだ。」

・・・

その後コウスケはシンジのプラグにたどり着き、中にいたレイの頬を思いつきりつねった。

レイは痛そうにしていたが、かなりご満悦のようだった。

ちなみにシンジは

「地獄でした・・・」

と答えたが、鼻の下が伸びていたのはコースケだけが知る事実であった。まったくの余談だがシンジはアスカに強烈な蹴りをもらっていた。

地底湖に射出された後のことがばれたためである。

第22話 I am alone.

第三使徒 サキエル

俺が初めて戦った使徒だ。

全身が深緑で人型とも言える姿をしていた。

あの戦いは多くの犠牲者が出た。

今でも覚えている。

俺の後退とともに爆炎に飲まれた街を・・・

あそこにもシエルターがあつたのだろう。

だが、NNに耐えられるほど強いとは思えない。

おそらく多くの民間人が呑み込まれたのだろう。

守るべき・・・いや、許されざる俺は生きて

守られるべきの人たちが犠牲になる・・・

しかもその事実を隠蔽された。

だから公式記録なんて当てにならない。

・・・世の中は理不尽にできている。

そして俺の戦友が散って行った戦いでもあった。
思えば

あいつは俺に

笑うということを教えてくれたのかもしれない。

三年前だったかな？

何とか心の再建を果たした俺だったが

人らしい感情がまるでなかった。

いや、忘れていたんだろ。

二年の空白が思ったよりも俺を蝕んでいたんだな・・・

最初はうざいと思っていた。

何かしら絡んできては厄介なことばかり持ち込んで・・・

でも

それが心地よかった。

あの時

俺はエースと呼ばれてたが

二年で張り付いてしまった仮面のおかげで

遠巻きに見られていたからな。

確か・・・

「お前って人らしくないな。」

初対面に向かつて大変失礼な物言いだった。

だが

そういうことを面と向かつて言える彼がうらやましかった。

一緒にバカやつたな・・・

こつそりと食糧庫に忍び込んだり

強い酒を飲んで店の前でひっくり返ったり

上官の悪口を言い合ったり

時には殴り合いのけんかもしたっけ・・・

煙草もあいつが教えてくれたんだよな。

むせ返った俺を見て笑ってたな。

思えば、時々寂しく感じる。

やっぱりあいつがいないからだろ。

・・・なんで死んだんだよ。

バカヤロ

・・・

第四使徒 シヤムシエル

茶色いイカのようなフォルムに鞭のようなものをふるっていた。

あの時シンジに特攻を命じたな。

．．．軍人失格だよな

民間人と変わらないシンジに特攻なんて．．．

しかもシンジのクラスメートも乗り込んでたな。

なんであんなことを命じたんだ？

．．．結局は俺も人ってことか。

エースだのなんだの言われても土壇場に弱い。

．．．特攻か

昔

戦闘機で特攻した国があるって聞いたっけ

あの時のパイロットたちはなんて思ったんだろ．．．

そしてシンジは．．．

．．．

嫌だろうな

俺だったら

・
・
・

シンジは泣いていたかもしれない。

そう考えると俺の罪は重いな。

だからって俺が特攻してたら・・・

シンジは自分を責めるんだろうな。

・・・シンジは内罰的すぎるのか

戦いには向かない少年だな。

でも

シンジがいなければ

今頃俺たちはどうなっていたか。

・
・
・

早く終わらせないと

・
・
・

第五使徒 ラミエル

クリスタルのような姿だが

一番厄介な相手だったな。

一度シンジが死にかけた相手だったか

・ ・ ・ なんてシンジは乗ろうと思ったんだろ
死にかけてのに

普通は嫌だろ

・ ・ ・

レイが何かしたのか？

あの時

シンジの病室に行ったときにレイと会ったな。

レイか・・・

同居人

同じ人

同じ「綾波」

人も使徒だからな。

・ ・ ・

使徒と人は分かり合えるのか？

どうなんだろ

レイを見てると

出来なくはないように思える。

・
・
・

でもあの時のレイは人に関心がなかったはず
スケジュールを伝えに来たと言っていたな。

レイのことだからそれだけをやってきたんだろ。

レイは事実しか言わないからな。

時々それで困るんだけど・・・

そんなレイが明らかに変わってきたのは・・・

ヤシマ作戦の後だったはず

・
・
・

笑えばいいと思うよ

・・・こうして思い返すと口説いているように思えるな。

シンジは天然のジゴロになれそうだからな。

加持とは違うタイプだな。

笑えばいい・・・か

俺は笑えているのか？

どうなんだろ

そもそも俺に笑う資格はあるのか？

血まみれの俺に

・
・
・

第六使徒 ガギエル

魚とかかカジギが巨大化した姿で体当たりしかやってなかったな。

ATフィールドを使っていたのか？

式号機

食われたっけ

・
・
・

あんときアスカに悪い事したな。

でも

耐えられなかった。

エースパイロットと言う言葉に

エース人パイロット殺しと言う言葉罵倒に

それを解らずに言うアスカに・・・

解ってる

俺の被害妄想だ。

でも

忘れられない。

忘れてはいけない。

俺は罪人人殺しなんだ。

その事実は決して消えない。

死ぬときは地獄だろうな。

・ ・ ・俺は許されないだろう

どんなことをしても

人類の危機を救っても

・ ・ ・

第七使徒 イスラフェル

初めて複数で攻めてくる奴だった。

ユニゾン訓練

あれは心地よかった。

あいつと一緒に飛んでいるときと同じだった。

三人も少し打ち解けた感じだったしな

・ ・ ・

俺はどうだったんだろ。

そういえば俺

三人のことを戦友と呼んでるよな

なんでだ？

・
・
・

あいつの代わりなのか？

それとも

・
・
・

もしかしたら

俺はすがっているのかもしれない。

あの心地よさが欲しくて

求める相手が欲しくて

・
・
・

一度吹き飛ばしたくせに

何を考えてんだ？

あの夢で許されたと思ってるのか？

・
・
・

でも

そう思いたい自分がある。

殺しておいて虫がいいのはわかってる。

でも

・
・
・

俺は同じ過ちを繰り返すかもしれん。

だが

使徒がいる限りはダメだ。

でも

使徒がいなくなったら

平和になったら

俺は

・
・
・

第八使徒 サンダルフォン

蛹だったらしい。

俺が初めて殲滅した使徒

A-17に反対したな

飢えに苦しむ人が増えるって

・
・
今更何言ってんだか

さんざん殺しておいて

善人面か

それで罪が軽くなるとでも思ったのか？

・
・
バカだよな、俺

・
・

あのあと

温泉に入りに行ったな。

あれはよかった。

平和だなんて思ったしな

・
・

平和な世界に

人殺し
俺はいらないよな

いや

いない方がいい。

そうに決まってる。

・
・
・
第九使徒 マトリエル

どういふ使徒か

俺はわからない。

あの時NERVは停電中だったからな

それに俺は病院にいたし

あの時

未来の話をしたな。

使徒を倒したらどうするのか

三人とも考えてなかったな

まあ中学生でこれという目標がある方が珍しいけど……

・
・
・

俺の中学生時代か

セカンドインパクトですべてを失ったな。

目の前にいた家族を見捨てて

俺一人

助かった。

行くところなくて

いろんなところを転々としてたな。

同じ境遇の仲間とつるんで

食糧を盗んでたな。

きつい仕事もしたし

未来なんてなかった。

大人たちも

俺たちを見捨ててたし

むしろ食い物にしてたな。

何人が帰ってこなかった奴がいたな。

とくに女子が・・・

・・・

ただで食えるっていうんで軍に入隊したんだよな。

幸い適性診断で戦闘機乗りになれるってわかったんだよな。

あれが俺の始まりだったのか。

俺らしい

甘い誘惑に乗った代償がこれか

それで今は人類の危機を救う英雄人殺しか
感激過ぎて泣けるね。

・
・
・

第十使徒 サハクイエル

宇宙空間からNERV本部めがけて落ちてきた。

使徒もなかなか粋なことをするなと思った。

センスは微妙だけど・・・

あんときはほんとはよくやってくれたな。

葛城の奇跡に近い

いや

奇跡を願う作戦・・・無茶ぶりによく答えてくれた。

葛城の作戦って行き当たりばったりだな・・・

ラーメン食べに行つたとき

人の安心した顔が忘れられない。

特に

子供の笑顔が

俺みたいになつて欲しくないと願つたね。

もっとも俺みたいのに願われても
嫌なだけだろうけど

・
・
・

そういや

昇進もしたな。

嫌だった。

昇進なんて

それを喜ぶ奴がいっぱいいたけど

解ってるのか？

解ってないだろ。

給料が上がる？

権限が大きくなる？

何言ってるんだか

昇進って

それだけ

殺したってことなんだから

それを喜ばれて

嬉しいか？

命が金になるのか？

俺には解らない。

・
・
・

そういや葛城って

なんでシンジとアスカを引き取ったんだろ。

父と母はいなくて

兄弟もいない。

・ 家族が欲しかったのか？

家に帰って

そこに居てくれる人

・ ペンギンも飼ってるし

あながち間違いでもないかもしれない。

俺もそうなのかな

・
・
・

第十一使徒 イロウル

NERVに初めて侵入した使徒

M A G I を乗っ取って自爆させようとしたな。

E V A なしで殲滅された使徒

あんどき

みんな焦ってたな。

人なんてできること

限られてるのに・・・

でも

だからこそ

人は美しいんだろうな。

人に限らず

生命は生きようとする。

だから美しい。

あんどきの

皆が喜ぶ声は

心地よかった。

・・・

俺は

生きていていいのか？

どうなんだろう

解らない。

まあ

いずれは死ぬんだ

だったら

それまで生きていてもいいか。

年貢の納め時が

いつか来るだろう。

・・・

この時だよな

レイと同居しはじめたの

最初は耳を疑ったよ。

碇司令は狂ったんじゃないか？

とまで思ったね。

俺に預けるなんて

人として必要なことを教えてほしい？

バカな

俺が何を教えられるってんだよ。

殺しのテクニクでも教えろってか？

でも

他にいなかったんだろうな。

レイの境遇を考えれば・・・

・・・

そう考えると

レイの行動も少しわかるな。

シンジにべつとりのレイ

あれは幼い子供が親から離れたくない。

そんな心情と同じなのかもしれない。

だからと言って無理やり離したら

多分レイは壊れる。

それは嫌だな。

折角人として生きられるのに

そのチャンスが失われるなんて・・・

特にレイは

人と違うということに敏感だからな。

ダミーシステムの開発

相当嫌がってるし

俺だっつていやだ。

碓司令も苦い顔だったな。

赤木も

・
・
・

あの時

碓司令の眼鏡を持って行かなかった。

心の成長はなってるみたいだから

うまくサポートしないと・・・

下手して

俺にすぎるようになったら

レイは一生

成長できない。

それに

人殺しにすぎるなんて
そんなことになったら

レイは

不幸なだけだ。

・
・
・

俺が居なくなったら

レイはなんて思うかな？

・
・
・

何期待してんだ？

涙でも流してくれると

思ってるのか？

人殺しに必要なのは

涙じゃなくて

・
・
・

過保護と支援は違うからな。

もつとも俺がサポートなんて

出来るとは思わないが

．．．
「ふう。」

コウスケは煙草を取り出して一服することにした。

目の前のPCには今まで戦ってきた使徒のデータが映し出されていた。

「何考えてんだろ．．．」

煙がゆらゆらと部屋に充満していく。

普段気にしないにおいが嫌に鼻を刺激する。

たまらず煙草を灰皿に押し付けたようとしたが、できなかった。

「俺は．．．」

そのつづやきを聞いたものは誰もいなかった。

第23話 I can not advance.

コウスケはEVA実験室のモニタールームにいた。

周りではリツコをはじめとする技術局のスタッフが動き回っている。

今日は機体相互交換試験の日である。

被験者は綾波レイと碓シンジ

今、レイが初号機に乗り込んでいた。

初号機は実験場の壁に拘束されていた。

「何か考えているな。」

モニターに映し出されるレイの顔を見ながらコウスケが言う。

コウスケは少し苦い顔をしていた。

「解るの?」

隣にいたリツコが尋ねる。

「目がぼんやりしてるだろ?あれは何か考えているときの目だ。」

これはコウスケがこの数日間で解ってきたレイのしぐさに対する分析結果だった。

「そう、さすがだね。」

そう言ってリツコがマイクを取り出した。

「どう？レイ。久しぶりの初号機は。」

久しぶりという言葉にコウスケは不思議に思ったが、すぐにその意味が分かった。

第三使徒との戦闘中に初号機が現れたのだ。

その時乗っていたのがレイだということを思い出した。

『・・碓君のにおいがする。』

「シンジ君のにおい？」

どういう意味か分からないコウスケはリツコに聞いた。

「シンジ君のデータがおいとして伝わったのね。」

「でも、シンジ君のにおいってどういうものなんだろう？」

「解らないわ。あくまでもレイがそういう風に受け取っただけだから。」

「どういふものか聞いてみたが、テスト中なのでこらえることにした。」

「シンクロ率はほぼ零号機の時と変わらないわね。」

「パーソナルパターンが酷似していますからね。初号機と零号機は。」

リツコの隣でモニターを監視していた伊吹が言う。

（零号機は初号機のデットコピーだからな。）

それがわかる人物は極一部だけだ。

そのうちの一人であるコウスケは心でそう言った。

ふとミサトの疑わしい視線を感じる。

(知っていないければならないミサトが知らず、俺は知っているか。)

こうして考えると俺は悪役の幹部、しかも裏の幹部だなど考えてしまうコウスケだった。

悪役の理由はゲンドウである。

ゲンドウはどう見ても善人には見えないというのがコウスケの評価だ。

もつともサンングラスと髭を止め、あの不愛想な態度をやめれば変わるかもしれないが……

「誤差＋－0.03。ハーモニクスは正常です。」

伊吹がテストの結果を報告する。

「レイと初号機の互換性に問題点は検出されず。ではテスト終了。レイ、上がっていいわよ。」

『はい。』

レイと初号機のシンクロがカットされた。

コウスケはそれを見届け部屋を後にした。

・
・
・

「お疲れさん。」

コウスケは上がってくるレイを待っていた。

「この後シンジ君のテストがあるが見に行くか？」

「はい。」

その返事はいつもよりはっきりと聞こえた。

・・・

再びモニタールーム

実験場には零号機が運び込まれていた。

零号機にはシンジが乗っている。

レイは特殊に強化されたガラスの前にいた。

スタツフたちがテストに準備に取り掛かっている。

「エントリープラグの挿入完了しました。」

「書き換えはすでに完了しています。現在再確認中。」

最初の準備はなんも問題なく終了した。

「被験者は？」

リツコがシンジの様子を窺う。

「若干の緊張が見られますが、神経パターンに問題なし。」

モニターと送られてくるデータからそう分析する日向。

「初めての零号機、他のEVAですもの無理ないわ。」

「だな。俺でも初めて乗る機体は緊張するからな。」

コウスケが初めてSuer37に乗った時のことを思い出していた。

驚異な機動性を見せる機体だけにうまく扱えるか緊張したのだ。

『バツカね。そんなの気にせずに気楽にやればいいのに。』

「それならアスカも初号機や零号機に乗ってみるか？」

コウスケが聞いた。

『・・・遠慮しとくわ。』

（アスカは弐号機にしか乗れないけどな。）

EVAとパイロットの秘密を知るコウスケはそう思ったが

（レイは弐号機に乗れるのか？）

との疑問が浮かんでくる。

（・・・乗れるんだろうな。）

でなければダミーシステムなんてものは作れない。

（まあ、それも特技の一つにすぎないか・・・）

「エントリースタートしました。」

「LCL電化。」

「第一次接続開始。」

リツコがマイクを取り出す。

「どう？シンジ君。零号機のエントリープラグは。」

『なんか、変な気分です。』

「違和感があるのかしら。」

原因を探ろうと伊吹がシンジに尋ねた。

『いえ、ただ・・・』

何か躊躇するような感じだった。

『・・・綾波のにおいがする。』

「レイのにおい?。」

一瞬、変態か?などと思ったが、レイの時のリツコの言葉を思い出した。

つまりはシンジもレイのデータをにおいとして感じ取ったのだ。

（人のおいって何だろ?）

そう思うと少し聞いてみたくなるコウスケであった。

レイの方を見ると後ろ姿で見えなかったが、頭が少し下がっていた。

（あちら、恥ずかしがってるよ。）

普段恥ずかしがるなんてことが無いので、なかなか貴重な体験だと思うコウスケであつた。

もつとも他の職員は気づいていないようだったが……
こうしている間にも準備が終わっていく。

「……では。相互換テスト、セカンドステージに移行。」

「零号機、第二次コンタクトに入ります。」

零号機を見ると何も変わらない。

（無事に終わるか。）

「どう?。」

ミサトが様子を知りたくて聞いていた。

「やはり零号機ほどシンク口率は出ないわね。」

リツコが答えてくれた。

「ハーモニクス、すべて正常位置。」

「でも、いい数値だわ。」

リツコは満足そうだったが、不意に暗くなる。

「……これあの計画、遂行できるわね。」

「ダミーシステムですか?先輩の前ですけど私はあまり……」

伊吹が露骨に嫌そうな顔で言う。

一方リツコは平静そのものだ。

「感心しないのはわかるわ。でも備えは常に必要なのよ。．．人が生きていくためにはね。」

(無利してんな。)

コウスケにはリツコに苦い思いが伝わってきた。

そういうコウスケは自分がどういう顔をしているか解らない。

「先輩は尊敬してますし、自分の仕事はします。でも納得はできません。」

「伊吹二尉。おしやべりはいいから続ける。」

コウスケはそつげなく言った。

そんな態度のコウスケに伊吹は怒った。

「綾波特務一尉！あなたは．．．」

何も知らないからそんなことが言えるんです

と言うつもりが伊吹には言えなかった。

なぜなら、振り返ったコウスケの目が据わっていたのだ。

その視線に怒気が含まれていた。

しかしその怒りの矛先はコウスケ自身に向いていた。

伊吹はとつさにリツコを見る。

リツコは無理もないと言いたげだった。

そして確信した。

綾波特務一尉は知っている。

この試験の意味を・・・

「・・・すみません。」

「いや、俺も大人げなかった。」

そう言つてコウスケは視線を零号機に戻した。

「伊吹二尉。人には割り切らねばならない時がある。じゃないとつらいぞ。」

コウスケは零号機のほうに向いており、顔は誰にも見えなかった。

いや、レイには見えていた。

コウスケの苦虫を何万匹も噛んだような顔が

「汚れたと感じたときは、特にな。」

そんなやり取りをミサトは何も言わずに眺めていた。

「第三次接続を開始。」

零号機の頭が上がった。

コウスケはレイの隣に移っていた。

「セルフ心理グラフ安定しています。」

「A10 神経接続します。」

「ハーモニクスレベル+20」

(今のところ順調か。)

いくらかは和らいだが、コウスケはまだに先ほどの表情から抜け出せなかった。

『・・あやなみ?』

シンジの声が聞こえた。

レイがとつさに反応するが、どうも呼びかけられたわけではなさそうだ。

『なんだ?・・父さん?!』

(どうしたんだ?)

『計画?・・それに』

(計画・・まさか)

『コウスケさん?!』

(・・そういうことか!レイの意識から)

レイを見るとひどく心配そうに見ていた。

(知られたか・・少し早かった。)

すると零号機が動き出した。

「どうしたの?」

ミサトが叫ぶ。

「パルス逆流! せき止められません!」

零号機がもがき苦しむように暴れる。

「零号機制御不能!」

「全回路遮断。電源カット。」

リツコが冷静に対応する。

伊吹が電源をカットした。

「EVA予備電源に切り替わりました。」

「依然稼働中。」

零号機がこつちに寄ってくる。

「シンジ君は?」

ミサトがシンジの様子を窺う。

「ダメです。モニターでできません。」

今、シンジがどういう状況なのか誰にも分らなかつた。

「零号機がシンジ君を拒絶?!」

リツコがあり得ないと言いたげであつた。

「いや、シンジ君の暴走だろう。それにEVAが反応した。そういうことだろ。」
(半端な真実を見たんだな。)

コウスケは妙に冷静になれた。

零号機が拳を突き出した。

一回、二回と続いたたびにガラスにひびが入る。

とつさにコウスケはレイをかばうように立っていた。

五発目でガラスが割れた。

「レイ！コウスケ君！離れなさい！」

ミサトがたまらずに言った。

幸いにも横のガラスが割れた。

零号機はモニタールームから離れ、壁を殴り続ける。

0という言葉とともに零号機が止まった。

「パイロットの救出急いで！」

ミサトが号令を飛ばした。

(・・・俺を殺そうとしたのか)

一瞬零号機と眼があつたが、十分な殺気を感じた。

他の職員にはそれはわからなかった。

・
・
シンジは精神汚染の心配もなく無事であることが告げられた。

コウスケは病室に急いだ。

・
・

「よう。大丈夫か？」

「コウスケさん。」

シンジの顔はいまだに信じられないというものだった。

「今から俺の執務室に来れるか？」

「・・・何ですか？」

その顔には少なからず拒絶が見て取れた。

「真実を話す時が来た。」

「・・・わかりました。」

・
・

執務室に戻るとミツヒサとキョウヤがいた。

その横には制服に着替えたレイが椅子に座っている。

レイはもし自分のことなら自分から話したいと食いついたのだ。

「呼び出してすまん。今から俺がいいというまでこの部屋に人を近づけないでくれ。」

了解という返事とともに二人が出ていった。

「そこに座ってくれ。シンジ君。」

シンジが椅子に座るとコウスケは紅茶を差し出した。

「さて、シンジ君はどこまでわかったのかな？」

シンジがポツリポツリとしゃべり始めた。

計画のこと

そのためにレイが生まれたこと

そしてゲンドウが係わっていること

コウスケがそれを知っていること

そんな内容だった。

「なるほどね。」

コウスケが予想したことと合っていた。

「これは本当なんですか？」

シンジの目には不安で彩られている。

「本当だ。」

「じゃあ、綾波はそれだけのために生まれたんですか？」

「そうだった。」

「綾波は知ってたの？」

シンジがレイに問う。

「・・・ええ。」

「どうしてさー！」

「私にはそれしかなかったもの。」

「なんでさー！」

シンジがレイに問い詰める。

レイが過去形を使ったことに気づいていないようだった。

「待て。」

コウスケがそれを止めた。

「レイの話は終わってない。」

コウスケが止めたのはレイがいまだに何かを話そうとしていたからだ。

シンジが落ち着きを取り戻した。

「でも計画は破棄された。私には人として生きてほしい。碇司令はそうおっしゃった。」

「父さんが？」

シンジがコウスケを見た。

「本当だ。碇司令は俺に人として必要なことを教えてほしいと言っていた。」

「そうなんですか。」

そしてシンジはとある単語を思い出し出していた。

「ダミーシステムは開発してないんですか?」

先日見たダミープラグの生産工場で聞いた言葉が出てきたのだろう。

その言葉にレイがビクツツと反応した。

「いや、今日の試験はそのためのものだ。前の使徒が来た時の試験もな。」

シンジがバツと立ち上がった。

なかなかの迫力だった。

「何ですか?!なんで綾波だけがそんな目に合うんですか?!」

(言いたいことはわかるぞ。)

「コウスケさんは一緒に住んで、そんなこともわからないんですか?!」

シンジは吹き飛んだ。

シンジがいた場所にはコウスケが拳を突き出した形で立っていた。

「碓君?!」

レイが驚きを隠せない。

「そんなこともわからないだど?」

「だってそうじゃないですか?!綾波に人として生きろと言っておきながら……」

シンジは言葉をつづけられなかった。

シンジの目に見えたものは伊吹と同じものだった。

「俺だってな……」

コウスケがシンジの胸ぐらをつかんだ。

レイが心配そうに見ている。

「俺だってな代われるなら代わってやりたいよ！」

シンジはコウスケの剣幕に押されて声が出なかった。

「この人殺しでもろくでなしでもレイの代わりになるならな！」

止めるべきとわかっていながらも止められない。

コウスケは俯いてしまう。

「でもな……ダメなんだよ。俺じゃ……EVAに乗れない俺じゃ……」

レイの目にはぼつりと落ちる水の滴が見えていた。

当然コウスケの前にいたシンジにも

「俺じゃダメなんだよ……」

コウスケは腕の力を抜いた。

「すまん。興奮していた。」

コウスケは目を拭うと自分の椅子に戻った。

「すみません。コウスケさん。」

「いや、俺が悪かった。」

シンジは本当にすまなそうにコウスケを見る。

「これだけは覚えておいてくれ。俺たちは未来を創るために今生きている。お前たちの未来だ。」

「コウスケさん。」

「特務一尉。」

「もう少しつらい日々が続くだろう。だが、もう少しでいい。耐えてくれ。すまん。」

コウスケは頭を下げる。

「・・・わかりました。」

「すまん。もう疲れただろう。帰って休んでくれ。」

「はい。」

シンジが出ていった。

「激情に任せて殴っちまったか・・・俺は破壊しかできんだな・・・」

（子供たち三人に激情に任せて怒るか・・・底がしれるな・・・耐えてくれか・・・また虫のいいことを言ってるな。）

コウスケは目の前の紅茶をすすする。

とても苦い味だった。

「レイ。」

「はい。」

「俺という人間が解つたら。俺の元から離れる。ろくな人になれんよ。」

レイは答えなかった。

「赤木でも、葛城でもいい。」

「特務一尉。」

レイが止めようとするがコウスケは止まらなかった。

「伊吹二尉でもいいんだ。．．少なくとも俺よりましなはずだ。」

「なぜですか？」

レイの目は「私を拒絶するのか。」

そう言っていた。

「俺みたいな人殺しのそばにいて幸福になれるわけない。」

コウスケはあえてレイの顔が見えないように椅子を回した。

これ以上レイの目を見たくなかった。

「実際みんなそうだった。俺を残して死んでいった。」

「．．．」

「もういいんだ・・・」

「でも特務一尉は私のために泣いてくれた。人だと言ってくれた。」

コウスケはレイのほうに振り返りそうになったが、止めた。

今、レイを見たらすがつてしまうかもしれない。

そんな考えがコウスケの脳裏に浮かんだ。

だから考えを変えた。

(そんな風に見えるのか・優しいのかもしれない。レイは。)

「そういう偽善野郎なんだ。そうすれば許されると思ってるバカなんだ。」

今、レイがどんな顔をしているかわからないし、知りたくもない。

「シンジ君ならレイのことをよく知ってるだろ。碓司令に頼ってもいい。今なら信頼できる。」

(俺に言われても信頼性無いな。)

「特務一尉。」

悲しげな声に聞こえた。

だから無視した。

「もう休め。俺の方から申請しておく。」

ドアが開く音が聞こえた。

レイが出ていったのだろう。

それを確認するつもりはコウスケには無かった。

「必要なのはお前他のたちの未来なんだ……」

それを聞いたものは誰もいなかった。

……

コウスケが家に帰った時見たものは椅子にちよこんと座ってるレイだった。

「なんでここにいるんだ？俺の元を離れろと言ったろ。」

レイは何も言わずにじっと見つめてくる。

コウスケはたまらずに視線を逸らした。

「……そうか。ここがお前の家だったな。」

コウスケは自室に戻りあらかた荷物を持ってリビングに戻ってきた。

「どこに行くんですか？」

「ここは俺の家じゃない。……無理やり押し付けられたものだからな。」

コウスケはレイの顔を見ずに言う。

「……私も押し付けられたのですか？」

コウスケは胸に痛みを感じた。

だから、

「・・・そうだよ。」

気まずい雰囲気は漂っていた。

「NERVで会うこともあるだろう。・・・さよなら。」

コウスケはそのまま出ていった。

・・・

「葛城か？」

『コウスケ君? どうしたの?』

「・・・レイのことよろしく頼む。」

『レイのことって、ちよつと何言ってるのよ!』

「次の保護者が決まるまでいい。碇司令には俺から言っておく。」

ミサトが何かわめいているがコウスケは構わずに電話を切った。

「どうしよう・・・。」

コウスケは当てもなく彷徨っていた。

・・・

ふと気が付くと目の前にS u—37があった。

既に退勤したのだろう

周りには誰もいなかった。

「・・・結局、俺の居場所は戦いにしかないのか。」

そんな男のもとに居ていいはずがない。

レイはもつと幸福になれるはずだ・・・

コウスケはキャノピーを開けコックピットに乗り込んだ。

コックピットはやはりなじんだものだった。

「使徒が来る間は生きている。だが、それが終わったら」

コウスケは操縦桿を握った。

「お前も一緒に来るか？相棒。」

それに誰も答えなかった。

第24話 I was wrong. I can redo.

特務一尉は変わったな

日向はここ数日のコウスケを見てそう思っていた。

なんかやけに固くなったような・・・

そんなことを思いつつ日向はコウスケの執務室の前に立っていた。

「日向一尉です。」

「入れ。」

とても冷たい声だ。

ドアが開いた。

コウスケは何かの資料をジツとみていた。

「兵装ビルに関する資料をお持ちしました。」

「そこに置いとけ。」

この反応も以前とは違う。

以前なら・・・

「ああ、ありがとう。お前も大変だな。葛城に押し付けられて。などと冗談交じりに言つてやさしい眼で見てきた。

それが今では別人のように冷たく接してくる。

それに煙草の量が増えている気がする。

「了解しました。」

日向は資料を置き部屋を後にする。

特務一尉変わったな・・・

・・・

特務一尉に何があつたんだ？

青葉はそう思つてはいられない。

以前こんなことがあつた。

「青葉一尉。チルドレンたちは？」

コウスケが青葉にそう尋ねた。

青葉は不思議に思つた。

コウスケはチルドレンとは言わなかつたのだ。

それに感情がいまいち伝わってこない。

「子供たちは元気にいるか？」

前ならこう聞いてきたのだ。

「はい。問題なしです。レイちゃんも無事です。」

「そうか、ならいい。」

これもおかしい

「レイは今何してる?」

前ならそう言つてレイの動向を探ろうとしていた。

コウスケはいつの間にかいなくなっていた。

なぜか重苦しい雰囲気が無くなっていた。

だからこそ青葉は思う。

特務一尉にいったい何があつたんだ? . . .

. . .

どうしたのかしら?

伊吹はコウスケの執務室に行く途中で考える。

彼女はリツコから託された装備に関する資料を運んでいた。

前の機体相互互換試験のあとに訪ねたことがあつた。

「綾波特務一尉。あの . . .」

「何だ?」

酷くそつけない言い方だった。

以前の彼なら紅茶を出してくれたのに、それが無かった。

「試験の時のことを謝りたくて・・・レイちゃんのことを知っていたんですね。」

「ああ。」

「すみませんでした。」

「別にいい。・・・ファーストチルドレンは必要なことをやっていただけだ。」

おかしい

レイちゃんのこととはレイと呼んでいたのに・・・

「あの・・・」

「話はそれだけか。」

「はっはい。」

「なら自分の仕事に戻れ。」

どうしようもなかったから部屋を後にしたけど・・・

綾波特務一尉はどうしたのかしら・・・

・・・

彼、どうしたのかしら

ミサトは思う。

急にそっけなくなつたわ

ミサトは以前あつたことを思い出す。

「ねえ、コウスケ君。」

「なんだ？葛城三佐。」

葛城三佐？

そんな風に読んだこと無かつたのに

「レイどうしたの？最近元気が無いように思うんだけど・・・」

「ファーストチルドレンが？」

変ね。

パイロットをそんな風呼んだことなかつたのに・・・

以前なら

「体調が悪いのか？それともシンジ君が何かしたか？こりやシンジ君に聞かないとな。」

なんて言つて楽しそうにしてたのに・・・

「そう。何か知らない？」

「俺の管轄外だ。サードチルドレンかセカンドチルドレンに聞けばいいだろ。」

「あんた保護者でしょ?！」

「名前だけ貸したんだ。それ以外に意味はない。」

そんなはずはない。

じやなかったら毎朝レイを呼びに来るはずがないもの。
でも今は来ない。

それに今は家にいないみたい。

どうも執務室で寝泊まりしているみたいね。

「それだけか？」

「ええ・・・」

「つまりんこと呼び出すな。」

コウスケが出ていった。

だからミサトは思う。

彼、どうしたのかしら・・・

・・・

何があつたのかしら

リツコは最近のコウスケを見て思う。

妙に堅つ苦しくなった

コウスケが家を出たと聞いてリツコは問いただした。

「なぜ家を出たの？」

「あそこは俺の家じゃない。」

「でもレイがいるでしょ？」

「ファーストチルドレンの家だからな。当たり前だろ。」

「あなたの家でもあるのよ。」

「知らない。第一、勝手に押し付けたんだろ。」

「・・・レイのこともそう思っているの？」

「・・・ああ。」

本心じゃない

目を見ると悲しげな目だった。

「嘘ね。」

「だからどうした。」

「あなたは何がしたいの？」

「・・・知らんよ。」

「そう。」

リツコは部屋を後にした。

そして思う。

何があつたのかしら・・・

・
・
・

コウスケさんどうしたんだろ

シンジは思う。

前にコウスケさんこんなこと言ってたな・・・

「レイのことよろしく頼む。」

ものすごく悲しげな顔だったな。

でもそれ以降、僕のことをサードチルドレンと呼ぶし

アスカのこともセカンドチルドレンと呼ぶし

綾波も・・・

「コウスケさん。綾波はいまどこにいるか知ってますか？」

「ファーストチルドレン？知らん。」

変だ。

前なら・・・

「レイか？レイなら・・・休憩室にいるんじゃないかな？なんだシンジ君。レイに会いた

いのか？」

なんて言つてニヤニヤしたんだけど・・・

今はそんなことをしてこない。

コウスケさんどうしたんだろ・・・

・・・

コウスケ何があつたの？

アスカはそう思わずにはいられない。

訓練していた時にこう言われたっけ

「エースパイロットとして訓練に励むか・・・よいことだ。」

変だった。

前なら

「訓練すればその分生き残れる可能性が上がるからな。それより恋人でも作ればどうだ

？その方がもっといいと思うぞ。」

なんて言つてたのに

ニヤニヤしながら・・・

それにエースパイロットって言うの、コウスケ自身が嫌つてたのに

何よりそれであたしに怒つたんだから

コウスケ何があつたの？・・・

・・・

なぜ？

レイはこの考えを止められない。

特務一尉、なぜ？

前に呼び止めたとき

「特務一尉。」

「なんだ？ファーストチルドレン。」

とても冷たい声

胸が痛かった。

「どうした？レイ。」

そう呼んでくれたのに

どうしてそういう風に呼ぶの？

「・・・いえ、なんでもありません。」

「そうか。」

特務一尉が去っていく。

「もう昼か・・・飯でも食っていくか？」

前ならそう言ってくれた

なぜ？

私が嫌になったの？

人じゃないから？

でも

「おまえさんは綾波レイだ。それ以上でも以下でもない。」

「戦友という言葉は人にしか使わないよ。」

私を人だと言ってくれた人

「で？碓君とはどうだ？」

やたらと碓君との仲を聞いてくる人

ちよつと嫌な笑いをする人

碓司令みたいな笑い方をする人

でも嫌じゃなかった。

「ほんとによく食うな。」

あきれながらも優しい眼で見ってくれた人

「お仕置きだ。」

頬をつねるけど目では優しく見てくれる人

「今のレイの気持ちを心配するとうんだ。」

「嬉しかったんだな。」

「そんな風に感情があるじゃないか。」

私に感情を教えてください人
なのに

「おいおい、今生の別れじゃないんだから。」

「NERVで会うこともあるだろ。・・さよなら。」

さよならを今生の別れと言った人

わからない

なぜ・・・

・・・

最近俺を見る目が変わったな

当たり前か

あの時と同じか・・・

三年前にあいつに会う前はこんな感じだったよ

誰もが俺を白い眼で見えてきやがった

当然だな

命令があれば誰でも殺したからな

逃げ出した奴もお構いなくな

ここの奴らはそんなこと知らんだろ

今更って感じだな

しかし

疲れたな

使徒が滅びるまでと考えてたが

その前にくたばるのも

いいかもしれん

どんなに頑張っても

俺に未来を見る資格なんてないからな

・
・
・

総司令執務室前

「綾波特務一尉。参りました。」

中から返事がない。

おかしく思うがドアが開いたので中に入った。

そこにはいるべき人がいなかった。

中ほどまで入るが反応が無い。

コウスケは気づいた。

「・・・何のまねだ？」

後ろにミサト、リツコ、パイロット三人がいた。

「碓司令も絡んでいるのか・・・ファーストチルドレン、お前だな。」

レイがビクリと反応した。

「みんなして俺に死神の鎌でも振り落としに来たか？・・・それもいいかもな。」

「何言ってるのよ。」

ミサトが大声で叫ぶ。

「ファーストチルドレンなら命令ひとつでやりそうだからな。」

心が痛い。我慢する。

そもそも俺に心を痛がる資格などない。

「なんでレイがそんなことしなくちやいけないのよ！」

アスカが心底侮蔑するように言った。

そうだ、その眼が俺にはふさわしい

「だが、実際そうだったろ？なあ、ファーストチルドレン。」

「綾波はそんなことしませんよ。」

シンジもギンと睨んでくる。

そうだ、そうだよ。俺にはその眼がふさわしいんだ

こんな奴にはお似合いなんだよ。

「どうだか・・・人形だからな・・・おっと人形じゃなかったか。・・・じゃあ機械だな。」

レイが睨んでくる

と思いきや

憐みの目で見てくる。

よく見ると皆がそういう目で見ていた。

「・・・なんだよ。」

なんて目をしてんだよ

「コウスケ君。どうしてそこまで嫌われようとするの?」

リツコが口を開いた。

「何言ってるんだか。」

そんなわけないだろ

「俺にはさっぱりわからんね。」

「嘘ね。」

心が痛い。

なぜ痛いんだ?

そんな資格ないのに・・・

「・・・わからないよ。」

「あなたの行動を見ていればわかるわ。」

「なら、これが俺の本性なんだ。今まで気づかなかっただけだろ。」

「違うわ。」

レイが口を開く。

「そんな人なら私を人なんて言ってくれない。私のために苦しんだりしない。」

「言つたろ？そういう偽善野郎なんだって。」

「そんなはずない。」

「そういうやつなんだよ。実際サードチルドレンを殴り飛ばしたからな。」

「なにが苦しいの?」

レイの問いかけが心を刺激する。

「そんなもん、ない。」

「嘘ね。あんときエースパイロットで怒ったくせに、この前は私のことをエースパイ

ロットと言つてたじゃない。何かあつたんでしょ。」

今度はアスカか・・・

「事実だろ?」

「コウスケさん・・・もしかして」

シンジ?何を言うつもりだ?

「人を殺したことを後悔しているんですか？」

．．．！

「そんなわけないだろ。軍人なんだぞ。人を殺すぐらい．．．」

「何ともないのか？俺．．．」

「嘘ですよ！この前言つてたじゃないですか！」

「この前．．．」

「人殺しでもろくでなしでも綾波と代われるなら代わりたいたと。」

「言つたな．．．」

「優しすぎるのね。」

葛城．．．

「その優しさがコウスケ君を傷つけるのね。」

「バカなことを言うな！」

「そして許せないのね。自分が．．．」

ああ、その通りだよ

俺はいまだに生きている俺自身が許せないんだ。

「本音が出たわね。」

赤木．．何言つてんだ？

「口に出てるわよ。」

「・・・あ。」

コウスケは立っていられず、その場で胡坐をかいた。

「・・・そうだよ。俺は人殺し・・・それが許せない。あの時からそうだった。」

彼女をミサイルで吹き飛ばした時から

二年間の空白を自覚してから

俺は途方もない人殺しなんだ・・・

「そんな奴のもとにいて幸福になれるか？なれるわけないだろ。」

誰も答えない。

「なら、使徒を殲滅したら消えるのが一番いい。その前にくたばるならもつといい。」

「何言ってるんですか！」

シンジが叫ぶ。

「・・・言ったろ？お前たちの未来だ。碇司令、副司令、シンジ、アスカ、レイ、葛城、赤木、加持、青葉、伊吹、日向、榛名・・・みんなの未来だ。」

「特務一尉は？」

レイが尋ねる。

「俺はいない方がいい。」

「何だよ！」

アスカが問いかける。

「平和な未来に俺みたいない人殺しはいらなない・・それだけだ。」

コウスケの視線が自然と落ちた。

「なら、平和な未来を創るまでが俺の仕事だ・・・」

「あなたバカね。」

「そうだよ。赤木。俺はバカなんだ。今更気づいたのか？」

「違うわよ。」

「葛城。何が違うんだ？」

「あんただけ気づいてないじゃない！」

「何言ってるんだ？アスカ。」

「コウスケさん。あなたの仕事はまだあります。」

「これ以上俺に苦しめと言いたいのか？シンジ！」

「・・あなたはその苦しみを未来の人に伝えなければならぬ。」

「意味が解らない・・レイ。」

「つまりは君のような存在を出さないためにも君が必要ということだ。」

後ろを振り返るといつの間にかゲンドウがいた。

横には冬月も

「どういう意味ですか？」

「君が証人になるのだよ。未来が平和になるにはどうすればよいのか。君の経験をもとにしてな。」

冬月が言った。

「人殺ししかできない俺にですか？」

「だからこそ命の価値がわかるのだろう？」

ゲンドウの言葉はコウスケに響いた。

「命の価値がわかるからこそ、それを無意味に消してきた罪が許せない。」

赤木……

「でも、のうのうと自分は生きている。」

葛城……

「だから余計に自分が許せない。」

アスカ……

「でも、だからこそ出来ることがあるんじゃないですか？」

シンジ……

「……それを未来に伝えること。……それはあなたにしか出来ない。」

レイ・・・

「そのためには君が必要なのだ。」

碓司令・・・

ああ、そういうことか・・・

お前が夢で言いたかったのはそういうことなんだな？

だから平和な未来を創れと

そう言うんだな？

そうか

それが俺にできる事なのか・・・

コウスケは笑いが止まらなかった。

今までなんで気づかなかったのか

それがいかに重要か

一番解っていたつもりが

一番解つてなかった

「ほんとにバカだな・・・俺。」

「特務一尉。」

レイがそばに寄っていた。

「戻ってきてくれますか？」

「いいのか？」

「・・・人としてやってはいけないことをちゃんと教えてください。」

「そうか・・・そうだな。」

コウスケは数日前に自分がしたことに関付く

「でも、申請はしたからな。もう戻れんよ。」

「これのことか？」

ゲンドウが一枚の紙を取り出した。

「誤字だらけで何を書いてあるかわからん。よって却下だ。」

ゲンドウがびりびりに破いた。

「碇司令。」

「レイのことよろしく頼む。」

「・・・了解しました。」

コウスケは立ち上がり、びしっと敬礼を行った。

おそらく一番真面目で不格好な敬礼だろう。

水の滴が一滴流れたのは見間違いではないだろう。

「それと、シンジ、レイ。」

「はい。」

「今度食事にでも行こう。私にできることはこれぐらいだからな。特務一尉も来たまえ。」

「父さん・・・」

「日には追って知らせる。」

「うん。」

シンジは泣きそうな顔だった。

「いつまでここにいろ？やるべきことがあるのだろうか？」

ゲンドウの言葉は冷たく感じるが、それは不器用な優しさだったのかもしれない。

「さくて、お仕事を終わらせないとねん。」

ミスアトが伸びをしながら言った。

「と言って日向二尉に押し付けるのでしょ？」

とリツコがミスアトの考えを見抜いた。

「そうね。ミスアトの仕事ってそれよね。」

アスカの容赦ない言いよう。

「ミスアトさんも自分の力でやればいいのに・・・」

シンジもなかなか容赦ない。

「家でも葛城三佐はだらしがない。」

レイの言葉はトドメだろう。

ゲンドウがサングラスをきらりと光らせる。

「今のは本当かね？葛城三佐。」

「い、いえ。その・・・」

「給与査定を楽しみにしたまえ。」

どうやら死神の鎌が振り落とされたようだ。

ミサト以外はやれやれと言ったところだろうか。

コウスケにはそれがとても平和そうに、幸せそうに見えるのであった。

「こういう未来のために俺が必要か・・・」

コウスケは自分を振り返る。

へらへらしながらもどこかで死に場所を求めてた

人を殺すしか能がない

だからこそ教えられるもの

それは

命の尊さ

そして

戦いの愚劣さ

・
・
・

もう迷わない

俺ができること

それは・・・

「・・・行こうか、みんな。未来へ」

それでいいんだよな

・
・
・

さよなら、みんな

よろしく、みんな

第25話 未来への一歩

あれからというもののコウスケは以前の状態に戻った。

家には帰るようになっているし、迷惑をかけた人たちには一通りに謝った。

何が何だかわからない人たちはかなり訝し気に見ていたが、チルドレン―特にレイとの受け答えを見て安心していたようだ。

もつともコウスケ自身の心情の変化には気づいてないようだが

・
・
・

第三新東京市から離れた山岳の上空を一機のヘリが飛んでいた。

そのヘリを操縦しているのはコウスケである。

元々戦闘機乗りであるコウスケだが、ヘリの操縦もできるのだ。

ふと下を見ると大きな湖が二つあった。

「第二、第三芦ノ湖か．．．これ以上増えないことを望むな。」

そう言うのはNERV副司令たる冬月だった。

彼は使徒との戦闘で出来た二つの湖を見ながらもの鬱げな顔を隠そうとしなかった。

「昨日キール議長から計画遅延の文句が来たぞ。俺のところに直接。」

と横にいる男―総司令である碇、ゲンドウに言う。

「相当いらついでだな。しまいにはお前の解任も仄めかしていたぞ。」

「そりや大変ですな。」

冬月の話を聞いていたコウスケが思わず口にした。

「計画に関することは順調である。SEELの老人は何が不満なんだ？」

(ダメーだからだろ。)

ゲンドウと冬月のことを知るコウスケは心でそう言った。

「肝心の人類補完計画が遅れてる。」

当然ながら冬月は計画を進める気などない。

無論ゲンドウもだ。

「問題ない。気づいたところで何もできんよ。」

ゲンドウはこういった裏工作が得意な人だった。

だからこそNERVの総司令になりえたのだろう。

もしかしたらシンジにもその素質があるのかもしれないとはコウスケ一人が考えることだった。

「ところでレイはどうだ？特務一尉。」

ゲンドウが気になったのかコウスケに聞いてきた。

「元気ですよ。今までの遅れを取り戻すように。」
「そうか。」

というもののその声は大変優しく感じた。

「零課は？」

「編成は済んでいきます。ただ、訓練を行えないのが痛いすな。」

「君には苦勞を掛けるな。」

「ありがとうございます。ただ、それは副司令にこそ必要なのでは？」

「むっ……」

「まったくその通りだ。」

冬月が首を縦に振っている。

「むっ……」

ゲンドウが押し黙ってしまった。

「この前言った食事だが……」

（話題を変えたな？）

「コウスケは思わず笑いそうになったが堪えた。

「あの日に頼む。」

「了解しました。」

まったくこの男は・・・とのつぶやきが聞こえてきた。

「あの男はどうする?」

冬月が気になったのかゲンドウに訪ねた。

「好きにさせておくさ。マルドゥック機関と同じだ。」

(加持か・・・今は京都にいるな?)

実際提出された出張計画は松代であつたが、零課の監視から京都に行つたことが報告された。

(なにも見つからんよ加持。)

・・・

NERVでの仕事を終えてコウスケは帰宅していた。

帰るとレイが夕食の準備をしていた。

「おお、こりやさらに腕を上げたんじゃないか?」

並べられた料理を見てコウスケは言った。

「おそらく自分よりもまいんじゃないか?」

レイはシンジに料理を教えてもらっていた。

最初は苦労したとシンジから言われた。

レイは包丁をプログレッシブナイフのように持ったらしい。

それをシンジが白刃どりで受け止めたとか……
まあ、戦闘訓練しかやってこなかった少女だ。

料理のことをよく知らなくて当然だろう。

余談だが、いつ教えてもらうのかはすぐにわかるのだ。
なぜなら、ときどきレイは妙にそわそわするのだ。

そして帰ってきたときに妙に嬉しそうであった。

つまりそういうことだった。

「やっぱりうまいな。」

コウスケが料理を食べて思うことだった。

ちなみに家事はちゃんと分担している。

料理、掃除は交代で行うのだ。

コウスケがNERVの仕事で遅くなる時はレイをお隣の葛城家に預けるのだが……
ちなみにレイはその日を結構楽しみにしているらしい……

洗濯だけは別々で個人が行うことになっていた。

家事に関しては某作戦課長とはかなり違うだろう。

「レイはいいお母さんになりそうだな。」

と言ったコウスケはしまったと思った。

レイにとってお母さんと言えば遺伝子提供者である碓ユイツまりは碓ユイと重ねていると言っているようなものだった。

これはレイが嫌がることの一つである。

ゲンドウが碓ユイと重ねてみていたことを何となく感じ取っていたのだろう。碓ユイの名前を出すと少し嫌そうになる。

(まづい……)

コウスケはひそかにレイの様子を窺う。

だがコウスケの予想に反してレイは赤くなっていた。

「どうした？レイ。」

「……碓君にも同じことを言われました。」

「シンジ君に？」

「ということは同じ反応をしたんだろ

なぜだ？」

「お母さんと言われて赤くなる？」

「お母さん……母性的？優しい？」

「コウスケは考える。」

「夫婦？」

そして一つの結論にたどり着いた。

「もしかして嬉しかったのか？」

「・・・」

「恥ずかしかったとか」

レイは答えないが、うつすらと赤くなっている。

そんなレイを見てコウスケはニヤリと笑う。

だから碓司令と同じ笑いをするとレイに思われたのだが、そんなことを知らないコウスケ。

「自分がお母さんになったことを想像したのかな？」

レイが明らかに動揺している。

「でもお母さんって一人じゃできないからな・・・」

ますます赤くなるレイ

「お父さんは誰だったのかな？」

レイはコウスケの視線に耐えられず俯いてしまった。

「鈴原君？それとも相田君？」

コウスケはわざとやっていた。

「もしかして・・・碓君？」

碓君と聞いてビクツと反応するレイ

「そうかそうか。．．．そういえば明日だな。碓司令との食事。」

そういうコウスケの顔は真面目に戻ってない。

「いや。ちゃんと挨拶しないと。碓司令に．．．おっと、未来のお義父さまに。」

「．．．いじわる。」

「ははは．．．」

（いいもんだ。こんな風に笑える世界に俺もいていいんだからな。）

「冗談はここまでにして、レイ。」

「．．．はい。」

いまだに余韻が抜けないのかうつすらと赤い。

「レイもそんな未来を描いていいんだ。俺は教えてもらったからな。今度はレイの番だ。」

「解りました。」

と言ってじっと考え込むレイ

（どうした？）

「．．．子供はどうすれば生まれますか？」

コウスケは盛大に吹いた。

口の中に何もなかったのはよかった。

レイがひそかに嫌な顔をしていた。

「・・・知らないのか？」

(まさかとは思うがレイにそういうことを教えていないのか?)

そういうことは学校である程度は習うものだ。

「はい。」

レイは元々計画のためだけに存在した。

したがってそういうものをゲンドウとリツコが教えるわけなかった。

(うかつだった。そして十分あり得る事態だった。恨みますよ、碇司令・・・)

その方法を教えればおそらく、いや絶対やるに決まってる・・・シンジで・・・

なぜコウスケがここまで危惧するのか？

それはレイのお兄ちゃん発言だった。

ミサトとリツコに言われるままコウスケをお兄ちゃんと呼んだレイ。

このことからレイは人に言われたことをそのまま実行してしまうということをコウ

スケは学んでいた。

しかもそれが人に必要だとレイが考えるのだからたちが悪い。

今回の件は確かに人には必要なことだが・・・

(どうしよう・・・葛城・・・絶対からかうな・・・赤木・・・うわあ、喜んで教えそうだな。)

そしてシンジが犠牲になる・・・

簡単に想像できた。

(伊吹二尉・・・潔癖症だからな・・・変に話がこじれそうだ。)

その犠牲者は自分・・・

「特務一尉。教えてください。」

レイが促す。

じつと紅い眼で見つめてくる。

コウスケは汗が止まらないことを自覚した。

「・・・それは後日、最適な人に教えてもらう。だからその話は他人にしてはダメだ。」

とは言っても最適の人なんて見つからない。

「・・・わかりました。」

しゅんとしているレイに罪悪感を感じる。

(教えられるわけないだろ。・・・どうしよ。)

人としてもっとも重要なことである。

だからこそ簡単に教えられない。

ましてや自分は男なのだ。

ちなみにコウスケは知識はあってもそういう経験はない。

この問題をどうするべきか本気で思案しなければならなかった。

・
・
・

「碇司令。ここによろしいのですね？」

コウスケはNERVのヘリを飛ばしていた。

「ああ。」

今、コウスケたちは共同墓地の真上にいた。

「降下します。」

そう言ってコウスケはヘリを下していった。

（墓参りか・・・）

コウスケに家族はいない。

セカンドインパクトで皆いなくなってしまったからである。

おそらくはどこかに埋葬されているだろうが、混乱の中にあつた日本でコウスケ自身生き延びるのに必死であつたため、コウスケはその場所を知らない。

（親不孝な奴だな・・・俺。）

「待機していてくれ。」

そう言ってゲンドウはヘリから降りた。

ゲンドウの向かう先には妻である碓ユイの墓がある。

そこには先に来ていたシンジがいた。

「心配か？あの二人が。」

返事は帰ってこなかった。

だが、もう一人の同乗者であるレイはじつと二人のことを見ていた。

「心配するな。碓司令から一步踏み出したんだ。あとはシンジ君次第だろ。」

それでもレイは視線を離すことはなかった。

(二人ともレイに近い人だからな。)

そう思うと仲違いをしないか気になるだろう。

なにせ親子どころか人としてもまともに接してこなかった二人である。

気になるのもしょうがあるまい。

コウスケが碓親子に目をやると、二人がこつちに向かつて来ているが見えた。

するとシンジがこつちに手を振ってきた。

そんな様子のシンジにレイがほつとしてるように見えた。

「レイ、シンジ君に手を振ってやったらどうだ？」

その言葉にレイは少し戸惑うが、小さく、はつきりとシンジに見えるように手を振った。

シンジが走ってくる。

「ちゃんと見えたらしいな。」

レイのほうを見ると少し赤くなっていた。

(初々しいね。)

そしてそれを感じていたのはコウスケだけではないことを知っていた。

シンジの後ろでゲンドウもフツと笑っていたのが見えたからだ。

シンジがへりに乗ってきた。

「よろしくお願いします。コウスケさん。」

そう言ってシンジはレイの横に座った。

「ちやつかりレイの横に座るか。」

「へっ・・・あ、ごめん綾波・・・」

「・・・別にいい。」

そっけなく答えるが嬉しいのはよくわかっている。

そんな二人にコウスケは思わず微笑んでしまう。

「では碇司令。出発します。」

「頼む。」

ゲンドウはシンジの対面に座っていた。

コウスケはヘリを飛ばした。

ヘリの中で会話はなかったが、ぎすぎすした雰囲気ではなかった。

・・・

「こりやすい。」

コウスケはテーブルに並べられた料理たちに感動していた。なぜなら、そう簡単に食べられるものではなかったからだ。

「自分も同席してよろしいんですか？」

「構わん。綾波特務一尉には借りもある。」

コウスケはどういうわけかよくわからなかった。

ゲンドウもそれ以上説明することはなかった。

コウスケの対面にはレイがいる。

レイは以前にも来たことがあるのか平然としていた。

シンジはゲンドウの対面に座っていた。

シンジは初めてなのだろう少し戸惑っていた。

そういうコウスケもこういう場所は初めてである。

高級軍人ならばそのような機会があるだろうが、士官とはいえ下から数えた方が早い階級のコウスケだ。

したがってテーブルマナーというものもよく知らない。

レイのほうを見ると完璧な作法であった。

(碇司令のおかげだろうな・計画のためと言っていたが、どこかで人として接していたのかもしれない。)

一方シンジはどうもちぐはぐだった。

それを見てゲンドウが・・・

「シンジはこういうのも教えてもらえなかったのだな。」

それはつぶやきであったが、ゲンドウ自身が今までしたこと重さを感じさせるものだった。

「シンジ、作法はあとで教えてやる。今は楽にしろ。」

「うん。」

シンジはいつもの食べ方になるが、元々雑ではないので荒っぽくはなかった。

黙々と時間が過ぎていく。

コウスケはじつと待っていた。

ゲンドウが何かを話そうとするのが解っていたからだ。

「シンジ。」

「何? 父さん。」

「・・・私の話を聞いてくれ。」

そしてゲンドウは語り始めた。

EVAのこと

使徒のこと

NERVのこと

そして人類補完計画のこと

(思い切ったことをするな。)

シンジのほうを見ると十分に理解できているとは思えなかった。

「やっぱりそうだったんだ。」

「知っていたのか？」

「うん。零号機に乗った時に。」

「そうか。」

「・・・父さんはなんでこんなことをしていたの？」

シンジはじっとゲンドウを見ている。

ゲンドウの真意を知りたい。

それがシンジなりに一歩踏み出した結果なのだろう。

「ユイに再び会うためだった。」

「母さんに？」

「ああ。それがすべてだった。」

「そのために綾波を・・・」

「ああ。だが、それが間違いであったことを知った。」

ゲンドウがどういう表情なのかサングラスのせいで読み取れなかった。

ただ雰囲気から後悔を読み取ることはできた。

「私のエゴでシンジとレイに苦痛を与え続けた。・・・すまなかった。」

ゲンドウの声はいつもの高圧的なものではなかった。

（本心なんだな。）

「父さん。」

「なんだ？」

「母さんのこと愛してたの？」

「ああ、それは今も変わらない。」

「そうなんだ。」

そしてシンジは一人納得したような顔になった。

「正直父さんのこと許せない部分もあるよ。でも父さんのことがわかってよかった。」

「シンジ・・・」

「それに綾波に会えたしね。」

「碓君・・・」

レイの目は少し潤んでいた。

（綾波に会えたしね・・・か・・・天然だなシンジは。）

なんてことを思うコウスケだった。

「もうしないんでしょ？計画。」

「ああ。完全に破棄した。」

「ならいいよ。」

「そうか。」

（和解への一步か）

その一步がこの二人に与える影響は大きいだろう。

少なくとも関係が悪化することは無いだろうと考えるコウスケだった。

「シンジ。」

「なに？父さん。」

「私はNERVの総司令だ。だから今後お前とこうしたことができるとは思えん。だが、すべてが終わった時もう一度会ってくれるか？」

（碓司令もつらいな。）

「うん。解ったよ父さん。」

「そうか。．．シンジ、レイのことをよろしく頼む。」

「う、うん。」

いきなりレイのことをよろしくと言われて赤くなるシンジ

よく見るとレイも少し赤かった。

それを見たコウスケの口がニヤリとなる。

「そういえば碓司令。シンジ君って意外ともてるんですよ。」

「へっ！」

シンジは意外だという顔だった。

「NERVにファンクラブがあるくらいですからね。」

実際に存在するのだ。

非公式だが．．．

なぜコウスケが知っているかと言うと同じ課の同僚にいるからであった。

なんでもゲンドウとは全く違うというのがいらしい．．．

遺伝子の神秘とかなんとか騒いでいるらしいが、真実はコウスケでも解らない。

「そうなの?!綾波。」

シンジはレイに確認を取ろうとするが

「……知らない。」

と言ってレイはそっぽを向いてしまった。

(知らない……嘘だなあ。絶対に知ってる。)

などとコウスケは楽しんでた。

「それに意外とやり手なんですよ。」

「……そうなのか？」

そう聞くのはゲンドウだった。

「ヤシマ作戦が終わった直後、シンジ君は助け出したレイになんて言ったかな？」

「コウスケさん！聞いてたんですか?!」

「ばっちり。……ああ、安心しろ。俺しか聞いてなかったから」

この時、零号機の救出で発令所は大慌てであり、さらに使徒の攻撃で一時的に通信機能のマヒしていた。

そのため近くに居て通信が妨害されなかったコウスケだけがシンジとレイの会話を聞いたのだ。

「そんなこと言われても……ね、綾波。」

とシンジはレイに振るが、レイはじつとシンジを見ていた。

何かを期待するような目だった。

「な、なに？」

「言ってほしい。」

「え！」

「もう一度言ってほしい。」

シンジは困り果ててしまった。

そんな様子にコウスケが口を挟んだ。

口元はニヤリとしている。

「・・・じゃあレイから始めたらどうだ？」

「解りました。」

というレイにシンジも覚悟を決めたようだった。

「何泣いてるの？」

「・・・そこから始めるのか？レイ。」

「はい。」

レイの目はコウスケに抗議していた。

なぜ邪魔するの？

と・・・

「・・・すまん。続けてくれ。」

ゲンドウは興味津々のようだった。

「ごめんなさい。・・・こういう時どんな顔すればいいのかわからないの。」

「・・・笑えばいいと思うよ。」

シンジは女殺しの笑顔を見せていた。

「碓君、ずるい。そんな風に笑ってなかった。」

とレイは赤くなりながら言った。

「・・・シンジ、それは口説いているのか？」

とゲンドウはシンジに聞いた。

「ちっ違うよ。」

「やっぱりそう思いますか？碓司令。」

「ああ、どう考えても口説いているようにしか聞こえん。」

そんなゲンドウの言葉にシンジは真っ赤になって俯いてしまった。

「意外と侮れんな。」

とゲンドウはつぶやいた。

「あとシンジ君。」

「はい・・・」

シンジの声は小さくなっていった。

「昨日レイになんて言ったんだ？」

「特務一尉。」

レイの声は大きくないが、はつきりと抗議している声だった。「いや、レイに聞いても答えてくれなくてな。」

レイが必死にシンジに向かって顔をフルフルしていた。からかわれるとわかっているからだろう。

だが、シンジは気付かなかった。

「昨日ですか？・・・たしか掃除中に綾波を見て、雑巾の絞り方がお母さんみたいだったから、お母さんみたいだと言いましたけど。」

「シンジ、それは・・・」

ゲンドウは珍しく慌てるように言ったが、コウスケが宥めた。

(昨日の俺と同じ考えをしたんだな。)

「まあまあ、碇司令。あれを見てください。」

と言つてコウスケはとある方向を指さした。

その方向には赤くなつたレイがいた。

「どうした？レイ。体調がすぐれないのか？」

ゲンドウの声にビクツと反応するレイ

「いえ、なんでもありません。」

「何でもないわけじゃないよな？レイ。」

「どういうことだ？」

ゲンドウは何が何だかわからないと言いたげだった。

「レイの楽しい未来図ですよ。なあ、レイ。．．お父さんは誰だったのかな？」

レイはやはり答えなかった。

(黙秘か．．．なら)

「シンジ君は誰だと思う？」

「どういうことですか？」

「お母さんは一人ではなれんだろ？．．当然お相手がいるということさ。つまりレイが旦那さんに考えている相手さ。」

コウスケはニヤニヤとしながら言う。

するとシンジは真面目な顔になった。

「誰だろ．．．トウジは．．違うだろうし．．まさかケンスケ！」

(すごい結論だな．．．)

コウスケは内心あきれていた。

どうすればそんな結論になるのか、シンジの脳内を見てみたかった。

「違う。」

レイがはつきりと答えた。

そして目でコウスケにもうやめてと言っていた。

「碓司令は誰だと思えますか？」

ゲンドウも真面目に考えていた。

「うゝむ・・・冬月・・・はないだろう。オペレータ・・・無いな・・・まさか、特務一尉！君
なのか?！」

（こつちもすごい結論だな・・・）

やはり似た者同士なのかとついつい考えてしまう。

「違います。」

またもやレイは答えた。

そしてコウスケを見る目が険しくなっていた。

だが、そんなもので止まるコウスケではない。

伊達にエースとは呼ばれていないのだ。

「フッフ、碓君ですよ。」

「へっ!」

「むっ!」

シンジとゲンドウの二人が反応した。

（なんで碓司令が・・・両方碓だったな・・・）

「・・・碓司令、シンジ君ですよ。」

「そっそうか。」

と言うゲンドウは何となくがっかりしたように見えた。

（おいおい・・・）

「シンジ君、ご感想をどうぞ。」

「あの・・・その・・・」

真つ赤になったシンジはまともに答えられそうになかった。

「じゃあ、レイ。ご想像の世界はどうだったかな？」

レイに矛先を向けたコウスケだが・・・

「・・・お兄ちゃんのいじわる。」

「が・・・」

レイの手痛い反撃を被ることになった。

一瞬レイがにやつと笑ったように見えた。

「コウスケさん・・・やっぱり・・・」

シンジは噂で聞いていたことを思い出していた。

コウスケがレイに下心があるという・・・

「誤解だ！シンジ君！」

「綾波特務一尉。」

とても低い声が聞こえた。

「君に一任すると言ったが、レイにそう呼ばせているのか？」

声の主はゲンドウだった。

「そんなことはありません！」

「お兄ちゃんと呼べと言われました。」

レイの言っていることは事実であった。

ただ、「誰に」が抜けているだけだ。

（巧妙に事実を隠蔽か・・・くそっ！）

こういう時は後に言うほうが不利なのだ。

とつてつけたように聞こえてしまうからだ。

「汚いぞ！レイ。」

「仕返し。」

「ぐ・・・」

確かにコウスケはやり過ぎた。

因果応報と言うやつだろう。

「・・・思った以上に良好な関係のようだな。」

いつの間にかゲンドウはフツと笑っていた。

「それは赤木博士か葛城三佐の入れ知恵だろう。」

「はい。」

レイは素直に答えた。

「綾波特務一尉。」

「はい。」

「レイを頼む。」

「解りました。」

（よかった。碇司令はわかってくれたか。）

と安心したのだが・・・

「特務一尉。」

ゲンドウがささやくようにコウスケを呼んだ。

「はい。」

そんなゲンドウの様子に嫌な予感がした。

「・・・お兄ちゃんと呼ばれてどうだった？」

(なんてこと聞いてくるんだ?!)

「どうだったと聞かれましても・・・」

ゲンドウがじつと見てくる。

(何とか逸らせないものか・・・)

「それより碓司令。レイの未来図ですが・・・」

「問題ない。レイが望むなら構わん。必要とあらば、今すぐにも特例で結婚できるよ
うにする。」

(そこまでやるか?・・・ていうか完全に職権乱用だな。)

「・・・碓司令もお義父さんと呼ばれますな。」

「むっ・・・」

などと唸ってゲンドウは沈黙した。

(動揺しているな・・・)

しばらくするとゲンドウが再起動を果たした。

「それもいいな。」

と言ったかと思うとシンジの方に向き

「シンジ、早く孫を見せろ。」

などと言うのであった。

「とっ父さん?!」

シンジが慌ててふためいている。

「碓司令、段取りがかなり飛んでいますよ。」

「問題ない。」

「問題ありますよ……」

（レイは静かだな……）

コウスケはレイの方を見た。

赤くなり俯いており目もぼんやりしていた。

「孫・・碓君との子供……」

などとレイはつぶやいていた。

（妄想モード突入……）

おそらくレイにとつてとても幸せな未来でも見ているのであろう。

（……まあ、いいか。）

そんな未来を描けるのは悪いことじゃない

レイは純粹だ

だからレイを見るたびに自分が嫌になった

血塗られた過去の自分に

過去はもう変えられない

いや、その過去があつたから今がある

そして俺も考えるべきだ

いや、だからこそ考えるべきなのだろう

自分にとって良い未来とは何かを

そんな思いがコウスケの頭に響くのであつた。

第26話 綾波家へご招待

コウスケは自分の執務室で雑務に追われていた。

「形式ばかりで退屈だよ、まったく．．．」

休憩とばかりに煙草を取り出す。

「碇親子は何とかなりそうだし．．．」

この前の食事は和睦への一歩となった。

これからはどうなるかいまだにわからないが、少なくとも悪くはならないはずだ。

(そーいや俺つてとんでもない位置にいるな。)

NERVの作戦本部副部长、作戦局二課課長、零課課長、レイの保護者、ゲンドウの

同志．．．

いつの間にかかなりのVIPになっていた。

しかもチルドレンとの関係も悪くはない。

「．．．その気になれば世界を掌握できるな。」

そんなことを想像するが

「性に合わん。そんなもの俺にいらんし．．．」

確かに世界を掌握したところで何をするのか。

「・・・バカらし、やめやめ。」

と不毛な考えをやめることにした。

するとコウスケのPCから警告の文字が映し出された。

「ん？」

(ターミナルドクマに侵入者?)

IDはリツコのものであったが、彼女は今、研究室にいる。

そのためMAGIが異常を知らせてきたのだ。

NERVの奥深くにあるターミナルドクマに関してはコウスケが担当していた。

本来はリツコの担当であったのだが、コウスケが真実を知った時にゲンドウから直接管理するように言い渡された。

なのでそこで異常があつた場合、MAGIからコウスケへ直接警告が行くようになっていた。

「・・・随分暇なんだな。行くか。」

コウスケはいまだに残る雑務を放置し部屋を後にした。

・・・

(・・・二人か)

ターミナルドクマについたコウスケは何となく感じる気配からそう予測した。

（一人は加持だろう・・・もう一人は誰だ？）

コウスケは耳を澄ました。

「・・・二日酔いの調子はどうだ？」

（加持の声だな。）

「おかげでやつと覚めたわ。」

（葛城?! どうしてこんな所にいるんだ？）

コウスケは日本政府の内調の者がいると思っていた。

なのでここにミサトがいるのは予想外であった。

「これがあなたの本当の仕事？それともアルバイトかしら。」

「どっちかな？」

「特務機関NERV特殊監査部所属加持リョウジ、同時に日本政府内務省調査部所属加持リョウジでもあるわけね。」

「バレバレか。」

「NERVを甘く見ないで。」

（それはお前も同じだよ。葛城。）

「碇司令の命令か？」

「いえ、私の独断よ。．．これ以上バイトを続けると、死ぬわ。」

「碇司令は俺を利用していい。．．まだいけるさ。」

(どっちかと言うと見逃されてるんだけどな。)

「葛城に隠し事をしていたのは謝るよ。」

「昨日のお礼にチャラにするわ。」

「そりやどうも。ただ司令やりっちゃんも君に隠し事をしている。」

加持が手を上げるのが見える。

カードを持っているようだ。

「それが．．これさ。」

加持がカードを通した。

「．．なぜだ？」

ドアは開かなかった。

コウスケがここに来る前にロックしたからである。

今はコウスケが持つもう一つのカードでしか開けられない。

(さて．．どうする?)

別に見逃してもよかつたのだが、ここで騒ぎを起こされると非常にまずい。

消すことも難しくなかつたが後始末が楽ではないし、顔見知りの二人を消すのは戸惑

われた。

コウスケは意を決して二人の前に出ることにした。

「当たり前だ。その偽造カードじゃそこには入れない。」

「綾波?!」

「コウスケ君?!」

二人が驚くようにコウスケを見た。

「二人してこんなところでデートか？」

「そんな風に見える？」

ミサトがこつちに銃を向けた。

「そんな物騒なもんしまえよ、葛城。」

（あんまり気がいいものじゃないな。）

「どうしてここにいるんだ？」

「それはこつちのセリフだよ。加持。」

加持の目から警戒するような視線を感じた。

（どうしようか・・・うまくいけば・・・）

「そこにあるものが見たいのか？」

「見たいと言えば見せてくれるのか？」

「別に構わんよ。」

(正直そこまで重要じゃないからな。)

と言うコウスケに加持が驚いていた。

「ここを開けられるのは極一部だけだ。」

コウスケはカードを取り出した。

先日ゲンドウからもらったカードである。

そのカードに加持は気付いたようだ。

「そのカードは……」

「まあ、見てろ。」

コウスケがカードを通した。

認証の音が鳴りドアが開いていく。

中には七つの目がある白い巨人が貼り付けにされていた。

胸には赤い槍が刺さっている。

(第二使徒リリスか。・・レイの魂の元なんだな。)

コウスケはリリスを見ながらそう思った。

(・・なぜレイになったんだ?)

リリスは何を考えて人になったのか

何か目的があったのか

コウスケは何となく気になったが、目の前の巨人は何も答えなかった。

「これは・・・EVA?・・・いえ、まさか・・・」

ミサトが信じられないという顔で驚いていた。

「そう、セカンドインパクトからそのすべての要であり、始まりでもある・・・アダムだ。」

加持がミサトに解説するように言った。

(残念だが、違うんだな。)

「違うぞ、加持。これは第二使徒リリスだ。」

「?!アダムじゃないのか?」

「ああ。」

コウスケは煙草を取り出した。

「・・・なぜコウスケ君がそんなこと知ってるの?」

ミサトが疑いの目を向けた。

「なぜだと思おう?」

「こつちが聞いてるのよ。」

「真実を知りたいか?」

コウスケが二人をじつと睨む。

(さて、どう出るかな?)

そんな様子のコウスケに二人が戸惑う。

加持の方から声をかけてきた。

「教えてくれと言ったら教えてくれるのか?」

「別にいいよ。」

「ほんとに教えてくれるの?」

「嘘は言わんよ。そこまで重要でもないしな。」

今のコウスケにとって未来を創ることがすべてであり、NERVの秘密やらSEELEなどどうでもよかった。

レイのことに関しては別だが・・・

「ただ・・・」

「ただ・・・なんだ。」

「加持が三足足袋をやめたららの話だな。」

「あんた!他にもあるの?!」

ミサトが吠えるが、加持は平然としていた。

「俺は真実を知りたいだけなんだ。それがわかるのならそんなもん捨てられるさ。」

「ほんとだな?」

コウスケは加持の目を見た。

どうも本気であることを感じ取った。

「・・・わかった。夜に俺の家に来い。そこなら安全だ。ついでにアスカもな。」

「なんでアスカも？」

ミサトがコウスケに問う。

「アスカも知らなければならぬし、約束もしたからな。」

コウスケは携帯電話を取り出した。

コウスケの持つ携帯電話はターミナルドグマであつても連絡できるように改造されたものだ。

改造した人はリツコである。

(さてと・・・)

「・・・レイか？すまん。授業中だったか・・・」

二人は「は？」つと言いたげであつた。

「今日シンジ君を家に誘おうと思う。・・・夕食にな。」

コウスケの顔はにやついていた。

「そうか、代わりに作ってくれるか。わかった。好きなようにしてくれ。・・・ああ、今日は多めに頼む。」

コウスケは二人をちらりと見た。

「時間は・・・七時頃になるかな？・・・じゃあ。」

コウスケは電話を切った。

「と言うわけでシンジ君も連れてきてくれ。」

「あんた何考えてんの！」

「言ったとおり夕食に誘ってるんだが？」

「それとシンジ君が何の関係が有るのよ！」

「そう言えばレイが気合を入れて作ってくれるだろう？」

などと真顔で言うコウスケ。

レイの料理の腕はコウスケをはるかに凌ぐレベルなのだ。

そんなレイが気合を入れて作ったらどうなるのか

それはコウスケにとつて一つの関心ごとだった。

ちなみに当番制は継続している。

だが、最近はレイがやりたいと言い出してコウスケは一週間に二回ほどになっていた
が・・・

そんなコウスケに二人はあきれたような顔だった。

「時間は聞いたな？」

頷く二人

「じゃあ、その時間に。またな。」

コウスケは去ることにしたが・・・

(レイはどんなものを作るかな?)

「・・・夕食、楽しみだ。」

なんてことを聞いた二人は少し不安を隠せないようだった。

・・・

「こりゃ、いつになくすごい出来だな。」

コウスケはテーブルに並べられた料理たちに感心した。

元々レイはもとおいしいものを食べてみたいということから始めた料理であり、その生きるための本能と講師の腕のおかげでかなり上達したのだ。

さらにある特定の人物に食べてもらいたいという思いが入っており、今回の料理はコウスケが今まで見てきた中で一番であった。

「どうした? 食べないのか?」

箸をつけようとしないう四人に向かって言った。

皆パイプ椅子に座っており、コウスケが以前に予備で買っておいたものだ。

「・・・いいの?」

ミサトがおずおずと聞いた。

「構わんよ。」

「・・・でも一人納得していないみたいだぞ。」

と言つて加持がレイを見ていた。

「何だ？レイ。そんな怖い顔して。」

レイは不機嫌ですというオーラを隠せずにいる。

「・・・私、聞いてない。」

「ん？何を？」

（シンジだけだと思つてたんだな。・・・予想通り。）

などとコウスケは心の中でニヤリとしていた。

「特務一尉。一人だけじゃ・・・」

「誰も一人だけとは言つてないぞ。」

（言わなかったただけだけだ。）

などと意地の悪いことを考える。

レイが拗ねたように顔を顰めた。

「・・・もしかして特定の人物に食べてもらいたかったのか？」

途端にレイが慌てる。

「誰に食べてもらいたかったのかな？レイ。」

ちらりとシンジのほうを見るがすぐに顔をそむけてしまった。

「ほれ、言ってみろよ。」

「うゝ」

レイが困り果てて唸ってしまう。

（知ってほしいけど言うのは恥ずかしい・・・こりや、面白い。なら・・・）

「じゃあ、シンジ君は誰だと思う。」

「ぼっぼくですか？」

「うん。」

横で見ている三人はわざとやってるだろという顔だった。

（当たり前だろ。こんなおいしいチャンスを見逃せるかよ。）

というコウスケの心がわかったのか、三人ともあきれていた。

「誰だろ・・・加持さん？ミサトさん？アスカ？」

シンジはごく真面目に答えていた。

（本気で言ってるのか？こいつ・・・）

「違うぞ。」

「・・・父さんとか」

(なんで自分が入らないんだ?!)

「・・・アスカは誰だと思う?」

シンジは横にいたアスカに聞いてみることにしたようだ。

「私に振らないでよ!・・・知らないわ。」

アスカは少し怖気づいていた。

なぜならレイがものすごく怖い顔で睨んでくるからだ。

シンジはそんなレイに

「綾波、どうしたの?」

なんて聞いてしまう。

「・・・知らない。」

と言ってレイはそっぽを向いてしまう。

(シンジが気づかなくって無茶苦茶怒ってるな?)

微笑ましい光景だとはコウスケだけが考えていた。

「アスカもわからんか・・・じゃあ・・・」

と言いかけたところでもぞもぞと動くレイの姿が目に入った。

(レイ、何をするつもりだ?)

レイが携帯電話を取り出していた。

レイは何かを操作している。

『私だ。』

(碓司令?!)

ゲンドウの声が携帯電話から聞こえてきた。

レイはコウスケがいつぞやにやったことと同じことをしていた。

「私です。」

『レイか。どうした?』

(・・・碓司令に告げ口するつもりか!)

ゲンドウはレイに甘いところがあるのだ。

コウスケがレイをからかっているなどと知れたらどんなことが起きるか解らない。

命は保証されるだろうが・・・

「特務一尉が・・・」

と言ったところでコウスケはレイから携帯電話を取り上げた。

ついでにレイの頭を空いている手で押さえる。

レイは立てなくなつた。

「いや、碓司令。」

『特務一尉か。レイはどうした?』

レイは必死に携帯電話を取り返そうとじたばたする。

だが、軍人の腕力で頭を押さえられているためどうにもできない。

また、腕のリーチもコウスケの方が長かった。

時折「うゝ」と言う声が聞こえてくる。

「レイがあまりにも緊張して言えなくなったので代わりに自分が出ました。」

『そうか。』

レイがコウスケの手をつねってくる。

頭にあるコウスケの手を排除しようと考えたのだろう。

「！・・・今度食事に誘いたいそうです。」

(痛い！痛い！)

コウスケは痛いのを必死にこらえていた。

そんなやり取りを四人は呆然と見ている。

レイは手法を変えコウスケの脛を空いている足で蹴ってきた。

弁慶の泣き所に・・・

そこをげしげしと蹴られては、いくら軍人でも痛い。

(ぐおっ！)

「日時はまた知らせます。」

『わかった。ところで特務一尉。』

(なんでこういう時に限って話を続けるんだよ！)

だが、電話を切るわけにもいかない。

その間にもレイの蹴りは強くなっていた。

「・・・なんでしょう。」

コウスケは平然としているフリをつづける。

レイの攻撃は止まない・・・

『レイはどうしている?』

(・・・行ける! すまん、シンジ。)

コウスケは起死回生のチャンスだと思った。

ついでに被害を受けるであろうシンジにも心で謝った。

「・・・レイは元気ですよ。毎日シンジ君にべっとりですし。」

と言うとレイが止まった。

ボンという音が出そうなくらい一気に赤くなってしまった。

「もうイチヤイチャしすぎでこっちも少し困ってますよ。」

「ちよつ、コウスケさん!」

なんてことを言うんだと言いたげなシンジだった。

『・・シンジもいるのか?』

「ええ、そうなんですよ。」

『そうか。』

(何とかなつたか・・・)

『・・婚姻届が必要ならすぐに言いたまえ。』

これはコウスケも予想外であつた。

すぐにも音量を小さくすればよかつたのだが、コウスケはどこにボタンがあるか解らなかつた。

レイの使う端末はNERVから支給されているもののだが、コウスケがもらったやつよりも旧式で使い勝手が解らなかつた。

「誰の婚姻届ですか?」

コウスケは失敗した。

解りましたと言つて話を終わらせればよかつたのだ。

(俺・・なわけないか・・・)

なんて寂しいことを考えているコウスケはそこまで考えが及ばなかつた。

『シンジとレイに決まっているだろう。』

(あつちやく、みんなの前で言つちやつた・・・)

加持、ミサト、アスカは目が点になっていた。

シンジとレイは真っ赤になっていた。

「・・・碇司令、それはまだ早いのでは？」

『必要とあらば特例で出来るようにする。』

(本気だったのかよ！あれ！)

加持、ミサト、アスカは完全に固まっていた。

ともかく電話を切るのが先決だ。

コウスケはそう思った。

タイミングが少し遅かったが・・・

「そういった話はまた後日にしましょう。」

『わかった。特務一尉、レイに期待していると伝えてくれ。』

「解りました。」

と言うと電話が切れた。

「綾波・・・これが言いたかったのか？」

加持がものすごくあきれた顔で言う。

内心がっかりしていることだろう。

「んなわけあるか。」

こんなことのために関係ない三人を呼び出したりしない。

二人には未来に係わることはあるが……

「でもよかつたわね。シンちゃん。」

ミサトがにっこにこで言う。

「なっ何がですか？」

「こ、ん、や、く」

「ななな、何言ってるんですか！」

「そうね。司令の許可は出てるんだし、しちやえぼ？」

アスカもにっこにこと言う。

「何言ってるんだよ！アスカ！まだ早いよ！」

シンジは大慌てだった。

「まだってことはいずれするの？」

アスカの冷静な問いかけはシンジにとって痛手となった。

「あ……いや……まだというか……その……」

シンジは真っ赤になり沈黙する。

「レイはどうなの？」

とアスカがレイに振る。

「・・・婚姻届・・・結婚・・・夫婦・・・碓レイ・・・碓君、子供は・・・」
などとレイは口走っていた。

目もぼんやりしている。

「あく、妄想モードに入ったか。」

（すまんが、話が進まないからな・・・）

「レイ、目を覚ませ。」

コウスケはレイを左右に揺らした。

「・・・特務一尉？」

「戻ってきたか。」

レイの顔には疑問符がたくさん浮かんでいた。

今見ていたものは？

レイの表情からコウスケはそう受け取った。

（なんかレイに悪いことしたな。）

「・・・ともかく本題に入るか。」

コウスケは佇まいを直して言う。

「シンジ君はこっちに來てくれ。」

なぜと聞かれるのを止めるためコウスケはゲンドウ張りにプレッシャーをかけてい

た。

シンジがレイの横に座った。

「さて、これから話すことをよく聞いてくれ。」

そうしてコウスケは話し始める。

出来るだけ短縮して話したつもりだが、結構な時間を取られた。

レイに関することだけは避けた。

「・・・まあ、こんなところだな。」

「つまりNERVは操られていたってこと？」

ミサトが尋ねてきた。

「そういうことだな。」

「まさか、こんな真実が隠れてるなんてな・・・」

なんてことを言うが加持の目は半信半疑だった。

「使徒は仇じゃなかったのね・・・」

ミサトはものすごく悲しい眼をしていた。

「ねえ、コウスケ。弍号機にあたしのママがいるってホント？」

アスカには珍しく何とも歯切れが悪かった。

「残念だがほんとだ。」

「でも、私の目の前で死んだのよ?」

アスカにとつてつらい出来事なのだろう。

声が弱々しく聞こえた。

「それは抜け殻と言つていいのかな・・・」

(的確な表現が無いな・・・)

「そうなんだ・・・」

アスカは考え込んでしまった。

「なら、初号機には・・・」

「シンジ君の母親である碓ユイさんがいる。」

「零号機には? やっぱりレイの・・・」

(しまった。当然レイのことも聞いてくるよな。)

コウスケは自分のうかつさを呪った。

「・・・特務一尉、話してもいい。」

「綾波、いいの?」

レイに反応したのはシンジだった。

「・・・別にいい。」

と言うレイだが、わずかに震えているのがわかった。

(怖いよな・・・)

コウスケは躊躇ったが、思い切って話すことにした。

「・・・レイは特殊だ。どんなEVAでも乗ることはできる。・使徒と人のハイブリットだからな。」

「使徒?!」

ミサトが声を張り上げる。

レイが身を竦めるが、横のシンジがレイの手を握っていた。

「あんた知ってて・・・」

(同居してるのかってか?)

「当たり前だ。そしてレイは人だ。生まれがどんなものであれ、人であることに変わりはない。それにさっき言ったろ?人も使徒だと。」

そしてコウスケはレイのことを話した。

計画のことが主な内容だった。

「シンジ君も知ってたの?」

「はい。」

「・・・そう。」

ミサトは少し考えた後

「二人がそう言うならレイは人なのね。」

そしてミサトはレイを見て

「良かったわね。レイ。」

と優しく言うのであった。

「・・・はい。」

「そうね。レイは人で間違いないんでしょ。ならそれでいいじゃない。」

アスカも何とか納得してくれたようだ。

コウスケはそんな二人に満足しながらも警戒を解いてはいない。

「加持、言っておくが変なまねはよせよ。」

「何のことだ？綾波。」

「とぼけるな。そんな雰囲気でしたら誰でも警戒するわ。」

レイの話をしたところから加持の様子は変だった。

「大方、日本政府かSEELIEに報告しようとか考えてるんだろ。」

「・・・」

「それともその二つを使ってレイを調べる気か？」

コウスケの言葉にレイがびくりと反応する。

「だとしたらどうする。」

「お前が来た時から外に狙撃手を用意してある。」

「……」

加持の顔が真面目になる。

どうやらベランダが開いていることに気づいたようだ。

そして加持はベランダに一番近い席に座ってる。

「それに外には護衛もいる。」

「諜報部だろ？」

自信満々に答える加持。

（違うんだな、それが。）

「実はもう一つ秘密があるんだ。ここでは俺しか知らないな。」

加持が今更なんだという顔だった。

「自己紹介しよう。」

コウスケの言葉に皆が「は？」という顔だった。

「作戦局零課課長の綾波コウスケだ。」

「零課?! 嘘はダメよ、コウスケ君。」

ミサトがおどけた顔で言った。

対人戦を想定した部署である零課などただの噂でしかなかったのだ。

冗談に聞こえても誰も責められない。

「・・・いや、葛城。ほんとのようだ。」

加持はなぜ今まで気づかなかったのかと言いたげだった。

目つきが普段見られないきついものになっていた。

(護衛の気配を察知したか・・・遅かったな、加持。)

「・・・あの、零課って何ですか?」

シンジが説明を求めた。

レイやアスカも同様のようだった。

「対人戦闘を想定して作られた部署だよ。SEELEとの最終決戦に向けてな。」

コウスケは淡々と言う。

「対人って・・・人ですよね。」

シンジの声は怖々としていた。

「使徒をすべて殲滅したらSEELEからの攻撃があると予測している。NERVは対人戦を想定していないから・・・人数は言えないが、少なくとも戦自に負けなくらいの戦闘力はある。」

ミサトが加持を見るが、加持は真面目な顔を崩すことはなかった。

うつすらと汗もかいている。

ミサトも薄々感づいたようだ。

「加持。他のことを調べるのはいいが、レイには手を出すな。・言つとくがおまえさんには24時間体制で零課の職員が見張つてる。」

「・・・どうしてそこまでして守るんだ？」

「簡単なことさ。子供たちの未来をと言つたる？そこにレイも入るからだ。」

加持とコウスケのにらみ合いが続く。

(さて、折れてくれればいいが・・・ダメなら・・・排除しかないな。)

コウスケもうっすらと汗をかき始めた。

そんな二人に周りはただ黙っているしかなかった。

コウスケはポケットに隠してある矢を模したバッジに手をかける。

このバッジは零課職員に緊急事態を知らせる装置がついている。

コウスケがバッジにあるボタンを押せば、待機している零課職員が一斉になだれ込むようになっている。

ちなみにコウスケの胸にはグロック17が入っている。

「・・・わかった。手を出さない。」

「ほんとだな？」

「ああ。」

コウスケは内心で安心した。

実を言うとコウスケは加持を排除したくなかった。

加持には借りもあるし、何よりも顔見知り排除するなんて嫌なものだった。

それは昔、コウスケが経験した嫌なものだった。

「他は調べてもいいんだな？」

「ああ。それは碇司令に言っておく。それが終わったら俺たちに協力してもらいたい。」

「わかった。」

（何とかなつたか・・・）

緊張が一気に解けた。

「さて、重い話はここまでにしてと・・・」

コウスケは立ち上がり、冷蔵庫からビールを取り出す。

「折角レイがシンジ君のために張り切って作ったんだから食べないとな。」

（やつと落ち着いて食える。）

などとコウスケは思うのであった。

「特務一尉。」

そんなコウスケにレイが批判するように呼んだ。

「どうした？」

「・・・」

レイがじつと睨んでくる。

ついでに少し膨れている。

(どうしたんだ?・・・・・・あつ)

コウスケは自分が何を言ったか思い出した。

そしてなぜレイが怒っているのか・・・

コウスケは緊張が解けて思わず口を滑らしてしまったのだ。

「・・・まあ、いいじゃないか。」

「・・・」

「・・・すまん。」

「仲がいいわね。二人とも。」

今までのやり取りを見てきたミサトが言った。

「最初のころは想像でできなかったわ。」

「俺の人徳だろ。」

「何言ってるのよ。途中であたしたちを切り捨てようとしたくせに。」

アスカが容赦なく言った。

「それを言われると返す言葉が見つからん。」

コウスケはあの時のことを忘れることはできなかつた。

あの時、自分自身のあり方を皆から教えてもらったのだから。「で、どう？ シンちゃん。愛しのレイの料理は？」

なんてことをミサトがシンジに言う。

「うらやましいな。愛する人の手料理を食べられるんだからな。」

加持はミサトを見ている。

「うっさいわね。私だって・・・」

「あのカレーか？」

コウスケがM Cミサトカレーを思い出す。

「あれは兵器だ。わかったか？ あれは兵器なんだ。」

「綾波。お前、きついこと言うな。」

「加持だってそう思うだろ？」

「そこはノーコメントで・・・」

と言う加持の顔は苦い顔だった。

おそらくMCを思い出しているのだろう。

「で？ 結局のところどうなのよ、シンジ。」

アスカが脱線した話を元に戻した。

「うん。最初のころより上手にできてるよ。やっぱり綾波って主婦とか似合いそうだね。」

などと言つて笑顔を見せるシンジ

「・・・何を言うのよ。」

レイは赤くなりながらかなり早口、小声で言う。

コウスケのニヤリが止まらない。

(主婦ね・・・夫は誰なのかな? レイ。)

「どうしたの? 綾波?」

「・・・何でもない。」

などと言いレイは顔を少し背ける。

「なんでもなくないだろ。顔真っ赤だし。」

「・・・何でもないの。」

シンジの頭に疑問符が浮かぶ。

「・・・あれを天然でやってるんだから、すごいよな。」

コウスケは呆れていた。

「そうよね。でも、普通気づかないかしら?」

ミサトはなぜとしか思い浮かばないようだ。

「天然の女殺しか・・・シンジ君にその気が無くていいのかも知れないな。」
加持がもつともなことを言う。

「あれを学校でもやるのよ、あの二人。」

アスカはため息をついた。

そんな綾波家では穏やかな時間が過ぎていった。

・・・

「いつまで待機していればいいんだ？」

ミツヒサは綾波家より700m離れたビルの屋上にいた。

双眼鏡で綾波家の様子を窺っている。

傍らにはM24 SWSが転がっている。

「吹雪、そっちはどうだ？」

『特に何も無い。いいことだ。』

ミツヒサが連絡を取ったのは、同じ零課の吹雪シンゴである。

階級はミツヒサと同じく三尉。

髪は癖の強い天然パーマであり、体は全般的にぽっちゃりとしている。

背はコウスケよりも高かった。

彼は零課の二班班長で現在、綾波家の横で待機している。

一班の班長はミツヒサである。

吹雪シンゴは作戦局二課に所属しており、コウスケの二重の部下でもあった。ちなみにシンゴはコウスケ相手にため語でしゃべるのだ。

コウスケの方は特に気にしていない。

と言うか気軽でいいらしい。

「お前はいいよな。部屋の中で待機なんだから。」

『榛名は外だからな。・・お気の毒に。』

「この野郎・・・」

『文句があるなら課長に言えよ。決めたのは課長なんだから。じゃあな。』

通信が切れる。

「・・・寒い。」

夏とはいえ夜である。

さらに夕方から雨が降っていた。

双眼鏡の向こうでは暖かそうな料理を食べる六人が見える。

「帰っていいのか？」

残念ながら誰も答えてくれなかった。

第27話 失う怖さ

「なぜ加持一尉に話した。」

ゲンドウの咎めるような声だった。

「必要だと思ったからですよ。」

コウスケは毅然とした態度で言う。

「だが、SEELIEや日本政府に知られるのはまずい。」

「解っています、あのままだと確実に加持は真実をつかんでいたでしょう。」

加持は単独でターミナルドグマへの侵入を果たしたのだ。

その能力はとてつもなく高いと言えるだろう。

「ならば、我々のために働いてもらった方がよいかと。」

それがコウスケの出した結論なのだ。

「それにもうまくいけばその両者の牽制にも使えるかと思えます。」

「・・・そうか。」

ゲンドウは渋々ながらも了承した。

「だが、加持一尉の監視を怠るな。」

「解っていますよ。」

．．．

『B型ハーモニクステスト問題なし。』

コウスケはハーモニクステストのモニタールームにいた。

『深度調整数値をすべてクリア。』

部屋にはミサト、リツコ、日向、伊吹の四人がいた。

「ミサトさん。なんだか疲れてませんか？」

少し顔色の悪いミサトに日向が声をかけた。

「いろいろとね。プライベートで。」

と答えたミサトに

「加持君？」

とリツコがからかうように言った。

「うるさいわね！」

「凶星なんだな、葛城。」

コウスケもニヤニヤしている。

「お盛んだな。．．いいよな葛城は。なあ、赤木．．とお前も．．」

「それ以上言うと実験材料になってもらわよ。」

というリツコの目は本気だった。

「それだけは許してくれ。」

コウスケはひそかに汗をかいていた。

リツコが人を実験材料にしたなんて話（パイロット三人以外）は聞かないが、やろうと思えばやれるだろうとコウスケは考えている。

（俺もいい人いないかな・・・）

なんて考えてしまうのであった。

今までこんなことを考えたことが無いコウスケであった。

だが、彼自身にも問題があり世間で美女と呼ばれる女性を見ても何とも思わないのだ。

ちなみにコウスケは同居人であるレイのことを異性として意識したことはない。

・・・断っておくが、男が好きなわけでもない。

「なによ、コウスケ君。あなたもレイがいるでしょ？」

なんてことをミサトが言う。

「お前・・・俺が殺されてもいいって言うのか？」

「冗談よ。婚約者がいる相手に手を出すわけないもんね。」

とミサトが言うが

「レイちゃんに婚約者がいるんですか？」

伊吹が反応してしまう。

「葛城！お前、なんてことを・・・」

「やっぱ・・・」

「誰なんですか？」

「今の話からすると特務一尉ではないようですね。」

伊吹に加え日向まで参戦してきた。

初期のレイを知っているだけにかなり興味が出てきたようだ。

コウスケは逃げの一手を打つことにした。

「・・・俺は知らん。」

「そんな訳ないですよ。特務一尉はレイちゃんの保護者なんですから。」

伊吹が逃がしてくれなかった。

(こいつ・・・目が輝いてるぞ?!)

「コウスケ君、いいんじゃない？・・・シンジ君よ。」

とリツコが言ってしまう。

「シンジ君ですか？」

「ええ、錠司令の許可ももらってるわ。」

と言うリツコにコウスケは疑問に思う。

「・・・何で赤木が知ってるんだ？」

「この前、碓司令が嬉しそうに言ってきたわ。・・・早く孫の顔が見たいって・・・」

「孫だなんて・・・きゃく。」

なんて伊吹が嬉しそうに言った。

「本当なんですか？特務一尉。」

日向がコウスケに問う。

「・・・本当だ。」

「拳式はいつですか？」

伊吹の目は輝いている。

「まだ婚姻届は出してない。・・・証人が足りないからな。」

コウスケの言葉に日向が疑問符を浮かべていた。

「ん？証人は二人ですよ。碓司令が許可を出したなら書いてるはずですし・・・綾波特務

一尉は書いてないんですか？」

「そうだよ。」

「何ですか？」

伊吹も疑問符を浮かべていた。

「現実問題として、二人が結婚しましたとなるとどこに住むんだ？二人つきりになるはずがないだろ。」

「そうですね。まだ中学生ですし、保護者がいないとダメですね。」

日向が頷きながら言った。

特例で結婚したとしても世間の目と言うやつがある。

二人つきりなんておそらく許されないだろう。

「それに誰がなるんだ？」

「葛城さんは？」

日向が言う。

「アスカはどうするんだ？」

「じゃあ、先輩とか」

「私は遠慮したいわね。」

リツコが嫌そうに言った。

吹っ切れたとはいえリツコはシンジとレイに負い目を感じているのだ。

とリツコの態度を見てコウスケは考えた。

「となると綾波特務一尉ですかね？」

「そうなるだろう。」

ゲンドウがそのように手を回すのは目に見えていた。

コウスケと新婚さんのトリオ

どう考えてもコウスケは邪魔者以外の何物でもない。

二人がそのように扱うとは思えないが、コウスケ自身がそう感じてしまう。

「取りあえずシンジ君がちゃんと結婚できる時期になるまでは現状維持だよ。」

「そうですね。・・・じゃあ、婚姻届は綾波特務一尉が持つてるんですか?」

などと伊吹は追及の手を緩めない。

「・・・俺の家で管理してるよ。」

この言葉は事実である。

だが、コウスケはどこにあるのかわからない。

レイが隠し持っているためである。

重要書類とはいえ、レイの私物に手を付けるのはためらわれるのだ。

「頼むからレイをけしかけるなよ。」

それはコウスケの心のそこから思っているものである。

などとしているうちにテストは進んでいく。

「テストの結果はどうだ?」

「見てくださいよ。」

伊吹がモニターを見るように促した。

「レイは相変わらずだな。」

レイのテスト結果は高くもなければ低くもなく、いつもと変わりがない。つまり、ここら安定しているということだ。

これはこれで安心できるのだ。

「ほく、これが自信に繋がればいいんだけどね。」

ミサトがシンジの結果を見ながら言う。

シンジの方は着実に伸びているようで、シンクロ率が三人の中でトップだった。

「聞こえる？シンジ君。」

『ミサトさん。今のテストの結果はどうでした？』

ミサトの呼びかけにシンジが元氣よく答える。

ミサトが親指をつきたてながら

「ハクイ、You are No. 1」

などと言うのであった。

「・・・葛城。」

「何？コウスケ君。」

「・・・いや、なんでもない。」

(シンジの自信に繋がればいいが・・自信と過信は別だからな。)

だが、シンジなら大丈夫だろう。

そんな思いがコウスケにはあつた。

・
・
・

「はあ、またやつてるぞ。レイ。」

そう言うコウスケの前には首にタオルをかけただけのレイが立っていた。

この癖は長年やってきただけあつてなかなか治らなかつた。

とはいっても最近はその頻度も落ちてはいるが・・・

レイは自分の格好に気づき、脱衣所に戻つて行つた。

しばらくするとパジャマを着たレイが戻つてきた。

「今日のテスト結果はよかつたな。」

コウスケは昼のテスト結果を思い出しながら言う。

「そうでしょうか?」

レイも自分の結果を知っているのだろう。

少し訝しげな表情だった。

「ああ、安定した数値だった。」

それはレイ自身が安定しているということだと言うとレイは少し嬉しそうだった。

「・テストの結果に碓君も喜んでました。」

「シンジ君が？」

「はい。」

「・・・どんなことを言っていたんだ？」

レイは少し赤くなりながら

「・・・これで綾波を守るね・・・と言ってました。」

コウスケは訝しげな顔をした。

レイはいつもと違うコウスケに違和感を感じているようだった。

「どうしました？」

「・・・いや、なんでもない。」

(過信・・・どうだろうか・・・実際のシンジを見たわけではないからな。)

レイを見るとどうやらコウスケの態度に納得がいかないようだった。

「・・・今のシンジ君の状態がわかるか？」

「シンクロ率が一番高い・・・EVAをよく動かせる。」

レイの答えはごく一般的なものだろう。

「確かにな・・・だがそれだけじゃない。」

レイはよくわからないようであった。

「射撃、判断力はレイに及ばず、格闘、瞬発力はアスカに及ばず……それが今のシンジ君だ。」

コウスケの言うことはかなり辛辣な言い方であるだろう。

簡単な話がシンジには特出したものが無いということだ。

オールマイティと言えば聞こえはいいが、逆に返せばそれは何もかも中途半端ということだ。

強いて言うならばシンクロ率とATフィールドの強度だろう。

「……アスカも同じことを言っていました。シンジって中途半端なのよねと……」
レイはテスト後にアスカが言っていたことを思い出したのだろう。

少し拗ねたように言う。

「……まあ、そういうものは後でもなんとかなるものだからな。」

(本人がそれに気づいていればいいが……)

……

コウスケは執務室にて雑務に追われている。

「兵装ビルの改修関係はこれでよし……弾薬は……」

などとしているうちに警報が鳴る。

「……使徒か。」

コウスケは目の前にあるPCから情報を得ることにした。
「・・・なに！」

コウスケは慌ただしくジャケットをつかみ取り発令所へと急いだ。
・・・

発令所に行くとするでにリツコがいた。

「葛城は？」

「まだ来てないわ。」

『西区の住民避難、あと五分かかります。』

『目標は依然進行中。毎時2.5 km。』

すると後ろからドアが開く音がする。

「遅いわよ。」

「ごめん。どうなってるの？うちの電波観測所は?！」

ミサトが声を荒げるのも無理はない。

突然第三新東京市直上に使徒が現れたのだ。

コウスケもこの報告を受けて慌てて発令所に向かったのだ。

モニターには縞模様をした球体が浮かんでいた。

「探知してません。直上に突然現れました。」

青葉が報告する。

「パターンオレンジ、ATフィールド反応なし。」

日向が使徒の解析結果を告げた。

「どういうこと？」

ミサトが解析結果に疑問を持つ。

パターンオレンジなんて今まで聞いたことが無い。

使徒ならブルーと判断されるからだ。

「新種の使徒？」

リツコがそう予測する。

「MAGIは判断を保留しています。」

伊吹がMAGIの返答を報告した。

「判断材料が足りないということか。」

「もく、こんな時に碇司令はいないのよね。」

ゲンドウは普段の態度からかなり恐れられているが、どんな時でも態度が変わらないため非常時には頼もしく思えるのだ。

「ともかく俺は出るぞ。」

・
・
・

コウスケは愛機とともに大空を飛んでいる。

傍らには同じく空を浮遊する使徒がいた。

「使徒とランデブーか・洒落にならんか。」

一向に変化を見せない使徒にコウスケはいらだちを覚える。

既にEVAは配置についており、いつでも攻撃は可能である。

「日向二尉、使徒に変化は？」

『依然パターンはオレンジのままです。』

「反応なしね。やりにくいな。」

通信機越しにミサトの声が聞こえた。

『みんな聞いている？目標のデータは送った通り。今はそれしかわからないわ。慎重に接近して反応を窺い、可能であれば市街地上空外への誘導を行う。先行する一機を残りが援護よろし？』

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず。まずは情報収集からだ。」

使徒のデータは依然不明なままである。

規模も装備もわからない相手と戦うのは一番怖いことなのだ。

『僕が先行します。』

シンジからの通信であった。

『シンジ、何言ってるんのよ。ここはあたしが行くわ。』

「俺も同じ意見だ。アスカが先行の方がいい。」

コウスケは瞬発力が一番であるアスカなら大抵の出来事にも一撃は耐えられると考えていた。

『僕にだって行けますよ！言ったでしょ、ミサトさん。You are No.1って、戦いは男の仕事。』

などと言って通信回線を切ってしまうシンジ

『は、前時代的・・・式号機バックアップ。』

『零号機もバックアップに回ります。』

レイとアスカからの通信も切れてしまう。

「バカ！お前たち止めろ！」

『あの子たち勝手に・・・』

ミサトが呆れていた。

『シンジ君も随分立派になったじゃない？』

リツコの声は揶揄も混じっていた。

コウスケには随分悠長に構えているように聞こえた。

「アホなことを言ってるんじゃない！早く止めろ！」

(シンジは自分を解つてない！不味いぞ！)

『まあ、やる気があるんだし、やらせてみましょう。』

ミサトがそんなことを言う。

「お前はシンジ君を殺す気か！」

『はあ？ どういうこと？』

などと言いつているうちに他の二機がまだ配置についていないにも関わらず初号機が使徒に向けて発砲した。

途端に使徒が消え、銃弾は空の彼方に飛んで行った。

「消えた?!」

『パターンブルー、使徒発見！初号機の直下です。』

日向の声とともに初号機の足もとが暗くなる。

「よけろ！シンジ君！」

だが、初号機はとっさに反応できず、ずぶずぶと沈んでいく。

『か、影が！』

拳銃を放つも効果が無かった。

『なんだよ、これ！おかしいよ！』

ふと見ると縞模様の球体が初号機の真上にいた。

『シンジ君！逃げて！早く！』

『碇君?!』

『バカ、何やってんのよ!』

『くそ!』

コウスケは機体を地黒い影に向けてNNミサイルを放つ。

ミサイルは爆発することもなくそのまま沈んでいった。

「ダメだ！効果が無い!」

そうしている間にも初号機はみるみる沈んでいった。

『うわああああああ!ミサトさん!どうなってるんですか?!アスカ!綾波!援護は?!』

シンジはパニックに陥っていた。

『コウスケさん!綾波……』

初号機は完全に沈んでしまった。

『アスカ!レイ!初号機の救出!急いで!』

「バカ!止めろ!二人とも後退だ!」

コウスケが止めようとするも二機は初号機が沈んだポイントに全力疾走していた。

コウスケは焦ってしまふ。

使徒はEVAを呑み込めるといふことしか解っていないのだ。

どれくらいこの範囲を呑み込めるのかいまだにわからない。

下手すれば二機とも呑み込まれるなんてこともあり得るのだ。

零号機がライフルで射撃をするも使徒はまた消えた。

銃弾は後ろのビルに当たった。

「アスカ！ 気を付けろ！」

コウスケには式号機の周りが暗くなっているのが見えた。

『影?!』

式号機は跳躍しビルの上に逃げ込んだ。

使徒の陰にビルたちが呑み込まれていった。

『アスカ、レイ、コウスケ君。後退するわ。』

ミサトの苦々しい声が聞こえた。

『ちよ．．．』

『待つて!』

アスカが何かを言おうとするがレイが遮る。

『まだ初号機と碇君が．．．』

「後退だ！」

『・・・嫌・・・』

コウスケが再度命令するもレイが拒否する。

(不味い！)

「零号機のシンクロを全面カット！急げ！」

コウスケはレイが何をしようとするのかわかった。

零号機はシンクロがカットされ動かなくなる。

「・・・アスカ、零号機の回収頼む。」

コウスケはそれを言うと撤退を始めた。

・・・

コウスケはS u—37から降りた。

そんなコウスケに駆け寄る人物がいた。

その人物は全身が白く細身であった。

その人物はコウスケの前で止まった。

パン

乾いた音が鳴り響く。

その時の周りにいた人たちは驚いていた。

コウスケの顔は右を向いていた。

「・・・気は済んだか？レイ。」

コウスケが前を見ると明らかに怒っているレイがいた。

「ちよつと！レイ！なに・・・」

後ろからついて来ていたアスカがレイを咎めようとするもコウスケが止めた。

「もう一度言う。気は済んだか？レイ。」

レイは何も言わずに走って去ってしまった。

足もとには一滴の水が落ちていた。

「ちよつと！レイ！」

「ほつとけ。」

「何だよ！コウスケはなんで平然としてられるの?!」

アスカがコウスケに食って掛かる。

「そんなわけないだろ。だがな、戦いは熱くなった方が負ける。ただそれだけだ。」

そんなコウスケの言葉にアスカも冷静さを取り戻したようだった。

「そうね。悪かったわ。」

「・・・レイもつらいだろうな。」

レイの気持ちが届いほどわかるコウスケであった。

唯一違うのは誰が手をかけたかであろう。

コウスケは一息ため息をつくど発令所に戻った。

・
・
・

第三新東京市にある教会の近くに仮発令所が設けられた。

そばには式号機と零号機が立ち膝の状態で待機している。

「国連軍の包囲完了しました。」

青葉が現状を報告した。

「影は？」

ミサトが使徒の様子を聞いた。

「動いてません。直径600mを超えたところで停止したままです。・でも地上部隊な

んて役に立つんですか？」

日向が使徒の報告と愚痴をこぼしていた。

「プレッシャーかけてるつもりなのよ。私たちに。」

「だろうな。まったくどつちが敵なんだか・・・」

こんな内輪もめをやっている場合じゃないだろうに

そんな思いがコウスケにはあった。

「独断専行、作戦無視・・・まったくあのバカは何やってんのよ！」

アスカがいらつきを抑えるように言った。

レイの方は何も言わずにただ初号機が呑み込まれた方を向いていた。あれからというもののレイはコウスケの方を一度も見えていない。

「確かに独断専行だわ．．．だから帰ってきたら叱つてやらなくちゃね。」

ミサトの顔は使徒を睨みつけたまま動かなかつた。

．．．

「じゃあ、あの影の部分が使徒の本体ってわけ？」

ミサトがリツコの説明を聞いて言った。

「とんでもない奴だな。」

影が本体でその中はディラックの海．．別の宇宙に繋がっているというのだから

コウスケには想像もできない世界だった。

「はあ、そんな奴にどうしろってんだ。」

コウスケがそうつぶやくが、それはそこにいた者の心の声を代弁しているものだった。

「．．シンジは大丈夫か？」

生命維持装置があるのでもうしばらくは持つだろうが、それとて無限に動くわけではない。

ふとレイの方を見ると相変わらず使徒の方角

と言うよりは初号機が呑み込まれたポイントを見つめ続けていた。

・
・
・

初号機が呑み込まれて数時間

辺りはすっかり夜になっていた。

「EVAの強制サルベージ？」

ミサトがリツコに問う。

「現在、可能と思われる唯一の方法よ。992個、現存するすべてのNN爆雷とNNミサイルを中心部に投下。タイミングを合わせて残存するEVA二体のATフィールドを使い、使徒の虚数回路に千分の一秒だけ干渉するわ。」

リツコが救出作戦の説明を続ける。

その間にもミサトはどんどん険しい表情になっていく。

「その瞬間に爆発エネルギーを集中させて、使徒を形成するデイラストクのごと破壊する。」

「可能と思われるか・成功率は低いんだな。」

リツコの言うことにコウスケは難しい顔をする。

科学者と言うのは常に明確な答えを欲するものなのだ。

その科学者たるリツコが思われるという曖昧な言葉を口にするということは、それだ

け自信がないということだ。

「・・・ええ。残念ながら。それに成功してもシンジ君がどうなるか・・・
(生きている可能性が皆無と言うことか・・・)

リツコが顔を背けた。

「そんな・・・とても救出作戦とは言えないわ!」

「赤木・・・それしかないんだな。」

リツコは答えない。

「・・・そうか・・・わかった。」

「コウスケ君?!」

「代案があるのか? 葛城。これ以上にシンジ君の生還を望める作戦が・・・」

ミサトは黙ってしまう。

「・・・二人には俺から説明する。・・・準備を進めてくれ。」

(神頼み・・・なんてことは俺の趣味じゃないんだけどな。)

・・・

「以上が今回の作戦だ。」

コウスケはアスカとレイに作戦の概要を話した。

なるべく感情が出ないように話したつもりだが、どれくらい堪えられたか自信は無

かった。

アスカとレイはじつとコウスケの話を聞いていたが、レイはコウスケを見ようとしなかった。

「これって成功するの？」

アスカが一番大切なことを聞いてくる。

「・・・成功率は低い。それに成功したとしてもシンジ君は無事でない可能性が高い。」

正直こんなことは話したくない。

だが、下手に隠すよりはましだと考えるコウスケであった。

「・・・これしかないのね。」

アスカが再び問う。

「残念だが・・・」

「解ったわ。」

アスカは覚悟を決めてくれたようだ。

一方レイの方は真っ青になっていた。

まるでこの世の終わりを告げるようなものだった。

「・・・レイはどうなんだ。二人が居なきや成功率はもっと低くなる。」

(嫌な言い方だな・・・)

コウスケは少し鬱になっていた。

「・・・碓君が死ぬ・・・いや・・・」

レイは顔をフルフルと振っていた。

（そりゃ、嫌だろう。俺も嫌なんだから・・・だがな）

「それは作戦を拒否するということか。」

コウスケは嫌な役だと思いつながらも言う。

レイは答えない。

その態度にコウスケは是と受け取った。

「・・・そうか。」

パン

コウスケの手がレイの頬をとらえていた。

突然のことにアスカは呆然としていた。

「いい加減目を覚ませ！」

「・・・でも、碓君が・・・碓君が・・・」

レイは少し涙目になっていた。

「バカ野郎！誰がこんな作戦をやりたいんだよ！

成功率も低くてシンジが死ぬ可能性が高いだど?!

こんなアホらしい作戦なんか誰もやりたくねえよ！

しかも俺はNNミサイルをぶち込む役だぞ?!」

つまりはコウスケのミサイルでシンジが死ぬかもしれないということだ。

コウスケは目に涙が浮かぶのを自覚する。

あの時の情景が浮かんでいたのだ。

「だがな、このままいてもシンジは死ぬぞ！」

なら、わずかでも生還する可能性があるならやるしかないだろ！」

コウスケの涙は止まらない。

コウスケは悔しかった。

シンジのことがわかっていながら止められなかった自分が

守るべき人を殺してしまうかもしれないことが

レイはじつとコウスケを見ている。

「それにお前が信じなくてどうするんだよ……」

シンジが生きて帰ると信じなくてどうするんだよ！

この中でお前さんが一番思ってたきやいけない事だろ！」

コウスケの言葉にレイがはつとする。

「……すまん。興奮していた。」

コウスケは涙を拭う。

「レイ、覚悟を決めろ。そして祈るんだ。シンジ君は必ず帰ってきてくると。」

「そうよ、レイ。あんたが信じなきや誰が信じるのよ！」

アスカもレイを諭すように言う。

「特務一尉・・・アスカ・・・」

レイはしばらく俯くが

「・・・はい。」

その声ははつきりと聞こえた。

・・・

夜はすでに明けていた。

二体のEVAは作戦位置についている。

コウスケも愛機とともに再び大空を飛んでいる。

超高度には戦略爆撃機の姿が幾重にも見える。

すべてNN爆雷を搭載しているのだ。

『爆雷投下60秒前』

「そろそろか・・・」

あと60秒後に結果が出る。

シンジが助かるのか・・・

そう考えると緊張してくるものだ。

コウスケはひそかに呼吸を整えて作戦に備えた。

(時間だな・・・)

コウスケがそう思った時、使徒の本体が突如割れ始める。

それに一番最初に反応したのはアスカだった。

『何が始まったの?』

「まだ何もしてないぞ!」

コウスケも突然のことなので何が何だかわからない。

『状況は?』

『解りません。』

『全てのメーターが振り切られています。』

仮発令所でも何が起こっているのかわかっていないようだった。

「何が起こっているんだ?!」

コウスケは割れていく使徒を見ながら必死に状況を整理する。

使徒の陰である球体が真っ黒になり、手が出てきた。

手は左右に広がり、球体を真っ二つに裂く。

そこから初号機が出てきた。

初号機が咆哮を上げている。

「・・・EVAにこんな力があるのか。」

コウスケは初号機に畏怖を覚えた。

単独で別の宇宙から帰還を果たしたのだ。

こんなものが無限のエネルギーを得たらどうなるのか

初号機は地上に降り立つ。

真つ赤に染まった初号機は悪魔のようにも見えた。

・・・

その後初号機は活動を止め、シンジは無事に救出された。

今はNERVの病院にいる。

レイはそんなシンジに付き添っていた。

アスカも二人が心配なのか、こっそりと様子を窺っているようだった。

コウスケはシンジが目を覚ましたとの連絡を受けたので、さっそく見舞いに行くことにした。

に。

「よう、シンジ君。元気か？」

「コウスケさん。・・・すみませんでした。」

シンジが済まなそうな顔で言う。

横にはレイもいるが何やら俯いていた。

「無事だったからいいが、今回のことはちゃんと教訓として覚えておけ。」

「はい。」

するとレイが声をかけてきた。

「あの……特務一尉……」

「なんだ？」

レイは俯いたまま何も言わない。

「……ダメだよ、綾波。ちゃんと言わなきゃ。」

シンジがレイを諭すように言う。

「……あの時……叩いたりして……ごめんなさい……」

などと俯きながらレイは言うのであった。

そんな様子のレイにコウスケは思わず笑ってしまう。

「別にいいよ。レイの気持ちはわからんでもないし。それに俺も叩いたからな。」

「はい。」

などと安心したようにレイは答えるのであった。

「さて、シンジ君。今回の君の罪だ。」

シンジはコウスケの言葉に体が緊張しているようだった。

「独断専行、作戦無視……これはいずれも重罪だ。何か申し開きがあるか？」

「……ありません。」

そんな二人にレイは心配そうに見ている。

「……独房ですか？」

「ん、本来ならな。だが、そんなことよりもっと重い罪がある。何だと思う？」

シンジは少し考えて

「……初号機を失いかけたことですか？」

と答えた。

「そんなものよりもっと重い。」

シンジは「は？」という顔になった。

レイもわかっていないようだった。

EVAを失うことよりも大事なことは？

「簡単なことさ。……ファーストチルドレン綾波レイを泣かせた。これは重罪だ。」

とコウスケは真顔で言うが、当然演技である。

心の中ではニヤリが炸裂している。

二人はきよんとしている。

「よって処分を言い渡す。．．．サードチルドレンはファーストチルドレンと出かけるように。．．．日時は好きに決めてよし。ああ、当然二人つきりだからな。」

「え．．．ええ！それって．．．」

予想外の答えにシンジが驚いている。

「所謂デートってやつだな。ついでにレイの分もあるぞ。名目は命令無視、上官に対する暴行。」

処分はシンジ君と一緒だ。」

とコウスケは真顔で言うが、内心のニヤニヤが止まらない。

「ちなみに碇司令からこの処分でいいと許可を貰っている。」

コウスケの言うことは本当だった。

たちが悪いことに、わざわざ処分の内容を明記した書類まで作ったのだ。

しかもゲンドウのサイン入り。

つまりは正式な処分ということになる。

コウスケはNERVを使ってとんでもない謀略に二人を陥れたのだ。

これを職権乱用とも言う。

「綾波とデートなんて．．．そんな．．．」

シンジは相当恥ずかしいようであった。

「何？この処分に不満なのか？．．．独房の方がいいのか？」

「いえ、別にそういうわけでは．．．」

「ならいいだろう？．．．そんなだけレイに寂しい思いをさせたんだ。それくらいしてやれ。」
「．．．わかりました。」

とシンジは覚悟を決めた。

「いつ行くとは言わなくていい．．．まあ、証拠写真の一枚ぐらいは撮ってくれ。」
と言いいコウスケはレイの方を見た。

「碓君とデート．．．．．ぼ」

なんてことになっていた。

「うん、妄想モード突入だな．．．ハードルが上がったかな？」

「ええ！そんな．．．」

などとシンジは本気で考え込んでしまう。

（．．．わかってないな。レイはシンジと一緒に居ればそれで満足だろう。）
だが、あえて口に出す必要もないと考えるコウスケであった。

「じゃあ、俺は行くな。レイ、夜にはちゃんと帰って来いよ。」

（いつまでも二人の邪魔をするわけにはいかないからな。）

などと野暮なことを考えながら病室を後にするコウスケであった。

第28話 奪う者、創る者

富士山の近くを一機の航空機が飛んでいた。

辺りはすでに暗いが、地上からその航空機を見ることは簡単であった。

なぜならその航空機は普通では考えられない高度を飛んでいるからだ。

生い茂っている木々の真上を飛んでいる。

少しのミスで木に引っかけかかって墜落もあり得る。

だが、そのパイロットはそんなことにお構いなく悠々と飛び続けるのであった。

「死神はく……」

軽快なテンポと音程とは程遠い不吉な単語で歌を歌うパイロット―綾波コウスケがいた。

『課長、何ですか？その不吉な歌は。』

コウスケの歌を聞いたミツヒサが不機嫌そうに言う。

「課長は止めろ。作戦行動中だ。」

作戦行動中に歌を歌う自分を棚に上げてコウスケは言った。

『すみません、「アロー3」。それでその歌は何ですか？』

『俺も気になる。．．死神って何だよ。』

シングも会話に入ってくる。

「綾波家に伝わる由緒正しい歌だよ。」

と自慢げにコウスケは言う。

『聞いた事ねえよ。そんな歌．．』

『同じく僕もありませんね。』

「当たり前だ。．．俺が親父から教えてもらった歌だからな。」

実を言うところには嘘ではない。

だが、綾波家に伝わる由緒正しい歌ではない。

これはコウスケが幼い時に父親にからかわれて教えてもらった歌なのだ。

その時は純粋なコウスケであったため、嘘だとはつゆにも思っていない。

その真実を知る前にセカンドインパクトが起きたため、コウスケは真実を知らずにいるのだ。

．．今では父親を感じる唯一のものとなっているが

そもそもなぜ彼らは富士山の近くにいるのか？

それは数時間前に遡る。

．
．
．

「綾波特務一尉、参りました。」

「入れ。」と言う言葉とともに開くドア。

コウスケはゲンドウから呼び出しを受けていた。

「碓司令、どういったご用件でしょうか。」

（こういう時って大体厄介ごとなんだよな。）

コウスケは今までの経験からそう思っているが、顔には出さない。

「最近、戦自が動いている。」

とゲンドウはいつものポーズ、口調で言う。

「ほう、NERVでも襲う計画があるのですかな?」

と冗談交じりに言うコウスケにゲンドウは資料を渡した。

「・・・陸上軽巡洋艦? トライデント級?」

コウスケは初めて見る言葉に疑問符が浮かぶ。

（陸上なの巡洋艦? 何がしたいんだ?）

資料には詳細なスペックまで書かれている。

写真もついており、恐竜のような形であった。

変形機構も擁しており水上、水中、陸上での活動ができるようだ。

これを用意したのは加持だ。

加持は一通り調べ物が終わった後、NERVに協力を申し込んできたのであった。これは加持の信頼の証でもあった。

三足足袋は一応続けているフリをしている。

「これは使徒対策ですか？」

「いや、六年後の運用を考えているようだ。」

「つまりは次世代型の主力兵器とすることですか。」

（こんなもん使えるのか？）

写真を見る限りかなり大きなものである事がわかる。

大きいということはそれだけ頑丈であるだろうが、その分だけ当たりやすくなるのだ。

「綾波特務一尉ならどうする？」

ゲンドウの言葉は足りないが、コウスケは戦場で敵として出会ったらと言うことを正確に把握した。

「そうですね．．．まず、市外に誘導．．．そのあとNN爆雷で一発ですな。」

なにせ装甲は戦車、戦艦などと変わりがなく、EVAのようにATフィールドも張れないのだ。

「それで自分に何をさせたいのでしょうか？」

ゲンドウがこんなものを見せるために呼び出すはずがない。

コウスケはゲンドウの言葉を待つことにした。

「これも見てもらいたい。」

と言ってゲンドウはもう一つの資料を差し出した。

「・・・なるほど、そういうことですか。」

コウスケはゲンドウとこれを渡した加持が何をやらせたいのかわかった。

「それで残りはどうしますか？」

「君に任せる。」

(めんどくさいからって・・・)

コウスケは横にいる冬月に視線を送った。

冬月はやれやれと言いたそうであった。

「解りました。」

・・・

「よし、今回の作戦の確認をするぞ。」

コウスケは手短く作戦を確認する。

場所は青木ヶ原に位置する戦自の研究所

目標はそこにとらわれている少年兵の確保、およびトライデント級陸上軽巡洋艦の破

壊

『トライデントね．．．とんでもねえもん作ったな。』

シンゴが呆れるように言った。

『EVAに触発されたのでしよう。』

「だろうな。だが．．．」

少年兵を使うとはどういうことか

しかも操縦席は劣悪らしく、それで幾人も命を落としている

NERVでもレイたちは少年兵として登録されているが、それはEVAの特殊性からくるものである。

だが、トライデントは少年兵を使う必要などない。

『それで．．．研究所の職員はどうするのですか？』

ミツヒサが聞いてくる。

少し戸惑いも見れた。

「殲滅だ。非戦闘員への無条件発砲も許可する。一人も残すな。」

何とも非情な命令だった。

『いいのか？』

シンゴがためらうように聞いてくる。

「構わん。・・トライデントに関係ない職員は早々と返されている。」

つまり、日が暮れてあたりが暗くなる時間に残っているのはそれに関係する職員と言
うことだ。

「ともかく初の実戦だ。気を抜くなよ。」

『了解。』

『そんなへまはしねえよ。』

それを聞いたコウスケは頷きながら

「・・・」

あの世に行っては

また戻る」

などとまた歌を歌うのであった。

『今日の作戦は成功しそうね。』

それは少し低めの女性の声だった。

『長良、何言ってるんだよ。』

シンゴが不機嫌そうに言う。

・・コウスケが歌をつづけたからだ。

『あなた知らないの？「アロー3」の歌って国連軍で有名よ。』

と長良は言うのであった。

彼女は長良ユキ

階級は三尉

茶色が混じった黒い髪のショートカットで目は少しきつめに見える。体はスレンダーな体つきであった。

・・・とある部位はミサトどころかレイにも劣る。

どこかは残念ながら言えない。

コウスケと同じく国連軍から出向してきた。

出向してきた時期は日向と同じである。

NERVでは作戦局一課に所属している。

零課では第三班の班長だ。

ちなみに彼女の年齢はコウスケの三つ下である。

ミツヒサは同じ、シンゴは一つ下である。

『そうなんですか?』

ミツヒサの声はとても不思議そうだった。

コウスケの歌声は悪くはなくむしろ透き通っていて聞きやすいのだ。

さらにテンポ、音程もずれていない。

だが、歌詞が不吉すぎるのだ。

『国連軍ではHope 希望 march のと呼ばれてたわ。』

『希望?!絶望じゃなくてか?』

シンゴが冗談は止めると続ける。

ちなみに敵対組織からはDeath 死のmarch 歌と呼ばれている。

ある組織は日本語で歌うため何かの暗号と思つたのだ。

それで解読を進めた結果、歌詞の意味を知ることになった。

その時からそのような呼ばれることになる。

コウスケが歌を歌い始めたのは三年前からだ。

『あの歌を歌ってる時の彼は最高潮に機嫌がいいのよ。・ワンフレーズで敵機が平均して一機落ちるのよ。』

『冗談・・では無いんですね。』

『いいんじゃないか?それだけやる気があるってことだろ。』

シンゴの言葉に二人は同意する。

しかしそれは間違いであった。

コウスケは確かに上機嫌であったが、それは三人が考えているようなものではない。

コウスケが上機嫌な理由・・

それは明日にはレイから言い渡された肉禁止令がとうとう解かれるのだ。それが楽しみでしようがないのだ。

ちなみにレイは今、葛城家に預けてある。

レイが喜んでいたのはコウスケしか知らない。

「晴れでも雨でも

死んでゆく〜」

とコウスケは歌を止めた。

「お、そうだ。レイにも教えてやらないと」

よくよく考えてみるとレイが歌っている所を見たことが無い。

歌を知らないのではとコウスケは考えた。

「綾波家に伝わる由緒正しい歌だからな．．．レイも喜ぶだろう。」

そんなわけないだと三人はひそかにため息をつくのであった。

「よし！目標が見えてきた。全員配置はすんでるな？」

コウスケの目には緑で偽装された人工物が見えていた。

零課の隊員たちはその周りの密林に潜んでいた。

「始めよう。予定通りだ。」

．．．

モニタールームの前で男たちが何かを操作している。

モニターにはトライデントのデータが写っていた。

「暇だな。いつもいつもデータ採取ばかり」

「ぼやくな。」

「戦闘にもなればな、もつといいデータが取れるのに」

「しようがないだろ。それにここはうちの特殊部隊が守ってたんだ。トライデントなんて出る幕ねえよ。」

「もつといい奴いないのか？昨日は二人死んだろ。」

「明後日には補充が来る。」

すると部屋が大きく振動した。

「なんだ！」

アフレームが鳴り響く。

「敵襲?!」

モニターに戦闘機が映し出された。

戦闘機は研究所に設置されている武装を破壊して回っていた。

「敵だど?! 哨戒は何してたんだ?!」

「あれは・・・Su-37?!」

「ということは・・・ブラッディアロー?!」

Su-37を使うパイロットはコウスケ以外にいない。

なぜならSu-37自体が世界で二機しか作られていないからだ。

しかも一機は途中で装備を外されSu-35として配属された。

コウスケが乗るSu-37は2002年に一度墜落したものの原型を留めていた為、修復、改修されたものである。

もつともコウスケがもらい受けるまで誰も乗っていないかつた物だが・・・

『施設内に侵入者！防衛できません！』

別のモニターでは戦自のものとは違う黒いボディスーツを着た謎の集団が施設を破壊しながら走り回っていた。

隔壁は爆薬で破壊、屋内でもお構いなしにバズーカを発射する。

両手を上げている職員にも発砲していた。

うまく隠れても部屋ごと爆破される。

「研究データだけでも本部に送れ！」

施設の司令官が現れ命令を下すが

「ダメです！ネットワークが一方的に遮断されています。」

「衛星もつながりません。」

「くそー」

司令官は悪態をつきながら考える。

何とかしてデータだけでも持ち帰らねばならない。

脱出を考えたときモニタールームのドアが爆破された。

ドアの近くにいた職員は真つ黒になり、すでにこと切れている。

司令官は胸に熱さと痛みを感じた。

それは自分が死んだことを感じさせるのに充分であった。

最後の力を振り絞りボタンを押す。

思わず笑みがこぼれるのを最後に彼は意識がなくなつた。

・
・
・

「あらかた終わったか。」

コウスケはコックピットの中でつぶやく。

研究所はいたるところから火が出ている。

逃げようとして出てきた者には容赦なく機銃を浴びせた。

密林にうまく隠れてもミサイルで吹き飛ばした。

コウスケはためらっていなかった。

同じ日本人とはいえ、平気で子供を殺すような輩に持ち合わせる感情などなかった。

中には夫や妻、子供がいる連中もいるだろう。

子供が死ぬ時、自分の子供が重ならなかったのか

コウスケにはそれが理解できない。

ちなみにコウスケがそれを想像したときレイの悲しそうな目が浮かんだ。

「一足先にあの世で待つてな。」

すると通信が入った。

『藤頭^{とがしら}だ。ターゲットの確保に成功したぞ。』

シンゴからだった。

『こちら末弭^{うらはす}です。ターゲットの破壊に成功しました。』

ミツヒサからも連絡が入った。

『緊急事態です。』

ユキからも通信が入った。

『どうした？弦輪^{つるわ}。』

『自爆装置が作動しています。20分後に起爆します。』

「総員撤退！爆発に巻き込まれるなよ。」

コウスケはしばらく研究所の上を飛んでいた。

零課が無事に脱出できるか心配なのだ。

10分後わらわらと黒い集団が研究所から飛び出してきた。

中には何かを背負っているものもいた。

「無事だな。」

コウスケは愛機を研究所から離れた。

さらに10分後

零課が完全に離脱した後、研究所を中心に爆発が確認された。

・
・
・

「助け出せたのはこの二人だけか。」

NERVの病院にいたコウスケは目の前で眠る少年二人を見て言う。

「後の三人はどうした？」

「二人は死んでたよ。あと一人はいなかった。」

シンゴが報告する。

「まさか・・・あの研究所に？」

コウスケは嫌な想像をしたがユキがそれを否定する。

「違うわ。・・・二日前に異動してみたみたい。」

「そうか。・・・よかった。」

「それでこの二人はどうするんですか？」

ミツヒサが二人を気遣いながら言った。
なにせ体が思った以上にボロボロなのだ。

「治療は赤木に任せる・・・そのあとはこの子たち次第だ・・・」

・・・

「久しぶりの肉だ！」

コウスケはテーブルに並ぶ料理たちを見て感激する。

「レイ、ありがとう！」

コウスケは思わず目頭が熱くなった。

レイはそんなコウスケをやれやれと見ているのであった。

ある程度食事が進んだころ

「昨日の爆発は何だったんでしよう？」

とレイが言うのであった。

「昨日の爆発？」

(NERVで何かあったのか?)

「富士山の向こう側でありました。」

コウスケは当然ながら知っている。

・・・というか当事者である。

だが、それをレイに言う必要は無いと考えるコウスケであった。

「そんなことがあったのか．．．NERVについて解らなかった。」

とコウスケは答えることにした。

「．．．そのせいで碓君が気絶しました。」

「は？」

近くにおいて爆発に巻き込まれたならわかるが、第三新東京市には被害が無かった。

コウスケは何故としか思い浮かばない。

「アスカに蹴られて．．．」

とレイが言うが正しくない。

何故、シンジが気絶したのか．．．

爆発があった時アスカは風呂に入っていたのだが、そのままの格好でベランダに出たのだ。

そしてシンジが後からやってくるのであった。

それにアスカが気付きシンジを蹴るのだが、シンジは気絶していない。

床に倒れただけだった。

シンジは慌てて謝っていた。

その後、レイが来た時にアスカとなぜか床に倒れているシンジを見て、慌ててシンジ

の介抱したのだ。

だが、思ったよりも体が密着したらしい。

目の前には何も着ていないアスカ、密着してきているレイ

そして初めてレイが住んでいたマンションに行った時のことを思い出してしまった。

シンジは限界を突破してしまい、鼻血を噴きながら気絶してしまうのであった。

理性が限界突破するよりはましだったのかもしれない。

とにかくきつかけはアスカだが、トドメはレイであった。

「まあ、戦自がなんかやったんだろ。」

そう言うって誤魔化すことにした。

「そーいや、学校はどうだった？」

と言うコウスケは何かからかうネタを探したいだけだった。

こう話せばレイはシンジと何があったのか嬉しそうに報告してくるのだ。

最初はシンジ君とはどうだと聞いていたが、レイがそれで答えるところからかわれると学習したのだ。

さんざんコウスケがからかったからである。

「・・・転校生が来ました。」

「転校生?・・・レイのクラスにか?」

レイのクラスは少し事情がある。

レイのクラスである2―AはEVAのパイロット候補たちが集められている。当然NERVが介入したためだ。

そんなクラスに候補でない人が転入するということは、何かしらの介入があったということだ。

「名前はわかるか？」

「・・・霧島マナ。」

（霧島マナ・・・だと?!）

コウスケは驚いていた。

なぜなら戦自の研究所を襲って保護するはずだったからだ。

ふとレイの方を見ると何かをつぶやいている。

「霧島マナ・・・ポカポカしない・・・」

（珍しいな・・・レイが人を嫌がるなんて）

実際コウスケはレイが人を嫌がるなんて見たことが無かった。

あるとしたらリツコくらいなもので、それもリツコからの嫉妬に反応していただけである。

（こりや、調べないとダメだな。）

霧島マナがいるということは戦自が絡んでいるはずである。

そしてレイがポカポカしないという理由も

コウスケはひそかに決心することにした。

・
・
・

コウスケの決心から二日後

「学校に来るなんて久しぶりだな。」

コウスケは第三東京市立第壱中学校を見ながら言う。

レイたちの通う学校である。

「これは綾波さん。お忙しいところすみません。」

学校から初老の男が現れた。

風格からおそらくは教頭あたりの教師であろう。

「いえ、こちらも無茶を言ってますみません。」

「いえいえ！NERVとしては当然だと思います。」

コウスケがなぜ学校にいるのか？

それはレイたちが通う学校の警備状況を知るためであった。

と言うのが表向きの話で、コウスケはレイから聞いた「霧島マナ」なる人物がどうい

う人かを見に来たのであった。

コウスケは教師の後について校舎内に入って行った。

・
・
・

校長から警備に関する話を一通り聞いた後、コウスケは校内を自由に見回っていた。いたるところから学生たちの喧騒が耳に入る。

(若い力にあふれているな。)

コウスケはとても懐かしく感じていた。

セカンドインパクトが起こる前はコウスケも一介の学生であった。

もう十五年ほど前の話だ。

緑色のNERVのジャケット（NERV関係者だけがわかる）を着ているコウスケはかなり目立ったが、事前にお触れが出ていたのだろうコウスケを怪しむ人はいなかった。時々真面目な教師に声をかけられたが、NERVの名を出すだけで簡単に引き下がった。

「あら、コウスケじゃない。」

廊下でアスカと出会った。

「よう、アスカ。」

「どうしたの？こんなところで。」

「学校の警備状況の視察だよ。」

「へへ、コウスケも大変ね。」

アスカはコウスケの言うことに疑問を持っていないようだった。

「アスカのクラスはどこだ？一番確認しなきゃならないところだからな。」

するとアスカは何かを考えているようだった。

「どうした？」

「うーん．．行ってもいいけど．．」

アスカにしては何とも歯切れの悪い言い方だった。

「．．．まあ、コウスケなら大丈夫かな。」

なんてことを言う。

（なんだ？何かあるのか？）

「ついて来て。」

と言いアスカは歩き始める。

コウスケもアスカの後に続くのであった。

．．．

「やっぱり．．わかる？」

アスカが聞いてくる。

中で何が起こっているのか知っているからだろう。

コウスケはとても冷たい空気を感じていた。

「・・・嫌な空気だな。」

(それに僅かに感じるこれは・・・)

自分に似ている

そう感じていた。

「(ハ)よ。」

アスカが2—Aと書かれた札の前に立った。

(・・・絶対零度)

コウスケはドアの向こうから感じる冷気に対してそう評価した。

「なんなんだ？この空気は・・・」

「シンジのせいよ。」

「シンジ君？」

「それ以上は中を見ればわかるわ。」

コウスケは意を決してドアを開けた。

そして一瞬で理解する。

まず冷気の正体

それはレイだった。

窓際にいるレイが放つものだった。

レイはじつと何かを見つめている。

その視線を追うとシンジがいた。

そしてシンジにびったりとくっつく少女が一人・・・

茶髪のショートカットにたれ目の少女だった。

(・・・あれが霧島マナだな。)

シンジはマナにくっつかれているが、まんざらでもなさそうであった。

マナはと言うと時々レイに視線を送っていた。

どうも挑発しているように見えた。

そしてレイの目が一層険しくなる。

とはいってもレイの表情を見抜けていないクラスメイト達には解らないようで、ただ

単に空気で判断しているようだった。

コウスケは逃げ出したいと思ったが

(逃げるわけにはいかん・・・)

と覚悟を決めるのであった。

「よう、お二人さん。仲がいいね。」

レイは聞きなれた声を聴いて驚いていた。

シンジも同様であった。

「こ、コウスケさん?!」

シンジは明らかに動揺していた。

「あなたは誰ですか? 不審者?」

マナがコウスケに向けてそう言った。

「おいおい、不審者がこんなところに来たら大変だろ。・俺は綾波コウスケ。そこで怖

い顔をしている綾波レイの保護者だ。」

と言うとシンジはレイの方を向いた。

レイはシンジの視線を感じてそっぽを向いてしまう。

(おやおや・・こりゃ、大変だね。)

後ろではレイのクラスメイト達が

「綾波さんの保護者?!」

「と言うことはNERVの偉い人だよな。」

「怖い顔って綾波さん怒ってたのか・・」

なんて声が聞こえてきた。

(どうなってんだ? 機密情報が洩れてるじゃないか・・)

レイの保護者だつてことだけで、なぜNERVの偉い人だと知られたのか？

この原因はシンジにあるのだが、そんなことはコウスケには解らない。

(・・・やっぱりこの子だ。)

コウスケはマナから感じる軍人のおいを嗅ぎ取っていた。

(しかし、シンジ・レイというものがあひながら・・・それに食い物の恨みは海より深いぞ！)

コウスケが決心してから学校に来るまでの間、日常生活でとんでもないことが起きていたのだ。

レイに原因があるが、大本はここであることをコウスケは知る。

・・・コウスケはとて不機嫌であったのだ。

「シンジ君も隅に置けないな。・・・婚約者がいるのに」

とコウスケはNN爆雷を投下した。

「碓君に婚約者?!」

「いったい誰なんだ?」

クラスメイト達が騒ぎ出す。

「ちよ、コウスケさん?!」

シンジが慌てる。

「罰だよ。婚約者をほっといてるな。」

と言うがコウスケは専らマナの方に気を回していた。

（ふむ・婚約者の話は漏れていなかったのか。レイを挑発しているからてつきりそうだと思っただがな。）

動揺を隠せていないマナを見てコウスケはそう思った。

「それとも嫌になったのかな？」

ちらりとレイを見るとこの世の終わりみたいな顔になりながらフルフルしていた。

目から

「嫌、捨てないで。」

とコウスケは感じ取った。

レイはマナが来てからというもののシンジに近づくことができないうでいた。

いつもマナが先を越してシンジを連れて行ってしまいうからだ。

シンジは断り切れずにいたのだろう。

そしてコウスケの言葉を聞いて考えなくなかったことを考えてしまったというわけだ。

つまり、シンジがレイを捨ててマナのもとに走ることを・・・

だが、ここで予想外の出来事が起きる。

「何言ってるんですか?! 僕が綾波をほっとくなんてそんなことしませんよ!」
なんてシンジが叫ぶのであった。

ちなみに、ここ三日間のレイとマナに対する時間は2:8くらいである。
それをどうとるかは人によって違うだろう。

(このバカ・・・俺がわざわざレイの名前を伏せた意味がないじゃないか!)

「え〜! 碇君の婚約者って綾波さんだったの?!」

「だから仲が良かったんだな。」

「NERVで一緒に戦うなんて素敵!」

「くそう。碇の奴め。」

なんかやつかみも聞こえた。

(もう、なるようになれ・・・)

「そういうわけでシンジ君はあきらめたまえ。その少女。」

そしてコウスケはマナだけに聞こえるように

「この後、屋上に来れるかな? 霧島マナさん。」

マナは少し驚くが

「そんな・・・私は遊びだったのね。」

と教室の外に駆け出しに行った。

(大した演技だな。)

「誤解だよ！マナ！」

とシンジもついていきそうになるが

「嫌！行かないで！」

とレイがシンジにしがみついた。

心なしか目も潤んでいた。

(ナイスだ！レイ。)

レイは別にコウスケの手伝いをしたわけではない。

本当にシンジに行つてほしくなかっただけである。

コウスケの「嫌になった」発言が思ったよりもレイに響いてしまったのだ。

「それじゃ・・・ごゆっくり。」

コウスケは教室を後にする。

「・・・なんか引つ掻き回しただけね。」

質問攻めにあう二人を見ながらアスカはつぶやいていた。

・・・

「それでご用は何ですか？」

マナがコウスケに言う。

マナとコウスケは学校の屋上にいた。

「なに、簡単なことさ。・・・戦自の霧島マナさん。」

マナは警戒していた。

「言つとくが変なまねはよせ。・：あんたの護衛はいないんだからな。嘘だと思うなら確認してみろ。」

マナは通信機を出すはずぐにしまった。

「本当みたいね。」

「四日前に比べれば大したことなかったがな。」

マナは訝しげにコウスケを見ながら

「四日前？」

なんて聞いてくるのだった。

「戦自の研究所の方がまだ手ごたえがあったよ。」

とはいっても零課に被害はない。

皆無傷で帰還したのだから。

「・・・あなただったのね。」

マナはコウスケを仇のように見てくる。

「その職員はどうしたの？」

「皆殺しだ。誰一人、生かしてない。」

するとマナは殴りかかっていた。

コウスケは拳を避けるとマナの足を払った。

マナはそのまま転んでしまう。

マナが振り返るが目の前にグロッカー7が突きつけられる。

マナの両手は下についており、すぐに行動ができなかった。

「いきなりひどいな。」

（無理やり連れていくのはあんまり気が進まないけどな・・・）

「あんたが・・・ムサシとケイタを・・・」

マナはキツと睨んでくる。

（ん？ムサシとケイタ？）

「・・・ムサシ・リー・ストラスバーグと浅利ケイタのことか？」

「・・・そうよ。」

「その二人ならNERVで保護している。」

マナは驚きで目が開いていた。

「今、皆殺しにしたって・・・」

「職員はな・・・子供たちは保護した。」

マナは黙ってしまおう。

おそらく信じていないのだろう。

「君には選択肢がある。」

(嫌な役だな・・・)

と思うがコウスケは進めることにする。

「一つはこのまま戦自に帰る・・・この場合は死ぬな。」

何のために来たのかはいまだ不明だが、作戦に失敗した少年兵がどうなるか簡単にわかる。

マナが顔をしかめる。

「一つはこのまま逃亡する・・・この場合も戦自に捕まって終わりだな。」

いくら訓練を受けたとはいえ相手はプロだ。

そう簡単に逃げられるとは思えない。

「一つは俺とNERVに来る・・・君が心配する二人にも会える。」

(出来ればこれを選んでほしいな・・・そっちの方が楽だ。)

「NERVに言った途端に捕まるなんてこともあり得るでしょ。」

マナが言う。

「それは俺がさせない。」

「あなたにそんな権限有るの？」

明らかに小ばかにした態度だった。

「いいだろう。」

コウスケは空いている手で携帯電話を取り出した。

マナは何をしたいのかわからないようだった。

『私だ。』

「碓司令、最後の子供の確保に成功しました。」

「碓司令って・・・碓ゲンドウのこと？」

マナがコウスケに聞いた。

「それ以外誰がいる？」

『そうか、NERVに連れてこれるか？』

「このままだと無理やりになりますよ。」

『だとしても構わん。』

マナはそんなゲンドウの声にやっぱりと聞いたそうであった。

『治療を受けさせねば、体がもたないだろう。』

と言うゲンドウの言葉にマナが驚く。

「そうですね。」

『こちらからも朗報だ。二人が目を覚ました。』

コウスケはちらりとマナを見て

「二人とは・・ムサシ・リー・ストラスバークと浅利ケイタですな。」

『それ以外誰がいる。』

「生きてるの？二人が・・。」

「それは良い知らせですな。」

『君からもよい知らせが来るように期待している。』

「了解です。碇司令。」

コウスケは電話を切った。

「さあ、どうする？霧島マナ君。」

・・・

「ムサシ・ケイタ・。」

「霧島・。」

「マナ・。」

マナは泣いていた。

マナはコウスケについていくことにし、コウスケの案内で二人がいる病室に通されたのだ。

二人は清潔なベットのの上に腰かけていた。

「良かった・・・」

（よほど会いたかったんだな。）

しばらくコウスケは感動の再会を眺めていたが、やるべきことを思い出した。

「さて、そこまでにして」

三人がコウスケを見つめてくる。

「俺は綾波コウスケだ。解っていると思うがNERVの関係者だ。」

少年たちの方は警戒しているようだった。

「君たちには選択肢がある。」

（またこれかよ・・・なんか嫌だな・・・）

「一つ、このまま戦自に帰る。」

三人が強張った。

「一つ、NERVに残る。」

やはりこの言葉にも体を強張らせる三人

「一つ、他人として暮らす。」

これには驚いたようだ。

「そんなことできるのか？」

ムサシが口を開いた。

「出来る。こここの設備を使えばな。それに日本政府に対して我々はすでに切り札がある。なんなら君たちが死んだことにすることもできる。」

MAGIを使えばそんなことは造作もないことだった。

「NERVに残る場合はEVAに乗るんですか？」

ケイタが言う。

「それはない。」

EVAの正体を知っているコウスケはそう答えるしかなかった。

第一、そんなことをしたら三人を何のために救出したのかわからない。

「まあ、体が完治するまではここにいてもらうがな。それまでに決めてくれればいい。」

「いいのか？」

ムサシが疑うように言った。

「そのために君たちを保護したんだ。じゃなきや戦自に送り返してるよ。時間はあるからしつかり考えてくれ。」

(出来れば他人として暮らしてもらいたいんだがな・・・)

だが、ゲンドウから子供たちにまかせると言われた手前、コウスケが勝手に判断できることではない。

「積もる話もあるだろう。ゆっくりと休んでくれ。」

・
・
・

まだ早朝と呼べる時間にコースケは駅のプラットホームにいた。

コースケの前には保護した子供たちがいた。

三人はリツコの尽力と若い生命力で尋常じやない回復を見せたのだ。

既に列車は来ており、いつでも出発はできるようになっている。

「お世話になりました。」

マナがぺこりとお辞儀をする。

少年たちも同じくお辞儀をする。

「別に構わん。．．それよりもこれでいいんだな？」

「はい。」

マナが答える。

「これに乗ったら、君たちは別人として暮らすことになるが．．．」

「別にいい。」

「僕もいいです。」

ムサシとケイタが言う。

「そうか．．．」

コウスケは三人の目を見てその覚悟があることを知る。

「しばらくはNERVの監視がつく．．君たちが安全だとわかるまではな。」

「戦自にいた時よりはました。」

「そうだね。」

「泥棒の心配もなさそうだし。」

ムサシ、ケイタ、マナがそう言って同意してくれた。

（心配なさそうだな．．あとは俺たちの仕事だ．．）

まだこの三人の安全は確保されたわけじゃない。

一応死んだことになっており、別人として戸籍は登録してある。

この時日本政府とひと悶着があつたそうだが、ゲンドウと冬月がトライデント計画を盾に迫つたため一応解決したようだ。

今頃、戦自では大問題になっているだろう。

だが、それでも油断はできないのだ。

そう思いコウスケは一つの通帳を渡した。

「これは？」

マナが通帳を見ながらコウスケに聞いた。

「君たちが大学を卒業できるくらいまでの金だ。持って行け。番号は今日の日付だ。足

りないようならそこにある番号に連絡くれれば俺とつながる。」

「そんな大金もらえるかよ。」

「そうですよ。そこまでしていただかなくても・・・」

ムサシとケイタが通帳を返そうとするが

「持つて行け。君たちが餓死しましたなんて悪夢だからな。」

と言うコウスケに三人はしぶしぶ通帳を受け取った。

「時間だ。・・・達者で暮らせよ。」

ムサシとケイタは列車に乗り込んだ。

マナは少し戸惑いながら

「コウスケさん。綾波さんとシンジ君に謝ってもらえますか？」

「わかった。ちゃんと伝えておくが、シンジ君はダメだ。」

「なんでですか？」

「あいつはレイを泣かせた。これは重罪だからな。」

(ついでに俺の飯の分もだけどな。)

そう言うマナはくすりと笑った。

「・・・そうですね。女の子を泣かせるのは重罪ですね。」

「お前さんも二人が泣かせるようなことがあれば、いつでも連絡していいぞ。相棒と一

緒に駆けつけてやる。」

「解りました。その時は甘えさせてもらいます。」

と言いまなは列車に乗り込んだ。

列車が出発する。

たちまち小さくなつて見えなくなつていった。

「……これでいいんだろ？加持。」

どこからともなく加持が現れた。

「ああ、ありがとな。綾波。」

「まったく、体よく利用しやがつて……」

「それについては謝るよ。」

加持が煙草を一本取り出した。

コウスケはそれを受け取り火をつける。

「これがばれたら……」

「解つてるよ。」

加持も煙草を吸っていた。

「……葛城を泣かせるなよ。」

「女の子を泣かせるのは重罪なんだろ？」

「そう言うことだ。」

これからあの三人には何があるだろうか

列車は出発した

どんなことがあつても止まることはない

出来れば三人に幸が大からんことをコウスケは祈らずにはいられなかった。

第29話 現実と理想

「あの三人は今のところ無事なんだな。」

コウスケはデスクに置いてあつた報告書を眺めていた。

隣にはムサシ、ケイタ、マナが笑顔で写つてる写真がある。

今は中学校に通つてゐるとのことだ。

日本政府からの介入は認められず、戦自も目立つた動きはないようだ。

レイたちも学校に問題なく通つてゐるはずなのだが・・・

「はあく、あれ以降シンジにべつとりとはね・・・」

おかげでシンジから勉強に集中できないと愚痴られたのだ。

アスカからも苦情が来ている。

それをレイに言つても

「嫌。」

で終わってしまうのだ。

一度それを快く思わない教師に指導を受けることになるが

「私たちは婚約してます。碇司令にも許可をもらつてます。」

などと言われたために口を閉ざす以外、道が無かったとか・・・

マナの襲来は思わぬ後遺症を残していったのだ。

どちらかと言うとコウスケの「嫌になった」発言の方が影響があったのだが、コウスケはそれが原因だとは思っていない。

ともかくレイは嫉妬というものを知ることになる。

聞けばシンジに近づく女性を睨みつけ、見せつけるようにべつとりとくつついているとか・・・

NERV職員には何もしないので特に支障があるわけではないが、一応気を付けるようにお触れが出ている。

・・・ゲンドウ直々に

(シンジが下手なまねをしなければ問題ないか。)

とコウスケは考えるのであった。

デスクにある内線電話機が鳴る。

「はい。綾波ですが・・・」

『日向です。緊急事態です!』

「なんだ?レイが零号機でも乗っ取ったのか?」

とコウスケは先の考え事の延長で冗談交じりに言うが、日向はそのまま続けた。

『アメリカ第二支部が消滅しました!』

「なに?! 確かに消滅したんだな?」

『はい、確認しました。消滅です。』

「解った。」

コウスケは受話器を置いて、部屋を後にする。

・
・

コウスケは会議室にいた。

下には大きなモニターがあり、V A N I S H E D の羅列が流れていた。

会議室は暗く皆の顔がよく見えなかった。

「参ったわね。」

ミサトが腕を組みながら言った。

「上の管理部や調査部は大騒ぎ、総務部はパニックってましたよ。」

日向はここに来るまでに把握しておいたのであろう。

「で、原因は?」

「いまだ解らず。」

リツコがそういうとモニターにアメリカ第二支部があったところが映し出される。

大きなクレーターになっていた。

「手がかりは衛星からの静止映像だけで他に残っていないのよ。」

モニターに第二支部が映し出される。

伊吹がカウントダウンを始めた。

伊吹のコンタクトと言う言葉とともに第二支部に赤い円ができ、徐々に広がって行った。

そしてモニターは砂嵐になる。

「酷いわね。」

「こりゃ、誰も生きてないな・・証人は無しか。」

「EVANGELION四号機、ならびに半径89 km以内の関連研究施設はすべて消失しました。」

伊吹が被害状況を報告する。

心なしか声が低く感じた。

「数千の人間も道連れにね。」

リツコは冷静に言ったつもりだろうが、コウスケには少し震えているように聞こえた。

「タイムスケジュールから推測して、ドイツで修復したS・機関の搭載実験中の事故と思われませう。」

青葉はいたって冷静に報告した。

だからこそ青葉の心情をよく表していた。

「予想される原因は材質の強度不足から設計初期段階のミスまで32768通りです。」

伊吹がMAGIで計算したのだろう。

「妨害工作の線もあるわね。」

ミサトが言うことはあり得る話だった。

なにせNERVはあまり友好的に思われていないからだ。

「でも、爆発ではなく消滅なんですよ？つまり消えたと。」

日向がミサトの考えを否定した。

「多分、ディラックの海に呑み込まれたんでしょうね。先の初号機みたく。」

リツコがこれまでのデータから推測したのだろう。

（このまま消滅ってことになったら楽だな。）

人知れずコウスケは思った。

「じゃあ、せつかく直したS・機関も？」

「パーよ。夢はついえたわね。」

リツコの言う夢とはEVAの稼働時間のことだ。

（止めるよ。EVAが無限に動いたらそれこそ悪夢だよ。）

コウスケは先日の使徒戦の初号機を思い出していた。

別の宇宙から単独で帰還できるEVA

それが使徒のように無限に動けたら

そしてそれが暴走などしようものなら人類はどうやって対抗すればいいのか？

結論から言えば無理である。

NNを使ったところで足止めにはかならない。

そんなものをどうやって処理しろと言うのか・・・

「無くなった物をあれこれ言ってもしょうがないか。」

とミサトがあきらめるように言った。

「そーいや、アメリカには参号機もあるんだよな？」

コウスケはアメリカと聞いて参号機のことを思い出していた。

参号機と四号機はアメリカが勝手に製造権を主張して作られたのだ。

「ここで引きといることになったわ。米政府も第一支部まで失いたくないみたいね。」

「怖くなったからうちに押し付けるってことか。」

「そう言うことね。」

「起動試験はどうするのかしら。例のダミーを使うのかしら？」

ミサトの声は少し震えていた。

ミサトはコウスケから教えてもらったのでダミープラグの正体を知っている。「これから決めるわ。」

と言うリツコも声色があまりよくなかった。

・・・

コウスケはゲンドウとリツコとともに地下にいた。

目の前には一本の赤いエントリープラグがぶら下がっている。

「試作されたダミープラグです。レイのパーソナルが移植されています。ただ、人の心、魂のデジタル化はできません。あくまでフェイク、擬似的なものです。」

リツコは淡々と説明するが、どうも顔色は良くなかった。

「EVAがそこにパイロットがいると思えばいい。シンクロすればいい。各EVAにデータをを入れておけ。」

ゲンドウの声はいつもより低かった。

「問題が残っていますが・・・」

「構わん。・・・使徒を殲滅できればいい。」

「はい。」

リツコはしびしびながら了承する。

「しかし、この色はどうにかならないのか？赤木。」

コウスケはダミープラグを見ながら言う。

「なぜかしら？」

「・・・レイの瞳を連想させるんだよ。」

コウスケはダミープラグを見るたびにレイの紅い瞳を思い出していた。

「赤城博士。色は変更できるか？」

ゲンドウがリツコに聞いていた。

「確かに嫌なものですね。変更します。」

ゲンドウとリツコはコウスケの言葉でレイのことを考えていたのだろう。

「・・・できれば今すぐにこれを破棄したいですな。」

プラグにあるレイの素体

それを考えると今すぐに壊したいのだ。

「だが、必要なのだ。・・・我々は使徒に負けるわけにはいかん。」

「解つてますよ、碇司令。」

「・・・すべてが終われば・・・」

ゲンドウは途中で言葉を切る。

だが、コウスケにはゲンドウが言いたいことがわかっていた。

リツコもわかっているようだ。

「早く終わらせたいですな。」

コウスケ以外の二人も同じ思いなのだろう。

二人は静かに頷いていた。

「参号機はどうするのですか？」

コウスケはこれが気になっていた。

ゲンドウはリツコに顔を向ける。

「調整、ならびに起動試験は松代で行います。」

「テストパイロットは？」

「ダミープラグを使うのはまだ危険です。」

リツコの顔は冴えない。

リツコの顔から何が言いたいのかわかった。

「・・・四人目を選ぶのか。」

リツコは何も答えなかった。

「まったく、悪夢だよ・・・。」

それ以降、沈黙が続き静寂が支配した。

・・・

「しかし、碇司令。第二支部はよろしいのですか？」

コウスケはゲンドウとともに総司令執務室にいた。

ダミープラグの視察が終わった後、コウスケはそのままゲンドウの後について行った。

傍らには冬月もいる。

「構わん。SELEに近い支部だ。後日我々の妨げになる。」

「碇、委員会への報告はどうする?」

「問題ない。原因不明だ。」

ゲンドウはおくびも出さずに言った。

「派手にやってくれましたな。」

「そのために剣崎を送ったのだ。」

「その剣崎はいつ到着しますかな?」

「明日には到着する。」

「予定通りですな。例の荷物は第四ゲージに運び入れます。」

「そうしてくれ。」

...

「お疲れさん。剣崎。」

コウスケは第四ゲージにいた。

コウスケの前には黒服―劍崎キヨウヤが一人立っていた。「いえ、任務ですので。」

と劍崎はそっけなく答える。

「はあ、その答え方・・まるでレイみたいだな。」

「彼は昔からこうだったわよ。」

とリツコは言う。

劍崎とリツコ、ミサト、加持は同じ大学の同期であった。

「今回のアメリカ第二支部の消滅は、人為的な事件ではないかと疑っているスタッフもいるのよ。」

リツコが劍崎を険しい眼で見ている。

「同じNERVの仲間2000人を無為に殺す必要が本当にあったのかしら。」

そんなリツコに劍崎はピクリともしない。

「あれはS・機関実験中の事故だ。赤木もわかっているだろう?」

「解ってるわ。・・そのために人が一番いない時を狙ったものね。」

それでも嫌なものなのだろう。

実際コウスケも嫌なものだった。

「奴らに負けるわけにはいかない。」

「・・・奴らとは？」

コウスケの言葉に興味を示したのか剣崎が口をはさんでくる。

「なんだ？知りたいのか？」

「いえ、なんでもありません。」

「任務に忠実・・・大変結構だ。で、お前さんに聞きたいことがある。」

「何でしょうか。」

「何がしたいんだ？」

「どういうことでしょうか？」

「何を望むんだ？」

任務を忠実にこなす剣崎にコウスケはずっと疑問をいだいていた。

同じNERV職員を2000人も殺すことになった今回もなんも疑問を持たずに剣崎はやり遂げた。

諜報部員としては有能・・・それがコウスケの評価である。

「諜報部員にそんなものは必要ありません。」

「違うだろ。見えないだけ・・・いや、見ようとしただけだろ。・・・最初のレイと似てるな。」

（レイの場合は意図的に見ないようにしたというのが正しいか。）

そんなコウスケの言葉に劍崎が動揺したように見えた。

「そういや、赤木。ここの担当はお前さんなのか？」

「いえ、違うわ。ここの荷物に関しては加賀ヒトミに任せてあるの。」

とリツコが言うのと一人の白衣を着た女性が現れた。

「彼女よ。」

ダークブラウンのショートカットであるが前髪はヘアピンで抑えられていて、どこもなく幼さが残っていた。

そんな加賀は劍崎をじっと見つめていた。

「どうしたんだ？加賀さん。」

「劍崎さんがこの実験素材を持つてくるときにアメリカ第二支部が消滅したでしょう。それはこれを内密に奪取するためにやったことではないんですか？」

(鋭いね。・・まあ、少しわかりやす過ぎるか。)

「アメリカ第二支部はS・機関実験中の事故だ。」

「そうでしょうか？あなた方が一切関与していないと断言できるんでしょうか？」

加賀はいつの間にかコウスケの方を向いていた。

そもそもなぜこんなところにコウスケがいるのか理解できないようだった。

「それについては否定もできんし、肯定もできん。まあ、不幸な事故だった、そういうこ

とだな。」

「そんな・・・罪のない2000人も命が奪われたのよ！不幸な事故だったなんてよく言えますね。」

キツと加賀が睨みつけてくる。

(レイの方が怖いな。)

なんてコウスケは思うのであった。

「NERVの仕事は人類を守ること。未来に人類の命を繋ぐことだわ。それなのに無為に人を殺すなんて、本末転倒だわ！」

「確かにNERV本部の仕事はそれだよ。本部はな・・・」

コウスケの知る限り他の支部が本部よりSEELに近ことはわかってる。

表立って対立は無いが、裏では稚拙な衝突が繰り返されているのだ。

「本部はってどういうことですか？」

コウスケの言葉に疑問を持った加賀が聞いてきた。

「さあな、どういうことだろうか。」

よく見ると剣崎もじつとコウスケを見ていた。

横で黙っていたリツコはため息をついているようだった。

「じゃあな、あとは頼んだよ。」

「全員そろつたな。」

夜、家に帰つたコウスケはミサト、加持、パイロット二人を呼び出した。

「どうしたの？いきなり呼び出して。」

「今回の事件のことを知ってもらいたくてな。」

「今回つて第二支部のことか？綾波。」

加持が胡散臭そうに聞いてきた。

ちなみに加持はコウスケを綾波と呼んでいた。

レイはレイちゃんである。

彼曰く

「女の子は特別だ。」

だそうだ。

なら、ミサトも名前前で呼んでやれよとコウスケは思うのであった。

「そっだよ。」

と言つて今回の第二支部の事故が意図的に作られたものであることを話した。

「やっぱりな。劍崎が絡んでたか。」

「ここまではする必要はあつたの？」

ミサトの疑問はもつともであった。

「あったよ。敵対組織は一つでも少ない方がいい。」

「敵対って同じNERVじゃないですか。」

シンジが少し怒りながら言ってきた。

「確かに同じNERVだ。だが、本部以外は正直なところよくわかっていない。そこは葛城や加持はわかるだろ？」

コウスケの言う通り本部と支部の間は友好的ではなかった。

本部に対してあまりにも隠していることが多いからだ。

本部も似たようなことはしているが・・・

とにかく各支部は何とかして本部を蹴落としたい。

そんな意図が見え隠れしていた。

「中途半端に期待するより敵としてみた方が楽だからな。」

コウスケの言葉にシンジは黙るしかなかった。

「まあ、四号機はこつちに渡ったしSEELも予定を修正しているだろ。」

「そうだな。予定外の出来事だからな。」

と加持が言う。

「あと、参号機の処遇も決まったよ。」

「レイのダミーを使うのかしら？」

ミサトはレイの様子を窺いながら聞いてきた。

レイは少し震えていた。

そんなレイにシンジは肩を抱き寄せていた。

「はあ？なんでお前が知らないんだよ。」

ミサトはきよとんとしていた。

「だってコウスケ君って私よりも上だし……」

「あのな、俺は建前では葛城の部下なんだぞ。葛城のところにも正式に送られているぞ。」

確かにコウスケはミサトよりも上位にいるが、それは裏での話である。

「ミサトさん……ちゃんと見てませんね。」

シンジとアスカがジト目でミサトを見ていた。

「あはは……まあ、いいじゃない。ここでわかるんだから。」

ミサトはごまかすように頭を掻いていた。

「それで誰なのよ。」

アスカがしびれを切らしたようだ。

「……鈴原トウジ君だ。まだ確定ではないが……」

「トウジ?!」

「ええ〜!あのジャージ?!」

レイを見るとシンジの方を気にしているようだった。

どうもシンジのことが心配のようだ。

「碓司令からシンジ君にすまないと伝えてくれと言われたよ。」

「そうですか……」

シンジの顔はすぐれなかった。

「碓君……」

「ありがとう。綾波。」

「……いい。」

そんな二人を見てコウスケは

(以心伝心か……羨ましいな。)

とついつい考えてしまうのであった。

……

コウスケはレイたちの通う学校にいた。

今回は警備状況の視察ではない。

「次は鈴原君ですか。」

目の前にいる校長からさりげなく批判の声を聞いた。

「解ってますよ。」

NERVのことを知っているとはいえ校長とて一介の教師なのだ。

子供が戦場に送られるなんてどう考えても嫌に決まっていた。

それはコウスケも同様であった。

「なんとかならないのですか？」

「それができれば自分も苦労しませんよ。」

校長は顔を伏せてしまう。

「・・・今、呼び出しますので」

「お願いします。」

・・・

数分後、呼び出されたトウジが校長室に現れた。

校長はすでにどこかへ去っていた。

「コウスケはん。」

トウジは意外な人物と出会い戸惑っていた。

「よう、鈴原君。」

「どないしたんでつか？こんなところで・・・」

「まあ、そこにかけてくれ。」

トウジがコウスケの前に座った。

「今日、君を呼び出したのはお願いがあるからだ。」

「なんででしょうか？」

「今度NERVにEVA参考機が配備される。：そのテストパイロットになつてほしい。」

トウジはある程度予測していたのであろう。

あまり驚いては無かった。

「そら、シンジたちと一緒にちゅうわけでつか？」

「そっだよ。」

トウジは顔を伏せていた。

「まあ、強制じゃなからな。」

（拒否してくれれば一番楽なんだけどな。）

ゲンドウから本人が拒否すればそれを尊重してほしいと言われていた。

トウジは何かを考えているようだった。

「：今すぐに決断してくれなんて言わない。もし、決まったのならここに連絡をくれ。」

コウスケはトウジに電話番号を渡す。

「コウスケはんはどない思て居るんでつか？」

「・・・できれば拒否してもらいたいよ。」

「そうでつか・・・」

「じゃあ、連絡を待つてるよ。」

・・・

「レイ、食事ができたぞ。」

久々にコウスケは夕食の準備をしていた。

久々になるのはコウスケが押し付けていたからではない。

レイは最初、交代で夕食を作っていた。

時々コウスケの事情で代わったりしていた程度である。

だが、レイが料理を覚えるとともに代わりにやると言い出し始めた。

それがなし崩し的に増加し、現在では朝はコウスケ、夕方はレイという構図が出来上がったのだ。

そのためレイがやると言っていたのだが、コウスケはそんなレイを押しつけて自分がやると言ったのだ。

「・・・レイ、鈴原君の様子はどうだった？」

学校を離れた後、トウジがどうしていたかずっと気にしていたのだ。

「何か思いつめてました。」

「そうか。」

（思いつめてるってことは……）

了承してしまうかもしれない

コウスケは苦く考えていた。

「特務一尉は……」

そんなコウスケにレイが声をかけた。

レイが何を言いたいのかわかっていた。

「乗ってほしくないよ。本人にもそう言った。」

「そうですか……」

「だけど、最後に決めるのは鈴原君自身だ。」

そう言ってコウスケは食べるが、何とも味気が無かった。

それはコウスケが料理したからではないだろう。

……

「そうか……それでいいんだな？」

……

「わかった。」

コウスケは携帯電話を切った。

「ふう〜。」

コウスケはベランダで煙草を取り出した。

煙草の煙が第三新東京市の空に飛び出していった。

そんなコウスケを後ろでレイはじっと見ていたのであった。

第30話 総員、第一種戦闘配置

「レイ、フォースチルドレンが決まったよ。」

コウスケは朝食を食べながら、目の前でコウスケと同じくらいの量を食べるレイに話しかけた。

「そうですか……」

レイは心なしか俯いて見えた。

「……本人がやるって言ったんだ。はあく……」

ため息をつくコウスケをレイが心配そうに見てきた。

「ありがとな、レイ。だが、俺よりも鈴原君のことを頼む。うまくサポートしてやってくれ。」

「……私にできるでしょうか？」

レイはコウスケの言葉に戸惑っているようだった。

「大丈夫だよ。」

「でも……」

「デモもストライキもない。お前さんなら大丈夫だ。」

レイはきよとんとしていた。

よくわかっていないのだろう。

だが、コウスケはレイが他人を心配するのをよく見ていた。

そして様々な報告書からコウスケはトウジはそう言ったことに気付く少年であると思っている。

・・・恋愛ごとに関しては鈍感だが

そのためレイが心配しているとトウジが感じるだけでも幾分かは違うであろうと思っているのである。

「そろそろ時間だろ。シンジ君やアスカが待つてるんじゃないか？」

時間を見るとレイが登校する時間になっていた。

とはいっても充分に時間はある。

これはコウスケが約束の時間の10分前には必ず到着するようにしてるのをレイが無意識のうちに真似しているのだ。

「じゃあ、気を付けて行って来い。」

「はい、行ってきます。」

とレイが玄関を出ようとしてドアが開いたときに隣から声が聞こえた。

声は葛城家の前からした。

「おはようございます。今日は葛城三佐にお願いに上がりました。」

いたって真面目な声であった。

「自分を・・・自分を・・・」

途中で葛城家に入ってしまったので肝心な部分が聞こえなかった。

「あれは・・・相田君だよな。」

「はい。」

レイはなぜケンスケがここにいるのか不思議でたまらないようだ。

コウスケは葛城家の前に移動した。

後ろからレイもついてくる。

葛城家の玄関には直角で頭を下げるケンスケがいた。

シンジやミサト、アスカは困っていた。

ちなみにミサトはNERVの制服であった。

松代に参号機を受け取りに行くからだ。

「朝早くどうしたんだ？相田君。」

「おはようございます、綾波特務一尉。今日はEVANGELION参号機のパイロットに志願したくて参りました。」

（なんで相田君は参号機が来ることを知ってるんだ？）

後で情報漏洩の出所を調べさせるかとコウスケは考えた。

「ほう、EVAのパイロットになりたいのか。」

「はい！」

ケンスケが目を輝かせながら返事をした。

「なぜ、EVAのパイロットになりたいんだ？」

「人類の平和のためにお役に立ちたいのです。」

ケンスケの言うことは至極立派なものだった。

だったが

（英雄願望か・・・）

コウスケはケンスケの目に宿る輝きからそう判断した。

「なるほど君の意気込みはよくわかった。」

「ちよつと！コウスケ君?!」

ミサトが咎めるように言った。

パイロットの選出はマルドゥック機関・・・とは名ばかりの実質NERVの首脳部が行うのだ。

いくらゲンドウに近いコウスケとはいっても勝手にパイロットを決めれるほど権限があるわけではない。

無論ミサトにもない。

真実を知るミサトはそれを言いたいのであった。

ケンスケはコウスケの言葉に目がさらに輝いていた。

「ちよつと大人げないことをするぞ。」

皆が疑問符を浮かべるがすぐにその意味を知ることになる。

コウスケは全神経を目の前の少年―相田ケンスケに集中させた。

それは辺りを包み込み、殺伐とした嫌な緊張感を出していた。

所謂、殺気と言うやつだ。

シンジとアスカは普段見ない無表情のコウスケに怖気づくが、それでも表立って表情を変えることはなかった。

ミサトはコウスケの殺気に反応したが、何をしたいのかわかったのだろう。

妙にリラックスしていた。

レイは少しつらそうにコウスケを見ていた。

おそらくコウスケがこんなことをしたくないというのを感じ取ったのだろう。

コウスケの殺気を浴びるケンスケは完全に怯えきっていた。

数歩後ずさりをしてそのまま尻餅をついてしまう。

「あ……あ……あ……」

ケンスケは言葉を発することができなかった。

コウスケはゆっくりと神経をいつもの状態に戻した。

辺りを包んでいた緊張が解けていく。

「すまないな、相田君。」

コウスケはケンスケの手を取って立ち上がらせた。

「だが、覚えておいてほしい。EVAのパイロットになるということはこれ以上に恐ろしいことだ。」

(それを鈴原君が味わうのか。)

「お、俺は……」

ケンスケは走ってどこかに行ってしまった。

シンジが追いかけてようとするがコウスケが止めた。

「シンジ君、今はそつとしておいてやれ。」

「にしてもすごかったわね、コウスケ。」

アスカが先ほどの感触を思い出しながら言った。

「40%くらいだぞ?」

「あれで?!」

「もっとすごいのを浴びた人がいるよ。」

と言ってコウスケはレイの方を見た。

レイはこくりと頷いた。

「大丈夫だったの？レイ。」

アスカがすごく心配そうな顔でレイに訪ねた。

「大丈夫だった。特務一尉は演技だったから。・・でも、怖かった。」

「そうだよな、最後にシンジ君を呼んでたし。」（第17話参照）

と言いながらコウスケはニヤリを発動させた。

「あら、そうなの？いいわね、シンちゃん。命が危ないって時に呼ばれるなんて相当思われてる証拠だわ。」

ミサトもニヤリとさせながら言った。

「それに俺がシンジ君を連れて帰ろうとしたらレイが引き留めたからな。シンジ君だけな。」

「それじゃ、コウスケが帰った後はお楽しみだったのかしら？」

アスカも乗ってきたようだ。

顔がにやついていた。

「そ、そんなわけないだろ?!アスカ!」

シンジが真っ赤になりながら全力で否定していた。

實際、彼らはコウスケが帰ったあと一緒にベットで寝ただけだ。文字通り寝ただけ。

ちなみにシンジは床で寝ると言ったのだが、結局レイに押し切られる形になった。レイよりも寝つきが悪かったのは言うまでもない。

レイはと言うと

「碓君と一緒に寝る・・・それはとても気持ちのいいこと。」

なんて言いながらぼつと赤くなっていた。

「ほら、レイだって言ってるじゃない。」

「あ、あやなみく・・・」

シンジは情けない声を出していた。

コウスケは笑いを堪えている。

「ねえ、コウスケ君。さすがにやばくない？」

ミサトがものすごく真面目に言ってきた。

「何が？」

「シンジ君、寝たんではしょ？レイと・・・」

「今だって寝てるじゃないか。」

レイの夜中の奇行は治らなかつた。

最近はシンジのところに行くことが多いようでコウスケはレイが寝ぼけてもシンジの気配を察知しているのではと考えている。

「それはただ寝てるだけじゃない。」

「レイは事実しか言ってるじゃないよ。」

「だからやばいんじゃない。」

ミサトはあれこれ考えているようだ。

(監督責任とか考えてるんだろな。)

ふと見るとアスカはシンジを問い詰めていた。

「アスカ、そこまでにしてやれ。それにレイは事実しか言ってるじゃないよ。本当にただ寝ただけだ。」

(それにそんなことになったら、多分レイが嬉しそうに……いや、困惑しながら言ってくるだろうよ。……直球でな。)

「だからそれが……ああ、そういうことなの。」

どうやらアスカはわかったようだ。

「それなら早く言いなさいよ！バカシンジ！」

「最初からそう言ってるだろ?!」

「レイも紛らわしいこと言ってるんじゃないわよ！」

レイは疑問符を浮かべていた。

「なんだ？アスカは何を想像したんだ？」

「何って……」

と言うとアスカは真つ赤になっていった。

「アスカもそういうお相手が欲しいのかな？」

その時アスカがちらりとコウスケの方を見るのをレイは見逃さなかった。

「な、そんなんじゃないわよ！」

「シンジ君とかどうだ？」

コウスケはわざとシンジの名前を出したのだ。

するとレイはシンジの腕に抱き付いた。

「ダメ！いくらアスカでも許さない。」

「あやなみ?!」

レイのただならぬ声にシンジが驚く。

「碇君がもう私から離れないようにする！だから……」

レイから並々ならぬ決意を感じる。

(マナがいたときの影響だな。．．予想通り)

「取るわけないでしょ?!」

そんなレイにアスカは怖気づきながらも言い返した。

「綾波！・・・痛い、痛いよ！」

どうやらレイの手に力が入り過ぎたようだ。

シンジがものすごく痛そうにしている。

「監督責任・・・ああ・・・減俸・・・」

ミサトはまだあれこれ考えている。

（楽しい・・・実に楽しいよ。そう思わないか？ペンペン。）

いつの間にか玄関に来ていたペンペンは「クエ」と鳴き、冷蔵庫（ペンペンの部屋）に戻って行った。

そんなペンペンに満足しながらコウスケは時計をみた。

時刻は8：30を示していた。

「・・・ああ！お前たち時間！」

「嘘！」

「不味いよ！」

「走っても間に合わないわ。」

「リツコに怒られる〜」

一人かなり情けないことを言っているが、ともかく時間は大幅に過ぎていた。

「仕方ない、お前たち車に乗れ！俺が送る！」

コウスケたちが住むコンフォート17にはN E R Vの非常用の車があるのだ。

コウスケとミスサトのIDカードで使用できる。

「葛城も急げよ！」

と言つてコウスケは三人を連れて駐車場に向かうのであった。

...

「よう、綾波。」

「なんだ、加持か。」

コウスケはN E R Vの喫煙所で加持と出会った。

「子供たちが遅刻しそうになったんだって？」

「耳が早いな。」

「じゃなきゃ、やってられないよ。」

加持の仕事を考えればこれくらいの情報収集なんてお手の物だろう。

「しかも、校内の駐車場でドリフトを決めたらしいじゃないか。」

コウスケがやったことはそれだけではない。

M A G I を使い信号を強制的に青に変更までした。

これを職権乱用というだろう。

ちなみに一人の女性が赤信号にやたらと止められ、遅刻したのは余談だ。

「ばれなきや問題ない。」

ばれても始末書で何とかなるだろうとコウスケは考えている。

「で、用件はなんだ？」

「なんだ、ばれてたか。」

加持が両手を上げてひらひらさせていた。

「当たり前だ。」

「・・フォースチルドレンは決まったのか？」

「決まったよ。鈴原君だ。今日、正式に通達されるよ。」

「そうか。」

加持が煙草を取り出した。

コウスケもつられて取り出す。

「妹をNERVの病院に移してほしいだとき。もう一度考え直せと言ったんだがな。」

「妹思いのいい兄じゃないか。」

「何言ってるんだよ。」

加持を見るとどうやらコウスケの言いたいことがわかってるようだった。

「解ってるならそんなこと言うなよ。」

「それもそうだな。」

コウスケが危惧すること

それはトウジの妹―鈴原サクラのことだった。

NERVとしてみれば別にどうということはない。

むしろそれくらいの条件は飲んでも痛くはない。

だが、敵対組織からしてみればNERVを叩くチャンスでもあるのだ。

NERVが妹の転院を条件にEVAのパイロットにした。

本人の希望と言ってもそれで脅したと解釈もできるからだ。

いや、そのように解釈してくるに違いない。

NERVに友好的な組織などほとんど無いに等しいのだから。

それでもNERVが保つてられるのは国連の特務機関、人類補完委員会の下部組織と

言うところが大きいだろう。

「思い通りにならない．．．それも人生だな。」

コウスケは煙を吐き出すが、今日の煙は妙に白く濁っていた。

．．．

翌日

コウスケは自分の執務室で決裁仕事に追われていた。

「これは三課のじゃねえか。何でここに有るんだよ。」

と言つて三課行と書かれたケースに書類を放り込む。

横には一課行と書かれたケースもある。

「最近たるんだ。ニアミスが多いぞ。」

他の課の書類が入っていたり、誤字、脱字が有ったりなどするのだからコウスケとしてはたまったものじゃない。

「これもだ。まったく・・・」

今度は要訂正のケースに放り込む。

脱字が見つかったからだ。

この場合、訂正しない限り許可は下さないようにしている。

「そーいや、今日だな。起動実験。」

コウスケは昨日の夜のことを思い出した。

レイはトウジからEVAに乗るのはどういふ感じなのかを聞いてきたと言つていた。おそらくシンジやアスカにも聞いているのだろう。

(そうだよな。怖いのが当たり前だよな。)

既にトウジは松代にいる。

今頃はEVAに乗っているはずだ。

「しかし、EVAを五機も独占か・・・」

ふと先日見た初号機が脳裏に映し出された。

使徒を引き裂き咆哮する初号機

初号機単独でこんなに力があるのにそれがあと四機もある。

純粋な軍事力なら世界でトップだろう。

「まあ、碇司令にそんな気が無いのが幸いなな。」

すると内線が鳴りだした。

「はい、綾波です。・・・なに?!松代で爆発事故だど?すぐに行く。」

・・・

コウスケが発令所に行くのと慌ただしく動き回る職員たちが目に入った。

『松代にて爆発事故発生。』

『被害不明。』

『救助及び第三部隊を直ちに派遣。戦自が介入する前にすべて処理しろ。』

今だ状況報告がされておらず、爆発以外の情報が入ってこなかった。

「事故現場に未確認移動物体発見。」

「パターンオレンジ。使徒とは確認できません。」

(参号機が暴走しているのか?)

暴走と言えば初号機だが、他のEVAにも無いとは言えないだろう。

それにトウジはぶつつけ本番でEVAに乗ったのだ。

(それとも使徒が松代を襲ったのか?)

まだ実戦配備されていない参号機を狙ってきた

使徒にそんな知恵があるとは思えないが、逆にあり得ないと切り捨てることもできない。

使徒とは確認されていないが、パターンオレンジは先日の使徒もそうだったので使徒ではないと言い切れない。

「綾波特務一尉。指揮を任せる。」

ゲンドウが厳かに告げた。

「了解。総員、第一種戦闘配置。」

「総員、第一種戦闘配置。」

「地对地戦、用意。」

「EVA全機発進。迎撃地点へ緊急配置。」

オペレーターたちが次々と指令を下した。

コウスケはそれを黙ってみていた。

・
・
・

時間が幾ばくか過ぎたころ

「野辺山で映像をとらえました。主モニターに回します。」

前のモニターが映し出される。

「おお・・・」

職員が一齐に声を上げた。

モニターにはゆっくりと歩く参号機が映し出されていた。

「活動停止信号を発信しろ。エントリープラグを強制射出だ。」

コウスケの指示に伊吹が即座に対応した。

参号機のハッチから煙が上がるが、エントリープラグは半射出のまま出てこなかった。

何か粘着質な糸のようなものが見えた。

（暴走ではないな。）

「ダメです。停止信号及びプラグ排出コード認識しません。」

「パイロットは？」

「呼吸、心拍の反応は有りますが、おそらく・・・」

日向がモニターの情報を報告するが顔色があまり良くなかった。

「使徒に乗っ取られたか・・・」

EVAが使徒に乗っ取られるなんて予想外にもほどがあるだろう。

しかもパイロットが乗っているときに

正直気分はよくなかった。

だが

「碓司令、目標を第十三使徒と識別してよろしいですね？」

皆がコウスケの言葉に驚き一斉に振り向いてきた。

「・・・わかった。EVANGELION参号機は現時刻を持っては破棄、目標を第十三

使徒と識別する。」

ゲンドウの声はいつもより低かった。

「しかし・・・」

日向が戸惑うように言った。

「予定通り野辺山で戦線を展開する。」

オペレーターたちはコウスケの命令を聞いて渋々ながら従った。

・・・

「目標接近。」

「地上戦用意。」

使徒は着実に近づいていた。

既に迎撃の準備はできている。

EVAはパレットガンを持った初号機とソニックグレイブを持った式号機を組ませて前衛に、零号機はライフルを持たせ二機の後ろに展開させた。

『使徒?!これが使徒ですか?』

シンジが使徒を見て驚いていた。

「残念だが、そうだ。」

この時のコウスケの顔を見たものは誰もいない。

コウスケはこの時無表情であった。

いや、レイが見たならばその表情に隠される苦い思いを感じ取ったかもしれない。

『目標って・・・トウジのEVAじゃないか・・・』

『使徒に乗っ取られるなんて・・・』

レイの声は聞こえないが、その沈黙がレイの思いを感じさせる。

コウスケは使徒を見る。

参号機の黒いボディーが嫌に禍々しく見えた。

戦闘開始まで多くは無いが時間はあつた。

『・・・殲滅するんですか』

シンジの声は普段より低くそら恐ろしかった。

「そうだ。」

コウスケの声もいつもとは違う冷たいものになってしまふ。

『でも、トウジが乗ってるんでしょ……』

「それは戦闘拒否と受け取っていいのか？」

『嫌ですよ！』

「わかった。」

コウスケはゲンドウの方に振り向いた。

「……碇司令、ダミーシステムの使用許可を」

それに即座に反応したのはレイだった。

『特務一尉、それは……』

「シンジ君が嫌がるんだ。しょうがあるまい。」

逆に言えば他の二機も拒否するなら使うと脅しているようなものだ。

だが、シンジの気持ちもわかるのだ。

それでもやらねば人類に未来はない。

そんな思考の悪循環にコウスケの心はますます暗くなっていく。

「許可する。」

ゲンドウが苦みを含みながら言う。

いつになくサングラスが光っていた。

ゲンドウから許可をもらったコウスケは伊吹にとあることを訊ねた。

「伊吹二尉。ダミーシステムを使った場合、鈴原君はどうなる？」

「おそろく……」

(死ぬか。)

顔を伏せる伊吹を見ながらコウスケはそう思った。

「いつでも使えるようにしておけ。」

と言って再び使徒を見た。

ふとコウスケは気になった。

それはこれ見よとばかりに半射出されたエントリープラグである。

(エントリープラグは半分出てる……半分は?)

コウスケは参考機のエントリープラグを見てなぜか引つ掛かりを感じた。

(……そういうことか。)

「皆に朗報だ。」

コウスケの言葉に皆が何を言っているんだという顔になっていた。

これから子供一人を殺すって時になんて不謹慎なと考えたのだろう。

「鈴原君はただ捕まっているだけだ。」

「なぜそう判断できるんですか?」

日向が皆を代表して聞いてきた。

「仮に鈴原君が使徒となっていた場合、エントリープラグが半分だけ射出されるか? それにEVAを使う意味もない。」

人と同じサイズになったのならそのままNERVに潜入すればいい。

そっちの方がはるかに効率的であり、またEVAに人のような小型の目標をとらえるのは大きさの問題で難しいのだ。

実際、第十一使徒は細菌サイズでNERVに潜入したのだから

それにトウジ自身に寄生したのであれば、それは強固になり射出自体できないだろう。

あるいは完全に射出されて救助された後に機会を窺えばいい。

結果で言うと思徒はEVA本体に寄生し、トウジは捕まっているだけ

そういう判断をコウスケは下したのだ。

『じゃあ、トウジは助けられるんですね?』

シンジがわずかな希望を持って聞いてきた。

「そう言うことになるな。みんな気合を入れろ!」

とコウスケが言うと思令所にあつた暗い雰囲気はわずかながら取り払われた。

「よし、作戦変更だ。鈴原君の救出後に使徒を殲滅する。」

『そういう事ならとつと助け出すわよ!』

『了解。』

『解りました。』

三人も気合が入っているようだった。

「レイはまだ待機、他の二機でまず接近するんだ。そしてどちらかがエントリープラグを引き抜いた後、戦線離脱。わかったな。」

了解と返事をした後、三人との通信が切れた。

「伊吹二尉、万が一のために神経接続のカットと腕の切断準備をしておけ。：助けたのにまた乗っ取られたなんて嫌だからな。」

「解りました。」

伊吹も幾分か元気な声で返事をした。

他の二人も緊張が少し解けたようだ。

上の二人もポーズこそ変わらないが、安堵したような空気を感じた。

しかしコウスケはまだ安心していない。

使徒の本体がどこにいるのか

それがまだわからないからである。

いくらトウジを救出できても使徒を殲滅できなければ意味がない。だが、それを口には出さない。

今はトウジの救出に皆が集中しているからだ。

時間はまだある。

使徒の動きが止まった。

EVAと使徒が対峙するように睨め合う。

「二人とも気を付けろ。どんな動きをしてくるかわからないからな。」

すると使徒の体がかがかくと動き始めたかと思うと、空に浮かび上がっていた。

使徒は初号機の方に飛び上がり、ドロップキックを放つ。

初号機はパレットガンで防御するが、耐えきれず後ろに吹き飛んだ。

『シンジ！』

「アスカ！ 気を抜くな！」

使徒は式号機の方に向き、腕を伸ばしてきた。

式号機はソニックグレイブで使徒の腕の薙ぎ払う。

使徒が横に吹き飛んだ。

立ち上がった初号機が使徒にタックルをしたのだ。

吹き飛んだ使徒は空で体制を立て直し、地面に降り立っていた。

「二人ともあの腕を封じ込められるか？」

どれほど伸びるかは不明だが使徒の腕は厄介であった。

『僕が行つてみます。』

「わかった。無茶はするな。」

コウスケの返答を得て初号機は使徒に向けて走り出した。

使徒は再び腕を伸ばす。

初号機は使徒の手をつかんだ。

使徒は伸ばした腕を縮めて初号機と取っ組み合いを始める。

それを式号機が見逃さなかった。

式号機は使徒を後背に組み付いた。

「今だ！ エントリープラグを！」

式号機は参号機のエントリープラグに手を伸ばし使徒から引き抜いた。

使徒はそれに気づくが、目の前に初号機が居るので動くことができない。

発令所から安堵の声が鳴り響いた。

「よし、アスカはそのまま戦線離脱だ。」

『了解。シンジ、レイ。後は頼んだわよ。』

式号機は第参新東京市に向けて走り去った。

「伊吹二尉、式号機の腕は？」

「異常なしです。」

「そいつは重畳。」

(さて、次は・・・)

コウスケは皆が不思議そうに見ているのが気になった。

「なんだ？」

「・・・いえ、重畳とはどういう意味でしょうか。」

青葉がそのように言った。

「大変喜ばしいという意味だ。後で調べてみる。」

と言うと皆は納得したようだった。

(少しは余裕が出てきたか。)

戦闘中にそのような質問が来るということはそれだけ余裕ができたということだ。

「式号機、戦闘区域を離脱しました。」

日向が式号機の様子を報告した。

「よし、直ちに式号機の回収と鈴原君の救助だ。部隊を送れ。」

日向はコウスケの指示を聞いてすぐさまに指令を下す。

一方、初号機は使徒と取っ組み合いを続けていた。

「シンジ君、大丈夫か？」

『何とか・・・』

すると初号機が一步後ろにのけぞる。

(不味いな。・・・いったいどこなんだ?)

いまだに使徒の本体がどこにあるのかわからない。

コウスケが考えているうちに初号機は一步、また一步と後退していく。

もし、使徒にもう一本でも腕があつたら初号機は窮地に陥つていただろう。

『特務一尉、射撃許可を。』

初号機の不利な状況にレイが攻撃許可を求めてくる。

「ダメだ。もう少し待て。」

『・・・了解。』

しぶしぶながらレイは従う。

(どこなんだ?・・・参号機のコアか?)

と考えるがコウスケは違うと否定する。

もし参号機のコアに使徒の本体があるのなら、コアに近いエントリープラグもただで

は済まないからだ。

コウスケがあればこれ考えているうちに初号機は山肌に叩きつけられていた。

かろうじて使徒の手をつかんでいるので大事には至っていないが時間の問題だろう。

『特務一尉……』

レイの焦りの声が聞こえる。

発令所にも徐々に焦りの雰囲気立ち込めていた。

「まだだ。」

コウスケも焦りを感じていた。

(いかん……)

コウスケは戦いの基本である冷静になることを思い出した。

(情報の整理だ……)

使徒とはいえEVAを乗っ取っている。

見る限り使徒は参号機を完全に乗っ取っているだろう。

EVA……

人造人間EVANGELION

……

人造……人間……

人間……人……

人はどうやって動いてる？

人が体を動かすとき指令を送る場所・・・
そしてEVAの構造は・・・

・・・!

「レイ！頭だ！使徒の頭を狙い撃つんだ。」

『はい。』

「シンジ君、もう少し耐えてくれ！」

『わかりました。』

どうやらシンジはかなり消耗しているようだった。

「よし。レイ、できるか？」

『はい。』

「タイミングはレイに任せる。」

『了解。』

零号機が射撃体勢に入った。

使徒の後ろを取る形になっている。

使徒は依然と初号機と取っ組み合いをしている。

『この・・・』

初号機が若干押す形になった。

使徒の体が少しのけぞる。

それを零号機は見逃さない。

『くっ……』

ライフルから弾丸が発射された。

弾丸は逸れずに使徒の頭に吸い込まれる。

使徒の頭は打ち抜かれた。

使徒はがくりと力が抜け、初号機に倒れ掛かった。

「パターンブルー消滅。」

日向の報告に発令所は歓喜の嵐に巻き込まれた。

「ふうく……三人ともよくやった。」

そこに青葉からも報告が入る。

「松代の救助部隊より連絡。葛城三佐と赤木博士は重傷ながらも命に別状は無し。」

「そいつは重畳……あいつら、強運だけはいいんだな。」

すると上の方から呼ばれた。

「綾波特務一尉、よくやった。」

「はっ！」

コウスケは思わず敬礼で返した。

「後の処理を任せる。」

と言つてゲンドウと冬月のいる席が下に潜つて行つた。

「・・・」

(押し付けやがったな・・・)

コウスケは自分に残された仕事の量を思うと再び暗くなつていくのであつた。

・・・

「よう、鈴原君。体は大丈夫か？」

使徒戦から翌日

コウスケは朝早くにトウジが目を覚ましたと連絡を受け、見舞いに行くことにした。

「コウスケはん。」

「大丈夫そうだな。」

医師からトウジの体に異常なしと報告を受けていた。

それでも本人を見るまでは安心できなかつたのだ。

「これからの君の処遇なんだが、チルドレンとしては資格が抹消されたよ。君のEVAがなくなつてしまつたからな。正式な通達は後日来るだろう。」

EVA参号機は使徒に乗つ取られたため解体処分となつた。

パーツを残すことも考えられたが、使徒に乗つ取られたため危険と判断されたのだ。

「そうでつか。」

「すまないな。折角決心してくれたというのに……」

コウスケは頭を下げる。

「すまない……今回はNERVの落ち度だ。」

EVAが使徒に寄生された上に子供をそこに乗せてしまった。

危く使徒とともに殲滅するところだったのだ。

こんなことで許されるとは思わないが、それでもコウスケは頭を下げた。

それがトウジに対する精いっぱいの誠意であると思うからだ。

「コウスケはん！もういいですわ。わしは無事にいる……それでいいやないですか。」

「そうか、ありがとう。」

「それで妹なんやけど……」

チルドレンとして資格がなくなったから妹もここにいけない。

それが言いたいのであろう。

「安心してくれ。サクラちゃんはここで預かるよ。」

その言葉にトウジは安心したようだった。

不意に病室の扉が開いた。

「トウジ！」

シンジがトウジのそばに駆け寄った。

「良かった・・無事なんだね・・・」

「せんせ・・すまんの。」

「いいんだよ。ほんとによかった・・」

再び病室のドアが開く。

「こら！シンジ！あんたがそんなんじゃないやダメでしょ！」

「そうよ。碓君。」

「そうだったね。」

トウジは意外な人物の登場に驚いているようだった。

「惣流に綾波も・・・」

「鈴原！あんたに会いたいわって子連れてきたわよ。」

レイとアスカの後ろから一人の少女が現れた。

洞木ヒカリである。

「委員長・・」

「鈴原・・体は大丈夫なの。」

「おおきに。もう何ともあらへん。」

そんな二人を横目にコウスケは尋ねた。

「ちゃんと許可はとったのか？」

レイは不意に目をそらした。

アスカはぼつが悪そうにしていた。

「はあく、ちゃんと貰って来いよ。それとあれはなんだ？」

コウスケにはヒカリが隠し持っているものがちゃんと見えていたが何かは解らなかった。

「・・・お弁当です。」

レイがこつそりと教えてくれた。

(お弁当・・・そういうことか。)

ヒカリは不安そうにコウスケを見ていた。

「そういうのも事前知らせろよ。」

コウスケは携帯電話を取り出す。

コウスケはちらりとヒカリを見る。

もしかしたら追い出されるのではないか

そんな不安が見え隠れしていた。

「鈴原君の担当医か？鈴原君は普通に食事しても構わないのかな？・・・わかった。」

コウスケは電話を切った。

「普通に食事してもいいらしい。本人の希望があれば外食もいいそうだ。」
「そう言うのとヒカリはぱつと明るくなっていた。」

「さて、俺たちは行くか。」

「そうね。」

アスカはコウスケが何を言いたいのかわかったのだろう。

レイも無言で同意した。

「え？もう行くんですか？」

シンジ一人だけわかっていないようだった。

「碓君・・邪魔しちゃダメ。」

「え？綾波？どういうこと？」

シンジはレイにずるずると連行されていった。

「冗談だろ？あれで解らないのか？」

コウスケには不思議であった。

「だから三バカトリオの一人なのよ。」

アスカはため息をついていた。

「ともかく、二人とも元気だな。」

コウスケは先に出ていった二人を追って病室を後にした。

そのあと病室で何があったかは知らないが、少なくとも悪いことは起きないはずだと
コウスケは思うのであった。

第31話 覚醒

「鈴原君は今日退院だな。」

トウジは使徒戦の後、NERVで検査を受けたが心身ともに異常なし、使徒による浸食もなしと判断された。

一応一日だけ入院することになったが、今日には退院することになっていた。

「はい。」

「フツ、嬉しそうだな。レイ。」

コウスケにはレイがとても嬉しそうに見えていた。

「私よりも洞木さんの方がもつと嬉しいはずです。」

「そうだな。．．確か迎えに行ってるんだよな。」

コウスケがトウジのお見舞いに行ったあとヒカリから電話があったのだ。

ヒカリはコウスケの番号をレイから聞き出していたのだ。

コウスケが即決で許可を出したのは言うまでもない。

「あっ．．．」

と言ってレイは一つの手紙を差し出した。

「なんだ？ 恋文でももらったのか？」

「違います。それに私はもう碇君の……」

レイは最後まで言えなかった。

コウスケの腕が唸りレイの頬をつねっているからだ。

「ものだからと言いたいんだろ？ 問題発言だ。そういうのを言うとうどうなるか考えろつて言ってるだろ。」

「いひゃい……」

「お前さんは良くてもシンジ君の立場がなくなるぞ。」

コウスケは頬をつねるのを止めた。

レイは痛そうにつねられた頬をさすっていた。

「それは嫌……」

と言うがレイが不服なのはわかっている。

頬が2mm膨らんでるからだ。

コウスケがつねったからではない。

「それでその手紙がどうしたんだ？」

「相田君からもらいました。特務一尉に渡してくれと。」

「俺……？」

(前の恨み言でも書いてあるのか?)

前にコウスケがケンスケにしたことは確かにひどい仕打ちであったことに違いない。

少年の抱く理想を一瞬で破壊したのだから

それでも自分宛てに手紙が来たのだから読まないわけにはいかない。

コウスケは手紙を読むことにした。

・
・

綾波特務一尉へ

この前はすみませんでした。

あの後いろいろなことを考えてました。

・・・なぜ自分はダメなんだと

他の三人と自分は何が違うんだ

そう思うと綾波特務一尉が憎くてたまりませんでした。

でも冷静になって考えるとあの三人は最初と違うことに気づきました。

初めてEVAに乗った時、碓が泣いているのを見ました。

こんな奴にできるんだから俺にだってできる

そう思っていました。

でも、最近の碓は変わったと思います。

何というか、何か目的があつてEVAに乗つてると感じることはありません。

あの時の綾波特務一尉はとも恐ろしかった。

それ以上の恐怖と三人は戦っているのですね？

そしてその世界に綾波特務一尉はいるんですよね。

そう考えると自分は何に憧れていたのか

見た目だけにこだわつてその中を見ようとしなかったんじゃないか

それを綾波特務一尉は教えてくれたんじゃないか

そう思います。

正直まだ悩んでいます。

EVAに乗るとかじゃなくて自分は何を見ていたのかと言うことに

まだまだ答えが出そうにありませんが、綾波特務一尉には感謝しています。

そしてすみませんでした。

相田ケンスケ

追伸

三人が無事に帰つてくるようお願いします。

自分はまだ見ていることしかできませんが、三人が無事に帰つてくるように祈ります。

「解つてくれたのか。」

レイがきよとんとしていた。

「お前さんたちをよろしく頼むだよ。無事に帰つてくるように。」

「そうですか。」

とても冷たく思える声だがコウスケにはその中に含まれる嬉しそうな音を聞き逃すことはなかった。

「そういや、相田君から何か聞かれたか？」

「EVAに乗るのが怖くないかと聞かれました。」

「そうか・・・やっぱりな。」

ケンスケの手紙に書かれたことからコウスケはEVAに乗る怖さがどれほどのものなのかを知ろうとしたのではないかと考えていた。

「・・・怖くないのか？」

レイはきよとんとするが何を聞かれたのか分かったのであろう。

「それよりもみんなが居なくなる方が怖いです。」

その答えにコウスケは思わず笑ってしまう。

レイは膨れながらコウスケをにらんでいた。

「すまん。別にレイをバカにしたわけじゃない。：思ったよりもレイが周りを大事にしていることがわかって嬉しいんだよ。」

コウスケの言葉にレイがはっとなる。

「その様子だと自分でも気づかなかったのか。：最初、EVAになぜ乗るのか聞いたことあったよな。」

レイはこくりと頷きながら言う。

「みんなとの絆だから。：ほかには何もありませんから。そう言ったら特務一尉は怒った。」

「何でこいつは周りを見ようとしなんだと思ってたからな。まあ、見えないように仕組まれてただけだったんだが。：。」

「でも見ようと思えば見れた。：。」

「そんなレイが今では周りを気にするようになったんだ。特に碓君のことはな。」

と言ってコウスケはニヤリとする。

そんなコウスケにレイは赤くなりながら俯いてしまう。

「最初、特務一尉はまじめな人だと思ってた。」

「ほう、今はどう思ってるんだ？」

「・・・とてもいいわるな人。」

「そりや、結構。」

(レイとこんな会話をするなんて想像できなかつたけどな・変わるもんだ。)

そんなことを思いつつ思わず笑いが出てしまう。

「まあ、レイが変わつたというのがよくわかつたよ。だがな、一つ忘れちゃいけないものがある。」

「何でしょうか？」

「みんながいるということは自分がある。つまり自分がいて初めてみんながいるということだ。」

レイは頭に疑問符を浮かべていた。

「心の底に押しとどめてくれればいいよ。」

(そう言う俺もここに来るまでは解らなかつたんだけどな。)

そして目の前には疑問符を相変わらず浮かべている少女が一人

この少女もコウスケを変えた一人であるに違いない。

・
・
・

「これはよし・これは・三課じゃねえか。」

コウスケは自分の執務室にいた。

目の前には普段より多い書類の束がある。

上司である作戦本部長に押し付けられたわけではない。

彼女は前回の使徒戦で負傷を負い、左腕が使えなくなっていた。

そのため事務仕事は次席であるコウスケに回されることになったのだ。

とある二尉の仕事量が格段に減ったのは余談である。

ともかくコウスケはNERVに登庁してからというものの、執務室から一步も出ていない。

灰皿には10本以上も吸い殻と握りつぶされた箱が残されている。

「これは訂正行き。」

書類を一つ一つ確認しながらケースの中に放り込んでいく。

「葛城が嫌がるのもわかるな……」

コウスケは休憩とばかりに煙草を取り出す。

「はあく、……ん？」

コウスケは取り出した煙草を見ていた。

半分にはぼつきりと折れていた。

「もつたいない。」

新しいのを取り出そうとすると警報が鳴った。

「使徒か……随分と早いお出ましだな。」

・
・
・

コウスケが発令所に行くとおペレータがすでに指定に席にいた。

伊吹の後ろにはリツコもいた。

リツコは爆発があつた時にミサトがかばつたそうだ。

そのため頭に傷を負うだけで済んだのだ。

ゲンドウと冬月も今到着したようだ。

「状況は？」

「駒ヶ岳防衛線にて目標を確認。国連軍が迎撃に出ています。」

「パターンブルー・・・使徒です。」

コウスケが尋ねると青葉と日向から状況がいち早く知らされた。

メインモニターに使徒が映し出される。

人型と言つていい形で全般的に丸みを帯びていた。

腕と思わしき白いものは布のように見えた。

胴体には赤い球体―コアがあつた。

使徒に対して国連軍が攻撃するも使徒はまったく意に介していないようだった。

「総員、第一種戦闘配置。」

コウスケは厳かに告げる。

ミサトが怪我でない今は次席であるコウスケが指揮を執ることになるのだ。

『総員、第一種戦闘配置。繰り返し返す、総員、第一種戦闘配置。』

『地对空迎撃戦用意。』

「目標が射程に入り次第、攻撃開始しろ。」

「了解。」

コウスケの命令に日向が返答する。

「目標、駒ヶ岳防衛線を突破しました。」

「よし、迎撃施設をすべてアクティブにしろ。」

「了解。」

第三新東京市にある迎撃施設が火を吹く。

使徒に無数のミサイルと弾丸が撃ち込まれるがやはり効果が無い。

不意に使徒の目が光る。

それと同時に発令所は大きく揺れた。

なんとかバランスを保ち、転ぶことは避けることができた。

「バカな・・・衝撃波がここまで届くなんて・・・」

コウスケは使徒の攻撃力に驚きを隠せなかった。

(惚けてる場合じゃない)

「被害状況は？」

『第4地区に直撃。損害不明。』

「地表全装甲システム融解。」

「24層ある装甲を一瞬で……」

青葉の報告を聞いて日向が眩く。

「NN誘導弾の使用を許可する。第三新東京市の迎撃施設を特化運用だ。……市民は？」

「現在避難中です。」

「急がせろ。……死ぬぞ。」

「了解。」

と言う返事とともに青葉が急いで指示を出す。

使徒にNN誘導弾が数本刺さり、爆発するが効果は認められない。

『目標、健在。』

『NN誘導弾、効果なし。』

「NN誘導弾の第二派攻撃も許可する。直衛に回せ。」

日向が攻撃指示を出した。

(EVAの地上迎撃は間に合わないな。)

使徒の攻撃で装甲システムはボロボロであった。

もしEVAが間に合ってもジオフロントへの侵入は防げないだろう。

そう考えているうちに後ろのドアが開いて左腕を吊っているミサトが現れた。

「葛城?! 大丈夫なのか?」

「そんなこと気にしてる場合じゃないわ! EVAはジオフロントに配置して。地上迎撃は間に合わないわ。」

(ここに来るまでに情報を整理していたのか。)

そんな彼女を見て非常に頼もしく思えるのであった。

「コウスケ君は出れそう?」

「無理だ。俺にジオフロントは狭すぎる。・第三新東京市がまるごと吹き飛ばせば話は別だけどな。」

ジオフロントは高さ0・9 km、全長6 kmであるので飛ばないことはないが、高さが十分ではないためどうしても制限された動きになってしまう。

そのうえジオフロントにある迎撃施設からの攻撃もあるのだ。

そしてEVAと使徒がいる。

つまるところコウスケが出て行っても邪魔なだけなのだ。

こういう時は戦闘機よりもヘリの方が有利であったが、戦闘用のヘリはNERVには無かった。

「俺は迎撃施設の指揮を執る。」

「わかったわ。」

「Zラインをすべてアクティブにしろ。使徒がジオフロントに侵入と同時に迎撃だ。出し惜しみは無しだ。撃ち尽くせ。」

「聞いたわね、みんな。使徒が侵入次第迎撃。」

三人から了解と返事が返ってくる。

三機のEVAはすでにジオフロントに配置されていた。

足もとには無数の火器が準備されている。

再び発令所が揺れる。

「目標、ジオフロントに侵入しました。」

青葉が振り向きながら言う。

「第5次防衛線を早くも突破か・厄介だな。」

「頼んだわよ、みんな・・・」

ジオフロントの天井から使徒の顔が現れた。

「今だ！撃て！」

ジオフロントの迎撃施設が一斉に砲火を浴びせる。

同時にEVAからも弾丸が発射される。

爆炎で一時的に使徒が見えなくなった。

(完全に不意打ちだったはずだ。無傷ではあるまい。)

さらにATフィールドの中和圏内でもある。

通常兵器でも多少の傷は負わせたはずだ。

そうコウスケは考えていた。

不意に爆炎から光が見えた。

『うわああああ!』

初号機が後ろに吹き飛んだ。

「シンジ君!」

「伊吹二尉、初号機は?」

「直撃ではないため損傷は軽微ですが、パイロットが気絶しています。」

24層の特殊装甲を一撃で破壊できる光線だ。

直撃していたらどうなっていたことか……

「初号機は緊急回収!二人は援護して。」

「兵装ビルも援護に回せ!地上にある弾薬もすべてここに回すんだ!」

再びあらゆる方向から使徒をめがけて弾丸が発射される。

それにもかかわらず使徒はゆっくりとジオフロントに降りてくる。

『ATフィールドは中和しているはずなのに……なんで倒れないのよ!』
アスカの焦るような声が聞こえた。

それは発令所でも同じだった。

「初号機、回収完了しました。」

「ダミープラグを使用する。換装急げ!」

ゲンドウの断固とした声だったが、わずかに焦りも感じさせた。

モニターでは使徒に射撃する二機が写っている。

使徒はじつとしている。

どうやら効果が無いようだった。

使徒の腕がするすると地面に落ちていった。

「……二人とも避ける!」

コウスケが言うと同時に布のような使徒の腕が前に突き出される。

式号機はかろうじて避けるも、零号機は若干遅れた。

零号機の左腕が宙を舞う。

『くううう……』

「零号機の神経カット急いで。」

「零号機はダメか……」

腕が一本なくなっただので使える武器が非常に少なくなってしまった。

格闘を挑むこともできるが、あの使徒に接近戦など無謀である。

「マヤ、予備の腕があるわね。」

リツコが伊吹に問う。

「ありますが、フィードバックの調整をしないと・・・」

「解ってるわ。でも時間が無いのよ。」

「レイ、聞こえたわね。急いで戻ってきて。」

『・・・了解。』

レイの苦痛に満ちた返答があった。

零号機が戻っていく。

『初号機、換装完了。』

「コンタクトスタート。」

リツコが指示を出す。

しかし横のモニターがALERTで埋め尽くされる。

「ダメです。パルス消失。ダミーを拒絶！EVA初号機起動しません！」

伊吹から絶望的な報告を受け取った。

「ダミーを受け付けけないの？初号機が・・・」

リツコが驚愕しながら言う。
ゲンドウが立ち上がった。

冬月に一言何かを言うと言令所を後にする。

おそらく初号機のもとに行つたのだろう。

『コンチクショー!』

モニターに目を戻すと式号機が派手に動き回りながら射撃を繰り返していた。

使徒はまたもやじつとしていた。ただだった。

式号機が右から左へ動き始める瞬間であった。

そこに使徒が光線を発射する。

『きゃあああ……』

直撃はしなかったが、衝撃波で式号機は吹き飛ばす。

式号機が立ち上がったところに使徒の腕が伸びる。

「やばい……式号機の全神経カット!」

ミサトの命令で式号機の神経がカットされると同時に右腕と頭が切られた。

「式号機のエントリープラグを緊急射出だ!」

「コウスケ君?!」

ミサトが咎めるように呼んだ。

「言いたいことはわかる……だが、今のEVAは何もできない。そんなところにいたらアスカが危ない。」

「そうね……アスカの救助急いで！」

弐号機のエントリープラグが射出された。

これで弐号機は何もできない。

使徒はそんな弐号機に興味を失ったのか、移動を始めた。

「初号機と零号機が戻るまで持たせろ！」

ジオフロントにあるすべての兵装が火を噴いているが使徒には全く効果が無い。

使徒はそんな兵装ビルが邪魔になったのか、兵装ビルを壊し始めた。

「Zの5から9まで沈黙。」

「構わん！撃ち続けろ！」

するとモニターに零号機が写った。

左腕はとれたままであった。

右腕はNN誘導弾を抱えていた。

「……バカな真似はよせ！レイ！」

レイの意図がわかったコウスケは叫ぶも、使徒に向けて走り出す零号機

リツコモわかったようだ。

顔が驚きで満ちていた。

「まさか・・・自爆するつもり?!」

使徒がATフィールドを展開する。

そこにNN誘導弾が突き刺さる。

よく見るとATフィールドのようなものがNN誘導弾を纏っていた。

『碓君やみんなを守る・・・』

通信機からレイのつぶやきが聞こえると同時にNN誘導弾がロケットエンジンを始動させた。

使徒のATフィールドが破れる。

そして起こる大爆発

モニターは真っ白になった。

発令所も大きく振動した。

この時シンジが目を覚ましたと報告があつたのだが、発令所でそれに気づくものがないなかつた。

「・・・レイは・・・」

モニターが戻ったのでコウスケはモニターに目を向けた。

煙が晴れて零号機が現れる。

使徒は無傷であった。

いち早く反応したのはミサトであった。

「零号機のエントリープラグを射出して！」

零号機のエントリープラグが射出される。

少し遅れて使徒が腕を伸ばした。

零号機の顔が半分割れて地面に倒れる。

「・・・Zラインは？」

ミサトの声で気を取り戻したコウスケは兵装ビルで抵抗しようとした。

「ダメです。先ほどの爆発ですべて沈黙しました。」

「なんてこった・・・」

コウスケに抵抗する手段が失われた。

「初号機は？」

最後の希望でもある初号機はどうなのかりツコが聞く。

「ダメです・・・起動していません。」

伊吹は顔を伏せながら言う。

使徒がNERVのピラミッドを砲撃した。

発令所が大きく振動する。

モニターはちかちかと点滅していた。

『第三基部に直撃！』

『最終装甲板融解！』

「不味い！メインシャフトが丸見えだわ！」

ミサトの悲鳴のような声が響く。

発令所がまたもや振動する。

「目標はメインシャフトに侵入！降下中です！」

青葉の焦りが声に出ていた。

「目的地は？」

「そのままセントラルドグマへ直進しています！」

「ここに来るわ！総員退避、急いで！」

『総員退避！繰り返し返す、総員退避！』

発令所に警報が鳴り響く。

メインモニターが消えた。

そして使徒がメインモニターを割って出てくる。

コウスケの目の前には使徒の顔があった。

妙ににやついた顔に見えた。

コウスケは煙草を取り出す。

「どうやら最後の一本だったようだ。」

発令所は禁煙だがもはやどうでもよかった。

使徒の目が光り始めていた。

「ここを吹き飛ばすつもりなのだろう。」

「無粋な野郎だな。最後までくらいゆつくりさせろよ。」

(・・・)までか・・・レイ・・・無事でいろよ。

コウスケが覚悟を決めたとき使徒の顔が爆発した。

使徒はよろけたように見えた。

「なんだ?」

後ろを振り返るとミツヒサとシンゴがいた。

下のフロアには零課の隊員たちがいた。

「何してるんだ!」

「総員退避? そんなもん零課にはねえよ。」

シンゴが110mm個人携帯対戦車弾を捨てながら言う。

「そうですよ、課長。それに課長を見捨てたら子供たちに合わす顔がなくなるじゃないですか。」

ミツヒサはFN P90を構えながら言う。

「第一、課長らしくねえんだよ。」

「まったくです。その胸にあるものは飾りなんですか？」

コウスケは気付いた。

まだ抵抗する手段は残されていたことに。

胸に隠し持っているグロック17

兵装ビルやSu-37に比べれば貧弱な装備だ。

だが、それが今では頼もしく思える。

「そうだったな。」

コウスケはグロック17を取り出す。

「総員、全力射撃！」

「了解。」

一斉に使徒に向けて銃声になる。

弾丸は使徒の体に当たり四散していく。

使徒はただじつとしていっただけであった。

どうも攻めあぐねているようだった。

「長良は？」

コウスケはグロツク17を放ちながら言う。

「アダムを確保しに行つてますよ。」

「機動力ならあいつが一番だからな。」

「なら、結構。」

(ここが無くなつても対抗する手段が無くなるわけじゃない。)

横を見ると日向と青葉もUSPを取り出していた。

伊吹は惚けているようだった。

「何してる！葛城と赤木を連れて離脱しろ！」

「でも……」

「怪我人がいると邪魔なんだよ！とつとと行け！」

コウスケの喝に伊吹は「了解」と答え二人を連れて発令所を出ていった。

「人間をなめんなよ！」

すると横のモニターが割れた。

そこから初号機が現れると同時に使徒の顔にパンチを放っていた。

ちらりとこちらを見ているようだった。

「シンジ君か！」

初号機は使徒を押し戻していった。

本部内から破壊音が聞こえてくる。
派手に暴れているのだろう。

『コウスケさん！』

シンジになぜ呼ばれたのか・・・

「！固定ロックすべて外せ！」

日向がキーボードを操作した。

途端に破壊音が聞こえなくなる。

コウスケはジオフロントに射出されたと思った。

「……じゃ状況が解らない。外に行くぞ。」

……

コウスケたちが外に出ると、先に出ていた三人に加持もいた。

おそらく退避する途中で出会ったのだろう。

初号機はピラミッドの残骸に叩きつけられていた。

だというのに初号機はピクリともしない。

「エネルギーが切れたのか……」

使徒の目が光る。

初号機の胸が爆発した。

そこには赤い球体―コアが露出していた。

初号機のコアを使徒がいたぶるように突いていた。

エントリープラグは射出できない。

背中にピラミッドの残骸があるからだ。

無理に射出すればピラミッドに当たってエントリープラグがどうなるか予想もつかない。

使徒は楽しむように初号機のコアを突いている。

不意に初号機の手が動いた。

使徒の腕が初号機の指で切れていく。

初号機は使徒の腕をつかむと一気に引き寄せた。

そして胴体に蹴りを一発

使徒の腕がもぎ取れる。

「暴走か？」

過去に初号機はエネルギーが切れたにもかかわらず使徒を殲滅した。

それをコウスケは思い出していた。

「EVA初号機・再起動・・・」

伊吹が報告するがそれは誰の目にも明らかであった。

初号機がゆっくりと立ち上がり、剥ぎ取った使徒の腕を左腕につける。初号機の左腕は再生した。

「すげい……」

ミサトのみならずその場にいた全員があっけにとられていた。

「……信じられません。シンクロ率が400%を超えています。」

伊吹が持ち出したPCを見ていた。

(もしかしたら……)

「目覚めたのか……」

「おそろくね……」

コウスケの考えを肯定するようにリツコも呟く。

使徒が残った腕を伸ばすが、初号機が腕を振り払う。

その衝撃波で使徒の体が切り刻まれる。

初号機は使徒が倒れるのを確認すると四つん這いになり使徒を目指す。

「……何をやる気だ?」

使徒のもとに初号機がたどり着いた。

すると初号機は使徒に噛みついた。

もしやもしやという音が聞こえてくる。

「・・・使徒を・・・食ってる・・・」

「S2機関を取り込んでるんだわ・・・」

伊吹は目の前で起こることに堪え切れず吐き気を催していた。

グロテスクな音が鳴り止み、初号機は再びゆっくりと立ち上がる。

そして咆哮

初号機の拘束具が次々はじけ飛んでいく。

その光景をコウスケはただ黙ってみているしかなかった。

第32話 表と裏

覚醒した初号機は突然機能を停止した。

いや、停止させたというのが正しいだろう。

S2機関を取り込んだのだから無限に動けるはずだからだ。

そのあと何とかゲージに拘束したが、抵抗せずに拘束されたのが逆に不気味であった。

そうコウスケは考えている。

レイやアスカは無事であった。

自爆したレイが無事なのを不思議に思うが、ほっとするのもまた事実であった。

式号機や零号機は大破しており、また本部施設も半壊まで追い込まれた。

復旧にはひと月はかかるとのことだ。

また、第一発令所は大破し、放棄が決定された。

使徒とEVAが本体内で派手に暴れたのだ。

修復もできるが、どれほど時間がかかるか解らない。

そのため予備の第二発令所をメインで使うことになる。

零課の存在が発令所組には知られることになった。

ただ、対テロ用の部隊として存在するという説明がなされた。知られた時ようにゲンドウがあらかじめ準備していたようだ。

・
・
・

使徒戦から二日目

彼の前にはここにきて初めて目にする量の書類があった。

一体何kgあるだろうか

それをすべて決裁せねば復興作業に取り掛かれない。

この際、国連軍や戦自から来た嫌味などとうの昔に葬り去った。

今は資源ごみとして外に出ているだろう。

国連軍も戦自も地球環境のために役に立ててよかったな

コウスケはこれを正式な文書として送りつけようと考えたが、さすがにまずいだろう
と思いとどまった。

すると内線電話が鳴り響く。

「はい、綾波です。．．．そうか、わかった。」

コウスケは受話器を置き執務室を後にした。

・
・
・

「ようやく目が覚めたな。このおバカさんは。」

コウスケはレイの病室にいた。

レイは上半身を起こしていた。

「・・・特務一尉。」

レイの顔には傷一つついてなかった。

報告で無傷なのは知っていたが、実際に見てほつとするコウスケであった。

無事だったんだからいいじゃないのかと考えたが、自爆特攻などやはり許せるものはなかった。

「何故あんな真似をした。」

思ったよりも低く重苦しい声になってしまった。

「・・・ああしなければ使徒を倒せないと思ったからです。」

そしてレイは俯き加減で

「じゃないと・・・みんなが居なくなる・・・」

その声は悲しく響いた。

「そうか・・・よくわかったよ・・・このバカ野郎。」

レイはバカ野郎と聞いてコウスケを見る。

「じゃあ、聞くが・・・レイが死んでもみんなが助かれば満足なんだな。」

「・・・はい。」

レイは俯きながら答えた。

それが正しい選択であると考えているようだった。

「・・・死んだらこんな風に話すこともできない・・・食事することもない・・・それで満足なんだな。」

レイははつとなる。

「でもそれって・・・周りに誰もいないと同じじゃないか・・・」

ベットが少し揺れていた。

レイががたがたと震えているからだ。

ようやく気付いたのだろう。

死というのはどういうことか

「それに残された人たちはどうすればいいんだよ。死んだことをずっと忘れないで生きろって言うのか?」

レイの顔は悲しみに満ちた表情であった。

「もう一度聞くぞ。それで満足なのか?」

「・・・嫌です。」

そう言うレイの目に涙が浮かぶ。

「わかったな．．もうあんなことするなよ。このバカ野郎。」

コウスケはレイの頭を撫でていた。

何となくこうせねばならないと思つたからだ。

「ほんとに．．無事でよかつた．．」

「．．ごめんなさい。」

「いいよ。だが、本当にあんな真似するなよ。じゃないと俺は許さんからな。」

「はい。」

そしてレイは何かを考えていた。

「どうした？」

「．．私に父が居たらこんな感じなのかと思ひました。」

コウスケは少し衝撃を受けるが

（．．まあ、レイの父親なら別にいいかな。でも、パパと呼ばれるのは勘弁してほしいが．．．）

と思うのであつた。

「．．碓君は？」

と言われてコウスケは戸惑う。

シンジがどうなつたか今のレイに話すべきか

「碓君はどうしました。」

らしくないコウスケの態度に不審を抱いたのだろう。

少し強めにレイが聞いてきた。

(後日知ったら怒るだろうな．．いや、絶対に知られる。)

「シンジ君は．．．EVAに取り込まれた。」

「碓君が？」

「シンクロ率400%を超えた．．．その結果、EVAに取り込まれることになった。」

コウスケは一日前に見た画像を思い出していた。

初号機のエントリープラグ内である。

そこにはシンジのプラグスーツとヘッドセットではなく、白地のポロシャツにすこし薄い青色をしたズボンがLCLにぶかぶかと浮いていた。

コウスケはどこかでその服を見たことがあった。

なぜかとても重要なものであったような気がする。

ミサトからシンジが出かけるときに着る服であることは聞いた。

リツコはその服がシンジの自我イメージが構成していると言っていた。

でも、何故その服なのかは誰にもわからなかった。

「そんな．．．」

「今、碇司令がサルベージの陣頭指揮を執っている。」

「碇司令が？」

「必ずシンジを取り戻す・・てな。」

その時の様子をコウスケは思い出していた。

発令所でシンジが取り込まれたという報告を聞いてゲンドウは顔色一つ変えなかった。

それを見た職員たちはゲンドウを悪く思い、罵ったりしていた。

自分の子供が大変な目にあっているのに顔色一つ変えないとはどういうことか

だが、その評価も一瞬で変わることになる。

「諸君、聞いてほしい。現在、われらは使徒の攻撃で半壊状態にある。復旧に忙しいのは承知でお願います。サードチルドレン・いや、私の息子であるシンジをサルベージするのに協力してほしい。」

と館内放送でゲンドウが語ったのだ。

そして

「必ずシンジは取り戻す・・サルベージの指揮は私がとる。」

と続けたのだ。

それ以降、技術部を中心にサルベージ計画が進んでいるのだ。

ゲンドウも不眠不休で指揮を執っている。

冬月もそんなゲンドウに付き合っていた。

ゲンドウがサルベージだけに集中できるようにしていた。

「そうですか・・・」

「なんだ？ 泣いたりしないのか？」

コウスケはシンジが使徒に取り込まれたときのレイを思い出していた。

あの時のレイはコウスケですら驚くほど感情をあらわにしていた。

「碓司令やみんなが頑張ってる・・・私も泣いたりできない。それに・・・碓君は必ず戻ってきてくれる。」

「そうだな。」

レイの顔に悲しそうな雰囲気が出ていたのをコウスケは見て見ぬふりをした。

それ以上に帰ってくるという思いの方を強く感じたからだ。

「今は休んどけ。シンジ君が帰ってきて心配されるのも嫌だろ？」

「はい。」

「じゃあ、俺は行くな。」

・・・

三日目

コウスケはジオフロントに出ている。
傍らにはシンゴもいる。

迎撃施設の視察に来ていた。

「地上の施設はどうだ？」

「エリア4はほぼ壊滅だ。その他のエリアも結構ひどくやられてる。」

シンゴが書類を見ながら言う。

「Zラインも全滅したからな。」

「どこかの誰かさんが派手に壊したからな。その尻拭いは保護者の特務一尉の仕事だ。」

その言葉にコウスケは執務室にある書類の束を思い出していた。

予算だけでも発展途上国がいくつか潰れるほどのものだ。

とても頭が痛かった。

「どれくらいかかりそうだ？」

「一か月・と言いたいところだが、地上施設に弾薬の補充も考えると一か月半つてところだな。・・それで喜んでる連中もいるけどな。」

コウスケは頭が痛かった。

「取りあえず地上施設からだな。」

「まあ、ここは真つ先に攻撃を受けるところじゃないからな。それに上には市民も住ん

でるし、とつとと直した方がいいだろ。」

幸いにもコンフオート17は無事であった。

だが、一般の住宅にまったく被害が無かったわけでもない。

それは二課の仕事ではないが、だからと言って切り捨てることもできない。

なぜならここは要塞都市であるため、どうしても兵装ビルの方―兵器の修復が優先されてしまうのだ。

つまるところ二課が先に仕事しなければ、住宅の修復はもつと遅れてしまうのだ。

「そういや、シエルターも一つ潰れたんだよな。」

コウスケは報告書にあったことを思い出していた。

使徒との戦闘中にジオフロントにあったシエルターがつぶれたとあったのだ。

「ああ、式号機の首が直撃した。・半分は死んだそうだ。」

シンゴはかなり暗い顔をしながら言う。

「また出ていくんだろうな。」

「その方がいい。こんなろくでもない所だからな。」

今回の使徒戦で第三新東京市を出ていく人が増えたそうだ。

彼らの言い分はいつ死んでもおかしくないということだ。

NERVはまたもや世界に敵を作ることになってしまった。

「早く終わらせたいな。」

「まったくだ。」

その時

「俺のスイカ畑が〜！」

と言う悲鳴がどこからか聞こえたが、戦場になるところにそんなもんを作ったやつが悪いし、許可はもらってるのかとコウスケは思うのであった。

ただ、どこかで聞いたことのある声だったが

・
・
・

五日目

コウスケはNERV内の通路を歩いていた。

目的地は喫煙所である。

本来なら執務室で吸うのだが、書類が多いため断念したのだ。

書類に火が付いたら火事になるからだ。

ちなみに国連軍と戦自から来たものはちゃんと資源ごみとして出した。

リサイクル業者のわずかな利益へと還元されているだろう。

それに長い時間椅子に座るため、その気分転換も兼ねていつもとは違う道を歩いていた。

ふと妙なにおいを感じた。

「なんだ？」

どうやら一つの研究室から漏れているようだった。

「誰の部屋だっけ……」

場所から技術局の者であることはわかる。

別に無視してもよかつたが、何かあつたら大変である。

コウスケはドアを叩いた。

「はい。」

（ん？どつかで聞いたことある声だな……）

「綾波コウスケです。」

「綾波特務一尉ですか？今、開けます。」

するとドアが開いた。

ドアの向こうには加賀ヒトミが立っていた。

（ああ、ここは加賀さんの研究室か……）

「どうしました？」

「ああ、なんかにおうから何かあつたのかと思つてな。」

「やっぱり通路にも漏れてましたか……」

加賀が困ったような顔になる。

「いったい何なんだ？」

「紅茶をいれてたんです。」

「ほう、紅茶か・・・」

コウスケはコーヒーよりも紅茶の方が好きであった。

ちなみに綾波家にはコーヒーは存在せず、代わりに陶磁器で作られたティーポットとカップが常にきれいな状態で専用の棚に置いてある。

当然ながらレイもその管理を行っている。

レイがシンジに勝る点は今のところそれだけである。

他は一日の長でシンジに一步譲ってしまう。

「あの・・・よろしければ寄っていきますか？」

「どんな紅茶か興味あるな・・・少しお邪魔するか。」

こんな強烈な香りを発する紅茶がどんなものなのか

コウスケの興味が湧いたのだ。

部屋に案内されると部屋には似つかない黒服が中にいた。

剣崎キョウヤである。

「珍しいな。剣崎がこんなところにいるなんて。」

「特に用事もなかったのです。」

「へえ。」

「何でしょうか？」

「もしかして・・・彼女に興味があるのか？」

「そんなわけありません。」

「そうか。」

と言うのがコウスケはニヤリとしていた。

(あの剣崎が興味もないのに・・・こりや面白い。)

「少し待っててください。今、入れますから。」

と言って加賀はカップに紅茶を入れ始めた。

そして目の前に差し出される。

「これ私がブレンドしてるんですよ。」

「オリジナルティーか。」

「はい。」

コウスケはカップを受け取った。

一口紅茶を飲む。

・・・

何とも言えない味だった。

まるで紅茶と緑茶を混ぜたような味・・・

そう表現するしかなかった。

「どうですか？」

加賀が期待するように聞いてきた。

「独特な味です。」

劍崎が答えるもどうも動揺しているようだった。

「そうですか。綾波特務一尉はどうですか？」

（どうですかって聞かれても・・・）

「・・・ポカポカしない・・・」

思わず本音が出てしまった。

これを聞いたのがミサトなら

「コウスケ君にレイがうつったのね。」

なんてからかわれるだろう。

「はい？ポカポカ？・・・あの冷たかったですか？」

「いや・・・まあ、独特の味だな・・・」

コウスケは何とかそう答えることができた・・・と言うよりそう答えるしかなかった。

期待に目を輝かせている加賀を目の前にしては……

それでも、自分の表情が固まってしまふのはどうしようもなかった。

「そうですか……では、私も……」

と言つて加賀が飲むが顔が歪んでいた。

「……おかしいですね……こんなはずじゃ……」

加賀は配合を間違えたのかと必死に考え込んでいた。

そこに劍崎が

「そこに玉露と書かれているのは見間違えでしょうか。」

と言つた。

「そんな、いくら私でもそんな間違え……」

加賀が固まっていた。

コウスケはそんな加賀の後ろから覗き見る。

……緑色の缶に書かれた文字は誰がどう見ても「ギョクロ」としか読めなかった。

間違つても「タマツユ」だろうか

「玉露だな。劍崎にはどう見える?」

「玉露です。」

気まぜい雰囲気になった。

「あの・・・」

「すみませんが、私は失礼します。」

と言つて劍崎が出ていく。

少し早めに歩くように見えたのは気のせいじゃないだろう。

「あ・・・待つてください！劍崎さん！」

「俺も用事を思い出した。失礼するよ。」

コウスケも部屋を後にする。

「綾波特務一尉も・・・待つてください！何かの間違えなんです！」

そんな声が廊下に響くのであった。

廊下にはあの玉露ティーの香りが残っていた。

・・・

七日目

一仕事を終えたコウスケは自宅のベランダでのんびりしていた。

レイはすでに退院している。

今はリビングで本でも読んでいるだろう。

レイはTVも見ることが長年TVの無い生活だったため、長時間見続けるといふことが無かった。

本を読んでいるときのレイは以前のようにただ見ているのではなく、内容を理解しようとしている。

時々どういふことか解らずコウスケに聞いてくることがあるからだ。

曖昧な表現を理解するのにレイは苦労している。

それでもコウスケに聞いてくるのが少なくなつたことから、だいぶ理解してきたのだろう。

・・・ただ、コウスケでも返答に窮するものもある。

それについてはさりげなく逸らしている。

コウスケはふと夜空を見上げた。

「半月か・・・あれは上弦だな。」

コウスケの目には夜空に右半分だけ現れている月が映し出されていた。

あと一週間もあれば満月になるだろうか

ふとコウスケは思い出す。

(月・・・満月・・・そっぴやあんどときも満月だったか?)

その時間聞いていたものを思い出す。

そしてコウスケは歌いだす。

彼女がよく歌っていた歌だった。

今まで忘れていた・・・と言うより思い出したくなかったのだろう。彼女を思い出してしまふから

でも、この時はなぜか歌いたくなかった。

不思議とつらいとは思わなかった。

静かに始まり、静かに終わった。

「回りくどい歌だ・・・最初からそう言えばいいのに。」

だが、それができないのが人なのだろう。

だから思いを歌詞にして曲とともに外に表す。

それが歌というものなのだから

ふとコウスケは自分以外の存在の視線を感じた。

どうやらいつの間にか観客になっていたようだ。

「なんだ、聞いてたのか。一言声をかけてくれればいいのに。」

リビングで本を読んでいたレイがこつちを見ていた。

「・・・歌」

「この歌か？」

「はい・・・」

するとレイは少し考えた後

「私にも教えてください。」

と言うのであった。

「別にいいが、なんでだ？」

コウスケはレイに聞いてみたが答えなかった。

うつすらと赤くなっているようだ。

(なるほどね。)

「なら、ちゃんと練習しないと。まあ、難しい歌じゃないからすぐに覚えられるだろう。」

レイはゆっくりと頷く。

そしてレイはまた一つ歌を覚えた。

・・・

十日目

執務室にいたコウスケのもとに一人訪ねてくるものがいた。

「課長、長良です。」

「ドアは空いてる。入れ。」

ドアが開きユキが中に入ってきた。

「また書類か？」

と言うがそれが用事だとは思っていない。
なぜなら「課長」と呼ばれたからだ。

「先日の松代での事故について報告に来ました。」

「松代？あれは使徒の……」

と言つてコウスケは気付いた。

使徒が現れたときあれほど爆発するのであれば早々に気づく。

だが、今までそんなことは無かった。

松代にも自爆装置があるがそれが作動したとは報告が来ていなし、松代のMAGI二号は無事なのだから自爆はしていないことは明らかだ。

無論だがEVA参号機に周りを爆発させる力などない。

そして使徒にそんな力があるのなら戦闘時にも使つてきたはずだ。

「なるほど……そういうことか。」

「綾波特務一尉、気づかれましたか。さすがですね。」

と言つて長良は一つの報告書を差し出した。

報告書には明らかに何者かが爆発物を設置した痕跡があつたと書いてあつた。

それもEVAの近くに

「しかし、一週間以上も経過してるぞ。」

「諜報部がずっと隠し持っていましたから。」

（嫌がらせか・・・）

「下らん。諜報部に零課から警告しておけ。今後、こんな真似をしたら潰すとな。抵抗するようなら一人くらい構わん。リストから選んでおけ。」

「了解。」

（本部内でもこうなんだ・・・じっくりと炙り出さんと。）

幾人かSELLLEの手駒を始末しているが、なかなか成果を上げていない。

そうでない者でもこうなのだ。

頭が痛い問題だった。

そう考えをまとめたとき、コウスケは松代の事故に意識を向けた。

「これは明らかにEVAを狙ってるな。」

「はい。」

「内部犯だな。」

EVAの起動実験をするのだから嚴重に警戒されていた。

にもかかわらずEVAの近くに爆発物が設置された。

どう考えても内部の人間の仕業だろう。

「・・・第七ゲージの警備を嚴重にするんだ。」

犯人の目的がEVAを潰すことにあるのなら・・・
そう考えると初号機は危険だ。

サルベージが失敗すれば初号機は起動しなくなる。

初号機が起動できなくなるのは別に構わないが、シンジが助け出せなくなってしまう。
う。

それだけは阻止せねばならない。

「怪しいものが居たら捕縛しろ。抵抗するようなら始末しても構わん。捕縛したら背後関係を調べろ。・・・自白剤の使用許可も出す。」

「良いのですか?」

長良はためらうように聞いてきた。

自白剤など使えば廃人になることは確かだからだ。

「子供を平気で犠牲にするような奴らに遠慮する必要はない。それとレイたちの警護も嚴重にしてくれ。・・・直接狙われるかもしれない。」

長良は「了解」と答え部屋を後にした。

コウスケは煙草を取り出す。

「わかつているさ・・・酷いことをしているのはな・・・だが、レイたちはもつと幸福な人生を求めているんだ。・・・それが解らん奴が多いな。」

彼らにも言いたいことがあるだろう。

だが、こちらとて譲歩できないものがある。

これはエゴ同士のぶつかり合いなのだ。

「罪は俺が受けることになるだろうな……」

と言ってコウスケは先日レイに言ったことを思い出していた。

「自己犠牲か……人のことを言えんな……俺も……」

それでも貫き通す。

地獄に落ちたとしても

幾人の血が数滴加わることになっても

使徒との戦いが終わった後、レイたちが幸福な人生を歩めるように

そして自分もその中で生きていく

何故、自分みたいな存在が出てしまったのか

どうすればそれを阻止できるのか

そしてそういう人でも未来を考えることができる

いや、だからこそ考えなくてはいけないということ伝える

だから負けれない

第33話 歌と想い

十二日目

あれからというものの調査は一向に進まなかった。

相手が予想以上に用心深いのか

それとも大きな組織でも動いているのか

とにかくEVA初号機はいまだに妨害されていなかった。

コウスケは今、初号機にいた。

警備の状況を見に来たのであった。

傍らにはレイとアスカもいる。

コウスケが初号機を見に行くと言ったときについてきたのだ。

初号機の顔はすでに隠されており、いつもの角が復活していた。

ただ、いろんなケーブルが繋がれている点がいつもとは違う。

ふと気を周囲に回すと所々から零課の気配がする。

「さすがはシンゴだ。」

ここの警備にコウスケはシンゴを責任者にしていた。

シンゴはその体格とは裏腹に施設の制圧を得意としていた。他には重火器の扱いである。

ちなみにミツヒサは爆薬と接近戦、ユキは狙撃と機動力である。

ともかくコウスケはシンゴの仕事ぶりに満足していた。

「これにシンジが入ってるのよね・・・」

アスカが初号機を見ながら言う。

いつもより弱々しく聞こえた。

一方レイはじつと初号機を見ていた。

「サルベージの要綱はあと二日もあれば終わるそうだ。」

それはゲンドウの奮闘を物語っていた。

シンジを取り戻すと全職員に放送した後、ゲンドウはほとんど休まずにサルベージの指揮を執り続けた。

しかも他の職員には休憩を取らせる間にも自分でできることはすべてやっていたのだ。

それでもゲンドウは倒れることが無かった。

そんなゲンドウに他の職員が奮起したのは言うまでもない。

その結果、三十日はかかるとされていたサルベージの要綱を半分の期間で準備するに

至ったのだ。

「シンジの奴・・・帰ってくるわよね。」

「当たり前だ。」

「もし、ママみたいになったら・・・」

と言つてアスカは口を閉ざした。

何故そんなことを言つてしまったのか

そんな言葉がアスカの表情から読み取れた。

「ごめん、レイ。変なこと言つて・・・」

「大丈夫・・・それに碓君は必ず帰ってくる・・・そう信じてる。」

レイの顔が少し凛々しく見えた。

だが、コウスケにはわかる。

泣きたいのを堪えているのだと

泣かないのはゲンドウの影響だろう。

NERVの中で一番泣きたいのがゲンドウなのだから

そのゲンドウがシンジをサルベージするために頑張っている。

自分にできることは祈ること

泣かずに祈ることが自分のすることだと

レイがそう思っていることがコウスケには解っていた。

「あの時と立場が逆だな。」

第十二使徒の時はレイが弱気であった。

今はアスカが弱気になっている。

「そうね……よし！」

アスカが自分の顔を叩いた。

「レイや碓司令が頑張ってるのにあたしだけ弱気になつてられないわ。」

そしてアスカは初号機に向かって

「だから、必ず帰ってきなさいよ！」

と叫ぶのであった。

コウスケは思わず笑ってしまう。

「何よ。」

「いや、そういうところは美点だなと思ってるな。」

するとアスカは赤くなっていきながら

「な、何言ってるのよ！」

と言つてそっぽを向てしまう。

「素直に喜べばいいのに。」

と言うコウスケをレイはあきれ顔で見ている。

「どうした？レイ。」

「何でもありません。」

と言うレイの言葉には何か含むところを感じた。

（何かしたか？俺・・・）

だが、心当たりはない。

褒めただけなのに

・・・

十四日目

サルベージの要綱はすでに完成していた。

明日サルベージが行われる。

今日はサルベージの準備が強行軍で進んだのでゲンドウが技術局を中心に一日休暇を出したのだ。

ゲンドウも今日一日は休むそうだ。

頑なに断ろうとしたらしいが、冬月がそれを咎めたそうだ。

なんでも総司令が休まなきや他の職員が安心して休めないとか・・・

コウスケにも一日休暇の申し出が来たがそれを断った。

「何故だ？」

「技術局が離れるということとはそれだけ他人が近づきやすくなります。」

「そうか・・・シンジを頼む。」

そんなやり取りがあった。

実際コウスケはこの時が一番危ないと踏んでいた。

なので第七ゲージは零課総動員で警備についている。

定期的にコウスケのところに報告が入る。

今のところは異常なし

それでも油断はしない。

「課長、長良です。」

外から長良の声が聞こえた。

執務室のドアが開き、長良が入ってくる。

「どうした？」

「EVAを狙うもののおおよその見当が付きました。」

それは願ってもない情報だった。

「どうやら技術開発部の者の中でEVAに恐怖を抱くものがあるそうです。」

「・・・なるほど、だから消そうというわけか。」

EVAが怖いというのはコウスケにもある。

「それなりに優秀な者だな。」

優秀だからこそ気づけるとでもいうのだろうか。

「いまだに絞り切れていませんが・・・」

「構わない。・・・今日、技術開発部の者がいるか？」

「数名います。」

「そいつらの監視を怠るな。」

「了解。」

ふとコウスケは第四ゲージにある荷物のことが気になった。

(あれも狙われるかもしれない。)

そう思うとコウスケは第四ゲージに向かうことにした。

・・・

コウスケが第四ゲージに行くところには無傷のEVA四号機があった。

形は参考機と同じだが、銀色の塗装がされている。

何よりもS・機関が導入されているのが他のEVAとは違う。

四号機はただじつとそこに拘束されているだけだ。

これは先日アメリカのネバダから「持ってきたもの」だ。

ふとコースケは人の気配を感じた。

その方向に振り向くと白衣を着た男がいた。

髪はぼさついており、顔がやせていて目つきがよくないので嫌な雰囲気醸し出して
いた。

「失礼だが、あなたは？」

「俺は開発局一課の駿河ハジメだ。」

「俺は・・・」

「言わなくてもわかってるよ。作戦本部副部長さん。」

と言われたが何か含むものを感じた。

「ここには何の用だい？」

「最近、物騒ですから。」

「なるほど、ここの様子を見に来たってわけか。」

少し嫌なニヤつきであった。

「駿河さんはなんでここにいますか？」

「なあに、この実験素材の担当でね。休みがもらえるとこだったが、これを放置するのは怖くてね。」

彼が言うことは嘘ではなさそうだ。

だが、何かを隠している

そう言う風にコウスケは捉えた。

「担当者がいるなら大丈夫か。」

「そうだと言いたいが、なんせこの実験素材は気難しくてね。」

駿河は声を押し殺すように笑っていた。

「しかし、あんたも大変だね。」

「どういう意味ですかね？」

「あのファーストチルドレンの保護者・彼女のことを知っている人ならだれでもそう考
えるさ。」

何故か引つ掛かりを感じるが、駿河からレイの秘密を知っているようには見えなかつ
た。

「別にレイは感情を出すのが苦手なだけですよ。」

「ふくん。」

駿河は面白くなさそうに相槌を打つ。

(一体何が目的だ?)

「まあ、なにせよ俺は与えられた仕事をするまでだよ。じゃあな。」

と言って駿河は奥の方に去っていった。

コウスケは駿河が去った後も妙に嫌な気分が離れなかった。

・
・
・

十五日目

いよいよシンジのサルベージが始まる。

コウスケがNERVに行くとすでに技術局を中心に慌ただしい動きがあった。珍しくミスサトも遅刻することなく発令所にいる。

いまだにギプスは取れていないが、順調に回復しているらしい。

リツコは頭の包帯が取れている。

本来なら学校に行かなければならない二人も発令所にいた。

第二発令所のメインモニターには初号機の後背部が映し出されている。

初号機のエントリープラグは半射出のまま固定されていた。

「いよいよだな。」

コウスケのつぶやきに誰も答えなかった。

上にはゲンドウと冬月がすでに座っていた。

いつもと変わらない体勢だが、雰囲気がいっもの倍以上は重くなっていた。

『全探査針打ち込み終了。』

「自我境界。パルス、接続完了。」

伊吹からサルベージの準備が完了したことが報告される。

「了解。サルベージスタート。」

リツコが厳かに告げる。

「了解。第一信号を送ります。」

「EVA第一信号を受信。拒絶反応なし。」

「続けて第二、第三信号送信開始。」

『対象カテクシス異常無し。』

『テストルドー、認められません。』

サルベージの第一段階が無事に終了した。

それをレイ、アスカ、ミサトがじっと聞いていた。

「了解。対象をステージ2に移行。」

「碓君……」

レイが呟くように言う。

コウスケはレイの頭にポンと手を乗せた。

レイは幾分か緊張が解けたようだ。

レイが心配になるのも仕方がない。

サルベージの本番が始まったのだ。

発令所には先ほどとは違う緊張感が立ち込めていた。コウスケも思わず固唾をのむ。

EVAからのサルベージは過去に失敗しているのだ。対象者は碓ユイ

ふとゲンドウを見る。

ゲンドウはサングラスで表情が解らなかつた。

いや、わざと解らないようにしていた。

ゲンドウからしてみれば絶対に成功させたいところだろう。

失敗すれば初号機に妻と息子を奪われることになる。

それは今のゲンドウにとって最悪のシナリオだろう。

冬月もそんなゲンドウを心配そうに見ていた。

黙々と時間だけが過ぎていく。

それは無限に続くのではとコウスケは思い始めた。

不意に発令所にアラームが鳴り響く。

「どうしたんだ？」

「ダメです、自我境界がループ状に固定されています。」

「全波形域を全方位で照射してみて！」

リツコがすぐさまに指示を下す。

「・・・だめだわ、発信信号がクライン空間に捕われている・・・」

「どういうこと?」

リツコの言うことは専門的な用語なので意味が解らずミサトが聞いた。

「つまり、失敗。」

リツコの言葉にレイが表情をこわばらせる。

リツコもつらそうに顔をそらした。

「干渉中止、タンジェントグラフを逆転、加算数値をゼロに戻して。」

「はい。」

すぐさまにサルベージの中止が行われる。

「Qエリアにデストロイ反応、パターンセピア。」

「コアパルスにも変化が見られます! プラス0.3を確認!」

青葉と日向からさらなる報告が入る。

「現状維持を最優先、逆流を防いで!」

「はい。」

伊吹が操作する。

「プラス0.5、0.8・・・変です、せき止められません!」

「これは・・・なぜ・・・帰りたくないの？シンジ君・・・」

メインモニターにはぼこぼこと気泡が立っているエントリープラグの内部が映し出されている。

「EVA、信号を拒絶！」

「LCLの自己フォーメーション分解していきます！」

「プラグ内、圧力上昇！」

サルベージは失敗どころか最悪のシナリオとなっていた。

LCLも加熱すればそれだけ体積が増すのだ。

そのまま体積が増すとエントリープラグの破裂

それを阻止するためにエントリープラグにはある程度内圧が上がるとLCLを排出するようになってきている。

ここでLCLが流れ出る意味は・・・

「現作業中止、電源落として！」

「だめです、プラグがイクジツトされます！」

手遅れだった。

無情にもエントリープラグからLCLが流れ出る。

中にあつたシンジの服も流れ出ていた。

「いか・・・」

「シンジ！」

レイが叫ぶ前にさらに大きな声で叫ぶ者がいた。

コウスケがその方向を見ると座っていたはずのゲンドウが立っていた。そしてゲンドウは走り出す。

「碇！」

「碇司令！」

皆が叫ぶもゲンドウは止まらなかった。

「くそー！」

コウスケはゲンドウを追いかける。

こんな状況で取り乱したNERVの総司令が一人・・・

どう考えても危ない。

ゲンドウがどこに行くかなんてすぐにわかった。

・・・

コウスケが第七ゲージに行くときシンジの服の前にゲンドウがいた。

「・・・なぜだ・・・なぜだ！ユイ！・・・シンジ・・・」

ゲンドウはふらつく膝と手をついていた。

「なぜだ……なぜ、私を置いていくのだ……」

サングラスから一筋の水が零れ落ちる。

それが限界だったのだろう。

関を切ったようにゲンドウは泣き出した。

それをコウスケは黙ってみているしかなかった。

今のゲンドウにどんな慰めの言葉をかけられるのか

碓シンジは死んだ。

いや、正確には生きている。

初号機の中に

それは碓ユイと同じ末路である。

それを死んだと表現するのは間違いであろうか

コウスケには解らない。

ゲンドウの泣き声がゲージに響く。

「碓司令……」

どうやらレイも追ってきたようだ。

レイはそのままゲンドウのもとに行く。

「……レイ……これは私の罪なのか？私に対する罰なのか……」

レイは何も答えない。

「なら、なぜ私ではないのだ！．．．シンジ．．．」

レイはじつとシンジの服を見ていた。

そして初号機の方に向いた。

泣きたいのをこらえて何かを決心するように．．．

レイは目をつぶると口を動かした。

レイは歌を歌っていた。

その歌はコウスケが数日前に教えた歌だった。

シンジのために歌いたいと教わった歌を

シンジが居なくなつた今、歌つてどうしようと言うのか？

いや、だからこそ歌うのであろう。

もう聴いてもらえない

もう笑つてもくれない

もう名前も呼んでくれない

もう触れ合うこともできない

だからレイは歌うのであろう。

レイの気持ちをシンジに届けるために

誰もレイを止めなかった。

いや、むしろ聞き入っていた。

それはレイの思いが純粹だからだ。

レイの歌声がゲーヅに響く。

ゲンドウも泣き止んでレイの歌を聞いていた。

いつもの落ち着いた声であったが、なぜか惹かれる歌声であった。

長くも短くも感じた歌が終わる。

「……さよなら……」

紅い瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

……

一滴の涙にしては大きな水の音だった。

そもそも一滴の涙でこれほど大きな音はならない。

それに今の音はまるで人が水の中から這い出たような音だった。

コウスケは音が鳴ったほうに視線を向ける。

そこには仰向けに倒れた碇シンジの姿があった。

「シンジー！」

ゲンドウがシンジに駆け寄る。

「シンジ！しっかりしろ！」

「碓君?!」

レイもシンジのそばに駆け寄っていた。

コウスケはあまりの出来事に呆然としていた。

「……………はっ！救護班だ！救護班を呼べ！大至急！」

・
・

NE RVの病院で体の検査やDNA鑑定を行った結果、碓シンジ本人に違いはなく、
体も健康そのものであった。

ただ、記憶はどうなのかはわからなかった。

コウスケの目の前にはシンジがベットに寝ている。

傍らにはレイとゲンドウがいる。

アスカとミサトはレイとゲンドウに気を使って外に待機していた。

コウスケがなぜ病室の中にいるのか

それはレイとゲンドウの中にいてほしいと頼まれたからだ。

不安なのだろう

本当に碓シンジなのか

もし記憶が無ければそれは碓シンジの形をした別人なのだから

「・・・父さん・・・綾波にコウスケさん？」

「シンジ！私がわかるのか？」

「何言ってるんだよ。どう見たって父さんじゃないか。」

シンジは起き上がる。

そんなシンジを見てゲンドウは再び泣き始めた。

「ちよつと、どうしたの？父さん。」

「まあ、簡単に説明するぞ。」

コウスケはシンジに説明した。

使徒との戦いのなかでEVAに取り込まれたこと

サルベージが行われたが失敗したこと

奇跡的にシンジが帰ってきたこと

「そうですね・・・あれは夢じゃなかったんですね。」

「夢？」

「母さんにあつたんです。」

それにゲンドウがいち早く反応する。

「ユイにあつたのか？」

「うん。それで僕にもう戦わなくていいって言ってくれたんだ。そしたら僕もなんで

戦ってるんだろうって思い始めたんだ。・・ここに居ればもう戦わなくて済むって。」
なかなか耳が痛い話だった。

息子を愛する母ならそう思うだろう。

そしてその息子を戦場に追い立てるのは自分なのだから

するとシンジはレイに顔を向けた。

「でも、聞こえたんだ。綾波の歌が・・・」

シンジは微笑みながら言う。

「英語だよね？だから所々意味が解らなかったけど、綾波が僕のために歌ってくれたのはわかったよ。」

「碓君・・・」

「そしてなんで僕がEVAに乗るのか・・その意味がようやく分かったんだ。」

するとシンジは悲しそうな顔になって言う。

「ごめん・・さよならなんて言うなって言ったのに僕が言わせて・・・」

「・・・いいい。」

と言うとレイは微笑みながら

「おかえりなさい。」

シンジも

「ただいま。」

と返すのであった。

コウスケは思う。

人の純粹な思い

それが大きな力になると

レイはそんな思いをいだけるように成長した

それがただただ嬉しかった

・
・
・

あの後、レイが歌った歌はNERV内で流行することになる。

NERV職員にとってはレイが初めて歌った歌と言うのもあるが、シンジが戻ってきたきっかけの歌として伝わったようだ。

青葉などは休憩中にエアギターをしながら歌っているし、伊吹などはイヤホンをしてながら聞いているようだ。

日向はひそかに練習しているとのことだが裏はとれていない。

ゲージが監視されていることをレイは完全に失念していた。

そのため歌のことを言われると恥ずかしそうに俯いてしまう。

ゲージが監視されていることを失念していた人物がもう一人いた。

ゲンドウである。

ゲンドウはNERVで意外な支持を受けていた。

冷徹で息子に対しても冷たく人情などない人物と言われていたが、サルベージの準備期間やゲージで息子のために泣いたことなどが全職員に知れ渡ったのだ。

つまり息子のために頑張る親

それがゲンドウに対する評価であった。

一度NERVの職員がシンジが助かってよかったとゲンドウに言ったことがあった。

「ああ、ありがとう。」

とぶつきらぼうにゲンドウは返すのであった。

だが、それはゲンドウの照れ隠しではないのかと皆が思うのであった。

一方、シンジは親泣かせ、彼女泣かせと言われていた。

だが、そう言われながらもシンジは無事に帰ってきてよかったという皆の心がわかったのか少し嬉しそうにしていた。

コウスケのところには歌を教えてほしいという女性職員が何人かいた。

レイに歌を教えたというのがどこからか漏れたとコウスケは考えていた。

だが、レイが歌を歌うなど今まで考えられないことであったため、歌を教えたのは保護者であるコウスケ以外にないという簡単な推理で導かれたものである。

ともかくそんな職員にコウスケは

「レイから教えてもらってくれ。」

と返すのであった。

コウスケにとっては大事な思い出の一つであり、そう簡単に他人に教える気はないのだ。

そう言われた職員はかなり残念そうにしていたが・・・

・・・

「しかし、意外だな。ファーストチルドレンが歌うなんて・・・」

コウスケはNERVの通路で駿河と出会っていた。

と言うよりは駿河がコウスケを待っていたというのが正しいだろう。

「別に変ではありませんよ。」

「いや、以前の彼女なら歌なんて歌わないだろ。」

それはコウスケでもわかる。

「どうやら彼女が変わったのはあんたのおかげなんだな。」

「なぜそう思うのですか？」

「簡単な話だよ。あんたはファーストチルドレンの保護者だろ？」

「確かにそうですがね・・・でも、自分はきっかけに過ぎない。変わったのはレイ自身が

「そう望んだからですよ。」

確かにコウスケは変わるきつかけを何度か作ったかもしれない。

だが、それを逃さずにいられたのはレイ自身の功績であり、自分はあくまでもサポートをしたに過ぎない。

それがコウスケが考えることであつた。

「謙虚なんだな。まあいい。」

駿河が真面目な顔になる。

コウスケには解つていた。

そんなことをこの男が話に来るわけがないと

「EVAを壊そうとする者がいる。」

コウスケは身構えた。

「その様子だとやっぱり知つてたんだな？　・あんたが闇の執行部だつたわけだ。」

「闇の執行部？」

「俺たちの仲間が幾人かやられててね。俺たちの中でのコードネームさ。」

コウスケが追つていたSELLEの手駒が目の前にいる。

それはコウスケを緊張させるには十分であつた。

「そんなに警戒するなよ。第一、俺は上のことなんて知らんよ。俺は末端にすぎないか

らな。」

そういう駿河の言葉に偽りは感じられなかった。

「何が目的だ？」

「あんたこそ何が目的でこんなろくでもない場所にいるんだ？」

駿河の質問にはぐらかすこともできたがそれは躊躇われた。

駿河は本気で聞いているからだ。

「……子供たちの未来を創る。それだけだ。」

だからコウスケも本音で答えた。

駿河は意外そうな顔をした後、笑い始めた。

「意外だな。そんな青臭いことを本気で言うやつがいるなんて……」

駿河の言いようは大変失礼であろう。

何故か不愉快な思いはしなかった。

「だが、納得もした。」

一体何を言いたいのだろうか

コウスケはそう思うと駿河が口を開く。

「ファーストチルドレン……この言い方は失礼だな……綾波レイがあんな歌を歌える訳がわかったよ。」

「どういふことだ？」

「やっぱりあんたのおかげつてことさ。・・碓司令や赤木博士ならあんな風にならん
ろ。」

何故か駿河が自分を褒めている

そうコウスケは感じた。

「じゃあ、俺は行くな。」

「どこに？」

「俺は組織を裏切ったんだ。」

NERVのことを言っているのか

それとも・・

「あんたの考えている通りさ。NERV以外の組織を裏切った。・・たつた今な。」

駿河は困ったような顔になる。

「何故？」

「嬢ちゃんの歌を聞いてな・・俺はなんでエンジニアになったのか思い出したのさ。」

駿河は寂しそうに言う。

「初心を忘れるな・・それが今ではこんな風になっちゃったがね。・・それでもまだ戻れると思うからさ。」

「それなら・・・」

「おっと。それ以上は言うな。．．自分の身くらい自分で守るよ。」

駿河は真面目な顔を崩さない。

目からは強い決心が見えていた。

「．．もう会うこともありませんね。」

「だろうな。じゃあ、俺は行くよ。頑張れよ、綾波レイの保護者さんよ。」

駿河は白衣を翻しながら去っていく。

．．．

技術開発部の中から行方不明者が三人もでた。

一人は駿河であろう。

もう二人は駿河の協力者であったのかもしれない。

長良は追跡するように言うがコウスケは止めた。

「何故ですか？」

「もう彼らは俺たちに不利益をもたらさない。」

「．．．わかりました。」

「それよりも残りを洗い出してくれ。」

長良は了解と答えると執務室を後にした。

「・・・こんな風になつてくれれば一番楽なんだけどな。」
人を殺さずにいられるのならそれに越したことは無い。

だが、きれいごとだけで済むのならこんな苦勞はしない。

「さて、お仕事お仕事・・・」

コウスケは決裁仕事に身を任せる。

駿河がどうなつたかは知らない。

だが、大胆不敵な笑みを浮かべてどこかで生きているだろう。

何となくコウスケはそう思うのであつた。

第34話 黒幕

「ここはどこだ？」

「確か俺は寝ていたはずだが」

「……………」

「わからん」

「第一、どこか知りたくても真っ白じや」

「……………」

「拉致？」

「と言うわけでもないな」

「……………」

「……………」

「……………」

「誰だ！」

「あら、こんな状況でわかるなんて……………」

「こんな状況だからわかるんだよ」

「ふうん。」

姿はほんやりしていてよくわからんが、なんとなくレイに似てる・でも違うなへへ、あの子と区別できるんだ。」

当たり前だ

それができなくて何が父だ

「やっぱり面白いわね。」

お前は誰だ？

「あら、つれないわね。私とは一度会ってるのに……」

？

「それに近くからずっと見てたわよ。」

……ストーカーは勘弁してほしいな

「酷いこと言うわね。第一、一緒に暮らしてるじゃない。」

一緒に？

どういうことだ？

「どういうことかしらね。」

……何が目的だ？

「私の？ ……フッフ、知りたい？」

.....

「生命の実をアダムから奪い返すこと。」

生命の実？

「そう。それが欲しくてここまで追ってきたのよ。」

意味が解らん

「別にいいのよ。今は他の目的があるから……」

おい！

待て！

お前は誰なんだ！

「すぐに会えるわ。」

おい！

.....

「はっ！」

コウスケは飛び上がる。

時計を見ると起きるにはまだ早い時間だ。

もつともコウスケが起きる時間は他人に比べれば早い方だが.....

「.....今のは.....夢？」

久しぶりにコウスケは夢を見たなと思った。

コウスケが前に夢を見たのはもう5年ほど前のことである。

だが、夢にしては妙にリアルだった。

「一体なんだったんだ？」

何かを告げるものだったのか

考えてもわからない。

生命の実

S・機関の別名

そして、アダム

.....

覚えている単語が頭に浮かぶ。

「解らん。」

もう一度眠ろうと考えたが、妙に頭がすつきりしていて眠気が襲ってこない。

...

コウスケは着替えてリビングに移った。

変な体験をしたため、いつものトレーニングは中止し、ぼーっと考え込んでいた。

だが、いくら考えてもわからないものはわからない。

時計を見ると7時になっていた。

そろそろレイを起こさないといけない。

そう思っているときに人の気配を感じた。

「珍しいな。一人で起きるなんて。」

返事が返ってこない。

寝ぼけているようではなかった。

学校の制服を着ているのだから

「なんだ？もう行くのか？」

「……はい。」

「朝食は？」

「いりません。」

「そうか……」

どうやら玄関に向かうようだ。

「………とこころで「ついいいか？」

「………はい。」

「お前さんは誰だ？」

それはとつさにコウスケを見る。

「どういう意味でしょうか？」

「そのままの意味だ。……誰だ？」

「綾波レイですが？」

「俺には解るぞ。」

「意味が解りません。」

「そうか……」

コウスケはグロツク17を取り出し、撃つ。

コウスケは違和感を感じていた。

レイとは違う何かをレイらしきものから感じていたのだ。

いくらレイと同じ姿、声をしていてもレイとは違うとわかっていた。

最初から当てるつもりは無い。

威嚇射撃だった。

抵抗は無意味であることを知らせるために

そして情報を引き出すために

弾丸はレイらしきものを通り越して後ろの壁に当たるはずであつた。

「なに!？」

コウスケは立ち上がる。

目の前に予想できなかつたものがあつた。

弾丸は六角形のオレンジ色の壁に阻まれていた。

その壁はよほど末端でない限りNERV職員ならよく知っているものである。

当然コウスケも知っている。

「ATフィールド……」

「リリンはそう呼んでいるのよね。……でもわかっているはずよ。これは誰もが持つ心の壁であることに。」

レイと似ているがやはり違うとコウスケは感じる。

コウスケはとっさに臨戦態勢に入る。

ただの人がATフィールドなんて使えるわけがない。

もちろんレイも

いや、人の形はATフィールドで作られているのは知ってるが、それを目に見えて使

うことはできない。

それが使えるのはEVAと……

「まさか……使徒?!」

「それもリリンがそう呼んでいるのよね。……あまり好きではないけど。」

使徒が怪しく笑う。

コウスケは悪寒を感じていた。

何故使徒が……

もしかしたらレイに使徒が寄生している？

あり得ない話ではなかった。

MAGIにもEVAにも寄生したのだ。

人に寄生しないなんて言えるだろうか

コウスケは何とか逃げ道を探す。

だが、どこにも逃げられないことを知った。

どこに逃げても自分が殺されるイメージしかわかない。

使徒は相変わらず怪しく微笑んでいる。

ならば……

コウスケは覚悟を決める。

使徒とはいえ元はレイなのだ。

レイにサードインパクトを起こさせるわけにはいかない。

それをレイは望んでいない

ならば相打ちでも

.....

.....

.....

ぐうぐ

気が抜ける音がした。

こんな非常時に腹の音を鳴らせるほどコウスケは間抜けではない。

と言うことは…

「もうエネルギーが切れたの？ リリンの体は不便ね。」

なんて使徒が言うのであった。

「まあいいわ。何か無いの？」

「はあ？」

「おなかすいたのよ。」

「なんで俺がそんなものを準備しなきゃいけないんだよ。」

敵に塩を送るほどお人よしではない。

そう考えるコウスケであった。

「別にリリンを殲滅するつもりはないわ。……特にあなたはね。」

どうやら嘘ではないようだ。

コウスケは自分にかけられたプレッシャーがなくなるのを感じていた。

少なくとも目の前の使徒に敵意は無いようだ。

「ねえ、早くしてよ。」

使徒は頬を膨らませながら言う。

普段のレイでは見られない表情だ。

「……………少し待ってろ。」

完全に毒気を抜かれてしまった。

コウスケは自分の評価にお人よしとつくだろうと考えた。

「あれ？ 綾波はどうしたんですか？」

玄関でシンジと出会った。

レイを迎えに来たのだろう。

後ろにはアスカもいた。

「ああ、レイは風邪をひいたらしくてな。」

「大丈夫なの？」

アスカが心配そうに言う。

「大丈夫だ。何かあったら赤木のところに連れていくから。」

「でも……」

よほどレイが心配なのだろう。

シンジが食い下がる。

「心配なのはわかるが、ちゃんと学校に行かないとレイが気を遣うぞ。……碓君が私の

せいでつてな。」

「……わかりました。綾波によりしく伝えてください。」

「とつとと元気になるように言っというてね。」

「おう。」

シンジとアスカは登校していった。

「あの子がそうなのね？」

いつの間にか使徒が来ていた。

(こいつ……できる。)

「何のことだ？」

「この子が想ってるリリンって」

「なんで知ってるんだ？」

コウスケは驚いた。

使徒が人の心を理解できるなんて考えてもなかったからだ。

「フッフ、まずはエネルギーを補充してからね。」

そう言って使徒は微笑みながらスキップでリビングに戻っていく。

食事をできるのが相当嬉しいようだ。

コウスケもため息をつきながら戻って行った。

・
・
・

「さて、エネルギーの補充は終わったし……」

コウスケの目の前には満足そうにする使徒がいた。

コウスケは少し胸やけを起こしている。

とんでもない量の食事を使徒が行ったからだ。

肉も普通に食べていた。

食事の量は少なくともコウスケの二倍は食べていた。

どこにそんなに入るんだと疑問に思わざるおえない。

冷蔵庫の食料はすべて無くなった。

「あなたの質問に答えてあげるわ。」

相変わらず使徒は微笑んでいる。

(意思疎通はできるみたいだからな。)

「お前さんは誰だ？」

「そんなに知りたいの？ 私のこと。」

使徒はニコニコとしながら言う。

「何を言ってるんだ。使徒じゃ嫌だと言ってたのはお前さんだろ？」

「敵かもしれないの？」

「だとしたら俺はもう生きてないだろうよ。」

今までの使徒を見てきて人が生身で太刀打ちできるものではないことをコウスケは知っている。

目の前にいる使徒もおそらく同等の力を持っているに違いない。

なら、人を殺すなど造作でもないことだろう。

それに一度、背後を取られたのだ。

だが、自分は生きている。

敵意が無いというのをそう言うところからコースケは判断していた。

もつとも今のところではあるが…

「フフフ、予想通りね。……私はこの子ともと一つだったのよ。」

「どういうことだ？」

レイと一つだったと言われてもよくわからない。

「解らない？ ……あなたとは一度会ってるんだけどな……あつ、今日のことを含めたら二度ね。」

コースケはますます解らなくなっていた。

第一、使徒と会ったと言われてもピンと来ない。

「最初はあなたの他にリリンが二人いたわね。」

自分を含めて三人で使徒の前で？

まったくわからない。

「そんなことがあったか？」

「あったわよ。その時あなたは……えくと、煙草だっけ？ それを吸ってたじゃない。」

使徒は首を傾げながら言う。

三人でいて煙草を吸っていた？

コウスケは大体一人か二人の時、あるいは大人数の時によく煙草を吸う。

三人でいる時に吸ったなんてあったか？

と考えたとき一つ思いついた。

確かにその時吸っていた。

傍らには加持とミサトがいた。

そしてレイと一つだったという使徒の言葉

「……もしかして、リリスなのか？」

「やっとなわかってくれたの？」

使徒——リリスは嬉しそうに言う。

「でもリリスの魂はレイと同じはずじゃ……」

「確かにそうだったわ。でもいきなり離れ始めたのよ。」

いきなり離れたとはどういうことか？

「この子は自分が無かった。だから私と一つになれたのよ。」

最初のレイを思い出せばわかる。

確かにあの時のレイは自分が無かった。

「でもね、時々揺さぶられてたのよ。それでこの子と私は離れていったのよ。」

レイに揺さぶりをかけられる人物

「シンジ君か？」

「シンジ？ ……ああ、あのリリンね。違うわ。確かにあのリリンも揺さぶってきたけど、あなたほどではなかったわ。」

「俺？」

「そう、この子が変わる時いつもあなたがいたわ。」

その時、コウスケは今はいない元NERV開発局一課の駿河が言ったことを思い出していた。

「完全に離れたのはこの子とあなたが暮らし始めてからね。」

ともかくリリスとレイが別であるのはわかった。

となると……

「レイはどうしたんだ？」

もしかしてリリスに乗っ取られて消えてしまったのか

そんな恐ろしい考えが頭に浮かぶ。

「ちゃんというわよ。」

「信用できんな。」

「そんな無意味な嘘なんてつく必要があるのかしら？」

そう言うことでコウスケを安心させて油断を誘うとも考えられるが、意味がない。どう考えてもリリースの方が力は上なのだから。

「……あら、起きたみたいね。」

「そんなこと言われてもわからん。」

傍目からだどリリースが怪しく微笑んでいること以外変化はない。

それでレイが起きたなんて分かるわけがない。

「……特務一尉、おはようございます……だつて。」

「暢気だな……」

「私もそう思うわ。……特務一尉、体が動きません……だつて。」

おそらく寝ぼけているのだろう。

覚醒していてもリリースに体を取られてるなんて考え付かないだろうが……

「俺の声はレイにも聞こえるのか？」

「ええ。」

「……さつさと起きて状況を整理しろ。寝坊助。」

リリースは困ったような顔になる。

「あなた誰って、今頃気付いたの？」

「いや、まず自分の体がとられてるなんて思わないだろ。」

ふとりリスが真面目な顔になる。

「ほんとに変わったわね。」

「いきなりなんだ？」

「この子動揺しているわ。無に帰る時が来たの？ ……つてね。」

コウスケは再び身構える。

無に帰る

久しく聞かなかった言葉だ。

それは人類補完計画の発動を意味している。

「それが望みだったのに……変わるものね。だからあなたとは一つになれたのよ。」

(だからレイと一つに？ ……どういうことだ？)

「この子は魂が希薄だったのよ。だから生きることにはさほど執着しなかった。そこに私が入り込んだってわけ。そっちの方がやりやすいと思ったのよ。……この子には代わりの体があったことを知っているでしょ？」

「ああ。」

「でもそれは間違い。元々他の体にも魂はあったのよ。ただ、希薄だから動けないだけ。」

その言葉にコウスケはLCIに浮かんだ綾波レイたちを思い出していた。

よくよく考えると綾波レイたちはうつつすらと笑みを浮かべていた。

虚無にまみれていたが、笑みには変わらない。

「この子は二人目とか考えているけど、元々違う個体だったのよ。……まあ、動いているのが一人だけだったから他の体には魂が無いと判断されたみたいだけどね。」

不気味な笑みを浮かべるリリス

ぞつとしながらもコウスケは聞かすにはいられない。

「リリスは何がしたいんだ？」

「あなたは知っているはずよ。」

「なんで俺が知っているんだよ。そんな訳……」

と言ってコウスケは思い出す。

朝に見た夢を

そしてリリスはコウスケに二度会っていると saying していた。

その時に言っていたことは

「……生命の実をアダムから奪い返す。」

「ちゃんと覚えてるじゃない。」

「それとレイになんの関係があるんだ？」

ゲンドウの補完計画にレイが関係しているのは知っている。

もしやリリスもそれを知っているからレイに入り込んだのか

そうコウスケは考えていた。

「あなたたち……リリンが人類補完計画と呼んでいるもの……あれは私が生命の実を手に入れるためのものよ。それで私が直接奪うためにこの子に入ったのよ。偶然にもこの子はその計画の要だったんだけど。」

「はあ？」

コウスケはリリスのとてもない発言に間拔けな返し方をしてしまった。

レイに入ったのは偶然だった。

それが予想外過ぎたのだ。

「ほんとならもうちよつと早く手に入れるつもりだったのに……リリンが邪魔しちやつたからね。」

リリスはさも困ったという表情を浮かべていた。

「まったく、そのためにリリンを生み出したのに……」

「ちよつと待て。もうちよつと早く？ ……それと俺たちを生み出した？」

人がリリスから生まれた第十八使徒であることは知っている。

だが、リリスの口ぶりからだとどうやら目的があつて生み出したようだ。

「そうよ。えくと……セカンドインパクト? ……そう呼んでたっけ。あれが成功していたら私の目的は果たされたのに……」

「なんだと?」

「まっ、それが失敗してもいいように第二の計画もあつたわけだし。」

この話を信じるならセカンドインパクトから始まる一連の出来事はこのリリスが仕組んだことになる。

つまりは人類はリリスの掌で踊らされていた。

リリスが生命の実を手に入れるために

「それも途中まではうまくいったのよ。それなのにこの子が離れちゃったから……」

「なんで離れたんだ?」

「この子がリリンとして生きたいと強く願ったからよ。元々希薄だった魂が強くなっちゃったから私のはじき出されたのよ。」

そしてリリスはコウスケを見ながら

「あなたのせいだ……」

そら恐ろしいほど低い声だった。

コウスケは悪寒を感じる。

だが、動けない。

動けばやられる。

そう感じていた。

無言のプレッシャーがコウスケを覆う。

コウスケは汗をかくこともできなかつた。

「……俺を殺すつもりか？」

なんとかして声を出すことに成功した。

「そのつもりだったんだけどね……今となつてはどうしようもないし。」

途端にプレッシャーが消えた。

コウスケは内心ほっとしていた。

「アダムの子らを殲滅するリリンが気になり始めてね……不完全だと思つていたのに

……」

「不完全？」

「そうよ。リリンは無限に生きられない。不完全なのよ。だから生命の実を手に入れて完全なものを作ろうとしたんだけど……」

「なんだ？ 今は違うのか？」

「リリンはアダムの子に勝てるわけがないのよ。あの子たちは無限に生きられるから……でもあなたたち、リリンはアダムの子に勝利している。」

NERVは今まで12体の使徒を葬ってきた。

無限のエネルギー持つ使徒相手に

それを言いたいのであろう。

「そんなリリンに興味を持ったのよ。」

にこやかにリリスは告げた。

「リリスが人に興味を持ったのはわかった。だが、なぜ今更出てきたんだ？」

もつと早く出てきていればリリスの計画は成功していたのでは

そんな疑問がコウスケにはあつた。

「アダムの子じゃダメよ。私が欲しかったのは生命の実なんだから。」

「何がどう違うんだ？」

「う〜ん……料理が欲しいんじゃないじゃなくてレシピが欲しいのよ。」

「なるほど。」

少し解りづらい例えだったが、コウスケには何とか理解ができた。

つまるところS・機関が欲しいのではなくて、その設計図が欲しいということだろ
う。

S・機関を手に入れば複製ができるだろうが、しよせんはコピーである。

本物とは言えない。

「最初から出てきて協力すればよかつたんじゃないか？」

「それも考えたんだけどね。無理やり入り込んだから体になじんでなかったのよ。最近になつてようやくなじんだのよね。」

「ふ〜ん。」

「人ごとね。……私になじんだきつかけつてこの子のおかげなのよ。」

「この子つて……レイのことか？」

「本当に驚いたんだから。自爆なんて……」

その言葉を聞いてコウスケは先の使徒戦でレイが自爆特攻したことを思い出した。

そのあとで感じた違和感も

「レイが無傷だったのはリリスのおかげか。」

「そうよ。いくらなんでもあの状況で無傷なんておかしいじゃない。必死に守ったわ

よ。」

「そうか。」

「それと……え〜と、あのリリン……碇シンジだっけ？ ……あの子をもとに戻したのも、

私。」

「なに!?!」

「え〜と……初号機だっけ？ ……あれは私の体を使ってるから干渉できたのよ。」

他のEVAも体を動かす程度なら干渉できるとリリスは補足した。

つまるところレイとシンジはこのリリスに助けられた事になる。

「でも、なんでそこまでしてくれたんだ？」

「この子の場合、もう代わりの体が無いから死んだら私は本体に戻ることになるわ。そうなったらリリンを近くで見られないじゃない。それと碇シンジの場合はあの子が戻らないとこの子がどうなるか解らなかつたからね。」

「結局は自分のためと言うことか。」

「そんなところね。」

リリスのためと判断されなかつたら二人は助からなかつたかもしれない。

だが、現実では助かっている。

「二人を助けてくれてありがとう。」

と言う言葉がコウスケの口から自然に出た。

「あなた変ね。」

「そうか？」

「私のためにやっただけよ。」

「理由はどうあれ二人が助かった事実には変わりがないからな。」

するとリリスは静かに笑っていた。

「やっぱりあなたは面白いわね……好意に値するわ。」

「好意？」

「好きってことよ。」

……

……

……

……

暫し沈黙が続く。

コウスケの反応にリリスは頬を膨らませながら言う。

「何よ。」

「その体で言われてもな……」

リリスとはいえ体はレイなのだ。

(レイなら嬉しいんだけどな……)

少しはゲンドウと冬月の気持ちがあわかったかもしれないとコウスケは思った。

「なら私の本体ならいいの？」

「それも止めてくれ。」

コウスケは思わず想像してしまった。

コウスケの前にあの白い巨人が立っていて同じことを言う場面を

少し、いや、かなり不気味であった。

リリスはかなり不満そうにしている。

「む、何なのその反応……」

「どういう風に返せばいいんだよ。」

「ありがとうとか俺も好きだよとかいろいろあるじゃない！」

「はあ？ 何言ってるんだ？ どうして俺がそんなこと言わなきゃいけないんだ。」

まったく理解できなかった。

第一、リリスと話すのは今日が初めてなのだ。

リリスは不満そうな目でコウスケを見ており、頬がかなり膨れていた。

大凡4 cmくらい

レイであれば最高記録であろう。

よく見ると目が潤んでいた。

「うう、せつかくこの子の隙をついて出てきたのに……」

さめざめと泣き始めるリリス

（なんだ？ 俺が悪いんじゃないよな？）

「ひどい……」

(ひどい？ 一体どういうことだ？ まったくわからん。……状況がつかめない。)
コウスケは完全に混乱していた。

「最初、この子と違うことを気づいてくれた時は嬉しかった……でも、やっと話せると思ったら、銃を向けてくるし……しかも躊躇なく撃ってくるし……」

(AWACS、状況を教えろ！ ……作戦司令部！ 応答してくれ！ ……MAGIでもいい！ いったいどういう状況なんだ！ ……おい、戦友たち！ 俺を見捨てるな！

……加持！ お前ならわかるのか？)

もはやコウスケは考えが纏まらなかった。

何となく加持から

「女の子を泣かせるのは重罪じゃなかったのか？」

と咎められた気がする。

そもそもリリスは女なのかと言う疑問が出てくるがそんなことは気にしてられなかった。

それ以前に人なのかと言う疑問もあるのだが

「あ………その………なんだ………すまん。」

「じゃあ、責任とつてくれる？」

(責任？ ……ああ、そう言うことか。)

「解った。」

そう言うとりリスは嬉しそうに微笑む。

「碇司令には説明するから。ちゃんと俺が説明する。」

「へ？」

「間違つてもりリスが実験とかに使われないようにする。だから安心してくれ。」

（そりや、不安だよな。いきなりりリスが出てきましたなんて言われても。……レイの中から見ていたらしいから俺のことを信頼して出てきたんだろ。）

それであんな扱いをされたら

そうコウスケは考えていた。

「うう、わかってない……」

「なんだ？ まだ足りないのか？」

（うむ……戸籍を作る必要があるのかな？ ……でも、体はレイだからな……難しい問題だ。……二重人格として登録されるのか？）

「もういい……」

りリスはそっぽを向いてしまう。

「……レイって言ったわね。あなたは優しいわね。」

何となくレイがりリスを慰めていることはわかった。

「それに比べて……」

リリスがキツと睨んでくる。

思わずコウスケはひるんでしまう。

レイより怖いとコウスケは思った。

「なんだよ……」

「……………鈍感。」

「なんだそれ？」

「ふんー」

誰かこの状況を説明してくれ

それがコウスケの心情であった。

もつとも第三者から見れば簡単に把握できるものであると思われるが

とにかくコウスケは謎の居心地の悪さを感じていた。

その原因はどこにあるのか

それは読者に判断してもらいたい。

第35話 綾波と第二使徒

「へえ、リリンのすることは本当に面白いわね。」

リリスはカートレインの外に見えるジオフロントを見ながら言う。
心なしか嬉しそうに見えた。

あの後、レイの慰めによりリリスは復活した。

コウスケはよくわからない雰囲気息が詰まりそうだった。
ただ、

「レイの言うとおりね。こんなことで諦めちゃダメよね。」

と言っていたが何の事だかわからない。

生命の実を手に入れることではないというのはわかったが、いったい何を諦めないのかコウスケには全くわからない。

それとリリスはコウスケのことを名前で呼ぶことにした。

「だから私のことも……リリスだから……リツちゃんと呼んでね。」

とにこやかに言われたがコウスケは断った。

リツちゃんと呼ばれる人物がすでにいるからだ。

コウスケは喫煙仲間の二人を思い浮かべていた。

ついでに赤いジャケットを着た女性も思い浮かべたが……

だからコウスケもリリスを名前で呼ぶことにした。

リリスは大変不満そうであったが、不承不承ながら同意した。

「そこまで抵抗するなら、使徒と呼ばせてもらう。」

「それは嫌！うう、コウスケのいじわる……」

（俺が悪いのか？ ……違うだろ。）

とコウスケは思ったが、口には出さなかった。

……………

ともかくNERV本部に来た理由はリリスのことを報告するためである。

自分一人ではどうしようも無かったのだ。

ここに来るまでにコウスケはリリスにレイと代われるのか聞いてみた。

「どうしてそういふこと言うの？」

と頬を膨らませながら言われたが、代わることはできるとリリスは返答した。

元々の体の持ち主はレイなので主導権はレイにあるそうだ。

シンジが帰ってきた安心感から隙が生じたそうでその隙をリリスが利用したそうだ。

コウスケはそれに安心するがレイは出てこなかった。

レイが拒んでいるらしい。

「やっぱりレイは優しいわね。」

とリリスが言うがコウスケには全く分からない。

カートレインは黙々とNERV本部に入って行った。

・
・
・

「綾波特務一尉、いったいどうした。」

総司令執務室でゲンドウがコウスケに問う。

ゲンドウはいつものポーズであった。

傍らには冬月も立っていた。

ふとテーブルが置かれているのに気が付いた。

テーブルには将棋盤が置かれていた。

どう見ても片方が不利に見えた。

あともう一駒あれば不利な方は優勢になれるだろう。

そんな展開に持つていけるだけの力量が有利な方にはあるようだ。

「実はレイの件で話があります。」

「レイの? …何かあったのか?」

「綾波特務一尉がおぶさっているのと何か関係が有るのかね?」

ここに来るまでの間コウスケはリリスをずっとおぶさっていた。
コウスケは歩くように言ったのだが

「レイは風邪をひいているのでしよう？　ならおぶさったほうが自然じゃない？」
と言われたのだ。

なので仕方なくコウスケはおぶさることにしたのだ。

何故かりリスは喜んでいたが、その理由がわからない。

ちなみにNERV職員はその光景を見て、やはり親ばかになるのではと囁いていた。
「それは本人に直接言ってもらいましょう。」

この時コウスケは朝、自分が言ったことを完全に忘れていた。

最後に起きた騒動でそれどころではなかったのだ。

コウスケは降ろそうとするがリリスの手に力が入るのを感じた。

「……おい、降ろせないだろ。」

そのまま降ろすとコウスケの首が絞まってしまうのだ。

「え〜」

「え〜、じゃない。」

「ぶ〜」

「ぶ〜、でもない。」

「む〜」

「……………いい加減にしろ。」

しぶしぶりリスが降りた。

「レイなのか？」

コウスケとリリスのやり取りを見ていた冬月が聞いてきた。

「レイだったと言う方が正しいわね。」

「どうということだ？」

ゲンドウが不思議そうに聞いてきた。

「あなたね。レイを産みだしたのは。」

「いったいどうしたのだ？レイ。」

「コウスケはすぐにわかってくれたのに…」

と言ってリリスは拗ねてしまう。

「……………普通、他人と入れ替わってるなんて気づくわけないだろ。」

そう言うとりリスは嬉しそうに

「やっぱりコウスケだからわかってくれたのね。」

と言った。

心なしか目が輝いているように見えた。

「当たり前だ。」

とコウスケが言うときさらに嬉しそうになった。
のだが……

「それが出来なくて何が父親だ。」

と言うコウスケの言葉にリリスはがつくりしていた。

「どうした？」

「……何でもないわ。」

リリスはいじけて床を軽く蹴っていた。

「全く分からないのだが……碇は分かるか？」

「……分かん。」

ゲンドウと冬月は置いてけぼりになっていた。

傍目から見ればレイがいじけているとしか見えない。

最もレイがいじけている姿なんてかなり珍しいが……

「何でもなくないだろ。第一、何をいじけてるんだ。」

「別にいじけてないもん。」

「お前な……」

「ウオツホン。」

コウスケが言葉が続けようとしたところに冬月が耐えかねて咳ばらいをする。

「綾波特務一尉、一体どういふことなのかね？」

「すみません、副司令。……ほら、自分で説明しろよ。」

コウスケはリリスに向かって言うが、つーんと顔を背けられてしまう。

「はあく、申し訳ありません。自分が説明します。」

「うむ、綾波特務一尉。説明しろ。」

ゲンドウが強く言ってきた。

少しご立腹のようだ。

「彼女はリリスです。」

「……………何を言っている。」

「ですから、彼女は第二使徒のリリスです。」

「綾波特務一尉、ここでの偽証は死に値するぞ。」

冬月もイライラを隠せないようだ。

こう見えてもゲンドウと冬月は大変忙しい身であった。

コウスケが緊急に会いたいと申し出たのでわざわざ時間を作ったのだ。

だというのにコウスケから出た言葉は妄言と取られてもおかしくないことだ。

これで怒るなど言うほうが無理であろう。

最もコウスケが来るまで何をしていたかは将棋盤が語っているが……

「ほら、お前が言わないから俺が疑われてるじゃないか。」

「だって……」

リリスはまだいじけていた。

床つま先を押し付けてくりくりと回していた。

「そうしたいのなら別にいいが、俺が死んでもいいならな。」

これは嘘である。

ゲンドウと冬月がコウスケを殺すなどあり得ない。

そんなことをすればレイの処遇をどうするか、また作戦局零課をどうするのかなど問

題が発生する。

だが、そんなことはリリスにはわからない。

そのため冬月の先ほどの言葉に便乗したのだ。

「それは嫌!」

なかなかの剣幕であったが、コウスケは成功したことを確信した。

「なら自分で説明してくれ。」

「分かったわよ……」

リリスはゲンドウと冬月に向き合った。

「さつきコウスケが言った通り、私はリリースよ。」

「信じられん。レイ、悪戯は大概にしろ。」

「そんなこと言われて信じろというほうが無理な話だな。困った悪戯だ。」

「むゝ。」

(まあ、普通はそうだよな。)

「リリース、朝にやったことをもう一度やるぞ。」

「……あれをやるの？ 嫌よ。」

「あれをやるのが一番手っ取り早い。」

「あれをやるとおなかすくのよ。」

「……後で腹いっぱい食わせてやるから。」

「……わかったわ。」

コウスケはリリースの了承を得てグロツク17を取り出す。

「何をする気だ！ 綾波特務一尉！」

「止めたまえ！」

ゲンドウと冬月が慌ててコウスケを止めに入る。

傍目から見ればコウスケがレイを殺そうとしているようにしか見えない。

そんな二人に気を留めず、コウスケはグロツク17を放つ。

銃弾はリリスの作るATフィールドに阻まれた。

「ATフィールド……」

「………使徒！ まさかレイに！」

ゲンドウと冬月がUSPを構えた。

それを見たコウスケがリリスの前に立つ。

「何をしている！ 綾波特務一尉！」

「どきたまえ！ 何故、使徒をNERVに入れたのだ！」

「二人とも少し落ち着いてください。」

コウスケもひやひやしていた。

二人の行動が予想外だったのだ。

「致し方あるまい。」

（攻撃予兆！ ……本気だ！）

ゲンドウの言葉を合図に二人は発砲する。

コウスケは目を瞑ったが、痛みや暑さが感じられなかった。

代わりに何かがはじかれるような音があった。

コウスケが目を開くと目の前にATフィールドが張られていた。

それに二人は驚いていた。

コウスケも不思議に思ったが、それよりも二人を落ち着かせるのが先だと判断した。

「とにかく落ち着いてください。リリスの話を聞いてから判断してください。」

「むう……」

「……わかった。」

A Tフィールドがあるので抵抗は無駄だと悟った二人はUSPをしまった。

「ほら、話してくれよ。」

「おなかすいた。」

何とも気が抜ける声でリリスは答える。

先ほどの緊張感が一瞬で吹き飛んでいったようにコウスケは思えた。

「もう少し我慢しろ。」

「ぶう……」

リリスはコウスケの前に出た。

「お前が使徒であることはわかった。…本当にリリスなのか？」

「さつきからそう言ってるじゃない。」

「何故レイの体に？」

「元々一つだったからよ。」

そう言ってリリスは話し始めた。

朝、コウスケに話した内容と同じである。

リリスの話の内容にゲンドウと冬月は呆気にとられていた。

「信じられん……」

「信じるも何もこれが事実よ。」

「こんなことのためにユイが……」

ゲンドウは意気消沈としていた。

無理もない話だった。

リリスの計画でゲンドウは妻を失ったのだから。

それに人類補完計画を発動しても意味がないと知ったのだから。

「ユイ？ ……ああ、あれ………えくと、初号機だっけ？ 其中にいるあのリリンね。」

「何故知っている。」

「レイが二回あれに触れているでしょ？ その時に知ったのよ。」

リリスは怪しく微笑みながら続ける。

「私なら取り出せるわよ。」

その言葉にコウスケは僅かにピクリと眉毛を動かした。

（……取り出せるだど？）

「ほ、本当か!」

ゲンドウが立ち上がりながら言った。

横にいる冬月も驚きを隠せないようだった。

「意味のない嘘なんてつく必要ないじゃない。」

「ならば……」

「碓司令、お待ちください。」

コウスケがゲンドウを止めた。

「なんだ? 綾波特務一尉。」

ゲンドウは不機嫌そうにコウスケを見た。

ゲンドウにとっては妻に会える唯一の希望が目の前にあるのだ。

それに水を差されて不機嫌になるなど言うほうが酷な話ではないだろうか。

「ユイさんを初号機から救出するのはもう少し後がよろしいと考えます。」

「何故かね?」

ゲンドウに代わり冬月が聞いてきた。

冬月はいたって冷静に聞いてきたが、声にわずかな震えを感じた。

「今、ユイさんがいなくなれば初号機はどうするのですか?」

「もちろん廃棄だ。」

「ならば我々は戦力の減少した状態で残り三体の使徒と戦うのですね？」

とは言ったものの初号機はすでに凍結処分が下されている。

だが、予備戦力があるのとないのではやはり余裕が違うのだ。

その言葉を聞いて二人ははっと思いついたようだ。

「ダメージプラグがある。」

「先の使徒戦では受け付けなかったのですが……」

「ならばレイに……」

「零号機はどうするのですか？」

二人は唸って沈黙した。

「ここで救出しても使徒を倒せねば意味がありません。」

（二人には残酷な選択だというのはわかつてる。）

新しいパイロットを選出することもできる。

だが、先の第十四使徒のような強さを持つ使徒が出現したら勝つことなどできないだろう。

それこそ不必要な犠牲が生まれるだけだ。

「リリス、それはいつでもできるのか？」

「当たり前じゃない。」

「だそうです。」

コウスケが二人を促す。

「……………確かに今は初号機の力が必要だ。」

ゲンドウが苦い声で言う。

断腸の思いなのだろう。

「碓司令、すみません。でしゃばったことを申しました。」

「いや、綾波特務一尉の言うことは正しい。そして私はNERVの総司令なのだ。」

「そうだな、碓。ここでユイ君を救出しても怒られるだけだな。」

「今はユイが救出できると知った。それで十分だ。」

「ありがとうございます。」

コウスケがレイを引き取る前のゲンドウは私情ですべてを巻き込んでいた。

だが、今は何よりも優先させていた妻の復活よりNERV総司令としての決断を優先したのだ。

そんなゲンドウにコウスケは自然と最敬礼を行っていた。

そんなやり取りをリリスは興味深そうに見ていた。

「やっぱりあなたは面白いわね。」

「何が?」

とコウスケが聞いてもリリスはニコニコと笑っているだけだった。

「それでリリスはどうしますか？」

「レイもいるのだろうか？　ならば現状維持だ。」

「うむ、リリスが我々と敵対するつもりがないならむやみに事を荒げることもなからう。」

「先ほどのようなことは出来れば勘弁してもらいたいですな。」

（あれは本当にひやひやした…）

その言葉にゲンドウと冬月は唸ってしまふ。

すると冬月が何かを思い出したようだ。

「そう言えば、ATフィールドを直に見るのは初めてだな。」

その言葉を聞いてゲンドウも興味深そうな目でリリスを見ていた。

「リリス、もう一度出せるかね？」

冬月がなぜそんなことを言い出したのかコウスケには解らなかった。

「副司令、なぜでしょうか？」

「いや、ATフィールドをもう少し直で見たいと思つてね。」

冬月は今はNERVの副司令として働いているが、元は京都大学の教授をやっていた。

つまるところ研究者としての血が騒ぐのであろう。

横にいるゲンドウも頷いていた。

「え、嫌よ。」

「そこを何とかしてもらいたい。」

「嫌。」

リリスは頑なに断っていた。

「むう、綾波特務一尉からもお願いしてくれないか?」

「うむ。綾波特務一尉、頼む。」

もはやここにいるのは特務機関の首脳部ではなく、一介の研究者たちであった。

(赤木もいたらもつと大変なことになりそうだな。)

「はあ……リリス頼む。」

するとリリスはコウスケを睨んだ。

「朝、実験には使われないようにするって言ったの嘘なの?」

(ああ、そう言えばそんなこと言ったな……)

ちらりと二人を見るが何とか説得しろとプレッシャーをかけてくる。

(はあ……厄介ごと……嫌だな……)

「すまん。一回だけでいい。あの二人を満足させてくれ。」

「うー、コウスケの嘘つき。」

リリスは頬を膨らませながら言う。

「……レイからも一言あるそうよ。……約束を破るのは人としていけない事……だつて。」

リリスの態度とレイからの一言にコウスケは罪悪感を感じるが、コウスケもA T
フィールドに興味はあった。

「……あとで腹いっぱい食わせてやるから。」

そう言うリリスはコウスケを見ながら

「コウスケが作ってくれるなら……」

と言うのであった。

「あれだけの量を一人で作れって言うのか？」

「ならやらない。」

リリスはそっぽを向いてしまう。

コウスケは困り果てた。

取りあえず説得する人物を変えることにした。

このままでは過重労働が待っているのでコウスケも必死であった。

「リリスが嫌がってますし、ここは……」

「そうか……」

ゲンドウが呟くように言う。

（諦めてくれたか。）

とコウスケは安心するが

「リリースよ、綾波特務一尉の料理があればやってくれるのか？」

そのようにゲンドウが言った。

「ほんとは嫌だけど、コウスケが作ってくれるのならやる。」

リリースは即答であった。

コウスケはとても嫌な予感がした。

「綾波特務一尉、命令だ。リリースに料理を作らたまえ。」

ゲンドウのサングラスがいつになく光っている。

「いや、しかし……」

「その程度で済むのであればむしろ幸運と言えるだろう。」

冬月は何度もうなずきながら言う。

二人からのプレッシャーが増した。

NERVの首脳部は伊達ではなかった。

（この……自分たちは何もしないからって……）

コウスケは抵抗を試みる。

伊達に零課の課長はやっていないのだ。

「ですが……」

「仕方あるまい。特務機関NERVの総司令の権限で命ずる。リリースに料理を作りたまえ。」

とうとうゲンドウは総司令の権限まで持ち出してきた。

こうなってしまうのは零課課長だろうが経済界の重鎮だろうが大統領だろうが関係ない。

NERV総司令の権限とはそこまで強いのだ。

SEELEのお偉いさんだったら話は違ってくるが……

最もその権限も私的利用されようとしている。

本来ならNERVのNo. 2がそれを止めることができるが、その人物も完全に総司令に肩入れしている。

「……レイも特務一尉が約束を破るなら相応の対価が必要です……だって。」

(レイ！ 俺を裏切るのか!?)

援護くらいはしてくれれると思っていた同居人もとい娘にはこう言われる。

コウスケの味方は誰もいなかった。

「ねえ、なんでそこまで嫌がるの？」

突然リリスがそう言い出した。

「へっ！」

「……私のこと嫌い？」

「何を言ってるんだ？」

「その言葉、また言った。朝にも好きだって言ったのに……」

リリスの周りはかなり暗くなっていた。

「そうなのね……」

ものすごい悲しみに包まれていた。

「綾波特務一尉、君には失望した。」

「紳士としてあるまじき行為だな。」

二人もコウスケを助けるどころか追撃をかけたきた。

何となく楽しそうな声に聞こえたのは気のせいだと思いたかった。

コウスケはため息をついた。

「あのな、リリスはレイの中から見ていたというが、俺は初めて会って話したんだぞ。好きか嫌いかなんて言われてもわかるわけないじゃないか。」

リリスは不満そうに見てくる。

だが、コウスケが言うことも正しいのだ。

いきなり出会った人に好きかどうかなんて聞かれて答えられるだろうか。

「まあ、レイとシンジ君を助けてくれたからな。嫌いと言うことは無いよ。」

「ほんと?」

「ただ、好きかと言われても何とも言えん。お前さんのことをよく知らないからな。」

リリスはじつと見つめてくる。

「俺を信頼してくれるのはありがたいよ。でも、お前さんももう少し世界を見てから判断すればいい。」

今までレイの中にいたからある程度はわかるのだと思う。

しかしそれはあくまでもレイだけの視点であり、リリス自身が見たものではない。

なのでリリスの視点で世界を見るのがとても重要に思えるのであった。

ぐうぐ

コウスケの前から気の抜ける音が聞こえた。

「やれやれ、お前さんの腹は待ってくれないのか。」

コウスケはゲンドウと冬月がいるほうに向き合う。

「申し訳ありません。リリスが空腹なようなので、また今度でよろしいでしょうか?」

リリスが空腹であることに二人は驚いた。

おなかですいたなどのやり取りは当然ながら二人にも聞こえていたが、本当に空腹であるとは思ってもよらなかったようだ。

「う、うむ、そうだな。」

「非常に残念だが。致し方あるまい。」

(さてと……)

二人が納得してくれたのを確認するとコウスケはリリスの前で屈んだ。

「何してるの？」

「レイは風邪をひいてることになってるんだ。それに腹が減った状態で歩くのはつらい
だろ。」

リリスはぼかんとしていた。

「取りあえずNERVの食堂で我慢しろ。家に帰ったら作ってやるから。」

「うん……」

と言うとリリスはコウスケの背中におぶさった。

「では、失礼します。」

コウスケはリリスをおぶさって総司令執務室を後にした。

「碓、リリスは人類に興味を持ったというが……」

「ああ、やはりそう言うことなのだろう。」

「ふむ。」

「ふつ、綾波特務一尉も案外やるな。」

「しかし、レイもいるのだろう?」

「うむ、困った問題だ。」

「珍しいな。」

「何故だ?」

「いつもなら問題ないですませるだろ。」

「……問題ない。」

そんなやり取りがあつたが、部屋を出た後のためコウスケには聞こえなかつた。

...

ゲンドウたちへの報告が終わつたコウスケは約束通りリリースに料理を作つてやつた。

かなりの量を作ることになつたがリリースが嬉しそうに食べるのを見て何となく心安らぐコウスケであつた。

その後リリースはTVを熱心に見ていた。

その姿に何となく違和感を感じるが、リリースとレイが別であると奇妙な関心をしていった。

コウスケはその間にもNERVから持つてきた仕事をこなしている。

コウスケのPCはインターネットでNERVとリンクしているので仕事をするのに何ら不便はなかった。

最も緊急を要する事柄が発生した場合は困ったことになるが……

夕日が西に差し掛かるころ、綾波家のインターフォンがなった。

「……やばい。」

画面を確認したコウスケは少し焦っていた。

「どうしたの？」

「シンジ君が来た。」

画面にはシンジが一人で映っていた。

「リリース、レイと代われ。」

「むく、仕方ないわね。」

リリースは不満そうに唸りながらもすっと目を瞑った。

途端に雰囲気が変わることをコウスケは感じ取った。

「……レイだな。」

「はい。」

よくよく考えるとレイと話すのは今日、初めてだななんてコウスケは考えていた。

「レイ、パジャマに着替えるんだ。」

朝からレイはずっと制服を着たままだった。

と言ってもレイにその記憶はない。

制服に着替えたのはリリスだからだ。

「どうしてですか？」

「風邪をひいていることになってるだろ？制服じや変に思われるだろ。」

「……わかりました。」

レイは自分の部屋に戻って行った。

コウスケは玄関に向かった。

「シンジ君、すまないな。」

「いえ、綾波は大丈夫ですか？」

心底心配そうな顔で訪ねてくるシンジ

「ああ、もう大丈夫だ。」

「よかった。」

「何なら上がっていくか？」

「いえ、結構です。」

と言うシンジだが、コウスケはそこに隠される表情を見逃すことは無かった。

一目くらい会いたい

そんな思いが伝わってくる。

「なんだよ。つれないな。」

実を言うとコウスケはシンジが学校でどうしていたかを知っている。

レイの席を見ながらぼーと考え込んでいたそうさ。

授業など上の空だったのだろう。

時々アスカやトウジなどからかわられていたとのことだ。

そう言う報告を零課から受けていた。

ちなみにパイロット三人には承諾を得ている。

依然として三人を狙う組織は存在しており護衛の必要性があるからだ。

いい顔はしなかったが、護衛の必要性を三人は承知しておりコウスケの問いに承諾したのだ。

三人の行動はコウスケのもとに報告されるが、コウスケのもとで嚴重に管理されている。

その報告書は一目見てすぐさまに封印している。

コウスケ以外閲覧できるものはない。

万が一、コウスケ以外の人物が見ようものなら即座に消去されるようになっていた。

「二目くらい会ってやってくれ。レイもそれが一番喜ぶ。」

(それが一番レイが喜ぶんだよな……かなり悔しいけど……)

「は、はい。……お邪魔します。」

「ふむ……お邪魔しますがただいまに変わるのはいつになるやら……」

(最もまだ認めんよ。少なくとも俺に一発は当てられるようになるまではな。)

「へ？」

「いや、なんでもない。ただの妄言だ。」

(フッフ、レイを奪い取れるかな？ 楽しみだよ、碓シンジ君。)

思わず笑みがこぼれた。

そんなコウスケを見てシンジは疑問符を浮かべていた。

その後シンジはレイの部屋に向かうことになる。

コウスケはリビングで残りの仕事を片付けることにした。

「しかし、どうしたものかね……」

リリースについては現状維持となった。

しかし、現実問題としてリリースがレイの中にいる。

最も二人がへまをやらかすとは考えられないが、周囲の目と言うのはなかなか悔れな

いのだ。

いつそのこと真実を話すかと考えたが、それは戸惑われた。

NERVの職員はパイロット三人を除くと全員がセカンドインパクトを経験している。

それは上級幹部でも同じことだ。

そのセカンドインパクトの元凶が現れましたなんてことになったらどんなことが起こるかわからない。

NERV職員総力を挙げて暴動など考えたくもないものだ。

零課とて安心とは言えない。

まず、間違いなくコウスケとレイは安全ではいられない。

コウスケは自分は無関係であることを証明できれば安全かもしれない。

だが、コウスケにはそんな気は毛頭も無かった。

娘を見捨てて自分の安全を図るなんて死んでも嫌なのだ。

そしてシンジやアスカが板挟み状態になるのは目に見えている。

ゲンドウと冬月が抑えに回るだろうが、どれほど期待できるかはわからない。

そうなるならNERV職員とはいえ手にかけることも考えねばならない。

そのまま放置すればレイが危険だからだ。

そしてそれが外部——一般市民に知られたら……

「……………ダメだ。現状維持しか思い浮かばない。」

しかもそれは今のところと限定的である。
使徒を倒したらNERVの存在意義は失われる。

当然ながらある程度の情報公開などもあり得るだろう。

その過程で万が一リリスの存在が漏れたら……

「過重労働だ……厄介事だ……はあ……」

レイの部屋から話し声などは聞こえない。

だが、部屋からは穏やかな雰囲気が流れているのを感じる。

その感じからおそらく二人きりで話している事はわかる。

「どうしたものかね……」

そう何度もつぶやくしかコースケにはできなかった。

第36話 大切なもの

あれからというもののコウスケとレイとリリスの奇妙な生活は続いていた。

あの時リリスが張ったATフィールドは長く展開しなかったためMAGIに感知されなかったようだ。

「ねえ、まだ？」

「もう少し待ってろ。」

コウスケは台所でフライパンをふるっている。

リリスに朝食を作るためだ。

こうしてリリスと共にする時間は家にいるときだけになっている。

学校に登校するときはレイに入れ替わっている。

その時までレイは眠っているらしい。

「ほら、できたぞ。」

コウスケはテーブルに料理を並べていく。

リリスは嬉しそうに食べていく。

リリスが食べる量はレイと変わらない。

最初出会ったときに尋常じゃない量を食べたのはATフィールドを使ったからだろうだ。

ATフィールドを使うとかなりのエネルギーが消費されるらしく最大でも三回が限度だそうだ。

そう考えるとEVAは途方もない電気エネルギーを消費している。

あれだけ巨大な体を動かすのだからとコウスケも考えていたが、その大本はATフィールドにあるのではと思ってしまう。

そう考えると人も微弱ながらATフィールドを使っている。

人が空腹になるのは科学的根拠に基づいて説明されているが、大本はそれのためではないかなどとつい考えてしまう。

「はあく、食べた食べた。」

などとリリスは満足そうに言う。

そんな姿を見てコウスケは満足感を覚えるのであった。

レイの時でも感じるのだが、わずかに表情が変わるだけなのだ。

それについて不満ではないが、やはりリリスのように目に見えて満足しているということがわかる方が気分がいいのだ。

「そろそろ時間だな。」

コウスケは時計を見て言う。

「あら、もうそんな時間なの？仕方ないわね。」

リリースは目を瞑る。

すると再び目を開いた。

「…特務一尉、おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

リリースが現れてからというものの、ここ数日間の遣り取りは概ねこんな感じだった。

最初はレイが空腹ではないのかと思ったのだが、体のエネルギーは共有しているらしく問題はないらしい。

そのため新たに朝食を作るということは無かった。

レイは台所で二つの弁当箱を作ったあと、自分の部屋に戻り登校の準備を進めた。

しばらくするとレイが部屋から出てくる。

「行ってきます。」

「気を付けて行って来いよ。」

レイは二人の弁当箱を鞆に入れると玄関に向かい学校へと登校していった。

コウスケは通信機を取り出す。

「綾波だ。今、レイが外に出た。護衛を頼む。」

通信機から了解と返事が返ってくる。

「やれやれ…」

今のところリリースの存在が外に漏れてはいないようだった。

リリースの存在を知るのはコウスケとNERV首脳部しかない。

「……………俺も行くか。」

コウスケはNERVへと登庁することにした。

・
・
・

コウスケがいつものように執務室へ行くと机には山のような書類があった。

とは言っても使徒戦直後に比べれば格段に減っている。

ミサトも復帰しておりその分の仕事が本来の主のもとに帰って行ったのだ。

その半分以上はとある二尉のもとに行っていることをコウスケは知っている。

その二尉にコウスケがオーダーの栄養ドリンクを送ったのは余談だ。

「エリア4はもう少しかかるか…」

コウスケは地上の迎撃施設の復旧状況をPCで確認する。

既に再建された地区では一般住宅の修復も行われている。

ただ、空き家が以前より多くなっているが

ジオフロントも復旧してきている。

既に瓦礫は撤去され、多くの重機で施設を建て直していた。

NERVのピラミッドはすでに修復されて以前より強固な装甲を纏っている。

「あと三体と一体か…」

前の使徒戦ではまったく言っていないほど歯が立たなかった。

初号機が覚醒していなければ今頃こんなことはできなかつただろう。

最後の一体はどうにでもなる。

しかし残る三体はいつたいどう攻めてくるのか

それがコウスケには気がかりだった。

もし前以上に強力な使徒が現れたらどうするのか

「いかんよな、俺がこれじゃ…」

ともかく復旧作業を急ぐべきだ

そうコウスケは思い仕事に集中する。

だが、使徒のことを考えたためか集中力が切れてしまったようだ。

コウスケは煙草を取り出し火をつける。

（そういや使徒ってATフィールドを使っているんだよな…）

最初はただのバリヤーだと思っていた。

今はそれは違うことを知っている。

ATフィールドは心の壁であることを知っている。

それゆえに人も微弱ながらATフィールドを使って個人として生きている。

(だとすると……使徒にも心があるというのか?)

見たところ使徒にそんなものがあると思えない。

だが、ATフィールドが使えるということは心があると同義なのだ。

(リリスも言ってたな。心の壁だと……)

そのリリスを間近で見ているリリスに心があると納得がいくのだ。

そしてここ数日間見ていたリリスのしぐさやコウスケにまとわりついてあれこれ聞いてくること、そしてリリスの笑顔を思い出して不意に笑みが浮かんだ。

そのことにコウスケ自身が驚いていた。

(俺は笑っているのか……)

ここまで自然に笑みが出たのはどれくらい前のことだろうか

そう考えるが思い出せない。

レイに対してもここまでの笑みを浮かべたことはコウスケには無かった。

(もしかしたら俺は嬉しいのかもしれない。)

今まで使徒は殲滅以外に選択肢がなかった。

意思疎通もできず、人に災いをもたらす存在であるからだ。

しかしその使徒にもATフィールドがある。

心があることを何となく感じ取っていたのだろう。

そしてお互いに拒絶しかできない悲しい現実

それを無意識のうちにコウスケは悲しく思っていたのかもしれない。

リリースも人を生み出した存在とはいえ、人から見れば使徒であることに違いはない。

そんなリリースが変わっているが人と変わらぬ生活を送っている。

それが嬉しいのかもしれない。

だが、コウスケは不意に考えてしまった。

もしリリースを殲滅することになったら

そう考えるだけでコウスケは何とも言えぬ恐怖に囚われる。

今まで数百人も葬ってきたコウスケだがこんな感覚に囚われることは無かった。

コウスケは頭を振り払う。

リリースが殲滅されることは今の段階では無い。

リリースを殲滅となるとレイもともに消滅させねばならない。

それは誰も望んでいないことだった。

(殲滅するって決まったわけじゃない。…碇司令も現状維持を命じていたしな。)

問題の先送りなのかもしれない。

ただ、コウスケは何故かほっとする自分がいることにさらに驚いた。
(「そういや、あんどき俺の前にATフィールドが張られてたな。」)

リリスのことをNERV首脳部に話した時のことだ。

コウスケは壁をイメージして手を突き出してみた。

「……できるわけないよな。」

目の前にはゆらゆらと揺れる煙草の煙以外何もなかった。

「だとしたらあれはリリスのものなんだよな。」

そう考えると何か釈然としないものを感じる。

何故、自分の目の前にリリスのATフィールドが張られたのかを

(それだけ信用しているってことかな?)

ATフィールドが心の壁だというのなら、その中に入れた自分はそれだけ心を許されている

それだけ信用されているんだとコウスケは思った。

執務室の外に人の気配を感じた。

ドアが開き人が入ってくる。

「綾波特務一尉。」

入ってきた人物は黒服だった。

「なんだ？」

「碇司令がお呼びです。」

（またまた厄介なことかな？）

「わかった。」

コウスケは黒服とともに執務室を後にする。

・
・
・

総司令執務室に赴いた時、いつもと同じやり取りをしながらコウスケは部屋の中に入った。

ふとテーブルを見るとやはり将棋盤が置かれていた。

戦況は五分五分と言った所だが、よく見ると片方は飛車と角行がなかった。

生け捕った駒を置く場所に無いことから、初めからその二つが取り除かれていたことは明らかであった。

「綾波特務一尉、レイとリリスの様子はどうかね？」

「変わってはいませんが特に問題は無いように思われます。」

コウスケは再びここ数日間のリリスを思い出してふと笑った。

だが、それも一瞬のみであった。

「それでご用件は何でしょうか？」

（今度は何をやらされるのか……SELEの本拠地でも襲撃して来いとか言われるのかな？）

コウスケがそう考えているとゲンドウが口を開いた。

「……リリースについてだ。」

「リリースですか？」

「うむ、綾波特務一尉にはリリースの監視を行ってもらおう。そしてリリースに関することは綾波特務一尉にすべてを委ねる。」

（リリースの監視？ リリースに関することは全部委ねる？ なんだらう……とても嫌なんだが……）

コウスケは首にひんやりとした空気を感じていた。

「……………」

ゲンドウが無言で見つめてくる。

（監視……リリースに関する全権の委任……そう言うことか……）

「……レイはどうしますか？」

「それは……考慮する必要はない。」

ゲンドウが珍しくためらうように言う。

「シンジ君に恨まれますよ。」

「……………だとしてもだ。」

「本気なのですか……………」

「……………」

重苦しい空気が流れていた。

見かねた冬月が口を開いた。

「綾波特務一尉、必要なことだ。」

と言う冬月はコウスケではなくゲンドウに視線を向けていた。

その視線は決して冷たいものではなく、どちらかと言うと仕方がないだろうと言うものであった。

「……………任務、了解しました。」

かろうじてコウスケはそう口にするこゝろができた。

「下がってよろしい。」

「失礼します。」

冬月から許可をもらったのでコウスケは総司令執務室を後にした。

……………かなりの早歩きで

．．．

(どうしたんだ？ 俺は……………)

コウスケはNERVの喫煙室で一人煙草を吸っていた。

吸っていたのだが、臭いが嫌に鼻を刺激したのですぐに消してしまった。

(碓司令や副司令の言うことは最もじゃないか。)

監視とリリスに関する全権の委任

リリスについて知る人が少ない中、もつともリリスに近いコウスケがそうなるのは当然と言えるだろう。

だが、コウスケはそこに隠された意味を正確に把握していた。

(リリスが敵対したとき、殲滅しろ……………)

だからこそその全権の委任であるのだ。

(そうだろ……………リリスは使徒なんだ……………敵対するなら殲滅するしかないだろ。)

それにリリスが何故この星にやってきたのか

それを知っていればやはりそういう結論になるだろう。

たとえレイを殺すことになっても

シンジに恨まれたとしても

しかしコウスケは一つの戸惑いを覚えた。

レイを殺すこと以上にリリスを殲滅することに

「よう、綾波じゃないか。どうしたんだ？」

コウスケが顔を上げると加持が傍らに立っていた。

「……………」

「なんだよ。偉く不景気な顔じゃないか。」

加持がコウスケの隣に座り、煙草に火をつけた。

「……………悩み事か？」

「まあな……………」

「……………」

加持はそれつきり口を閉ざした。

まるでコウスケが話すのを待っているかのように

コウスケは思いきって聞いてみることにした。

「……………」つ聞きたい。」

「いいぞ。」

「もし、世界と大切な人が天秤にかかっていたら……………どうする？」

「こりや、難問だな。……………大切な人ってレイちゃんのことか？」

「多分……………そうだと思う。」

（レイのことなんだよな……………ほんとにそうなのか？）

加持が訝し気に見ていた。

「そうだな…俺なら………わからない。」

「そうか……」

コウスケはがっかりしていた。

「綾波は一度その選択をしてるだろ。それと同じじゃダメなのか？」

ふと見ると加持が冷たい眼でコウスケを見ていた。

それに思わず腹が立つ。

「それができたらどんなに楽だろうか……」

「なら、答えは出てるじゃないか。」

「……人が滅ぶかもしれないんだぞ？」

「わかっているのに世界を選べない……別にいいんじゃないか？」

加持は煙草を消していた。

「世界を敵に回してでも守りたいもの……そう言うことなんだろ。」

「そうか……そうだったんだな。」

何故かコウスケは奇妙に納得ができた。

「すまん。」

「別にいいさ。俺は綾波から真実を教えてもらったんだ。これくらいどうと言うことは無いさ。」

「そうか……」

(リリスのこと話すか……全権委任されてるから問題ないだろ。それでもし皆が敵対するなら……)

ふと加持の視線を感じてコウスケは加持を見た。

加持はニヤニヤとしていた。

「なんだよ。」

「いや、綾波が世界を敵に回してでも守りたい人って誰かな……なんてな。」

「別に誰でもいいだろ。」

「レイちゃんではないみたいだし……リツちゃんか？」

「はあ？　なんで赤木が出てくるんだよ。」

加持は驚きを隠さなかった。

「お前……本気で言ってるのか？」

「何言ってるんだ？」

「……マヤちゃんか？」

「伊吹二尉？　どうして彼女が出てくるんだ？」

「……アスカ。」

「元気な娘だが、レイの方が可愛い。」

コウスケはさらりと saying 顔は真面目であった。

「……………まさか葛城……………」

「それはお前だろ。」

その後も加持がいろいろと女性の名前を挙げていた。

そのたびにコウスケは

「無い。」

「誰だよ。」

「娘（レイ）の方が可愛い。」

などとコメントする。

三番目のコメントの方が他に比べて多かった。

「いったい誰なんだ!?!……………俺が第三新東京市で知らない女性なんていないはずだぞ。」

「へえ……………詳しく聞きたいわ。」

いつの間にかミサトが近くにいた。

こめかみには青筋が浮かんでいる。

「か、葛城……………」

「よう、葛城。」

「コウスケ君。いったい何の話をしていたのかしら？」

ふと見ると加持がぶんぶんと首を振っていた。

コウスケは思わずニヤリとする。

「……加持の女性関係の広さを自慢されていたんだ。」

一瞬で加持が青ざめた。

「そう……」

そろりと加持が逃げようとしたが、ミサトがしつかりと捕まえていた。

「か、葛城……これには……」

「その話はゆつくりと聞きます。」

いかなる言い訳も許さない声だった。

「あ、葛城。シンジ君たちが来たら俺の執務室に連れて来てくれ。赤木もだ。……加持

は生きていたらな。」

とコウスケは加持を引っ立てているミサトに言った。

……

「よし、全員そろったな。」

コウスケの執務室にはパイロット三人とミサトとリツコ

そして

「加持、どうにか生きられたようだな。」

「……後で覚えてろ。」

ボロボロの加持がいた。

皆はやれやれといった感じだった。

（ん？ アスカが何ら反応を示さないな……）

ボロボロの加持を見てアスカが何らかのアクションを起こすと考えていたが、コウスケの予想は外れた。

それを訝し気に思うが、本題に入ることにした。

「レイ、ちよつと来てくれ。」

コウスケは手招きでレイを呼んだ。

「何でしょうか？」

「リリスに代われるか？」

「……いいのですか？」

「大丈夫だ。リリスに関しては俺が全権を預かっている。……何かあつても俺の責任さ。ただし、セカンドインパクトについては何も言うな。……ここで暴動なんて起こされたらさすがに守り切れない。」

「わかりました。」

そう言っつてレイは目を閉じた。

「ねえ、さつきから何やってるのよ。」

アスカがしびれを切らして言う。

少しイライラしているように聞こえた。

「すまん、もういいぞ。」

コウスケはリリースを促すが、何もしゃべらなかつた。

「レイ、どうしたの？ コウスケ君に何かされた？」

などとミサトは言う。

「……コウスケさん、綾波はどうしたんですか？」

シンジの顔は心配と言うよりは不安の方が大きかつた。

(……ちよつと悪戯するか。)

「目の前にいるだろ。」

「……………」

シンジはリリースをじつと睨んでいた。

「シンジ、なに怖い顔してるのよ。」

「そうよ、コウスケ君とレイの間に自分の知らない秘密があるからって妬いちゃダメよ。」

そんなアスカとミサトの言葉が耳に入っていないかのようにシンジはリリスを見る。
そして

「……………あなたは誰ですか？」

「……………どうしたの？ 碇君。」

「どうやらリリスも悪乗りしてきたようだ。」

「違う、綾波はそんな風には呼ばない。」

微妙なイントネーションの違いをコウスケも感じていたが、シンジもそれを感じていることに少し驚いた。

（ふむ、さすがに聞き分けたか……………じやなきや一生認めんがな。）

「シンちゃん、何言ってるのよ。」

「どう見たってレイじゃない。」

「リツコ、シンちゃんに何かした？」

「変なこと言わないで。シンジ君のバイタル、メンタルともに正常よ。」
そんな中、加持もリリスを疑わしい目で見ていた。

「シンジ君、君にはわかるんだね。」

「はい。……………加持さんもわかるんですか？」

「シンジ君が言わなきゃ気づけなかったよ。」

(冗談はこれくらいにするか。)

コウスケとしてはシンジがリリスを見つけたということに満足はしていた。

「そろそろ種明かしするぞ。」

「そうね、これくらいにしましょ。」

皆は驚いていた。

レイが突然口調を変えてしゃべり始めたように見えるのだから無理もない。

「さてと……紹介しよう。彼女はリリスだ。」

コウスケがそう言うのと皆は固まってしまった。

「……………コウスケ君、リリスって……………」

いち早く回復したのはリツコだった。

「知ってるだろ？ 第二使徒のリリスだ。」

「使徒って呼ばれ方、好きじゃないんだけど…」

リリスが拗ねながら言う。

「わかってるよ。でもそっちの方がわかりやすいだろ。」

「わかってるわよ…」

それでも不満なのだろう。

リリスはつま先を床に押し付けてくりくりと回していた。

「あはは……レイもそんな冗談を言うようになったのね。」

ミサトが乾いた笑い声を立てながら言う。

「ああ、今のは冗談だったのね。」

「ふう、雰囲気まで変えるなんて大したものだ。」

ミサトに続いてアスカと加持が言う。

「そうよね。リリースの魂はレイなのだからそんなわけないわよね。」

リツコもそのように納得したようだ。

そんな様子の皆にリリースが膨れていた。

「む〜。」

「やっぱりそうなるか。」

（まあ、冗談に聞こえるのが当たり前か…）

膨れるリリースを横目にちらりとシンジを見た。

（……どうやらシンジはわかっていているみたいだな。）

シンジはじつとリリースを睨んだままだった。

「ほら、レイ。いい加減にしないとシンちゃんが怒るわよ。」

「そうね。こんな冗談はやめてほしいわ。」

「冗談じゃないわ。私はリリースよ。」

(……あれしかないのか?)

それをした後にリリスにたらふく食わせねばならないと思うと正直しんどく思うが、それが一番手っ取り早いとも思っていた。

どうやらリリスも同じことを考えていたようだ。

「あれが一番早いかしら。」

「……だな。」

「大丈夫だとわかってるけど……」

と言うとリリスはため息をついた。

「しようがないわ。やりましょう。」

と言ってリリスはコウスケから離れる。

それを見たコウスケはグロック17を取り出しリリスに向けた。

「ちよ、こ……」

ミサトが止めようとするが構わずに発砲する。

銃弾はATフィールドで防がれた。

「今のは……」

「ATフィールド?」

「……使徒!」

とつさにシンジ以外の皆が身構えた。

「ちよつと待て。そう身構えることもない。」

「そうよ。あなたたちリリンを殲滅するつもりはないわ。」

「……それもそうね。そのつもりならコウスケ君が無事であるはずなものね。」

「リツコ!?!」

「だな。何より綾波がリラックスしている。」

そう言うのと加持は構えを解いた。

「……確かに敵対する意思がないみたいね。」

アスカも納得してくれたようだ。

それにミサトも消極的ながら同意した。

コウスケはそんなミサトを作戦本部長としては正しいと認識していた。

「それで……リリスだっけ？ 本当にそうなの？」

「ええ。」

ミサトの問いかけにリリスが答えると話し始めた。

セカンドインパクトのことはさすがに避けていた。

話を聞き終えたリツコが呟くように言った。

「信じられないわ……」

「信じられないも何も現実に起こっているんだ。」

「まっ、あたしたちと敵対しないならいいんじゃない？」

「そうね。」

皆が納得してくれる中、一人だけ沈黙していた人物が口を開いた。

「……………綾波はどうしたんですか？」

そう言うシンジは不安で彩られていた。

「レイならちゃんというわよ。」

「……………」

「レイも嬉しかったみたいね。…………私の碓君はわかってくれた…………だって。」

「へ？」

「だから、私の碓君はわかってくれた…………そう言っていたわ。」

それを聞いた皆は

「リツコ、聞いた？」

「ええ。」

「私の碓君ですって。」

「ほう、レイちゃんも言うじゃないか。」

などと言うものだからシンジが赤くなってしまう。

「何？ ……言っちゃダメだったの？」

不思議そうにしているリリスにコウスケは声をかけた。

「どうした？ リリス。」

「レイが動揺しているわ。今更、隠す必要もないのに。」

するとリリスは微笑みながらシンジに近づく。

「な、なんですか？」

「うふふ、あなたはこの子のことを知っても逃げずに受け止めてくれたわ。」

さらにリリスは近づいた。

「だから、そのお礼。」

と言うとリリスはシンジに唇を重ねる。

それはどれほど続いたかわからない。

ただ、コウスケにはえらく長く感じた。

リリスがシンジから離れる。

「……はっ！ 何をするんですか！」

シンジが慌てて飛びのいた。

「だから、お礼よ。 ……もしかして間違ったのかしら？ この前テレビを見ていた時こ

うしてたわよ。 ……あら？」

リリスが困ったというような顔になった。

「この子嫉妬してるわ。……安心して、あなたの碇君は取らないから。」
と言うとリリスは微笑んだ。

「……綾波。」

加持が声をかけてきた。

「……なんだ。」

「どうしたんだ？」

「何の事だ？」

「お前……わかってないのか？ 今、ものすごく怖い顔してたぞ。」

「……目の前で娘の接吻を見せつけられたんだ。……当たり前だろ。」

「リリスだろ？」

「レイの体だ。」

「……そう言うことにしよう。」

加持は妙に納得したという顔になっていた。

（それ以外にいったい何があるとと言うんだ？）

そう納得したいのだが、なぜか納得しきれない自分がいることに妙な感覚を覚えるコ
ウスケであった。

「コウスケ君？　これって最重要の機密事項ではないの？」

シンジたちのやり取りを横目で見ながらリツコが聞いてきた。

「ああ、これはSSS級に属するよ。」

コウスケから出た意外な言葉にミサト、リツコ、加持が体をこわばらせる。

「SSS級って噂だけだと思っただけど本当にあったのね。」

長年NERVにいたアスカはどこか暗い顔をしながら言った。

一方シンジだけはその意味が解らないようだった。

「……SSS級は書類、データに記録することも許されないことなのよ。」

「つまりは自分の頭だけに留めておけてことさ。」

リツコが言うことを加持が簡単に説明する。

「それを破ったらどうなるんですか？」

シンジの問いに

「消されるのさ。」

とコウスケがあっけからんと答えた。

「消されるって……」

「そのままの意味だよ。」

シンジの顔が驚愕に入れ替わった。

「そんな……じゃあ、コウスケさんは……」

「それをコウスケ君がわかっていないはずないじゃない。いったいどういふつもりなのかしら？」

リツコは淡々と言っているようだが、どこか上ずっているようにも聞こえた。

「リリスに関することはすべて俺が握っている。それにお前さんたちにはいろいろ話してゐるからな。後で下手に漏れるよりはここで話した方がいいと判断したのさ。」

「……なるほどね、さすがのコウスケ君もそこまで無鉄砲じゃないか。」

と言うミサトは加持をじつと睨んでいた。

「なんだよ。俺だって……」

「フリとはいえ三足足袋をやつてゐるあんたにそんなこと言える？」

「そうね。」

「リツちゃんまで……」

そう言うのと加持は降参だと言いたそうであった。

それを見届けたコウスケは続ける。

「それに……」

「それに？」

ミサトはコウスケが何を言うのか興味津々で聞いてくる。

「こいつは意外と可愛らしいところもあるんだ。だからみんなにも紹介しても損はないと思っただのさ。」

一瞬で皆が固まった。

いや、リリスだけは

「可愛いなんて……」

と言いながらもじもじしている。

ミサトが皆よりいち早く回復した。

「……あ、あんた、何言ってるのかわかってる?」

「ああ。」

それを聞いた加持が横から口をはさんだ。

「それはレイちゃんを娘のように思っているのと同じか?」

「それ以外に何かがある。」

「本当にそうか?」

加持がニヤニヤと笑っている。

「なんだ? 何をにやついてるんだ?」

コウスケがそう言うのと加持が驚いていた。

「……そう言うことか。」

と言うと加持は一人で納得していた。

「そうなのよね。コウスケってそう言うところは鈍いから。……好きだって言ったのに全然気づいてくれないし……」

それにアスカが飛びついた。

「あんた！ 本当に言ったの!?!」

「そうよ。」

「……コウスケ君は何て答えたのかしら。」

リツコが言うが、いつもの冷静な口調ではなかった。

（何なんだ？ 何かあったのか？ 赤木。）

と内心では思うがあったことをそのまま答えることにした。

「ん？ 嫌いではないと答えたよ。リリスは俺を信頼してそう言うってくれるんだろ。」

そう言うとりリスはため息をついていた。

「どうしたんだ？ リリス。」

「……何でもないわ。」

それを見たリツコが

「……なるほどね、まだ勝算はあるわ……」

とつぶややく。

「いいの？ このままだとあの二人に取られるわよ。」
などとミサトはアスカに囁いているのが聞こえた。

「べ、別にいいわよー！」

アスカが真つ赤になりながら叫んだ。

そしてちらちらとコウスケ見ているのだ。

「なんだよ。」

「何でもないわよー！」

そう言うとアスカはリリスに向かって

「これからよろしくー！」

と強めの口調で言うのであった。

「私も……これからよろしく頼むわ。」

リツコも続けているが、どこか不自然に聞こえた。

「うふふ、よろしく。」

リリスはにこやかに答える。

だが、三人を中心に何やら嫌な空気が流れ始めたのをコウスケは感じた。

「……何なんだ？」

「僕にもわかりません。」

「コウスケとシンジは首を傾げながら、ただただこの空気を嫌なものとして感じていた。」

「……ねえ、コウスケ君……本当にわかってないのかしら。」

「だろうな。」

「他人のことはすぐにわかるのに？」

「自分だからわからないんだろ。それに……」

「それに？」

「綾波自身、自分のことをわかってないみたいだからな。」

「それって……」

「そう言うことさ。」

完全に傍観者になっていた二人であった。

第37話 お守り

時はすでに夕暮れ。

第三新東京市の郊外に一つの廃工場がある。

日本の新たななる遷都計画によつて箱根と言う地名が第三新東京市という名称に変わった時からあつたものであるうか。

それとも遷都計画に引き寄せられるようにどこかの企業が新しく建てたものなのかそれはすでに分からない。

ただ、廃工場になる前からいまだに稼働している大きな換気扇がその名残を風の音とともにむなく伝えてくる。

そんな換気扇の前に蒼いシャツを着て無精ひげを生やしている男がひとり
そしてその男に近づくと黒服がひとり

「よう、遅かつたじゃないか。」

無精ひげの男への返答は銃声によつて報いられた。

それでも換気扇は止まることなくただただ回る。

・
・
・

時は数十時間前に戻る。

・
・
・

リリースのことを一部に公開したコースケの生活は基本的に変わらなかった。

朝、リリースを起こすとともに朝食を取る。

ある程度時間が過ぎた後、リリースはレイに入れ替わり登校の準備をする。

そしてレイはシンジたちとともに学校へと登校、それを見届けたコースケは零課に護衛を頼みNERVへと登庁する。

いつものように仕事を片付けて帰る。

家で夕食を取り就寝する。

それが基本的な生活である。

しかし、最近のコースケは少し悩んでいた。

休憩の合間にかなりの頻度で赤木リツコと出会うのだ。

コースケはある程度決まった時間に休憩を取ることが多い。

その休憩時間になるとリツコがすかさず現れるのだ。

研究に対する意見やEVAの修理効率を上げるにはどうすればいいのかなどコースケにとって専門外であることをよく聞かれるのだ。

わからないの一言で終わらせることもできるのだが、コースケはそんなことをせず

きつちりと自分の意見を考えて答えるようにしていた。

時折、コーヒーなどを差し入れてきたりする。

紅茶の方がいいなんてことはさすがに言わない。

そしてコウスケの休憩時間が終わると

「……あら、時間ね。そろそろ行くわ。」

まるで見計らっていたかのようにリツコは帰って行くのだ。

時折、伊吹と出会うのだが、決まって何か恨めしそうな目で見られる。

何故かは全くわからない。

午後になるとコウスケは学校から直接登庁してきたアスカから訓練を手伝ってほしいと連絡が来るのだ。

シンクロテストなどがある場合はそれを優先的に行うが、何もない日は決まって訓練を手伝ってほしいと来るのだ。

何もない日は自由行動が許されており、第三新東京市を出れないということを除けば自由に過ごることができる。

実際そんな日にシンジとレイは時折どこかに出かけている。

アスカも以前は友人とともにどこかへ出かけていたのだが、リリスのことを公開してからと言うものの訓練してほしいと来るようになったのだ。

なのでコウスケはアスカに

「そんなことをせずに学生生活を楽しめばいいだろう」

と言ったのだが

「そんなことは使徒を倒した後でもできるわ。今はこつちの方が優先よ。それに……」

最後の方はごによごによとしゃべったためコウスケはよく聞き取れなかったが、本人が納得しているならいいかと思うのであった。

訓練はシミュレーターを使うものより、実際に体を動かすものの方が多かった。

基礎的な格闘訓練はもとより銃器の扱い、近接装備の扱いなど様々な戦闘訓練をしてきた。

コウスケは零課の課長である。

玄人とまでは行かないまでも一通り武器の扱いはできるのだ。

シミュレーターでの訓練はなぜか戦闘機での一騎打ちであった。

戦績はコウスケの全勝。

当然の結果である。

それでもコウスケはアスカの動きが最初に比べ良いものになっていることを感じていた。

そして訓練が終わると決まってお礼を言われるのだが、顔を真っ赤に染めながら言ったあと決まって逃げ出すのだ。

もう少し素直になればいいのには言わないが、それでも娘の方がやっぱり可愛いかななんてことを考えるのであった。

家に帰ったら帰ったでリリースが待っている。

リリースはコウスケが帰るまで寝ないで待っているのだ。

コウスケがどんなに遅くなってもTVを見たり、本を読んだり、料理の練習などをして待っている。

料理の練習をすると決まって黒焦げの何かが台所にあるのだが……

ちなみにレイは寝ていることが多い。

そしてコウスケが帰ると決まって飛びついてくるのだ。

「おい、危ないだろ。」

「だってやっとならなくて帰ってきたんだもん。」

それを聞くとコウスケは嬉しいのだ。

セカンドインパクトのあと天涯孤独の身になったコウスケである。

ここに来るまでずっと一人だったのだ。

無論、子供時代に仲間と言うものがいたし、軍人であるため仲間とともに寝食をと

にするがどこか心を許せないものがあつたのが事実だ。

そんなコウスケが家に帰った時、自分を待つてくれている人がいるというのがやはり嬉しいのだ。

朝食はコウスケが作るが、夕食はレイが作ることに変わりがなかった。

と言うよりそういう風になっていったのだが……

レイが準備してくれた食事をおいしそうに食べるリリスを見てついつい微笑んでしまう。

食事が終わると決まってリリスはべたべたとコウスケにくつついてくるのだ。

風呂にまで入ろうとしたため、それはコウスケが全力で阻止した。

「どうして？ 娘と父親は一緒に入るものじゃないの？」

「それは間違つた知識だ。第一、1・4にもなつて父親と入りたがる娘なんていない。それにお前さんは俺の娘じゃないだろ。」

そこまで言われてリリスは膨れっ面で諦めた。

就寝時には挨拶を交わした後、コウスケは自分の部屋に戻る。

ただ、コウスケが部屋に戻る時、リリスが寂しそうにコウスケを見つめるのだが、後ろを向かないコウスケには気付けなかった。

そんなわけでコウスケは悩んだ。

リリースのことは置いておくにしても残り二人の行動が不可解なのだ。

リツコは彼女らしくもなく数日前に聞いたことのある質問にコウスケは首を傾げ、反復練習が必要とかでアスカは以前にもした訓練をするようになっていた。

それが理解できない。

考えるだけで口に乗せて言わないが……

ともかくコウスケはいろんな人に聞いてみた。

「本当にわからないのか？ 綾波？」

「コウスケ君、それはあまりにもひどいんじゃない？ ……これは強敵だわ。」

「そんなこと言われても僕にもわかりませんよ。」

「……特務一尉、鈍感。……かわいそう。」

「ふっ、問題ない。」

「そんなわけあるまい、碓。……とにかく業務に支障が無いようにしたまえ。」

「綾波特務一尉……何も助言できません。」

「知ったことか。」

「その問題は自分で気付くべきです。」

コウスケが相談した結果である。

そういうわけでコウスケは少しいらついていた。

理解できない。

それが原因である。

ただ、コウスケは彼女たちとの時間を別に嫌がってはいない。

リツコと話すときと科学者らしく理論的に説明するためコウスケにはわかりやすいし、わからない単語もかみ砕いて説明してくれる。

アスカとの戦闘訓練はアスカの動きから得られるものがあるし、体を動かすため爽快感がある。

リリスは家で見せるしぐさを見て何となく癒される。

そのためいらついたりとしても普段の生活で態度に出るといことは無かった。

・
・

コウスケは不意に目が覚めた。

時刻を確認すると午前0時2分

「……いったい誰だ？ こんな時間に……」

コウスケの目が覚めた理由は携帯電話のアラームが鳴ったからだ。

コウスケの携帯電話とPCは連動しており、重要な伝達があるとアラームが鳴るようになっていて。

コウスケは体を起こし、机にあるPCを開いた。

PCには一つのデータが送られていた。

コウスケはPCを操作しデータの中を開く。

「……………全く、厄介事を増やすなよ。」

中身を確認したコウスケはPCを閉じると再び眠ることにした。

・
・
・

翌日

コウスケはいつも通り執務室で雑務に追われている。

先日の使徒戦で受けた被害はすでにほぼ修復されており、稼働テストで最終チェックを行うだけであった。

(……………二人か。)

コウスケがそう思うと執務室に黒服が二人入ってきた。

「なんだ？」

「冬月副司令が拉致されました。」

黒服が淡々と告げる。

「いつだ。」

「今から二時間前です。西の第八管区を最後に消息を絶っています。」

「うちの署内だな。お前らは何をやってたんだ？」

コウスケも黒服に劣らない淡々とした声であった。

「身内に内報及び先導した者が居ます、その人物に裏をかかれました。」

「ふむ……加持だな。」

NERVの諜報部は一流とまではいかないもののプロフェツシヨナルには違いがない。

そんな諜報部を煙に巻けるとしたら零課の他には加持リヨウジしかいなかった。

「加持リヨウジ、この事件の首謀者と目される人物です。」

「それはわかった。それで？」

「綾波特務一尉には拘束命令が出ています。」

「なんで俺なんだ？ 葛城ならわかるが……」

表向きではコウスケと加持は喫煙仲間程度でしか認識されていない。

そんなコウスケに拘束命令などどう考えてもおかしかった。

「理由は存じません。碇司令からの命令です。」

（碇司令ね……そんなの通じるかよ。）

思わず笑いがこみ上げるがグツと堪えた。

「なら、直接確認するぞ。」

「それには及びません。」

「……嫌だと言ったら？」

「抵抗するようなら無理にでも拘束するように命令されています。」
そう言うのと黒服たちは右手にUSPを取り出した。

(……なるほど、これを機に作戦部に嫌がらせをしたいわけだ。)
作戦部と諜報部

末端の者同士はどうかは知らないが、幹部クラスでは険悪な関係なのだ。
とは言っても諜報部長が一方的に嫌っていただけである。

「なるほど……」

「ご理解いただけましたか？」

「ああ……答えは、嫌だ。」

(お、来た。攻撃予兆)

コウスケが答えると黒服が発砲する。

コウスケはとっさにデスクの下に潜りこんだ。

銃弾は壁にめり込んだ。

(さて、どうするか……)

コウスケはデスクの下でグロック17を取り出していた。

一方黒服は焦っていた。

まさかこんな至近で避けられるとは思わなかったのだ。

「どうする?」

「慌てるな。相手は一人……それにもう逃げ場はない。」

「そうだな。」

黒服は互いに顔を見ると合図を送る。

その時何かが蹴破られるような音が響いた。

黒服たちは後ろを確認する。

何もない。

そして二発の発砲音

「ぐ……」

「いったいどうやって……」

足に激痛を覚え、立てなくなった黒服は膝を立てて座る。

はっと気づきデスクを見るとコウスケは寝ころんだ状態でグロツク17を構えていた。

コウスケと黒服の間には真ん中が大きくひしやげたアルミ板があった。

コウスケはデスクの板を蹴破ったのだ。

「動くなよ。」

とコウスケが言うが一人の黒服がUSPを再び構えようとした。

コウスケは容赦なく頭を撃ち抜く。

頭を撃ち抜かれた黒服は銃弾と同じ方向に倒れこんだ。

「だから動くなつて言ったのに。……お前も死んで見るか？」

普段は淡々としている黒服も汗をかいていた。

「どうしました!？」

コウスケの執務室にミツヒサが駆け込んできた。

「これは……」

「暗殺未遂だ。連れていけ。」

「り、了解。」

ミツヒサは部下を呼び出した後、黒服を連れていった。

「はあく、これで少しは懲りるかな……」

コウスケはデスクの下から這い出た。

ふと見ると床に赤い池ができていた。

それをコウスケは無感動で見る。

(……こういう時は彼女のそばに居たいものだ。)

そう思うがコウスケは思いとどまった。

そもそもなんでこんな考えが浮かんだのか不思議であった。

コウスケは頭を振ると執務室を後にした。

血なまぐさい場所で仕事なんてできないからだ。

・
・
・

休憩所で煙草を吸っていたコウスケは、ゲンドウに呼び出された。

総司令執務室に入ったコウスケは

(厄介事……誰か代わってくれないかな。)

なんて思っていた。

「綾波特務一尉、冬月が拉致された。」

「存じております。それで自分のところに諜報部が来ました。」

ゲンドウは訝し気にコウスケを見た。

「なんでも碇司令の命令で自分を拘束しに来たと言っていました。」

「そんな命令は出していない。」

「でしような。」

ゲンドウはしばらく考え込んだ。

「……どうしたのだ。」

「少し痛めつけましたよ。まあ、いらぬ犠牲ではありましたが……」

「わかった。こちらで対処する。」

そう言うとゲンドウは一枚の紙を差し出してきた。

コウスケはそれを受け取り中身を確認する。

「……今度はこれですか。」

「ああ、君にすべて任せる。」

（……それって放任と何が違うんだ？ ……いつものことか。）

「了解。」

．．．

コウスケが総司令執務室から自分の執務室に帰る途中で一人の黒服を見つけた。

「よう、劍崎じゃないか。」

コウスケが声をかけると劍崎が振り返った。

「……綾波特務一尉。」

「なんだ？ いつになく暗い声だな。」

「……なんでもありません。」

「つれないな。……少し寄って行けよ。」

「……了解。」

．．．

「お前さん、紅茶は大丈夫だろ？」

執務室に連れてきたコースケは剣崎に紅茶を差し出した。

「剣崎は何も言わない。」

「…返事くらいしろよ。」

「…問題ありません。」

「なんだよ……まさかとは思うが、玉露ティーじゃないと嫌なのか？」

最初はニヤニヤしていたが、玉露ティーを思い出して苦い顔になる。

特にあの強烈なおいが忘れられなかった。

「そんなことはありません。」

「それはよかった。」

コースケの言葉を最後に沈黙が続く。

コースケは紅茶をゆつくりと飲むが剣崎には動きが無い。

どれほど時間がたったのかわからない。

先に動いたのはコースケであった。

「何か悩みがあるなら吐きだした方が楽だぞ。」

「何の事かわかりません。」

「……あのな、そんな顔で言われても説得力が全くないぞ。」

とは言うものの剣崎は無表情に見える。

だが、コウスケには剣崎が何かを悩んでいるように見えたのだ。伊達にレイの保護者をやっているわけではない。

それでも剣崎は喋らなかつた。

「安心しろよ。ここは監視されてないんだから。」

「……………」

「何か喋ってもお前さんに危害は加えない。……零課課長として宣言するよ。」

そう言うコウスケはグロック17を取り出しサーフティを確認した後、弾倉を抜いて銃の本体を自分の手が届かない場所に放り投げた。

剣崎もコウスケの行動には驚いた。

コウスケがしたことは無防備宣言である。

何をされても抵抗できないことを行動で示したのだ。

「……………任務に忠実でいること……………それが俺のすべてだ。」

剣崎がぼつりと喋り始める。

（俺か……………本音が出てくるな。）

コウスケは剣崎が自分のことを俺と言うのは初めて聞いた。

剣崎の話は続く。

「それで俺の中の渴きを癒せる……………そう、思っていた。」

(あの頃の俺と同じか……)

「でも、本当にそれでいいのか……そう思うと任務に忠実であることに疑問を持つようになった。」

「……………」

「俺はどうすればいいんだ……」

それを聞いたコウスケが口を開く。

「任務に忠実であることを放棄した……諜報部員として失格だな。」

コウスケの言葉に剣崎が目に見えて動揺する。

「それを碇司令が知ったら……用済みだな。そうだろ？ 剣崎。」

「俺は……」

「よく考えて行動するんだな。」

コウスケがそれを言うのと剣崎は黙って執務室を後にした。

(さて、どうするのかな?)

PCを見ると一つの伝達が届いていた。

冬月が無事保護されたとの内容だった。

コウスケはそれを確認した後、携帯電話を取り出した。

「……………ああ、レイ。今日、俺は帰らないから葛城のところにお世話になってくれ。」

．．．
．．．
．．．
そして時は冒頭に戻る。

無精ひげの男―加持リョウジは発砲音が聞こえたにも拘わらず、痛みが伴わないことに疑問を持った。

加持が目を開くと手を抑えながら立ち膝で座り込む劍崎がいた。
不思議に思い、辺りを見回すと

「……綾波。」

コウスケがグロック17を片手に立っていた。

「間―髪だな。加持。」

「ああ、助かったよ。」

するとコウスケは劍崎を見やった。

「……結局それを選んだのか、劍崎。」

劍崎は黙って俯いていた。

「だとよ。加持、劍崎はお前との友情より任務を選んだ。」

それを聞いた劍崎が酷く傷ついた顔をしていた。

「綾波、それ以上言うな。」

珍しく加持はイライラしていた。

「剣崎にはもったいない友人だな。」

コウスケは一息ついた。

そして

「まあ、それも今日限りだけだな。」

コウスケの言葉に加持ははっとした。

コウスケはグロツク17を加持に向けていた。

「綾波……お前……」

「残念だよ。」

「何故だ……」

「特殊監査部、加持リョウジは用済み……零課の判断だ。」

「なんだと……」

コウスケはニヤリと笑った。

「さよなら。」

コウスケは引き金を引く。

それと同時に

「止めろ！」

と剣崎が叫んだ。

廃工場に響く発砲音

ただただ廃工場に響くだけであつた。

・
・
・

コウスケの執務室にパイロット三人とミサトがいた。

ミサトはひどく悲し気な表情をしていた。

「どうしたんだ？ 加持の奴が浮気でもしたのか？」

それを聞いたミサトが酷く動揺していた。

もう、泣き出しそうに見えた。

「コウスケさん……」

シンジがコウスケを咎めるように言う。

アスカもなんて無神経なことを言うんだと言いたげであつた。

レイも白い眼でコウスケを見ていた。

「なんだよ。俺が何かしたのか？」

「……特務一尉、知らないのですか？」

「何を？」

（知ってるよ。加持のことだろ。）

そう思っても顔には出さない。

レイは何も言わず黙ってしまった。

「まあいい。……とにかくそんな顔は止めろ。せつかく新人が入ってきたのにそんな顔じゃ嫌われてるなんて思われるだろ。」

それでも皆は表情を崩さなかった。

「全く……おい、入ってきていいぞ。」

執務室のドアが開いた。

そこには剣崎が立っていた。

「あれ？ もう一人は？」

「わかりません。」

「……初日目に遅刻かよ。」

「この人がコウスケさんの言う新人ですか？」

シンジが口を開いた。

「違うんだが……まあ、すぐ来るだろ。剣崎、入ってくれ。」

剣崎が中に入る。

「剣崎のことは皆知ってるな。今日から零課の職員になる。第四班の班長だ。諜報部と兼任になる。」

「よろしくお願いします。」

劍崎は軽く挨拶をした。

それをみたミサトが口を開く。

「……劍崎君、加持は？」

「申し訳ありませんが、わかりかねます。」

「そう……」

そう言つてミサトか顔を俯かせた。

「本当は加持がよかつたんだがな……」

「何を言っている。綾波特務一尉が……」

そこまで言つて劍崎は口を閉ざした。

「劍崎君、やっぱり知ってるのね……」

そう言つるとミサトはコウスケを睨みつける。

「なんだよ。」

「加持をどうしたの……」

コウスケはため息をついた。

「加持は死んだ……いや、殺しただな。」

それを聞いたミサトは顔を俯かせてぶるぶると震えていた。

アスカやシンジはコウスケを何か別の世界の生き物のように見ていた。

レイは訝し気な顔をしていた。

(……やつと来たな。)

コウスケがそう思うと執務室に誰かが飛び込んできた。

「遅いぞ。」

「すまない。これを着るのに手間取った。」

その声を聞いて皆が一斉に振り返った。

「か、加持……」

執務室に飛び込んできたのは加持リョウジであった。

いつも着ている青いシャツではなく、NERV職員の制服を着ており髪も短く切られていた。

髭も剃られている。

それを見たミサトが加持に近づき平手打ちを一発お見舞いする。

「あんた……あんな遺言みたいな伝言を残して……」

「すまないな。葛城。」

「この……バカ……」

それを言うとミサトは泣き始める。

加持はそつと優しくミサトを抱くのであった。

「……はあく、お前さんは新人なんだからまず自己紹介が先だろ？」

「おつと、そうだったな。」

加持はミサトを離し佇まいを直した。

「加持リヨウジ三尉、只今着任しました。」

「……ねえ、いつたいどうということなの？」

アスカが尋ねてきた。

「特殊監査部、加持リヨウジ一尉は第三新東京市郊外にある廃工場で死亡が確認された。」

「でも、ここにいないじゃないですか。」

シンジが加持を見ながら言う。

加持は少し肩を竦めていた。

「最後まで聞け。……加持リヨウジの死亡が確認されたが、同時刻に第三新東京市で同姓同名の別人が発見された。姿も非常に酷似していることから、零課の判断でNERVにて保護。本人の希望によりNERVにて業務を行うことになる。」

皆は何が何だかわからないようだった。

「そういう話になるから、そこにいる加持リヨウジは今までの加持リヨウジとは違うと

いうことになっておいてくれ。」

「つまり加持さんは死んだことにするの?」

さすがはアスカと思いながらコウスケは続けた。

「そう言うことだ。」

加持に向けてコウスケが撃ったのは空砲だった。

だから加持は無傷でここにいるのだ。

何故、剣崎が加持を暗殺しようとしたのか。

それはゲンドウの差し金である。

加持リョウジがNERVによって殺されたとするためだ。

剣崎に指令を出したゲンドウはコウスケに加持は死んだこととして保護を依頼する。

つまりはゲンドウの仕組んだ芝居であったのだ。

そんなことを知らない剣崎はコウスケが発砲した時、加持を庇うように立っていた。

それを見たコウスケが今の剣崎なら大丈夫だろうと零課にスカウトしたのであった。

レイが呆れた顔でコウスケを見てくる。

そんなレイにシンジが声をかけた。

「どうしたの? 綾波。」

「忘れてたの。特務一尉はとてもしわるな人……」

「……もしかしてみんなが集まった時に加持さんの話をしたのって……」
「すべてを知っていて、葛城三佐をいじめて楽しんでたの。」

そう言つてレイはジト目でコウスケを見ていた。

「人聞きが悪いぞ、レイ。俺はただ単に感動の再会つてやつを演出しただけだ。」
そう言うものの嘘であることはすぐにわかる。

コウスケはニヤニヤ笑っているのだから

ある程度ニヤニヤ笑つた後、コウスケは真面目な顔に戻つた。

「そう言えば加持三尉の所属だが……」

ちらりとミサトを見た。

目が赤くなつていたが、どうやら泣き止んだようだ。

「本人がどこでもいいとふざけたことを言つた。」

「……加持、本当にそんなこと言つたの?」

充血した目を加持に向けながらミサトが言う。

「確かに言つたな。」

「なんてこと言うのよ! それであんたが……」

「落ち着け、葛城。」

そう加持が言うときミサトは黙り込んだ。

「もういいのか？ 新人にこんな重荷を乗せるのは正直嫌だ。」

その言葉に皆が息を飲んだ。

「それでもここなら大丈夫だと信じている。加持三尉は……」

コウスケは一度言葉を切った。

皆はかなり緊張しているようだ。

「……NERV作戦局一課の秘書に任命された。」

そう言つてコウスケは一枚の書類を皆に見せた。

ゲンドウのサインが入った加持の任命書である。

「それって……」

アスカが口を開くもコウスケは続けた。

「普段の居場所が葛城の執務室だ。……業務に支障が無いようにしろよ。」

そう言つてコウスケはニヤリと笑う。

それを見た加持が口を開く。

「……綾波、謀つたな。」

「さあ？ 何の事かな？」

そういうもののコウスケはニヤニヤしている。

「まあ、これとある二尉の仕事も減るし、葛城も加持が近くにいて浮気しないように見

張れるだろ？ 一石二鳥だ。」

その二尉は仕事が格段と減って喜んでいたが、上司と触れ合う時間が減ったことに不満を持つことになったのは余談である。

「それよりも……加持、早く言えよ。」

「何の事だ？ 綾波。」

「なんだ？ 言っつていいのかわ？」

コウスケは少し間を開けた後、口を開いた。

「もし、もう一度逢える事があつたら八年前に言えなかつた言葉を言うよ……だったよな？」

「なんで綾波が知つてるんだ!？」

加持は明らかに動揺していた。

「うかつなんだよ。葛城家の電話は俺に監視されてるんだぞ。最も知っている人から電話が来れば監視しないようになってるが、あんとき非通知で連絡したろ。」

「それは……うかつだった。」

「ほれほれ、加持さんは何を言うつもりだったのかな？」

もはやコウスケのニヤニヤは止まらなかつた。

「綾波特務一尉、少しやり過ぎだ。」

劍崎が咎める。

「何言ってるんだよ。加持は自分から言ったんだぞ。今度逢う時につてな。」

「そうなのか？ 加持。」

「ああ、確かに言ったよ。」

「そして今がその時だろ。今、言わなくていつ言うんだよ。言わなきゃ加持は嘘つきになるぞ。親友であるお前がそれを許してもいいのか？」

どう考えてもおおかしな論理であるだろう。

だが、

「そうだな。俺も加持が嘘つきになるのは嫌だ。」

と劍崎はいたって真面目に言うのであった。

「よかったじゃないか、加持。いい親友を持つて……」

「……綾波、あとで覚えてろ。」

「いい響きだ。……ちなみにドアのロックはかかっているからな。」

加持が執務室から出ようとしたためコウスケがそのように声をかけた。

加持が確かめてみるとドアが開かない。

コウスケはふと気配を感じた。

レイがそばに来ていた。

「特務一尉、わざとやっていますね。」

「当たり前だろう。」

「何故そこまでするのですか？」

コウスケがしていることは悪戯にしては度が過ぎている。

そのことにレイが疑問を持ったのだろう。

「何故ここまでするのか……それはな、加持に無理をさせないためだ。」

レイはきよとんとしながら首を傾げた。

（うむ、レイのこういう表情は大変可愛らしいな。……リリースも時々似たような表情をするが、あれはまた違った可愛さがある。）

「あいつは時々周りが見えなくなるからな。加持が死なないようにお守りが必要なのさ。」

「お守り……葛城三佐ですか？」

「そうだ。加持が死んだと思いきや葛城は死にそんな勢いで悲しんでたろ？ 加持が死んだら葛城は一生独り身だろうな。加持を思つて……それを加持に自覚させるのさ。」

レイは少し納得していた。

「でも、どうしてそこまでするのですか？」

コウスケがここまでする理由がわからないのだろう。

確かにここまでする理由はない。

「碇司令の命令さ。加持を無事に保護しろとな。それに加持は喫煙仲間なんだ。仲間が減ったら悲しいだろう？」

そう言うときウスケは優しく微笑んだ。

「本来なら二人きりでやってほしいが、それだと加持がいつ言うのかわからないからな。だから逃げられないようにしたんだ。すまないがみんなには証人になってもらおうよ。」

「わかりました。」

レイはそう答えるとしばらく考え込んだ。

「……特務一尉にはお守りがないのでですか？」

（レイがそんな質問をしてくるなんて……ちよつと意外だな。）

「あるとしたら、レイだな。……最もお前さんはシンジ君のお守りだろうがな。」

「他には無いのですか？」

「他にか……」

コウスケはレイを見ていた。

レイはきよとんとしている。

「どうだろうな。」

コウスケはそう言うのと視線を加持に向けた。

加持はほどほど困りながらも何かを覚悟するような顔つきになった。

「葛城、八年前に言えなかつたこと……」

加持がそこまで言った時、コウスケは椅子にもたれかかり目を瞑った。

昨日からコウスケは一睡もしていなかつたのだ。

加持の戸籍を作るのに悪戦苦闘していたからだ。

そういう意味では確かにコウスケは加持を殺している。

加持が何を言ったのかコウスケにはわからなかつたが、自分の思惑通りに進んでいることは確信しているのであった。

第38話 選択

遙か昔

神は七日間でこの世を作ったとされる。

1日目 暗闇がある中、神は光を作り、昼と夜が出来た。

2日目 神は空（天）を創った。

3日目 神は大地を作り、海が生まれ、地に植物を生えさせた。

4日目 神は太陽と月と星を創った。

5日目 神は魚と鳥を創った。

6日目 神は獣と家畜をつくり、神に似せた人を創った。

7日目 神は休んだ。

神は赤き土から自らを模った一組の男と女―人を作った。

男と女は神の作った楽園で過ごすのが、長く続かなかつた。

女は男に同等の地位を要求するが、男がそれを断った。

女はそれに絶望し、男のもとを離れる。

……

もし、対等の立場を求めたのが男であったのなら
女はどうしたであろうか

・
・
・

最近のリリスの様子がおかしい

コウスケは執務室で業務を行いながらそう考えていた。

コウスケとリリスが会う時間は家以外にあまりない。

レイが出てくる時間はシンジと一緒にいるときが多い。

そのため、コウスケといるときはリリス、シンジといるときはレイなどという構図が
出来上がっていた。

レイが出ているときはリリスは眠るようになっている。

そう言う取り決めが二人の間であつたらしい。

原因はリリスのことを初めて紹介した時のことだ。

リリスがレイの心情を吐露したことをレイ自身が恨んでいた。

そのための取り決めなのだ。

最もリリスが出ているときにレイの心情がリリスに漏れているんじゃないかとコウ
スケは疑問に思ったが……

コウスケ自身レイという時間が減っていることに多少不満はあるものの、リリスに面

として言うことは無かった。

それが何故かはわからない。

一つ言えることはコウスケがリリスとの時間をそれなりに大事に思っていることは確かだ。

そんな時間にふと感じたことであつた。

「……リリス、いったいどうしたんだ？」

「何が？」

「……いや、なんでもない。」

そう言つてコウスケはリリスを見ていた。

どことなく悲しそうに見えた。

何かを思いつめているように思えた。

リリスの異変を感じ取つたのは、加持リョウジを救出した後である。

どんなに揺さぶつても口を割らないためコウスケは断念するが、やはり気になつてしまふのであつた。

そんな時、コウスケの執務室にリツコが現れた。

「ん？ 赤木か。……休憩時間じゃないよな。」

コウスケは時間を確認しながら言う。

コウスケが休憩するにはまだ早かった。

「……あなたに見てもらいたいものがあるの。」

そう言つてリツコは一つの資料を差し出した。

表情がないリツコに疑問を感じる。

こういう表情のリツコは何か嫌なことがあつた時のものである。

「……レイの定期検診の結果？」

レイはリツコのもつで定期的に検診を受けている。

とは言つてもコウスケと同居してからというものの特に異常がないため、その頻度は大きく減つていた。

先日、リリースが現れてから初めての検診があつた。

そのデータをリツコは持つてきたのだろう。

「なんでわざわざ持つてきてくれたんだ？ データを送信してもよかつたら。」

コウスケのPCはNEERVのネットワークに繋がっている。

そのためこうしたデータはネットで送信した方が早いのだ。

実際、レイの定期検診のデータはずつとネットで送られてきていた。

「（ ）がことだけに直接渡しに来たのよ。」

「……そうか。」

どこことなく釈然としないものを感じるが、コウスケは資料を見ることにした。

「……………そう言うことか。これは本当なんだな。」

「……………ええ。」

「これを知っているのは？」

「私とコウスケ君だけよ。」

「……………手立てはあるのか？」

「今のところないわ。」

「そうか……………」

表向きでは平然としているコウスケを見てリツコが不思議そうに言う。

「もっと怒ると思ったのだけど……………」

「それでどうにかなる問題なのか？」

「それもそうね。」

．．．

家に帰宅したコウスケの前にはレイとシンジがいた。

リスにはシンジとレイに話したいことがあると言って代わってもらった。

「すまないな。急に呼び出して。」

「いえ、大丈夫です。」

レイはぴつとりとシンジの横に座っていた。

既に夕食は済ませておりシンジの前には紅茶があった。

「……これは、綾波が入れたものですね。」

一口飲んだシンジが答えた。

「よくわかったな。」

「何となくですけど……」

「愛は格別の調味料と言うやつかな？」

そう言うとシンジはお約束通り赤くなってしまった。

「愛が調味料になるんですか？」

レイはきよとんとししながら聞いてくる。

「ああ、そうだよ。」

コウスケがそう答えるとレイは紅茶を一口飲んだ。

「……特務一尉のと変わりません。」

「そりゃ、そうだ。自分の愛しい人が作ってくれたものなら嬉しいし、おいしく感じるものさ。」

そう言うとレイは少し考え込んだ。

「……リリースが作ったものもそうなのですか？」

「……………は？」

思わず間拔けな返し方をしてしまった。

「リリスが作った料理もそう感じるのですか？」

「……………誰が。」

「特務一尉。」

コウスケは少し動揺していた。

まさかレイがこんなことを言ってくるとは思わなかったのだ。

横にいるシンジも目を丸くしていた。

「そんなわけではないだろ。」

「……………嘘。今日の夕食を食べてる時、とても嬉しそうだった。」

レイの言葉にコウスケは疑問を持った。

「……………レイが準備したものだろ？」

「違います。リリスが準備しました。」

レイはニヤッと笑っていた。

そう思うと確かに味がいつもと違うものだった。

「どうでした？」

「どうだったと聞かれてもな……………」

今までで一番、美味かった。

そう言うのをグツと堪えた。

「……まあまあだな。」

そう答えたがレイは相変わらずニヤつと笑っている。

「……よくわかりました。」

納得しているレイに釈然としないものを感じる。

するとシンジが口を開いた。

「……コウスケさん。」

「なんだ？」

「今、すごく嬉しそうでしたよ。」

「……何を言ってるんだ。」

そうは言うが実はコウスケは嬉しかったりする。

リリスが料理の練習をしていることは知っていたが、まさかこんな短期間で上達するとは思わなかったのだ。

黒焦げの何かを食べさせられた時が一番死を覚悟したときだった。

……ATフィールドで拘束されてはコウスケも抵抗できなかつたのだ。

その後の記憶はコウスケには無い。

気付いたら朝になっていて、リビングで起きた。

横にはレイが寝ていたが、目がかなり腫れていた。

コウスケが倒れたことに驚いてリリスは泣いていたのだ。

「コウスケさん……もしかして……」

シンジが言おうとしていることを察知したコウスケはすぐに反応した。

「そんなこと……」

「あります。」

レイに妨害された。

「何を根拠に言ってるんだ？」

「特務一尉はリリスという時、一番嬉しそう。」

「それはレイが勝手にそう思っているだけだろ。」

「そんなことない。……リリスが抱き付く時、特務一尉は優しく受け止めてる。」

「それは……しようがないだろ。」

「嫌なら嫌だと特務一尉は言える。でも言わない。」

実際コウスケは危ないとは言いが嫌だとは言わなかった。

「それにリリスを見ている時の特務一尉の目は私の時よりも優しい。」

思わぬレイからの猛攻であった。

レイはニヤリと笑っている。

「そうだったんだ。コウスケさんってリリースさんのことが好きだったんだ…」

シンジは意外だという表情を隠さなかった。

「そんなことない。」

「本当にそうですか？」

レイがじっと見つめてくる。

「当たり前だろ。」

「リリースに代わっても同じことが言えますか？」

「ぐ……」

(本人を目の前にして……)

そう考えたときリリースの悲しそうな顔が浮かんだ。

コウスケは何も言えなくなった。

二人はそんなコウスケを楽しそうに見ていた。

・
・
・

コウスケはなんとか切り抜けた。

レイが学校に登校する前に鏡の前で笑顔を作る練習をしていることをばらすという、かなり大人げない切り抜け方だった。

レイは真つ赤になりながらコウスケに謝ることになる。

「シンジ君、何故レイがそんなことしているのかわからないって顔だな。特別に教えてやろう。レイはな、いか…」

「特務一尉ごめんさい。私が悪かったです。敗北を認めます。だからそれ以上言わないで…」

「別いいだろ？ それにもうばれたみたいだしな。」

「……特務一尉のいじわる………」

ちなみにレイがそんな練習をしている理由は、とある少年のためにだ。

シンジは夜遅くになったということで葛城家に帰って行った。

レイはリリスと代わっている。

コウスケはリビングで残業を片付けていた。

「ねえ、コウスケ。」

そんなコウスケにリリスが声をかける。

「どうしたんだ？」

「シンジを呼んだのって何か話したいことがあったのよね。」

リリスがいつになく真面目な顔になっていた。

「……そうだよ。」

「何の話だったの？」

「……………レイは？」

「寝てるわ。」

「そうか。」

コウスケはPCを閉じた。

「今日、赤木がレイの定期検診の結果を持ってきてくれた。」

「どうだったの？」

「……………」

これを言うべきなのか

コウスケは迷っていた。

これを信じたくないという心情が働いていた。

だが、決心してコウスケは口を開いた。

「一か月後にレイは死ぬ。」

リリースは目をぱちぱちさせていた。

「死ぬ？ ……レイが？」

「心臓の組織が衰弱し始めているらしい。……………MAGIの計算では持つても一か月だそうだ。」

「どうして？　今まではそんなことなかったんでしょ？」

コウスケは一枚の資料を差し出した。

レイの体の組織の活性度を示すものだ。

「この日を境に変わった。」

折れ線グラフは三つの坂で出来ていた。

一つ目は下り坂になっていて、コウスケと同居する前

最もコウスケと同居した日に近づくにつれて下り坂は緩慢になっていた。

真ん中は同居した後

緩やかながら上向きになっていた。

だが、それも突然下り坂に変わっていった。

それが三つ目の坂だ。

二つ目と三つ目の坂の境目をコウスケは差していた。

「この日って……」

「そう、俺とリリースが初めて会話をした日だ。」

忘れるわけがなかった。

あの時ほどコウスケが焦ったことは無かった。

「……もしかして私が原因なの？」

リリスの声は恐る恐ると言う表現が正しいほど震えていた。

「あくまで推測に過ぎないが、リリスが表に出てきたことが原因らしい……」

「なら、私がいなくなれば……」

コウスケは首を横に振った。

「そうしてもダメらしい。……衰弱が思ったより進行している。リリスが離れても一年がやっとだそうだ。」

「そんな……」

「……親より先に死ぬなんて親不孝な奴だな…………」

リリスは黙っている。

コウスケもそれ以上言う言葉が見つからなかった。

……

翌日

綾波執務室

コウスケはいつも通りに執務室にいた。

朝、レイはいつも通りに学校へ登校していった。

その様子から昨日の話をレイは知らないようだった。

ただ、コウスケは気がかりな事があった。

あの後、黙っていたリリスは

「ねえ、私がおかしても信じてくれる？」

などと言ったのだ。

いきなり何を言いだすのかと言いたかったが、リリスの目が真剣であったためコウスケは頷いていた。

ふと時計を見るとレイたちはNERVに登庁している時間だった。

「いったい何をするんだ？」

コウスケの眩きは人知れず消えていった。

・
・
・

同時刻

NERV第6ゲージ

ここにはアスカの搭乗機であるEVA式号機が格納されている。

初号機のある第7ゲージと作りは同じでEVAの顔の前にブリッジがある。

そこに青い髪の少女が一人

「行きましよう。アダムの分身、リリンの僕。」

その言葉と同時に式号機の目が光る。

・
・
・

NERV第二発令所

コウスケは警報を聞きつけて発令所に駆け付けた。

「状況は？」

コウスケの声に日向がすぐに応答した。

「EVA弐号機が起動しています！」

（弐号機が起動？ どういうことだ…）

発令所からの発進命令が出ていなければ、弐号機を使った実験もない。

弐号機が何故、起動したのかわからなかった。

「アスカは！」

「確認済みです。パイロット控室に移動中です。」

「無人です！ 弐号機にはエントリープラグが挿入されていません！」

（無人……ダミーでもないな…）

尚更わからなかった。

弐号機が何故、動けるのか…

この時、コウスケの脳裏にピンと来るものがあった。

（まさか…）

「セントラルドグマ周辺にATフィールドの発生を確認！ パターンブルー……使徒で

す！」

日向の報告を聞いてコウスケは誰が式号機を動かしているのかわかった。「モニターに出ます。」

発令所のメインモニターを見てコウスケ以外の全員が驚いていた。ゲンドウや冬月ですら唸っていた。

「れ、レイちゃん!?!」

伊吹がかろうじて声を出せたようだ。

モニターにはNERV職員なら誰でも知っている蒼い髪の少女がひどく無表情で映っていた。

式号機はそれを守る騎士のようにそびえ立っている。

(リリース……何故だ。)

発令所にミサトとリツコも駆け込んできた。

「……レイ!?!」

「……………」

リツコは黙ってモニターを見ていた。

「これはどういうこと? コウスケ君!」

「綾波特務一尉……」

視線がコウスケに集まる。

前からは憐れみと同情

後ろからはどう責任を取るのか

上からは成すことを成し遂げろ

「……あれを第十五使徒と識別……个体名はリリスと名づける……」

「でも……」

「あれは使徒だ。レイの体に寄生したんだろ。……殲滅だ。」

「しかし……」

日向が何かを言おうとするが言えなかった。

コウスケが無表情でモニターを見つめていたからだ。

・・・

セントラルドグマ メインシヤフト

リリスは式号機を従えて下に降下している。

「今頃大騒ぎだね……」

リリスは悲しそうな表情になるが、それも一瞬だった。

「でも、あなたにとつては一石二鳥のはず……」

リリスが下を見ると、隔壁が閉まっていった。

「……来てくれるかな……」

その眩きは誰にも聞こえない。

・
・
・

NERV第二発令所

「初号機で追撃だ。……構いませんね。」

コウスケはゲンドウに確認を取った。

初号機は凍結処分が下されている。

その撤回を求めたのだ。

「わかった。初号機に追撃させろ。」

その指示を聞いてオペレーターが一斉に動き出した。

「何故、弐号機なのかしら?」

ミサトが言わんとしていることはわかる。

レイの体ならば零号機で行くこともできたはずだ。

「単純な計算だ。零号機で行けば追撃が増える……だからだろう。」

「それにシンジ君のことも考えてるのね。」

リツコが付け加えるように言った。

「シンジ君?」

「そうよ。使徒とは言えレイの体よ。」

「……そう言うことね。」

それを聞いたコウスケは

「すまんが、後を頼む。」

とミサトに言う。

「なんで？」

「……子供の尻拭いは親の務めさ。」

そうしてコウスケはゲンドウを見た。

「構わん。」

ゲンドウは一言言った。

コウスケは発令所を出ようとした。

「コウスケ君！」

ミサトが止める。

「大丈夫よね？」

「……刺し違えてでも止めて見せるさ。」

それだけを言うとコウスケは走り出した。

・
・
・

初号機エントリープラグ内

シンジは表立って騒ぐことは無かったが、内心では平然としていられなかった。
(綾波なわけがない……リリスさんどうして……)

そう思っていると式号機の姿を確認した。

「いた……」

初号機は式号機に迫いつくつと式号機に掴みかかった。

式号機もそれに応じる。

初号機と式号機で取っ組み合いになった。

「リリスさん、どうして……」

「レイのためよ。」

「綾波の?」

シンジにはわけがわからなかった。

レイのためならば何故こんなことをするのか

「それなら止めてよ! どうしてこんなことをするんだよ!」

「ダメよ。……私の本体が必要なのよ。」

この時、シンジはこれもリリスの計画だったのではと考え始めていた。

サイドインパクトを起こすのに障害となるものを排するために人に近づいたのでは

「……リリスさんは裏切ったんだ……僕たちを……なによりコウスケさんを！」

「……あなたに何がわかるの……」

「そうじゃないか！ 今こうして……」

シンジは言葉を続けられない。

……リリスが泣いていたのだ。

「あなたに何がわかるの？ ……私はリリンと一緒に成れない。……リリンはリリンに惹かれ合うもの……コウスケだって……」

シンジはハツとなってリリスを見た。

「そんなことない！ コウスケさんだって……」

「下手な慰めはいらさないわ。」

式号機がプログレッシブナイフを取り出し、初号機の胸に突き刺した。

その痛みがシンジにも伝わる。

「ぐ……このー！」

初号機も負けじと式号機の首に突き刺す。

「リリンにとつて忌むべき存在……それを使ってまで生きようとする……不完全でありながら不完全ではないのね……」

リリスは目を瞑った。

・
・

NERV第二発令所

突如大きな振動に見舞われた。

「どうしたの？」

「これまでにない強力なATフィールドです！」

「光波、電磁波、粒子も遮断しています！ 何もモニターできません！」

オペレータの報告を聞いたミスатоは呟く。

「まさに結界か……」

横ではリツコが何とかモニターしようと伊吹に指示を出している。

ミスатоは一人の男を思い出した。

「コウスケ君は？」

「ダメです。反応をロストしました。」

「……頼んだわよ。」

・
・

NERV通路内

コウスケは走っていた。

あと少しでターミナルドグマ最深部直通エレベーターにたどり着く

そう思った時、大きな振動が起こった。

「……やり過ぎだ。」

それをリリスがやったことを直感で感じた。

「……あのバカ野郎……」

コウスケはエレベーターに飛び乗った。

・
・

ターミナルドグマ　ヘブンズドア前

コウスケはついにたどり着いた。

後ろでは何かの音が聞こえてくる。

式号機と初号機が戦闘しているのだろう。

だが、徐々に近づいていることはわかった。

コウスケは暗い通路を進んでいく。

いつもなら嚴重な隔壁があるのだが、今は開いていた。

その隔壁を越えるとLCLの池と目的の人物がいた。

「リリス……」

コウスケが声をかけるとリリスは振り返った。

「来てくれたのね。」

よく見ると白い巨人に刺さっていたロンギヌスの槍が無くなっていた。

コウスケは特に気にせずリリスに近づいた。

「何をするんだ。」

「レイの治療よ。」

「レイの?」

「そのためには私の本体が必要なのよ。」

そう言うとりリスは白い巨人の方に振り返った。

「……止めないの?」

「何言ってるんだ。信じろと言ったのはリリスだろう?」

コウスケの方からリリスの顔は窺えなかったが、嬉しいという感情だけは伝わった。

「そうよね……ありがとう。」

リリスの体から一つの紅い光が離れた。

コウスケは膝から崩れ落ちるレイの体を抱きとめる。

赤い光は白い巨人に呑み込まれていった。

白い巨人―リリスが楔から離れてLCLの池に降り立った。

LCLが雨のようになり、コウスケたちを打ち付ける。

リリスが腕をコウスケの方に向ける。

途端にレイの体が光った。

光は徐々に薄くなり、やがて消えた。

コウスケはとっさにレイの状態を確認する。

「……見た目、脈、呼吸音ともに異常なし。気を失っているだけか。」

そう言うときコウスケはほっとした。

それと同時に何かが倒れる音がした。

式号機だった。

頭には初号機のプログレッシブナイフが刺さっていた。

その先には初号機がこつちに歩いて来ていた。

『コウスケさん！』

「シンジ君か。」

『綾波は？』

「大丈夫だ。」

レイを確認した初号機はリリスに目を向けていた。

『リリスさん……ですね。』

『そうよ。』

レイと似ているがレイとは違う声が聞こえた。

リリスのどこから声を発しているのかわからなかった。

まるで心に直接語り掛けてくるような感覚だった。

『さて、私のしたいことは終わったし……その槍で刺してくれば元通りになるわ。』

初号機は動かなかった。

『……間違ってますよ。そんなこととしてコウスケさんが喜ぶわけないじゃないですか

……』

「何を言ってるんだ？」

『リリスさんは死ぬ気なんですよ！』

「何!？」

コウスケはリリスに視線を送る。

「死ぬだと？ いったいどういことだ！」

リリスはコウスケを見ていた。

なかなかの威圧を感じるが、コウスケはそれどころではなかった。

『そのままの意味よ。使徒を倒して終わり……ただ、それだけよ。』

「使徒って……まさか……」

『さあ、早くしてちょうだい。』

リリスは両手を広げていた。

『……やっぱりダメなのね。でも……』

コウスケはリリスの言葉にはつととなった。

「シンジ君！ 弐号機を止めろ！」

コウスケの声に初号機が弐号機の方に振り返る。

いつの間にか弐号機はロンギヌスの槍のそばにいた。

初号機が止めに入る。

弐号機はロンギヌスの槍を手にした。

初号機が弐号機を後ろから羽交い締めにする。

『どうして邪魔するの？ あなたたちNERVの仕事でしょ？』

「なんでこんなことをするんだよ。」

『……こうすれば使徒として私が記録に残るわ。そうすれば覚えてくれるでしょ？』

「……バカ野郎……」

『何？』

「お前さんはバカ野郎だ。……こんなことするバカなんて一瞬で忘れるわ。」

コウスケの言葉にリリスは狼狽していた。

『……レイは治療したし、使徒は殲滅される。それに私がいなければサードインパクト

も阻止できるのよ。』

「だから死ぬのか？」

『そうよ。』

コウスケは俯いた。

後ろでは初号機と貳号機の争いが続いている。

「……初めてだったんだよ。」

コウスケはぼつりとはつきりと言う。

「俺のために何かをしてくれた人はお前さんが初めてだったんだよ。」

『それはコウスケが気づいてないだけ……』

「そうだよ。だからだ。」

『いったいなんのこと？』

「……昨日、料理を作ったのはお前さんだろ？ レイから聞いた。」

『それがどうしたの……料理ならレイだって……』

「確かに……でも今までで一番うまいと思った。」

レイの顔に滴がぼつり、ぼつりと落ちていた。

「もう、俺のために作ってくれないのか……」

リリスはただじつと聞いているだけだった。

・
・
・

NERV第二発令所

「綾波コウスケ特務一尉、只今戻りました。」

「「綾波特務一尉！」」

コウスケは発令所に戻っていた。

リツコはレイの検査を行っている。

「コウスケ君！ 無事だったのね。」

「すまん、心配かけたな。」

「全くですよ。反応がロストした時はもう終わりだと思いましたよ。」

青葉が軽い口調で言っていた。

「ところでコウスケ君……」

「なんだ？」

「その人は誰なのかしら？ 一般人を入れてほしくないんだけど……」

ミサトはコウスケの横にいる人物を指さしながら言う。

その人物はビクリと反応するとコウスケの後ろに隠れてしまった。

「ん、誰かに似てるわね。」

アスカが何かを思い出しながら言う。

「レイちゃんに似ていますね。」

「でも、髪は黒いぞ。」

「目も黒いですしね。それにどこことなく大人っぽい……」

オペレーターたちが次々に言った。

上では

「碓、見たか？」

「ああ、ユイにそっくりだ。だが、違う。」

そんな発令所の反応にコウスケは笑っていた。

「ほれ、隠れてないで出て来いよ。」

コウスケに促されてその人物はコウスケの後ろから出てきた。

姿形はレイと似ているが髪は黒く、瞳も黒かった。

肌の色もレイとは違い普通の人と変わりがない。

背丈はレイより高いがミサトより小さかった。

服は少し大きいようで、襟と袖の端に白いラインが入った黒いシャツに黒いスラック

スを着ていた。

スラックスは少し折り畳んでいる。

靴はリツコから借りたハイヒールだ。

「それ……コウスケの制服よね。」

アスカが指を差しながら言う。

「着る服がなかったからな。」

「それで誰なの？」

「ああ、リリスだよ。」

コウスケの言葉に発令所全体に緊張が走った。

青葉と日向はUSPを取り出したが、何かに弾かれた。

コウスケがグロック17でUSPだけを正確に撃ち抜いていた。

「綾波特務一尉！」

「使徒をなんで……」

（まあ、無理もないか……）

「彼女は人として生きる道を選んだ。ただ、それだけだ。」

それを聞いたゲンドウが口を開いた。

「リリス。」

「な、何？」

「今の話は本当か？」

「ええ。」

それを聞くとゲンドウはフツと笑った。

「リリスは人として生きることを選んだ。……私は受け入れよう。」

「ふむ、そうだな。人として生きることを選んだというのであれば、ことを荒げることもあるまい。」

NERV首脳部が認めたのだ。

青葉と日向も消極的ながら同意した。

「説得したんですね。」

伊吹がコウスケに言った。

「まあな。」

「え〜と……リリスでいいのかしら。」

「ええ。」

「なんで人として生きようと思ったのかしら?」

伊吹は興味本位で聞いたのだろう。

思ったよりも軽めに話していた。

見た目が人とかわりがないからだろう。

そんな伊吹の様子にほっとするコウスケであった。

「私自身が人として生きたいと思ったから。それに………」

リリスは何やら赤くなりながらもじもじとしていた。

「コウスケがプロポーズしてくれたから……」

リリス以外の全員に電流が走った。

コウスケとて例外ではない。

「プロポーズって……」

「あの……結婚してくださいってことだよな……」

「それも綾波特務一尉が……」

「ちよつと待て！ 俺がいつそんなことを……」

リリスが上目使いでコウスケを見る。

とても悲しそうだ。

「違うの？ あれはそういう意味じゃなかったの？」

「う……いや……そのだな……」

「だから私、リリンになったのに……」

リリスはさめざめと泣き始めた。

コウスケに向けて一斉に白い眼が向けられた。

さすがにコウスケも狼狽していた。

そこに制服に着替えたシンジが発令所に現れる。

「どうしてリリスさんが泣いてるんですか？」

「シンジ君。コウスケ君がプロポーズしたってホント?」

ミサトがシンジの疑問に答えずに聞いた。

ことの真相を知るものはコウスケとリリスの他にはシンジしかない。

「プロポーズ?」

アスカがミサトに変わって聞いた。

「……リリスを説得したとき、コウスケはなんて言ってたの。」

コウスケはシンジを睨んだが、必死に思い出しているシンジは気付かなかった。

「確か……リリスさんの料理がうまいと言っていて……俺のために作ってくれないのか
……そう言ってたよ。」

それを聞いたミサトは少し呆れて

「うくん……プロポーズに取れなくはないわね……」

と言った。

ざわざわと外野が騒ぎ始める。

リリスは泣いている。

コウスケは狼狽えている。

シンジはぼかんとしている。

アスカは放心状態のようだ。

ミサトはどう事態を收拾すべきか迷っている。

冬月はコウスケを興味深そうに見ている。

ゲンドウはニヤリと笑っている。

そんな時、リツコも発令所に現れた。

「レイの検査結果が……これはいったいなんの騒ぎなのかしら？」

「先輩！ 実は……」

伊吹がリツコに耳打ちした。

リツコはどこか納得していた。

（チャンスだ！）

「それで赤木、レイはどうなんだ？」

これを機にコウスケは話の転換を行おうとしたのだ。

「レイは無事よ。目覚めれば退院できるわ。それに体が100%人になっていたわ。」

リツコの言葉に青葉と日向以外の全員がその意味を知った。

「姿形は変わらないけど、私たちと同じになったのよ。」

リツコは一息つくときさらにつづけた。

「それに遺伝子も変わっていたわ。……コウスケ君、あなた名実ともにレイの父親よ。」

発令所がさらに騒がしくなった。

一方コウスケは難しい顔をしていた。

「何？ 嬉しくないの？」

そんなコウスケにミサトが聞いた。

「そんなことは無い。俺にとつては重畳だ。」

「なら、なんでそんな顔をしてるの？」

「……俺と同じでは無くて父親と言うことは、母親もいるんだろ？ 誰なんだ？」

（碓ユイなんて言わないだろうな……嫌だぞ。）

ふと見るとゲンドウも難しそうな顔でコウスケを睨んでいた。

おそらくコウスケと同じ考えをしたのだろう。

シンジも複雑そうな顔でコウスケを見ていた。

「……………わからなかったわ。」

「はあ？」

「MAGIには世界中の人のデータが登録されているのにわからなかったの。……………」

から出る答えは一つね。」

リツコが何を言いだすのか皆が集中していた。

「リリスしかいないわ。」

「どうしてそうなるんだ！」

コウスケは思わず叫んでいた。

「なら検査してみればわかるわよ。少しいいかしら。」

リツコはリリスに近づいて髪を一本抜いた。

既に泣き止んでいたリリスは痛みで再び涙を流すことになる。

リツコはリリスの髪を何かの機械にかけて操作する。

「……出たわ。やっぱりレイの母親はリリスね。……しかもリリスも人になってるわ。」
「てことは……」

「レイはコウスケ君とリリスの間に生まれた子供……そうなるわね。」

発令所が今までにないくらい騒がしくなった。

「リリス……なんで……」

「こうすればコウスケは私がいなくなっても覚えてくれると思ったの。……コウスケなら気づくって……」

リリスは顔を俯かせていた。

「嫌だった？ ……嫌よね……」

そんなリリスにコウスケは

「いひゃい！ いひゃい！」

思いっきり両頬を抓った。

「勝手にこんなことしやがって！ 30で14の子供がいるってどういうことなんだよ！」

コウスケはすでに誕生日を迎えている。

第十四使徒と戦闘した次の日であったが、被害が大きすぎてコウスケ自身も忘れていた。

シンジがサルベージされた後にコウスケは気付いたがさほど気にしていない。

発令所にいたメンバーは今の言葉で初めて気づいた。

コウスケ自身はレイのことを娘のように思っているが、本当の娘となるとさすがに平然としてられなかった。

単純な話がコウスケが15歳の時にレイが生まれたとなってしまう。

「ごへんなしやいー！」

「全く……」

コウスケはリリスを抱き寄せた。

「この大バカめが……」

そう優しく言うのであった。

・
・
・

使徒との戦いが終わったあと発表された使徒との戦闘記録がある。

通称「葛城レポート」

そこには第三使徒からの戦闘記録が残されている。

それを見た人々は使徒の脅威を想像し震えあがるが、誰もが必ず目に止めるものがあつた。

それは第十五使徒に関する記録だ。

第十五使徒はファーストチルドレンと式号機を乗っ取る。

初号機で追撃するも、ターミナルドグマの最深部に侵入を許してしまった。

だが、同時にたどり着いたNERV作戦局第二課課長が説得に成功する。

そのような内容が書かれていた。

その他のレポートは当事者たちの話とまみえて事実であるとされている。

そのため第十五使徒に関する記述も事実であると認識されている。

そうなる疑問が出てくる。

説得に応じた使徒はどこにいるのか

それは今だに公開されていない。

ただ、その説得した人物には「使徒を口説き落とす男」と言う二つ名と妻と娘がいるということだけは確認されている。

第39話 人の歴史

第十五使徒襲来からすでに2週間が経とうとしていた。

特務機関NERV

人類の脅威になっている使徒との戦闘の最前線にある国連の非公開組織である。

人材の豊富さと能力の高さ、何より技術力の高さは他の組織では見られないだろう。

とはいえNERVも人が集まるだけあって、大企業や中小企業、各自治体、学校などで見られるものも当然ながら存在する。

噂話である。

この手のものは多岐のジャンルとともに必ずと言っていいほど存在する。

だが、最近のNERVでの噂話は専ら「一組の夫婦」に向けられていた。

「ねえ、聞いた？ 綾波特務一尉のこと。」

「知ってるわ。なんでも昔、生き別れになった妻と再会したそうじゃないの。」

「しかもあのファーストチルドレンこと綾波レイが実の娘だったんだって。」

「でも、最初のころ赤の他人って言ってたわよね。」

「わからなかったんでしょ？ セカンドインパクトの混乱時に別れたって聞いたから死

んだと思ってたのよ。」

「レイちゃんもよかったわね。」

「今どき片親なんて珍しくないからね。」

「ちよつと残念だな……」

「諦めなさいよ。妻と子供がいたら勝ち目なんて無いわよ。」

「綾波特務一尉が誰とも付き合わなかったのはずっと奥さんのことを思ってたのね。」

「それが15年を経て感動の再会……ロマンチックだわ。」

……

「いいな、綾波特務一尉は……」

「確かにな……」

「あんな可愛い奥さんがいたなんて……」

「しかも母親似の娘までいるんだろ？」

「綾波特務一尉はよく綾波レイにちよつかいだしてたろ。」

「妻に似てるからだだったんだな……」

「そしてその子が何でもない実の娘だったんだからな。」

「ん？ 待てよ……綾波レイは今、14歳だろ？」

「綾波特務一尉は30だし……」

「……案外手が早いんだな……」

「これが上級職員になると話が変わってくる。

「おい、見たか？」

「見たよ。使徒だなんて嘘だと言いたいくらい美人だった。」

「綾波特務一尉もやるよな……」

「使徒を口説くなんて普通でできないよな。」

「そのおかげであんな美人さんが妻になるんだから綾波特務一尉も役得だよな。」

「なら、お前もやってみたらどうだ？」

「止めてくれよ。俺は普通の女性がいいよ。」

「でも、プロポーズの時に俺のために料理を作ってくれと言ったらしいな。」

「それもうまかったと言ったとか……」

「いつ食べたんだ？」

「……綾波レイが使徒だったなんてことはないだろうな。」

「そんなわけあるか。第一、そうだとしたらNERVはもう終わってるだろ。」

「それに赤木博士直々に綾波特務一尉の子供って証明されたんだからそれはないだろ。」

「そうだよな。ははは……」

「おい、待てよ。」

「どうしたんだ？」

「いつ産んだんだ？」

・
・
・

真実と虚偽が混じっている噂話がNERVで飛び交っている。

そんな噂話の起点になっている人物たちは一つの執務室にいた。

執務室の正式名称は作戦局二課課長執務室

通称「綾波執務室」

そんな執務室も今では「綾波夫妻の部屋」などと呼ばれている。

最も本人たち―特にコウスケの前でそう言うものはいない。

そのように呼ばれている執務室でコウスケは何とも言えない顔をしていた。

コウスケの前には何枚かの書類がある。

それに赤ペンでコウスケは修正を入れる。

ふとコウスケが視線を上げると、シャギーの入った黒いショートカットでコウスケと

同じ色のジャケットを着た女性がデスクで何かを必死に書いている。

「赤……青……緑……」

などと呟いている。

「まだか？ リリス。」

「もうちよつと待って！」

ふくつとコウスケはため息をついた。

「……できた！」

リリスはニコニコの笑顔でコウスケに一枚の紙を差し出した。

「じゃあ、これは修正だ。」

コウスケはリリスに一枚の紙を返した。

それを見たリリスは目を丸くしながら驚いている。

「ええ〜！ こんなにあるの？」

「間違った分、書き直した。」

「これは間違っていないじゃない！」

リリスは一つの字を差している。

かろうじて「諸」と読めるが「緒」にも見えなくはない。

「バランスが悪い。何が書いてあるのかわかりづらい。よって修正だ。」

リリスは膨れっ面になった。

「うう…コウスケのいじわる……」

「俺は別にいいんだぞ？ リリスが止めたいのなら。」

「わかったわよ……」

そう言うとりリスはせつせと漢字の書き取りに入った。

そんなりリスを見ながら

(俺はいつ教師になったんだ?)

などと思うのであった。

この時、コウスケは自分が教師になった姿を想像した。

何故かレイたちが通う第三新東京市立第壱中学校で数学を教えていた。

同僚にミサトやリツコ、加持、日向に青葉、伊吹と言ったNERVの職員が出てきたのはコウスケの想像力不足によるものだろうか…

ちなみに榛名ミツヒサは用務員、吹雪シンゴは非常勤講師、長良ユキは養護教諭、剣崎キヨウヤは守衛だったりする。

校長は冬月でゲンドウは国連の研究所の所長であったのは余談だ。

コウスケがりリスに漢字の書き取りをやらせているのは嫌がらせをしているのではない。

ある意味自分のためである。

りリスが人としてNERVで働くことになったのだが、場所は当然ながらコウスケの執務室になった。

ちなみにリリスがコースケの執務室に来てから禁煙となつている。

そのまま放置してもリリスがあれこれと何かしてくるのは目に見えていたため、コースケは自分の仕事の一部をリリスに任せただ。

リリスはコースケを手伝えることに喜んで仕事をやるのだが、問題が発生してしまつた。

これを書いてくれと任せた書類をコースケが確認すると

「なんだこれは……英語ではないな……ドイツ語でもないし………へブライ語なのか？ あるいは俺の知らない古代語なのか？ もしやリリス語？」

と呟いてしまうほど何が書いてあるのかわからなかつた。

そのためコースケはMAGIを駆使し、古代語を懸命に探すなどをして解読に努めた。

どうにか解読に成功してMAGI三台とコースケの全会一致で現代の日本語であることに間違いと確信する。

特にMelchiorが日本語で間違いないことにいろんな根拠を持ち出して証明していた。

とにかくMelchiorに解読を任せて何とか文字を把握できたコースケだったが、誤字が多かつた。

最もリリスの書いた原文は誤字では済まされぬ文字の方が圧倒的に多い……
ちなみにレイは大学生でも書けない漢字を普通に書ける。

それもかなり綺麗だ。

そのためリリスもそうであると思ったのがコウスケの運の尽きである。

コウスケが調べた結果、リリスは読みは誰にも劣らないが書きはまるでダメだった。

文字の書き取りをやっているリリスを見てリツコは

「リリスと言えば私たち人類の母とも言えるのよ？ そんな彼女に文字の書き取りをやらせるなんてあなたくらいなものよ。」

と言うが、コウスケが差し込んだ例の書類を見て納得していた。

ちなみにそのことを知ったアスカはリリスに対抗心を出して漢字の書き取りをやっている。

「人としては私の方が十何年もやってるのよ！ 今度は負けられないわ。」
だそうだ。

やけにむきになっているとミサトから聞いたが、その理由を聞いてもミサトは苦笑いを浮かべるだけだった。

とにかくそういうわけでリリスは必死に漢字を書いている。

リリスが必死に練習するわけはコウスケにもわかつている。

正直に言うとかかなり嬉しいのだ。

コウスケの手伝いをしたいという思いがひしひしと伝わってくるからだ。

泣きながら書いているリリスに何度も心が折れそうになるが、これもリリスのためと必死に自分を奮い立たせ鬼になっている。

ぶつぶつと呟きながら書いているリリスを横目に再びコウスケはデスクから数枚の書類を取り出して目を通した。

実を言うとコウスケが何とも言えない顔をしていたのはこの書類のためである。

書類には綾波家一同の経歴が書かれていた。

綾波コウスケ

性別：男

年齢：30

血液型：B (BO)

生年月日：1985年1月16日

階級：特務一尉

：

2000年

セカンドインパクトで両親と死別、また妻と娘とも生別

2006年

国連軍士官学校に入学、適正からパイロットコースに配属

2010年

同校を卒業、国連軍第8航空団に配属、階級：少尉

F-15Eを受領

テロ組織のNN爆破を阻止、コードネーム「アロー3」が定着

2011年

国連軍第4航空団に転属、中尉に昇格

2012年

様々な不祥事から少尉に降格

ロシアに保管してあったSu-37を受領

国連軍第2航空団に転属

2013年

国連軍第9航空団に転属

2014年

国連軍第13航空団に転属、中尉に昇格

2015年

特務機関NERVに転属、特務二尉に昇格

後に特務一尉に昇格、妻―綾波リリスと娘―綾波レイと再会

綾波リリス

性別：女

年齢：29

血液型：O

生年月日：1985年3月30日

階級：三尉

：

2000年

セカンドインパクトで夫と娘と生別

2000～2014年

詳細な経歴は不明

2015年

第三新東京市にて保護

夫―綾波コウスケと娘―綾波レイと再会

現在、NERVに勤務

綾波レイ

性別：女

年齢：14

血液型：O

生年月日：2000年3月30日

階級：准尉（特務機関NERVのみにおける待遇）

：

2000年

両親と生別、施設にて保護

2005年

碇ゲンドウが引き取る

EVAとのシンクロが可能であることがわかり特務機関の権限で汎用人型決戦兵器

人造人間EVAANGELION零号機専属パイロットに任命

2006年

第三東京市立第壹小学校に転校

2013年

第三東京市立第壹小学校を卒業

先天性のアルビノ治療により長期入院

2014年 第三東京市立第壱中学校に入学

2015年 父―綾波コウスケと母―綾波リリスと再会

これを見た時、さすがにコウスケは切れた。

怒涛の勢いで総司令執務室に殴り込みまでかけたのだ。

「これはどういうことですか！」

「よくできているだろう？ 全く苦勞したものだよ。」

冬月は満足そうな顔だった。

ゲンドウも心なしか満足そうだ。

「これじゃ、自分ほとんどでもない奴じゃないですか！」

コウスケが気にするところは2000年のところだ。

リリスと生き別れたというのはいい。

だが、この時すでに妻と言う表現が気に食わなかった。

コウスケの記憶では両親は一般的な常識を持っていた。

最も父親はコウスケに変な歌を教えるような人だったが…

「別に構わんだろう？ それに君も合法的にユイ君に似た……いや、あんな美人を妻にできるのだ。嬉しかろう。」

冬月は顎に手を添えながらしきりに頷いていた。

「しかし…」

「そこまで嫌がるなら離婚したことにする。」

ゲンドウがおもむろに口を開いて言った。

「離婚か……つらい現実だな……」

冬月はさもつらそうにしている。

だが、それが演技であることはすぐにわかった。

ゲンドウがじわじわとプレッシャーをかけてくる。

「レイの経歴にも書き足さねばなるまい。」

「致し方あるまい。この場合は両親はすでに離婚となるな…」

「それにリリスも悲しむだろう。」

「やけを起こしてサードインパクトなど起こさねば良いが…」

これを聞いた時、流石にコウスケも肝が冷えた。

人として生きているが、リリスは自在にATフィールドとアンチATフィールドを展開できる。

リツコによればリリスがアンチATフィールドを全力で使えば、残っている全生命体をLCLに還元できるらしい。

レイの治療に使ったのもアンチATフィールドである。

ただ、アンチATフィールドをそのまま使うとレイの存在が無くなってしまったため、リリースのATフィールドでレイの形と魂を留めていたという。

とにかくそれを言われてしまうとコウスケは何も言えなくなってしまう。

自分の不用意な発言でサードインパクトなど冗談ではない。

最もコウスケはリリースが妻になるのは別に嫌ではないのだ。

ただ、妻になった年が問題なだけだ。

だが、ここでまた騒いでも二人は変更しようとはしないだろう。

目の前の二人とそのバックボーンが企てたシナリオであることを感じ取り、もはやどうでもよくなっているコウスケであった。

「…わかりました。それでいいです。」

「わかってくれたか。」

「君なら必ず納得してくれるものと思っていたよ。」

・
・
・

そういうわけでコウスケは二人から荒が出ないようにこの経歴書をよく覚えておくようにと押し付けられたのである。

そしてコウスケはもう一枚の書類を見た。

婚姻届である。

コウスケとリリスのものだ。

既にコウスケとリリスの名前は書いてある。

コウスケはこれを書いた記憶はない。

リリスはようやくやくひらがなを書けるようになって漢字は満足に書けない。

当然ながらゲンドウが仕組んだものである。

おそらくそう言ったプロに任せただろう。

だが、そんなことはコウスケに取ってどうでもいいことだった。

コウスケが気にしているのは証人の欄である。

リリスは当然ながらコウスケにも親族はいない。

コウスケは証人の欄を見てため息をついた。

「ある意味、最強の証人だな……」

知る人が見れば目を疑うこと間違いなしだなともコウスケは思った。

証人には碇ゲンドウと

「いつの間に書いたんだよ……」

カタカナで書かれた

「あのくそじじいめ……」

キール・ローレンツの名前が刻んであった。

・
・
・

第十五使徒襲来から数日後

『これよりSEELLE緊急会議を始める。』

目の前にSEELLE01と書かれたモノリスから年老いた男性の声が鳴り響いた。

辺りを見回すとコウスケの横にはゲンドウが座っており、その周りをモノリスがぐるりと取り囲んでいた。

数を数えると13までであった。

普通なら萎縮するだろうがゲンドウは平然といつものポーズで座っていた。

反対側にはコウスケにぴつとりとくつついているリリスがいる。

とは言ってもライトが照らされていないのでリリスの姿は見えずコウスケも自分の姿を見ることはできなかったが、立っていることだけは足の間で感じる。

腕からはほのかな温かみと柔らかい感触を鮮明に感じる。

違う場所であつたらコウスケも平然としていられなかつただろう。

『碇、これはどういうことだ。』

『第十五使徒を殲滅ではなく説得…』

『しかも個体名がリリス…』

『まさかとは思うが、第二使徒のことではあるまいな。』

モノリスから次々と声が聞こえてくる。

「そのとおりです。」

ゲンドウは平然と言い返した。

『報告によれば、ファーストチルドレンに寄生していたとのことだが…』

『まったくもって不可解だよ。』

『死海文書に予言されていた出来事から外れているな。』

『第一、次の使徒は鳥の使徒ではなかつたのかね？』

『この修正、容易ではないぞ。』

モノリスが討議を続けている。

何とも奇妙な感覚に囚われるコウスケであつた。

『ところで、説得したというリリスは今どこにいる。』

モノリスの一つからゲンドウに向けて不意に質問が来た。

「NERVにて保護しております。」

『ターミナルドグマに拘束したのかね?』

「いえ、彼女は人として生きています。」

ゲンドウの答えにモノリスが騒がしくなった。

『リリスが人として生きているだと…』

『そんなことありえん。』

『左様、リリスは我らとは違う存在…』

『そんな存在が人として生きるなど到底不可能だよ。』

コウスケは暗くて見えないものの自分がどんな顔をしているかわかっている。

もし、それが見えたならば明確な殺意が見えていただろう。

ふと何かが震えているのがわかった。

横にいるリリスだ。

SEELIEの無神経な発言に相当不安になっているのだろう。

コウスケはそっと抱き寄せるのであった。

「現にリリスは人として生きております。この場にも証人としてすでに召喚しております。」

ゲンドウがそう言うときウスケたちがライトアップされた。

『……碓君、まさかとは思いますがそこにいる女性がリリースとでも言いたいのかね?』
『見たところ君の妻に似ているようだが……』

『それになんの関係がない者もいるが、これはどういうことかね?』
『彼こそリリースを説得した張本人です。』

モノリスがざわざわし始めた。

『君は……綾波コウスケ特務一尉だったな。』

「はい。」

思ったよりも無機質に返答した。

『綾波特務一尉、君の横にいる女性がリリースであることに間違いはないのかね?』

「そのとおりです。リリースは自分の目の前で人になりました。」

忘れるわけがなかった。

コウスケの目の前で白い巨人が光り始めたかと思うと徐々に小さくなり、今のリリースになったのだから。

……何も着ていない状態のリリースに抱き付かれたときのコウスケはそれはもう無様
と言うしかなかった。

『碓、よくできた話だな。』

コウスケは耳を疑った。

モノリスが何を言ったのか理解するのに数秒要した。

だが、SEELEにとってたまさに寝耳に水だろう。

使徒が人になりましたなんて話を真剣に聞ける人がいるだろうか…

『このような証人を仕立て上げ、我々を騙そうとは…』

『左様、作り話にしては上出来だよ。』

『最もよく出来過ぎていて少々興ざめだな。』

「MAGIのレコーダーを調べてもらっても構いません。」

ゲンドウが珍しく焦っていた。

そのことからかなり危ないことになっていることは理解できた。

『情報隠蔽、工作は君の十八番だろうか？』

『この茶番劇もそろそろ幕引きだな。』

『碓、君は良き友人であり、理解者であった。綾波特務一尉、君もこんな茶番に付き合さ

れてご苦労であった。』

O1のモノリスからそんな言葉が出てくる。

過去形で言ったことをコウスケは瞬時に理解した。

SEELEとの決別がいつかは起こるだろうと考えていたが、あまりにも早いと感じ

た。

「……愚かなリリンね。」

暗い部屋に鈴のような声が聞こえた。

この場にそんな声を出せるものは一人しかいない。

『なんだと?』

「愚かなリリン、でなければ哀れとでもいえばいいのかしら?」

リリスが平坦な声で言う。

こんな声はコウスケの記憶にはなかった。

だが、リリスが怒っていることだけは理解できた。

『我々を愚弄する気か!』

『どうやら重度の精神病を患っているらしいな。』

『碇君、君の罪状は上乘せされたな。』

「うふふ……」

リリスは笑っている。

コウスケはこんな笑い声も聞いたことは無かった。

だが、これがリリスと言う人なんだと奇妙に感心している。

『何がおかしい。』

「ごめんなさい。……どうすれば私がリリースだって信じてくれるのかしら?」

『ふ……ふははは……これは面白いことを言う。そうだな……リリースならばアンチAT
フィールドが使えるはずだ。最もお前などに……』

「見つけた……」

リリースがそう言うのと01のモノリスからの声が途切れた。

代わりに水が高いところから落ちるような音が聞こえてきた。

『……議長?』

他のモノリスが声をかけるも反応がなかった。

「お望みどおりに見せたわよ? でもそれじゃ話せないわね。」

リリースが01のモノリスに手を向けた。

『……む!』

「起きたかしら?」

『いったい何をした……』

声に先ほどまでの威厳が完全に消えていた。

「あなたが望んだことよ。どうだった?」

この場にいる全員が01の言葉を待っていた。

『……認める。彼女はリリースだ。』

その言葉に他のモノリスが唸り声を上げていたが、リリースだけは不満そうだった。

「あら？ それだけなの？ サービスで体も治しておいたのに。」

『バカな……こんなことが………』

「まあいいわ。次は……」

リリースは03に視線を向けた。

『な、何をす……』

再び水の音が聞こえてきた。

「うふふ………」

『………はっ！』

03から声が戻ってきた。

「もうおわかりいただけましたかしら？」

モノリスたちは沈黙してしまった。

ゲンドウがおもむろに口を開いた。

「……議長。」

『なんだ、碇。』

「人類補完計画の無期限凍結を提案します。」

『碇君、何を言いだすのかね。』

『閉塞した人類の再生……』

『それが人類補完計画だよ。』

「わかっております。しかし既に事態は我々の範疇を超えていたのです。」

『碇、どういうことだ？』

「その計画はあなたたちリリンのものではないということよ。」

01の問いにリリスが答えた。

「え〜と……死海文書……懐かしいわね。」

『何？』

「アダムより生まれし15の使いを滅ぼし、最初の人間たちの融合と同数の使いを手にしたとき、神への道が開かれる。」

『それは……』

「あなたが持つ死海文書に書かれている……でしょ？」

『何故それを知っている！』

「だって、私が作らせたんだもの。知ってて当然でしょ？」

モノリスたちがまたもや騒ぎだした。

『我々が残されていた予言書とともに解析したのだぞ！』

『左様、それらを統合した結果なのだよ。』

「だから、私が全部作らせたに決まってるじゃない。大変だったのよ。」
リリスの口元はうつすらと笑っていた。

『……にわかには信じられんが、事実なのだろう。』

『それでリリスよ。この計画が発動されれば我々はどうなるのだ?』

「私が生命の実を手に入れて、あなたたちはすべてが一つになって終わりよ。」

『一つになり再生されるのでは……』

「言ったでしょ? 終わりだって。存在を失うだけよ。」

モノリスたちが一斉に沈黙した。

彼らが信じて疑わなかったものが突き崩されたのだろう。

『……リリス、何を望むのだ……』

01から聞こえる声は震えていた。

「……あなたたちリリンを見て、わかったのよ。リリンは不完全だから不完全じゃないってね。」

コウスケがリリスを見るといつもの微笑みに戻っていた。

「リリンたちが言う……えくと……歴史だっけ? それを見ていたら納得したわ。」

『どうということなのだ?』

「あなたたちの歴史と言うのは血でまみれているのよ。どんなページをめくっても必ず

血が付いているわ。だけど、それと同じくらい……えくと……愛にあふれている。それがリリンの強みだつてね。」

そう言うリリスはどこか嬉しそうだった。

「リリンによつて形が違ふけれどもそれがリリンと言う種が今でも生き残つてゐる要因、アダムの子らに勝てる理由なのよ。」

『むう……………』

「だから私も……………その……………そうなれたらいいな……………つて……………」

急にリリスはもじもじと動きながら、ちらちらとコウスケを見ている。

「……………なんだ？」

「……………ふう。」

突然リリスは膨れつ面になった。

『ふ……………ふははは……………』

01が突然笑い始めた。

『議長？』

『そう言うことか！ リリス、君の願いはよくわかつた。』

すると01は笑い止めた。

『綾波特務一尉、君はリリスを受け入れられるのか？』

なぜそこで自分に質問が来るのか全くわからなかった。

それでも聞かれている以上、真面目に答えることにした。

「今のリリスは人とは少々違うとはいえ、人の形をして人の間に生きています。それに何よりも人と同じ心を持っているなら人でいいのではないですか？」

これはコウスケ自身がリリスを見てきて感じていることであつた。

『……君は面白い人だな。……碇。』

「はい。」

『人類補完計画の無期限凍結は了承した。だが、使徒はまだ襲来してくるだろう。』

「どうなのだ？ リリス。」

「来るわよ。」

『……以前より君が申し出ていた予算については一考する。』

「ありがとうございます。」

『議長、本当に凍結なされるのか？』

他のモノリスから不安げな声が聞こえてきた。

『人類が再生されないととなるならば、こんな計画など無意味だ。それにリリスの意志に反することになる。』

『確かにそうですね。』

『それに人の強みか……まさかりリスにそれを教えられることになるとは……』

「そうやって間違えるのもリリンの強みのよ。」

『そうだな……』

その声はひどく落ち着いたものであったが、最初に見られた嫌な感じがしなかった。

(一件落着か……)

そのようにコウスケはほっとするのであった。

『リスよ、君の願いは早急に果たすことにしよう。私の体を治してくれた礼でもある。』

「本当!？」

『皆も異論はあるまい。』

帰ってきたのは無言であったが、それは肯定を意味していた。

『綾波特務一尉。』

「はい。」

『君たちの婚姻は盛大にやらせてもらおう。』

「……………はい?」

コウスケは耳を疑うしかなかった。

『聞こえなかったのかね? 婚姻だよ。』

「誰のですか？」

『何を言うのだ。君とリリスに決まっておるだろう。』

「何故そんなことになるのですか！」

するとリリスが上目遣いで見つめてくる。

……………悲しそうだ。

「嫌なの？」

「う……………」

（そんな目で見るなよ！ 何も言い返せないじゃないか！）

「プロポーズしてくれたのはコウスケなのに……………」

「なんと！ 既に将来を誓い合っていたのか！」

『ともなれば人類史上初めての快挙だな。』

『左様、これほどの快挙を祝わないなどあり得ないことだよ。』

狼狽えるコウスケをよそにモノリスたちが興奮気味に言っていた。

『……………綾波特務一尉、まさかとは思いが……………』

『自分から婚姻を申し込んでおいて……………』

『嫌だなんてことは無いだろうな。』

「そ、そんな……………」

すると01はゲンドウに向けて言った。

『碇、綾波特務一尉が浮気などしないようよく見張っている。』

「承知しております。」

『綾波特務一尉、君とは長い付き合いになりそうだ。……私はキール・ローレンツだ。覚えておきたまえ。』

「は、はあ。」

『綾波特務一尉、裏切るなよ。』

・
・
・

コウスケは目の前の婚姻届を見てため息をついた。

その後、リリースが一人の人として生きられるようになるまで保留と一言で話が付いた。

正直に言うとコウスケ自身は結構嬉しかったりする。

それなりに思いを寄せ始めたことを自覚はしてきているのだ。

ただ、周りに踊らされているという感覚がコウスケにとって気に食わないのだ。

ふと見るとリリースは懸命に漢字の書き取りを行っていた。

その姿がなんともいじらしく感じるのであった。

(そう言えば……)

コウスケは先日に行われたSEELEとのやり取りの中で気になることがあった。
(13だけ何も言わなかったな……)

コウスケの記憶では少なくとも一回以上は必ず13以外のすべてのモノリスが喋っていた。

だが、13だけは最初から無言を貫き通したのだ。

ゲンドウに聞いてみたところ13に関してはわからないと答えが返ってきた。

(気にしてもしょうがないか……)

「そーいや、リリス。」

「何?」

リリスは書き取りを一時的に止めてコウスケの方を振り返った。

「あの時、なんで怒ってたんだ?」

「あの時って?」

「お前さんがアンチATフィールドを見せたときだよ。」

するとリリスは顔を俯かせてしまった。

「……ごめんね。怖かったわよね……」

「へ?」

「でも、許せなかったの……コウスケが真面目に話してるのに嘘だと決めつけてたのが

……」

よく見るとわずかに震えているのがわかった。

「私のあんな姿を見たら怖いに決まってるわよね。」

「なにバカなことを言ってるんだよ。」

コウスケはリリスが提出した書き取り表を採点しながら言う。

「へ？」

「あんなのちよつとした超能力とでも思えばいいのさ。」

「でも……」

「それでお前さんを嫌うってか？ そうだったらあんどきに殲滅してたさ。」

「コウスケ……」

「そんなくだらないことを考えてないでやるべきことをやったらどうだ？」

「……………うん、ありがとう。」

リリスは涙を浮かべていた。

コウスケはため息を一つつくどポケットからハンカチを差し出した。

「涙が書き取り表にしみこんだら余計どんな文字かわからなくなるだろ。」

リリスはハンカチを受け取って涙を拭いたが、次々にあふれ出して止まらなかつた。

コウスケはリリスが泣き止むまでじっと見守っているのであつた。

第40話 生きるといふこと

無機質な部屋

周りは薄い緑色で統一されており、真ん中にデスクと椅子がぼつんと置かれているだけの部屋である。

ゲンドウがSEELEから呼び出しを受けたときに使う部屋だ。

ゲンドウがいつもの席についた時、部屋は暗くなりゲンドウの周りにモノリスが現れた。

『碓、急に呼び出してすまぬ。』

モノリスの01であるキール・ローレンツが言った。

そこには当初見られた高圧的な言い方が全くではないものの幾ばくか薄れているようだった。

キールの言葉を聞いたゲンドウは少なからず驚いていた。

今まで謝罪の言葉など聞いたことがなかったからだ。

『碓君、綾波特務一尉はどうしているかね?』

「リリースと仲良くしております。どうやら満更でもないようです。」

『しかし、綾波特務一尉に言い寄る者がいるとのことだが…』

「今は完全に沈黙しております。我々のシナリオ通りに。」

『それならば安泰だ。』

『左様、痴情のもつれでサードインパクトなど冗談になりはせんよ。』

『まったくそのとおりだ。最も綾波特務一尉に好意を持っていた者には気の毒な話だな。』

どうやら彼らはそのことが気が気でないようだ。

ゲンドウの報告を受けて幾分か安心してはいるようだった。

「にして議長、どのようなご用件でしょうか？」

『うむ、我々がかねてより進めていた人類補完計画…』

『その遂行のために用意したものがあつたのだが…』

ゲンドウはそれを聞いて暫し考えた。

「…なるほど、人造の使徒ですな。」

『そのとおりだ。』

「人と同じ形をしているのでしょうか？」

『君にしては察しが良いな。』

「それで私に意見を聞きたい…そう言うことですか。」

『話が早くて助かるよ。』

『碓、何か良い案があるか?』

ゲンドウはサンングラスをかけなおした。

「一つだけあります。」

ゲンドウは自分の案を話した。

『それはあまりにも危険すぎないかね?』

『左様、それにリリスもいるのだ。』

「問題ありません。」

『碓、その自信はどこから来るのだ?』

「ファーストチルドレン―綾波レイも同様の存在だったからです。」

『どういふことかね?』

「あなた方と同じように私も道しるべを用意していたと言うことです。」

ゲンドウの答えにモノリスたちが一斉に唸った。

『君が怪しい動きをしていたのは気付いていたが…』

『人類補完計画を利用するつもりだったとは…』

『よい、すでに終わったことだ。そのことに関しては不問に処す。』

「ありがとうございます。」

『にして、ファーストチルドレンはどうしているのかね?』

「彼との接触により人として生きる道を選びました。彼を父のように思っているようです。」

それにリリスの力で名実ともに彼の娘となりました。」

『話によれば君の息子と交際しているとのことだな。』

「はい。早く孫の顔が見たいものです。」

『碓君、気が早すぎないかね?』

『しかし、碓がこんなことを言うとは…』

『明日にでも使徒が現れるのではないかね?』

モノリスたちが一斉に笑い始めた。

一方ゲンドウは少し憮然としていた。

「ともあれ、彼に任せるのが適任です。」

『……わかった。この件は「ルシファー」に任せてみよう。異議がある者はいるか?』

モノリスたちは沈黙したままであった。

『よからう。本日はこれで解散する。』

キールは一度間を開けると言葉を続けた。

『すべては…』

『『リリスのWILL^{ヴィ}LE^レのために!』』

コウスケの日常は僅かながら変わること余儀なくされた。

「……またやりやがったな……」

コウスケは床に落ちているばらばらになった何かを見つめながらため息をついた。

目覚まし時計である。

(赤木に新しいのを頼むか……)

目覚まし時計なら近場に売っているだろうが、コウスケの部屋にある目覚まし時計はNERVで作られたものである。

ATフィールドにも耐えられる目覚まし時計を開発中なのだ。

もし、これが成功すればNN爆雷にも耐えられる目覚まし時計の完成である。

最も目覚まし時計にそんな強度が必要なのはなはだ疑問ではあるが……

目覚まし時計を見事に破壊してくれた犯人はコウスケの横ですやすやと寝ている。

何度言っても勝手に入ってくるのだからコウスケはもうあきらめている。

とにかくあどけない表情で寝ている侵入者を起こすことにした。

「いひゃいーいひゃいー」

「起きろ。」

リリースは抓られた両頬をさすりながらむくりと起き上がった。

かなりどうでもいいことだが、コウスケはリリースをこのように起こすのをそれなりに気に入っていたりする。

「何度言ったらわかるんだ！ ATフィールドで目覚まし時計を壊すなど！」

「だって……」

涙目になっているリリースにコウスケはこれ以上何も言えなかった。

コウスケはリリースのこうしたしぐさにかなり弱かった。

「全く……今は何時だ？」

「……七時半です。」

いつの間にか薄い水色のパジャマを着たレイが部屋に入ってきていた。

レイは一人で早起きすることができるようになっていた。

最も起きる場所は自分の部屋ではないが……

レイが起きた時、横にいる少年を起こすようにしている。

当初は無様な叫び声が葛城家の目覚ましになっていたが、今は慣れて普通に挨拶を返せるようになったらしい。

とにかくコウスケはレイが早起きできるようになった要因はリリースが分離したからだと考えている。

「そうか……」

これはもう綾波家の日常となっていた。

・
・
・

コウスケたちは第三新東京市に一番近い湖である芦ノ湖に来ていた。

綾波家は一家そろって休日なのだ。

おまけとしてシンジも同行していた。

何故彼らがここにいるのかと言うとコウスケが原因である。

コウスケは一人で暮らしていた時の習慣で休みになるとふらふらとどこかに出かけていた。

目的などなく自由気ままにふらふらと歩くだけなのだ。

ここ最近は何も休まず働いていた。

リリースがレイと分離する前が最後だったのでコウスケに取って久しぶりの散歩だったのだ。

夕方になり家に帰ったコウスケが見たものは泣いているリリースとあやしているレイの姿だった。

コウスケの姿を見たリリースはコウスケに飛びついた。

「どうしたんだよ。」

そう聞いてもリリスは泣いていて答えられなかった。

代わりにレイが答えてくれた。

「リリスはずつと特務一尉を探してました。」

「俺を？　なんでだ？」

「うう……朝起きたら……ぐすつ……コウスケがいないんだもん……」

話をまとめるとリリスはコウスケがいないと知ってかなり慌てたそうだ。

町中を探しても見つからず、NERVでもずつと探し回っていたそうだ。

見つかるはずがない。

なにせコウスケはふらふらと散歩して回っていたのだから。

山があつては山に登り、川があつては川で戯れたり…

そのような感じであつた。

ちなみにコウスケに護衛はいない。

「俺を守るくらいなら子供たちを守れ。」

その一言で護衛を解散してしまつたからである。

最もコウスケ自身がそれなりの戦闘力があるので、特に問題ないと判断された。

一応居場所を知らせるためにNERVのカードに発信機が付いているが、散歩すると

きのコウスケは持ち歩いていないのだ。

万が一、何かあった時のために最上級のカードは常に持っていたが、これに発信機はついていない。

昼食などは現金で支払っていたので、カードの使用履歴がNERVに残らない。

そのためリリスはコウスケが行方不明になったと大騒ぎしたのであった。

当然ながらNERVでも第一種警戒態勢が敷かれ、動員できる最大限の人員でコウスケの捜索が行われていたりする。

それでも見つからなかったのは、コウスケが本当に自由気ままに歩いてきたからであろう。

それならば携帯電話を使えばいいという話になるのだが、こともあろうにこの日に限ってコウスケは携帯電話を家に置きっぱなしにしていたのだ。

家を出てからすぐにコウスケは気付いたが、何かあれば警報でわかるだろうと特に気にしなかった。

このことでコウスケはゲンドウと冬月にこつてりと絞られた。

「君は自分がどれほどの地位にいるのか自覚しておらんのかね！」

「冬月の言うとおりで！ 危く世界中に搜索願いを出すところだったのだぞー！」

そんな大げさなとコウスケは思った。

総司令執務室を出たコウスケはSEELIEからも呼び出される始末であった。

『綾波特務一尉、君は何を考えているのかね?』

『左様、妻をほつといて散歩などあり得んことだよ。』

『それでサードインパクトが起こった時、君はどうするのつもりだったのかね!』

『そんなことをするならば、リリスも連れて出かければよからう!』

『その日のうちに帰宅したからよかったものの、碓君から連絡を受けたときは大騒ぎだよ。』

『全くだ! 人類補完委員会でも君の搜索を国連に提唱するところだったのだぞ!』

これを聞いた時、コウスケもさすがに焦った。

まさか本当に世界的に搜索されるとは思わなかったのだ。

それと同時に

(休暇くらい自由にできないのか…)

などと考えました。

無理もない。

一年前までは一介の戦闘機乗り、しかも独り身だったのだから…

この件は「ふら波事件」としてMAGIに残ることになる。

「ふら波」の所以は「ふらふらする綾波」からである。

コウスケに取って汚名以外の何物でもない。

それに類するものでは「荒波」だろうか……

全くの余談だが、リリスは「黒波」、レイはそれに対するかのように「白波」と密かに呼ばれているらしい。

ちなみにMAGIは全会一致でコウスケを糾弾していた。

特にCasper^{カスパー}がコウスケに対し厳しい態度を取っていた。

これに対するリツコのコメント

「女として許せないのね……」

そういうわけでコウスケはリリスに謝罪の意を込めてどこかに連れていくことを「命令」されたのである。

それもゲンドウとキールの二人から……

さすがにコウスケも反論しようと思ったが、リリスの泣いている顔が浮かび上がり断念した。

とにかくコウスケは芦ノ湖のほとりでのんびりと座っていた。

傍らではリリスがうとうとと眠りに入ろうとしている。

少し離れたところではレイとシンジが似たようなことをしていた。

コウスケもひと眠りしようかと思つた時、どこからともなく鼻歌が聞こえてくるのであつた。

「誰だ？」

しばらく聞き入っているとどこかで聞いたことのある歌であった。

「何かしら……」

どうやらリリースも歌を聞いて目が覚めたようだった。

独特のリズムが風に乗って聞こえてくる。

「これは……歓喜の歌だな。」

コウスケは誰が歌っているのか確かめるべく、聞こえてくる歌を頼りに足を進めた。

芦ノ湖に作られた栈橋に誰かがいる。

コウスケはさらに近づいて見た。

まず目に入ってきたのは銀色の髪だった。

着ている服はシンジが学校に登校するときに着る制服だったため、少年であることに

間違いはないはずだ。

銀色の髪をした少年はこっちに気付くことなく鼻歌を歌っている。

コウスケがある程度近づいた時、少年は鼻歌を止めた。

「……歌はいいね。歌は心を潤してくれる。リリンの文化の極みだよ。そう感じませんか

？

ルシファー。」

そう言うと少年はコウスケの方に振り返った。

(レイと同じ赤い瞳……)

「ん？ 俺のことを言っているのか？」

「知らない者はいませんよ。失礼ですけどあなたは自分の立場をもう少しは知ったほうがいいと思いますよ。」

そう言うと少年はアルカイックスマイルを浮かべていた。

「ところでルシファアってなんだ？」

「おや？ あの老人たちはあなたのことをそう呼んでますよ？」

「老人？」

コウスケの記憶ではそのように呼んでいる老人など思い浮かばなかった。

「SEELIEと言えわかりますか？」

「…なるほど、君はSEELIEと面識があるようだな。それで君は誰なのかな？」

「これは失礼。僕は渚カヲル。仕組まれていた子供、ファイスチルドレンですよ。」

(ファイス？ そんな情報は入ってきてないぞ。)

新たにチルドレンが選出されたのならばすぐさまに情報が入ってきているはずだ。

だというのに目の前の渚カヲルと言う少年はファイスだと言う。

きな臭いものを感じるが、少なくともコウスケにはカヲルが嘘を言っているようには

思えなかった。

「もう！ コウスケったら私を置いていくなんて……」

リリースがコウスケに追いついたようだ。

しかし、リリースはカヲルを警戒するように見つめていた。

「あなた……アダムの子ね。」

「何？ 使徒なのか！」

『そのとおりだ。』

声がある方に振り返ってみるとモノリスが一つ浮かんでいた。

（これはどこにでも現れるのか……）

「キール議長、これはどういうことでしょうか？」

『計画の遂行のために用意した者だ。』

（計画遂行のために……特徴的なアルビノ……レイと同じ赤い瞳……）

「ふう、碇司令と言いあなた方と言いとんでもないことをしますな。」

『それについては何も反論できません。』

「それでどうすればよろしいのでしょうか？」

キール自らがここに出てきたということはコウスケに何かをやらせたいということ
をすぐに洞察することができた。

『話が早くて助かる。……この者を預かってもらいたいのだ。』
「……はい？」

『計画が凍結された今、この者を人として預かってもらいたいのだ。』

この言葉にコウスケは全く動揺していない。

なにせコウスケには前例があるからだ。

「……わかりました。引き受けましょう。」

(どうせ嫌がっても拒否権は無いと言われるんだろう…)

『うむ、よろしく頼む。』

「それでルシファーとは何でしょうか？」

『君の呼び名だよ。』

キールの声はどこか満足そうだった。

「何故、悪魔の名前なんでしょうか？」

『悪魔ではない。墮天使だ。君にぴったりだろう。』

(嫌味かよ…)

コウスケの心情を察したのかキールは言葉が続けた。

『嫌味などではない。』

ルシファー

今では墮天使、悪魔という印象が強いが、元は天使たちを統べる地位にあったとされる。

だが、創造主たる神に反逆し、自ら堕ちていった天使である。

悪魔の長であるサタンと同一視されている。

キールはそのように語るが、コウスケには疑問が浮かんでくる。

「ルシファーについてはよくわかりましたが、それが自分の呼び名になる理由がわかりません。」

『ここからが重要なのだ。神に反逆し墮天使となったルシファーはリリスを妻にしたとの伝承がある。』

「……………はい?」

『聞こえなかったかね? リリスを妻にしたといったのだ。君にぴったりであろう?』

キールの声はどこか嬉しそうだった。

「妻……………」

とつぶやくとリリスはもじもじしながら赤くなっていた。

コウスケは何も言えなかった。

『嫌なのかね?』

「は、はあ……………」

『ならば、アダムが良いかね?』

「……………ルシファーでいいです。」

呼び名が第一使徒と同じなんて冗談ではない。

もう、観念することにしたコウスケであった。

『うむ、では渚カヲルをよろしく頼むぞ。ルシファーよ。』

それだけを言うとモノリスは消えた。

「はあ……………それで君は……………」

「カヲルでいいですよ。」

カヲルは微笑みを崩さずに言う。

一方リリスはじつとカヲルを睨んでいた。

「おい、そんなに警戒しなくてもいいだろ。」

「わかってるわ。…でも、私の中で何かが叫ぶの。」

するとカヲルの顔が何か意味ありげな表情に変わった。

「あなたがリリスだね?」

「そうよ。」

「あなたは僕と同じだね。お互いにこの星で生きていく身体はリリンと同じ形へと行き着いたか。」

「違うわ。」

リリスはきつぱりと言い放つと言葉を続けた。

「確かに私はリリンと同じ形になったけど、それはコウスケのためよ。」

それを聞いたカヲルは意外そうな表情を隠さなかった。

「コウスケさん！」

後ろの方で誰かが呼んでいる。

コウスケが振り返ってみるとシンジとレイがこつちに来ていた。

「探しましたよ。コウスケさんもリリスさんもいきなり居なくなるんですから。」

レイもこくりと頷いていた。

「それで……君は？」

シンジがカヲルを見ながら言った。

「ああ、今度配属されたファイフスチルドレンだ。」

「渚カヲル。カヲルでいいよ。」

「僕は碓シンジ。シンジでいいよ。」

「私は綾波レイ。」

レイはそれだけを言うとコウスケの方をちらちらと見ていた。

(何なんだ?)

コウスケが訝し気な顔を見るとレイは明らかに落胆していた。

「どうしたの？ 綾波。」

「……………何でもない……………」

どう見ても何かありますという顔だった。

そんなレイを心配そうに見るシンジ

コウスケも何故こうなったのか必死に考えていた。

そんなコウスケにリリスが

「多分、宿題のことよ。」

と密かに言ってくれた。

その一言でコウスケは気付いた……………いや、思い出した。

「うくん……………可でもなく不可でもなくだな。まあ、最初のお前さんに比べたらだいぶましだよ。」

レイはアスカが来日した時、コウスケから出された宿題をずっと覚えていたのだ。

「しかし、よく覚えてたな。」

「特務一尉が私のためにしてくれたことだから。」

あの時のコウスケはただ単に軽く会釈くらいしろと言う意味で言ったのだ。

だが、レイはそれを真摯に受け止め今の今までずっと覚えていた。

「まあ、その時によって言い方が変わるから、それは自分で考えてみてくれ。今のレイなら大丈夫だろう。」

レイは頷くとかなり満足そうな顔になった。

それをカヲルが興味深そうに見ていた。

「カヲル君って綾波に似てるね。」

不意にシンジがそのように言う。

「髪も…銀色なのかな？ 瞳も赤いし……」

シンジの言葉にレイがピクリと反応した。

一方コウスケはシンジが何を言いだすのか少し興味があつた。

「綺麗な人だね。」

そう言つてシンジはレイに微笑みかける。

「……綺麗？」

「うん、綾波に似て綺麗な人だよね。」

「……何を言うのよ……」

赤くなつて俯くレイにシンジは不思議そうにしていた。

「……お前さん、自分で何言ってるのかわかってないのか？」

「どういふことですか？ コウスケさん。僕はただ……あ……」

ようやく理解できたようでシンジは赤くなっていた。

「僕はただ……カヲル君が綺麗な人だと言いたいただけで……だからと言って別に綾波が綺麗じゃないってわけじゃ……」

シンジは自分でも何を言っているのかわからなくなっていた。

「レイは良いな……」

不意にリリスがそのようなことを言いだした。

「ねえ、コウスケ。私はどうなの？」

「いきなりなんだ。」

「コウスケは私のことをどう思ってるのかな……」

リリスは不安そうな表情で上目使いでコウスケを見る。

(ぐ……その目は止めてくれ……)

「そう言うリリスはどう思っているのですか？」

カヲルが間に入ってきた。

「私？ もちろん大好きに決まってるじゃない。」

カヲルの問いにリリスは断言した。

「なるほど……ルシファアは……言うまでもありませんね。」

そう言うカヲルにコウスケは訝しく思った。

それに気付いたカヲルが続ける。

「まんざらでもなさそうな顔ですよ。ルシファー。」

「……何を言うんだ。」

そうは言うが、顔が赤くなっているには説得力が欠けるといふものだった。

・・・

「カヲル君も綾波と同じだったんだ……」

昼になり昼食を取っていたシンジはカヲルのことを聞いてそのように感想を漏らした。

「私と同じ……」

「違うな。」

レイの呟きにコウスケが反応する。

「出生は似たようなものだろうが、今のレイとでは明らかに違う。レイの方が人としては先輩だよ。」

コウスケはカヲルを見ながら言った。

カヲルはサンドイッチを食べている。

リリスが作ったものだ。

一方リリスは大変不満そうにしていた。

「もう機嫌を直せよ。」

「だって……」

「しょうがないだろ？ カヲルだけ何も食べないなんてそんなわけいくか。」

カヲルは相変わらずリリスを興味深そうに見ていた。

不意に猫の鳴き声が聞こえた。

猫が一匹カヲルのそばに寄っていた。

「猫だ。どうしたんだろ？」

シンジが猫を見ながら言った。

「どうやら子猫のようだな……親は近くにいないか……」

「お腹すかせてるんですかね？」

「……何かあるかしら？」

レイが何か食べ物を探している。

カヲルは子猫を見ると持ち上げた。

子猫が苦しそうな声を上げる。

それに一同は完全に言葉を失っていた。

「……はっ、カヲル君！ 何してるんだよ！」

シンジが叫ぶもカヲルは気にしなかった。

だが、コウスケはカヲルが見せた一瞬の表情を見逃さなかった。子猫はぐったりとしていた。

「……………もう、死んだよ。」

そう言うときカヲルは子猫を放り投げる。

どざりと音を立てて子猫は動かなくなった。

それを見たレイが靴も履かずに子猫のそばに駆け寄る。

「……………猫……………かわいそう……………」

レイは泣いていた。

コウスケもそばに駆け寄っていた。

「……………ダメだ。」

コウスケの言葉にシンジがカヲルに食って掛かる。

「カヲル君！　なんてことを……………」

「あのままだと確実に死んでいたよ。」

「だからって……………」

「残念だが、カヲルの言うとおりだ。」

シンジがコウスケを見た。

明らかに怒っている。

「私の力で……」

リリスがそう言うがコウスケは止めた。

「止めろ。」

「なんで？」

「死んだものは生き返らない……それがこの世界の常識だ。それに生き返らせてもこの子猫は生き延びられるか？」

「そんなのわからないじゃないですか！」

「無理だ。……元々弱っていたんだ。」

それでもシンジは納得がいかないと言いたげだった。

「……シンジ君。もし、目の前に今にでも死にそうな人がいたらどうする？」

「助けるに決まってるじゃないですか……」

「生きることが難しくてもか？」

「それは……」

「難しい問題だ。いつそのこと一思いに死なせてやった方がよかった……そんな風に思うこともあるのさ。」

泣いていたレイもコウスケの言葉を聞いていた。

「戦場ではそんな風に思える奴をたくさん見てきた。」

コウスケの悲しい声に皆が息を飲んでいた。

「……だからだ。人なんていつ死ぬかわからない。だからその時まで懸命に生きようとするのさ。だから生き返らせることは懸命に生きたその人を侮辱することでもある……そう俺は考えている。」

コウスケは子猫を拾い上げた。

「それは……カヲル、お前さんにも言えることだ。」

「僕……ですか？」

「生きている以上、お前さんもそうだ。」

「僕はあなたたちリリンの言う使徒ですよ？」

「知ったことか。それを言ったらレイがそうだったしリリスもそうだろうが。それに人も同じ使徒だろう？」

カヲルは特に感銘を受けたわけではないようだ。

「僕とリリンは違いますよ。……あなたたちが葬ってきた使徒と同じです。」

淡々と話しているようだが、コウスケにはわずかに含まれたカヲルの妙なイントネーションを感じ取れた。

「……どうやらお前さんにも心がちゃんとあるみたいだからな。」

コウスケの言葉にカヲルは訝し気な表情だった。

「……まあいい。こいつは俺が埋めてくるよ。」

そう言ってコウスケは子猫を埋めるために歩き出した。
子猫には仄かな温かみが残っていた。

第41話 結成! NERV交響楽団

キールからカヲルを預かって既に数日が経っていた。

カヲルは一人でNERV施設にて寝泊まりしているのではなく、綾波家の一員となった。

部屋は葛城家で言うシンジの部屋だ。

カヲルが持ってきたものはかなり少なく部屋の整理も既に終わっている。

また、ファイブスチルドレンとして登録されており、NERVでカヲルを知らないものはいない。

さらにミサトやリツコと言った上級職員にはカヲルが使徒であることが既に知れている。

コウスケがカヲルと会った日にゲンドウが公開したのだ。

そしてカヲル自身も使徒であることを隠さなかった。

「驚かないんですね。」

「もう、前例があるからな。」

発令所のメンバーはカヲルが使徒だと言っても驚いていないようだった。

その前例となった人物はカヲル以上にNERVを騒がせたのだから、人型の使徒が現れたと言つて今更驚くことのほどではなかった。

そんな発令所のメンバーたちの反応にカヲル自身が驚いているようだった。

カヲルのテストが行われたが、自由にシンクロ率を変えられるという結果が出てきた。

どのEVAでもそのような結果なのだ。

それにリツコが驚いているが、コウスケはさほど気にしていない。

つまりは所詮、特技の一つに過ぎないということだ。

ただ、リツコが怪しく笑っていたことはコウスケに取つてとても怖いことだった。

・
・

コウスケが目覚めるといつものようにリリスが横で寝ている。

もう慣れてしまった光景だ。

コウスケが床を見るとばらばらになった目覚まし時計が落ちていた。

これも慣れてしまった光景だ。

「ふむ……以前に比べれば破片が大きく残ってるな。」

リツコが喜ぶだろうとコウスケは思った。

リツコは当初、自分が作り上げた極地型の目覚まし時計を見事にばらばらにされたこ

とにかなりショックを受けていた。

「そう……………これは私への挑戦なのね……………」

そう呟いたのをコウスケは覚えていてる。

(やはりマッドサイエンティストと言うのは間違いないようだな。)

などとコウスケは内心で思った。

それからと言うもののリツコは必ず目覚まし時計の破片を持つてくるようにとコウスケに言った。

そのデータはリツコが必死に解析をしている。

リリスのATフィールドに耐えられる目覚まし時計ができるのもそう遠くはないかもしれない。

ATフィールドに耐えられるということは当然ながらNN爆雷にも耐えられるということである。

今ではEVAの拘束具より硬い素材でできているとリツコと伊吹が自慢げに語っていた。

開発中である素材は「耐ATF装甲」と名付けられている。

リツコが解析したデータはEVAの拘束具とNERVを守る装甲にも使われており、日に日に強固なものとなっている。

そのデータはゲンドウと冬月にも届けられており、二人は研究を継続するように指令を下している。

予算は二人のバックボーンから無限ではないが出てくるので全く心配はない。

技術と言うのはこのように進歩していくものなんだなとコウスケは妙に感心していた。

……いずれは民間にも出回るかもしれない。

とにかくコウスケはいつもの通りにリリスを起こす。

「いひゃー！」

「起きろ。」

リリスは起き上がると抓られた頬をさすっていた。

「もう……優しくしてくれてもいいじゃない……」

不満そうに膨れっ面になるリリスにコウスケは少し罪悪感を感じるが、それもいつものことである。

それでもこの起こし方を止めないのはコウスケ自身がかなり気に入っているからである。

リリスの頬の感触がコウスケに取ってかなり気持ちがいいのだ。

人、それを変態と呼ぶ。

そんな考えがコウスケにもあるが、自分でも止められない。

「今日はお前さんが作ってくれるんじゃないのか?」

「へ……きやああああ!」

リリスは叫ぶと慌てて部屋を飛び出していった。

「やれやれ……」

コウスケもベットから身を起こした。

・
・
・

コウスケはテーブルの前に置かれた椅子に座っている。

台所を見るとリリスが慌てながら、しかし着実に料理を作っていた。

そんなリリスの姿にコウスケは心の安らぎを覚えていた。

「ルシファー。」

コウスケが振り向くとアルカイックスマイル浮かべているカヲルがいた。

既に制服に着替えている。

カヲルはレイたちと同じ学校に通っている。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

カヲルはコウスケの対面に座った。

そして興味深そうにリリスを見ていた。
とても複雑そうな顔だ。

そんなカヲルをコウスケはじっと見ているのであった。
「特務一尉、おはようございます。」

レイも起きだしたようだ。

コウスケが挨拶を返すとレイはカヲルの横に座った。

「おはよう、レイ君。」

「……おはよう。」

カヲルの挨拶にレイが答える。

カヲルはレイをレイ君と呼んでいた。

綾波家に来た時に綾波さんと呼んだのだが……

「なんだ？」

「何かしら？」

「何？」

と三人に反応されてカヲルは困ってしまったのだ。

「これは……厄介だね。」

カヲルはそう呟くしかなかった。

カヲル以外は全員「綾波」なのだから無理もない。

それ以降レイはレイ君、リリスはリリス、コウスケはルシファーと呼んでいた。なんで俺だけが名前じゃないんだとコウスケは抗議するが…

「一番わかりやすいからです。」

と答えられては反論できなかつた。

「できたわよ。」

リリスが料理を運んでくる。

コウスケは立ち上がって運ぶのを手伝っていた。

コウスケを基準にするとざっと3・5人前はあるのだ。

カヲルもコウスケくらい食べる。

使徒ならS・機関があるだろうと聞いたのだが…

「僕の順番が来てませんから。」

と答えた。

いつなのかを聞いてもカヲルは答えなかつた。

「これで最後ね。」

リリスが料理を運んでくるが、足を滑らせた。

「きゃあああああ！」

コウスケがとっさに反応する。

訓練で鍛えた反射神経は期待に届えてくれた。

リリスが持つ皿を受け取り、残った腕でリリスを支えた。

「あ、ありがとう。」

「全く……」

コウスケは心配そうにリリスを見る。

コウスケが思ったより顔が近かった。

リリスはコウスケの視線の感じて徐々に赤くなっていた。

それを見たコウスケも同じく赤くなっていく。

「特務一尉。」

不意に声をかけられて振り返ると

「いつまでそうしているのですか?」

ニヤリと笑ったレイが目に入った。

ニヤリと笑うレイを見た時、シンジはこのようなコメントを残している。

「最初は父さんの真似だと思っただけですけど、違うんですよ。あれはコウスケさんの影響です。」

それを言われた時、コウスケは一時間ほど考え込んだそう。

とにかくレイの声でコウスケは我に返った。

「え……あ、ああ……」

コウスケはリリスを立たせた。

「これがラブラブと言うやつですね。」

レイから追撃が来る。

ここでコウスケが黙っているわけがない。

「お前さんだつて似たようなことをしてるだろ。」

「何の事ですか?」

「言つていいのか? この前の日曜日だつて……」

そこまでコウスケが言うとレイは慌てふためきながら赤くなつた。

「特務一尉、ごめんなさい。私が悪かったです。だからそれ以上言わないで……」

「なんだよ……これから面白くなるのに……」

そう言つてレイを沈黙させたコウスケは皿をテーブルに置いた。

リリスはいまだにぼーっとしている。

それをカヲルは複雑そうにじつと見ているのであつた。

・
・
・

コウスケが執務室に入るといつものように書類の山が出迎えてくれた。

「今日は多いな……」

「私も手伝えればいいのに……」

リリスが残念そうに呟いた。

「これは俺の仕事だからな。お前さんは自分のできることをしてくれ。」

「私、頑張るから！」

そう言って張り切りながらリリスは自分のデスクに向かった。

リリスの仕事とは漢字の書き取りである。

ひらがなとカタカナは既にクリアしており、漢字も小学二年生レベルまではクリアしていた。

それに目を追うごとに間違いは少なくなっており、リリスが一般的に使われる漢字をマスターするまでそう時間はかからないとコウスケは思っている。

懸命に書き取りに励むリリスを横目にコウスケは少し悩んでいた。

上司が何かと厄介ごとを持ち込むとか、そのバックボーンがうるさいとかかそういうものではない。

「良い話もなければ悪い話もない……か……か……」

コウスケが頭を悩ませているのは、新たな同居人になった渚カヲルのことである。

チルドレンに関する情報は逐一にコウスケのもとに届けられるようになっていく。

そのためコウスケは誰が何をしたかと言うのをNERVで一番知っている。

なのだが、カヲルだけは何も無いのだ。

あると言えば、学校でかなりの人気―特に女子からの人気があることと一人で歌を歌っているということだけだ。

誰と何をしたというものがない。

そしてコウスケが見る限りカヲルと積極的に係わりとうとする者もいなかった。

唯一シンジだけはカヲルに並々ならぬ関心があるようだ。

別にシンジがカヲルに惚れているというものではない。

レイとカヲルが学校に登校するときコウスケは玄関まで見送りに行くのだが、必ず

シンジがカヲルを警戒するように見ているのだ。

レイはそれを見ながらよく首を傾げている。

そんなレイにコウスケは

(うむ、絵になるな。……NN並の破壊力だ。)

なんて考えていたりする。

リリスも全く同じしぐさをする。

その時は目を逸らしてしまうのだ。

その時によくレイのニヤリが発動する。

とにかくシンジがカヲルを警戒する理由はただ一つ
綾波レイだ。

シンジからしてみれば自分の婚約者が同年代の少年と一つ屋根の下で暮らしている
のだ。

それで心配するなど言うほうが無理ではないだろうか。

最もレイには完全無欠の親ばか課長がいるが……

そういうわけでカヲルは常に一人でいることが多い。

これに対しコウスケはカヲル自身が人との係わりを持つていないのではと考
えていた。

(このままでと……使徒として殲滅……そうなるな……)

それは避けたかった。

今までの使徒とは違い、カヲルは人と意思疎通ができるのだ。

そんな彼を使徒として殲滅などしたら、シンジやアスカ、特にレイがどれほどの心理
的ダメージを負うかわかったものじゃない。

「はあ………」

「どうしたの?」

リリスが心配そうにコウスケを見ていた。

「カヲルだよ。」

「あの子ね……確かに心配だわ。」

「人として生きようと思つて無いのかもしれない……」

「よく一人で歌を歌つてるわよね。」

リリースは悲しそうな表情になっていた。

「あの子の歌声は嫌いじゃないけど……何となく寂しいのよね。」

それはコウスケも感じていることだった。

「歌か……歌……音楽……」

「どうしたの?」

コウスケは黙つて考え込んだ。

そんなコウスケをリリースはじつと見つめているのであった。

……

「よし、集まったな。」

綾波執務室にはコウスケとリリースの他にミサトと加持、リツコとチルドレンたちがそろつていた。

「いったいどうしたのよ。」

「まだ、仕事が終わつてないのよ。」

「俺もこれからスイカ畑に行く予定なんだが……」

一名、かなり私的なことを言っているがコウスケは無視した。

「これから重大発表がある。」

コウスケの言葉にカヲル以外の全員が息を飲んだ。

本人が望んでなかったわけではないが、NERVでもVIP中のVIPに入るコウスケである。

そんな人物から重大な発表があるなんて聞かされたら緊張するのもおかしくない。

皆がコウスケの言葉を待った。

「多分、これはNERV創設以来の重大な出来事だろう。」

「そ、そんなに重大何ですか？」

シンジの声が緊張で少し震えていた。

「ああ。」

コウスケはひと問おいて続けた。

「NERVで………演奏会を開く。」

綾波執務室は沈黙で彩られた。

どこからかびよびよと言う音が聞こえているようだった。

コウスケが何を言ったのか皆が理解できていないようだ。

鳩が豆鉄砲を食ったような顔とはこういうことを言うんだなとコウスケは一人だけ思っていた。

そんな沈黙を破ったのはリツコだった。

「コウスケ君、なんて言ったの?」

「演奏会だ。」

「なんでこんな時期に演奏会なの?」

ミサトの疑問は最もである。

使徒との戦争を担っているNERVでそんなことをする余裕など正直無いのだ。

「葛城が言いたいことはわかっている。」

コウスケはその目的を話すために言葉が続けた。

第一に演奏会を開くことでNERV内の連帯感を強めること。

第二に対外的にNERVに対するイメージアップを図ること。

「でも、いいのか? 綾波。」

「なんだ? 加持。」

「NERVは非公開組織だろ?」

「全くもって問題ない。」

コウスケはそう言ってゲンドウポーズを取った。

一度やってみたかったのだ。

おまけにニヤリともしている。

正直不気味であつた。

コウスケが思つた通りに皆は少し引いていた。

「NERVは確かに非公開組織だ。だが、第三新東京市のあらゆる企業にスポンサーとしてNERVは活動している。」

コウスケの言うことは事実であつた。

郊外にある温泉街にはNERVのロゴが入つたお土産が陳列されているし、市内にある日用品にもそのロゴが入っているものもある。

普段コウスケが市内を散歩しているときによく見かけるのであつた。

「まあ、時間がないから演目は二つの予定だ。」

「何をするの？」

「歓喜の歌とパツヘルベルのカノン。」

「それで、私たちが呼ばれた理由は何？」

さながら当然のようにアスカが言った。

「お前たち四人には一つの演目を任せることになっている。」

「え、えええ！」

シンジが驚きで声を上げていた。

「そんな! 無茶ですよ!」

「無茶じゃない。それにシンジ君はチェロができるだろう?」

「できますけど……」

シンジの顔には不安しか見て取れなかった。

「アスカもできるだろう?」

「バイオリンならできるわよ。……あんまりうまくないけど……」

「レイはヴィオラができるんだよな。」

「はい。」

「それでカヲルは……」

「僕もバイオリンですよ。」

相変わらずのアルカイツクスマイルで答えるカヲル

コウスケは四人が楽器を演奏できることを当然ながら知っていた。

シンジは過去の経歴から、アスカはドイツ支部から無断で拝借した。

カヲルはSELEに確認を取って、レイはリリスに聞いたのだ。

「なら、決まりだな。演目はカノンだ。」

コウスケは満足そうにうなずいた。

「それで、俺たちは何をすればいいんだ？」

「葛城は作戦局から、赤木は技術開発部から、加持は他の部署から人員を選んでくれ。楽器が扱えるものと……後は合唱団だ。」

コウスケの言葉に皆がさらに驚いた。

今度はミサトの方が早かった。

「コウスケ君、合唱団も編成するの？」

「当たり前だ。やるからには全力でやらせてもらう。」

コウスケの目は真面目になっていた。

「と言うことは……指揮者もいるのね？」

リツコが一番肝心なことを聞いてきた。

「……………未定だ。」

「そんなこと言わないで教えてよ。もしかして……リリス？」

ミサトが軽めの口調で言ってきた。

「リリスは合唱団だ。」

「へ……………合唱団？」

「そうなのよ。コウスケがどうしても私の歌声が聞きたいって言うから……」

リリスは嬉しそうに言った。

コウスケはゲンドウポーズを崩さなかった。

意外と気に入ってしまったらしい。

そんなコウスケを見て皆はリリスを利用したなど考えた。

しかし、レイだけはニヤリと笑っている。

「特務一尉、本音ですネ？」

レイがそう言うとかウスケはびっくりと反応した。

「凶星みたいだな。」

「そうね。」

「コウスケ君、よかったわね。」

大人たちがニヤニヤとしていた。

「リリスさんの歌声か……綾波に似て綺麗なんでしょうな……」

そんなシンジの言葉にレイが膨れっ面になる。

「違うわよ、レイ。シンジはレイの声も綺麗だって言ってるのよ。」

アスカがにやけながらレイに言う。

「べ、別に……リリスさんの歌って聞いたことないから……だから前に聞いた綾波の歌

声がよかったから……」

などとしどろもどろになっているシンジ

「そう言えば、チェロとヴィオラの二重奏ってあるのよね。」
「た、確かにあるけど……」

赤くなりながらシンジは答えた。

「これを機にやってみたら？」

にやけ顔でアスカは言う。

「何言ってるんだよ！ でも……綾波との二重奏か……」

「碓君との……」

レイとシンジはともに妄想モードに突入

「やっぱり飽きないわね。」

アスカは二人をからかえて満足そうだった。

「よし！ そう言うことなら私も頑張るわよ！」

とミスアトが大張り切りで言った。

「ミスアト？ 何を頑張るの？」

「何って、合唱に決まってるじゃない。」

「おお、葛城もやってくれるのか。」

ミスアトのやる気にコウスケが嬉しそうに言った。

「決まってるじゃない。」

そんなミサトの声を聞いてリツコと加持は汗を流していた。

「どうしたんだよ。」

「コウスケ君……悪いことは言わないからやめなさい……」

「リツちゃんの意見に俺も同意だ……」

「なんでだよ。本人がやる気なんだからいいだろ。」

ミサトも不満そうに二人を見ていた。

「……なら、私の研究用のファイルにあるMKにアクセスして。」

リツコの声は震えていた。

「必ずイヤホンをするんだぞ。」

加持もそのようなことを言う。

コウスケは不審に思いながらもPCにイヤホンを取り付けて操作した。

(……MK……これだな……)

「……………な……………ぐわあああああ!」

突然コウスケはもだえ苦しんだ。

「大丈夫!」

リリスが声を張り上げながら言う。

コウスケは何とか気絶するのをこらえることができた。

リリスはコウスケからイヤホンを取ると自分につけた。

「!!!」

リリスは固まってしまった。

「おい！ 大丈夫か！」

「コウスケ……」

そう言うところリリスはコウスケに抱き付いた。

「うう、ポカポカしない……しなかったよ……」

などと言い、リリスは泣きだした。

「何よ……」

ミサトが不満そうにコウスケたちを睨んでいた。

「……すまんが、葛城は仕事が残ってるだろ？ それを優先してくれ……」

完全に元気が無くなったコウスケが聞いたものはミサトの歌であった。

耳に襲い掛かる不協和音の調べ……

コウスケは心の中で全領域決戦兵器と言うあだ名をミサトに名付けるのであった。

何故、そんなデータをリツコが持っているのかと言うと、非殺傷兵器のサンプルにするためである。

ミサトカレ
M/Cの開発に一通り成功したりツコはミサトの歌を思い出し、それを研究することに

したのだ。

MKとは葛城ミサトの頭文字から取ったものである。

とにかくコウスケの言葉を聞いたミサトはかなり不満そうだった。

「……………そう言えば、副司令がこんなことを言っていたな……………葛城三佐の勤務態度に問題あり、減俸、あるいは降格も考えねばならん……………だったか?」

「結構たまってるからな。葛城の仕事。」

加持がコウスケを援護するように言った。

それを聞いてミサトは顔を引き攣らせた。

「秘書からも証言を得られたからな……………早速……………」

そう言ってコウスケは受話器を手に取った。

「わかったわ! だから……………」

「職務に励んでくれよ。葛城三佐。」

コウスケは心底安心した。

ふと見るとリツコと加持も安心したようだ。

「とにかく明日から練習だ。時間は1730時からだ。場所は追って連絡する。三人は選出を急いでくれ。」

そう言うと皆は頷いた。

コウスケはこの演奏会にかなり期待しているのだ。

最もコウスケが期待しているのは皆が考えることとは違うものである。

ふと見るとカヲルが我関せずという態度だった。

しかし、カヲルの横顔にはどこことなく寂しそうに見えた。

「さて、うまくいってくれればいいな……」

そうコウスケは呟くのであった。

第4 2話 明けの明星

NERV交響楽団の結成宣言から三日が立った。

思ったよりも早く人員の確保に成功したコウスケである。

どうやら趣味でそう言ったことをしている人がかなり多かったのだ。

普段はNERVでの仕事で奮闘しているNERVの職員たちは休暇などで趣味に耽っていると言うことなのだ。

そういうわけでその話をする嬉しそうに返事をしたとミサト、リツコ、加持から話を聞いたのだ。

最も加持は自分の担当の多さに愚痴をこぼしていた。

「綾波、なんで俺だけこんなに多いんだ？」

「スイカ畑に精を出せるんだからいいだろう？ それにお前さんはいろいろとつてがあるだろう。」

「そうとは思わないけどな……」

「そうか……」

コウスケはニヤリと笑った。

加持はそれを見て背筋が凍るような感覚に囚われる。

「こんな面白い話があるぞ。この前、作戦局の誰かさんが休暇の時に広報部の子とデートしていたって話かな。」

それを聞いた加持は顔が青ざめた。

「い、いや……それは……」

「その前の時は開発部の子だったよな？」

「な、なんで……」

「いや、葛城さんが怖いね。」

「……精一杯、がんばります。綾波特務一尉……」

「そいつは重畳。頑張ってくれたまえ、加持三尉。」

そんなことがあったことは全くの余談である。

ちなみに加持は基本的にミサト一筋なのだが、長年染みついてしまったものはそう簡単に取れなかったのだ。

とにかく、オーケストラだけでも100名、合唱団は200名に上った。

もつと人数を集めることもできるのだが、これ以上集めると編成に困るためコースケが選抜したのであった。

合唱団の編成にはリリースが当たっている。

リリースは初めての仕事だと大張り切りだった。

オーケストラは発案者であるコウスケが見ている。

最もオーケストラは独自で練習させている。

歓喜の歌自体がすぐに演奏できるものでもないので独自に練習する時間が必然的に長くなるからだ。

それに指揮者が誰になるのかまだ決定がなされていない。

チルドレンたちは学校が終わるとNERVでカノンの練習をするようにしていた。

カノン自体はそんなに難しくないのですぐに覚えて演奏できるのだが、どうも統一感がなかった。

それがコウスケを悩ませる。

「レイ、テンポが半分くらい遅かったぞ。」

「シンジ、第三弦が半オクターブずれている。」

「アスカ、お前さんはレイの逆だ。少し早い。」

などとコウスケは指導していた。

そんなコウスケに皆は驚いていた。

カヲルに対しては何も言わなかった。

特にミスらしいミスをしていないからだ。

だが、コウスケは何故、統一感が得られないのかを正確に把握している。最もそれを言わないのは自分自身で気づいてほしいからだ。

とはいってもこのまま放置するわけにもいかない。

コウスケは目の前のPCで少し調査をしていた。

・
・
・

「今日は練習を中止して、少し出かけるぞ。」

コウスケはチルドレンたちにそう言った。

「どこに行くのよ。」

「それは行つてからのお楽しみだ。」

そう言つてコウスケはカヲルを見た。

特に関心を示しているわけではないようだ。

・
・
・

「()は……どこですか?」

コウスケが運転する車から降りたシンジはそう言った。

ぱつと見ただけではどこかわからないのでシンジの疑問は当然と言えるだろう。

ちなみにリリスもついて来ている。

コウスケがリリスにも見てもらいたいと思つたからだ。

「ここは火葬場だ。」

コウスケから出てきた言葉に皆が驚いていた。

「なんでそんなところに連れてきたのよ。」

アスカは明らかに不満そうな声を出していた。

レイも訝し気にコウスケを見ている。

するとコウスケたちの目の前を喪服で身を包んだ集団が通り過ぎた。

先頭には棺があつた。

「……誰か亡くなつたんですか……」

シンジの声には張りがなかった。

「ああ、行くぞ。」

コウスケはそう言うのと喪服の集団について行く。

皆もコウスケの後に続いた。

・
・
・

コウスケたちは建物の出口に立っていた。

親族ではないのでさすがに中に入れなかったのだ。

それでも中の様子は外から十分に見ることができた。

親族の前に立っていた僧侶が何かを言っている。

僧侶が言い終わると棺が焼却炉の中に入って行く。

「おじいちゃん！ いっっちゃやだ!!」

おそらく孫であるのだろう。

一人の子供がそう言うときと大声で泣き出してしまった。

それにつられるように泣き声が所々から漏れ出していた。

声を出していないものも目尻から涙が出ていた。

そんな中で一人だけは他の人とは違った。

棺は人々の鳴き声の中を進んでいく。

そして扉が閉ざされた。

それを見届けた親族は悲しみを携えて待機室へと向かって行った。

そんな光景を目のあたりにしていたコウスケとカヲル以外の皆は悲しそうに顔を俯

かせていた。

「カヲル、あの人たちの中で誰が一番、悲しんでいたと思う。」

コウスケは不意にそのように聞いた。

「それは……あのリリンの子供ではないのですか？」

「違うわ。」

カヲルの答えにレイが否定した。

「あのおばあちゃんよ。」

「レイ君、どういうことだい？ あのリリンは泣いてもいなかったし、悲しそうでもなかったよ。」

「だからよ。」

「そのとおりだ。」

コウスケは嬉しく思った。

レイがするように答えるとは思ってもなかったのだ。

「ルシファー、どういうことですか？」

「あの婦人は棺に入っていた人の妻なんだろう。」

コウスケは言葉が続けた。

「あの人にとつたい何があったのか……俺にはわからない。だけど、凜とした強さがあつた。何故だと思う？」

「……わかりません。」

「想いだよ。受け継がれた想いさ。最もどんな想いかはわからないけどな。」

カヲルは不思議そうに首を傾げていた。

「レイには言つたよな。死んだらどうなるか……」

「覚えています……」

「それでも死は免れない。それが人と言うものだ。俺だって順当にいけばお前さんたちより十五年は早く死ぬことになる。」

ふとレイを見ると悲しそうに見ていた。

なんでそんなことを言うの？

そういう風に目で訴えていた。

「そんなに悲しそうに見るなよ。それに俺は永遠に生きるんだからな。」

「S・機関もないのに無理ですよ。」

カヲルがさも当然のように言ってきた。

「そうだ。俺自身はいつかは死ぬ……だが、残されるものもあるんだ。」

「……それが想いなんですな。」

「そうだよ。シンジ君の言うとおりにさ。だが、それを残すためには絶対に必要なものがある。……一年前の俺では絶対に無理だった。今もどうかはわからん。」

「……………絆。」

「そのためには他人がいなければならぬのね……」

レイの後にアスカが続けて言う。

「だから人は強くなれるんだ。それが人の強みなんだ。心を通わせることのできる人のな。」

コウスケはカヲルを見た。

何かを苦しんでいるように見えた。

「カヲル、お前さんは何を想うんだ？　そしてそれを次の世代に受け継がせることができるのか？」

「ぼ、僕は……」

「もし、それができないなら……悲しいことだな。」

カヲルは黙って考え込んでしまった。

そして口を開く。

「……ルシファーは何を想うんですか……」

「俺はな……未来だ。未来が欲しいんだ。みんなが笑って暮らせる未来がな。そして、その中にカヲル……お前さんもいる。」

「でも、僕はあなたたちが葬ってきた使徒と同じですよ。」

「使徒……か……分かり合えたらどんなに良いことなんだろう……」

コウスケの表情には陰りがあつた。

「ATフィールドが有るということは使徒にも心があるんだろう……でも、使徒は俺が守りたい人たを殺してしまう存在だ……複雑だよ……」

カヲルは何も言えないようだった。

「だからさ、リリースが人として生きてくれることを選択したときは嬉しかったんだ。使徒として殺さずに済んだってな。」

そう言つてコウスケはリリースに微笑みかけた。

リリースはコウスケに飛びついた。

「お、おい……」

「ありがとう……でも、いきなり死なないでね。」

「当たり前だ！ レイを残して死ねるかよ。」

リリースはむすつとした顔になった。

「レイだけなの……」

「む……そんなこと言わせるな。」

リリースはじつとコウスケを見ている。

「むう……」

コウスケは困り果ててしまった。

・
・
・

あの後、カヲルの変調が見られた。

家では何かをずっと考え込んでいるようで、学校でもそんなそぶりを隠さないようだった。

歌も歌っていないらしい。

演奏でもミスを連発していた。

そんなカヲルにレイやシンジ、アスカは心配そうに声をかけるが、気のない返事を返されるだけであった。

「カヲル、また同じところを失敗してるぞ。」

「……………すみません……………」

これも何度か繰り返し返した事である。

だが、この時はそうではなかった。

「あんた！ やる気あんの!?!」

アスカがバイオリンの弓をカヲルに突き付けながら言った。

カヲルは何も答えない。

「ちよつと！ 返事くらいしなさいよ！」

「アスカ！ 止めなよ！」

シンジが止めに入るがアスカは止まらなかつた。

「シンジは黙ってて！ こんなやる気がない奴なんてこつちがいい迷惑よ！」

するとカヲルはすつと立ち上がった。

「僕にはリリンの考えていることなんてわからないよ……………」

そう言つてカヲルは出ていった。

「アスカ、言い過ぎ。」

「そうだよ！　いくらなんでもあれは酷すぎるよ！」

「そうだな。もう少し言葉を選ぶべきだな。」

三人から言われてアスカもぼつが悪そうにしていた。

「まあ、アスカの言いたいことはわかる……俺が行つてくるから、三人は練習しててくれ。」

そう言つたとコウスケもカヲルの後を追つて行つた。

・・・

カヲルはNERVの休憩室で一人たたずんでいた。

「浮かない顔だな。」

「……ルシファア……」

「横に座るぞ。」

コウスケはカヲルの横に座つた。

暫く沈黙が続く。

沈黙を破つたのはコウスケの方だった。

「人の考えていることなんて完全に理解はできない。」

「……そうです。僕は……」

「それは違うな。」

コウスケはカヲルの言葉を切った。

「だとしたら、リリスはどうなるんだ？ 彼女も俺たちからすれば使徒だぞ。」

カヲルは何も答えなかった。

「リリスとお前さんの違い……それは分かり合おうとしているかどうかだ。」

「でも……」

「自分には人の心なんてないってか？」

コウスケがそれを言うとカヲルは驚いていた。

「だとしたら、なんであの時……子猫を殺さなかった。」

コウスケの言葉にカヲルは目を見張った。

「何故、それを……」

「俺は軍人だぞ。それくらい触ればわかる。」

コウスケは煙草を取り出した。

「言っておくが、子猫は俺が始末した。」

「なんで！」

「あのままだと確実に死んでいたからだ。お前さんは最も残酷なことをしたんだ。徐々

に死んでいく苦しみをな……」

そう言うとかヲルは顔を背けてしまった。

「……最後までトドメを刺さなかったのは、お前さんが子猫を哀れに思ったからだろ。一人でいる自分と重なって……」

コウスケは煙草に火をつけた。

「凶星か……そうやって悩んでいるのはお前さんの心なんじゃないか？」

カヲルがコウスケの顔を見る。

コウスケはカヲルの顔を見ずに煙草を吸っている。

「それに歌が好きなんだな。」

「歌を歌っていると一人でいることを紛らわせることができますから……」

「だろうな。」

「そうです。」

カヲルは俯いていた。

「……歌には人の想いが込められている。どんな歌にもだ。それにお前さんの心が反応してるんじゃないか？」

「僕の……心が……」

「人の想いを歌で感じ取れるんだろ。それに紛らわせるってことは一人でいるのが寂し

「いつてことじゃないか。」

カヲルははつとなりコウスケを見た。

コウスケは煙草を消して灰皿に入れる。

「ちやんとあるじゃないか。使徒なんてものじゃない、渚カヲルの心がここに……」

「……そうか……あるんだ……」

コウスケはこつちに近づいてくる気配を感じた。

「……それにお前さんは一人じゃない。」

カヲルが顔を上げると練習していたはずの三人がそこにいた。

「カヲル君、ここにいたんだね。」

「心配かけないで。」

アスカは黙っていた。

「アスカ。」

「わかってるわよ!」

レイの問いかけにアスカが答え、カヲルの前に出てきた。

「……さつきは悪かったわ。少し言い過ぎた。」

ぶつきらぼうに言うアスカにコウスケは少し笑っていた。

「ほら、行くぞ。」

コウスケは立ち上がりカヲルに手を差し伸べた。

カヲルはゆっくりと手を伸ばして

コウスケの手を握った。

「よし！ お前たち！ 練習再開だ！」

そう言つてコウスケは歩きだした。

カヲルは引つ張られながらも一つ笑みを浮かべると自分の足でしっかりと歩き出した。

再会された練習でいくつかのミスがあつたが、嬉しそうに笑顔を浮かべる皆にコウスケはこれ以上の監督は必要なしと判断し、チルドレンの練習に参加しなくなった。

コウスケの目的はもう果たされたのだから……

……

コウスケはシンジとレイとともに総司令執務室の前に立っていた。

シンジにとって一大イベントを迎えようとしている。

「そんなに緊張するなよ。」

「は、はい……」

「中には一緒に入るが、それ以降はシンジ君だけだからな。」

何故、彼らはここに居るのか

それはゲンドウを演奏会に来るように誘いたいとシンジが言い出したのだ。

今までゲンドウから働きかけが何度かあったが、シンジからと言うのは初めてなのだ。

それ故にシンジは緊張していた。

レイは何も言わずにシンジの手を強く握っていた。

「ありがとう、綾波。もう大丈夫だよ。逃げたりなんかしない。」

レイはシンジの目を見て手を離れた。

「じゃ、行ってくるよ。」

シンジがそう言うときウスケとともに中に入って行った。

...

「綾波特務一尉、参りました。」

「い、碇シンジです。」

「うむ、ご苦労。」

コウスケとシンジの言葉に冬月が答えた。

ゲンドウはいつものポーズで座っている。

暫く沈黙が続く。

コウスケは何も言うつもりはない。

ただ、待っているのだ。

シンジは緊張しているようだ。

ゲンドウのことを怖がっているのではないが、今までそんなことをしたことがないので無理もないだろう。

コウスケはシンジの背中をポンと叩いてやった。

「と、父さん！ 今度のNERVの演奏会に……来て欲しいんだ！」

「そうか……だが、私はNERVの総司令だ。そう簡単にここを動けん。」

「……そうだよね……」

「NERV総司令としては行けないが、父親としては行くつもりだ。」

それを聞いたシンジは嬉しそうにゲンドウを見ていた。

「シンジ、期待している。」

「うん……」

（不器用なこと……）

冬月もやれやれというような顔だった。

「それでは失礼します。」

そう言うときコウスケはシンジを連れて部屋を後にした。

「冬月先生……」

「わかってる。行つて来い。」

「ありがとうございます。」

...

コウスケは執務室で雑務をこなしている。

リリスは合唱団の練習に行っている。

ふと見るといつもいるリリスがいないので少し寂しいコウスケであった。

そこにレイが現れた。

「どうしたんだ？」

「演目の追加はできますか？」

「できないことは無いが……何かやりたいものがあるんだな？」

レイはこくりと頷いた。

「……特務一尉に教えてもらった歌をやりたいんです。」

「……Fly me to the moonか？」

「はい。」

コウスケはレイの目を見た。

レイは真面目に返ってきている。

「……わかった。好きにやってみろ。」

「ありがとうございます。」

そう言うのとレイは嬉しそうに戻って行った。

「……嬉しいことを言ってくれてるじゃないか。」

そう呟くとコウスケは仕事に戻った。

・
・
・

演奏会まであと少しなのだが、オーケストラと合唱団は不安に彩られている。

いまだに指揮者が誰なのか発表されていないのだ。

代理としてカヲルが指揮を取っている。

そのため練習は滞らない。

本番もカヲルが指揮を執るのかと聞いても

「僕じゃありませんよ。」

としか答えなかった。

コウスケもこの演奏会の発案者としてその場にはいるが、そこにいるだけである。

・
・
・

演奏会当日

NERVは第三新東京市にあるコンサートホールを借りていた。

収容人数は約2500名

コンサートホールを借りるのにSEELEから資金が出ていたので観客から料金は取らなかつた。

基本的に第三新東京市の市民がここに来ていた。

無論市長も招待されている。

レイたちが通う第三新東京市立第壱中学校の生徒たちも観客として招待された。

SEELEのメンバーも招待されている。

日本政府と戦自にも招待状は出しているが、返ってきた答えはNOだった。

国連にも出しているが、時間的に無理であると返答が返ってきた。

だが、モニターで見えることはできないかと言われたので即座に可能であると返答している。

第三新東京市と国連のみであるが、TV中継もされている。

NERVでも中継されており、全職員がこの一時間だけ休憩を言い渡されていた。

会場の周りは諜報部と零課で厳重に警備されていた。

そんな会場の中でコウスケはいつものNERVスタイルで控室の前に立っていた。

「初めまして。ルシファー。」

急に声をかけられたので振り返ってみると、タキシードを着た見たことのない男が立っていた。

顔つきはカヲルと似ているが、カヲルよりも背は高く、髪は茶髪で目も青い瞳だった。声もどことなくカヲルに似ている。

「失礼ですが……どなたでしょうか？」

「君とは会ったことがあるんだけどね。」

そんなことを言われてもコウスケはピンと来ない。

「SEELEの13と言えかわかるかな？」

「SEELEの方でしたか。」

「私はミカエルと言うものだ。」

そう言うミカエルはすつと頭を下げた。

頭を戻すとミカエルは続けた。

「渚カヲルは元気かな？」

「はい。……もしかして……」

「そう、彼の遺伝子提供者だよ。……最も会ったことは無いけどね。」

「そうでしたか……カヲルは人として生きることを選びましたよ。」

「そうか……では、失礼するよ。」

ミカエルは去って行った。

（妙な男だ。）

それがコウスケの評価であった。

・・・

「しかし、驚きだよな。NERVがこんなことするなんて…」

ケンスケが感心しながら言う。

横にいるトウジはどことなく不安そうだ。

「せんせたち……だいじょうぶやろうか……」

「大丈夫よ。学校でも練習してたんだから。」

「そやな。」

ヒカリの言葉にトウジは同意する。

「そうだけ。碇達なら大丈夫さ。」

・・・

NERV第二発令所

「副司令、間もなく演奏会が開始されます。」

青葉が時刻を確認しながら言う。

「よし。総員、一時間ほど休憩だ。」

「演奏会か……大学以来かな。」

日向が何かを懐かしみながら言う。

「俺もこんなのは大学以来ですよ。」

青葉が言い終わると同時にメインモニターにコンサートホールが映し出された。

(ユイ君、君も見ているかね。)

冬月はそのように思っていた。

ちなみに初号機と弐号機のの前には巨大なモニターが設置されていて発令所のモニターと同じものが映し出されている。

ゲンドウが強く要請したからである。

少しシールドに見えるのは

……

気のせいではないだろう。

……

赤木研究室

「そろそろ始まるわね。」

ミサトがコーヒーをすすりながら言う。

横では加持も同じくコーヒーを飲んでいた。

「そうだな。」

「あら、もうそんな時間?」

リツコはPCのモニターをコンサートホールに切り替えた。

「こんなことをするなんて……NERVらしくないわね。」

ミサトがそのような事を口にした。

「そうね……少なくとも一年前までは考えられなかったわ。」

「いい方向に変わったのは綾波が来てからだな。」

加持は感慨深くモニターを見ていた。

「ルシファアか……コウスケ君にびつたりね。」

「墮天使の名前なのには？」

リツコの呟きにミサトは訝しがっていた。

「あら、ルシファアはラテン語で明けの明星と言う意味なのよ。」

「明けの明星か……確かに綾波に似合うかもしれないな。」

「最もそう呼ばれているのはリリスの夫だからと言う理由だけだね。」

「そう言うリツコにミサトがにやけ顔になる。」

「なに？ コウスケ君のこと諦めきれないの？」

「そ、そんなんじゃないわよ！ ……コウスケ君もリリスという方がいいみたいだしね。」

「そう言うあなたはどうかなの？」

リツコの反撃にミサトは少し狼狽えた。

「あたしは……」

「俺は葛城の横に暮らせるから不満はないぞ。同じ所なら言うこと無しなんだけどな。」

「ちよ、ちよつと！ 加持！」

「よかつたわね。ミサト。」

本人たちは気付いてないだろうが、三人の雰囲気は大学生であつた頃よりも穏やかな空気だつた。

・・・

VIP控室

「お待ちしておりました。議長。」

「碇か。」

ゲンドウの言葉にキールが答えた。

キールは髪が白くなっており、目にはバイザーがかけられている。

服はゲンドウが着ている物と同じ形で色が深い緑である。

「こちらへどうぞ。」

キールはゲンドウが勧める席につくとゲンドウもその横に座つた。

「NERVで演奏会とは……とんでもないことを考え付いたな。」

「はい。おかげで対外的にもイメージアップが図れます。」

キールはフツと笑った。

「ルシファーはそんなこと考えておらんのだろうか？」

「綾波特務一尉はフィフス…渚カヲルのためだけにやっています。」

「だからと言ってこんなことを思いつくとは…やはり面白い男だな。」

「だからこそNERVは救われました。」

「我々も同じか…演奏会、楽しみだな。」

…

「始まるみたいだぞ。」

ケンスケが言い終わると第一ブザーが鳴る。

続けて第二ブザーが鳴ると緞帳上がっていった。

舞台上に一人の女性が立っている。

NERVの制服を着た伊吹マヤだ。

マヤは司会としてここに立っていた。

最初は加賀ヒトミに受けてもらう予定だったのだが、予想以上にドジであることが発覚したのだ。

台本を読んで囁んだり、舞台に出ようとして転ぶなど…

最もその時に黒服が一人フォローしていた。

そのためコウスケの策謀で零課の内、第四班だけはNERV本部の防衛に当たっている。

四班の班長はドジな技術者と一緒にモニターを見ているのは余談である。

「……………最初にパツヘルベルのカノン、続けてFly me to the moon、最後に歓喜の歌をお送りします。短い間ですが、どうぞお楽しみください。」

マヤは舞台袖に去って行った。

代わりに制服姿のアスカ、レイ、シンジ、カヲルの順で舞台に入って行く。

舞台は中間幕で仕切られている。

皆が座るのを確認するとライトアップされ、シンジがチェロを構える。

「行くよ。」

シンジは静かに言うどチェロを弾き始めた。

それにつられるようにアスカ、カヲル、レイと続く。

とても静かな旋律

プロ並みにうまいと言うわけでもない。

それでも観客は四人に魅せられていた。

四人とも実に良い顔で演奏するからだ。

時折、互いの顔を見やって笑っている。

コウスケはそれを見届けると舞台裏に去って行った。

しばらくして四人の演奏が静かに終わる。

客席から拍手と口笛が聞こえてくる。

するとリリスが舞台袖からマイクを持って出てきた。

「別嬪さんやな……」

そんなトウジの声にヒカリはむすつとしながら続けた。

「綾波さんに似てるわね。」

ケンスケはパンフレットを確認して驚いた。

パンフレットには出演者の簡単な紹介文が乗せられているのだ。

これについてはゲンドウと冬月が制作にあたった。

「へえ、綾波リリスさんか……綾波特務一尉の妻!? それに綾波の母親だつて……」

「綾波のおかんやつて!」

「綾波さんにもお母さんがいたんだ……」

そんな三人をよそにシンジがチェロを弾き始める。

それに合わせて残る三人が弾き始める。

そしてリリスはマイクを構えて歌いだした。

・
・
・

楽屋でコウスケはリリスの歌を聞いている。

少しテンポが速いようだがリリスはそれに合している。

「嬉しいことしてくれるね。」

リリスが歌を歌うなどコウスケはこの時知ったのだ。

コウスケの顔には笑みがこぼれている。

リリスが誰のために歌っているのかわかるからだ。

「……………あ、不味い！」

・
・
・

リリスが歌い終わると中間幕が上がっていった。

オーケストラと合唱団は既に配置についている。

リリスたちも自分の配置に戻って行った。

しかし、皆は落ち着きがなかった。

指揮者が現れないのだ。

だというのにカヲルは動かない。

いったいどうするのか？

皆は不安でたまらなかった。

第43話 綾波の想い

舞台の動揺は客席にも伝わり、中継を通して見る者にも動揺が走っている。

「いったいどうしたんだ？」

日向がメインモニターを見ながら言う。

「指揮者なしでやるつもりなのか？ いくらなんでも無理だろ。」

青葉も不安を隠せないようだ。

（本当に君は騒がせるのが好きだな。）

誰が指揮者か知っている冬月は内心でため息をついた。

・・・

「結局、誰なのかしら？ 加持君はわかる？」

「俺もわからない。リツちゃんはどうだ？」

「指揮者がいるという話はあるんだけど、誰かまでは公開されていないのよ。」

赤木研究室でミサト、加持、リツコが言う。

三人も会場同様に少し動揺している。

「外から呼んだのかしら？」

「だとしたら……トラブルか？」

「かもしれないわね。NERVに指揮をできる人なんていないはずだから。」

……

「始まらないわね。」

ヒカリが呟く。

「こんな所で終わりがいな。」

トウジが不満そうに言う。

「何かトラブルがあったのかもしれないな。」

ケンスケが辺りを見回すと観客も少しづつざわざわし始めた。

「そないなことあってたまるかちゅうの！」

トウジの言葉は観客を代弁しているものだった。

……

「碇、何故始まらない。」

キールは少しいらついていた。

「指揮者が来ておりません。」

ゲンドウはキールとは対照的に落ち着いていた。

「それはわかっている。……もしか、選出が間に合わなかったのかね？」

「いえ……ただ、彼は必ず来ます。」

「いったい誰なのだ。」

ゲンドウはそれに答えずじつと待っているだけであった。

「まあいい。」

・・・

会場がざわざわし始めた。

動揺は大きくなつて行くばかりだ。

「カヲル、あんたが出なさいよ。」

「そうだよ。カヲル君。」

「いったい何をしているの？ このままじゃ収拾がつかなくなるわ。」

それを聞いてもカヲルはアルカイックスマイルを浮かべているだけだ。

「指揮者は来るよ。」

・・・

「どうすればいいの？」

舞台袖で伊吹は困っていた。

指揮者がいないのだ。

それで始めることなど不可能なのだから。

いなくてもできないことは無いが、バラバラになってしまう。
それでは水の泡になってしまう。

だからと言ってここで伊吹が出て何か言っても火に油を注ぐだけだということはおわっている。

それでも出ていって何かを言わなくてはいけない。

そう思い始めた時……

「すまん。遅れた。」

伊吹は振り返ると驚きで目を見張った。

「もしかして……」

・・・

不安が募って動揺がさらに増そうとした頃、ざわざわが一瞬で消えた。

舞台袖から誰かが出てきたためだ。

皆は驚いている。

何故ならその人物はNERVの制服ではなく、見たことない濃紺の長袖を着ているからだ。

ズボンと同じく濃紺のスラックス

手には白い手袋をつけている。

胸には長方形の略綬が付けられており、肩には銀色モールが張られていて短冊が一つと星が四つ付いている肩章を付けているので軍人であることはわかる。

濃紺の生地白いラインが入った制帽もかぶっている。

どこの誰なのか……

戦自なのか？

それとも国連軍なのか？

皆が顔を見たくても制帽を目深くかぶっていて黒いつばでよく見えない。

帽章にはNERVのロゴがあつた。

だが、それを見てわかる者もいた。

・・・

NERV第二発令所では日向が気付いた。

「あれは……」

「わかるんですか？」

「当然だよ。あれをNERVで着る人なんて……」

「フツ……やつと来たか。」

・・・

赤木研究室ではミサトと加持

「あの服は！」

「こりや、なかなかお目にかかれない代物だな。」

・・・

VIP控室

「碓、そう言うことか。」

・・・

客席ではケンスケが気付いた。

「あれは……帽章は違うけど国連軍の空軍の第一種礼装!?!」

「なんや? それ。」

「第一種礼装?!」

トウジとヒカリは不思議そうにケンスケを見た。

「軍人が一番格式が高い式典とかで着る制服だよ! そんなのをNERVで着れる人は

……」

・・・

その軍人は客席に礼をすると指揮台の前に立って帽子を少し上げた。

「こ、コウスケさん!?!」

「特務一尉!?!」

指揮者の正面にいたレイとシンジは目を見張りながら驚きの声を上げていた。アスカもぼかんと口を開けている。

カヲルはフツツと笑っている。

指揮台には綾波コウスケが立っていた。

コウスケの姿を見た合唱団とオーケストラはぎわめいていた。

合唱団の方から一名だけ

「かつ……いい……」

なんて言っていたが……

不安そうな皆にコウスケは一言言う。

「すまん。普段しない格好だから少し時間が掛かってしまったよ。」

「大丈夫なの？」

アスカの言葉は皆を代弁していた。

コウスケが指揮者として練習に出たことなど一度もないのだから。

「俺は楽器は弾けないんだ。」

コウスケは指揮棒を構える。

皆もそれに答え楽器を構える。

コウスケは指揮棒を振り始めた。

それに合わせてオーケストラが動く。

静かに、静かに曲は始まった。

ただ、シンジは

(この始め方……どこかで……)

と考えていた。

コウスケは小さく振っている。

そして時折、合図を送っていた。

その合図の次の小節でさらに楽器が鳴り響く。

コウスケは合唱団のバリトンを見た。

独唱が近いからだ。

担当者がそれに反応する。

演奏が続く中、レイは

(練習と同じ……何故?)

と考えていた。

ズレが出てても本人が気づけばコウスケは無視し、気づいていないようならその方に視線を向けるか左手で合図を送っていた。

演奏は続いていく。

全体で演奏するときには大きく大胆に、パートや少人数で演奏するときには小さく繊細に指揮棒を振る。

それが曲調に自然と合っている。

出番が近いパートには事前に合図を送る。

(これ……カヲルと同じ?)

アスカはそのように思っていたが、それは皆が思い始めていた。

コウスケの指揮はカヲルが練習中にやっていた指揮とどことなく似ているのだ。

実を言うとコウスケが歓喜の歌の練習をするときにいたのはカヲルに指揮を教えるためであった。

コウスケが本番で指揮をするという事はカヲルと休憩室で話した後に既に決まっていた。

それでも本番まで言わなかったのは、カヲルがやらせてほしいとコウスケに頼んだからであった。

本番では第一バイオリンのパートに入ってしまうので練習だけでもできるようにしたいと願ったのだ。

だからコウスケは敢えて言わなかった。

言ってしまうと当然ながら本番と同じが良いという事でコウスケが指揮に入っ

まうからだ。

それではカヲルの願いに答えることができない。

同じ家にいるレイとリリースが知らないのは、二人が寝た後にこっそりと練習していた。

カヲルとコウスケの指揮の仕方が似ているのはそう言うことである。

つまるところ練習中にカヲルを通してコウスケの思うとおりに演奏が向かうようになつていた。

実のところコウスケはリリースがいないことを良い事にオーケストラの合わせをする前まで自分の執務室でずつと楽譜を読んでいたりする。

コウスケは指揮を執りながらこの場を大変楽しんでいた。

(実に良い……歌は人の文化の極みか……カヲルも良い事を言うな。)

・・・

監視室

ここには第四班を除く零課の班長達が詰め寄っていた。

「指揮台に綾波特務一尉が立ってますよ!」

監視室のモニターを見ながらミツヒサが驚きながら言う。

「大丈夫なのか?」

シンゴは少し心配そうだ。

「大丈夫よ。」

ユキは全く心配していないようだった。

「本当か？ 長良。」

「綾波特務一尉はよくこういう場に出ていたわ。三年ほど前から。」

そんなユキにシンゴが不思議そうにする。

そんなシンゴの代わりにミツヒサが聞いた。

「よく知っていますね。」

「国連軍にいる友人のつてでね。こういう演奏会は見に行ってたのよ。……綾波特務一

尉がよく出ていたわ。」

するとユキはモニターを見ながら少し微笑んでいた。

「綾波特務一尉も嬉しいみたいね。」

そうは言ってもコウスケは腕以外全く動いていない。

「わかるか？ 榛名。」

「わかりませんね。」

「よく見なさい。動きが自然なのよ。嬉しくない時はどこかぎこちなくなるから。」

コウスケは腕しか動かしていない。

しかし、その動きはぎこちないものではなくとても自然に柔らかく動いているのだ。「そろそろ癖が出るわよ。」

「癖？」

・
・
・

(はう……コウスケと一緒に舞台に立ってる……)

ソプラノのパートの中にいるリリスはもう泣き出したくらいに感激していた。

練習中、リリスはどこか寂しく思っていた。

コウスケが参加しないからである。

てつきり合唱団にいるものだと思っていたのだが、コウスケの姿が見当たらなくてがっかりしていたのだ。

それでも最後の方の練習ではコウスケも顔を出していたのでそれで満足することにしたのだ。

それがここにきてコウスケが指揮台に立っているのだ。

しかもリリスが今まで見たことない格好というおまけ付き

(ダメ……ポカポカしすぎてどうにかなりそう……)

今まで寂しかった分の反動なのだろう。

リリスはある意味、夢心地になっていた。

するとコウスケがリリースだけを見た。

(あう！ ごめんなさい！ ちゃんとするから許して！)

だが、コウスケは微笑んでいた。

そつとコウスケは目を瞑った。

(どうしたのかしら。)

コウスケは指揮台にそつと指揮棒を置いてしまった。

...

「おい！ あいつ指揮棒を置いたぞ！」

モニターでコウスケを見ていたシンゴはそう叫んだ。

「何を考えているんでしょうかね？」

「邪魔なのよ。」

ユキはそう答えた。

「指揮棒が邪魔なら最初から持ってこなければいいだろ。」

「演奏に満足しなければ、彼は指揮棒を手放さないわ。」

「……なるほど、自分の手で演奏を感じたくなるのですか。」

ミツヒサはどこか納得していた。

「あら、目も瞑ってるわ……よほど満足しているのね。」

ユキの言うとおりでコウスケは大変満足していた。

コウスケが考えていたことが演奏で紡がれていくからだ。

コウスケはいつたい何をここで演出したかったのか……

最初のパツヘルベルのカノンは互いに弾き始めるタイミングが違うが、同じ旋律を奏でて一つの曲になっていく。

すなわち、他人と分かり合えるということを出したかったのだ。

次の Fly me to the moon では愛を出したかった。

だからレイがその曲を弾きたいといった時にコウスケは許可を出したのだ。

最もリリースが歌うことはコウスケには予想外だったが……

そして最後の歓喜の歌

ここでは世界の人々を演出したのだ。

この三曲からコウスケが言いたかったもの……

それは

「世界に生きる人々は愛で分かり合える」

そう言うことだ。

つまるところ、この演奏会でコウスケは自分の考える未来を演出しようとしたのだ。別に皆に知って貰いたいと言うわけではない。

ただ、カヲルのためだけに演出して見せたのだ。

これはカヲルにも当てはまるんだということ……

それが演奏で実現できてコウスケは満足しているのだ。

ふとコウスケは目を開いてカヲルを見ると、カヲルはバイオリンを弾きながら泣いていた。

そんなカヲルにコウスケは満足そうに目を瞑った。

演奏はクライマックスにたどり着いた。

コウスケも指揮に熱が入る。

演奏もそれと同時に熱がこもる。

合唱団もそれに答える。

そして合唱団は止まり、演奏が止まってコウスケも止まった。

拍手が鳴りやまないうちにコウスケが口を開いた。

「総員、最後のページを開け。」

皆は訝し気にコウスケを見るが、コウスケは真面目に見返してくるので言われたとお

りにする。

最後にあるページにはコウスケから練習曲として使うようにと言われた楽譜が入っている。

歓喜の歌の練習の前に必ずこの歌を一回は演奏していた。

さほど長いわけでもないので練習するにはいいだろうということなのだ。

無論コウスケが意図的に入れたものだ。

何故なら歌詞にコウスケが言いたいものが入っているからだ。

コウスケはリリースを見た。

リリースは頷いている。

合唱団も練習前の発声練習として歌っていたのだ。

コウスケが構えると皆も構えた。

そして演奏が始まる。

最後に演奏された曲の名前

それは

残酷な天使のテーゼ

・
・

「全く！ コウスケが出るなんて聞いてないわよ！」

「すまん。」

舞台裏でコウスケはアスカから怒られることになる。

コウスケはまだ礼装を着ていた。

「あんたも！ 知ってたなら早く言いなさいよ！」

「すまないね。ルシファーに口止めされていたから言うことができなかつたんだ。」

そう言つてカヲルは困つたように笑つた。

「でも、コウスケさんが指揮できるなんて知りませんでした。」

シンジは正直感心していたのだ。

「今までそんな機会がなかつたからな。」

「今日の演奏会……特務一尉の想いが伝わってきました。」

レイはとても嬉しそうに言つた。

「そうか……伝わつてよかつたよ。」

そう言つてコウスケは微笑んだ。

「綾波特務一尉！」

コウスケが振り返ると今日の演奏会に参加したメンバーたちがいた。

「綾波特務一尉の指揮……よかつたです。」

「今日、感じたことを未来にも伝えないといけませんね。」

「また、俺たちとやっつけてくれますか？」

「おう、その時はよろしくな。」

コウスケがそう言うのと皆が一斉に敬礼してきた。

コウスケも答礼する。

「渚君。君も練習中だけだけどよかつたぜ。」

「え……」

「またやりましょう。」

カヲルはコウスケを見た。

どうすればいいのか

カヲルの顔はそう言っていた。

「フツ……お前さんが心から言いたいことを言えよ。」

カヲルは少し考え込んだ。

「……ありがとうございます。」

はつきりと聞こえる声だった。

すると誰かがこつちに走ってきている。

「コウスケ！」

リリスだった。

「どうしたんだよ。」

「今日の演奏会……とてもポカポカしたわ！」

リリスはとても満足そうだった。

「そりゃ、よかった。」

「コウスケと一緒に舞台に出られたし……」

すると合唱団のメンバーが続けた。

「綾波三尉……練習中、悲しそうでしたもんね。」

「綾波特務一尉がいるときははしよっちゆう見てましたからね。」

「罪づくりな人ですな。」

などと言っていた。

「そうよ！ コウスケが参加しないから……」

「それは……悪かった……」

「でも……今日のコウスケ……かつこよかった。」

などとリリスは目をキラキラさせながら言うのであった。

「……あ、ありがとう……」

とコウスケは何とか返すことができた。

リリースのこういうしぐさにかなり弱いコウスケであった。
不意にコウスケは視線を感じる。

皆がコウスケを見ていた。

「コウスケさん……顔が真っ赤ですよ。」

とシンジは言う。

「ラブラブ……」

「良いこと言うわね。レイ。」

ニヤリと笑っているレイの後にアスカもにやけ顔で続く。

「こうやって人は分かり合うんですね。参考になります。」

カヲルがトドメを刺してくる。

他のメンバーたちもニヤニヤと笑っている。

「う、うるさい！」

とコウスケが言うが顔が真っ赤では全く迫力がなかった。

「ルシファー、今日はありがとうございました。」

カヲルが一步出てきて言う。

「あなたのおかげで僕はどうすればいいのか……いろいろ考えさせられました。」

「そいつは重畳だ。」

するとカヲルは微笑む。

「あなたは好意に値しますね。」

「どうい？」

(はて……どこかで聞いたことあるな……)

どこかで似たようなことを聞いたことがあるのだが、いまいち思い出せないコウスケだった。

「好きってことですよ。」

カヲルの言葉に一同が固まった。

ただ、コウスケだけは

「ああ、そうかい。ありがとう。」

と答えた。

「こ、こ……コウスケ！ あんた！ 何言ってるのよ！」

アスカが真っ赤になりながら吠えていた。

「は？」

「か、カヲル君も何言ってるんだよ……」

シンジはカヲルに食いついていた。

「いったい、何を言ってるんだい？ シンジ君？」

「全くだ。」

不意に冷たい空気を感じた。

リリスだ。

リリスはそれはもう恐ろしいと言うしかないほど黒いオーラを纏っている。

「カヲル？ あなた、何を言ってるのかしら？」

とてもとても冷たい声だった。

「好意？ フフフ……だからあの時、胸騒ぎがしたのね？」

「お、おい……リリス、何を怒ってるんだ？」

「コウスケもコウスケよ……そんな簡単に返事なんかしちやつて……」

ふとコウスケは気づいてしまった。

A Tフィールドで拘束されていることに……

そしてカヲル以外の全員が離れていることに……

「これを修羅場と言うのね……」

なんて言うレイの声が聞こえた。

「いったい何の話だよー！」

コウスケは何故か命の危機を感じていた。

「カヲル……あなた、男でしょ？」

「僕にとつては男も女も等価値だよ。」

「そう……コウスケを奪うつもりね……」

そこまでリリスが言つてコウスケは気付いた。

「何をバカな事を言つてるんだ。カヲルは信頼の証でそう言つただけだろ。」

「そうですよ。信頼の証として言つただけですよ。」

カヲルは相変わらぬアルカイツクスマイルで答える。

嘘は言つていないようだった。

「リリンの中で一番信頼できるリリンはルシファーですからね。それ以外の意味はありませんよ。」

「そう……なら、安心したわ。」

コウスケは体が自由になったことを感じた。

先ほどの黒いオーラは完全に無くなっている。

内心で安心してゐるコウスケであるが、それはコウスケだけではなかった。

不意にNERV職員たちが佇まいを直した。

「綾波特務一尉。」

コウスケが振り返るとゲンドウとキールが立っていた。

「ねえ、あの人は誰なの？」

アスカが小さな声で聞いてきた。

「ああ、……NERVのスポンサーだよ。」

「そうか、君たちに会うのは初めてだな。」

そう言うときールは咳ばらいをする。

「私はキール・ローレンツだ。ルシファアの言うとおりNERVのスポンサーをしている。」

コウスケの後ろではNERV職員たちが少し騒めていた。

ルシファアと言う呼び名はNERVではあまり広く伝わっていないのだ。

「今日の演奏会、誠によかった。礼を言わせてもらおう。」

「それはよかったです。」

「カヲルよ、どうかね？」

キールに声をかけられたカヲルは少し驚いていたが、すぐにいつものスマイルに戻っていた。

「リリンとして生きるのも悪くないです。」

「そうか。」

キールは満足そうに頷いた。

ゲンドウもシンジに

「よくやった。」

と一言だけ言っていた。

それでもシンジは大変うれしそうに笑っていた。

「それでルシファア、何故遅れたのだ。」

不意にキールがそのようなことを聞いてきた。

「申し訳ありません。この服を着るのに手間取っていました。」

コウスケがそう言うとゲンドウがフツと笑った。

少し嫌な予感がした。

「綾波特務一尉、嘘はよくない。……伊吹二尉。」

「は、はい！」

伊吹は突然ゲンドウに呼ばれたので上ずった声で返答した。

「綾波特務一尉はいつ楽屋に戻ったのかね？」

「確か……二番目の演目の時には舞台袖にいませんでした。」

「そんな長い間、何をしていたのかね？」

「ですから……」

「君のことだ。その服を着るのにどれくらい時間が掛かるか既に計測済みだろう。」

ゲンドウの言葉にリリースとレイが反応した。

「そう言えば……コウスケ、部屋に入ってくるなって言ってたわね。」

「それも必ず同じ時間……」

（もしか、碓司令にはばれてる……?）

コウスケは内心でそう思った。

「となると着るのに手間取っていたというのは嘘だな。」

ゲンドウの言葉に周りが騒がしくなっていた。

「綾波特務一尉は二番目の演目の時にはいなかったんだよな。」

「それも着る練習もしていたのよね。」

「だとしたら……なんで?」

「二番目の演目って……」

「綾波三尉の歌だよな。」

そこまで聞いてレイがニヤリとする。

「特務一尉、リリースの歌……聞き入っていましたね?」

レイの声にコウスケはどきりとする。

そんなコウスケの反応にほぼ全員がにやけ顔でコウスケを見た。

コウスケは帽子を深くかぶってしまう。

「凶星みたいだな。」

「綾波三尉、張り切ってたもんね。」

などとNERV職員は反応している。

「特務一尉、どうでしたか？」

レイが追撃をかけてくる。

「どうと言われても……」

ふと見るとリリスが何か期待を込めた目でコウスケを見ていた。

「……………よかった。」

ぼそりとコウスケは言った。

「え？　なんて言ったの？」

リリスには聞こえなかったようだ。

「うっ……………何でもない！」

「ねえ、なんて言ったの？」

「何でもないって言ったなら、何でもない！」

そんなやり取りがしばらく続くことになる。

・
・
・

「タブリスはリリンとして生きるか……………下手にリリンを組み合わせるのが不味かったか

…まあ、データはいつでもとれる。それにしても…ルシファー、君はやはり邪魔な存在だね。…リリスが勝手に作り上げた予言書では…次は鳥だったか…リリス、君は必ず手に入れて見せる…」

第44話 パンドラの箱

「これはどういうことだ？」

苛立ちを全く隠さないままコウスケは言う。

「何って、あなたの機体よ。」

リツコが淡々とした声で言うが、表情はどこか嬉しそうだった。

「そんなことはわかってる。」

「苦労しましたよ？ 外観は変えずに換装したんですから。」

と満足そうにミツヒサも言うが、そんなことはコウスケにもわかってる。

長年、コウスケの愛機としてともに戦場をかけたS u—37

機体は薄い水色の単色で覆われており、翼の端には黄色い塗装が塗ってある。

機体の裏側は薄い黄色だ。

このS u—37は改装されていた。

主な改装は装甲である。

コウスケの乗るS u—37は運動性を極限まで高めており、加速力も強化された物

だ。

通称「Su-37 AC」
アヤナミカスタム

本来、戦闘機。パイロットは出撃前に割り当てられた物に搭乗するのだが、この機体だけはコウスケの専用機になっている。

エンジンは従来のもではなく、アフターバーナーが無くても超音速巡航ができるものが搭載されている。

ノズルは従来のもより改良された物。

さらにアビオニクスも従来のもでは無く、ステルス性も格段と高くなっている。

そのように改造されているものではあるが、だからと言ってミサイルから逃げ切れぬというものではない。

このSu-37 ACが今日まで撃墜されなかったのは、コウスケによるものだろう。

現代のミサイルは性能が強化されており、大抵はミサイルの発射で戦闘が決まってしまうことが多い。

そのためコウスケは一気に加速し、ドックファイトに持ち込んでしまうのだ。

それも一機だけを追いかけず、次々にターゲットを変えていくので相手はロックオンするのにかかるの時間を取られる。

また、現代戦でドックファイトを果敢に挑む者などあまりいないので、それに相手が戸惑うのだ。

さらにコウスケはどこから攻撃が来るのかを予兆として捉えることもできる。

ミサイル発射の2、3秒前までわかってしまうのだからたちが悪い。

もし、ミサイルが発射された場合は急旋回で回避することが多い。

時々、摩訶不思議な機動でミサイルを回避するので変態機動とも呼ばれている。

そんな機動をするので、機体にかかる負荷は並の戦闘機以上である。

整備師泣かせとよく言われていたし、コウスケにとっても悩みの種だった。

それをNERVで開発した「試作型耐ATF装甲」に換装することで解決しようとしたのだ。

リツコにとってもデータを収集できるのでお互いにとって利害が一致しているのだ。

だというのにコウスケは不機嫌なのだ。

「これはなんだ。」

そう言うときコウスケはコックピットを指した。

「これって……コックピットじゃないですか。」

「見たらわかる……だが、こんなに広くなかった。」

Su-37ACのコックピットは改装前と比べると、もう一人は入れそうな空間が空いているのだ。

「まさかとは思いますが、誰か乗るんじゃないよな。」

「あれ？ 綾波特務一尉は知らないんですか？」

ミツヒサが不思議そうに言う。

「後ろに綾波三尉が乗るんですよ。」

「は？ リリスが？」

ミツヒサの答えにコウスケは思わず間抜けた返事を返した。

「そうよ。そうすることでこの機体もATフィールドを張れるようになるわ。」

ATフィールドが張れるということは中和もできるとのことだ。

中和できる距離に近づけばコウスケも支援要員ではなく、攻撃要員として参加できるため戦術の幅が広くなるということだ。

「でも、リリスが耐えられんだろう。」

普通では考えられない機動を行うのでパイロットにかかる負担は尋常ではない。

普通の女性には見えないリリスに耐えられるとは思えなかった。

「大丈夫よ。MAGIの計算によれば生身で耐Gスーツを着たコウスケ君以上の強度があるみたいだから。」

「耐G訓練も15Gくらいで行いましたけど、笑顔でこなしていましたよ。」

二人の話をコウスケは間抜けた顔で聞いていた。

人が耐Gスーツを着て耐えられるGは9Gが限度と言われている。

コウスケは生身で12Gを耐えることができるが、さすがにきついものであった。と言うよりそれを耐えられるコウスケの方が異常なのである。

そんな特性が判明したため、コウスケはパイロット養成コースに配属されたのだ。それをリリスは笑顔で耐えていたというのだから驚くなと言うほうが無理だろう。

「そんなバカな……あのふにほっぺで……」

知らず知らずのうちにコウスケはそう呟いていた。

「……それでね、コウスケ君。」

暫し啞然としていたコウスケはリツコの声に気を取り直した。

「この機体の名称なんだけど……」

「今までと同じでいいだろ？ Su-37で……」

「それでは区別がつきませんよ。」

戦闘機に限らず、発展型に改装されたものは以前の物と区別するために名称が変わったりする。

それが量産機などであれば必要だろうが、Su-37は世界でこの一機しかない。

「必要ないだろ。」

「そもいきませんよ。綾波特務一尉。」

「そうね。区別はしっかりしないと……」

怪しく笑っている二人にコウスケは抵抗を諦めた。

「好きにしてくれ……」

・
・
・

結局、改装されたSu—37ACは「Su—37LリリスカスタムC」と命名された。

その他にもアビオニクスがチューンアップされている。

その機体の搭乗者は自宅のリビングで椅子に座りながらのんびりと紅茶をすすっている。

一見、変わりないように見えるが右手の人差し指に絆創膏が張られていた。

包丁で指を切ったとか、ドアに挟んだというものではない。

リリスに囁まれたのだ。

朝、起きた時にいつものように起こそうとしたのだが、リリスの頬が目に入り人差し指でつついていたのだ。

その感触を暫く楽しんでいたコウスケだが、不意にリリスの顔が動き、指が口の中に入ってしまった。

慌てて引き抜こうとするが、リリスの顎の方が早く動き囁まれたということだ。

リリスはコウスケの指を囁んだ時に目が覚めてかなり混乱していた。

そんなリリスはレイ、カヲルとともにTVを見ていた。

一通りのニュースが終わると、テロップに奇跡の町と出ていた。

四年前に起きた大規模なテロにより一度は滅んだ。

国連軍も部隊を派遣したが間に合わなかった。

それでも復興し、今ではそれなりの工業都市として発展した町である。

何でも三年ほど前から「A」という人物から多額の資金が送られている。

そのような報道がTVから流れていた。

「リリンはすごいね。」

カヲルは感心しながら言う。

「人の想いがここまで発展したのね。」

レイもカヲルに同調しているようだ。

「それにしても許せないわね。誰があんなひどいことをしたのかしら！ ねえ、コウスケ。」

リリスはコウスケの方を振り向くが、すぐに不思議そうな顔になった。

レイとカヲルもリリスの反応が気になり、コウスケを見る。

とてつもなく悲しい表情をしていた。

「もしかして、間に合わなかった国連軍って……」

「俺だ……」

リリスの問いにコウスケは答えたが、声に力がなかった。

「ご、ごめんなさい……」

「気にするな。……それに公式記録なんて当てにならないよ……」

そう力なく言うコウスケを皆が訝しそうに見ていた。

「……本当は間に合っていたし、テロのせいでもない……」

コウスケの呟きはかろうじて皆の耳に入らなかった。

・・・

その翌日、リリスは赤木研究室にいた。

「そんなことがあったの……」

ミサトはコーヒを一口すすった。

ミサトはただ単に遊びに来ただけである。

加持もミサトとともに部屋に入っていた。

「それでね、リツコに調べてもらいたかったのよ。」

リリスがリツコを見ながら言った。

「奇跡の町か……」

加持が呟いた。

「何？ リョウジも知ってるの？」

「知ってるも何も有名な町だよ。」

「なら、「A」という人も知ってる?」

リリースは期待を込めながら言う。

それに加持は両手を挙げて答えた。

「残念だけど、日本人とまでしかわからなかった。」

「加持君でもわからないのね。」

リツコは少し残念そうだった。

「それにしても……公式記録なんて当てにならないか……」

「なんか、すごく意味深な発言よね。」

「コウスケもそのことはしゃべらないのよ……」

リツコは目の前のPCを操作し始めた。

「もしかしたら、残ってるかもしれないわ。」

「おいおい、大丈夫か?」

加持は少し困った顔になっていた。

「大丈夫よ。こつちにはMAGIがあるんですもの。」

暫くするとPCに何かのデータがヒットした。

「出たわ。」

「かなり奥まで隠されていたわね。」

「いったい、何が出るのやら。」

.....

.....

.....

.....

データを確認し終えたリツコと加持は自分を落ち着かせるために煙草に火をつけていた。

ミサトはコップを手にしたまま固まっている。

「嘘でしょ!？」

「これが事実ならとんでもないわね。」

「まさにパンドラの箱……と言うことか……」

リリスは黙ったぶるぶると震えているだけだった。

.....

綾波家では夕食後にティータイムが存在する。

無論、本格的なものでは無くちよつとしたつまみと紅茶で一息入れるだけだ。

最初はコウスケの一人だけだったのだが、同居人が増えるにつれてその参加人数も増

えたのだ。

「最近、加持と畑の世話をしてると聞いたぞ。どうだ？ カヲル。」

「いいですよ。生きるってことがよくわかってきます。」

そう言うカヲルの表情は実に満ち満ちていた。

加持もカヲルを拒んでおらず、一緒にジオフロントの畑を管理する者が増えて喜んで
いた。

「朝に放送されたものもそうですが、生きるということは良いですね。」

「そうか。そりゃ、よかった。」

するとレイがリリースに声をかけた。

「リリース、どうしたのですか？」

「へ………何でもないわよ。」

そう言うリリースはどこか無理に笑っているように見えた。

実を言うとコウスケはNERVから帰る時からずっとリリースがこの状態であること
を知っていた。

リリースが何かを不安がっていることに

それでも本人が話すまで待とうと思っていた。

レイとカヲルはじっとリリースを見ている。

リリスはとうとう堪えることができなかつた。

「……あの町について調べたの……」

たつた一言だけだつた。

それだけでもコウスケには理解できた。

リリスが何を知つたのかを……

「特務一尉？」

不意に立ち上がったコウスケをレイが訝し気に見ていた。

「ちよつと待つてろ。」

そう言うコウスケは部屋に戻つて行つた。

「リリス、いったい何があつたのですか？」

カフルがたまらず聞くが、リリスは答えなかつた。

気まずい沈黙が続く

そんな雰囲気の中をコウスケは戻つてきた。

「リリスは知つたんだな？ あの町で起こつたことを……」

リリスは力なく頷いた。

コウスケは椅子に座ると背もたれに体重を預けた。

「……あれは……四年ほど前の話になるな……俺が心を壊していた時の話だ。」

コウスケがしゃべるのを皆はじつと聞いていた。

「あの時の俺は国連軍の裏家業もやっていた。……命令ひとつでな……そんな命令にあの町の殲滅があつた……」

レイとカヲルは驚きで目を見開いている。

コウスケはそんな二人を見ると視線を右下に落とした。

「殲滅の理由はゲリラが潜んでいるからだと言いたが、真偽のほどはわからない。だから俺に命令が出た。」

「それでは……テロと言うのは……」

「真つ赤な嘘だよ。テロと言うのはカバーストーリーだ。それでも面目を保つために出撃したが、間に合わなかったとなつていただけだ。」

思わぬ衝撃的な発言に誰も何も言えなかった。

「今でも覚えているさ……真夜中に新型のサーモバリック爆弾で町を焼いた瞬間を……偶然見てしまった母親と子供の姿がな……」

コウスケは自嘲するように悲しく笑った。

そして一つの物を取り出して、テーブルに置いた。

「これは……通帳？」

「中を見てもいいぞ。」

それを聞いたレイは通帳を開いた。
カヲルもそれを覗き込んだ。

そこにはとんでもない額の資金の振り込みが記録されていた。
個人で持つにはとても考えられない金額だった。

「今まで俺にやらせていたことを黙っておけつて言うことさ。俺を暗殺しようにもできないもんだから金で黙らそうということだ。」

記録には今でも振り込みが行われていた。

しかし、三年ほど前から預金が0になっている。

振り込まれてもすぐに0になっていた。

「それが「A」の正体だ。」

コウスケの声にレイとカヲルがコウスケを見るが、相変わらず悲しそうに笑っていた。
た。

「TVに出てた人はおそらく生き残りだろう………これを知ったら、俺は殺されるだろうな………」

自嘲するように言うコウスケに誰も声をかけられない。

「ボタンを一つかけ間違えただけでこれなんだからな………全く、軍人になんかなるんじゃないかった………そうすりゃ、もつと他の道に………」

「特務一尉！」

コウスケははつとなりレイを見た。

「そんなこと言わないでください！」

レイは厳しい目つきでコウスケを見ていた。

「すまん。変な風に考え過ぎた。」

コウスケは残っていた紅茶をすする。

もう冷めていた。

・
・
・

厚い雲が空に広がっており第三新東京市は大雨に見舞われている。

そんな雲を一望できる高度36000フィートをコウスケは一人で飛んでいた。

衛星軌道上に使徒が襲来したためである。

本来ならリリースが後ろに乗るのだが、高高度飛行はいまだに経験しておらず危険であるという見解から今回は見送られた。

となっているが、リリースが何かを不安がっていることが一番の原因だった。

そんなリリースはカヨルとともに発令所にいる。

ふとコウスケは使徒を見る。

使徒は白く光っており、全体の形から鳥を連想させる。

使徒の真ん中より下には赤い球体が見えていた。

「今回のお客さんは静かだな……」

使徒が何かをしてくる気配がなかった。

第三新東京市では式号機、郊外では零号機が展開している。

初号機は予備兵力として本部内で待機している。

EVAは空を飛ぶことができない。

そのためコウスケがこうして偵察に来ていたのである。

『コウスケ君、どう?』

通信機からミサトの声が聞こえた。

「目標に変化なし。静かなもんだ。」

『まだ、射程距離外だから援護できないわ。油断はしないでね。』

「了解。」

相変わらず使徒に変化はない。

「敵対するつもりがないなら楽なんだけどな……」

そう呟くと使徒から七色に輝く光のようなものが発射された。

コウスケは特に反応しなかった。

いつもの予兆がなかったからだ。

光がコウスケと機体を包み込んだ。

「なんだ？」

妙に胸がざわざわし始める。

何かを探られているような感覚だ。

「……………！　ぐう……………」

突然、痛みを感じた。

実際に痛いわけではない。

体調は万全である。

コウスケが感じているのは感覚だけなのだ。

なんと頭……と言うよりは脳が何か刺激されているような感覚であった。

コウスケは機体を水平に何とか戻し、オートパイロットを起動させた。

・
・
・

「綾波特務一尉がオートパイロットを起動させました。」

コウスケの行動は日向によって報告される。

発令所のメインモニターには光に包まれるSu-37LCが映し出されている。

「敵の指向性兵器なの？」

「いえ、熱エネルギー反応無し。」

青葉が光線の解析結果を述べた。

「いったい何なのかしら？」

リツコは光線をじつと見ていた。

これがEVAならエントリープラグとプラグスーツに取り付けてある計器で何らかのデータが得られるだろうが、コウスケの乗る機体にはそんなものがない。

「アスカ！」

『わかってるわ！』

式号機の持つポジトロンライフルが火を噴いた。

『陽電子、消滅。』

「ダメです、射程距離外です！」

さらに式号機は撃つが使徒には届かなかった。

「式号機、残弾ゼロ！」

『ダメ！ 弾が切れた！ レイ！ まだなの！？』

『まだ充電が終わってない。』

レイの声から焦りが見えて取れる。

零号機はヤシマ作戦で使用されたポジトロンスナイパーライフルを装備している。

ヤシマ作戦で日本中の電力を一気に集めて使用したが、今回は充電時間の延長によつ

て大電力を確保しようとしていた。

「光線の詳しい解析結果が出た？」

「可視波長のエネルギー波です！ ATフィールドに近いものですが、詳細は不明です

！」

「何のつもりなのかしら……」

リツコの声からも焦りが感じられる。

「……あの子はコウスケの心を知ろうとしてるんだわ。」

リリスの言葉に発令所が驚いていた。

使徒が人の心を理解できるのかなんてことを誰も言わなかった。

「リリンの心を……ましてヤルシファアの心をあんな風に知ろうなんて……許せない
ね。」

カヲルは眉をひそめながら言う。

・
・
・

思い出される記憶

コウスケが今までやってきたすべての記憶

戦自の研究所を襲った時

初めて使徒と戦闘したときに受けた戦死報告

己の信念のために立ちふさがってきた敵
命令で焼き払った町

逃げ出した脱走兵の抹殺

政府要人が乗った航空機の始末

やつかみで絡んできた同僚を意識不明の重体にしたこと

彼女をミサイルで吹き飛ばしたこと

食うために盗みを働いて、ボロボロになるまで殴られたこと

仲間に裏切られて死にそうになったこと

逆に裏切って仲間を陥れたこと

セカンドインパクトの混乱で親と死別したこと

そんな記憶が次々と思いだされていた。

・
・
・

「ポジトロンスナイパーライフルの準備ができました！」

「撃て！」

ミサトの号令とともに零号機が引き金を引いた。

まっすぐに使徒に届くが、ATフィールドで阻まれてしまう。

「だめです！ この遠距離でATフィールドを貫くには、エネルギーがまるで足りませ

んー」

「しかし、出力は最大です！ もう、これ以上は……」

青葉と日向から絶望的な報告が上がってくる。

ミサトは打つ手がないことに歯ぎしりしていた。

「……シンジ、ドグマに降りて槍を使え。」

突然ゲンドウが言いだした。

「ロンギヌスの槍か!？」

冬月が咎めるように言う。

「ATフィールドの届かぬ衛星軌道の目標を倒すにはそれしかない。急げ!」

『わかったよ。』

「最後の使徒への切り札がここで失われるか……」

「冬月、ここで綾波特務一尉を失えばリリスはどうなる。」

「……わかってる。だが、委員会への報告は碇に任せるぞ。」

・・・

コウスケはいろいろな記憶を思い出されていた。

まるで古代研究者が未開の遺跡を発掘しているように思えた。

「この……やろう……」

そして記憶はコウスケの深奥までたどり着く。それはコウスケが意図的に考えなかったものいや、考えたくなかったもの自分がなんでこんな人生を送っているのかその原因は

2000年の……

「！」

(このままでは不味い……)

コウスケはそう考えた。

だから

機内にいつも置いてある

グローブ17を

自分の左腕に向けて

「ぐろう………」

撃った

・
・
・

「コウスケ君！ 大丈夫!?!」

発令所に響いたコウスケのうめき声にミサトが反応した。

『だい……………じょうぶだ……………少し腕を……………痛めつけたがな……………』

送られてくるのは音声のみなので、いったいどういう状況なのか発令所のメンバーはわからなかった。

『……………セカンドインパクト……………確かに……………それが始まりだよ……………』

「セカンドインパクト？ ……綾波特務一尉は何を言ってるんでしょうか？」

コウスケの言葉に疑問を持った伊吹がそのように言う。

「……………コウスケ君の悪夢の始まりのことね。」

リツコはどこかつらそうに目を細めていた。

ミサトも同様のしぐさをしている。

一方リリスは青ざめながら震えている。

カヲルはそんなリリスを不思議そうに見ていた。

「初号機、二番を通過。地上に出ます！」

メインモニターにはロンギヌスの槍を持った初号機が現れた。

初号機が投擲体勢に入る。

『カウントお願ひします。』

「カウントダウン入ります！……………5、4、3」

MAGIの支援を受けて初号機が誤差を修正する。

「2、1……」

「0！」

『いっけえええええええ！』

伊吹のカウントダウン終了とともに初号機が槍を投げた。

槍は厚く覆っている雲を払い去るとまっすぐ使徒に向けて飛んで行く。

使徒はATフィールドで守る。

赤い槍とATフィールドがせめぎ合う。

ATフィールドは破れ、貫通し使徒のコアを貫いた。

・
・
・

初号機が投げたロンギヌスの槍は月軌道に乗ってしまい、回収は不可能だった。

Su-37LCは自力で帰還することができなかつたため、MAGIの自動管制で帰還を果たした。

しかしコウスケはコックピットでぐったりとしていたため、病院に緊急入院することになる。

36000フィートと言う高高度で自分の腕を撃ち抜いたため、出血が多くなったのと使徒による精神的な負荷が原因だった。

そんなコースケを見舞うためにリリスは病室の前に佇んでいたが、一向に中に入ろうとはしなかった。

ぐったりしているコースケを見たくないので

それがNERV職員の概ねの予想だ。

リリスが中に入らない理由を正確に把握しているのはゲンドウと冬月、そしてレイだけである。

とにかくリリスはコースケの病室の前で所在なげに立っていた。

「綾波三尉。」

ひどく淡々とした男の声が聞こえたのでリリスが視線を向けると劍崎キョウヤがそこにいた。

「キョウヤ……………どうしたの?」

「本部を巡回中です。」

「そう……………」

そう呟くとリリスは再び病室に視線を戻した。

「中には入らないのですか?」

リリスは何も答えなかった。

「……………心癒せる存在がいることがどんなに良い事か今更わかった……………」

突然そうい出した剣崎をリリスは不思議そうに見ていた。

「いつだったか……綾波が言っていたことですよ。」

「コウスケが？」

「別に何もしなくていいから傍らにいてくれればいい……お前もそんな人を見つめるんだな……そう惚気てましたね。」

剣崎はサングラスをかけなおした。

「……巡回中ですので失礼します。」

剣崎は去って行った。

リリスは剣崎を見送ると意を決して病室に入った。

ベットには上半身を起こしたコウスケがいた。

左腕には包帯が巻かれている。

コウスケは病室に入ってきたリリスを見ていた。

ただじっと見つめているだけ。

「コウスケ？ 大丈夫？」

何か様子がおかしい

リリスは漠然とした不安を感じていた。

コウスケはじっと見つめてくるが、好意も悪意も感じられなかった。

そして

コウスケの一言が

リリースを打ちのめす

「……………誰だ……………」

第45話 Ambivalence

「……そのため、ロンギヌスの槍を使用しました。」

暗い部屋の中でゲンドウが喋り終えた。

『うむ、致し方あるまい。』

『衛星軌道上に使徒が現れるのは今回で二回目だな。』

『今後のことも考えると専用の兵器の開発が急務だな。』

SEELEのメンバーが次々と喋り始める。

一通り終わった時にキールが口を開いた。

『にして、礎。ルシファアの容体はどうかね？』

『身体的には何の問題はありません。』

『そうか……』

SEELEのメンバーは黙ってしまった。

「議長。」

『なんだ？』

「各国でEVAが建造されているとのことですが？」

『うむ……そのことは……』

『私から説明しましょう。』

ゲンドウは聞いたことのない声だったので驚いた。

誰が話しているのか注意を向けると、13—ミカエルから聞こえてきたようだ。

ゲンドウが記憶する限りでは初めて声を聞いた。

『今後の使徒との戦いで戦力の増強は急務です。』

『しかし、使徒はあと一体ですが？』

『そんな保証はどこにもありませんよ。』

ミカエルの言葉にゲンドウは驚いた。

『死海文書には……』

『あれはリリスが作らせた物……では、使徒を作ったのも彼女だと？』

『そう考えるのが妥当です。』

『ならば何故、彼女は使徒の襲来時期を言わないのでしょうか？ 彼女が作ったならば

当然、

知っているはずですよ？』

そう言われた時ゲンドウはミカエルの言っていることが正しいと感じた。

リリスは来るとは言っていたが、いつ来るのかどういいう形をしていて、どういいう能力

を持っているかなどは一切喋っていない。

意図的に隠しているともとれるが、そんなことをしてもリリスには何のメリットがない。

「すると使徒は……」

『第一使徒……アダムから生まれていると考えるべきです。』

「しかし、それは死海文書にも書かれていることですが？」

『アダムは生命の実を与えられた……知恵の実を与えられたリリスが人を作ったように、アダムもそのような能力があると考えてもおかしくはないでしょう。』

「では……」

『アダムから使徒が生まれることが予測できても、具体的な数まではわからなかったという事です。』

『そう言うことなのだ。碓。』

「……わかりました。」

ゲンドウは力なく答えた。

ゲンドウからしてみれば次の使徒を倒せばシンジを含めた四人のチルドレンたちを開放できるし、何よりも妻である碓ユイを初号機から救出できると思っただけにこの事は少なくともショックを受けることになる。

『がっかりしないでください。今、新型のダミーシステムを研究中です。機械による制御なので、それがあればパイロットとその母親はもういりませんから。』

「そうですか。」

ゲンドウの言葉はかなりそっけないものだった。

それでも彼を理解できる人にはそこに含まれる喜びを感じられるだろう。

・・・

「コウスケ君……普通に仕事してるわね……」

「身体的には問題ないのだから当たり前でしょ？」

ミサトの呟きにリツコが冷静に答えた。

コウスケはすでに退院しており、いつもの業務に戻っていた。

「記憶喪失……今だと実感が湧いてくるわ。レイにもリリスにも反応しないんですもの。」

「今までのコウスケ君とは別人に見えるのも無理はないわ。……彼の記憶は2011年から2012年の時のものだから……」

リリスからコウスケがおかしいと言われたリツコはコウスケに簡単な質問を投げかけたのだ。

コウスケならば知っていておかしくない質問だ。

それに対してコウスケは無言で答えた。

それに疑問を持ったリツコが最後に

「あなたの所属はどこかしら？」

と投げかけた。

「……国連軍第4航空団所属、綾波コウスケ中尉。」

コウスケの口からは淡々とした答えが返ってきたのだった。

「それにしても、あの態度は何とかならないかしら？ 葛城本部長……なんて言われて

も困るわ。」

「私は赤木博士と呼ばれてるからあまり違和感はないわね。」

その時、研究室のドアが開いた。

リツコとミサトがドアの方に振り返ると綾波コウスケがそこにいた。

「あら？ コウスケ君じゃない。どうしたの？」

ミサトが自分が主であるかのように言う。

コウスケはそれに答えずまっすぐにミサトに向かって歩く。

「ど、どうしたのよ？」

「……葛城本部長、資料をお持ちしました。」

黒服にも負けないくらいそっけなく言うコウスケはファイルを差し出した。

「そ、そう……ありがと。」

ミサトはコウスケからファイルを受け取る。

コウスケは敬礼すると部屋を出ていった。

「はあ……息が詰まりそう……」

「前なら……加持ばかりに任せるなってお小言もらっていたものね。」

リツコは悪戯っぽく笑っているが、どこか寂し気にしていた。

「それにしてもあの表情……前のシユミレーターのことを思い出すわ。」

「あれね……」

・
・
・

コウスケが目覚めてから記憶喪失だと判明したのちにシユミレーターを使ったテストを行った。

戦闘機ではなく白兵戦

記憶を失ったコウスケがどれほどの戦闘力を持っているのか計測するためだ。

目標は敵性勢力の殲滅および発令所の奪取

舞台はNERV本部になっていた。

シユミレーターが起動しコウスケの前には仮想空間が作り上げられ、敵兵が飛び出してくる。

そこに弾丸を叩き込む。

とは言っても実弾を撃っているのではなく、引き金を引くとMAGIが弾の軌道を計算して命中したかどうかを判断する。

遠距離では胴体、近距離では頭を狙う。

シユミレーターが続き敵兵が人質を取っていた。

人質はNERVの制服を着ている。

コウスケは撃つ。

弾丸はまっすぐ進み

NERVの制服に命中する。

そして敵兵も倒れこむ。

表情が読めないコウスケの顔

それに唾然とするミサト

リツコはMAGIに指示を出した。

人質の数が增える。

それでもコウスケは構わず発砲

敵兵とともに人質も殲滅していた。

リツコが試しにNERVの主要メンバーも人質として出してみた。

日向や青葉、ミサトやリツコ、しまいにはゲンドウが出て構わず発砲していた。容赦と言うものが完全に抜け落ちている。

ただ、チルドレンと伊吹だけは何故か避けていた。

・
・
・

「あれには参ったわね……」

ミサトは自分が何の迷いもなく撃ち抜かれたことを思い出して苦い顔になっていた。

「人質の解放は命令にない、敵の殲滅に邪魔と判断……そう言ってたわね。」

「命令じゃなきゃしないなんて……」

シユミレーターはとんでもない結果となったため、今度は人質の解放も目標に追加した。

するとコウスケは人質への発砲をすっぱりと止めてしまった。

「でも、なんでマヤちゃんだけは撃たなかったのかしら？」

モニターに伊吹が出てきたとき、リツコの支援をしていた本人は目をそらしていた。

自分が撃たれる瞬間を見たいなんて人はいないだろう。

「何も知らない人がマヤを見たらどう判断するかしら？」

「うーん……マヤちゃんって童顔だからね……実年齢より若く見えるんじゃないかしら？」

「そうね。そしてコウスケ君はシンジ君たちも撃たなかったでしょ？」

その言葉にミサトはピンと来るものがあった。

「……もしかして、マヤちゃんを中学生と判断したってこと？」

「中学生でなくても未成年と判断した可能性があるわ。MAGIの計算でも99%強よ。」

「納得いかないわ……」

それは伊吹だけ撃たれなかったことなのか、それとも実年齢より若く見えることなのかはミサト本人にはわからない。

「でもね……コウスケ君が反応したのは彼らだけじゃないのよ。」

「そうなの？」

ミサトがそう疑問に持つのも無理はない。

チルドレンと伊吹以外はすべて発砲していたのだから。

「……リリースだけには何らかの反応を示していたらいいのよ。」

「リリース？ 彼女だけには撃つのをためらったってこと？」

「違うわ。」

そう言うとりツコは煙草を取り出していた。

「撃つ速度が他人に比べて一秒近く早かった……それも確実に息の根を止められるよう

に……」

・
・
・

ミサトにファイルを渡したコウスケは自分の執務室に戻っていた。

執務室に戻る時に何人か職員と出会うが、声をかけることが無かった。

また、職員たちの方も声をかけなかった。

正確にはかけづらかったという方が正しい。

コウスケから無言で発せられる見えない壁みたいなものを感じていたからだ。

一応、記憶の無い期間の経歴については既に目を通していたが、特に驚いてはいなかった。

レイと出会って娘だと紹介されても何も言わなかった。

無感動で見ただけだった。

そんなコウスケは淡々と雑務をこなしている。

隣ではリリスがいつものように自分の仕事をしていた。

「コウスケ。」

リリスが呼びかけるがコウスケは反応しない。

それに寂し気にリリスは顔を俯かせるがコウスケは気にしない。

「……………綾波特務一尉。」

無理に笑顔を作ってリリスがそう呼ぶとコウスケは顔をリリスに向けた。コウスケの表情に変化はない。

目は何か無機質なものを感じる。

「できたわ。」

そう言っただけでリリスは一枚の紙を渡した。

コウスケはそれを受け取るとじつと眺めて無言で突き返した。

「どこがおかしいのかわからないんだけど……」

リリスがそう言うとコウスケはペンを取り出してチェックする。

コウスケは一言も喋らない。

淡々とこなしている。

そんなコウスケの姿をいたたまれない気持ちで見ているリリスであった。

・
・
・

リリスはNERVの休憩室に一人座っていた。

手には缶の紅茶が握られている。

リリスはそれを口に含むと、すぐに呑み込んだ。

「……不味い……それに暖かくない……」

リリスが持つ缶はもともと冷たいものである。

しかし、リリスが言うのはそういうものでは無かった。

「……………暗い顔してるわね。」

その声にはつとなり、リリスが顔を上げるとアスカが立っていた。

「ごめんなさい。そんな顔してた？」

「……………そうやって無理に笑っててもつらいだけよ。」

リリスは再び暗くなる。

そんなリリスの横にアスカが座った。

「コウスケの体は大丈夫なんですよ？ 記憶だつていつか戻るかもしれないじゃない。

何でそんなに暗いのよ。」

「……………コウスケの記憶……………戻らない方がいい……………」

「はあ？ あんた、本気で言ってるの!？」

アスカが詰め寄るが、リリスはアスカとは反対を向いていた。

「今のコウスケはあんたのこと何も覚えてないんですよ!？」

綾波三尉つてずっと呼ばれてもいいの!？」

今のコウスケはリリスの事を階級で呼んでいた。

つまりは綾波三尉と呼んでいるのだ。

ちなみにチルドレンたちも階級で呼んでいる。

レイを綾波准尉、シンジは碓准尉、カヲルは渚准尉、アスカはラングレー准尉と呼んでいる。

一応チルドレンたちは准尉待遇になっている。

最もこんな呼び方をしているのは今のコウスケしかない。

「嫌よ……前みたいのリリスって呼ばれたいわ……」

「なら、コウスケの記憶が戻ったほうがいいでしょ？　なんでそんなこと言うのよ！」

「コウスケは私を恨んでいるもの……」

「コウスケがリリスを？　……そんなわけないでしょ。」

「なんでコウスケがあんたを恨まないといけないのよ。」

リリスは言うべきかどうか迷った。

このことを知っているのはレイとゲンドウ、冬月の三人だけだ。

リリスがアスカを見ると真剣な目で見つめるアスカの目が入ってきた。

「……セカンドインパクトを計画したのが……私だからよ……」

アスカはリリスが何を言ったのか理解できなかった。

「セカンドインパクトを……あんたが？」

「そうよ……リリンがセカンドインパクトを起こすように仕向けたの……」

「なんで……」

「私の計画のため……今はもうやるつもりはないけど……」

いきなりそんな話が出てきたため、アスカは自分の耳を疑いたかった。

だが、リリスが相変わらず暗い顔をしながらも目はしつかりとしているのを見て嘘ではないことを悟った。

「それ……コウスケも知ってるの？」

「最初に教えたのはコウスケよ……今は覚えていないけど……」

それを聞いてアスカは考え込んだ。

以前に加持に修学旅行について聞いたことがあった。

その横にはコウスケもいた。

二人して苦い顔をしていたのを思い出していた。

そして温泉に行った時、一通りレイとミサトとじゃれあった後ミサトの胸にあった傷のことを聞いたのだ。

ミサトははぐらかすように言っていたが、やはり苦い顔を隠しきれていなかった。

そして自分の過去を話したコウスケ

自嘲するように語ったコウスケを忘れるわけがなかった。

それにその時のコウスケから何かもつと深い暗さを感じ取っていた。

「……そのことをみんなに言っちゃダメよ。特に今のコウスケにはね。」

「ゲンドウとコウゾウからも言われたわ……」

「それに……コウスケのこと、もつと信用してもいいんじゃない？」

リリスはきよとした表情でアスカを見ていた。

「あたしつてね、コウスケのこと恨んでたのよ。」

「なんで？」

「あたしが一番大切に思っていた物を簡単に否定したからよ。あいつ、なんて言ったか知ってる？ エースつて言うのは一番生き物を殺している人のあだ名なんて言ったのよ。酷いと思わない？」

そう言うアスカはどこことなく懐かしそうだった。

「それでね、聞いてみたのよね。何でそんな風に言ったのかって……それで色々話してくれたわ。」

リリスはアスカの話をじつと聞いていた。

「それであたしも色々考えたつてわけよ。それでコウスケと話すようになったんだけど、ふと気付いたのよね。」

「何を？」

「みんなはあたしのことをチルドレンとして見るけど、コウスケはそうじゃなかった。」

アスカは少し微笑んでいた。

「みんなはシンク口率がどうか、動きがいいとか言ってくれるけど、コウスケは訓練もいいが青春しろよとか恋人でも作れよとか言ってくるのよね。」

「なんでコウスケはそんなこと言ったのかしら？」

「最初はあたしも疑問だったわ。こいつは何言ってるんだろってね。今でも本当のところはよくわからないけど、多分コウスケはあたしのことをチルドレンとして見てなかったのね。」

リリースはアスカが何を言いたいのかわからず、頭に疑問符を浮かべていた。

「チルドレンじゃないあたし……惣流・アスカ・ラングレー自身を見てくれていたからあんな言葉が出たんじゃないのかなってね。」

アスカはどこことなく嬉しそうだった。

「セカンドインパクトの首謀者があんなたつていうことをどう思っているのかはコウスケしかわからないことだけど、これだけは言える。コウスケはあんなのこともよく見てる。」

「でも……」

「はあ………一つ聞くけど、コウスケ自身から恨んでるって聞いたの？」

リリースは顔を横に振る。

いくら考えてもコウスケがそのように言ったことは無かった。

「なら、コウスケがリリースを恨んでるってわからないじゃない。考え過ぎよ。」
「……そうね。ありがとう。」

「さて、次はあんたの番よ。」

リリースがアスカを見ると妙にニヤついていた。

「へ？」

「へ？ じゃないわよ。何であんたがコウスケに惹かれたのか喋りなさいよ。」

「そうね。」

リリースは手にしていた紅茶を飲んだ。

先ほど感じていた冷たさはどこかに消え去っていた。

・・・

コウスケは自宅のリビングでただじっと座っていた。

何もせず、じっと座っているだけだ。

ベランダで煙草も吸わない。

レイとカヲルは自分の部屋に帰っていた。

学校があるから、宿題があるからなどと言っていたが、本当は今のコウスケを見たく
なかつたからと言うのが強いだろう。

記憶を失ったコウスケの行動はかなり単調になっていた。

NERVでは黙々と業務をこなして、家ではじつと待っているだけ。

そして時が来たらベツトで眠る。

まるでロボットがプログラムに従って動いているようにも感じられる。

そんなコウスケの前には紅茶が一杯置いてあった。

リリスが淹れたものである。

記憶を失った当初は水以外飲むとはしなかったが、今ではリリスが淹れてくれた紅茶だけは口にするようになっていた。

そのリリスは鼻歌を歌いながら台所で食器を洗っている。

歌っているのは「綾波マーチ」

コウスケが綾波家伝統の歌だと言っていたものだ。

「綾波マーチ」と名付けたのはNERV職員たちだ。

歌詞があまりにも特徴すぎると、時折レイとリリスがNERV内で歌っているのを見て、誰がそんな歌を二人に教えたのかすぐに検討が付いた。

そのため「綾波だけが歌うマーチ」を略して「綾波マーチ」と言うわけである。

最もそれは正しくなく「綾波」以外にも歌える人はいる。

全くの余談だが、ゲンドウや冬月と言った年代の職員たちはどことなく懐かしさを感じているらしい……

とにかくリリースは上機嫌だった。

その理由はコウスケから「……うまい。」の一言を貰ったからである。

記憶を失った当初、コウスケは目の前に出された料理に目もくれず以前に非常用と言つて備蓄してあつたコンバットレーションを食べていた。

それを同居した初期に見たレイが食べてみようとするも

「本当に非常用だ。長期間の保存には適してるし、カロリーもある

……だが、味は最悪だ。泣きたくなるぞ。」

とコウスケに止められた。

それを思い出したレイがコウスケから一口もらう（と言うよりは本人が何も言わなかったため勝手に食べた）が、泣き出してしまった。

カヲルはコンバットレーションを口にした状態で固まってしまった。

リリースはテーブルの上に突つ伏して倒れていた。

コウスケはそれを何食わぬ顔で食べる。

それ以降、そのレーションは綾波家の主以外のメンバーで嚴重に封印されることになり、コウスケには出されたものを食べるようにさせていた。

それでもレーションを食べている時と顔は変わらなかつた。

一言も感想を漏らさなかつた。

そのためリリースが本気で料理を作った。

だからその感想をもらえてリリースは嬉しかったのだ。

「……………綾波三尉。」

突然、コウスケに呼ばれてリリースは驚いた。

今のコウスケが自発的に声をかけたことなど一度もないからだ。

あつたとしても業務のことではない。

「……………自分の過去を知っているな？」

リリースは流し台の水を止めて簡単に手を拭くとコウスケの方に振り返った。

コウスケはまっすぐにリリースを見ていた。

「……………怖くないのか？」

表情に何ら変化は無かった。

だが、目にはわずかに怯えが見て取れた。

「怖くなんて無いわ。あなたは後悔しているんでしょ？」

コウスケの目が僅かながら開いた。

「その話をする時、とてもつらそうだったから……………」

「……………そうか。」

コウスケはテーブルに視線を落とした。

「…………セカンドインパクト…………あれが無ければ今の人生も無かった…………」

コウスケの淡々とした呟きがリリスの耳にも入った。

「…………セカンドインパクト…………それを計画したのは私よ。」

コウスケがリリスの方を向いていた。

その顔には無表情が剥がれ落ちて驚きと戸惑いが見て取れた。

「綾波三尉…………何を言っている…………」

「あなたの人生を狂わせたのは…………私だと言ってるのよ。」

リリスはコウスケとは反対を向いていた。

「ごめんなさい…………そんな人が近くにいたら嫌よね。…………最も私は人じゃないけど

…………」

「綾波三尉…………」

心なしかコウスケの声が怒りで少し震えていた。

「…………さよなら。」

リリスは出ていった。

それをコウスケは呆然と見ているだけであつた。

「特務一尉、リリスはどこに行きましたか?」

いつの間にかレイがリビングに出てきていた。

レイは二人が心配で様子を見に来ていたのだ、ちょうどリリスが出ていくのと同時に出てきたのでリリスの姿を見ていない。

「……綾波准尉、綾波三尉がセカンドインパクトの計画者と言うのは本当か？」

「どうしてそれを……」

「……本当なのか……」

驚いてるレイをよそにコウスケはテーブルに置いてある紅茶をじつと眺めていた。

・
・
・

綾波家を出たリリスは屋上に出ていた。

コンフォート17の屋上は周りにアルミ製の手すりエレベーターがあるだけだ。

リリスはその手すりの上に腕を組んで頭を乗せていた。

「リリンは闇を恐れ、火を使い、闇を削って生きている……今も昔も変わらないわね。」

日は既に暮れており、所々から見える光で僅かながら照らされている第三新東京市をぼんやりと眺めながらリリスは呟いた。

そんなリリスの髪を夏にしてはひんやりとした風が撫でる。

「これからどうしようかな……」

行く当てのないリリスはこれからのことで悩んでいた。

NERVに行くことも考えたが、それではコウスケとばったり出会うなんてこともあ

り得たので止めた。

「はあ………」

ゲンドウや冬月などから止められていたにもかかわらず、セカンドインパクトの計画者であることを何故、喋ってしまったのかと少し後悔していた。

それでも喋らずにはいられなかった。

コウスケの記憶が戻る保証はない。

喋らなければそのままでいられたかもしれない。

記憶が戻ったらその時に考えようトリリスは思っていた。

ただ、コウスケの眩きを聞いた時に騙しているような感覚に囚われた。

それが嫌に纏わりついてきた。

だから打ち明けてしまった。

だからコウスケを見ることができなかった。

特に目を見るのが怖かった。

今のコウスケは表情が出てこないが、その分だけ目で訴えかけてくるのだ。

その目で怒りと憎しみで見られることが怖かった。

「……………最後に……………名前で呼ばれたかったな……………」

それももう叶わないとわかっている。

リリスはひっそりとこの町を出ていくことを決心した。

「綾波三尉……」

その声に反応し、リリスが振り返るとコウスケがいつの間にか立っていた。

コウスケの後ろに浮いている月光でコウスケの顔はよく見えなかったが、手にはグロツク17が握られていた。

「……追ってきたのね……」

コウスケはそれに答えずリリスに近づくと二歩くらいの距離を置いてコウスケは止まった。

グロツク17を向けてくる。

「あなたからしてみれば、それが当然よね……」

やはりコウスケは答えなかった。

「それで気が済むなら……そうしてちようだい……」

リリスは目を瞑る。

ここで殺されるのも良いかもしれないと思っていた。

そうすればコウスケに覚えておいてもらえるかもしれないからだ。

リリスの体は本体が人の体に変化したもので体の構造は人と変わりが無い。急所を狙われたら生きることができない。

不意にコウスケとの思い出が走馬灯のように思い浮かんでくる。

それもここで終わり

リリスがそう考えたとき

一発の銃声が

第三新東京市の夜空に響き渡る

「……………これで水に流す。」

コウスケの声にはつとなりリリスが目を開けると、銃口を下に向けたコウスケが目に入った。

銃口をたどるとリリスの一步手前にのめりこんだ銃弾があった。

「どうして……………あなたは私を恨んでいるはず……………」

「肯定だ。」

「なら……………」

「綾波三尉が自分のために色々してくれたことは知っている。特に今日の夕食はうまかった……」

だからこれで水に流す。」

そう言うのとコウスケはグロツク17を胸にしまった。

「……また、作ってくれ。」

その言葉にリリスはぽかんとしていたが不意に笑い出した。

「やっぱりあなたはコウスケね。」

「……意味が解らない。」

「前に私を引き留めた時もそう言ってくれたのよ。」

「そうか……」

月光でコウスケの顔は見えない。

でも、リリスには少し微笑んでいるように見えた。

「綾波三尉……かえ……」

とコウスケが言いかけた時、コウスケはリリスの腕をつかんで引つ張った。

……リリスが居たところに銃弾が撃ち込まれていた。

「な、なに!?!」

「……敵襲。スナイパーか?」

コウスケは胸にしまったグロック17を再び取り出して辺りを見回した。ビル群からは何も感じない。

空にヘリなどは飛んでいない。

山からも人がいるような気配がない。

「……………」

コウスケはリリスの肩を抱いてエレベーターに向かって走る。

二人がいたところに銃弾が叩き込まれた。

床が派手に抉れている。

コウスケは小型の通信機を取り出ししていた。

「メーデー、メーデー、メーデー、こちらはルシファー、ルシファー、ルシファー。」

メーデー、こちらはコンフォート17の屋上。緊急事態発生。現在、攻撃を受けている。」

『吹雪だ。近くに敵は見当たらない。』

『長良です。半径3km内に敵は確認できません。……信じられないことですが、3kmより外からの攻撃です。』

『榛名です。今、遠隔操作でエレベーターのドアを開けました。』

「……………了解。」

コウスケたちはエレベーターにまっすぐ走っていく。
屋上に遮蔽物はない。

そのため一刻も早く通常より強固な造りとなっているエレベーターに入るのを優先したのだ。

銃弾は屋上の床にめり込むが、徐々に二人に近づいていた。

エレベーターが目の前まで見えていた。

コウスケはリリスの頭を抱えると、頭からエレベーターに突っ込んだ。

・
・

第三新東京市郊外に浮かぶ一つの人影

コンフォート17から大凡5 kmは離れていた。

「ここまで出てきたのに失敗か……リリンのおもちゃは難しいな。」

それに浮かんでいるのにも大量のエネルギーが必要か。

……でも、ATフィールドの応用に成功したから良しとしよう。

……やっぱ、ルシファーは邪魔だね。ルシファーは本人を狙ってもダメか

……量産型ができた今、試作品はいらないな。」

・
・

結局、襲撃者の行方はつかめなかった。

零課と諜報部が総出で調査に当たるも何一つ手掛かりがなかった。

唯一の手掛かりである銃弾は12.7 x 99 mm NATO弾であり線条痕からバレットM82が使用されたと出てきたが、狙撃位置がMAGIの計算では上空と出た。

狙撃された時に空を飛んでいた物は確認されず、そのためそこに人が浮いていたという結論に至ってしまった。

さらに射程距離もバレットM82では不可能ではないが床を抉るほどの威力は出ないとの分析結果が出た。

それが可能であるとしたら空気抵抗が無く、重力の影響を受けない宇宙空間では可能だそうだ。

MAGIはこれに総合的な回答は不可能を提示した。

調査もこれ以上進展することなく迷宮入りしてしまった。

・
・

コウスケはNERVの病院で眠っている。

傍らにはリリスが立っていた。

リリスに目立った外傷は無く、せいぜい軽い擦り傷ができたくらいだ。

一方、コウスケはエレベーターに頭から突っ込んだため頭を強く打ち付けてしまった。

脳震盪で気絶してしまったため病院で入院となった。

「ごめんなさい……私のせいで……」

リリスはいたたまれない気持ちで眠るコウスケを見ていた。

あの時のコウスケは全力でリリスを守ろうとしていた。

それは嬉しかった。

でも、そのせいでコウスケは傷ついてしまった。

「……引き留めてくれたけど、私は行くわ。……私のこと忘れないでね……」

リリスは病室のドアの方に振り返った。

「……そんなことをするバカはすぐに忘れるって言っただろ。」

その声にリリスがはっとなって振り返ると

「心配かけたな。リリス。」

コウスケが上半身を起こしていた。

「名前で……コウスケ、記憶が……」

「ああ、ちゃんと戻ってきたぞ。」

リリスは緊張で身を固くしていた。

コウスケの記憶が戻った時、記憶喪失時の記憶が無くなるかも知れないと聞いていたからだ。

「なに身構えているんだ？」

「だって……私は……セカンドインパクトの……」

「セカンドインパクト？ ああ、あれは水に流すって言ったろ。」

「覚えているの？」

「ちゃんと覚えているよ。……綾波三尉。だが……」

コウスケは真面目な顔になった。

少し怒っているようにも見えた。

「自分は人じゃないなんてことを言うな。あんなにうまい料理を作れるのは人しかないな
い。」

そう言うコウスケはリリスの腕を引っ張って強く抱きしめた。

「さよならなんて寂しいこと言うなよ。」

「……ありがとう……ごめんなさい。」

「リリス？ コウスケ君の様子は……」

そう言っ病室にミサトが入ってきた。

後ろには学校から帰ってきた子供たちがいた。

「あ、あら……お邪魔だったわね。」

「おう、葛城か。」

「特務一尉、記憶が……」

「戻ったぞ。遅くなつてすまんな。」

そう言つてコウスケは微笑むが、皆がじつとこつちを見ていることに気付いた。

「なんだよ……」

それでも皆はじつと見ていた。

コウスケが訝しく思つているとリリスの様子がおかしいことに気付いた。

「どうしたんだ？」

「あ、あの……みんなが見てる……」

それを聞いたコウスケはさらに強く抱きしめる。

「ここ、コウスケ？」

「それがどうした。」

病室には似つかわぬ空気。ミサトたちはただただ困るだけであつた。

第46話 綾波のいかり

「綾波特務一尉、いったいどういうことかね？」

怒っているとは違い何か困惑していると言った方が正しい声で冬月が言う。

「そのようなことを申されましても何の事でしょうか？」

「……先日、我々に資金を出すことを渋っていた企業から突然資金が送られてきたのだ。」

「それは良いことではないですか。」

コウスケは何もおくびもなく言う。

そんなコウスケに冬月が彼らしくもなく少し威圧するように続けた。

「これに君が係わっているのではないかね？」

「特に思い当たることはありませんが……」

それを聞いたゲンドウが動いた。

「先日、この企業の跡取りとレイが見合いをしたとの報告が入ってきているが……」

「ああ、そう言えばそんなこともありましたな。」

コウスケは頭をぼりぼりと掻きながら答えた。

少しわざとらしい。

「まさか……」

そう呟くと冬月の顔つきがかなり怖いものとなった。

それを見たゲンドウも冬月が何を考えているのかすぐに悟りサングラス越しにコウスケを睨みつけると、とても低い声で言う。

「……君は……レイを政治的に利用したのか……」

それを聞いたコウスケは手を顎に添えて考え込んだ。

「ふむ……傍から見ればそういう風に捉えられてもおかしくありませんな。」
「捉えられるも何もそうではないか！」

冬月が声を荒げていた。

「君は何を考えているのかね！ ユイ……ごほん……自分の娘を政治的に利用するなど！……君はそんな男ではないと思っていたが間違った認識だったようだな！」

らしくなく荒れている冬月にゲンドウは少したじろいでいた。

これほどにまで怒った冬月をゲンドウは見たことがなかった。

対照的にコウスケはのほほんとした顔でいる。

「まあ、落ち着いてください。」

「落ち着いていられるか！ 今すぐに婚約を取り消すんだ！」

「ふ、冬月先生、落ち着いてください。」
すると冬月がゲンドウをぎろりと睨んだ。

少したじろぐゲンドウ

「碓は何を落ち着いているんだ！ 自分の息子の婚約者がどこぞとわからない馬の骨と婚約しているんだぞ！ シンジ君とレイの子供が見たくはないのか！」

「しかし、見合いだけで……」

「碓、現実を見ろ！ 相手から巨額の資金が送られてきている！ 見合いが成立した、それ以外に何がある！」

冬月はあはあと息を荒げていた。

「とにかく取り消すんだ！」

「取り消すも何もそんなものしていませんよ？」

冬月とは対照的に落ち着いた声でコウスケは言う。

「何？」

「あんな奴にレイを差し出すくらいならシンジの方が百倍はましです。」

そう言い放つとコウスケは俯き何やら暗くなっていた。

「……うちのレイを手籠めにしようとしたんだ……それにリリースにも……本来ならあの一家をまとめてNNミサイルの一部にして使徒に放つてやりたいところだったが、金

なんてもので許したんだ……それも守らなければ……フッフ………」

後ろからは負のオーラとでもいうべきものが滲み出ている。

目からも何やら危ない雰囲気が出ていた。

つまるところ、本気でやりかねないということだ。

冬月も尋常でないコウスケの様子に冷や汗をかいていた。

「あ、綾波特務一尉？」

「……つとこれは失礼。」

「……とにかく事情を話してもらおう。」

ゲンドウの言葉を聞いてコウスケが答えた。

「……レイのためだったんですよ。その予算獲得は完全に副産物に過ぎません。」

「ん？ 見合いがレイのため？」

冬月は訝し気にコウスケを見ていた。

レイのためとあらば何故、破談にしたのか？

それにレイにはシンジがいる。

見合いでレイに何の得があるのだろうか？

「少し長くなりますよ。」

そう言つてコウスケは話し始めた。

・
・
・
コウスケの記憶が戻って数日後

コウスケはいつものごとく夕食の後の紅茶を楽しんでいた。

この時間は今のコウスケに取って二番目くらいに気に入っている時間である。

一番気に入っている時間は仕事をしている時……

ではなく、リリースのほっぺたを触っている時である。

これについてリリースは

「コウスケはほっぺたが柔らかければ誰でもいいのね……」

と不満をこぼした時があった。

これに対しコウスケは

「カヲルやレイ、他の人のほっぺたじゃダメなんだ！ リリースのほっぺただから良いん

だ！」

などと力説していた。

ちなみにカヲルとレイのほっぺたの感想は……

「……硬い。」

「……未成熟。」

だそうだ。

なのでリリースは自分のATフィールドを使い頬に少し手を加えた。

少し顔がすつきりとしたリリースを見たコウスケは恐る恐るリリースの頬に手をやると「……………無い……………」

などと言いつつこの世の終わりだと言いたいくらいにがっかりしていた。

執務室でいつものデスクに座ったコウスケだが、全く仕事にも手が付かなかった。

何やら柔らか物をふにふにと触っていたが

「違う……………こんなんじゃない……………」

と呟いていた。

そんなコウスケを見てさすがにリリースも気の毒に思ってしまった、頬を元に戻した。

コウスケが喜んだのは言うまでもない。

リリースはそれを複雑な思いで受け入れることになる。

MAGIの計算によるとリリースのほつぺたを触れなかったコウスケの仕事の出来は通常の1/3程度に落ち込むそうだ。

それを見た某博士の一言

「私も頬が柔らかければ勝ち目があったのかしら……………」

などと呟いていた。

コウスケのほつぺた好きはNERV内で知らないものはいないほど有名になってい

る。

そのためNERV職員たちはコウスケが機嫌が悪そうなきはリリスに頬を触らせるように必死に頼んでいるらしい……

最も一部のNERV職員からはそれがコウスケの愛情表現ではないかと噂されている。

リリス以上に柔らかそうな頬を触っても

「……………違う。」

などと感想を漏らすことから、あながち間違いではないかもしれない。

とにかくそんな心安らぐ時間にコウスケは少し訝し気な表情をしていた。

「レイ、どうしたんだ？」

コウスケに突然、声をかけられたレイは少し驚いていた。

「何かあったのか？」

「……………なんでもありません。」

「本当か？」

「……………はい。」

そう答えるレイをコウスケは訝し気に見ている。

「ルシファア、レイ君がそう言っているなら問題ないではありませんか？」

カヲルが口をはさんでくる。

「いや、レイのあの表情は何か深刻なことを考えている顔だ。」

実を言うと何日前からレイがそのような表情をしていることをコウスケは知っていた。

それでもレイが口に出すことがなかったのもそのままにしていたのだが、今日はその表情がさらに深刻になっていったので声をかけたということだ。

最もその変化も付き合いがまだ浅いカヲルでは見抜けなかったようだ。

レイは押し黙っている。

「言いたくないならいいが、それは一人で考え込んで解決できるのか?」

レイは何も言わない。

「まあ、大方シンジ君のことだろう?」

そう言ってコウスケはニヤリと笑ったが、すぐに真面目な表情に戻った。

レイがシンジと言う言葉を聞いて俯いてしまったからだ。

レイがシンジのことで俯くと必ず赤くなっていたが、それもない。

そのためコウスケはよほど深刻なことが起きているんだと理解した。

リリースは流し台ですべてを聞いていたのだろう。

何も言わずに自分の席に座った。

暫く重い空気が漂っていたが、レイが閉じていた口を開いた。

「……………最近、碇君と一緒に居ても嬉しくないんです……………」

レイの告白にコウスケは特に驚いていなかった。

他の二人は驚いていたが、特に何も言うことは無かった。

コウスケに任せた方がいいと判断したからであろう。

「それは嫌いになったということかな？」

「……………わかりません。」

それを聞いたコウスケはそれ以上レイに問いかけることを止めた。

レイの答えが今の状態を如実に表しているように思えたからだ。

だから一言だけコウスケは言うことにした。

「後の祭りにならないようにな。」

……

コウスケはジオフロントにある加持の畑に来ていた。

「綾波じゃないか。」

畑の主である加持がコウスケに声をかけた。

「どうしたんだ？ ……まさか、ここを返せとか言わないよな？」

「今更そんなことを言うかよ。それにそんなことをしたら、カヲルが怒るだろ？」

綾波家の居候となつてゐる渚カヲルは加持の畑の世話をしている。

汗水を流しながら畑を一心不乱に世話してゐるカヲルは見るからに生き生きとしていて、そんなカヲルの姿をNERVでは知らないものはいない。

ちなみに加持の畑は禁煙になつてゐる。

煙草を吸いながら畑を世話してゐる加持を見てカヲルが怒つたのだ。

「懸命に生きようとしてゐるスイカたちの前でそんなものを……僕にはわからないよ。」

それ以降、加持の畑で煙草の煙が上がるのがなかつた。

ちなみにカヲルはコウスケが煙草を吸うのも好ましく思つていないが、カヲルやレイ、リリスの前で吸うことは無く、ベランダでひっそりと吸つてゐるので特に何も言つていない。

「なら、どうしたんだ？ 代理とはいへ、NERVのNo. 1がこんな所に来てていいのか？」

などと加持はおどけながら言うが、彼が言うことに間違いはなかつた。

NERVの首脳部であるゲンドウと冬月は出張しており、NERVの最高責任者は作戦本部長である葛城ミサトになつてゐる。

だが、それは表向きの話であり実質上コウスケの方が上であつたりする。

最もそれを知つてゐる者はごく限られておりコウスケ自身がそれで幅を利かせるよ

うなことをしないので、特に問題が起こっているわけではない。

全くの余談になるが、コウスケがNERVでNo. 1と言えるものが一つ存在する。それは給料である。

総司令である碇ゲンドウが一番もらっているというのが一般的な認識だが、それは基本給だけの話である。

コウスケの基本給は階級が低いためミサトより少ないが、作戦局二課課長の手当てが入り、使徒が現れたときには戦闘機で出撃するためかなり高額の高額危険手当がつく。

また、危険手当の欄には零課課長の手当ても入っている。

それにレイの扶養手当、カヲルの養育費などが加算されている。

それらを総合するとゲンドウなど遥かに凌ぐ給料となるのだ。

一応、リリスとレイにも給料が出ている。

レイには高額の高額危険手当が出ているため、実質上NERVで二番目の高給取りだったりする。

アスカやシンジたちと基本的には変わらないのだが、勤続年数の関係で彼らより上になる。

そのため綾波家の財産は普通では考えられないほどの物となっていたりする。

「カヲルはどこにいる？」

「渚君ならあつちにいるぞ。……ああ、そう言えば今日は来る日だったか。」

加持が指を指しながら言った。

コウスケがここに来た目的が何なのかわかったようだ。

コウスケは加持に礼を言うとカヲルがいるところに向かった。

「よう、精が出るな。」

そう言うとかヲルがコウスケの方に振り返った。

その顔は生気で満ちており、実に絵になる光景だった。

「どうしたんですか?」

「ちよつと人探しをね。」

そう言うとかウスケは辺りを見回した。

「……………いた。」

畑の端にできていた少し深めの茂みを見ながら呟いた。

よく見ると赤みのかかった金色が見え隠れしている。

あれで隠れているつもりらしい。

「お〜い! そんなところにはいないでこっちに来いよ!」

コウスケが大声で言うとかヲルがビクリと動いた。

暫くがさがさと動いているうちに茂みから誰かが出てきた。

「ぐ、偶然ね。こんな所で……」

茂みから現れた人物―アスカがまるでそう言うことを決めていたかのように言った。「あんなところで何してたんだ？」

「べ、別に何でもないわよ。」

「大方、使徒に対する奇襲戦法でも考えていたんだろ？」

「そ、そうよ。」

などと言いちらちらと誰かを見ていた。

元使徒である少年は頭に疑問符を浮かべている。

そんな様子の二人をコウスケはニヤリと眺めていた。

「まあいい。ちよつとアスカに用があつたんだ。」

「どうしたの？」

コウスケはニヤリと笑うのを止めて真面目な顔に戻った。

「最近のレイなんだが……学校ではどうなんだ？」

コウスケの言葉にカヲルとアスカは少し驚いていた。

「どうしてそんなことをあたしに聞くの？ 護衛から報告は入ってるんでしょ？」

「そうですよ。それに何故、本人に聞かないのですか？」

「報告には事実しか書かれていないからな。だから第三者の証言が必要だと思ったのさ。」

そう言うコウスケに二人は訝し気に思った。

「……最近をよく誰かと話してるわね。最も質問に答えているだけだけ……」

「そう言えば、シンジ君と一緒にいることが少なくなつたようだね。」

これを聞いたコウスケはやはりと思つた。

「言われてみればそうかもしれないわ。最初はあんなにべたべたしてたのに……」

「時々、シンジ君が悲しそうにレイ君を見ているときがあるね。」

「うん……なんでかしら?」

それを聞いたコウスケは少し笑つていた。

「どうしたの?」

「いや、レイにとつてシンジ君がそういう存在になつたんだと思つてな。」

「いったいどういうことですか?」

カヲルの問いかけにコウスケは答えた。

「……なるほどね。」

「そう言うものなんですか。」

コウスケの答えを聞いた二人はどこか納得していた。

「だが、このままではいかな。」

「そうですね。繊細な心を持つシンジ君が危ないかもしれませんね。」

「確かにね。今はまだ耐えてるけど……」

三人の中には共通の危機意識が芽生えていた。

「まあ、今までレイにそんなことがなかったから致し方ないと思うが……」
「そう言うとコウスケは暫く考え込んだ。」

「……とにかくありがとう。」

「大丈夫なの？」

「まあ、やれるだけやってみよう。」

「そう言うとコウスケの顔が変わった。」

「それで、アスカさん？」

「な、何？」

急にコウスケの顔が変わって警戒するアスカ

「使徒に対する奇襲戦法の効果はどうですか？」

「な……」

「出来れば今後の参考にしたいんだけど……」

コウスケはニヤついている。

「ま、まだまだ研究中よ！」

などと真つ赤になりながらアスカは答えた。

「どうしたんだい？ 顔が赤くなっているよ？ 風邪でも引いたのかい？」

などとカヲルは言った。

「こりや、難問みたいだな。」

「どういうことですか？」

「はあ、もうちよつとカヲルは他人の心を知らないといけないな。」

コウスケがそう言うときアスカが

「コウスケも似たようなものよ。」

とぼそりと呟いた。

「俺の私見では奇襲では無く、正攻法がいいと思うんだが……」

「余計なお世話よ！」

ニヤついているコウスケと赤くなっているアスカ、それを不思議そうに見ているカヲル

それを加持は遠目で見ていながら

「藪蛇になるなよ。綾波。」

と呟いていた。

・
・
・

コウスケは執務室で何やら難しい顔をしていた。

目の前のPCをじっと見つめて動かない。

「ねえ、さつきから何をしてるの?」

横でそんな姿のコウスケをずっと見ていたりリスがたまらなくなつて聞いた。

「ちよつとな……お、来た来た。」

そう言うときコウスケはPCに来たメールを確認していた。

「やっぱり食らいついてきたか……」

どことなく満足そうにコウスケが言う。

するとコウスケは携帯電話を取り出した。

「もしもし、シンジ君か? 今すぐに俺の執務室に来てくれ。ちよつと重大な要件だ。」

「ねえ、本当に何してるの?」

リスが不満そうな声を出していた。

そんなリスに携帯電話をしまいながらコウスケは答えた。

「シンジ君が来たら話す。もうちよつと待つてくれ。」

そう言うときコウスケはいつもの仕事をこなし始めた。

それにかなり不満を覚えるもののシンジが来れば話すと言っていたのでしぶしぶリスも自分の仕事に取り掛かることにした。

暫くすると執務室のドアが開いてシンジが中に入ってきた。

「いきなり呼び出してすまんな。」

「いえ、大丈夫です。」

「まあ、そこにかけてくれ。」

シンジはコウスケがあてがった椅子に座った。

リリースは立ち上がるとポットから紅茶を持ってきていた。

「最近レイとはどうだ？」

「どうと言われましても変わりませんよ。」

「……ネタは上がっている。正直に話してくれ。」

そう言うのとシンジは少し俯きながら話し始めた。

「……綾波が遠くに感じるんですよ……」

それ以上シンジは続けなかった。

「それはレイが大切に思えなくなったということかな？」

「違います！ 綾波が一番守りたい人であることに変わりありません！ ……ただ

……」

シンジは言いづらそうにしていた。

コウスケは変な茶々を入れることなくシンジが話すのをじつと待った。

「……綾波にとって僕はどうでもいい存在になったのかなって……そう思ってしまう

んです……」

静かな声でシンジは言った。

それだけにシンジの悲痛の叫びが聞こえてくるかのようだった。

「……確かにそう思ってしまうのも致し方あるまい。」

コウスケの言葉にシンジがビクリと反応した。

「だが、シンジ君が考えていることと全く逆のことが起きているんだ。」

はっとなりシンジは顔を上げた。

コウスケは真面目に見返してきている。

「どういうことですか？」

シンジに促されるようにコウスケはしゃべり始める。

「……そう言うことだったんですか。」

「リリンってそんな風になるのね……」

「人にとってある意味、当たり前前の現象とも言えるが、レイのためにならん。」

コウスケはじつとシンジを見つめるのであった。

「シンジ君、君に頼みたいことがあるんだ。」

「僕にですか？」

「シンジ君以外に適任がいらないんだ。だが、これは君にとってかなり辛いことになるだ

ろう。」

シンジは少し考え込んだ。

「やります。」

「いいのか？ 失敗すればレイが嫌うかもしれないぞ。大方の準備はできているが、今なら取り消すこともできる。」

嫌われると言う言葉にシンジが顔を顰める。

「……それでも綾波のためになるのなら……やります。」

「わかった。」

コウスケはシンジの目の前に一つのUSBメモリーを置いた。

「それを自宅のPCで見てください。……誰にも見せちゃいかんぞ。」

シンジはそれをポケットにしまった。

「話は以上だ。……もし止めたくなくなったらすぐに言ってくれ。」

そうしてシンジは執務室を後にした。

コウスケは休憩とばかりに紅茶を淹れることにした。

「ねえ、もし私がレイみたいになったらどうする？」

不意にリリースがそのようなことを言い出した。

コウスケはカップを持つとリリースとは反対の方に体を向けた。

「そうだな……俺だったら嫌になって他の人と付き合うかもしれないな。」

「え……」

「そんなことされたら俺だって寂しいからな。」

そう言い放つとコウスケはカップをデスクに置いて立ち上がり、リリースと反対の方に数歩歩くと止まった。

「浮気の一つくらいやってしまうかな。」

リリースは余りにも衝撃を受けて立ち上がった。

まさかコウスケからそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだ。

「変なことを言ったのは謝るからそんなこと言わないで……」

コウスケは何も答えない。

リリースには何故かコウスケが遠くにいるように感じていた。

そんなはずはないと一歩一歩確かめるように近づいていく。

最後の一步になったところでリリースは立ち止まった。

それ以上近づくと本当に消えてしまうのではないか

そんな考えが頭によぎる。

「あなたがいなくなったら、私はどうすればいいの……」

それ以上に言いたかったが、言えなかった。

リリスは言葉と言うものが必ずしも万能ではないことを悟った。
不意にコウスケは息を吐き出した。

「……思ったより辛いな。」

リリスが顔をあげるとコウスケがさも困ったようにしていた。

「ごめんなさい……」

「いや、俺も意地悪し過ぎた。」

コウスケはぼりぼりと頭を掻いていた。

するとコウスケは少し恥ずかしそうに言葉が続けた。

「その……なんだ……俺にもリリスが必要なんだ。だからリリスを置いてどこかに行くなんてしないよ。」

「本当?」

「ああ、特に……」

そう言うときコウスケの腕が伸びてリリスのほつぺたを捉えた。

「ふえ?」

「このふにほつぺを置いてどこかに行くなんて絶対にありえん!」

そう断言しながらリリスのほつぺたをふにふにと嬉しそうに楽しんでいるコウスケ
リリスは自然と体が震えだすのを感じることができた。

.....

.....

.....

.....

五分後

S u | 3 7 L C の整備状況を伝えに来た榛名ミツヒサが綾波執務室で見たものは腕を組みながらつーんと顔をそらしているリリスと床に伏せているコウスケの姿であった。

.....

シンジと結託してから三日後

コウスケの思惑通りレイは明らかに暗くなっていた。

「なんだ？ 相当深刻な問題でも起きたのか？」

レイは何も答えなかった。

コウスケは内心でちよつと効き過ぎたかと思つたが、そのまま計画を進めることにした。

「最近、シンジ君と一緒に居ないな。」

シンジと言う単語にレイがビクリと反応した。

「喧嘩でもしたのか?」

「……………碇君が私を見てくれない……………」

その声にコウスケはかなりぐらついた。

だが、ここで止めようとも思っではいなかった。

「そうか……………そういや、前にシンジ君といても嬉しくないとか言ってたろ。それがシンジ君にも伝わってしまったんじゃないか?」

レイは暗く、悲しく俯いていた。

「そんなレイにだ。紹介したい人がいるんだ。」

コウスケは一つのプロフィールをレイの前に差し出した。

「今度の日曜日に合うことになってるんだが、行くか?」

少し考えればあまりにもタイミングが良すぎておかしいことに気付いただろう。

だが、今のレイにそれを考えている余裕がなかった。

レイは静かに頷くだけであった。

・
・
・

お見合い当日

レイはやはり暗い顔でレストランの席に座っていた。

傍らではいつものNERVスタイルであるコウスケが相手方と何やら話しており

リスが相槌を打っているが、何を話しているのかレイには全く興味が湧かなかった。ふと目の前を見るとなかなかたくましい部類に入る顔つきの青年が座っている。

歳はレイより少し上だろう。

そう言うレイはと言うとシンプルな白いワンピースにナチュラルメイクを施している。

レイは目の前の青年に何ら好感を持つていなかった。

最初に会った時に異質なものを見るような目で見られたからである。

それ自体にはそれほどレイ自身は驚いていない。

自分の容姿が他の人に比べてかなり特殊であることを解っていたし、街中を歩いているときに時々そのような目で見られることがあったからである。

それより嫌だったのが、何か打算的な視線で見られているということに気付いたからである。

自分を見てくれようとしていない

それが好感を持ってない理由だった。

これがシンジならば自分を見てくれていただろう

そう何度も考えてしまうレイであった。

最もその後でシンジが最近はちゃんと見てくれないことを思い出して暗くなつてし

まうのだが……

「……イ、レイ。」

レイははつとなり声が聞こえるほうに顔を向けた。

いつの間にかコウスケがレイをじっと見ていた。

「大丈夫か？」

「……はい。」

「すみません。どうも緊張しているようで……」

そういうわけではないとレイは思うが、口に出すことは無かった。

「いえ、お嬢さんもこういう場は初めてでしょうから。」

レイの目の前に座っている大凡40代後半だと思われる青年の父親がそのように言った。

「ちよつと娘の緊張をほぐしてきます。」

「じゃあ、私も……」

リリスがついて行くこうとするが、コウスケに止められた。

「先方がわざわざここまで来てくれたんだ。こつちがみんないなくなったら失礼だろ。」

そう言うとかウスケはレイを連れて店の外に出た。

「あなたも大変ですね。」

青年の母親がそのように言った。

「普段はどうお過ごしなのかしら？」

「いつもはコウスケと一緒に働いていますから。」

すると父親の方が少し考え込んだ。

「もしかして……あなたも軍人なのですか？」

「あ、はい。少尉です。」

「あら、そうでしたの。だから同じジャケットをお召しになっていられるのね。」

そのようなたわいもない会話が続いた。

するとリリスは何やら音がなっていることに気付いた。

なんも変哲もない雑音に聞こえたが、トンとツーと言う音が妙なリズムを取っている

ことにリリスは気付いた。

音の出所は父親の方だった。

(これ……聞いたことがある……コウスケが教えてくれた……えくと、モールス信号?)

コウスケが万が一に備えてリリスに教えたものである。

リリスは会話を続けながらもその信号の解読を行っていた。

音が鳴り止んだ時、リリスは少し戸惑っていた。

人の営みに興味を覚えてまだ半年もたっていないリリスにモールス信号を解読でき

でも意味が通じなかったのだ。

そこにコウスケがレイを連れて戻ってきた。

「席をはずして申し訳ありません。」

「いえ、お気になさらないでください。」

「それで提案なのですが、うちの娘とご子息の二人だけで話し合うのはどうでしょうか？」

「おお、綾波大尉の仰られることが最もですね。」

変に思われるだろうが、今のコウスケは一般人にも通じるプロフィールでここにいらる。

これはNERVと言う組織が非公開の組織であるからだ。

そのため、コウスケは特務一尉ではなく国連軍の大尉と言うことになっている。

そのためリリースも少尉と答えたのだ。

ちなみにレイは普通の中学生と言うことになっている。

「それでは行きましょうか？」

青年の言葉にレイがコウスケを見た。

「行って来い。」

そう言われたのでレイは青年とともに店の外に出た。

それと同時に背の小さい黒服が後を追うように店を出てくの一人だけ気づいていた。

「しかし、そのお歳で大尉とは……もうすぐご昇進なされるのですかな？」

「いえ、そのような機会になかなか恵まれないんですよ。ですが、もう少し上を狙っていきたいですね。」

それを聞いた相手方の父親は嬉しそうにしていた。

だが、リリースは変に思った。

コウスケがこんなことを言うとは思ってもなかったのだ。

以前にNERVでの階級について教えてもらったことがあるが、最後にコウスケはこんなことを言っていた。

「階級が上がって喜ぶのが普通だけど……軍人の階級って言うのは大きくなる十字架みたいなものだ。だから、俺は嬉しくないね。」

それにリリースにはコウスケがわざと相手の喜びそうなことを言っているように見えた。

そんなリリースをよそにコウスケと相手方の会話が進んでいく。

主に軍事に関することが多かった。

軍事の話になるとリリースにはわからないことが多すぎる。

そのため必然的にコウスケが差し当たり無いらしいように受け答えることになった。リリースに取つてつまらない時間が過ぎていく。

こんなことならコウスケにほつぺたを触られているほうがましだなんてリリースが思い始めた時、コウスケの服の中から警報が鳴った。

コウスケは失礼と断りを入れて携帯端末を取り出した。するとコウスケの顔が厳しいものとなっていた。

「どうかしましたかな？」

相手方の質問にコウスケは答えなかった。

使徒が襲来したということではない。

それならば、リリースが持つ端末にも情報が入るようになっていた。

最もリリースはほとんどコウスケの傍らにいたので必要かどうかは定かではない。

「楽しい時間も終わりですな。」

そう言うときコウスケは立ち上がった。

「リリース、行くぞ。」

コウスケにしてはかなり強い口調であった。

・
・
・

コウスケを先頭に四人は人通りの少ない場所にいた。

レストランからそんなに離れていないが、使徒の襲撃で再開発が放置されてしまった場所である。

「この時間は人が通りませんからね。……よく調べましたな。」

コウスケがそう言うのと相手方の顔色がみるみる悪くなっていた。

コウスケはそれを無感動で眺めると目的の場所に向かって歩き出した。

コウスケの少し後ろを歩くリリスにはわかっていた。

コウスケがかなり怒っていることを

しかしコウスケが怒っている理由がわからなかった。

少し歩くとさびれた建物についた。

そこには何故か吹雪シンゴが立っていた。

「やつと来たな。」

「レイたちは？」

「娘さんは無事だ。後は自分で確認してくれ。」

「わかった。」

コウスケは建物の中に入って行く。

それに三人も続いた。

「あちゃ……見事に返り討ちにあってしまったのか……」

コウスケは少し困ったように頭を掻いていた。

中にはうつぶせになって倒れている青年と

床に倒れている少し小さな黒服に呼びかけているレイがいた。

「これはいったい……」

青年の父親がそう言うのとコウスケが鼻で笑った。

「わざとらしいですよ？」

「な、何の事だ。」

コウスケはそれに答えず、レイに近づいた。

レイは足音に気付きコウスケの方を向いた。

「特務一尉！ 碇君が……」

そう言っただけでレイは小さな黒服を見た。

コウスケは黒服のサングラスを取った。

サングラスの中からは目を閉じた碇シンジの顔が出てきた。

「ふむ、気を失っているだけか。全く、無茶しやがって……」

コウスケがそう言うのとレイは少しほっとしていた。

「レイ、さっき渡したものは持つてるな？」

レイは頷くと黒い何かを取り出した。

スタンガンである。

実を言うとコウスケがレストランでレイを連れて出た時に渡したのである。

「貴様！ 私の息子にこんなことをして、ただで済むと思うな！」

青年の父親が大声で叫んでいた。

傍らにいる母親もコウスケを睨んでいた。

「それはこっちのセリフですよ。俺の娘に手を出してただで済むと思うな。」

ドスが効いた声に怖気付く青年の親たち

コウスケと彼らでは住む世界が違い過ぎるのだ。

そうなるのも無理はあるまい。

「な、何を根拠に……」

「それはこいつが答えてくれますよ。」

そう言うコウスケはレイからもらったスタンガンを掲げていた。

よく見るとスイツチみたいなものが見える。

コウスケはそれを押した。

『……何をするの？』

『お前を確実に物にしろと親父が言うんだ。そうすれば軍につながりができるってな。』

『嫌。』

『大人しくしていろ。すぐに終わる。』

『来ないで!』

『綾波に手を出すな!』

『……碇君!』

『なんだ?』

『綾波から離れろ!』

『この野郎!』

『ぐはっ……』

『碇君!?! ……くっ……』

バチン

最後の音はレイがスタンガンを使った音であった。

青年の親たちは青ざめていた。

「ふむ……立派な婦女暴行未遂ですな。それにうちの貴重なパイロット二人に手を出した……これは重罪だな。」

「パイロット? 何の事だ……」

それを聞いたコウスケは少し驚いた顔になったが、すぐに納得したという顔になった。

「そう言えばちゃんとした自己紹介がまだでしたな。」

「何？」

「俺は綾波コウスケ。階級は特務一尉……」

特務一尉と聞いた青年の父親は訝し気な顔になっていた。

「特務一尉？ そんな階級は国連軍にも戦自にもない……まさか……」

「おや？ 我々を知っているなら話は早い。あなたのご想像通り、特務機関NERVの者ですよ。」

青年の父親は口をパクパクさせていた。

「そして、彼らはNERVの貴重なパイロット……もう、おわかりですか？」

コウスケがそう言い放つと青年の父親は懐からLPCを取り出して近くにいたりりスに突き付けていた。

「おい！ それをこっちに渡せ！ じゃないとこいつを……」

そこまでしか言えなかった。

青年の父親は何かに吹き飛ばされたからである。

「……醜いリリンね。」

リリスが静かに言った。

青年の父親はリリスのATフィールドに吹き飛ばされたのだ。

青年の母親が傍らに駆け寄っていた。

「こ……………この……………化け物！」

「……………化け物？」

「何もしないで人を吹き飛ばすなんて……………人にそんなことができるわけないだろ！」
リリスが何かを言おうとした時、一発の銃声が聞こえた。

「いい加減にしろ！ この屑が！」

コウスケがグロック17を青年の親たちに向けていた。

銃弾はぎりぎりのところで当たらなかったようだ。

「リリスが化け物だと？ それならお前さんの方がよっぽど化け物だろうよ！」

「な、何？」

「そんな化け物は始末しないといけないな。」

コウスケはゆっくりと近づいた。

「ま、まて……………待ってくれ！」

コウスケは止まらない。

「か、金ならいくらでも出す！ だから……………」

それを聞いたコウスケが止まった。

青年の親たちはそれに少し安心する。

「ほ、ほら……いくらほしいんだ？」

コウスケはそれに銃弾で答えた。

無論、当たらないようにそらしたが……

「そうやってお前らは金で解決しようとする……反吐が出るね！」

コウスケは殺気を込めて睨んだ。

「今回は見逃してやる。……後日、誠意ある対応をお願いしますよ？」

コウスケはグロツク17をしまった。

それを見届けた青年の親たちは青年を担ぐと急ぎ足で逃げ出した。

「全く……」

コウスケはため息をつくとりリスのもとに向かった。

「大丈夫か？」

「ええ。」

「すまんな。まさかこんなことになるなんて予想できなかった。」

本当にすまなそうにコウスケは言った。

「大丈夫よ。……でも、嬉しかった。」

「何が？」

「私のために怒ってくれたのよね？」

「お前さんを化け物呼ばわりしたんだ。当然だろ？ それに……」

コウスケは少し恥ずかしそうに顔をそらしていた。

「俺の妻なんだからな……そんな風に言われたら許せないに決まってるだろ。」

リリスはそれを黙って、嬉しそうに聞いていた。

「さてと……ちよつと仕上げをしてくるよ。」

そう言うコウスケはレイたちに近づいた。

レイは膝にシンジの頭を乗せて、シンジが目覚めるのを待っていた。

「レイ、少し予定外の出来事もあったがよくわかっただろ？ シンジ君みたいな人ばかりでないことに。」

「何の事ですか？」

「忘れたとは言わせないぞ。シンジといっても嬉しくないなんて言ったことをな。」

レイはそれを聞いて俯いてしまった。

「……どうしてあんなことを言ったんでしょうか……」

「それはな……レイに取ってシンジ君がいつも傍らにいてくれる存在だからだ。」

レイは何が何だかわからないようだった。

「レイが何をして黙って横にいてくれる……そう思っているからそんな言葉が出たんだ。シンジ君と一緒にいて新鮮味が無くなったんだらう。」

レイはじつと聞いていた。

「だからレイは新しい刺激を求めてシンジ君以外に目を向けたんだ。ただ、シンジ君にとってはそれが自分を蔑ろにしてるんじゃないかと取れたわけだ。」

「私はそんなこと……」

「この場合はレイの意志じゃなくてシンジ君がどう感じたかが重要なんだ。……レイだってシンジ君が離れていくように感じられただろ？ あれは俺が頼んだんだ。」

そう言われてレイは納得していた。

「嫌だったら止めて良いって言ったんだが、レイのためになるならやりますなんて答えただよ？ シンジ君だって辛いはずなのにな。最後までやり遂げた……大した少年だよ。」

「碓君……」

「今日もシンジ君が心配だからって俺に相談したんだ。まあ、そのおかげでレイは無事だったんだが……」

「碓君、ありがとう……そして、ごめんなさい。」

コウスケは思わず笑ってしまった。

「それを本人が気絶している時に言うなよ。」

「……そうですね。」

「じゃあ、俺たちは帰るからな。……ちゃんと謝ったら帰って来い。」

「わかりました。」

レイがはつきりと答えるのを聞いてコウスケはリリスを連れて家に帰った。

その三時間後にレイの姿が家でちゃんと確認された。

・
・
・

「……………まあ、こういうことがあつたんですよ。」

コウスケの長い話を聞き終えたゲンドウと冬月の二人はどこか安心してた。

「そう言うことなら早く言いたまえ。」

「副司令が暴走したのではないですか。」

そう言われては冬月は何も言えなかった。

「ともあれ、何事もなくてよかった。この予算はありがたいと聞いておこう。」

ゲンドウがそう言うのと、ふと何かを思い出してた。

「綾波特務一尉、少し前にこの企業の代表取締役の襲撃未遂があつたと聞くが……」

ゲンドウの声は少し震えていた。

「そう言えば、長良三尉がここのところ見えな……」

冬月の声もどこか恐れているように聞こえた。

「長良三尉は特殊訓練に出ていると報告しましたよ?」

コウスケはなんもおくびもなくそう言った後に続けた。

「EVAパイロットとNERVの重要人物に手を出したんです。他の組織に情報が漏れないよう監視が付くのは当たり前のことでしょう？ フッフ………」

コウスケの言うことは最もでもあるが、何か含むものが感じられた。

とうか含むものしか感じられない。

怪しく笑っているコウスケをよそにゲンドウと冬月は冷や汗をかいていた。

襲撃犯が誰だかわかったからである。

おそらくこの企業の代表取締役―青年の父親も誰の仕業かすぐにわかったことだろう。

ゲンドウと冬月はレイとリリスのことでこの男を怒らせないようにしなければならぬという共通の意識を共有することになった。

第47話 意思

レイの見合いが終わった後、コウスケはゲンドウから衝撃的な事実を聞くことになった。

使徒の数は不明

ゲンドウからその話を聞いたコウスケは酷く落胆することになる。

次の第十七使徒ですべてに決着がつくと思っていたからである。

そのことをリリスに問い詰めて事実であることを確認していた。

なんでそれを早く言ってくれなかったのかと言いたかったが、すまなそうに暗く俯いている彼女を目の前にしてそんなことを言えなかった。

だから、体を僅かに震わせているリリスにコウスケは言った。

「それを知ってお前さんを嫌うとも思ったのか？」

「で、でも……」

「隠し事なんて人なら絶対にあるもんだ。たとえそれが……」

そこまで言ってコウスケは頭をぼりぼりと掻き始めた。

コウスケの視線が少しリリスから逸れていた。

「ふ……夫婦だとしてもだ……」

その時の綾波コウスケを一言で表すなら、よく熟れた「ふじ」であった。

「ふじ」とはりんごの品種の一つである。

そんな様子のコウスケにリリスはふつと微笑む。

「やっぱりそっちの方が……」

コウスケらしくなく最後にごによごによと喋っていた。

「え？」

「い、いやー！ 何でもない。」

妙に慌てるコウスケをリリスはじっと見ていた。

暫くにらめつこが続くが、コウスケの方が折れた。

「…可愛いつて言ったんだ……」

これも彼らしくなくぼそりと呟くような声だった。

だが、リリスには聞こえたようだった。

「い、いきなり何を言うのよ……」

ここに観客がいたら初々しいとのコメントを残したことだろう。

だが、残念なことにこの二人に茶々を入れられるような観客は誰一人といなかった。

二人は榛名ミツヒサが呼びに来るまでそのままいたそうだ。

ミツヒサに呼ばれたコウスケが向かった先はEVAの実験室であった。

「待っていたわ。」

管制室で待っていたリツコが言う。

「とうとう完成したのか。」

「ええ、力作ですよ。」

コウスケの問いにミツヒサが強く答えた。

「前から開発していたEVAの新兵器……マゴロク・E・ソードとマステマよ。」

そう言っていてリツコはモニターに映し出された新兵器を指していた。

「マゴロク・E・ソードは日本刀みたいだな。」

「ええ、彼の高周波ブレードをヒントに作り上げたものよ。」

「いや、お役に立てて光栄です。」

そう言うのとミツヒサは照れくさそうにしていた。

榛名ミツヒサが持つ高周波ブレードは彼が自分で作り上げたものだ。

そのためマゴロク・E・ソードを作る際にも彼の意見が取り入れられている。

さらに耐ATF装甲も使われており、戦車や軍艦、やりようによつてはビームなども一刀両断できるとはミツヒサの言である。

「それで……これがマステマか……」

「全領域兵器マステマよ。」

リツコが誇らしげに言うが、この時コウスケが考えていたのは別のことであった。

全領域人型決戦兵器

コウスケに密かにそう呼ばれている某三佐を思い出していたのだ。

特にあの時（EX2）に使われたMCのことを……

コウスケは頭を振り払うと意識を現実に戻した。

「すごいスペックだな……でも、出来れば使わないでほしいな……」

「どうしてかしら？」

「そうですね。使わないなんてもったいない。」

リツコとミツヒサはコウスケに不満そうな声をかけていた。

「マシンガンとソードが付いているのは理解できる……だが、なんでNNミサイルまでついているんだよ。」

コウスケの一番の疑問はマステマについている二本のNNミサイルであった。

NNミサイルなどどう考えても第三新東京市内で使うことはできない。

やれば使徒ごと町も吹き飛ばからだ。

そして吹き飛んだ町の管理はミサトの仕事ではなく、コウスケの仕事になるのだ。

使徒の攻撃で被害を受けたなら理解できるが、EVAの攻撃で被害を受けるなどコウスケからしてみればたまったもんじやない。

「近、中と来たら遠距離も攻撃できるようにするのが当たり前でしょ？」

「そうですよ、綾波特務一尉。それに必殺技みたいで良いじゃないですか。」

コウスケの前で金髪の技術者と眼鏡の整備員が誇らしげにしていた。

「はあく……新兵器についてはわかった。本命に入ろう。」

コウスケは足を進めて特殊強化ガラスの前に立った。

ガラスの向こうには蒼く塗装されたモノアイのEVAの上半身が見えていた。

零号機である。

「こっちはなかなか骨が折れましたよ。」

「でも、本来のB型装備に比べれば数倍の戦闘力になっているはずよ。」

「……F型装備か。」

普通、F型装備とはEVAの空挺輸送用の装備のことを指して言う。

だが、コウスケが言うF型装備とはそのことでは無かった。

「正式名称はAFCエクスペリメント、対SEEL決戦用装備……各EVAをそれぞれ特化改装したもののよ。」

「まさしく決戦用の秘密兵器……いや、碇司令も男のロマンがわかる方なんですな。」

ミツヒサの言葉にコウスケは絶対違うと心の中で反論していた。

「それで、零号機は……」

「見ればわかる……砲戦特化型なんだろう?」

コウスケの目に映る零号機はいつものスマートなフォルムではなく、右腕に大きなライフルが付いていた。

ライフルの名称は「沈下型領界侵攻銃」^{ファイールドレンジンカー}、通称「天使の背骨」

重粒子を浸食型のATフィールドで包み込み、それを反発型のATフィールドとの間に生まれる反発力で打ち出す兵器である。

理論上ではこの装備のみでヤシマ作戦を行えるらしく、使徒が持つATフィールドに対し絶大な威力を発揮すると期待されている。

しかし、単独でATフィールドを展開させる装置がない。

それをEVAとドッキングさせることでその問題を解決したのだ。

「はい。初号機は装甲強化と武装の追加、式号機は運動性の強化がしてあります。」
「最も式号機はもう少し時間が掛かるけどね。」

実を言うと最初にF型装備に移行したのは初号機が最初であった。

元々計画だけは存在していたのだが、EVAの総重量が3倍になってしまった。

耐ATF装甲の開発によって幾ばくか軽くはなったものの運動性が大きく犠牲に

なつてしまった。

それが解決できなかつたのだが、リリースが現れたことにより状況が一変したのだ。

A Tフィールドの応用

それは人類には全く未知の領域であつたのだが、リリースの協力によりフィールド偏向制御運用に成功することになる。

そのため現行では不可能とされていたF型装備の開発に成功することになる。

そして初号機のF型装備が実装された後、零号機の改装、今は弐号機の改装が行われているということだ。

だが、あれほど嫌がついていた実験にリリースが参加するなんてコースケに取つては不思議でならなかつた。

その疑問にリツコが答える。

「あなたが乗るS u—37の改装……二人乗りにしてくれと頼まれたのよ。」

それを聞いてコースケはようやく納得できた。

S u—37 L Cに改装される数日前から妙にリリースの機嫌がよかつたのだ。

それに改装にあつてゲンドウから直々に言われたことを覚えている。

「この改装は必ず成功させねばならない。」

耐A T F装甲のテスト運用程度にしか考えていなかったコースケはここで初めてゲ

ンドウの思惑に気付いた。

「大凡の経緯はわかった。でも……」

コウスケは視線を真横に向けた。

「レイが納得していないようだな。」

視線の先には暗く俯いていじけているレイの姿があった。

レイはコウスケよりもガラスに近いところに佇んでいた。

実を言うとコウスケはこの部屋に入った時からレイがいることを知っていたが、何故か暗く俯いていたので声をかけられずにいた。

コウスケはレイに近づく。

「どうしたんだ？ 番号機が改装されたのに嬉しくないのか？」

レイは何も答えなかった。

ただ、視線が一か所に固定されているのはわかった。

「新兵装が気に入らないのか？」

そう思っていたコウスケはレイから意外な返答を得ることになる。

「……足が無い……」

「足？」

不審に思つてコウスケはガラスの向こうを覗き込んだ。

「……………なんだ？ あれ……………」

コウスケの目に入りこんできたのは零号機の青い足……

ではなく、本来ならば右足があるはずの場所に銀色のパイルバンカーのようなものがあつた。

「何って零号機の固定装置よ。」

「天使の背骨はかなりの反動がありますからね。」

二人がやはり満足そうに言う。

「……………あれじゃ、歩けないだろ。」

「ええ、自走はほぼ不可能よ。」

「陸戦兵器なのに歩けなくしてどうするんだよ！」

不意にミツヒサの眼鏡がきらりと光つた。

「わかっていませんね。足なんてただの飾りですよ！ 偉い人にはそれがわからないですよですね。」

「なら、飛べるのか？ それとも浮けるのか？」

「そんなわけないじゃないですか。EVAはモビルスーツではないんですよ。」

ミツヒサの答えにコウスケは人知れず汗をかいていた。

空を飛んで移動できるなら足が要らないというのも理解できるが、飛べない上に自走

もできないEVAはただの的なんじゃないか

そんなことをコウスケは考えていた。

ただ、モビルスーツと言う単語にはどこか聞き覚えがあった。

ミツヒサの言葉を聞いたレイがぼつりと喋る。

「歩けない……固定砲台………的？」

どうやらレイもコウスケと同じ考えにたどり着いたようだ。

レイはより一層、暗く俯いていた。

「お気に召さなかったようね。」

「レイさんにはまだまだ理解できないようですな。」

(どう見たって大艦巨砲主義……俺にも理解できないぞ。)

それを内心だけで留めるコウスケであった。

「レイが嫌がってるんだから二元に……」

「戻せないわよ。」

コウスケの思考を読んだりリツコが遮った。

「EVAの第一素体から新調したんですから戻すにも時間、追加の予算が掛かるわよ。」

「そうですよ、いくら綾波特務一尉の命令だとしてもお断りです。私たちの努力の結晶

を無にする気ですか？」

そう言われてはコウスケも何も言い返せなかった。

そしてこのF型装備を開発するために巨額の予算が投入されていることも知っている。

それで冬月の頭が少し後退したことも……

「ですから、何とかレイさんを説得してください。」

「俺に押し付けるなよ。」

「私たちは開発を頼まれたけど、パイロットの説得までは言われてないわ。」

「それにこういうことは綾波特務一尉の方が適任ですよ。」

コウスケは折れることにした。

ここで抵抗しても今度は総司令執務室に呼ばれるだろうことは容易に想像できたからだ。

ゲンドウと冬月のことは嫌いではないが、あの暗い部屋は嫌なのだ。

コウスケはため息を付くと娘の説得に向かうのであった。

「あく……よかったじゃないか。」

レイは答えない。

「ほ、ほら、あのライフルだってかっこいいじゃないか。」

「……でも、歩けない……」

「反動で吹き飛んだら大変だろ？」

「……零号機……気に入ってたのに……」

その感情はコウスケには痛いほど理解できた。

ここ一年ほどだが、レイは基本的に零号機と共にあった。

使徒が現れれば零号機と出撃し、起動実験もほとんど零号機をメインに行ってきたのだ。

以前のレイならいざ知らず、今のレイが零号機に対して何らかの愛着が湧いたとしてもおかしくないだろう。

コウスケだってS u—37が勝手に複座型に改造された時は憚然としていたのだから……

とにかくコウスケは必死に考えた。

なんとか平行線を崩すしかない。

「……歩けないんだつたら誰かに運んでもらうとか……」

それにレイがピクリと反応する。

「それに零号機単体だと危ないから護衛が必要だよな。」

「……護衛……」

「そうよね、動けない零号機は誰かに守ってもらわないといけないわね。」

コウスケの後ろではリツコがそのように眩いていた。

この時、コウスケの脳裏に浮かんだのは今の零号機だけでヤシマ作戦が行えるということだった。

「ヤシマ作戦の時はシンジ君を守ったんだから……今度はレイが守ってもらえばいいじゃないか。」

「そうね、アスカでもいいけど……」

「それだとせっかくの高機動型がもつたいないですからね。」

二人がコウスケを援護するように言った。

レイははっとコウスケを見る。

レイの瞳が揺れ動いている。

今までの零号機とシンジに守ってもらおうことがレイの中で天秤にかかっているのだろう。

「コウスケ君……少女の恋心をうまく使ったわね。」

「さすが綾波特務一尉。えげつないですな。」

（外野は黙ってる！）

内心で悪態をつくコウスケにそんな気は全くなかった。

だが、客観的に見れば二人が言うことの方が正しい。

それを自覚してしまったコウスケは何とも言えない罪悪感を感じていた。

「……………零号機……………ごめんなさい……………」

レイは零号機に頭を下げていた。

零号機は碇シンジに敗北した。

レイの中ではやはりシンジの方が上だった。

コウスケは物凄い後味の悪さを感じていた。

ふと零号機を見ると、何となく俯いているように見えた。

・
・

この時期になってEVAの強化が進められているのは気まぐれと言う無責任なものでは無い。

先に現れた第十四使徒

その使徒に対しNERVは持てるだけの戦力を持つて対峙した。

その結果が敗北

かろうじて初号機の覚醒によって使徒を殲滅するもその被害は甚大であった。

それに対する作戦局と技術局の議論の結果、圧倒的な火力不足があげられることになった。

もともとEVAはどんな戦況でも対処できるようになっている。

その汎用性が今まで使徒に対する多様な作戦を可能にできていたが、それが崩れてしまった。

そのため各EVAの互換性を犠牲にしても特化改装することによって役割の分担と火力の向上を図ったのである。

それが今になって実を結んだということだ。

そしてこれが表向きの理由である。

コウスケを含む一部の上級職員たちにはそれが理由でないことを知っている。

先にリツコが言っていたようにF型装備はもともと対SEELIEように開発されたものである。

コウスケがNERVに来る以前より開発が進められていた。

SEELIEとは既に和解しており、SEELIEと決戦ということにはならない。

……はずだった。

・
・
・

『碓、ルシファー……急に呼びだててすまぬ。』

ゲンドウとコウスケの前にいる01のモノリス―キールがそのように言った。

「急を要すること聞きました……」

ゲンドウとコウスケはキールから急な呼び出しを受けていたのだ。

ふとコウスケは違和感を感じていた。

「……何人かいないようですが……」

数字が足りないのだ。

数えてみると3、5、8、10、11、13が消えていた。

『……SEELEで造反者が出たのだ……』

キールが苦々しい声で言う。

「造反者ですか？」

『左様。これは忌々しき事態だよ。』

『SEELEの実権は既に我々には無い。』

『気付いたときには手遅れであった。』

他のモノリスからも苦々しい声が出ていた。

「……計画的なものだったということですか。」

モノリスの言葉を聞いたゲンドウが口を開いた。

「……実行犯は誰なのでしょうか？」

『……13だ。』

コウスケはSEELEの13であるミカエルを思い出していた。

カラルの遺伝子提供者であるミカエル

初めて出会ったときには妙な男だと思っていた。

「それでここにいないメンバーたちは？」

『遺体が発見された。』

『それに伴い人類補完委員会の実権も我々から離れてしまった。』

「人類補完委員会も兼ねているメンバーが先に暗殺されたということですか。」

ゲンドウが重く閉ざしていた口を開いた。

「議長、よく無事でしたな。」

『偽造した戸籍が役に立ったただけだ。』

「それにしても、ミカエルは何が目的なのでしょう？」

「ここで反乱を起こすということは何かしらの目的があるはずだ。」

そう思っただけ聞いたコウスケは周りが静まり返っているのに気が付いた。

「どうなされたのですか？」

『ルシファーよ、ミカエルとは誰だ？』

キールの言葉にコウスケは疑問符しか浮かばなかった。

「誰って……13ですよ。」

『何を言っている。奴はミハエルだ。』

キールの言葉を聞いた他のメンバーが口を開いた。

『議長、彼はマイケルではないのですか？』

『ミシエルと名乗っていたぞ。』

『私の時はミゲルと名乗っていた。』

場が騒然としていた。

「どういふことなんだ……」

コウスケも混乱していた。

彼は確かにミカエルと名乗っていた。

だというのにSEELIEのメンバーからは次々と違う名前が挙がってくるのだ。

『静粛に！ ……ともかく13の造反は事実である。おそらく奴は人類補完計画を再び進める気だ。』

「それは意味がない物だということ……」

『わかっているはずだ。だが、奴がここで離反するということはそれ以外にあるまい。』

『人類補完計画……碓君の協力もそうだが、彼の協力なしに計画を立てることは不可能だった。』

『セカンドインパクト後に突然現れた奴は人類補完計画を強く押し進めていた。』

『左様。まさかここまで固執していたとは……』

コウスケは深く考え込むことになる。

意味がないと知っていながら人類補完計画を進める理由はいったい何なのか
ゲンドウが再び口を開いた。

「……おそらく、リリスを神にしたいのでしょうか。」

たった一言であるが、ゲンドウが何を言いたいのか理解できた。

『バカな！ 我々に具現化された神など不要である。』

『それに今のリリスはそんなことを望んでいない。』

『左様。しかし、碇君の言うことが彼が目的としてしていることなのかもしれん。』

コウスケには全く理解できない。

今のリリスは人として生きることには価値を置いていることはコウスケが一番わかっていることだ。

だというのにリリスを無理やり神なんてものにしようなどと何故考えるのか

そうすれば自分は神の使いとして生きられるとも思っているのか

コウスケは自分の内側で荒れ狂う怒りを抑え込むのがやっとであった。

『ともあれ、ルシファーよ。奴の目的がリリスの神への道だとすれば、君が直接狙われる
だろう。』

『リリスに一番近い君に何かがあればリリスが黙っておるまい。』

『それに奴が開発していた新型のダミープラグとEVA量産機……』

『奴が直接NERVに攻め込んでくることもありうる話だ。』

『人類補完委員会の実権がない今、NERVの予算も大きく削られる可能性もある。』

『我々もできうるだけ支援するが、あまり期待しないでほしい。』

SEELEmenバーたちの言葉にさすがのコウスケも厄介事だなんて言ってもらえなかった。

『SEELEmenが離れてしまった以上、我々もSEELEmenでは無く新たな組織を立ち上げる。』

『目的はSEELEmen所属のEVAの殲滅と離反した13の人類補完計画遂行の阻止……』

『彼我兵力差は1:3……』

『……あまりにも分が悪い。』

コウスケは思わずそう呟いた。

『だが、ここで負けるわけにはいかん。』

ゲンドウが隣で強く言っていた。

『そこでルシファーよ。』

『何でしょうか？』

『新たな組織を立ち上げる以上、組織名が必要だ。それを君に決めてもらいたい。』

コウスケは少し考え込んだ。

名前は体を表す

そんな言葉がコウスケの頭に浮かんだ時、一つの単語が浮かび上がった。

「意思……リリスは人として生きることの意味を見出しています。その意思を俺は守つていきたい。」

『意思か……わかった。』

キールは少し間を開けて続けた。

『これより我々は「W I I L E」と名乗る。異存があるものはいるか?』

他のモノリスから声が上がらなかつた。

『良かろう。碇、ルシファー、困難な戦いとなるが……』

「わかつております。」

「負けるつもりはありませんよ。」

『うむ……これにてS E E L E……いや、W I I L Eの会議を終了する。具体的な案は後日、再び討議することにする。』

・・・

予期されるミカエルの襲撃

新型のダミープラグとEVA量産機

ミカエルが襲撃してくるとすればそれらが用いられることが容易に想像できたからだ。

そして襲来する使徒

この双方に対処するためにEVAの改装が急務となったのだ。

EVAの改装にはWILEEから送られてきた資金が投入されている。

既に人類補完委員会からの資金はかなり縮小されており、EVAどころか第三新東京市が吹き飛んだら修復などとてもできない予算となつてしまった。

コウスケは自分の執務室でこれから起きうることに對する方法を考え込んでいた。

「どうしたの?」

声が出した方にコウスケが顔を向けるとリリスが心配そうな顔でコウスケを見ていた。

「……お前さんは神になりたいか?」

「神? そんなもの望むわけないじゃない。」

「そうか……そうだよな。」

「そんなものより、コウスケが無事でいてくれる方が嬉しいから。」

そう言うとりリスは屈託のない笑顔でコウスケに見せる。

コウスケは思わず赤面し、顔をリリスとは反対の方に向けた。

リリスは純粹にコウスケに向けて好意を表してくる。

それがコウスケに取っては嬉しいことでもあるが、あまりにも直球で表してくるのでやはりどこか恥ずかしく思ってしまう。

だからこそコウスケはリリスを選んだわけであるが……

リリスがコウスケに見せる喜怒哀楽

それを守っていききたい

永遠とは言わない

コウスケとて寿命には勝てないからだ

だからこそ今ここにある笑顔を守りたい

それが墮天使の名で呼ばれる男のW I I L E^意であつた。

第48話 とある特務一尉の日常

コウスケはいつも通り執務室で多いとは言えない量の書類相手に格闘していた。

とはいえ最近の量に比べると大凡1.2倍くらいはある。

そしてコウスケはいつもの紅茶では無く、珍しくブラックコーヒーを手にしていた。

「時間が長く感じる……やっぱりコーヒーは好きになれんな……」

いつになくコウスケはどんよりとしていた。

とは言うものの上司から厄介事を頼まれたとか、支援者から無理難題を無茶な要求をされたとかいうものには無い。

「……………さて、お仕事お仕事……………」

どんなコンディションであれ仕事はきつちりとこなしているのが彼の長所とでも言えるものであった。

だからこそ密かに人気も出るのだが、上層部からは漠然とした不安が出てくるのである。

つまるところコウスケの普段とは少し違う雰囲気から嵐の前の静けさなのではないかと疑うのであった。

コウスケは基本的に好んで騒ぎを起こそうとする人ではない。

だが、NERVの上層部―特に冬月などからは目をつけられている。

冬月がコウスケに目をつけるのは、コウスケがある意味で問題児であるからだ。

本人にそんな気は全くないにも関わらず、彼を中心に時々冗談にならないような騒ぎが起こる。

だが、冬月が目をつけるのはそんなことではない。

もしそうならば、コウスケよりも目をつけるべき相手がいる。

葛城ミサトの出勤態度、赤木リツコの怪しい研究、加持リョウジの多岐にわたる女性関係、剣崎キョウヤが時々持つてくる謎の紅茶による諜報部からの苦情……

これらに比べればコウスケは遥かにいい方である。

最もコウスケの家族が絡むと話が変にこじれるなんてことはあるが……

とにかく冬月がコウスケに目をつける理由はリリスにある。

コウスケの押しかけ女房である第二使徒のリリス

今は人として生きているが、その力は人の領域を遥かに超えている。

人類の持つ最強の兵器であるNN爆雷をもつてしても破ることのできないATフィールドを展開できるだけにあらず、生物をLCLに還すことのできるアンチATフィールドを自在に扱うことができる。

彼女がその力を持って世界を征服など行ったら人類になすべなどないが、今の彼女にそんな気がないのは幸いであろう。

だが、コウスケに何かあろうものならリリスがどんな行動に出るかわからない。

本人たちは全く意識してないが事の真相を知る者たちにはこの世で最も危険な夫婦であり、サードインパクトへの一番近いトリガーがコウスケにあると認識されている。

それ故にリリスの存在はなんの変哲もない女性と言うことで情報がねつ造されている。

全くの余談だが、コウスケが何かをやらかすたびに冬月の髪が少しずつ後退しているりする。

そんな人類の命運とイコールで考えられている綾波コウスケはやはりどこか陰鬱な表情であつた。

そして……

「……………ふあ……………」

あくびをしていた。

コウスケにしては珍しく寝不足であつた。

そのためコウスケは好きでもないコーヒートを啜っているのである。

「眠い……………」

そう呟くとコウスケは隣に視線を向けた。

「……コウスケ……もう、やめて……私のライフポイントは……もう……零よ……」

などと寝言を言いながら腕を枕にしているリリスが居た。

「……どこかで聞いたことあるセリフだな。」

そう言つてコウスケは暫く考え込んだ。

「……ああ、あのアニメか。」

最近のリリスはアニメも見ているのだ。

NERVの職員にそれに詳しい人がいるようでブルーレイディスクをちよくちよく借りている。

そしてコウスケと一緒に見るのだが……

「あの時は本当に……」

そう言つてコウスケはその時のことを思い出していた。

・
・
・

朝、コウスケが起きると何か違和感を感じていた。

何かが足りない

コウスケは何が足りないのかすぐにわかった。

「……………あれ？ リリスが居ない……………」

いつもならコウスケの横ですやすやと眠っているリリスが居なかった。

もう起きたのかとも思ったのだがいつも壊されている目覚まし時計が無事で見ると、どうやらリリスはコウスケの横で眠らなかつたようだ。

ちなみにコウスケが眠る時は一人なのだが、コウスケはベットの真ん中で眠ることは無い。

必ず一人分くらいは入れるスペースが開けられているのだ。

(珍しいこともあるんだな……………シーツが冷たい……………)

それに少し寂しさを感じるが、気持ち切り替えコウスケは部屋を出ることにした。

部屋を出ようと扉を開けるとレイとカヲルが扉の前で何かを話していた。

何故かひどく怯えたように見えた。

「どうしたんだ？」

コウスケがそう言うのと二人は恨めしい表情で見返してきた。

「な、何なんだ？」

「特務一尉、リリスに何をしたんですか？」

レイが非難するような声で言った。

「リリス？ ……別に何もしてないが……………」

「リリスが怒ってましたよ。近づくだけでLCLになつてしまふ……そう僕の本能が訴えかけてくるんです。」

カヲルの言葉にレイが黙って頷いていた。

神妙な顔つききの二人にコウスケは冗談ではないということを感じていた。

(リリスが怒ってる？ ……………何故だ？)

コウスケがそう思っているときに声が聞こえてくる。

「レイ、カヲル、いつまでそこにいるの。」

その声にレイとカヲルがビクリと反応した。

二人は暫く見つめあっていたが、何かを覚悟したようにダイニングへと向かつて行つた。

コウスケも二人の後に続いたが足が突然動かなくなつた。

(……………これ以上進むのは危険……………)

そのように脳内で警告が発せられたからである。

だが、このままでいるわけにもいかなないので、嫌がる足を無理やり動かした。

ダイニングに足を伸ばした途端にコウスケは止まつた。

その姿は地雷を誤つて踏んでしまったかのようなであつた。

コウスケの視線の先には居心地悪そうにしているレイとカヲル、そして無表情のリリ

スがあった。

「あの～……………リリース……………さん？」

「なに。」

コウスケの声に反応してリリースが睨めつけてくる。

その視線から逃れようとコウスケはテーブルに視線を移して気が付いた。

三人の前には朝食が置いてあったがリリースの横、つまりコウスケの席には何も置いてなかった。

「……………俺の分……………」

と言いかけてコウスケは止めた。

リリースがより強く睨めつけてきたからである。

コウスケは全く動けないまま冷や汗をかくことになる。

その時、遠くから携帯電話が鳴り響いた。

NERVからの呼び出しである。

コウスケはこれ幸いにとそそくさと自分の部屋に逃げた。

呼び出しの理由は富士の樹海で謎の破壊活動があったそうだ。

破壊活動が行われる寸前にパターン緑とアンチATフィールドを観測された。

つまり、リリースが関係しているのだ。

その事情聴取のためにコウスケが呼び出されたのである。

コウスケはそれを利用し、リリースが何故機嫌が悪いのかを探ることにした。

加持やミサトのみならず、ゲンドウやWILLIEのメンバーにも意見を求めていた。

そして

「済まなかった！ 俺が悪かった！」

コウスケは帰宅すると同時にリリースに土下座で謝っていた。

リリースの機嫌が悪かった理由とはコウスケがリリースとの約束を破ったからである。

その約束とは夕食が終わったら一緒にアニメを見てほしいというものだった。

だが、コウスケはNERVでの仕事がいつもより忙しく、先にリリースを帰して残業するほどであった。

リリースは一人寂しく帰宅するが、コウスケが帰ってくるまで夕食も食べずに待っていた。

一方、コウスケはと言うと精神的にへとへとになっていては約束のことなどきれいさっぱりと忘れてしまっていた。

コウスケは帰ってくるや否やベットに直行したのである。

「今後、こんなことがないようにするから許してくれ！」

これを聞いたリリースはかなり穏やかな表情になっていた。

富士の樹海に八つ当たりをしたというのものもあるが、コウスケが誠心誠意謝っていることがわかるからである。

ここで許そうかとリリスが考えたとき、ドラマのワンシーンが頭に思い浮かぶのであった。

「……ねえ、コウスケ。私と仕事……どっちが大事なの？」

リリスからしてみればちよつとした意趣返しだったりする。

この質問でコウスケを少し困らせてやろうというのだ。

そしてリリスの中ではある一定のシナリオができていた。

そんなリリスを見ていたレイとカヲルはほつとしながらもリリスのシナリオと似たようなことを考えていた。

そんな和やかな雰囲気であったのだが、床しか見えていないコウスケにはそんなことがわかるわけがなかった。

「……………仕事だ。」

「え……………」

「仕事の方が大事だ。」

コウスケの言葉にリリスのみならずレイとカヲルも衝撃を受けていた。

「私より仕事の方が大事なの……………」

「当たり前だ。」

きっぱりと断言したコウスケの言葉にリリスはへなへなと座り込んだ。

レイとカヲルはどうすればいいのかわからず困惑するだけであった。

いつの間にか正座になっていたコウスケはそんなリリスを見てはつが悪そうにしながら続けた。

「正直、お前さんと言いたいんですが、俺はNERVの作戦局二課の課長で零課の課長でもあるんだ。そんな俺が仕事をちゃんとやらないばかりにレイやカヲル、リリスに万が一のことがあつたら、俺はどうすればいいんだ？」

「それは……」

「だから仕事の方が大事なんだ。……すまん。」

そう言つてコウスケはリリスに頭を下げた。

不意にリリスが泣き出した。

「お、おい……どうしたんだ。」

「……嬉しいの……コウスケがそこまで考えているのに……」

と言いつつリリスは泣き止まない。

ほどほど困つたコウスケはリリスに近づいてそつと抱くのであった。

「ふえ？」

「もとはと言えば俺が約束を忘れていたのが悪いんだ。」

「私もごめんなさい。」

と言いつつも嬉しそうなリリスである。

コウスケももう少しこの状態でもいいかなと思ったのだが、視線を感じた。

「レイ君、これはどう言えばいいのかな？」

「ラブラブと言うのよ。」

「そうか、そう言うのか。」

興味深そうに見ているカナルとニヤリと笑っているレイだった。

「お、お前ら……………」

「二人の周りだけ少し熱い。」

とレイに言われてコウスケは慌ててリリスから離れた。

リリスはムツとしながら言う。

「そんなこと言つていいのかしら？ あのことをみんなに……………そうね、シンジに言つたらどうなるかしら？」

レイは怪訝そうな顔つきになる。

「ヤシマ作戦の前までレイの関心があつた人つて……………ゲンドウじゃないのよね。」

悪戯っぽい顔つきでリリスは言う。

一方、レイは慌てていた。

「それってシンジだろ?」

「それが違うのよね。そうでしょ? レイ。」

コウスケは少し考えて言う。

「……それってレイの初恋の相手ってことか? それは興味深いな。」

「それは僕も聞きたいですね。あの繊細な心を持つシンジ君以上にレイ君が関心を持っていたリリンですか。」

「だって、どうしようかしら?」

「ダメ! 邪魔したのは謝るから、それは言わないで!」

赤くなったレイは慌てながらちらりとコウスケを見ていた。

「別にいいだろ? 今はシンジがいるんだし、時効だろ。そんなことだからかわないよ。」

それでもレイはフルフルと顔を横に振っていた。

「まあ、安心して。レイのその心は私が受け継ぐから。」

とリリスがコウスケに対して少し呆れながら言った。

「そうか、そう言うことか。」

「なんだ? わかったのか? カヲル。」

「これはおいそれと言えることではありませんね。」

そう言いながらカヲルはアルカイックスマイルを浮かべていた。

コウスケは一人だけ怪訝そうにしているのであった。

ちなみにこのことを聞いた某博士の一言

「対使徒用のフェロモンでも出ているのかしら？」

・
・
・

コウスケがそんな回想をしている間にもリリスののんびりと眠っていた。

そんなリリスを見てコウスケは思わずため息をついていた。

「リリスは良いよな。暢気に寝てても怒られないんだから……」

などと言うものの寝ていなくてもリリスを怒れる人なんてたった一人しかいないの

だが……

「全く……のんびり煙草を吸いにも行けない……そんなことしているうちにリリスが目

覚めたら、大騒ぎになるからな……」

そして冬月に呼び出される。

コウスケに取ってそれは既にお決まりのパターンであるのだ。

「……はあく……お仕事お仕事……」

そう言って仕事に取り掛かるが思うように進まない。

集中力が続かないのだ。

「ダメだ……気分転換でもしないとやってられないな。」

コーヒーは飲む気になれないし、煙草も横でリリスが寝ているのでさすがに吸おうとは思わない。

コウスケは思わずため息をつきながら寝ているリリスを見ていた。

リリスはあどけない寝顔をコウスケに見せている。

全くの無防備であった。

「……………そうだ。」

そう言うコウスケはそつと手をリリスの方に伸ばした。

「リリスの仕事も俺がやっているんだから……これくらい、いいよな。」

(ターゲット確認、周囲に敵反応なし……)

「……………こうしてほつぺたに触れるのも久しぶりだな。」

(目標に動きなし、起きたら無理だろうからな……いける！)

ここ最近のコウスケはリリスのほつぺたに触れられずにいた。

触ろうとしてもリリスが勘づいて警戒するからである。

起床後を狙っても必ずリリスが目覚めて不機嫌そうな表情を見せてくるのだ。

そつとコウスケの手がリリスの頬に近づく。

今のところリリースが起きだす気配は無い。

それでもコースケは慎重に手を近づけていた。

過去にリリースに噛まれるという失敗をしているからだ。

リリースは寝息をたてていること以外に動きは無い。

(あと少し……………)

手が近づくにつれてコースケは成功を確信した。

「綾波、入るぞ。」

その声に慌ててコースケは手をひっこめた。

だが、あまりにも勢いが有り過ぎて椅子ごと後ろに倒れそうになる。

それでもなんとか重心を前に戻して事なきを得ることに成功した。

「ん……………コースケ? どうしたの?」

リリースが目覚めてしまった。

こうなつては頬を触ることなどできない。

コースケは恨めし気に侵入者を睨んだ。

「……………どうやらお楽しみを邪魔したみたいだな。」

執務室の入り口にはにやにやしている加持リョウジが立っていた。

「お楽しみ? どういうこと?」

リリスは目をぐしぐしとこすっていた。

「その様子だと……昨日の夜もお楽しみだったみたいだな。」

加持のにやつきながら言う。

「夜つて………ば、バカ！ そんなことあるわけないだろ！」

「昨日の夜？ 確かに楽しかったわよ。」

コウスケは赤くなりながら、リリスは半分寝ぼけながら答えていた。

「リリスだつてこう言っているんだ。往生際が悪いぞ、綾波。」

「お前さんが考えているようなことはしてない。」

「隠すなよ。第一、夫婦なんだろ？ そうやって愛し合うのはしごく自然なことじゃないか。」

加持はにやついた顔を隠そうともせず続けた。

「それに専らの噂になつてゐるぞ。」

「噂？」

「レイちゃんに弟か妹ができる日が近いってな。」

それを聞いたコウスケは全くもってわからなかった。

「何なんだ？ なんでそんな話になるんだ！」

「今日、リリスを背負つて登庁しただろ？」

コウスケは確かにリリスを背負って登庁した。

それは着替え終わったリリスが寝てしまつて起きそうにないから仕方なく背負ってきたのだ。

背負つた時にリリスは幸せそうな顔をしていた。

そんな二人を見てNERVの職員が無責任な想像を働かせたのである。

そしてとんでもない味付けがされてしまったようだ。

「はあ……全くもつてそんなことは無い。」

コウスケはため息をつきながら言う。

そんなコウスケを見た加持は標的を変えることにした。

「リリス、昨日の綾波はどんなだった？」

「聞いてくれる？ コウスケったら酷いのよ。私をいじめて楽しんでたんだから。」

もはや加持はにやつきを押さえられそうになかった。

「そうか……綾波はそんな趣味だったんだな。」

「そんな趣味って……人聞きの悪いことを言うな。いや、それはそれでいいかも……

じゃなくて！ お前さんが考えているようなことなんか一切なかった！」

そう言つてコウスケは昨日の夜にあつたことを話し始めた。

・
・
・

綾波家の一つの部屋で誰かが起き上がる。

コウスケでもリリスでもない。

綾波レイである。

「……………午前0時……………予定通り。」

そんな深夜に起きたのは偶然でも何でもない。

レイの計算通りなのだ。

リリスが分離してからと言うもののレイは真夜中に無意識で彷徨うということがなくなっていた。

当初はさほど気にしなかったが、徐々に何か物足りなさを感じていた。

「朝一番に碓君の顔を見れる……………それはとても嬉しいこと。」

などとレイは呟いていた。

そう、レイはこれから葛城家に侵入し碓シンジのベッドで眠ろうとしているのだ。

何故、こんな時間なのか

それはこの時間なら起きている人がいないことを知っているからだ。

特にコウスケが寝ているときを狙っているのだ。

念入りの調査の結果、コウスケはどんなに遅くても午後11時には寝るようにしていることを突き止めた。

そしてリリースはその30分後にコウスケを部屋に向かうのだ。
つまりこの時間にレイの行動を阻むものはいない。

「……行動開始。」

レイはベットから出る。

ちなみに最近のレイはシンジの部屋に行った時、必ず行うことがある。

それは寝ているシンジの頬をつつくこと

普段、コウスケがリリースの頬を触ろうとしているのを見て好奇心からシンジの頬を触ったのだ。

その感触にレイは何とも言えない幸福感に浸ることになる。

その時の感触が忘れられず今日まで至った。

ちなみにシンジはそのことを知っている。

何故ならレイがコウスケと同じ失敗をしたからだ。

噛まれはしなかったが、代わりに舐められた。

さらに余談ながらレイは「ほっぺたハンター」とも呼ばれていた。

きつかけはシンジ以外の頬はどんなものかと言う好奇心からである。

アスカやカヲル、洞木やトウジ、ケンスケなどのクラスメイトはもとより、伊吹やリツコなどのNERV職員もその餌食となっている。

それから省かれたのはコウスケとリリス、そしてゲンドウだった。

ゲンドウも標的の一人だったのだが、立派な髭を思い出し取りやめたのだ。ゲンドウの髭を思い出すと、何故か嫌な気分になるのだ。

レイでもわからずにいるが、それは一人目の記憶だったりする。

そんなレイの行動を見た人々は明らかに綾波コウスケを影響であると確信しているのであった。

とにかくレイは己の立てた計画通りに第一の関門である自分の部屋の扉に向かった。

「……………光？」

扉の隙間から光が漏れていた。

レイの部屋はそのままリビングへとつながっている。

光が漏れているということはリビングの明かりがついているということだ。

消し忘れと言うわけでもない。

何故なら寝る前にコウスケがすべての明かりを消していることを知っているからだ。

これらが意味するものとは…………

「特務一尉が起きてる……………作戦失敗……………」

レイは落胆の色を隠さずにベットに戻ろうとした。

「……………ダメ！ 止めて！」

「今のは……………リリース？」

扉の向こう……………リビングからリリースの声が聞こえた。

レイは思わず聞き耳を立てていた。

「バカ！　大きな声を出したらレイが起きるだろ。」

「だって……………あつ……………そんなところに……………」

(何をしているの?)

レイはそう思わずにいられなかった。

聞こえてくる声からレイは二人が何をしているのか想像する。

(……………特務一尉がリリースをいじめている……………?)

行きついた答えはそれだった。

「うう……………コウスケ、ひどい……………」

「何も泣くことないだろ。」

(……………リリースをいじめている……………止めないと……………)

そう決心してレイは扉を開いた。

すると二人はテレビの前にならんで座っていた。

レイは困惑する。

どう見たってリリースがいじめられているように見えなかった。

扉の音に気付いたコウスケがレイの方に向いた。

「はあく……レイが起きたじゃないか……」

「だって……あ！」

リリスが声を上げるとテレビ半分の画面にLOSEと言う文字が映し出されていた。

「……何をしているのですか？」

「ゲームだよ。」

コウスケがぼつが悪そうに答えた。

そう言われてレイは気付いた。

綾波家にある唯一のゲームソフトであり、以前にコウスケが暇つぶし程度にやっていた物である。

ジャンルは落ちもの系パズルゲームである。

これはレイと同居し始めた時にコウスケが何となく買ってきたものである。

とは言ってもレイは全く興味を示さず、コウスケも暇つぶしにもならないと判断したため、長らく埃をかぶっていたものだ。

「起きたものはしょうがない……眠くなるまでやるか？」

「いいえ。」

と答えたレイは少し怒り気味であった。

こんなもののために計画をつぶされたのだ。

レイは部屋に戻ってふて寝しようとした。

「うう……これに勝てたらコウノトリが来る方法を教えてくれるのに……勝てない……」

その言葉にレイが反応した。

「残念だったな。」

そう言うコウスケの言葉には幾分かほっとした感情が滲み出ていた。

「コウノトリが来る方法？」

「そうなのよ。これに勝ったらコウスケが教えてくれるって……」

「私もやります。」

レイは踵を返してテレビの前に向かった。

「寝るんじゃないのか？」

「気が変わりました。」

「別にいいが……」

「勝ったら私にも教えてください。」

コウスケは一瞬きよとんとなった。

「……コウノトリか？」

「はい。」

「何を言ってるんだ……」

そう言うとコウスケはため息をついていた。

「不戦勝。」

「何？」

「特務一尉はやる気がない。戦う気がない。だから私の勝ち。」

「……全く、この娘は誰に似たのか……」

そう言うとコウスケはコントローラを持った。

「やるぞ。」

こうしてコウスケとレイのバトルが始まった。

……

……

……

「そんな……レイでも勝てないなんて……」

「どうしてそうなるの？」

レイは悔しきで唇を噛んでいた。

「もうあきらめろ。これで5連敗だぞ。」

レイは何も答えずに立ち上がるとすたすたと歩き始めた。

コウスケは視線で追ったが、レイは自分の部屋にはいかなかった。

暫くするとレイが戻ってきた。

「レイ君……こんな時間に叩き起こすなんてひどいじゃないか。」

レイの後ろには恨めしそうにレイを睨んでいるカヲルが立っていた。

「渚君、これをやって。」

「これは……なんだい？」

「いいから。」

レイは無理やりカヲルをコウスケの隣に座らせてコントローラーを握らせていた。

「おい、レイ……」

「これに勝てば特務一尉が人として必要なことを教えてくれるわ。」

「それは……興味があるね。」

カヲルはレイから説明書を受けとり読み始めた。

「……そうすればいいのか……ルシファー、よろしくお願いしますよ。」

コウスケはもうあきらめている。

「目的のためには手段を選ばないとは……全く誰に似たんだよ……碇司令か？ それと

も赤木か？」

.....

.....

.....

「簡単そうで意外と難しいですね。」

対戦の結果はコウスケの勝ちである。

「もう、気は済んだろ？」

「……いいえ、まだよ。」

ずっと黙っていたリリスが言う。

「これは四人でもできるんでしょ？」

「ああ、そうだが……まさか……」

「レイ、カヲル。三人でコウスケを倒すのよ。」

「三人寄れば文珠の知恵……リリス、わかったわ。」

「単体では無く群れで……リリンの性質だね。」

リリスの言葉にレイとカヲルは乗る気であるようだった。

「はあ……気が済むまで付き合うよ。」

と言うわけでゲーム大会が続いたのだが、リリスが訝し気にコウスケに聞いた。

「ねえ、さつきからずっと同じキャラクターを使っているけど……」

リリスの声は少し不機嫌なトーンであった。

「そう言えばそうですね。」

「……もしかして、特務一尉の好みなんですか?」

コウスケがずっと使っているキャラクターは眼鏡をかけた教師であった。

ただ、教え子をハンマーで叩いて記憶を飛ばすともない教師であるのだが……

「そんなわけないだろ。」

「……もしかして、眼鏡が良いの?」

リリスが不意にそのようなことを言った。

「NERVで眼鏡をかけているリリンはそう多くないですね。碇司令と………榛名三尉

くらいですか?」

「渚君、碇司令はサンングラスよ。」

とカヲルに突っ込みを入れるレイ

それを聞いていたコウスケが言う。

「何を言うんだ。俺に眼鏡属性なんて無い。」

コウスケの言葉にレイが疑問符を浮かべながら聞いた。

「……眼鏡属性ってなんですか?」

「うっ………何でも無い! ただの妄言だ! 忘れろ!」

後で調べれば良いと思ったレイは特に追及することは無かった。

ただ……

「そう……眼鏡が いいのね。」

なんて呟くりリスが居たが……

・
・
・

「それで綾波一家はめでたく全員が寝不足と言うわけか……」

加持は呆れかえった表情をしていた。

「護衛からの報告によればレイとカヲルも授業中に居眠りしているそうだ。」

そう言うコウスケも冴えない表情だ。

「お前さんも少し休んだらどうだ？」

「そうも言つてられんよ。俺が止まったら二課が止まる。」

「真面目だね。まあ、そこが綾波の良いところでもあるんだが……」

「それで、そんなことを話するためにここに来たのか？」

コウスケは目の前にある書類を確認しながら言う。

少し機嫌が悪そうだった。

それは寝不足だけが原因ではない。

「そうだった。」

加持はそう言うの一つの書類をコウスケの前に差し出した。その書類を見たコウスケはカッと目を見開いた。そして加持を見る。

加持は真剣な目つきでコウスケを見ていた。

「……これは本当なのか？」

「裏は取れてる。」

コウスケは急に立ち上がると外に出ようとした。

「ここ、コウスケ？ どうしたの？」

「……ちょっと休んでくる。」

「なら……」

「リリースはここで休んでいてくれ。まだ、眠いだろ？」

そう言ってコウスケは出て行ってしまった。

「リヨウジ、コウスケはどうしたの？」

「こればかりは本人に聞いてくれ。」

「……教えてくれるのかしら？」

「教えてくれるさ。ただ、綾波にも考える時間が必要だ。」

そう言われてもリリースは納得できないようだった。

それを察した加持が続けて言う。

「綾波にとつて長い間探していたもの……今はそれしか言えない。」
そう言って加持は出て行った。

第49話 綾波とアルコール

コウスケが加持から何かを受け取った翌日

リリースは例のごとくコウスケの部屋で目覚めた。

ベットの横には見事にばらばらになっている目覚まし時計が落ちている。

「またやつちやった……………」

もうこれで何十個目かわからない。

当初は目覚まし時計を壊すたびにコウスケに怒られていたのだが、今は完全にあきらめたのか何も言っていない。

ばらばらになった目覚まし時計を見ながらリリースは少し落ち込んでいた。

壊さないように努力はしているのだ。

だが、それが一向に実を結んでおらず、リツコをはじめとする技術開発部に良いデータを作り上げることになる。

少し憂鬱なリリースであった。

「……………あれ？」

ふとりリスは何かが足りないことに気付いた。

横を見ると誰もいなかった。

いつもならコウスケがリリスのほっぺたを触ろうとして手を伸ばしているはずである。

「……………ああ、今日はコウスケの日ね。」

朝食の当番のことである。

リリスがレイから分離した当初はリリスがずっと作っていたのだが、コウスケが自分も作ると言ってきたのだ。

「リリスばかりに任せるのもなんだし……………それに……………たまには俺が作ったやつも食べてほしいしな……………」

なんてことを明後日の方向を向きながらコウスケは言っていたのだ。

「うふふ、ああいう時のコウスケは本当に可愛いわ。」

とリリスは微笑みながらベットから降りた。

そして部屋の扉を開けてダイニングへと向かうのだが…………

「ん？ レイ、何してるの。」

リビングではダイニングの方を向いて突っ立っているレイがいた。

「レイ？」

リリスが呼びかけても反応がない。

そんなレイに疑問をいだきながらもリリスはダイニングに向かった。

「おはようございます。」

「おはよう、カヲル。」

椅子にはカヲルが座っていた。

既に制服に着替えている。

「今日は楽しみですね。」

「そう?」

「ええ、いつもはリリスが作るものですから。」

そうしているうちにリリスの前に料理が運ばれてきた。

「レイ、いつまでそうしているの? 早く来なさい。」

「え、ええ……」

レイは歯切れの悪い返事をしながらも席についた。

そして食べ始めるのだが……

「あら? 今日は何か違うわね……」

「どう違いますか?」

「ええ、何かが足りない気がするの。」

「そうですか。」

「どうしたの？ いつもと声が違うわよ。風邪でも引いたの？ こう……す……け？」
「そう言いながら台所の方に向いたリリスは固まってしまった。」

「体調は万全です。」

そう答えるのはサングラスをかけた全身真っ黒のNERVの黒服であった。

いつもと違うところと言えば、PIYOPPIOと言う字とヒヨコの絵がプリントされているエプロンをしていることだろう。

「……………えつと、キョウヤよね？」

リリスはやつとのことですう言うことができた。

「はい。」

と剣崎は答える。

「……………何してるの？」

「朝食を作りに来ました。」

「コウスケは？」

「NERVにいます。」

それを聞いたリリスはますます混乱していた。

それを感じ取ったのか剣崎はつづけた。

「綾波から頼まれました。今日は作ってやることができなから代わりに頼むと。」

「どうして?」

「そこまではわかりかねます。」

すると剣崎は真剣な目で（と言ってもサングラスでよくわからない）三人を見ていた。

「それで、何が足りないのでしょうか?」

「えつと……こう、食べてほしいって気持ちが足りないのかしら……」

「そうですね……」

リリスの答えを聞いた剣崎は少し落胆ながらつぶやいた。

「まだまだ、研究の余地ありか……」

それを聞いたレイが反応する。

「誰かに作ってあげたいのですか?」

剣崎は無言だった。

それに対しレイはニヤリと笑いながら言う。

「加賀さんですね?」

剣崎は微動だにしなかった。

「……そう言うところは綾波にそっくりですよ。」

「似てない。」

「いいえ、レイ君は明らかに綾波の影響を受けています。この前、頬にいきなり触れてき

たときもそうです。」

ちなみにレイが劍崎の頬に触れた時の感想は……

「硬い。」

だった。

「どうしてそう言うこと言うの?」

「それが事実だからです。」

「そんなことない。」

「事実です。認めてください。レイ君を知っているものは全員そう思っています。シンジ君だってそう思っています。」

それを聞いたレイは少し驚いていた。

「碓君も?」

「はい。」

劍崎のはつきりとした返事を聞いてレイは無言になった。

カヲルはというと……

「リリスの言うことがよくわからない。」

などと言いながら黙々と食べていた。

リリスは一人で黙々と何かを考え込んでいた。

・
・
・
リリスは一人でNERVに登庁した。

いつもはコウスケとともに車で登庁するのだが、コウスケがいないのでリニアに乗って登庁した。

車で登庁するときのリリスはとても静かにしている。

一番最初に運転中のコウスケに抱き付いてめちやくちやに怒られたからである。

リリスが抱き付いた反動で車は反対車線に飛び出してしまったが、対向車線がいなかったのとコウスケが思ったよりも冷静に対処したため事故にならずに済んだのだ。

ちなみにリリスが抱き付いた理由は二人きりになれて嬉しかったからと言うものだ。

とにかくリリスはすれ違うNERV職員にあいさつしながらも、まっすぐ執務室へと向かって行った。

コウスケが執務室にいることはすでに分かっているのだ。

(昨日、リョウジから何かを貰った時からコウスケが変なのはわかっていただけ……)
リリスは執務室に向かう通路でそんな事を考えていた。

コウスケの異変はリリス以外にもレイとカヲルもなんとなく感じ取っていた。

レイとカヲルは何があつたのかコウスケから聞きだそうとしたが……

「必ず話してくれると思うわ。だから待ちましょう。」

とリリースが止めた。

それでもリリースはやはり心配ではあった。

もう少しで執務室に着くという所でリリースは足を止めた。

「何かしら……歌？」

とは言っても周りに人はいない。

つまり歌っているのはコウスケと言うことだ。

執務室は防音処理がされており、人の声程度なら完全にシャットアウトできるので、リリースは人―特にコウスケが何をしているのかをある程度察知することができる。

今は執務室からかなり近い位置にいますので声まで聞くことができましたのだ。

コウスケの歌を聞き入っていたリリースは不意に悲しさに包まれた。

(……悲しい歌だわ。コウスケは何が悲しいの?)

そう考えているときにコウスケの言葉が続いた。

「世界は悲しみて満ちている……それを感じられないのはレイやみんな、そしてリリースのおかげか……幸せは罪の匂い……そうなのかもしれない……」

それを聞いたリリースは執務室に踏み込んだ。

扉が開く音を聞いたためかコウスケは入り口の方に視線を向けていた。

コウスケの顔はよく見えるのだが、表情がよくわからなかった。

何故ならコウスケはいつもと違いサングラスをかけていたのだ。

「リリースか……今日はすまん。」

リリースはそれに答えずコウスケをじっと見つめていた。

「どうしたんだ？」

「……………何が悲しいの？」

「聞かれていたのか……」

コウスケはぼつが悪そうにしながらリリースから視線をそらした。

「今はそのままにしてくれ。いずれ話すよ。」

そう言つてコウスケは目の前の書類を相手にし始めた。

．．．

「何なんだ？　これは…………」

NERVでの仕事を終え、コウスケは自宅に帰宅した。

サングラスは家でも取ることは無かった。

そんなコウスケが椅子に座ると

「ハーブティーです。これがいいと赤木博士に聞きました。」

「音楽集です。休憩の時にでも聞いてください。」

と言いレイとカヲルが差し出した。

それに対してコウスケは何故とは聞かなかった。

「ありがとう。」

と言い、口が僅かながら微笑むのであった。

「ところでリリスはどこに行つたんだ？」

いつもならコウスケが帰ると真つ先に反応するリリスがいないことにコウスケは気が付いた。

「ルシファーが帰ってくる前にどこかに出かけましたよ。」

「ちよつと買い物に出かけてくると言つてました。」

「買い物？ 何か足りないものでもあったのか？」

そうコウスケが疑問に思っていると、玄関の方からドアが開く音が聞こえた。

玄関からリリスが顔を出した。

「ただいま。あ、帰つてたのね。」

「お帰り。どこに行つてたんだ？」

「えへへ……」

リリスはニコニコと笑いながら一つのビニール袋を差し出した。

「これをコウスケにあげたくて急いで買ってきたの。」

そう言うとりリスは袋からものを取り出した。

金色で七福神の一人が描かれている缶だった。

「これは……………お酒ですか。」

「ビール……………葛城三佐の主食……………」

カヲルは不思議そうに、レイは真顔で言う。

いや、レイは少し赤くなっていた。

その理由は……………(21話のおまけ)

「ミサトがね、落ち込んでる時にはこれが良いって言うから。」

そう言うとりリスは金色の缶をコウスケの前に置いた。

「お前さん……………俺が酒を好んで飲まないことを知らないんだな。」

「へ……………」

「そう言えばルシファーが家でお酒を飲んでいるところを見たことはありませんね。」

「私も無い。煙草はあるけど……………」

それを聞いたりリスは焦っていた。

「だ、だって、リリンはこれを好んで飲んで飲むってミサトが……………」

「そういう人もいるが、全員が好きなわけじゃない。」

コウスケはそう言うときさらに続けた。

「第一、酒と言うものは脳の活動を阻害するんだ。この前(EX4)俺が飲んで帰ってき

たときのことを覚えているだろうか？ 正常な判断ができずにとんでもないことを口走っていたし、体だつてふらふらしていた。あれは体のバランス機能が失われているという証拠だ。あの時は思わず飲んでしまったが、正直言つて後悔した。付き合い程度ならいいが、好んで飲もうとは思わん。」

そうはつきりとコウスケに言われて、帰つてきたときのテンションを完全に喪失したリリスはしゅんとしていた。

「……………そう、これを余計なお世話つて言うのね…………」

リリスは完全に意気消沈としていた。

このままアンチATフィールドでも展開させるんではと思われるほどだった。

コウスケは人知れず冷や汗をかいていた。

不意に視線を感じる。

「リリス、かわいいそう。」

「そうか、これが同情と言うものか。」

この言葉にコウスケの冷や汗はさらに増すことになる。

「あ、いや……………俺は酒が嫌いなだけでリリスの好意を無気にしたいわけじゃ無いんだ。」

コウスケは慌ててそう言うが、リリスに何ら変化はなかった。

「むう……………酒は百薬の長とも言うしな。たまには飲んでもいいかな。」

そう言うが否やコウスケは一気にビールを飲み干してしまった。
そんなコウスケの行動に皆は驚いていた。

「こ、コウスケ、大丈夫なの？」

「大丈夫だ。こんなことで倒れていられるか。」

とは言うが、コウスケの頬は若干赤くなっていた。

「みんな、ありがとうな。」

と言うとコウスケはリリスを手招きしていた。

不思議に思ったリリスは招かれたとおりに近づく和不意に強い力で引っ張られた。

リリスが気が付くとコウスケの胸の中に入ることがわかった。

「ちよ、ちよつと……………」

リリスは身じろぎするがなかなか強い力でコウスケに抱きしめられているのでどう

することもできなかつた。

「お前さんが酒を飲ませたせいで俺は正常な判断が下せないようだ。」

「でも、普通に……………」

「そう言うことだ。」

リリスが見上げるとサングラスで目の表情がわからないが、先ほどよりコウスケの頬が赤くなっていることに気付いた。

これを見ていた銀髪の少年と蒼銀の少女は酒を飲むということ以外のことを見事に再現する。

その際、銀髪の少年は赤毛の少女に鉄拳制裁を食らい、蒼銀の少女は黒髪の少年を危く窒息死させるところだった。

その後、綾波家のお隣さんである少女と少年は綾波執務室にて部屋の主に抗議をするが……

「どうせ嬉しかったんだろ？ よかったじゃないか。」

と言われ沈黙したという証言が残っている。

「リリス、ちよつと席に座ってくれ。」

「どうして?」

「ちよつと話したいことがある。」

リリスは名残惜しそうにしていたが、コウスケに言われたとおり自分の席に座った。

「今から話すことは正直に言ってあまり面白い話じゃない。」

「何の話ですか?」

レイに聞かれたコウスケは少し間を開けて口を開いた。

「……とある少年の話だ。」

・
・
・
今から15年ほど前……

レイときほど歳が変わらない少年がいた

少年はごく平凡な中学生で多少、理数系が得意なぐらいのどこにでもいるような少年だった

少年の家族はやはりその当時ではごく平凡で、兄弟はいなく両親は共働きだった

普段は穏やかだったが、時々父親がアホなことをして母親に叱られたりもしていた
それを少年は笑いながら見ていた

学校では友人と呼べる人たちがいて、ともに競い合ったり、帰り道には道草もしていたし、時には悪戯なんかもして一緒に教師に叱られたりもした

それが当たり前だと思ってた

そんな生活が幸せなことだとは考えられなかった

ある日、少年は夜中に目が覚めた

どうしても眠れないので仕方なくリビングに足を向けた

するとそこには少年の両親が向かい合ってテーブルに座っていた

手にはグラスを持っていた

少年が現れたことを知った父親は少し照れくさそうにしていた

何でも両親の結婚記念日だったそうだ

普段は酒なんて飲まない二人だが、結婚記念日には毎年ワインを二人で飲んでいたそう
うだ

起きだしてしまつたものはしようがないからとその少年も二人の中に加わつた

その時、初めて少年は酒を口にしたのさ

ほんの少ししか入つてないワインだつたけどな

それでも少年が酔うには十分だつた

それを見た父親は笑つていたし、母親は少年を心配しながらも父親のことを咎めてい
た。

こんな日々が続けばいい

少年はその時そう思つた

そしてその次の日に悲劇が起こることになる

そう、セカンドインパクトだ

その時、学校にいた少年は大きな津波が来るということで県外に避難することになつ
た

だが、少年はそれを無視して家へと向かつた

両親のことが心配になつたのさ

いつもよりも早く走って家へと向かったが、途中で気を失ってしまった
避難する人たちにつづかってしまったのさ

少年が目覚ますと、見慣れない白い天井が見えた

少年が目覚ましたことを知って看護師が駆けつけてきた

少年はその看護師から状況を大雑把に聞いた

少年が住んでいたところは既に水没したこと

両親の安否は情報が混乱していてわからないこと

少年はただただ愕然としていた

突然に少年の日常が崩されたんだ

そうなってもしょうがないだろう

その後、少年は病院から出るようになった

いや、正確には放り出された

少年は気絶していただけで体には問題がなかったからな

それにセカンドインパクトの影響で医薬品が圧倒的に不足していたし、重傷を負った

人たちが次々に運び込まれるものだから無傷の少年に構っている余裕なんて無かった

施設に入ることもできなかった

そうして少年は一人で生きていくことになる

両親の安否を知るために

だが、たかが一人の少年にできることなんて何にもなかった
働こうにも受け入れてくれるところなんて無かった

だから、少年は似たような境遇の少年たちと組むことにした

そうしなければ生きていけないからだ

そうして二年ほど生きていたが、ついに治安当局に少年たちのアジトを発見されてしま
まった

大人しく降伏すればよし

そうスピーカーから流れていたが、完全武装した部隊を見て少年を含めたみんなは

悟った

皆殺しにするつもりだと

中には戦おうとした者もいた

だが、相手は大人で完全武装している

こっちは武器なんてあるわけがない

だから逃げることにした

固まって逃げると危険だということではらばらに散って逃げたのさ

少年は仲間との別れを惜しみながらも逃げた

必ずどこかで会おうと約束してな

少年は必死に逃げた

森に逃げ込んで隠れながら逃げていた

時折、どこからか銃声が聞こえていた

それに怯えながらも少年は逃げ続けた

逃げて逃げまくった

そして少年は運よく逃げ切ることに成功した

あの時の仲間たちはほとんどが死んだことを逃げ延びた町で知った

何でも凶悪な犯罪集団として処理された

そういう風に新聞に書かれていた

正直、少年には生きた心地がしなかった

それでも少年は死のうとは思わなかった

両親の安否がわからないという希望があったからだ

そうして一人で暮らしていたが、それも限界があった

そこで少年は決意する

人を殺してでも生きようと

そして少年は人を襲うが、逆に返り討ちにあってしまった

相手が悪かったのさ

既に初老の人だったが、元々自衛隊出身だったんだ

少年は死を覚悟する

自分は失敗した

だが、どこかで気が楽になるのを感じた

もう、辛い目に合うこともない

そう思いながら少年は気を失った

少年が目を覚ました時、どこかの部屋の中だった

ついに天国とやらに行つたんだなと思つていたが、妙に体の感覚があることに気付い

た

はつとなつて起きだすと人がいることに気付いた

その人は少年が襲おうとしていた人だった

少年には訳がわからなかった

それを察したのかその人は言ったのさ

「本来、子供と言うのは国の宝なんですよ。先ほどは急なことだったのでとつさに体が

動いてしまいました……体は大丈夫ですか？」

少年はその言葉に涙した

セカンドインパクト以降に初めてまともな大人に会えたと思つたのさ

そして少年はその人と暮らすことになる

その人からいろんなことを教わつた

高校生ぐらいに必要な知識と護身術を

その少年に取つてその人は命の恩人であり、また師匠でもあつた

そうこうしているうちに少年は二十歳になつた

もう十分に一人で生きていける

だから少年は恩師から離れようと思つた

だが、恩師がそれを止めた

少年の経歴上ろくな教育を受けていないことになつてしまふと

それでは今の情勢ではかなり厳しいだろう

そう言われてしまった

それならと少年はそういう教育をただでできる所はないのかと聞いた

今まで暮らしてきて恩師も余裕がないことを十分に理解していたからだ

恩師が紹介してくれたのが士官学校だつた

少年は喜んだが、恩師は良い顔をしなかつた

今の世界で軍人と言う職業がどれほど厳しいものかを十分に知つていたからだ

だが、少年はそこに行くことにした

少しでも恩師のようになればとも思った

それにもしかしたら両親の安否もわかるかもしれないとも思った

そんな少年に恩師は一つの物をくれた

グロツク17だった

「それを持つていきなさい。ただ、武器と言うものは守るためにあるのです。それを十分に理解してできるだけ無害な軍人になつてください。」

その時の恩師の顔は今まで見たことないとても厳しいものだった

そして少年は軍人への道を歩くことになつた

・・・

「すまん。かなりつまらない話だろう。」

「その少年がお酒を嫌うのは……」

コウスケの話聞き終えたレイが言う。

「そう、両親のことを思い出すから嫌いなんだよ。だから一人では絶対に飲まない。」

コウスケのよこではリリスがすまなそうにしていた。

「そんな顔をするな。それに少年はな、今は幸せなんだと思うぞ。」

「へ？」

「かなり特殊だとはいえ、妻と娘、そして一人の同居人とともに暮らしているんだ。」
それを聞いたリリスは理解した。

何故、コウスケがあんな歌を歌っていたのか

「それにしても酒と言うのはろくでもないな。とんでもないことを喋ってしまう。」

そう言いつつもコウスケの口元には少し晴れ晴れしたような笑みがあった。

「ところで少年の恩師と言うのは誰なんですか？」

ふとカヲルがそのように聞いてくる。

「その恩師とは再会できたのですか？」

レイも気になっていたのでかそのように聞いてくる。

「あったよ。ここ、第三新東京市でね。」

「誰かしら……会ってみたいわ。」

そのように言うリリスが言うのとコウスケは不意に笑い出していた。

「レイとカヲル、リリスも知っている人だよ。」

「私も？」

「もつと言うとシンジやアスカも知っている人だ。」

コウスケの言葉に三人は疑問符を浮かべていた。

「いったい誰なんだろう……」

「リリースも知っている人？」

「ヒントを言うならば……リリースはレイと分離する前に知りあっているな。もつともあまり意識したことないだろうけどね。」

それを聞いてもいまいちピンと来ない三人であった。

「レイやカヲル、シンジやアスカはほぼ毎日会っているよ。」

「……………わからない。」

「僕もほぼ毎日会っているリリン？」

三人は必死に頭をフル回転させていた。

「まだまだだな。恩師の名前は根府川と言う。」

「根府川……………？」

「おいおい、自分の担任の名前くらい覚えておけよ。」

そうコウスケに言われてレイがはっとなった。

「担任の先生！」

「いつもセカンドインパクトの話しかしないあの先生ですか。」

リリースは驚きで何も言えないようだった。

「レイのクラスはパイロット候補たちが揃っているんだぞ。そんなクラスにただの教師が担任を務めるわけないだろ。俺が来るまではあの人を陰から護衛していたん

だからな。」

その事実にはレイはただただ驚愕するだけであった。

「だから、レイが俺の娘になった経緯もある程度は知っている。」

「そうですか……………」

「あまり無下に扱うなよ。」

ちなみにこのことを知ったシンジやアスカも驚くことになる。

「うそ！ あの人、そんな風に全然見えないわよ！」

「コウスケさんの恩師だったんだ……………」

とのことだ。

「さてと……………リリスとレイは明日、朝早くに行きたいところがあるから少し早く起きてくれ。」

「僕は良いのですか？」

「カヲルはいずれ連れていくよ。だが、今回は二人だけにしたいんだ。」

「どこに行くの？」

リリスが不思議そうにコウスケに聞いた。

「それは明日になったらわかるさ。」

そう言うとコウスケは自分の部屋に戻って行った。

外伝

第20. 5話 第一次NERV対人訓練

「対人訓練かね。」

「ここは総司令執務室

提出された草案を確認した冬月は目の前の人物に言った。

「はい。」

「しかしなぜだね?」

「今後のことを考えるとテロなどに対処できるように職員にある程度戦闘訓練をすべきと考えます。」

そう答えたのはコウスケだった。

横にはミスサト、リツコ、加持がいた。

「だが、NERVはMAGIによって監視されているだろう。不要だと思うが・・・」
「しかしMAGIとて完璧ではありません。ましてや人のつくりしものならなおさらです。」

そういうコウスケの言葉は妙に棘のある言い方だった。

リツコのこめかみに青筋が浮かぶが、誰も気づかなかった。

「それに作戦部も実戦経験に乏しいですからいざというときに役に立たんでしょ。」

それを聞いたミサトのこめかみにも・・・

「なので訓練を行いたいと思います。」

「しかし・・・」

「いいだろう。許可する。」

ゲンドウがいつものポーズで言った。

「碇！」

「実害があるわけでもない。むしろ利があると言えるだろう。」

「ならいいが・・・」

「綾波特務一尉。やりたまえ。」

「はい。」

コウスケは妙に気合が入っていた。

それを加持はため息をつきながら眺めていた。

・・・

なぜこんなことになったのか？

それは先日起きた出来事が原因だった。

・・・

リツコの研究室

そこにいつものように遊びに来るミサトと研究室の室長たるリツコがいた。

「あら、レイどうしたの？」

そこにレイが現れた。

それに対しミサトが陽気に呼びかけた。

「今日は実験・・・無いわよね。」

「はい。」

リツコがスケジュール表を確認しながら聞いた。

「赤木博士に」

「私に？」

「はい。」

「どうしたのかしら？」

リツコとレイに関係は以前に増して良好になっていた。

リツコのほうがレイに対して含むところがなくなったのが大きい。

「・・・ばあさんは用済み。」

「・・・何ですって。」

「ばあさんは用済み。」

リツコは怒り心頭だった。

「それと・・・」

と言つてミサトを見るレイ

「無能」

「は？」

「あなた無能。まともに作戦指揮できない。」

「あんなね〜！」

ミサトがレイに駆け寄る。

びびるレイ。

危くミサトの手がレイに伸びようとしたところでリツコがそれを制した。

「止めないで！」

「待つてミサト。」

あくまでも平静を装っているが怒りのオーラが立ち込めている。

「レイ。誰に言えと言われたの？」

「特務一尉です。」

レイは怖々とした声で言った。

「コウスケ君?!」

「はい。」

実を言うとレイの行動はコウスケによるものであった。

この前レイにお兄ちゃんと呼べたのが相当腹が立ったのである。だからと言ってレイを使って報復攻撃なんて、正直大人げない。

レイはただ巻き込まれただけだった。

「そう・・・彼ね・・・」

フフフという不気味な声が部屋を満たしていた。

その光景を見ていたレイは

「怖かった・・・とても怖かった・・・」

とシンジに泣きついていたそうだ。

その時のシンジの目は・・・

ついでに人が嫌がることをしてはいけないと学んだレイであった。

・・・

そんなこんなで三者とも堂々と決着を着けようということになり、出てきた案が対人訓練だった。

ルールは簡単

2チームに分かれた陣取り合戦である。

制限時間をすぎた地点で多くの陣を確保していたほうの勝利である。

当然司令官を撃破で終了。

弾は模擬弾を使う。

チームはコウスケ、加持チームとミサト、リツコチームに分かれた。

加持はただ単に巻き込まれただけだった。

メンバー構成を見るとコウスケチームには整備班と諜報部、ミサトチームには作戦部と技術局となっていた。

「綾波、ほんとにやるのか？」

「当たり前だ！」

「特務一尉、準備完了しました。」

コウスケにそういうのは記念すべき某定食の第一号である榛名ミツヒサだ。

榛名ミツヒサは黒縁の眼鏡をかけており背はコウスケと同じくらいだった。

知的に見えなくもない彼はNERVの整備員をやっておりコウスケの愛機の整備主任だった。

「よし！総員配置につけ。」

コウスケの掛け声とともに男たちが配置につく。

コウスケの作戦は周囲を確保しつつ多方面から一つ一つ制圧していくものだった。訓練は開始された。

先手を打ったのはミサトたちであった。

戦場は大きく二つに分かれており両者を結ぶものは中央に位置するブロックだった。またそのブロックは上下に一本の道しかなく必然的に激戦区となるところであった。コウスケもそこをどうするか頭を悩ませていた。

そこをミサトたちは電撃的に攻略した。

「やるな。出そう前に攻略か。伊達に作戦部長は名乗ってないな。」

既に相手の防衛ラインは構築されており突破は困難だった。

「各部隊に連絡。各ブロックを破棄しラインを下げる。」

「おい、いいのか?」

加持が不安げに問う。

「大丈夫だ。」

...

「うまくいったわね。」

そういうのは指揮官であるミサトである。

「ええ、電撃作戦が思いのほかうまくいったわ。」

「こちらは参謀のリッコである。

「後は待つだけだけど・・・」

「相手はコウスケ君だものね。」

「それに諜報部連中もいるし。」

「油断は禁物ね。」

「報告します。」

「というのは日向である。

彼は作戦部所属なのでミサトチームに振り分けられた。

「相手はブロックを破棄。ラインを一つ下げています。それにつられるように各部隊が突出してます。」

「不味いわ。」

「実戦経験のなさがここで出たわね。」

「各部隊に突出は避けるように伝達して。」

・・・

「今だ！三方から斉射！」

コウスケが号令を飛ばす。

それに伴い銃声が聞こえてきた。

「こういうことか。」

加持が感心するように言う。

「こうなるとは思ってた。実戦経験が無いからな。こちらが引けば興奮して突出するだろうと思ってた。」

「突出してきた敵は恐慌状態にあります。」

ミツヒサが報告する。

「よし。全部隊に突撃命令を出せ。」

「了解。」

「これでうまくいけばいいがな。」

コウスケは不吉なことを言った。

．．．

「早く前線部隊に後退命令を出して！それと中央ブロックは破棄！」

「いいの？」

「どのみち無理よ。なら中央ブロック手前で本隊が足止め、これしかないわ。いくわよ！」

．．．

「中央ブロックは確保しましたが、本隊が現れてそれ以上に侵攻は不可能でした。」

ミツヒサの報告を受けて苦い顔をするコウスケ

「意外と早かったな。」

「さすがは葛城だな。」

「さて、次はどう出るか……」

このままでも勝てるが油断はできない。

なんせ相手にはミサトだけでなくリツコもいるのだ。

「どういふことだ？」

ミツヒサの驚く声にコウスケが反応した。

「どうした。」

「中央を防御していた部隊が後退を始めました。」

「何?」

「……多分赤木だな。」

加持がそう言った。

「偽の指令を送ったんだろう。」

「MAGIが敵に回るか。となると中央はもうとられたな。」

コウスケの言うとおりに中央ブロックはミサトたちの手に落ちた。

「そう来るなら……加持、剣崎はいるか?」

「これで最初の戦局に戻ったわね。」

「よく思いついたわね。ミサト。」

「情報を制す者はってね。」

「現代戦の基本ね。」

「さうてこのままいけば・・・」

ミサトの言葉は銃声で途切れた。

「敵の部隊が突如現れました。」

「何ですって！」

「それと同時に中央ブロックへの攻撃が始まりました。」

「・・・おそらく諜報部ね。」

「でもどうやって・・・」

「ダクトよ。」

「あんな狭いところを？」

「諜報部ならできるでしょ。」

リツコの推測は合っていた。

コウスケは剣崎キョウヤを部隊長とし、諜報部を使いダクトから奇襲をかけた。

劍崎キョウヤとは諜報部諜報一課のエースである。

「ここは大丈夫よね？」

「ええ、このブロックは開けられるところが無いから。」

「なら本隊で出てきた部隊を叩くわ！」

「その必要はない。」

コウスケが現れた。

「大将のお出まし？」

「そういうことだな。」

と言つてコウスケが発砲する。

コウスケは戦場が混戦になっていくすきに大将を狙うことにした。

ついでにミサトの本隊もコウスケの本隊にぶつけており、混戦となっていた。

「テメー金返せ！」

「お前もあの本を返せ！」

などということが聞こえてくるが気にはしていない。

コウスケの狙い通りにミサトの周りに兵がいなかったが、コウスケもミツヒサ以外に
いなかった。

ミサトはとつさに回避し反撃する。

コウスケも物陰に隠れて応戦する。

リツコはすでに倒れていた。

ミツヒサにより行動不能に陥っていた。

そのミツヒサはミサトの流れ弾に不運にも当たってしまった。

互いに発砲するが当たらず、ついには弾切れとなってしまう。

コウスケは躍り出て格闘戦を挑んだ。

防ぐミサト。

「あんたね！言っているいいことと悪いことがあるでしょ！」

ミサトがハイキックを出す。

「お前も同じだ！葛城！・よりによってお兄ちゃんだと！」

コウスケはしゃがみこみ、そのままバク転する。

「何よ！どうせ嬉しかったんでしょ！」

「んなわけあるか！俺は危く社会的生命を失うところだったんだぞ！」

などと口走りつつ殴り合う軍人たち。

正直ただの子供の喧嘩だ。

「お前もシンジ君からお姉ちゃんと呼ばれてみるか！」

パンチを繰り出すコウスケ。

それをいなしてかわすミサト。

「それは・・・いいかも。」

「考えてみる！学校でもNERVでもお姉ちゃんと呼ばれる姿を！」

それを想像するミサト

周囲の冷ややかな視線を感じてしまう。

「・・・嫌だわ。」

「だからこれに勝ったらシンジ君にそういわせる。赤木はばあさんだがな！」

「何ですって！」

リツコは覚醒したが体が思うように動かずにいた。

「なら私が勝ったらレイにずっとお兄ちゃんと呼ばせるわ！」

などとコウスケにびしっと指を差してミサトが言う。

「そうしなさい！ミサト！」

シンジとレイは本人がいなくてどこでもないことになっていた。

ちなみに子供たちはモニターですべてを見ていた。

シンジは汗をかいており、レイはコウスケの目を思い出して震えていた。

ちなみにシンジはレイの頭をなでなでしていた。

子供をあやすように・・・

もう一人はわれ関せずだった。

「あたしにはなんも害が無いじゃない。」

とのことだ。

「やられるわけにはいかない！」

「こつちだつて！」

と互いにパンチを繰り出す。

パンチは互いの顔に当たった。

クロスカウンターというやつだ。

同時に倒れるコウスケとミサト

勝負は決まった。

いつの間にか現れた加持が訓練中の部隊に連絡する。

「訓練は終了だ。互いの指揮官が倒れた。よって引き分けた。」

・・・

結果を見るとさんざんなものだった。

両軍とも80%を超える戦闘不能者を出して、大將が同時に倒れたのだ。

訓練に使われたフロアは死屍累々と言えた。

だが・・・

「コウスケ君で意外とやるわね。」

「葛城も。最後のパンチは効いた。」

なんかもう吹っ切れたのか健闘を称えあう二人

「赤木も悪かった。」

「いいのよ。悪乗りしたこっちが悪いんだし。」

そんな三人を見る加持はやれやれと言いたげだった。

そこにシンジとレイが入ってきた。

「よう、シンジ君にレイ。どう．．．」

コウスケは言葉をつづけられなかった。

なぜなら二人とも鬼のような目つきだったからだ。

それはEVA以上に恐ろしかったとは特殊監査部の言葉だ。

「ミサトさん、リツコさん。綾波を使って何してるんですか。」

声は低くそら恐ろしかった。

「ちよつち出来心で．．．」

「そつそうよ。シンジ君。」

ギンと睨むシンジ

それは初号機が再起動を果たした時と同じ目つきだった。

「ひっ！」

コウスケはひそかにドアの近くに寄っていた。

「特務一尉。」

「うっ……」

コウスケは逃げ出した。

しかし回り込まれてしまった。

こんなところだろう。

レイは無表情だったが、怒りのオーラが漏れていた。

「私を使ってなぜ？」

「そっそれは……その……」

「なぜ？」

「あの……」

「なぜ？」

「……」

「なぜ？」

「……ごめんなさい。」

ちなみにもう一人の子供は普段見れない光景に腹を抱えて笑っていたという。

...

「ここに利を得た人たちがいた。」

「碇。訓練は終わったそうぞ。」

「そうか。」

「意外といい結果が出たな。」

「ああ、これでやりやすくなった。」

「既にご利用アップは終わっている。」

「そうか。」

「綾波特務一尉にはもう一頑張りしてもらうか。」

「副課長には？」

「整備員にいいのがいた。」

「そうか。」

「碇。我々はもう少し長く話せんのか？」

「なんてこと聞いているんだ？冬月さん。」

「作者がこれ以上は無理だと言っている。問題ない。我々のシナリオ通りだ。」

「変なプレッシャーかけるなよ！」

「問題ない。」

そう言ってゲンドウはニヤリと・・・

第20・55話 シン・第一次NERV対人訓練

「対人訓練かね。」

「ここは総司令執務室

提出された草案を確認した冬月は目の前の人物に言った。

「はい。」

「しかしなぜだね?」

「今後のことを考えると、テロなどに対処できるように職員にもある程度戦闘訓練をすべきと考えます。」

そう答えたのはコウスケだった。

横にはミサト、リツコ、加持がいた。

ミサトとリツコは表情が読み取れないが、加持は珍しく少しもの言いたげな顔だった。

「だが、NERVはMAGIによって監視されているだろう。不要だと思うが・・・」
「しかしMAGIとして完璧ではありません。ましてや人のつくりしものならなおさらです。」

そういうコウスケの言葉は妙に棘のある言い方だった。

リツコのこめかみに青筋が浮かぶが、誰も気づかなかった。

「それに作戦部も実戦経験に乏しいですからいざというときに役に立たんでしょ。」

それを聞いたミサトのこめかみにも……

「なので訓練を行いたいと思います。」

「しかし……」

「いいだろう。許可する。」

ゲンドウがいつものポーズで言った。

「碇！」

「実害があるわけでもない。むしろ利があると言えるだろう。」

〈ほんととか？ゲンドウさん〉

「問題ない。」

「ならいいが……」

〈冬月さん。人のセリフとったね？〉

「そんなことはない。」

〈まあ、いいけど。〉

「綾波特務一尉。やりたまえ。」

「はい。」

コウスケは妙に気合が入っていた。

それを加持はため息をつきながら眺めていた。

・
・
・

なぜこんなことになったのか？

それは先日起きた出来事が原因だった。

・
・
・

リツコの研究室

そこにいつものように遊びに来るミサトと研究室の室長たるリツコがいた。

〈ミサトさん……仕事しろよ……〉

「あら、レイどうしたの？」

そこにレイが現れた。

それに対しミサトが陽気に呼びかけた。

「今日は実験……無いわよね。」

「はい。」

リツコがスケジュール表を確認しながら聞いた。

「赤木博士に」

「私に？」

「はい。」

「どうしたのかしら？」

リツコとレイに関係は以前に増して良好になっていた。

リツコのほうがレイに対して含むところがなくなっていたのが大きい。

レイには珍しく戸惑うそぶりを見せたが・・・

「・・・ばあさんは用済み。」

それはリツコの母親に対して言ったことと同じであった。

今のレイにその記憶はない。

「知らないの。多分二人目だから・・・」

〈二人目っていう自覚はあるんだ・・・〉

「・・・何ですって。」

「ばあさんは用済み。」

リツコは怒り心頭だった。

リツコはこれでも30代なのだ。

〈明確に歳を教えろ？〉

〈女性に対して年齢を聞くななんてナンセンスだろ。〉

「でも30代とは言ってるのよね。」

〈しっしまった・・・〉

ともかくリツコはばあさんと呼ばれる歳ではない。

「それと・・・」

と言つてミスアトを見るレイ

「牛」

「は？」

「あなた牛。牛はビールでいい肉を作る。」

「あんたね〜！」

ミスアトがレイに駆け寄る。

びびるレイ。

〈後悔先に立たずの意味を実体験できてよかったね。〉

「よくないわ。」

〈そうだね・・・〉

危くミスアトの手がレイに伸びようとしたところでリツコがそれを制した。

「止めないで！」

「待つてミスアト。」

あくまでも平静を装っているが怒りのオーラが立ち込めている。

「レイ。誰に言えと言われたの?」

優しく諭すように言っていたが、イントネーションが不自然だった。

リツコはレイがいきなりこんなことを言うとは思ってなかった。

もしかしたらあの人の差し金かと思った。

「いやいや、いくらゲンドウさんでもレイにそんな危険なことさせないでしょ。」

「他の人間には無理だからな。」

「・・・もしかしてやらせる気だったのですか?」

「・・・問題ない。」

「・・・」

「特務一尉です。」

レイは怖々とした声で言った。

「コウスケ君?!」

「はい。」

実を言うとレイの行動はコウスケによるものであった。

この前レイにお兄ちゃんと呼ばせたのが相当腹が立ったのである。

だからと言ってレイを使って報復攻撃なんて、正直大人げない。

しかもレイならおそらく実行するだろうし、必ず二人が一緒の時に実行するように言つてあつた。

そうすればリツコが止めるだろうとまで計算していた。

レイはただ巻き込まれただけだつた。

へコウスケ、大人げねえな．．．

「そう．．．彼ね．．．」

フフフという不気味な声が部屋を満たしていた。

その光景を見ていたレイは

「怖かつた．．．とても怖かつた．．．」

とシンジに泣きついていたそうだ。

その時のシンジの目は．．．

ついでに人が嫌がることをしてはいけないと学んだレイであつた。

．．．

そんなこんなで三者とも堂々と決着を着けようということになり、出てきた案が対人訓練だつた。

ルールは簡単

2チームに分かれた陣取り合戦である。

制限時間をすぎた地点で多くの陣を確保していたほうの勝利である。

当然司令官を撃破で終了。

弾は模擬弾を使う。

チームはコウスケ、加持チームとミサト、リツコチームに分かれた。

加持はただ単に巻き込まれただけだった。

へどこまで人を巻き込んだコウスケさん……

メンバー構成を見るとコウスケチームには整備班と諜報部、ミサトチームには作戦部と技術局となっていた。

「綾波、ほんとにやるのか？」

加持がコウスケに問う。

止めようぜと言いたげなのは……

当然だろう。

「当たり前だ！」

「特務一尉、準備完了しました。」

コウスケにそういうのは記念すべき某定食の第一号である榛名ミツヒサだ。

榛名ミツヒサは黒縁の眼鏡をかけており背はコウスケと同じくらいだった。

知的に見えなくもない彼はNERVの整備員をやっておりコウスケの愛機の整備主

任だった。

「よし！総員配置につけ。」

コウスケの掛け声とともに男たちが配置につく。

コウスケの作戦は周囲を確保しつつ多方面から一つ一つ制圧していくものだった。

そしてミサトとリツコの撃破

これが最終目標であった。

へてか、それをしたいただけなんでしょ．．．

訓練は開始された。

先手を打ったのはミサトたちであった。

戦場は大きく二つに分かれており両者を結ぶものは中央に位置するブロックだった。

またそのブロックは上下に一本の道しかなく必然的に激戦区となるところであった。

コウスケもそこをどうするか頭を悩ませていた。

そこをミサトたちは電撃的に攻略した。

「やるな。出そろう前に攻略か。伊達に作戦部長は名乗ってないな。」

既に相手の防衛ラインは構築されており突破は困難だった。

コウスケも同じことを考えたが、うまく防衛できるか心配だった。

そのため一步出遅れることになる。

「各部隊に連絡。各ブロックを破棄しラインを下げる。」

「おい、いいのか？」

加持が不安げに問う。

「大丈夫だ。」

・
・

「うまくいったわね。」

そういうのは指揮官であるミサトである。

「ええ、電撃作戦が思いのほかうまくいったわ。」

「こちらは参謀のリッコである。」

「後は待つただけけど・・・」

ミサトとリッコはコウスケの撃破を考えていない。

それをするには戦力が互角であるからだ。

なら、拠点の数で勝負を決める

それが二人の戦略だった。

「相手はコウスケ君だものね。」

「それに諜報部連中もいるし。」

「油断は禁物ね。」

「報告します。」

というのは日向である。

彼は作戦部所属なのでミサトチームに振り分けられた。

「相手はブロックを破棄。ラインを一つ下げています。それにつられるように各部隊が突出してます。」

「不味いわ。どう考えても罨ね。」

「実戦経験のなさがここで出たわね。」

訓練はするが実戦経験が無いNERV職員である。

勝っていると思いつい込み、各部隊が独自の判断で突出したのであった。

「各部隊に突出は避けるように伝達して。」

・・・

「今だ！三方から斉射！」

コウスケが号令を飛ばす。

それに伴い銃声が聞こえてきた。

「(こう)いう(こと)か。」

加持が感心するように言う。

「(こう)なる(と)は(思)つ(た)。実戦経験が無いからな。こちらが引けば興奮して突出するだ

ろうと思った。」

「突出してきた敵は恐慌状態にあります。」

ミツヒサが報告する。

「よし。全部隊に突撃命令を出せ。」

「了解。」

「これでうまくいけばいいがな。」

・・・

「早く前線部隊に後退命令を出して！それと中央ブロックは破棄！」

「いいの？」

中央を破棄すれば奪還は困難である。

リツコはそれを指摘するのだが

「乱戦になるわ。なら中央ブロック手前で本隊が敵を足止め、これしかないわ。いくわ

よー！」

・・・

「中央ブロックは確保しましたが、本隊が現れてそれ以上に侵攻は不可能でした。」

ミツヒサの報告を受けて苦い顔をするコウスケ

「意外と早かったな。」

「さすがは葛城だな。」

「さて、次はどう出るか……」

このままでも勝てるが油断はできない。

なにせ相手にはミサトだけでなくリツコもいるのだ。

「どういふことだ?」

ミツヒサの驚く声にコウスケが反応した。

「どうした。」

「中央を防衛していた部隊が後退を始めました。」

「何?」

「……多分赤木だな。」

加持がそう言った。

「偽の指令を送ったんだろう。」

部隊に即時に連絡できるように端末が配られていた。

その端末はMAGIを介しているのだ。

「MAGIが敵に回るか。となると中央はもう取られたな。」

コウスケの言うとおりに中央ブロックはミサトたちの手に落ちた。

「そう来るなら……加持、剣崎はいるか?」

「これで最初の戦局に戻ったわね。」

「よく思いついたわね。ミサト。」

「情報を制す者はってね。」

「現代戦の基本ね。」

「さうてこのままいけば・・・」

ミサトの言葉は銃声で途切れた。

「敵の部隊が突如現れました。」

「何ですって！」

「それと同時に中央ブロックへの攻撃が始まりました。」

「・・・おそらく諜報部ね。」

「でもどうやって・・・」

「ダクトよ。」

「あんな狭いところを？」

「諜報部ならできるでしょ。」

リツコの推測は合っていた。

コウスケは剣崎キョウヤを部隊長とし、諜報部を使いダクトから奇襲をかけた。

劍崎キョウヤとは諜報部諜報一課のエースである。

〈諜報部の使い方間違ってるな・・・〉

「まったくだ。」

〈すみません。〉

「ここは大丈夫よね？」

「ええ、このブロックは開けられるところが無いから。」

「なら本隊で出てきた部隊を叩くわ！」

「その必要はない。」

コウスケが現れた。

〈でもなんで腕を組みながら？〉

「演出の問題だ。」

〈あく、台本チェックお願い。〉

「大将のお出まし？」

「そういうことだな。」

と言つてコウスケが発砲する。

コウスケは戦場が乱戦になっているすきに大将を狙うことにした。

ミサトの本隊にはコウスケの本隊をぶつけており、乱戦となっていた。

「へでも、酔っぱらい同士の喧嘩と似たような光景ってどういうことなんだ？」

「テメー金返せ！」

「お前もあの本を返せ！」

「ちゃんと働け！穀つぶし！」

「そつちもストーカーまがいなことしてんじゃねえ！」

「変なことが聞こえるけど無視だな。」

コウスケの狙い通りにミサトの周りに兵がいなかったが、コウスケもミツヒサ以外にいなかった。

ミサトはとつさに回避し反撃する。

コウスケも物陰に隠れて応戦する。

リツコはすでに倒れていた。

ミツヒサにより行動不能に陥っていた。

そのミツヒサはコウスケの流れ弾に不運にも当たってしまった。

「近代戦の死因の一つにフレンドリーファイアがあげられるからな。ガクツ・・・」

「冷静だねミツヒサさん。」

互いに発砲するが当たらず、ついには弾切れとなってしまう。

なぜかミツヒサに当たることが多かった。

〈戦場のど真ん中で寝てればね．．．〉

コウスケは躍り出て格闘戦を挑んだ。

防ぐミサト。

「あんたね！言つていいことと悪いことがあるでしょ！」

ミサトがハイキックを出す。

「お前も同じだ！葛城！よりによつてお兄ちゃんだと！」

コウスケはしゃがみこみ、そのままバク転する。

「何よ！どうせ嬉しかったんでしょ！」

ミサトが踏み込みストレートを放つ。

「んなわけあるか！俺は危く社会的生命を失うところだったんだぞ！」

とつさにミツヒサでガード。

「ひでぶっ！」

と言ひ吹き飛ぶミツヒサ。

なんかいろいろ口走りつつ殴り合う軍人たち。

正直ただの子供の喧嘩だ。

〈なんでこうなつたのかな？〉

「坊やだからさ．．．ガクッ。」

〈ミツヒサさん・・・〉

「お前もシンジ君からお姉ちゃんと呼ばれてみるか！」

パンチを繰り出すコウスケ。

それをいなしてかわすミサト。

「それは・・・いいかも。」

〈ミサトさん・・・やつぱり・・・〉

「考えてみる！学校でもNERVでもお姉ちゃんと呼ばれる姿を！」

それを想像するミサト

周囲の冷ややかな視線を感じてしまう。

「・・・嫌だわ。」

「だからこれに勝ったらシンジ君にそういわせる。赤木はばあさんだかな！」

「何ですって！」

リツコはばあさんという単語に反応して覚醒したが、体が思うように動かせずいた。

〈・・・なんでミサトはお姉さんで、リツコはばあさんなんだ？同じ年だろコウスケ・・・〉

「なら私が勝ったらレイにずっとお兄ちゃんと呼ばせるわ！」

などとコウスケにびしっと指を差してミサトが言う。

〈レイからお兄ちゃんと呼ばれるのか・・・〉

〈読者の皆様はどう思われます?〉

〈・・・とりあえず重火器の使用は不可で・・・軽火器もダメですよ?〉

「そうしなさい!ミサト!」

シンジとレイは本人がいないところでもんでもないことになっていた。

ちなみに子供たちはモニターですべてを見ていた。

訓練を見学することで何かの参考になればとのことだったが・・・

シンジとレイはこれから自分に身に降りかかる災厄を想像し震えあがっていた。

ちなみにシンジはレイの頭をなでなでしていた。

「よしよし。大丈夫だよ。」

「くうくん。」

〈そりや犬だろ。〉

「問題ないわ。」

〈・・・いいのか?シンジ君は?〉

「綾波にこんなことさせるなんて・・・(いつもの)綾波を返せ!」

〈しよっ初号機?!〉

〈・・・すまなかつたな。シンジ。〉

「あら、生きて行こうと思えばどこだって天国になるわよ。だって生きているんですもの。幸せになるチャンスはどこにでもあるわ。」

「そうですねユイさん……だから歯はしまつて。口開けないで!」

もう一人はわれ関せずだった。

「あたしにはなんも害が無いじゃない。」

とのことだ。

「ならアスカにも……」

「余計なことすんじゃないわよ!」

「うお! 式号機も怒ってる! ATフィールドチョップ止めて!」

「やられるわけにはいかない!」

「こつちだつて!」

と互いにパンチを繰り出す。

パンチは互いの顔に当たった。

クロスカウンターというやつだ。

同時に倒れるコウスケとミサト

勝負は決まった。

いつの間にか現れた加持が訓練中の部隊に連絡する。

「訓練は終了だ。互いの指揮官が倒れた。よって引き分けだ。」

・
・
・

結果を見るとさんざんなものだった。

両軍とも80%を超える戦闘不能者を出して、大将が同時に倒れたのだ。

無傷なものは加持だけであつた。

ここまで被害が拡大した原因は最後の戦闘でいたずらに乱戦に持ち込んだためである。

訓練に使われたフロアは死屍累々と言えた。

だが・・・

「コウスケ君で意外とやるわね。」

「葛城も。最後のパンチは効いた。」

なんかもう吹っ切れたのか健闘を称えあう二人

〈ミサトさん案外鳥頭？〉

「悪く思わないでね！」

〈その銃はしまつて・・・顎に押し付けしないで！俺は戦自じゃない！〉

「赤木も悪かつた。」

「いいのよ。悪乗りしたこつちが悪いんだし。」

そんな三人を見る加持はやれやれと言いたげだった。

〈最初からそうすりやいいのに・・・〉

〈なに？それができれば人は苦勞しない？〉

〈人類補完計画・・・必要かな？〉

「約束の時が来た。」

〈まだ来てないし、この作品でまだ出てないでしょ。〉

「よい。すべてこれでよい。」

〈満足して帰られたからいいのか？〉

〈ん？手紙？〉

〈なになに？〉

「もう少し出番を増やせ。」

人類補完委員会

〈・・・ノーコメント・・・〉

そこにシンジとレイが入ってきた。

後ろにはアスカの姿も見えた。

「よう、シンジ君にレイ。どう・・・」

コウスケは言葉をつづけられなかった。

なぜなら二人とも鬼のように見えたからだ。

それはEVA以上に恐ろしかった

とは後に見つかった特殊監査部の記述にあった。

その人はすでにいなくなっていた。

彼曰く

「三十六計逃げるに如かず。」

だそうだ。

〈そう言つて訓練中もうまく逃れたんですね・・・〉

「ミサトさん、リツコさん。綾波を使って何してるんですか。」

声は低くそら恐ろしかった。

「ちよつち出来心で・・・」

「そつそうよ。シンジ君。」

ギンと睨むシンジ

それは初号機が再起動を果たした時と同じ目つきだった。

「「ひっ！」」

コウスケはひそかにドアの近くに寄っていた。ひっそりと・・・

「特務一尉。」

冷やかな声がコウスケを止めた。

「うっ……」

ドタドタ！

コウスケは逃げ出した。

しかし回り込まれてしまった。

こんなところだろう。

レイは無表情だったが、怒りのオーラが漏れていた。

〈コウスケ：レベル4、レイ：レベル∞みたいな感じですかね。〉

「私を使ってなぜ？」

あんな危険なことをさせたの？ああなるとわかっていたんでしょ？

目がそう言っていた。

〈というよりレイはそうなることを予想しなかったのか？〉

「命令だから。」

〈そうですか……それにしても楽しそうに見えたのは……〉

「どうしてそういうこと言うの？」

〈すみません……アンチATフィールドは止めて！来るな！融ける！〉

「そっそれは……その……」

「なぜ？」

「あの・・・」

「なぜ？」

「・・・」

「なぜ？」

「・・・ごめんなさい。」

いかなる言い訳を許さないレイの「なぜ？」攻撃。

コウスケは脂汗をかきながら土下座で言った。

ちなみにもう一人の子供は普段見れない光景に腹を抱えて笑っていたという。

〈アスカってこんなキャラだっけ？〉

「あんたのせいだよ！」

〈だって本編のアスカってツンツンしすぎなんだもん。それに俺って・・・〉

「あたしの下僕じゃないのは知ってるわよ。」

・・・

「ここに利を得た人たちがいた。

「碇。訓練は終わったそうぞ。」

「そうか。」

「意外といい結果が出たな。」

「ああ、これでやりやすくなった。」

「既にリストアップは終わっている。」

「そうか。」

「綾波特務一尉にはもう一頑張りしてもらおうか。」

「副課長には？」

「整備員にいいのがいた。」

「そうか。」

すると冬月がものすごい生真面目な顔で

「碇。我々はもう少し長く話せんのか？」

「へなんてこと聞いてるんだ？冬月さん。」

「作者がこれ以上は無理だと言っている。問題ない。我々のシナリオ通りだ。」

「変なプレッシャーかけるなよ！」

「へついでに要らぬことを言うなよ！」

「問題ない。」

そう言つてゲンドウはニヤリと・・・

ちよつとしたおまけで技術局と整備班、作戦局と諜報部の間に以前には見られなかつ

た協力体制が敷かれたという。

「・・・俺の出番は？」

〈多分あります、キョウヤさん・・・〉

〈あとそこ！〉

〈ベートーベンの第九を何万回歌ってもダメだよ。〉

「君は悪意に値するね。・・・つまり嫌いつてことさ。」

〈いやいや、ストーリー的に無理でしょ。〉

『俺の出番増やせよ！』

〈・・・いくら俺でもペンギン語はわからないよ。〉

「当時、私は根府川に住んでおりましたが・・・」

〈出番ありますか？根府川先生・・・根府川って本名なのか？〉

〈あと、本の角と銃はしまつてね。その少女たち・・・〉

第26. 5話 変わる私

胸にできた傷

これを見るたびにセカンドインパクトを思い出す

あの時、父が助けてくれた

母と自分を捨て、夢に生きた父

恨んでいたけど南極と一緒に言われたときは嬉しかった。

南極に行っても父は実験ばかりだった

でも、父の近くに居られることが嬉しかった

そしてセカンドインパクト

何があつたのかわからない

目を覚ました時、目の前に酷いけがをしている父がいた

残されたのは自分と父がくれた十字架の口ザリオ

それが父の最後の思い出になった

ある時、セカンドインパクトが使徒と呼ばれる生命体の仕業だと聞いた。

使徒

人類の敵

父の仇

だから私のがむしやらに進んだ

使徒をこの手で討ちたかつた

でも私だとEVAに乗れない

だから作戦指揮だけでもと思った

・
・
・

でも昨日コウスケ君から聞いた話

嘘じゃないことはわかる

でも納得できない

使徒を仇としてみていた自分が否定されるようで

・
・
・

「なんだ？葛城？」

「コウスケ君。ここは大丈夫かしら？」

今、コウスケ君の執務室にいる

何故かはわからない

「ちよつと待つてろ。・・ミツヒサか？俺の執務室に人を通さないでくれ。・・ああ、頼

む。」

彼は作戦局零課の課長

権限は私の方が上

でも、実際の権限は彼の方が上だろう

「それでなんだ？葛城。」

「私のこと知ってるわよね。」

「まあな。」

葛城ミサト

年齢：29

性別：女

NERV作戦本部本部長兼作戦局一課課長

セカンドインパクトの生還者

葛城博士の一人娘

加持リョウジの元恋人

「・・・ああ、元はいらなかったか。」

「それどういう意味？」

「俺が知らないと思ってるのか？」

昨日、加持君に24時間体制で見張っていると行ってたっけ
「ああ、安心しろ。中まで覗くような真似はしてないから。」

・・・知られてる

コウスケ君のにやけ顔がむかつくわね

「そのことを聞きに来たわけじゃないだろ?」

「ええ・・・」

話していいのかしら

「大方、使徒が仇じゃないってわかってどうすればいいのか解らないんだろ。」

「どうして・・・」

なんでわかったの?

「セカンドインパクトの生還者で葛城調査隊の唯一の生存者。それが今ではNERVの
作戦本部長・・・この人物の目的は使徒を殲滅することしか考えられんだろ。」

「・・・そうよ。」

それが私の使命だと思ってた

でも使徒が仇じゃないってわかって怖くなった

見当違いな復讐をしていたのだから

しかもセカンドインパクトの原因は誰でもない私の父だった

「言っておくが、お前さんの父親のせいでもない。」

「何言ってるのよ。誰がどう見ても父のせいじゃない！」

父は夢に生きる人だった

それくらいのことを起こしても不思議じゃない

「客観的に見ればな。」

「どう見たって変わらないじゃない！」

「いや、主観的に見れば変わるさ。」

「主観的って・・・もう父はいないのよ。」

「それを知る人物がいたとしたら？」

そんな人・・・いるわけない

葛城調査隊は私以外みんな死んでしまったのだから。

「それがいるんだよな。しかもかなり偉い人だ。」

「そんなの嘘よ。」

「ここに葛城調査隊のメンバーが記されている。」

そんなもの今更・・・

「ここをちゃんと読め・・・お前の悪い癖だ。」

コウスケ君が指で示してる

ろくぶんぎげんどう？

「六分儀ゲンドウって・・・」

「碇司令だよ。六分儀は旧姓だ。」

碇司令が葛城調査隊に？

「でもどうやって・・・」

「前日に離れたのさ。研究データと一緒にな。」

研究データと一緒に？

じゃあ、あれは碇司令が仕組んだことなの？

「勘違いするな。碇司令のせいじゃない。」

「そんなの聞いたらそうとしか考えられないじゃない。」

碇ゲンドウ

こいつが・・・

コウスケ君がため息ついてる

「今から話すことはSSS級の情報だ。碇司令と副司令、そして俺しか知らない。」

SSS級？

そんなこと私に必要？

「葛城だから知らなきゃいけない事だ。」

私だから？

「・・・碓司令が前日に離れたのは葛城博士の意向だそうだ。」

父の？

どういふこと

「あの実験は強行されたんだ。二人は失敗すると何度も抗議したらしいがダメだったらしい。」

二人って、父と碓司令？

「それで研究データだけでも何とか持ち帰ることにした。ほんとなら葛城博士に持って行って貰いたかったそうさ。だが、断られた。」

なんで？

「ユイさんがいるのにもう離れる気か？ そう言われたらしい。」

ユイってシンジ君のお母さん？

「なら君も娘がいるだろうと反論したんだが、ミサトは俺を恨んでるからなと言っていたそうさ。」

お父さん……

「本当なら実験に成功して、そしたら家族で静かに暮らしたかった……でもそれもできそうにない。」

お父さん……

「だからミサトのことをよろしく頼むと言われたとき。」

「でもあたしは……」

あの時、南極にいた

「碓司令は何とかして葛城を連れていきたかったそうだが、監視の目が厳しくてダメだったそうだ。」

……

「そして前日になってしまった。葛城はもう連れ出せない。なら研究データ・葛城博士の意志だけでもと泣く泣く離れたそうだ。だから元気な葛城の姿をNERVで見たとき安心したと言ってたよ。」

碓司令が……

「でも、同時に怖かったそうだ。葛城の父を結果的にとはいえ見殺しにしたからな。」

「……碓司令と父はどういう関係だったのかしら。」

「それは碓司令に聞いてみるんだな。俺が話したと言ったら納得してくれるだろ。」

「わかったわ。ありがとうコウスケ君。」

「それと加持だが・・・俺に殺させないようにちゃんと手綱を握っていてくれよ。」

加持君か・・・

確かに危ないわね

「それにしてもあなたはいったい何者なの？」

作戦本部副部长、作戦局二課課長でありながら零課課長・・・

なんだかとてもない人物に見える

「俺が誰かって？決まってるだろ。」

コウスケ君はなんて答えるのだろうか？

・・・もしかしたら航空隊隊長？

「綾波レイの保護者だよ。」

・・・

総司令執務室

暗い部屋

私はあまり好きじゃない

副司令はいないのね

「何の用だ？葛城三佐。」

いつもの高圧的な態度

でも、ここで引くわけにはいかない

「セカンドインパクトのことを聞きました。」

「・・・そうか。綾波特務一尉だな？」

「はい。」

碓司令はサンングラスで表情がよくわからない

「・・・私が憎いか？」

「どういう意味でしょう。」

「結果的にとはいえ君の父を見殺しにしたのだ。」

あの碓司令が後悔してる？

サンングラスで解らないけど、いつもの高圧的な態度が出てない

「・・・一つよろしいでしょうか。父とはどういう関係だったのですか？」

「・・・良き友人であり、数少ない親友であった。」

つたわる

碓司令の苦い思いが

「そうですか。」

「だから君を見たとき安心した。あの時の君はひどくて見ていられなかったからな。」

あの時って・・・

「失語症にかかった時に一度見かけたのだ。・・・私は親友の頼みを果たせなかった。」

あの時の私はよく覚えていない

でも・・・

「碓司令・・・それだけで十分です。」

碓司令は父のことを後悔している

それだけで十分だと思う

「そうか・・・葛城君、シンジのことをよろしく頼む。」

驚いた

碓司令がシンジ君のことを頼むなんて

「なら、碓司令が・・・」

「それはできん。」

「何故ですか?!」

親と一緒に暮らせないなんて

そのつらさはよくわかる

「ダメなのだ。・・・私は何者だ?」

「・・・NERVの総司令・・・」

そう言うことなのね

「その通りだ。総司令とパイロットが血縁関係にある。．．これはシンジにとって良くないだろう。それにシンジが狙われる口実にもなる。」

碓司令なりにシンジ君を思ってるのね

「だが、一緒に食事した時はうれしかった。それとレイのことも受け入れてくれる。」

レイ？

そう言えばコウスケ君が話してくれたっけ

レイの秘密について

「私は恨まれても仕方ないことをしでかしたのだ。だが、レイは許してくれた。．．今、私がいるのは．．シンジに会えたのは碓司令のおかげだと．．．」

!!

泣いてる

碓司令が?!

「そしてシンジも．．私のことがわかってよかったと．．．」

「碓司令．．．」

「綾波特務一尉には感謝している。」

コウスケ君？

一体どういうこと？

「綾波特務一尉から一つの手紙をもらったのだ。・私の妻からの・・・」

なんでそんなものをコウスケ君が持ってたの？

「ユイが何を望んでいたのか・それを思い出させてくれた。それにレイのこともある。」

レイ？

人とは違うということを受け入れたこと？

「・・・レイには代わりの体があった。それを綾波特務一尉は壊したのだ。」

コウスケ君

そんなことをしていたのね

だからレイのことを話した時つらそうにしていたのね

「それでようやく私は踏ん切りがついた。」

「・・・碇司令の望みは何でしょうか？」

「子供たちの未来を創る。」

碇司令から強い意志が感じられる

コウスケ君が言っていたことは嘘じゃないのね。

「葛城君・・・協力してくれるか？」

私はどうなのだろう

「・・・わかりました。」

「そうか・・・ありがとう。」

・・・

使徒

今までは仇とばかりに思ってた
でも間違っていた

私はどうすればよいのだろう

協力すると言ったしまった

どうすればいいの？

・・・

使徒を放置することはできない

仇じゃないってわかったけど

人類には有害であることに違いはない

それと戦うのは私じゃなくシンジ君たち

結局つらい思いをさせるしかない

・・・

でも、使徒がいなくなったら

シンジ君たちには普通の生活に戻ってほしい

・・・

そうね

それが私ができることなのね

そのためには

シンジ君たちに無事に帰ってきてもらわないとダメだわ

そしてそのように作戦を立てるのが私のやるべきこと

いつまでもこんなじゃダメだわ

「よし、行くわよ。」

未来のために

今、戦う

身近な人たちのために

戦う

第27・5話 処分の行方

「レイ、今日はやけに早いな。」

いつもなら寝ているはずのレイが早く起きていた。

パジャマではなく白いワンピースを着ていた。

レイはコウスケに気づき何かを隠した。

「どうした？レイ。」

「・・・何でもありません。」

と言うレイの顔には明らかに何かありますと書いてあった。

だが、コウスケはそれに気づかぬフリをした。

「そうか・・・どこかに出かけるのか？」

「はい。」

レイの声ははつきりとしていた。

何か楽しみにしているような感じだった。

「気を付けて行って来いよ。」

「・・・行ってきます。」

と言ってレイは荷物を持って家を出ていった。

「・・・行つたか。」

コウスケはレイが家を出たのを確認し、携帯電話を取り出した。

「葛城か？シンジ君は？・・・そうか家を出たか。」

コウスケはニヤリとする。

「じゃあ、予定通りに。」

コウスケは電話を切る。

「・・・フッフ、甘いな、レイ。」

コウスケのニヤニヤは止まらない。

「俺が気づかないとでも思ったのか？」

今日は日曜日

NERVでのテストもない。

コウスケがそのように手を回した。

そして数日前からそわそわしていたレイ。

ミサトから同じく数日前からシンジの様子が変だという報告。

リツコからレイがそわそわし始めた日に何か約束をしていたという報告。

極めつけは服装についてレイから相談を受けたという伊吹の報告。

「これだけ状況証拠は集まっているんだ。．．フッフ」

双眼鏡は準備できている。

デジタルカメラも

どちらもNERVの最新技術で作られたものだ。

零課の職員たちも配置についている。

MAGIからの援護もある。

上司からは許可どころか、結果報告をするように言われている。

怖いものはない。

「0830時．．．作戦開始。」

コウスケは厳かに告げるのであった。

．．．

「甘いな、レイ。そんなことで撒けるとでも思ったのか？」

コウスケは双眼鏡を手にし、車の中から様子を窺っていた。

コウスケが見る先には公園でボーッと待っているレイがいた。

ちなみにコウスケが座っているのは運転席である。

「ねえ、コウスケ君。本当にシンジ君が来るの？」

横にいるミサトは眠そうにあくびしていた。

なぜミサトがここにいるのか？

それはこの作戦に参加すれば手当がもらえると、というコウスケに、そそのかされたのである。

「来る。絶対に来る。」

「どうしてそういう風に言い切れるの？ レイは友達と遊びに行くだけかもしれないじゃない。」

ミサトの言うことももつともであつた。

初期に比べだいたい社交的になつたレイである。

友達と遊びに行つてもおかしくない。

「お前には解らないのか？ レイのあの嬉しそうな顔を。」

と言うがレイの顔は普段の無表情と変わらなかつた。

社交的になつても無表情に見えるのは変わりがなかつた。

「・・・わからないわ。」

「ふう、よく見ろよ。レイの口元が2mm微笑んでいる。それに目尻もいつもより3mm下がっている。あれは何かをかなり楽しみにしている顔だ。」

ちなみに目尻が2mmだとそれなりに楽しみにしているとコウスケは補足した。

「あんた、よく見てるわね。」

ミサトはものすごく呆れていた。

「それくらいできなくて何が保護者だ・・・おい、来たぞ。」

「ほんとだ。」

レイのもとにシンジが駆け寄っていた。

シンジは白地のポロシャツにすこし薄い青色をしたズボンをはいていた。

・・・

「綾波、ごめん。待った?」

シンジはすまなそうにレイに言った。

「・・・いえ。」

と言うレイはとても嬉しそうだった。

「ごめん。ミサトさんがついてくると思って少し遠回りしてたんだ。」

さらりとひどいことを言うシンジ

レイはそのことを聞いて何かを考え始めた。

「どうしたの?綾波。」

「特務一尉が気になって・・・」

「コウスケさん?」

「・・・こういうの好きそうだから。」

「確かにそうかも。」

と言ってシンジはあたりを見回す。

「いないみたいだよ。」

「特務一尉も気づかなかったのかしら・・・」

「そうなんじゃない?」

「・・・よかった。」

朝の様子からおそらく気付いていない。

レイはそう思いほつとする。

前回の使徒戦の処分とはいえ、何をしていたかを知られたらどんなからかいを受ける

かわかったものじゃない。

・・・きつと一週間は言われ続ける

そんな風にレイは考えていた。

「それじゃ、綾波。・・・行こうか。」

レイは首を縦に振った。

・・・

「甘いぞ、二人とも。俺がそう簡単に見つかるようなことをするか。」

シンジが辺りを見回したのを見てコウスケが言う。

コウスケは私服姿でさらにサングラスまでかけていた。
「それ、自慢するところ?」

とミサトが突っ込むが、コウスケには聞こえなかったようだ。

「しかし、シンジ・・・そこは手を握ってだな・・・」

などとコウスケは感想を漏らした。

既に写真は撮ってあった。

この写真はある人物に届けられるのだ。

「そうね。そこは男の子からリードしてあげないとね。」

ミサトも呆れたように言った。

ミサトはなぜかいつものNERVスタイルである。

「しかし、安心しきっているようだな。あの二人。」

「みたいね。」

「さて、どこに行くのかな?」

・・・

第三新東京市は遷都予定とあつてか、年々人口も増加していたのだが、使徒の襲来もあつて最近徐徐に減っていた。

それでも地方の町に比べればだいぶ発達している方だ。

いや、大都市にも負けないくらい発達しているだろう。

そんな街中をシンジとレイは駅前へと足を向けるのであった。

そしてそれをつける車が一台

・・・

「ほう、映画館か・・・無難だな。」

コウスケは二人を見ながら言う。

「確か・・・恋愛ものじゃなかったかしら。」

ミサトが少し考えながら言った。

「シンジ君はそのこと知ってるのか？」

「多分知らないはずよ。」

「だな、知ってたら入ろうとしないだろう。」

と言つてコウスケは一つ疑問が浮かんだ。

「・・・何で葛城がそんなこと知ってるんだ？」

「そ、それは・・・ちよつちね・・・」

「・・・加持だな。」

ミサトがギクツツという顔になった。

「凶星か・・・いいんじゃないか？」

コウスケは今、二人に集中しているので、ミサトがどこで何しようがどうでもよかったです。

「ただ、仕事は自分の力でしろよ。」

「あはは……」

……

映画の内容はすれ違う二人が様々な困難をクリアしていき最後には結ばれるという内容だった。

王道と言えば王道だが、映画館など初めてである二人は食い入るように見ていた。シンジが今まで育ってきた環境を考えれば、当然である。

親戚とはいえ厄介に思われていた。

勉強部屋と称して庭に簡素な部屋を作りシンジを家に入れなくらいである。

そんな保護者がシンジを映画館などに連れていくなどあり得ない話なのだ。

レイはずっとNERVで過ごしてきた。

計画のために存在しただけあってゲンドウとリツコが連れていくなどない。

まあ、あの二人が映画館に行くということ自体想像できないが……

モニターに映る二人がすれ違うさまを見てレイが何かを考える。

「……あの時、苦しかった。」

「あの時?」

「・・・碓君が私を避けていた時。」

と言うレイを見てシンジが暗い顔になる。

「あの時はごめん。」

「いいの。」

といいレイは思い出しながら

「最初は解らなかつた。なぜ碓君が避けるようになったのか。」

悲しそうな顔になるレイ

「特務一尉から私のことが碓君に知られたと言われたとき解つた。」

「綾波・・・」

「元々ここにいるはずのない存在・・・それが私だった。なら計画を遂行して消えてしまえ

ばいい。」

・・・

「そうか・・・あの時のレイの言葉はそんな意味があつたのか。」

コウスケはイヤホンから流れる会話を聞きながら言う。

NERVの最新技術を駆使して作られた盗聴器である。

どんな雑音もばつちりと聞き取れるのであつた。

製作者は金髪の女性である。

・・かなりノリノリで作ったことは誰も知らない。

「どういふこと？」

ミサトが説明を求めてきた。

「レイのことは話したろ？・・計画のためにあつたと。シンジ君にレイのことが知られたと言つたときなんて言つたかわかるか？」

ミサトは少し悩みながらも言う。

「もう死にたい？」

「無に帰りたいと言つたんだ。・・俺はその時計画なんて知らなかつたからな、そう言う意味だと俺も思つていた。だが、レイは何となくわかつていたんだらうな。計画が遂行されれば自分が消えるということに。」

コウスケは苦い顔になる。

「もう、シンジ君は自分を見てくれない。・・人じゃないと知られたから。だつたら碓司令の計画を遂行して消えてしまえばいい。・・そうすれば自分も消えて苦しまなくなつていいから。そういうことだらう。」

「・・・とんでもない話ね。」

「それだけ罪深いことをしてきたんだ。」

コウスケは煙草を取り出す。

「特務一尉に殺されると思った時、計画よりも碓君が見れないことが怖かった。」

レイはシンジの顔を見る。

「でも、今はこうして見ていられる。・碓君と特務一尉が居てくれたおかげ。」

「僕はあの時どうすればいいか解らなかつたんだ。綾波が人じゃないなんて言われて。・・たくさんの「綾波」を見て。」

シンジはレイを見つめながら言う。

「でも、コウスケさんに今のレイ自身を見ろと言われて連れてこられたんだ。・外で全部聞いてたよ。綾波が悩むのを聞いて・僕を呼んでくれるのを聞いて情けなく思ったよ。」

シンジの顔は自然と落ちていた。

「自分と何が違うのか？綾波がそんな風に生まれたかつたのか？・・いろんなことを考えたよ。そして銃声が聞こえて、綾波が消えちゃう、なんで綾波だけこんな目につて考えたら・・。」

レイは目が潤んでいた。

「コウスケさんが居なかつたら僕はどうなつてたんだろ・・。」

「解らない。でも、そんなこと考えたくない。」

「そうだね。綾波、これからは僕が横に居られるように頑張るから。」

「碓君……」

モニターには手を握って見つめあう二人が映し出されていた。

……顔の距離は近づいていた。

……

「コウスケ君？殺されるってどういうこと？」

「ああ、俺がレイに向けて実弾を撃った。」

コウスケは煙草を吸いながらあっけらかんと言う。

「あんた、そんなことしたの?！」

ミサトは信じられないという顔だった。

「それでもしないとレイの感情を出せないと思っただよ。当たらないように銃は逸らしたけど……死は生命にとって一番避けたいことだからな。」

「失敗していたらどうするつもりだったのよ。」

「正直お手上げだったさ。」

コウスケは手をひらひらと上げた。

そんなコウスケにミサトは内心あきれていた。

「あんたって・・・考えなしだったの？」

「それだけ焦っていたんだ。あの手も正直言うとうりたくなかった。成功率が低かったからな。」

コウスケは吸い終わった煙草を携帯灰皿に捨てる。

既に何本か役目を終えて眠っている。

「それより、二人が出てきたぞ。」

コウスケは双眼鏡を向けた。

「お、レイが喜んでる。」

コウスケがミサトに双眼鏡を貸すが・・・

「・・・わからないわ。顔が赤いのはわかるけど・・・」

「よく見ろよ。顔の角度が3度下がってる。目もぼんやりしてる。嬉しくて恥ずかし

いことがあったんだな。」

コウスケはニヤリと笑う。

「あんた、よくわかるわね。」

「それができなくて何が保護者だよ。」

・・・

「これ、綾波が作ったの？」

シンジは目の前に広げられた弁当を見て言う。

シンジとレイは第三新東京市を一望できる公園にいた。

木の下にレジヤースートを敷いている。

端つこにUNのロゴが入っているが・・・

レイは恥ずかしそうにうなづく。

「ほんとによくできたね。こんなにくまくなるなんて思わなかったよ。」

と言ってシンジは何かを思い出していた。

「最初は大変だったな・・・」

包丁をプログレッツシブナイフのように持ったレイや、焦げた食材の前で立ち尽くすレイをシンジは思い出していた。

ちなみにある程度料理ができるようになったレイはその両手鍋いっぱいに入った味噌汁をシンジに渡していた。

それはでめでたく葛城家の食卓に並ぶことになるが、綾波家には無かった。

残念ながらレイの意図がちゃんと伝わらなかったのだ。

シンジはアスカに両手鍋の味噌汁でからかわれることになる。

「碓君・・・それは言わないで。」

レイが拗ねるように言う。

「ごめん。じゃあ、食べよう。」

黙々と食べ始める二人。

・・・

「やっぱり弁当だったか。」

コウスケは朝の光景を思い出しながら言う。

片手にはおにぎりがある。

「あれ、おいしそうね。」

ミサトはパンをかじっていた。

どちらもコンビニで買ったものだった。

「俺のやつを勝手に持ち出したな？」

コウスケはレジャーシートを見ながら言う。

国連軍にいたとき売店で見つけたものなのだ。

一度も使う機会はなかったが・・・

「ねえ、なんでレイは料理をしようと思ったのかしら。」

ミサトからしてみれば不思議なのだろう。

なにせ初期のレイを知っているからだ。

「簡単なことだよ。初日目に俺が料理したらそれに感動したらしくな、自分も作りたい

と言いだめたのき。」

「シンジ君のために？」

「いや、もつとおいしいものを食べたいという欲求だよ。」

今までどんな食生活だったのかしらとはミサトは言わなかった。

何となく想像できたんだろう。

「コウスケ君って料理できるの？」

「普通にできるくらいだ。シンジ君に比べれば大したことない。・お前よりは遥かにできるがな。」

それを聞いてミサトは怒る。

「あたしだって・・・。」

「言つたろ？あれは兵器だ。わかつたな？」

「そこまで言わなくてもいいじゃない。」

ミサトはいじけてしまう。

「シンジ君に習ってみたらどうだ？・レイでもいいと思うぞ。」

「・・・本気で考えようかしら。」

ミサトは真剣に考えているようだった。

「そーいや、レイが作った味噌汁はどうだった？」

「レイが作った？」

と言つてミストは考え込む。

「・・ああ、あの見慣れない両手鍋はレイだったのね。」

「レイがあるとある目的があつて作ったものだ。」

コウスケは新しいおにぎりを取り出した。

「ある目的つて・・・え！あたしそんなもの食べちゃつたの？」

「レイには言うなよ。知らないはずだからな。」

・・・

「碓君。」

レイは食べている途中でシンジに呼びかける。

「何？綾波。」

「どうして私に料理を教えてくれたの？」

これはレイの疑問だった。

シンジから突然料理を教えてあげると言われたのだ。

レイが即決で領いたのは言うまでもない。

「へ？聞いてないの？」

「？」

「コウスケさんに頼まれたんだよ。綾波に料理を覚えてくれって。」

「特務一尉が？」

「うん。」

「・・・そう」

レイは寂しく思う。

シンジはコウスケに頼まれたただけだったということに

「でも、僕は嬉しかったな。」

「なぜ？」

と聞かれたシンジは赤くなりながら

「綾波と同じ時間を過ごせるんだなって思って・・・」

と言うのであった。

「私も・・・嬉しかった。」

レイも赤くなりながら言う。

・・・

「やるね。」

コウスケは口笛を吹いた。

「シンジ君って普段は恥ずかしがってできないのに、こういう時に限って決めてくるの

よね。」

「ほんとに加持とは違うタイプだな。」

「なんでそこで加持が出てくるのよ。」

加持の名が出てきて動揺を隠せないミサト

「別に他意はないぞ。比較対象が欲しかっただけだ。」

そこに連絡が入った。

「どうした？」

『ターゲットの近くに柄の悪い男三人が近づいてきてます。』

ミツヒサからだった。

「うまく誘導できそうか？」

『やってみますが・・・』

「ダメなら排除しろ。」

『了解。』

「コウスケ君・・・排除って」

ミサトが恐る恐る言う。

「別に殺すわけじゃない。」

「そこまでしなくてもいいじゃない。もしかしたらシンジ君が・・・」

「ダメだ。」

「なんで？そっちの方がかつこいいじゃない。」

ミサトが言おうとしていることはコウスケにもわかる。

「シンジ君に勝てると思うか？」

「・・・今じゃ無理ね。」

「だろ？」

未来のシンジならまだしも今のシンジは戦闘訓練を受けているとはいえ強いとは言えなかった。

「しかし、コウスケ君も大変ね。」

「レイにとってもシンジ君にとってもこれは初めてだろう。いらぬ邪魔は極力排除すべきだ。」

「素直に心配って言ったらどうなの？」

「そうとも言うな。」

・・・

昼食が終わったシンジとレイはのほほんとしているところに

「ぐわー」

「ぎゃー」

「お、お助けー」

なんていう悲鳴が聞こえてきた。

その悲鳴を聞いてレイがビクリとするが、何やら優しい感じに包まれた。

レイが横を見るとシンジの顔が間近にあった。

シンジは悲鳴を聞いてとっさにレイを抱き寄せたようだ。

すこし警戒するようにあたりを見回すシンジ

そんなシンジにレイは見入っていた。

「大丈夫みたいだね。．．ん？綾波、どうしたの？顔が赤いよ。」

「．．．．．何でもない。」

「ならいいけど．．．って、ごめん。」

シンジは慌ててレイを離れた。

「．．別にいい。」

レイは少し残念そうだった。

シンジの方はレイの感触が頭から離れなかった。

．．．

「とっさにあんな動きができるようになったのか。」

「シンジ君、ほんとにレイのことを思っているのね。」

ミサトは慈しむように二人を見ていた。

「あちら、シンジ君離しちまった。」

「シンジ君らしいわ。」

「レイの方も残念そうだな。」

「・・・わかるの?」

何度見てもレイは無表情にしか見えない。

「顔が拗ねたようになってるだろ? 頬が2mm膨らんでる。」

とコウスケは解説する。

「・・・あんた、すごいわ。」

「これくらい・・・」

「出来なくて何が保護者だ・・・でしょ?」

「その通り。」

ミサトは感心する。

「どうやったらレイの感情を知ることができるの?」

「レイはな、感情が表に出ることが無い。ほんとにわずかな動きしかないんだ。・・・かなり強い感情の時は過大に出るけどな。」

「そりゃ、解るわよ。」

「だがな、その分レイは雰囲気と言うかオーラとでもいうのかな?・・そういうのでわかりやすいんだ。」

「そうなの?」

ミサトは半信半疑だった。

「人は普通、相手の表情で相手の状態を判断する。つまりは見た目だな。」

「そうね。」

「レイはパツとした見た目では解らない。だからなのか佇まいというか、雰囲気、声色でわかるんだ。人一倍にな。」

「へえ。」

と感心しながらミサトは何かを思い出した。

「そういえば、レイって時々あたしを見てるのよね。・・何でかすごい重い空気になるんだけど。・・。」

「・・解らないのか?」

コウスケは疑わしくミサトを見る。

「コウスケ君はわかるの?」

「レイがうらやましがってるんだ。」

「私に?」

「正確には葛城とアスカにだ。」

「なんで？」

「解らないのか？」

ミサトは何がなんやら解らない様子だった。

「・・・シンジ君だよ。お前たちは一緒に住んでるだろう？」

「ああ、なるほど。」

「頼むからシンジ君に手を出すなよ。・・・レイが怖いぞ。」

コウスケの脳内にはなぜかサーチライトに照らされる零号機が映し出されていた。

零号機はNERVのピラミッドの上において足で踏んずけている。

NERV職員が説得を試みるもすべてが無駄に終わる。

そして半壊する発令所・・・

そんな想像がコウスケの脳内によぎった。

(そうになったら・・・シンジにしか止められんな。)

コウスケは自分の想像にぞつとしていた。

・・・

公園を後にしたシンジとレイは再び駅前へと移動していた。

ふと見かけたアクセサリー店に入っていた。

「ここ、来たことある。」

レイは店内を見回しながら言った。

「へく、綾波もこういうところ来るんだ。」

「その時、特務一尉も一緒だった。」

「コウスケさん？」

レイはこくりと頷いた。

「帰ろうとしたら、少し付き合ってくれて。」

「・・・なんでだろう？」

「解らないわ。」

レイは少し考えながら

「でも、あの時怖い顔してた。」

「怖い顔？」

「辺りを警戒していたわ。」

「・・・きつと綾波が危なかったんだね。」

レイはきよんとしていた。

「コウスケさんが意味もなくそんなことするとは思えないもん。」

「・・・そうだったの。」

するとシンジは難しい顔になった。

「綾波を守ってるのっていつもコウスケさんなんだな。・なんか悔しいな。」

「・そんなことない。碓君は私を守ってくれてる。」

「そうかな・・・」

「そう。・ヤシマ作戦の時も、使徒が空から落ちてきたときも・碓君が守ってくれた。」

そしてレイは俯きながら

「それに・碓君といるとポカポカする。」

「へ？」

「特務一尉といるときもポカポカするけど、碓君のとは違う。」

それを聞いたシンジは赤くなりながら

「・僕も綾波といると一番ポカポカするよ。」

・・・

「ねえ、どういう意味？」

ミサトが二人の会話を聞いてコウスケに聞く。

「解らないのか？」

「解らないから聞いてるんじゃない。レイの専門家に。」

「なんか嫌な専門家だな。・ポカポカと言うのは好きと言う言葉が転化された言葉だろ

う。」

(レイ語とでも名付けれるか?)

それを聞いたミサトは少し考えた後

「でも、コウスケ君といるときもポカポカするって言ってるじゃない?」

「それは人として好きだということだろう。現にシンジ君とは違うと言ってるだろう?」

コウスケは続ける。

「シンジ君の場合は異性として好き、俺の場合は人として好き・シンジ君の方が上なんだよ。」

「じゃあ、なんで同じ言葉なのかしら?」

当然の疑問だろう。

人として好きと異性として好きは次元が違うのだ。

「単にレイがまだ区別できてないだけだろう・言葉ではな。」

「ふくん。さすがレイの専門家。」

「そ・・・」

「それができなくて何が保護者だよ・・・でしょ?」

「解ってきたじゃないか。それにしてもシンジ君には伝わったようだな。」

「そうみたいね。」

・・・

「ここにコウスケさんと来たってことは何か買ってもらったの？」
とシンジがレイに聞いた。

「・・・」

「どうしたの？」

「言えない。」

レイは何を買ってもらったのかを言えないと言っているのだ。

「もしかしてあれ？いつも鞆につけてるやつ。」

レイは驚いているようだった。

「キーホルダーだよ？何の形なのかはわからないけど。」

「どうして知ってるの？」

「綾波が鞆から本を取り出ししてる時に見えたんだよ。：前は付けてなかったのに、突然付けてくるからさ。」

レイはそんなシンジの言葉に嬉しく感じるのであった。

シンジはそんな細かいところまで自分のことを見てくれている。

それだけでレイは嬉しかった。

つまりポカポカするということだ。

「今もつけてるの?」

レイはこくりと頷きながら

「初めて人から買ってもらったものだから、それに……」

レイは赤くなりながら最後の方はごにごによと喋った。

シンジは最後の方が聞き取れなかった。

「へ?なに?」

レイは真つ赤になり何も言えなくなる。

そしてレイはキーホルダーを見せることにした。

「これって……錨?」

レイがこくりと頷く。

「なんで錨……あつ」

と言つてシンジも赤くなる。

……

「大事に持つてるんだな。」

コウスケが嬉しそうに言う。

「なんであれを買つてあげたの?」

「レイがあれを見ながら何かを思っているようだったからな。」

ミサトは不思議そうな顔になる。

「何を考えていたのかしら。」

「葛城にもわかるさ。」

ミサトは考える。

「う〜ん・・・錨・・・船じゃないわね・・・海でもないだろうし・・・いかり・・・碇・・・ああ、なるほどね。」

「解りやすいだろ。」

そこに通信が入る。

『綾波特務一尉。』

今度はシンゴからだった。

『俺たちはいつまでこれを監視しなければならんだ？・・甘すぎて気持ち悪い・・・』
『そうですよ。』

ミツヒサも乗ってきた。

「もう少し我慢しろ。・・それに癒されるだろ？あの二人に。」

『俺は殺意を抑えきれないぞ・・・』

シンゴの声は僅かに震えていた。

『僕も同感ですよ。』

ミツヒサはなかなか強い口調だった。

「みつともないぞお前ら！中学生相手に何嫉妬してんだ！」

『中学生だろうが、高校生だろうが羨ましいものは羨ましいんだよ。』

『そうですよ。これには大人も子供も関係ないですよ。』

コウスケはため息をついた。

「NERV内で探せよ！いくらでもいるだろ！」

『そうしたいがな、誰かさんがレイ、レイとうるさいからそんな暇ねえよ。』

『そうですね。何かあればレイさんですもんね。』

『・・・もしかして綾波特務一尉・・・あなたの方が羨ましいんじゃないのか？』

「そ、そんなわけあるか！」

と言うコウスケは明らかに動揺している。

『最近やたらとレイさんをからかってますしね。』

『それも決まってシンジがらみだからな。』

『やっぱり・・・』

『『羨ましいんだな（ですね）。』』

はもる二人。

実を言うと凶星だった。

コウスケは二人の仲を温かく見守りながら、自分にもいたなら・・なんて考えたことが一度や二度ではない。

「うるさい！お前ら二人とも減俸するぞ！」

『あ、汚いぞ！』

『そうですよ！』

「ならこれ以上触れるな！」

『ちっ解ったよ。』

『了解・・・』

コウスケの何とも大人げない収め方だった。

「コウスケ君・・あなた・・」

ミサトが憐みを込めてコウスケを見ていた。

「・・葛城、お前も減俸・・」

「ごみん！それだけは許して！」

・・・

その後シンジとレイは特に問題が起こることなく、平穩に過ごすことになる。

だが、二人は大変幸せそうに見えた。

そして夕暮れとともに二人は帰宅する。

「今日はこれまでだな。」

コウスケは二人の姿を確認しながら言った。

「1730時を持って本作戰を終了する。皆ご苦労だった。」

『やっと終わったか・・当分甘いものはいらぬな。』

『僕も遠慮したいです。』

などと言いつつシンゴとミツヒサは通信を切った。

「葛城もご苦労だった。」

「いいわよ。久々にいいものも見れたし。それより・・」

「解ってるよ。手当は明日にでも振り込んでくよ。」

「やった。ありがとねん。」

こうしてコウスケの作戦は終了した。

・・・

自宅に帰宅したコウスケは自室にあるPCの前にいた。

上司に今日のことを報告するためだ。

「・・・よし、終わった！後は送るだけだ。」

報告書は完了した。

写真の添付も終了した。

エンターキーを押せばすべて終了である。

「・・・何が終わったのですか？」

その問いかけにコウスケは上機嫌で答えた。

「ああ、今日のレイの・・・」

と言いかけてコウスケは止まる。

今、家にいるのはコウスケともう一人の同居人しかない。

つまりコウスケに声をかけられるのはその同居人だけなのだ。

コウスケは汗をかいていた。

「私の・・・何ですか？」

コウスケは顔を声が聞こえるほうに向けた。

ギギギと動いたのは気のせいではないだろう。

コウスケが見たもの

それは静かに怒るレイがいた。

「レイの・・・」

なぜレイがここにいるんだ？

それはレイが夕食の支度が出来たことを知らせに来たからだ。

中から返事が無かったので部屋に入ってきた。

そういうことだった。

コウスケは報告書に気を取られ過ぎてそれに気づかなかった。

「レイの・・・監督日誌だよ。」

苦し紛れにそう答えた。

ちなみにチルドレンの監督日誌はすでに廃止されている。

「それは廃止されたと聞いてますが？」

「誰がそんなことを・・・」

「碇司令です。」

(くっ 碇司令、余計なことを・・・不味い・・・非常に不味い。)

レイに嘘であることがばれている。

「それで、私の何ですか？」

レイの冷ややかな声がコウスケを襲う。

「あゝ・・・その・・・だな・・・」

レイが無言で見つめてくる。

じつと・・・

じつと・・・

じくじくと・・・

・・・逃げられそうにない。

結局、レイに一日中つけていたことがばれてしまったコウスケ
報告書は間一髪で送ったが、レイの機嫌は収まってくれなかった。

レイから受けた処分

それは

「レイ・・・頼む・・・肉も出してくれ・・・」

「ダメ。」

「俺が悪かった。」

「嫌。」

「レイ……」

一週間食事が野菜のみになったのであった。

しかもMAGIと零課で監視しており、コウスケがこつそり肉を食べたら食事を抜く十一日延長という徹底ぶりであった。

・・・MAGIと零課はかなり協力的だったそうだ。

泣く泣くコウスケは野菜オンリーの食事に甘んじることになる。

・・・

ちなみにレイはシンジにも話したそうで、葛城家では禁酒令が出たそうだ。

ついでにこの行為は綾波特務一尉の独断として処理された。

NERVのトップはそのように切り抜けたのであった。

その人物が送られてきた写真を眺めながらニヤリと笑ったのは全くの余談である。

第32. 5話 もう一人の綾波さんと・・・

あの使徒は強い

左腕が痛い

『きゃあああ・・・』

『やばい・・・式号機の全神経カット!』

『式号機のエントリープラグを緊急射出だ!』

アスカがやられた

初号機もまだ動かない

今動けるのは私だけ

でも私だけじゃ勝てない

どうすればいいの？

・・・

あれなら使徒でも

・・・

ジオフロントに射出させた

目の前には使徒がいる

右腕にNN誘導弾を抱えてる

『・・・バカな真似はよせ！レイ！』

特務一尉の声が聞こえる

ごめんなさい

でも、これしかないの

「そんなことしちやダメだ！あやなみ！」

！

碇君？!

でも、これしかないの

使徒のATフィールド硬い

でも、負けられない

ATフィールドが破れた

わたし、みんなをまもれた？

いかりくん・・・

・・・

・・・

・
・
・

まったく、あまり無茶をしてほしくないわ

・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

こころは？

・
・
・

生きてる

体が痛くない

なぜ？

・・・

体が代わったわけでもない

それに私の体はもう代わりがない

・・・

・・・

私が生きているということは使徒を倒せたのね

病室のドアが開いた

特務一尉が入ってくる

「ようやく目が覚めたな。このおバカさんは。」

特務一尉・・・怒ってる

「・・・特務一尉。」

「何故あんな真似をした。」

とても冷たい声

「・・・ああしなれば使徒を倒せないと思ったからです。」

「じゃないと・・・みんなが居なくなる・・・」

それは嫌

みんなが居なくなるなんて嫌

「そうか・・・よくわかったよ・・・このバカ野郎。」

ばか？

何故？

「じゃあ、聞かぬが・・・レイが死んでもみんなが助かれば満足なんだな。」

「・・・はい。」

それでみんなが生きてくれるなら

それでもいい

「・・・死んだらこんな風に話すこともできない・・・食事することもない。

・・・それで満足なんだな。」

！

私がいなくなったら・・・

話すことも食べることもできない

触れ合うこともできない

・・・

「でもそれって・・・周りに誰もいないと同じじゃないか・・・」

みんながいない？

いや

そんなのいや!

「それに残された人たちはどうすればいいんだよ。

死んだことをずっと忘れなくて生きろって言うのか?」

!!

私が死んだらみんな悲しむ

碓君も・・・

特務一尉はそれをよく知っている

碓君に特務一尉と同じつらさを・・・

「もう一度聞けど。それで満足なのか?」

「・・・嫌です。」

いや

そんな世界いらない

「わかったな・・・もうあんなことするなよ。このバカ野郎。」

確かにバカかもしれない

?

特務一尉?

・
・
特務一尉の手

大きくて暖かい・・・

碓君とは違う

「ほんとに・・・無事でよかった・・・」

「・・・ごめんなさい。」

「いいよ。だが、本当にあんな真似するなよ。じゃないと俺は許さんからな。」

「はい。」

なんて言えばいいのかしら

・・・

お兄ちゃん？

でも特務一尉は嫌がる

・・・

お父さん？

私に父はいない

・・・

「どうした？」

「・・・私に父が居たらこんな感じなのかと思いました。」

何となくそう感じる

・・・

碓君はどうしたのかしら？

「・・・碓君は？」

特務一尉が困ってる

碓君に何かあったの？

「碓君はどうしました。」

「シンジ君は・・・EVAに取り込まれた。」

「碓君が？」

「シンクロ率400%を超えた・・・その結果、EVAに取り込まれることになった。」

あの時、私は使徒を倒せなかった

そして碓君が・・・

「そんな・・・」

「今、碓司令がサルベージの陣頭指揮を執っている。」

「碓司令が？」

「必ずシンジを取り戻す・・・てな。」

碓司令・・・

「そうですか・・・」

「なんだ？泣いたりしないのか？」

あの時のことを言ってるのね

でも

「碓司令やみんなが頑張ってる・・・私も泣いたりできない。それに・・・碓君は必ず戻ってきてくれる。」

そう信じてる

「そうだな。」

特務一尉はわかってきている

「今は休んどけ。シンジ君が帰ってきてきて心配されるのも嫌だろ？」

「はい。」

「じゃあ、俺は行くな。」

必ず戻ってきてくれる

私、待ってる

・・・

私は退院した

検査でも異常はなかった

「あんなことはもうやめてね。」

赤木博士が優しく言ってきた

「ごめんなさい。」

「いいわよ。それにコウスケ君に昨日叱られたでしょ?」

「はい。」

そうだった

「ここは監視されているんだった

「・・・特務一尉は?」

「今、ジオフロントに出てるわ。」

「解りました。」

「零号機もまだ動けないからゆっくりと休んでちょうだい。」

・・・

ジオフロントに出てみた

いろんなものが壊れてた

・・・

私があんなことしたから

特務一尉、ごめんなさい

夜、家でそう言ったら

「別にいいよ。壊れたものは直せばいいし、それで喜ぶ人もいるからな。」

特務一尉は少し呆れたように言っていた
ジオフロントが壊れて喜ぶ人がいるの？

私には解らない

「だが、人は直せないからな。」

そう

私にはもう代わりがない

最後の綾波レイ

でもこう言ったら碓君に怒られた

特務一尉と同居する前のこと

特務一尉が碓君を連れて帰ろうとした

怖かった

碓君がいなくなる

それが怖かった

特務一尉は気付いてくれた

あの時、私の代わりが居なくなつたと聞いたけど本当か知りたかつた

「碓君・・・特務一尉が壊したつて本当？」

「うん。コウスケさんが全部・・・」

碓君、とても悲しそうに言つてた

「そう・・・私は最後の綾波レイなのね。」

「そんなこと言うなよ！」

「でも・・・」

「でもじゃないよ！ここに綾波はいるんでしょ?!最後のとかそんなんじゃないかと、ちやんと綾波はいるじゃないか！」

嬉しかった

私を人として見てくれている

「だからそんなこと・・・そんな悲しいこと言うなよ・・・」

碓君は泣いていた

また悲しませてしまった

「・・・ごめんさい。」

「いいよ。だけでもうそんなこと言わないでね。」

その時の碓君の笑顔は覚えてる
とても優しかった・・・

その時、特務一尉が言っていた言葉を思い出した
気になったから碓君に聞いてみた

「・・・碓君、変なことって何？」

「へ？」

「特務一尉が言ってた。・・・変なことはするなって。」

「えくと・・・」

碓君、何故赤くなってたの？

分からない

「変なことって何？」

「そ、それはね・・・変なことなんだよ。」

「具体的にどういうこと？」

「えくと・・・」

「教えて。」

でも、碓君は教えてくれなかった

変なことって何？

今もわからない

特務一尉も碇君も教えてくれない

この事も家で聞いたら特務一尉はこう答えた。

「この問題は非常に繊細で扱いにくい問題なんだ。だから葛城や赤木、伊吹二尉などに聞いてはダメだ。特に葛城はダメだ。」

「赤木博士もダメなんですか?」

「・・・ダメだ。」

「ならアスカに・・・」

「ダメだ!」

「洞木さん・・・」

「ダメだ!」

「・・・」

「あとシンジ君にも聞いちゃダメだぞ。」

「もう聞きました。」

「何!レイ!なにもされなかったか?!」

「この時の特務一尉はとても怖い顔をしてた

「はい。」

「本当に何もされなかつたんだな?!」

「はい。」

「いや、口止めされてる可能性があるな……レイはシンジの言うことを優先させるからな……」

確かに碓君が言うことは守ろうとしてる

でも何を口止めするのだろうか

分からない

この後特務一尉は一人でぶつぶつ何かを言っていた

特務一尉の唇から読めたものは

シンジ、イカリシレイ、アカギ、オヤコ、テガハヤイ、カイシヨウナシ、ワカゲノイ

タリ、セキニン

いったいどういうことなの?

碓君や碓司令、赤木博士、親子?

何の関係があるの?

てがはやい?

かいしようなし?

わかげのいたり?

どういう意味かしら？

責任っていったい何の責任かしら

・
・
・

碓君と二人で過ごした夜の後、特務一尉と同居することになった

その時、碓司令や碓君、特務一尉が私を人として扱ってくれているのを知った

赤木博士も前みたいなきな感じがない

「もう一人の綾波さん」

特務一尉が前に私のことをそう呼んだ

もう一人の綾波さん

・
・
・

私は綾波レイ

もう一人の綾波

それでいいんだと思う

でも、あの時から私を呼ぶ声が聞こえなくなった

無に帰りたいと思う気持ちも無くなった

何故かしら？

・
・
・

ジオフロントを見た後、加持一尉と出会った
なんだかとても悲しそうだった

「レイちゃんか・・・」

「どうしました？」

「いや・・・俺のスイカ畑が全滅してね・・・」

私のせい・・・

ごめんなさい

スイカさん

ごめんなさい

・・・

家に帰ってきた特務一尉はいつも疲れているようだった

私には見せないようにしているけどわかってしまう

だから特務一尉が好きな紅茶をいれた

特務一尉は紅茶が好き

ティーカップ用の食器棚がある

執務室にもあるみたい

私も飲んだことあるけどとても暖かかった

前に特務一尉・・・あの時は二尉だった・・・が言っていたことがわかる気がする
缶の紅茶はどこか味気ない・・・

私も入れてみようとしたら特務一尉がいろいろ教えてくれた

カップとティーポットは温めておく

・・・そう言われたから電子レンジで温めようとしたら怒られた

お湯は95℃くらいのもを使う

・・・温度計を使うとしたら肌で感じろと言われた

水は硬水じゃなくて新鮮な軟水を使う

・・・以前、赤木博士にガラス電極法で水の硬度がわかると聞いたので試そうとした

ら怒られた

お湯を注ぐときは高い位置から注ぐ

・・・少しずつ入れてたら意味がないと言われた

紅茶をカップに注ぐときは味の濃さが均等なるように注ぐ

・・・ポットの中をかき混ぜたら怒られた

・・・

紅茶のことになると特務一尉はとて怖くなる・・・

でもそのおかげで、紅茶なら碓君よりもうまく入れられる

それが嬉しい

？

特務一尉が変な顔をしている

「どうしました？」

私、失敗したのかしら

「いや、今日玉露ティーを飲んでな．．．」

玉露？

緑茶の一種で日本では高級なもの

それと紅茶？

解らない

「どうでした？」

「まったくもってポカポカしなかった。」

ポカポカしない．．．

いったいどういうものなのだろう？

そういえば葛城三佐が作るカレーはすごいらしい

特務一尉も碓君もそして赤木博士も認めてる

でも、

「綾波！お願いだから絶対食べちゃダメだよ！」

と碓君に言われた

「あれは使徒でも倒せるものよ。」

と赤木博士が言ってた

使徒を倒せるほど美味しいのかしら？

特務一尉も

「人には知らなくていい世界があるんだ・・・好奇心は猫を殺す、後悔先に立たず・・・

この言葉がよくあてはまる代物だ。」

と言ってた

そう言われると食べたくなるのが人なのかしら・・・

葛城三佐のカレー

いずれ食べてみたい

「しかしレイが作るものはうまいな。」

そうかしら

碓君が作るものに比べればそうでもない

「ほんとにいいセンスだ。」

そう言ってくれるのは嬉しい

・ ・ ・
特務一尉の顔が変わった

「碓君のお嫁さんに出すのがもつたないくらいだ。」

どうしてそういうこと言うの？

「ふむ・ ・ ・結婚を認めさせる条件で俺を倒すことを入れるか。 ・ ・ ・そう言えばあの件の

ことをちゃんと問いただせねば・ ・ ・」

いじわる

でも、あの件って何のこと？

・ ・ ・

私は家に帰ると本をよく読んでいる

前は碓司令や赤木博士に言われてただ読んでいた

今は内容を理解したいと思っている

まだ私には解らないことがいっぱいあるから

よく特務一尉に聞いている

時々特務一尉は困っているけど・ ・ ・

今も読んでいる

伊吹二尉におすすめの本を教えてもらった

恋愛小説というものらしい

読んでいるととても暖かくなる

・・・

ベランダから声が聞こえる

今は特務一尉しかない

・・・

歌？

特務一尉が歌ってる

この前教えてもらった歌とは違う

とても静かだけど暖かい

・・・

特務一尉が歌い終わった

「回りくどい歌だ・・・最初からそう言えばいいのに。」

何故か特務一尉が言いたいことがわかったような気がする

「なんだ、聞いてたのか。一言声をかけてくれればいいのに。」

「・・・歌」

「この歌か？」

「はい・・・」

この歌を碇君に聞いてもらいたい

・・・

「私にも教えてください。」

「別にいいが、なんでだ？」

よくわからないけど碇君に・・・

「なら、ちゃんと練習しないと。まあ、難しい歌じゃないからすぐに覚えられるだろう。」

また一つ歌を教わった

碇君

戻ってきたら聞いてほしい

E X 綾波の災難

「あゝ．．．こりやダメだな．．．」

そう呟きながら N E R V の通路を歩くのは N E R V 作戦本部副部長である コウスケだ。

いつもはさつきと歩いていくのに今日はどことなくふらついていた。

「風邪だな、こりや．．．」

今日の彼は朝、起きたときから妙な気怠さを感じていた。

レイを見送りいつも通りに N E R V に登庁したが、やはり体の気怠さには勝てなかった。

軍人であるためコンディションを常に維持するように努めているが、それでも完璧とはいかない。

「赤木に何かもらうか．．．」

この時のコウスケはそれが最善だと思っていた。

いつ使徒が来るのかわからない状況でこんなコンディションなどコウスケにとって是最悪であった。

一刻も早く回復する必要がある。

そう思いコウスケはふらつく足に鞭を入れながらリツコの研究室に向かった。

・・・

「あら、コウスケ君。どうしたの?」

リツコが椅子を回しながらコウスケを見た。

「すまん・・・どうも風邪をひいたらしくてな・・・」

「珍しいわね。」

「俺でもそう思うよ。」

「作者の悪戯かしら?」

「あるいは何か目的があるんだろ。」

私は事実無根である。

ただやりたかっただけとか、面白そうだからとか、リツコはマッドサイエンティストとかそんなことは考えていない。

「あなたね・・・まあ、いいわ。そこに茶色い瓶があるでしょ? 疲労回復剤よ。持って行くきなさい。」

「すまん、恩に着るよ。」

「別に構わないわ。」

リツコは慌ててPCに向かう。

そんなリツコを横目に先ほど指さされた場所にコウスケは向かった。

棚に透明の瓶が並んでいたが、一つだけ茶色い瓶があった。

「それじゃ、もらつていくな。」

コウスケは瓶を持って研究室を後にした。

この時コウスケとリツコは気付かなかった。

コウスケが手にした瓶の後ろにもう一つ茶色い瓶があり、疲労回復剤と書かれていた

のを……

ここまで書いておきながらベタだなんて思ってしまう私であった。

……

「ダメだ……しんどい……」

コウスケはリツコの研究室でもらった瓶を一気に飲み干した。

かなり苦い味がした。

「むく……良薬は口に苦し……まさにこのことだな……」

瓶を近くにあったゴミ箱に入れるとコウスケは再び歩き出した。

(今日は早退させてもらうか……)

そう思うとコウスケは自分の執務室に向かう。

荷物を持って家に帰るためだ。

曲がり角に差し掛かった時、誰かとぶつかった。

普段なら人の気配を感じて相手を通るのをやり過ぎすのだが、風邪で察知できなかつたようだ。

さらにうまくバランスを取れなかつたようでコウスケはそのまま後頭部を通路にぶつけてしまった。

意識が遠のいていく

．．．

(．．．ん?)

コウスケの意識は回復した。

(この匂いは．．．病院か?)

鼻から感じるアルコールと精密機械から発する電子のにおいからコウスケはそう判断した。

(ふう．．軍人が体調不良で倒れるなんて．．．)

とはいっても人である以上そんなこともあるだろうとコウスケは考えるのであった。

どうやらリツコからもらった薬は思ったより効いたみたいで、朝の気怠さが嘘のようになくなっていった。

目を開けると病院特有の白い天井が見えた。

「やれやれ……」

とつぶやくと近くに人の気配を感じた。

（これは……）

その方に顔を向けると空色をした髪と紅い瞳が飛び込んできた。

コウスケの被保護者である綾波レイだ。

「大丈夫？」

レイが心配そうにのぞき込んでくる。

（レイに心配かけるなんて……ダメだな。）

「もう大丈夫だよ。レイ。」

そんな自分の声に違和感を感じた。

普段に比べてだいぶ声が高いように聞こえた。

（どうやら本調子ではないようだな。）

ふとレイの方を見ると何故か赤くなっていた。

「どうしたんだ？」

「……また呼んでほしい。」

「何を？」

「・・・名前・・・」

コウスケはおかしく思った。

普段コウスケはレイと名前で呼んでいるのだ。

それが今更名前で呼んで恥ずかしがるなんて

それも自分の恋人に言われたなんて顔をされても困る。

「どうしたんだ？レイ。」

するとレイはさらに赤くなりながら顔を背けてしまった。

「碓君が・・・」

などどつぶやいている。

後半はよく聞き取れなかった。

「それにしてもなんで病院にいるんだ？」

誰かが倒れた自分を発見してくれたのだろうか

だとしたらお礼を言わなくてはならない

そうコウスケは考えた。

「覚えてないの？碓君は特務一尉とぶつかって気を失っていたのよ。」

とレイはまだ赤くなっている顔を向けて言った。

（・・・はあ？シンジが俺とぶつかった？）

そう思うと確かに気を失う前に誰かとぶつかった感触があった。

だが、それよりも気になることがある。

「誰が誰にぶつかったんだ？」

「碓君が特務一尉にぶつかったのよ。」

コウスケは違和感を感じる。

普通この場合

特務一尉が碓君にぶつかった

そう表現するのが正しいだろう。

だが、レイがそんな間違いをすとは思えない。

「どうしたの？ 碓君。」

（碓君って・・・俺のことを言ってるのか？）

「誰とぶつかったんだ？」

「特務一尉とよ。・・・碓君、大丈夫？」

（俺が俺とぶつかった？ 何を言ってるんだ？）

自分に自分がぶつかるなんて一生かかってもあり得ないことだ。

だが、レイがそんな嘘を言うとも思えない。

そしてさつきからレイはコウスケのことを碓君と呼んでいる。

ここから示される事実とは・・・
とつきにコウスケは病室に設置されている鏡を見た。
そこに映っているのは・・・

「そんなバカな!!」

中性的な顔立ちに黒い短髪、優しそうな目つき・・・
どう見ても碓シンジであった。

よくよく考えると自分が発する声もシンジのものとかわりがなかった。

コウスケは自分が来ている服を上半身だけ脱いだ。

いつも見えていた体の傷がなかった。

ふと視線を感じる。

レイがじつと見つめていたのだ。

それはもう真つ赤と言うほかなかった。

「・・・はっ!」

コウスケはとつきに体を隠した。

レイは少し残念そうにしていた。

(まてよ・・・)

信じたくないが自分は今、シンジになっている。

と言うことは……

コウスケは急いで服を着なおすと病室を後にした。

「碇君?!」とレイの声が聞こえたがそんなことは気にも止めずに走った。

……

「はあ、はあ、……」

コウスケは完全に息が切れていた。

病室の名札を見ると

綾波コウスケ

と書いてあった。

(そうさ、夢なんだ……夢なんだよな……)

このドアを開ければ夢が覚めるんだ

そう思いコウスケは病室のドアを開けた。

……

目の前には

ベットのの上に上半身を起こしている

自分がいた

夢落ちで終わらせるなんてそうは問屋が卸さないのだ。

・
・
・

「あれ？僕が目の前にいる・・・」

自分の形をした男がそう言っていた。

「夢だよね・・・そうだ、夢なんだ・・・」

「・・・もしかしてシンジ君か？」

「僕が僕に語り掛けている・・・うまい、うますぎる。」

「十万・・・て、危ない危ない・・・取りあえず鏡を見ろ。」

コウスケがそう言うとう男が鏡を見た。

「・・・へ?!コウスケさん?!」

男はひどく間抜け面をしていた。

「・・・一つ確認しよう。君は誰だ？」

「碇シンジです・・・でも、体はコウスケさん・・・」

「俺は綾波コウスケ・・・でも、体がシンジ君・・・」

「入れ替わった?!」

それはなかなかのユニゾンだった。

「なんで僕がコウスケさんに?」

「それは俺が聞きたい。」

と言うとコウスケは一つ思い当たることがあった。

「・・・シンジ君、動けるか?」

「はい、何とか・・・」

「行くぞ。」

・・・

「あら、コウスケ君にシンジ君じゃない。」

二人はリツコの研究室に来ていた。

「もう体は大丈夫なの? コウスケ君。」

とリツコはコウスケの体をしたシンジに向かって言った。

(シンジの体をしたコウスケをコウスケ、コウスケの体をしたシンジをシンジと表記します。)

「それはわからん。どうなんだ?」

「どうと言われても・・・大丈夫ですけど・・・」

「どうしたの二人とも。シンジ君の言い方・コウスケ君みたいね。それにコウスケ君もなんだかシンジ君・・・」

そこまで言つてリツコは考え込んだ。

「・・・あなた、昨日は何をしていたのかしら？」

リツコがシンジに言つた。

「僕ですか？・・・学校に行つてNERVでテストをしていましたけど・・・」

「あなたは？」

今度はコウスケに向けて言つた。

「俺は朝、レイを見送つた後NERVにいたぞ。ただ、体調がよくなかつたから赤木に薬をもらつた。そのの棚にあつた薬だ。」

再びリツコは考え込んだ。

するとリツコはコウスケが差した棚に向かつて行つた。

「あなた、もしかして・・・」

「なんだ？」

「これと間違えたのね。」

リツコは疲労回復剤を取り出し出していた。

「赤木の言うとおりに茶色い瓶を持つて行つたぞ。」

するとリツコは汗をかき始めた。

「・・・とんでもないことになったわ。」

「なんだよ。」

リツコは席に戻り煙草を吸い始めた。

「状況を整理するわね。」

コウスケが持つて行った薬は実験の過程で生まれた失敗作であること

その薬でシンジとコウスケは入れ替わってしまったこと

「こんな所ね。」

「・・・どうするんだよ!」

「そうですよ!リツコさん!」

「どうしましょうか・・・」

さすがのリツコもお手上げのようだ。

「こんな状態で使徒が来たら・・・俺、EVAに乗るのか?」

「僕は戦闘機に乗るんですか?」

「シンジ君はどうかになるわ。でもコウスケ君はそうなるわね。」

「シンクロできるのか?」

最もな疑問である。

シンクロできなければEVAに乗っても意味がない。
もしそんなことになれば大変不利な状況になってしまう。

「・・・とにかくもう一度同じ薬を作ってみるわ。」

「ああ、頼む。」

「僕はどうすればいいでしょうか？」

シンジが困ったように言う。

「シンジ君は療養と言うことで何とかなるわね。」

「正直嫌だが、それがいいな。」

「そうですか。」

「でも、コウスケ君は・・・」

リツコが言い淀む。

「なんだ？俺も同じでいいじゃないか。」

「ダメなのよ。」

「何故だ？」

「・・・碓司令から学業を優先するようになってお達しが来てるのよ。」

「なら碓司令に・・・」

「それもダメ！」

なかなかの剣幕でリツコが叫ぶ。

「こんなことがばれたら私はどうなるの？」

「知らんよ！」

「・・・そう。」

リツコが急に悲しそうな雰囲気醸し出し始めた。

「独房で済めばいいけど・・・」

そんなリツコにさすがのコウスケも強くは言えなかった。

もとはと言えばコウスケがちゃんと確認を取らずに持って行ったのが原因でもある。

大本はそんなものを作ったリツコであるがそこまで考えが回らない。

「・・・わかったよ。シンジ君のフリをすればいいんだな。」

「ごめんなさい・・・一日でも早く薬を作るから・・・」

「とにかく今日は病室で大人しくしてよう。」

・・・

翌日

コウスケはNERVの病院からそのまま学校へと向かう。

シンジが病院に担ぎ込まれたとき学校の制服だったのでその制服を着ることにした。

ちゃんとクリーニングされている。

右手にはシンジの学生鞆をぶら下げている。

「この年になって中学校か・・・」

何とも奇妙だなとコウスケは考える。

コウスケが中学校に登校するのはもう15年ほど前の話である。

「なるようにしかならんか・・・」

ともあれ久しぶりの学生生活である。

それはそれで楽しみでもあった。

・・・

コウスケは2-Aと書かれた札がぶら下がっている教室の前にいた。

何となく緊張するのだ。

コウスケはドアを開け教室に入った。

「せんせー!」

「碓!大丈夫か?」

トウジとケンスケが真っ先に反応した。

「うん、もう大丈夫だよ。」

(確かこんな口調だったよな。)

するとアスカが声をかけてきた。

「シンジ！」

「アスカ。」

「まったくだらしがないんだから。」

その言葉にムツとするが我慢する。

「ごめん。」

「もう少し鍛えたらどうなの？」

「そうだね。」

とそう答えるしかなかった。

「ほら、愛しのレイがお待ちかねよ。」

と言いつつアスカはニヤニヤしていた。

（レイ？・・・ああ！レイのこと忘れてた！）

「碓君・・・」

レイが昨日と同じく心配そうな顔で見てくる。

「れ・・・綾波、昨日はありがとう。」

レイと言いそうなのをこらえてコウスケは言いなおした。

するとレイは不満そうな顔を向けてくる。

頬が3mm膨らんでいた。

「どうしたの？」

「・・・レイ。」

「へ？」

「昨日はレイって呼んでくれた。」

レイの言葉に教室が騒ぎ出す。

「碓君、綾波さんのことを名前で呼んでるの？」

「しかも呼び捨て・・・」

「とうとうそういう関係になったのか・・・」

「遅すぎるだろ。婚約者なのに・・・」

(シンジ・・・すまん。)

コウスケはそういう風に謝ることしかできなかつた。

「な、何言ってるんだよ。綾波。」

レイを綾波と呼ぶことに違和感を感じるが、今はシンジなのだ。

ここではれるわけにはいかない。

「レイ・・・」

レイがものすごく悲しそうに見つめてくる。

「綾波さんかわいそう。」

「碇の奴なんてひどいんだ。」

「紳士の風上にも置けないな。」

だんだんシンジの心証が悪くなっていった。

(どうすればいいんだよ！)

このままではシンジが復帰したときにとんでもないことが起こるだろう。

コウスケは必死に打開策を探した。

「・・・それは二人きりの時だけね。」

何とも歯がゆい思いをした。

何故レイにこんなことを言わなければならぬのか

だが、これしかないと言ったコウスケは思ったのだ。

私も一度くらいは言ってみたいものだ。

「きやく、二人きりですって！」

「碇の奴やるな。」

「くそそう、碇の奴め。」

なんかやつかみも聞こえた。

レイはと言うとコウスケの言葉で真っ赤になっていた。

(うう、レイに悪いことしてる・・・)

もはやコウスケは泣きたくなくなった。
そうしているうちにチャイムが鳴った。

・
・
・

コウスケは黙々と授業をこなしている。

中学校の授業などコウスケにとっては簡単すぎるのだ。

ふとアスカを見るとつまらなそうにしている。

アスカも大学を卒業しているのだ。

そう考えるとアスカの心情も少しは理解ができた。

すると誰かの視線を感じる。

その方向に顔を向けるとレイがこつちを見ていた。

レイはコウスケの視線を感じると不意に顔を背けた。

(・・・シンジ、いつもこんななのか?)

「この問題を・・・礎、やってみろ。」

急に当てられたのでコウスケは少し驚いた。

「は、はい。」

黒板に出て見るとどうやら数学のようだ。

(ふむ、連立方程式か・・・となると・・・)

コウスケは黒板に式をかきながら答えを導き出していく。

(y を移動して x を出す……この式をもう一つの式に当てはめれば……)

コウスケは式を解くのに夢中になっていた。

(よし、 y が出たから……)

「出来ました。」

パンパンとコウスケは手についた粉を払った。

(ん? どうしたんだ?)

教室が妙な雰囲気にもまれていた。

「碓、戻ってよろしい。」

と言われたのでコウスケは席に戻る。

するとチャットに書き込みがあった。

「今のどうやってやったの?」

すかさずコウスケは返す。

「代入法だよ。」

「それってまだ習ってないよね。」

コウスケははっとする。

連立方程式は二つの解き方がある。

コウスケはすでに知っているので無意識のうちに楽な方を選んでいたので。すかさず教科書を確認するとまだ加減法しか習ってなかった。

(まずい・・・)

「先に予習してたんだよ。」

「へえ、そうなんだ。」

なんとか逃れたようだった。

しかしそんなコウスケを見つめる一つの視線があつた。

・・・

次は英語だった。

国連軍にいたコウスケに取って英語など日常会話で使っていたくらいなので何ら問題はない。

「では、ここを・・・礎、読んでみる。」

こういう時に限って当ててくる。

コウスケは少々うんざりしながらも席を立った。

「You, re a member of the family. . . .」

コウスケはただ普通に読んだ。

しつこく言うが、コウスケは国連軍にいたため英語が日常会話であつた。

無論日本にいるときは日本語であるが・・・

ともかくそんなコウスケが普通に英語を読むとどうなるのか。

コウスケは教科書を読み終えて席に座る。

ふと周りがおかしいことに気づいた。

皆が唾然としていた。

あのアス力でさえ唾然としているのだ。

(何か変なことをしたか?)

コウスケは普通に読んだだけだ。

だが、一般の日本の中学生にはそれが普通だろうか？

「碇、よく読んだ。皆も碇を見習うように。」

当然ながら教師から絶賛された。

クラスメイトが唾然としてコウスケを眺める中、一人だけ違う視線を送っている者がいた。

・・・

時間は過ぎていき放課後になった。

シンジはどうやら週番らしく皆よりも下校が遅くなっていた。

コウスケはここまで何とかシンジのフリをつづけることができた。

昼休みにケンスケがS U—37について語った時は自分も語りそうになりなかなか危なかったが・・・

とにかく教師に言いつけられたことを終え、教室に戻って行った。
教室に戻るとレイが日誌を書き終えていた。

「綾波、終わった?」

レイはゆっくりと頷いた。

「じゃあ、帰ろうか。」

今日はNERVでのテストがないためそのまま帰宅することが許されている。

「・・・碇君、約束。」

レイが不意にそう尋ねてきた。

「約束?」

「そう・・・覚えてないの?」

（約束だと?!いったい何の事だ?）

昨日シンジから聞いた話ではそんなことは無かったはずだ。

だが、レイが嘘を言うとも思えない。

（シンジ、重要なことを言い忘れたのか?）

コウスケは必死に考える。

レイとシンジがするような約束とは一体何かを
するとレイが立ち上がった。

「やっぱり……」

レイは何かを確信するようにつぶやいた。

「……あなた、誰？」

コウスケは背筋が凍るような感覚に襲われた。

（まさか……約束なんて無かったのか！）

つまりレイにしてやられたということだ。

「誰って、何言ってるんだよ。綾波。」

「碓君はそんな風に私を呼ばない。」

（くそつ、シンジに関しては敏感だな。）

おそらくコウスケの微妙なイントネーションを感じ取ったのだろう。

レイが訝し気に見つめてくる。

（どうする……）

コウスケは必死に打開策を練っていた。

「……もしかして、使徒？」

「はあ？」

「そうなのね……」

そうつぶやくとレイはコウスケと距離を取った。

「碓君を返して。」

レイにしては強い口調であった。

「ちよ、ちよつと……」

（不味い！攻撃予兆……本気か?!）

傍から見ればレイはただ立っているだけである。

だが、コウスケには見えていた。

（右のストレート……いや、本命は……）

レイが踏み込んでストレートを放つ。

と思いきや左手を手刀に変えコウスケの首を狙ってきた。

コウスケはそれを左に受け流して距離を取った。

「やつぱり……碓君にそんな動きはできない。」

レイの目が一層きつくなつた。

（やばい、本気だ。）

じりじりとレイが距離を詰めてくる。

（……キックの後に回し蹴り……）

コウスケがそう読むとレイは右足でハイキックを繰り出してきた。

コウスケはしゃがんで回避する。

レイは空ぶつた足を床に置き軸にすると、そのまま左足で後ろ回し蹴りを放つ。

コウスケはしゃがんだ状態で右に飛び、側転をした。

机があらゆる方向になぎ飛ばされていた。

コウスケはすぐ立ち上がる。

(レイを何とかしないとどうしようもないな。)

このまま説得しようにもレイは聞いてくれないだろう。

(・・・右か！)

レイが素早く踏み込んできて左手でストレートを放つ。

それをコウスケはつかみ取った。

(レイにはこれが効くだろう。)

「いいのか？このままだとシンジを殺すことになるぞ。」

その言葉にレイが一瞬動揺する。

それを見逃さずコウスケはレイの足を払った。

「くっ・・・」

レイは受け身を取ることもできず床に倒れこむ。

すかさずコウスケはマウントポジションを取りレイの腕をつかんだ。

「卑怯……」

「卑怯だろうが何だろうが勝てればいい。」

レイはコウスケの拘束を振り解こうともがく。

途端にレイはもがくのを止めた。

どうすることもできないと知って諦めたのであろう。

「碓君……ごめんなさい。」

レイが悔しそうにつぶやいた。

僅かながら目が潤んでいる。

そんなレイを想像して私の罪悪感はひとしおだ。

……それでも書き続ける。

（あく……俺はいつたい何やってんだ？）

「よく聞いてくれ。ありのまま起こったことを話すぞ。俺はコウスケだ。シンジ君の体

だが、中は綾波コウスケだ。」

「何を言ってるの？」

「何を言っているのか分からんと思うが俺もよく分からん。だが、本当だ。」

レイはキツと睨んでくる。

こんな有利な状況で精神的に追い詰めようとしていると思われたのだろう。

(レイと俺にしかわからないことを言えば信じてもらえるかな?)

「・・・お前さんの生徒手帳にはプラグスーツのシンジ君の写真がある。お前さんの一番のお気に入りだ。」

そう言うのとレイは驚きで目を見開いていた。

「どうしてあなたが知ってるの?それは私と特務一尉しか・・・」

「その特務一尉本人だから知ってるんだろ。」

この事はシンジは知らない。

知っていたら平然としていられないだろう。

何故そんなものをレイが持っているのかと言うと、コウスケにもらったからである。

ゲンドウも持っていない貴重な写真なのだ。

ちなみにその写真はとある三尉に頼んで撮ってもらったのである。

別にコウスケが欲しくて撮ってもらったわけではない。

レイが写真を一枚も持っていないのでコウスケがちよつとしたプレゼントであげたものなのだ。

どの三尉が撮ったのかはご想像にお任せする。

「本当に特務一尉?」

「そうだよ。」

「何故碓君の体に？」

そう言われたときコウスケは迷った。

(赤木にばれないようにしてくれて言われてるしな……って、別に碓司令にばれなきゃいいのよ。)

「そのことはNERVで話す。それでいいか？」

レイはゆっくりと頷いた。

(やれやれ……)

コウスケはため息をついた。

その時教室のドアが開く。

「宿題を忘れるなんて……」

そう言っに入ってきたのは洞木ヒカリであった。

やっぱりこういう時はヒカリ以外いないと私は思う。

……ベタだな

コウスケとヒカリの目がぶつかり合う。

「碓君に綾波さん……いったい何をしてるの？」

ヒカリの目は信じられないものを見たという目になっていた。

「何って……」

コウスケは今、自分がどういふ状況なのかを整理した。

机は派手に飛び散っておりその真ん中にレイと自分がある。

レイは自分の下において、格闘をしたためか息が少し荒かった。

そして自分はレイの腕をつかんでレイの上に乗っている。

……

……

……

どう見ても押し倒しているようにしか見えなかった。

「いくら婚約者だからって……」

「洞木さん、これは……」

「不潔よろ!!!」

ヒカリはどこかへ走り去ってしまった。

「なんてことだ……」

コウスケはどうやってシンジに謝罪しようか本気で思案する。

一方レイはよくわからないのかきよんとしていた。

……

「碓君なのに特務一尉．．．特務一尉なのに碓君．．．」

コウスケとレイはシンジの病室に来ていた。

シンジは病衣を纏い、ベットに腰を掛けていた。

レイはコウスケとシンジを何度も見回していた。

シンジがレイに声をかける。

「綾波．．．」

「これは．．．碓君！」

そう言つてレイはシンジに駆け寄りそのまま抱き付いた。

「ごめん。綾波に心配をかけちゃったね。」

「いいの。碓君が無事なら．．．」

コウスケはその様子を見ながら一安心するが．．．

「二人ともそこまでだ。」

傍から見ればコウスケとレイがシンジの目の前で抱き合っているようにしか見えな
い。

大変危険な状況だろう。

特にゲンドウに知られたら．．．

「その後は俺たちが戻ってからやってくれ。」

「まったくそのとおりね。」

いつの間にかリツコが病室にいた。

「赤木じゃないか。もしかして……」

「出来たわ。」

そう言つてリツコは怪しげな瓶を取り出した。

「やった！これで元に戻る！」

「ええ、それを飲んだ後にもう一度ぶつかれば戻るはずよ。」

「恩に着る。」

そう言つてコウスケは瓶を受け取り、一気に飲み干した。

「よし！シンジ君、行くぞ。」

「はい。」

コウスケとシンジは走りながらぶつかる。

(ぐっ！)

かなりの苦痛が走るのを最後に意識が飛んで行つた。

・

・

・

「むっ……」

コウスケは起き上がる。

そして鏡を確認した。

「……俺だ。」

鏡にはコウスケが映っていた。

「……よかった。」

「碇君、碇君！」

横を見るとレイが必死にシンジを起こしていた。

「うん……」

「碇君?!」

「綾波……」

「よかった……」

レイはシンジに抱き付いた。

シンジは優しくレイの頭を撫でていた。

「何がともあれ一件落着だな。」

「そうね、よかったわ。」

リツコも安心したようだ。

「それじゃ、私は行くわね。」

と言つてリツコがそそくさと出ていこうとする。

「待つて。」

レイがそれを止めた。

「碓君にひどいことをした。」

「れ、レイ?」

「・・・許さない。」

レイの背中から青白い炎のようなものが見えた。

・・・

結局この事件はゲンドウに知られることになった。

なんとかリツコは逃げることに成功したが、レイがゲンドウに告げ口をしたのだ。

リツコは故意にやったことではなかったため減俸で済まされた。

「もうあんなことは二度とごめんだ。」

コウスケは自分の執務室で仕事をしていた。

休憩とばかりに煙草を取り出す。

「うん、やっぱこれがないと。」

煙草に火をつける。

そうすることで自分が元に戻ったというのを痛感する。

「そう言えば何かを忘れていたような……」

しばらく考え込むが思い出せない。

忘れたということはそれほど重要なことではないとコウスケは思い出すのを止めた。すると執務室のドアが開いた。

「コウスケさん！」

シンジが血相を変えて中に入ってくる。

「どうしたんだ？まだ学校だろ？」

時刻を見るとまだ昼前であり学校が終わっているはずがなかった。

また、午前中にはNERVのテストは行わないことになっておるのでこんな時間にシンジがNERVにいるのはどう考えてもおかしかった。

「綾波を押し倒したってどういうことですか?！」

「レイを押し倒した……あ！」

元に戻れた嬉しさのあまりコウスケはすっかり忘れていた。

「どういうことか説明してください！」

シンジが詰め寄ってくる。

それはゲンドウにも劣らぬ氣迫だった。

(もう、赤木の葉は嫌だ!!)
コウスケはそう思わずにいられなかった。

EX2 荒波

NERV第二発令所

第十四使徒との戦闘で大破した第一発令所の代わりに司令部として現在使用する場所である。

常にオペレーターが配置についている。

彼らは定時に仕事を終わることがたいへん少ないがそれに不満を漏らすことは無かった。

なにせここは司令部なのだ。

使徒との戦闘が起これば逐一状況を把握し戦闘を有利にする義務が彼らにはあり、使徒出現の第一報を常に聞けるようにしておかねばならないのだ。

とはいえ使徒が来なければ平和そのものであった。

「今日も使徒は現れないな。」

そう言うのは青葉シゲル二尉である。

ロン毛が特徴の彼は使徒が出現した際、日本政府と国連軍に報告するオペレーターだ。

また、チルドレンの居場所も彼が把握しているのだ。

「いいことじゃないか。それだけ平穏な時間が過ごせるんだから。」

中央に座る眼鏡をかけたオペレーターである日向マコト二尉が言う。

彼は作戦部一課に所属しており参謀役として戦闘をサポートする立場にある。

最も最近の彼は上司に押し付けられた雑務をいかに効率的に終わらせるかが仕事となっている

「そうですよ。それにEVAも最終チェックが終わってませんし、来られても困りません。」

上部の司令部ただ一人の女性である伊吹二尉が言う。

彼女は技術開発部技術局一課に所属している。

主にEVAの補修、修理、MAGIの管理などを担当している。

このような会話をできるほど司令部はゆったりとした雰囲気であった。

このままなら彼らも今日という一日を無事に終わることができるのだ。

今日も一日が終わる

そう彼らが考えたとき警報が鳴り響いた。

それを聞き、彼らは一斉に目の前のモニターに集中する。

それは幾度と使徒との戦闘で培われたものである。

司令部の最上段に一人の男がいつものポーズで地下から現れた。

NERVの総司令である碓ゲンドウだ。

警報を聞いてすぐさまに発令所に現れたのだ。

本来なら副司令である冬月コウゾウも現れるのだが、今日は外に出張していた。

「状況を報告しろ。」

ゲンドウが低い声で言う。

その声に青葉が答える。

「本部施設内で攻撃を確認。」

「パターンオレンジ……使徒とは確認できません。」

使徒ではないことにほっとする発令所だが、すぐに緊張が走る。

「使徒ではないのだな。」

「はい。」

「警報を止める。……探知機のミスだ。日本政府と委員会にはそう伝えろ。」

ゲンドウの命令を青葉は忠実にこなした。

「……それで何の警報だ？」

「MAGIが使徒ではないものの、本部内で異常を確認したため知らせてきた模様です。」

伊吹の報告を受けゲンドウは相手が人であるだろうと考えた。

だが、誰であるかは特定ができない。

もしかしたら戦自の特殊部隊かとゲンドウは考えた。

「異常を確認したのはどこだ。」

「はい。NERV本部の第一層です。」

「モニターに出ます。」

発令所のメインモニターに映し出されたものを見て一斉に驚きの声上がる。

「し、シンジ君にレイちゃん!？」

モニターにはレイを担ぎ上げ走るシンジの姿があつた。

時折後ろから飛んでくる何かを回避している。

シンジの顔は恐怖にまみれており、何かから逃げるような動き方であつた。

一方レイはシンジとは正反対に大変嬉しそうに、幸せそうにしている。

「いったいどういうことなんだ?」

日向がそう言うが、それは発令所全員が感じることであつた。

シンジの表情を除けば別に異常とは感じられないのだ。

ただ単にシンジが所謂お姫様抱っこでレイを抱えて走っている。

そういう風に見えた。

「シンジの後方を映せるか？」

ゲンドウが言う。

シンジの後ろから時折飛んできているものが気になったのだ。

「出ました。」

伊吹が言うとともにメインモニターはシンジの後方を映し出した。

それを見てさらに一同が驚きの声上がる。

「あ、綾波特務一尉!？」

青葉が驚きのあまり声が上がっていた。

そこにはグロツク17を片手にシンジを追いかけるコウスケが映っていた。

・・・

事はコウスケがリリスのことを公開した後の話（第36話の後）である。

いつも通りにコウスケは仕事を終え、帰宅の準備をするために執務室に帰る途中であった。

「今日も終わった。帰るだけだな。」

そんなことをつぶやいていたコウスケは視界に入ったものを見過ごすことができなかつた。

「あれは……レイとシンジ……いったい何をしているんだ？」

少し遠くから見ていたため二人が何をしているのかわからなかった。すると二人がキスをするのを見てしまった。

しかもシンジの方から……（36話のおまけ）

その光景にコウスケは愕然とする。

だが、婚約者であるのだからそう言うこともあるだろうと思い、いつもの調子でからかってやろうと考えたのだ。

そしてコウスケは二人に近づく。

「何をしているのかな？ 碇シンジ君。」

その声にシンジがとっさに反応した。

「コウスケさん!？」

一方レイはコウスケを少し煩わしそうに見ていた。

「何をしていたのかな？」

「そ、それは……その………」

シンジは赤くなりながら答えようとはしなかった。

「接吻です。」

レイがきつぱりと答える。

「あ、あやなみ！」

「碓君が私を求めてくれた。」

と嬉しそうにレイは言うのであった。

「まあ、婚約者だからな……だが、場所を考えろ。」

「す、すみません。」

「大丈夫だとは思うが、押し倒すとかそういう不埒なまねはするなよ。」

からかっているつもりが、幾らか本音が混じってしまったようだ。

シンジは必死に頭を縦に振った。

しかし

「押し倒す……私、押し倒されたことあります。」

レイのとんでもない一言が飛び出すのであった。

この一言にコウスケはピンとくるものがあった。

「レイ、あの時のことを言ってるのか？ 俺とシンジが入れ替わった時の……」

「いいえ。」

てつきりそのことだと考えていたコウスケはレイの答えに耳を疑いたかった。

「……………レイ、嘘だよな。」

「本当です。」

レイの声がはつきりと聞こえた。

「……………頼むから嘘だと言ってくれ。」

「本当です。」

この時シンジもシヨックを受けていた。

いったい誰がそんなことをしたのか

諜報部と零課はいったい何をしていったのか

シンジとコウスケは同時に同じ考えをしていた。

さらにコウスケはその日の警備担当者を更迭、抹殺を考えていた。

その点はシンジとは違うだろう。

「……………いったい誰に？」

コウスケは顔を俯かせて言う。

この時シンジはとあることが頭に浮かんだ。

ヤシマ作戦前の話だ。

そしてレイが言っていることの意味がようやく分かったシンジはレイを止めようと

する。

「あや……………」

「碓君です。」

一足遅かった。

「なに!? ……いつの話だ。」

「ヤシマ作戦前に碓君がIDカードを届けに来てくれた時のことです。」

「あ、あやなみ!」

それ以上言われるとシンジとしてはとても危険な状況になってしまう。

だが、コウスケが途中で止めることを許さなかった。

「シンジは黙ってろ。」

この時コウスケは初めてレイと同居した時のことを思い出していた。

レイが風呂から出たとき、どういう格好だったか…

「……………まさかとは思うが裸だったなんてことは……………」

「裸でした。」

その時のことを思い出していたのだろうか。

赤くなっていたレイはきっぱりと答える。

プツン

まるで綱のようなものが切れる音

そういう音がシンジの耳に入る。

その音を聞いてシンジは恐る恐るコウスケを見た。

コウスケは顔を俯かせてぶるぶると震えている。

「こ、コウスケさん？」

「……………仮にも婚約者だからな……………デートとか接吻くらいは大目に見てやらないこともない……………だが……………」

コウスケは顔を上げる。

……………怖いほどの無表情であった。

「婚約者になる前からすでに手を付けていただと……………」

実際はただの事故であるのだが、状況をすべて知らないコウスケから見ればそうなってしまうのだ。

ただ、コウスケはレイの体について詳しく知っている。

データはコウスケと同居した後のものだ。

それを冷静に思い出せばただの事故であることに気付くかもしれないが、今のコウスケには無理であった。

今のコウスケに取って重要なことは

シンジが娘を押し倒した。それも婚約者になる前である。

「なんてことだ…」

「違います！ ただの事故なんです。」

「ほう、そういう風に責任逃れするつもりか。」

「本当なんですってば！」

「子は親を映す鏡とはよく言ったものだ。」

そこでなんでゲンドウが出てくるのかシンジには理解できなかった。

だが、コウスケの誤解を解かねば大変なことになると本能で感じることはできたようだ。

「コウスケさん！ 僕の話を…」

「ここまで来て、まだ言い訳をするつもりか！ レイだって認めてるんだ！ 男なら潔く覚悟しろ！」

レイは認めているというか事実をありのまま話しただけである。

そのレイは何故コウスケが怒っているのか理解できないようだった。

ともかく全身が灼熱の炎と化しているコウスケを前にシンジは逃げなきやダメだと本能で感じたそうだ。

「ごめん！ 綾波！」

そう言うのとシンジはきよんとしているレイを担ぎ上げて逃走を図る。

……火事場の馬鹿力とはよく言ったものだ。

突然のことにレイは目を見開いて驚くが、そつとシンジの胸に頭を預けるのであった。

「待て！」

それを見たコウスケが追いかける。

どう考えてもコウスケの方が早いのだが、命の危機にさらされた人は強かった。

コウスケと同じくらいのスピードでシンジは走っていた。

・・・

発令所にミサトが走って入ってきた。

傍らにはリツコもいた。

「状況は？」

「綾波特務一尉がサードチルドレンとファーストチルドレンを追撃しています。」

日向が状況を正確に報告する。

「コウスケ君!？」

「……冷静な判断ができないようね。」

コウスケの表情を見て二人が反応する。

コウスケの感情がモニター越しでもありありと滲み出ていた。

「あ、危ない！」

伊吹が叫ぶ。

モニターにはグロック17を構えるコウスケが映っていた。

そして発砲。

それをシンジが驚異的な反射神経で避けていた。

「……すごいわね。」

「ええ、シンジ君にしては上出来だわ。」

上出来どころではないと作者は思う。

「……どうなされますか？ 碇司令。」

青葉がゲンドウに判断を委ねる。

ことがことなだけに判断しかねるのだ。

「……総員、第一種戦闘配置。」

「戦闘配置!？」

驚きのあまり青葉が声を上げていた。

「そうだ。急げ！」

「……相手は使徒じゃないのに……同じ人間なのに……」

伊吹が顔を顰めながら言う。

「しかもNERV職員……上級職員だしな。」

「……やるしかないだろ。」

発令所にはいつにない暗い雰囲気にも包まれた。

……幸せそうなのはレイとすでに帰ったアスカだけ……

……

『R警報発令、R警報発令。NERV本部内に緊急事態が発生しました。D級勤務者は全員、退避してください。』

『総員、第一種戦闘配置。対人迎撃戦用意。』

「きや〜!」

「何なんだ! いったい!」

突然練り広げられた逃走劇にNERV職員が驚き、グロツク17を向けているコウスケに恐怖し一目散に逃げだす。

そんな中をシンジはレイを担いで走っている。

「どうしよう……」

「特務一尉は冷静さを失っているわ。」

ことの元凶とも言えるレイは自分が原因ではないみたいな口調で言っていた。ただ、シンジに担ぎ上げられているのをいいことにシンジの胸に頬擦りしている。そこは役得だと考えていた。

「わかってるよ。」

シンジの後ろでは鬼のような形相で追いかけるコウスケがいる。

「……碓君。来るわ。」

それを聞いたシンジが横に避ける。

……銃弾が通り抜けて通路の壁にめり込んだ。

「このままじゃ……」

シンジが必死に打開策を練っているが逃げる以外何も思い浮かばなかった。

「……何？ ……わかったわ。」

そう言うレイは目を閉じた。

「綾波？ ……じゃない。……リリスさん？」

「うふふ、やっぱりわかってくれるのね。」

嬉しそうにリリスが言う。

「……もしかして何とかしてくれるんですか？」

「それはどうかしらね。」

そう言うとりリスは

「きゃ〜！ 碇君にさらわれる〜！」

と叫ぶのであった。

少し嬉しそうに聞こえたのは聞き間違いではない。

「おのれ！ レイだけでは物足りないとしても言いたいのか！ ……許さん！」

りリスは火に油を注いだ。

もしかしたらガソリンだったのかもしれない。

……コウスケはレイとりリスを声だけでも聴き分けることができるようだ。

コウスケの叫び声が聞こえると同時に銃弾がシンジの横を通り抜けていった。

シンジの髪が数本撃ち抜かれた。

はらりと撃ち抜かれた髪が床に落ちていく。

「ちよ、りリスさん！」

「頑張つてね。」

片目でウイソクをした後りリスは目を閉じた。

・
・
・

「目標は第一層を突破！ 第二層に突入します。」

青葉からの報告を受けミサトは苦い顔をした。

こんなに早く第一層を突破されるとは思いもよらなかつたのだ。

「部隊配置はどうなっているの？」

「目標の進行スピードが速く、いまだに完了しておりません。」

日向からの報告にミサトは舌打ちする。

NERVの対人迎撃システムがここまで弱くなっているとは思ってもよらなかつたのだ。

「構わないから逐一部隊を送って。」

「しかし……」

日向はさすがに戸惑った。

相手は敵ではないNERVの職員なのだ。

それにミサトの言うことは戦力の逐次投入を意味しているのだ。

下手をすれば戦局が泥沼になる可能性が高い。

「早くしないとシンジ君は確実に消されるわよ。」

「消されなくとも長期入院は確実ね。」

コウスケの形相からリツコがそのように予測する。

それに日向が消極的ながら同意し部隊に指令を送る。

相手は一人なんだから

それにシンジが長期入院などすれば使徒との戦いに支障が生じる
そう日向は納得するのであった。

・
・

「ちっ、思ったよりすばしっこいな。」

コウスケは少し焦っていた。

グロツク17で攻撃しても当たらないことに焦りを感じているのだ。

ましてや相手はあの碓シンジである。

簡単に捕まると思っていた相手だけにこうも長期戦になるとは思わなかったのだ。

だが、コウスケは全く疲れていない。

日頃の訓練のおかげかもしれないが、この時ばかりはそれだけではなかった。

「レイだけでなくリリスにまで手を出すとは………許せん。」

それがコウスケの原動力になっていた。

ただ、戦場では冷静になることを彼らしくも無く完全に放棄していた。

最も戦場では無いが……

そんなコウスケの前に黒服たちが立ちはだかる。

総勢20名ほどだ

「なんだお前ら。そこをどけー！」

「綾波特務一尉には拘束命令が出ています。」

黒服のリーダーが言う。

「ほう、俺の邪魔をする気か。」

一人の黒服がコウスケに近づく。

コウスケは特に反応しなかった。

それを見た黒服は抵抗しないと思ったのだ。

コウスケに近づいた黒服はコウスケに思いつきり殴られた。

顔面に容赦なくコウスケは叩き込んだ。

黒服は吹き飛び通路に激突した後、沈黙する。

それを見た黒服のリーダーは

「一斉にかかれ！」

と号令を発した。

黒服たちは一斉にコウスケに襲い掛かる。

「ふ……」

コウスケは正確に容赦なく攻撃を当てていた。

一人、また一人と黒服たちは沈黙する。

黒服のリーダーは驚愕しUSPを取り出そうとしたが、コウスケの方がわずかに早

かった。

黒服のリーダーは床に崩れ落ちる。

黒服たちが来たことに安心して休憩していたシンジは驚き、レイを担いで再び逃げ出した。

「待てー！」

コウスケも再びシンジを追撃する。

・
・
・

「第一迎撃部隊、沈黙。」

青葉が怖々と報告した。

「嘘でしょ!? 20人はいるのよ!」

ミサトはあまりにも衝撃的な報告に声を上げていた。

「第二迎撃部隊、目標と接触まであと200m!」

伊吹が続けて報告を行う。

「……ダメです。進行を阻止できません!」

メインモニターには床に崩れ落ちている黒服たちが映っていた。

「第四部隊の投入も許可する! 直衛に回せ!」

「NERV職員の避難よりサードチルドレンの保護が最優先だ。」

『第三迎撃部隊、避難中の職員に足止めを受けています。』

オペレーターたちから次々に報告が上がるが、戦況はよろしくなかった。

大兵力を展開できれば一気に戦局は変わるだろうが、NERVの通路では大兵力を生かしきれない。

次々に突破されていった。

「目標、第三層に突入します！」

青葉が振り返りながら叫んだ。

「どうすればコウスケ君を止められるの？」

ミサトが奥歯をかみしめながら言う。

「あれは暴走EVAとでも言えるわね。」

リツコはモニターを見ながら淡々と言う。

その時、ゲンドウが口を開いた。

「零課を戦線投入しろ。」

「零課をですか？」

「そうだ。」

「しかし、零課課長の許可もなく……」

さすがのミサトも戸惑った。

いくらコウスケを止めるとはいえ、戦自に匹敵するくらいの戦闘力を持った零課相手に無傷でいるはずがない。

この時、リツコは

「その零課課長があれじゃね…」

と呟っていた。

「構わん。チルドレンの保護を最優先だ！」

・
・
・

シンジは疲れ始めている。

コウスケはそう思った。

最初よりシンジの走るスピードが遅くなっているのを感じていたのだ。

それでもシンジには追い付いていない。

この時、コウスケが考えていることはとても悪辣なことである。

シンジの活動限界を正確に見極めて捕まえることにしたのだ。

その後でゆっくりと尋問するのだ。

レイに何をしたのかを……

リリスをどうするつもりだったのかを……

そんな黒い炎と化したコウスケの前に男が一人立ちはだかる。

「……ミツヒサ。」

コウスケの前には榛名ミツヒサが立っていた。

「綾波特務一尉、やり過ぎですよ。」

ミツヒサは諭すように言う。

「いくらミツヒサでもこればかりはダメだ。」

「そうですか……」

そう言うともミツヒサは眼鏡を取り胸ポケットにしまった。

コウスケは身構える。

「……どうしても俺の邪魔をしたいんだな。」

「綾波特務一尉が引けばいいんですよ。」

「そうか……」

コウスケはそう言うとき背中からAKS-74Uを取り出してフルオート射撃を行った。

コウスケは先日の使徒戦以降、グロック17の他にAKS-74Uを携帯するようにしていたのだ。

弾丸は正確にミツヒサの所に飛んで行く。

ミツヒサは冷静に腰にある高周波ブレードを構えると、弾丸を切り落とした。

切られた弾丸はミツヒサの足もとに落ちていった。

「つまらないものを切らせないでください。」

ミツヒサは高周波ブレードを腰に戻しながら言う。

「……さすがだ。」

「お褒めいただき光栄です。」

「でも、これならどうかかな？」

コウスケは丸い何かをミツヒサに投げつけた。

ミツヒサは高周波ブレードで正確に切り落とす。

途端に煙が充満した。

「スモークグレネード……」

コウスケの姿が見えなくなる。

ミツヒサは神経を集中させた。

「……そこだ！」

みねうちモードに切り替えると高周波ブレードで切り付ける。

だが、そこにあつたのはコウスケが持っていたAKS—74Uであつた。

「なに!?!」

「終わりだ。」

コウスケはミツヒサの背後から現れ、ミツヒサの首筋に手刀を放った。ミツヒサは床に崩れ落ちる。

それを見届けるとコウスケは追撃に入った。

「さすがだな。綾波特務一尉。」

「今度はシンゴか。」

煙が晴れると吹雪シンゴが立っていた。

M16A4を構えている。

「引く気はないんだろ？」

シンゴはコウスケが答える前に引き金を引いた。

コウスケはとっさに物陰に隠れた。

シンゴはコウスケを炙り出そうと威嚇射撃をしている。

コウスケはリロードのタイミングを見計らったが、隙が無過ぎて無理であった。

「これでおとなしくなるだろう。」

シンゴはそうつぶやいた。

床で寝ているミツヒサを何とか回収せねばと考えたとき、コウスケが物陰から躍り出た。

「諦めが悪いな。」

シンゴは一瞬で狙いをつけたが、撃てなかった。

「なに!？」

コウスケがミツヒサを盾にしながら走ってくるからだ。

さすがのシンゴも戸惑ってしまう。

そうしているうちにコウスケがシンゴの懐に潜りこんでアッパーを放つ。

シンゴはそのまま後ろに倒れこみ、沈黙する。

コウスケは服を払う。

するとコウスケの横を弾丸が通り抜けていった。

コウスケは再び物陰に隠れた。

「……今度はユキか。」

全くの無言だが、通路の奥から気配を感じながらコウスケは言う。

長良ユキが使う武器はM24である。

コウスケはゴミ箱のふたを通路に放り投げた。

銃声とともにゴミ箱のふたが撃ち抜かれる。

「狙いは正確……」

コウスケは息を大きく吸った。

「おい、ユキ！ 聞こえてるだろ!？」

返答は返ってこないがコウスケは続けた。

「俺が知ってるお前の秘密をここでばらすぞ！」

返ってきたのは銃弾だった。

銃弾はコウスケの手前に落ちた。

「なんだ？　ここに言っただけなのか？」

銃弾が返ってくる。

さつきよりはコウスケより離れていた。

「そうかそうか……お前の代わりに言っただけだよ！」

そうコウスケが言うと発砲音が聞こえた。

銃弾は正確にコウスケの前ではじける。

コウスケは物陰から飛び出し、走る。

それと同時に円筒状のものを転がしておいた。

コウスケが走る先にはユキがいた。

ユキはリロードを行っていた。

「私の方が早かったわね。」

ユキはリロードを終わらせていた。

「終わりね。」

だが、ユキはコウスケの姿に違和感を感じた。

コウスケは黒いゴーグルをかけていたのだ。

そう、強い光から目を守るための：

「はー！」

ユキが気付いた時、コウスケはニヤリと笑う。

途端にコウスケの後ろから強い光が見えた。

ユキはもろに光を見てしまう。

コウスケが転がしたものはフラツシユグレネードだった。

コウスケはユキの首筋を狙って手刀を放つ。

ユキもコウスケに敗北した。

シンジを護衛していた零課職員もコウスケの前では無力に等しかった。

．．．

「ぜ、零課が……全滅……」

「そ、そんな……」

「もう彼を止める手立てはないわね。」

発令所ではコウスケと零課の戦闘がリアルタイムで監視されていた。

誰もがコウスケを止めることができると思っただけに零課の敗北は発令所の士気を

大きくそぎ落とした。

もはやシンジの長期入院は避けられない。

誰もがそう思った時、一人の男が立ち上がる。

「……葛城三佐、あとを頼む。」

「碓司令？」

「赤木博士、例のものがある部屋に誘導しろ。」

ゲンドウの言葉にリツコはゲンドウが何をしたいのか気付いた。

「あれを使うつもりですか!？」

「そうだ。綾波特務一尉を止めるにはあれしかない。」

「しかし……」

ゲンドウは強い意志を込めながらリツコを見る。

「……わかりました。」

「では、あとを頼む。」

ゲンドウは発令所を後にした。

・・・

『シンジ君。聞こえる?』

「ミサトさん!？」

『今、館内放送を使って連絡してるわ。ただ、そっちの声は聞こえないから一方通行になっちゃおうわ。』

「そんな…」

『いい？ これから誘導するからそれに従って。』

「本当に大丈夫なのかな。」

零課も敵わなかったのにどうすればいいのか

シンジはそう不安になっていた。

「碓君、葛城三佐を信じましょう。」

「でも…」

シンジは不安そうにレイを見るが、レイの芯の通った視線を受けて

「わかったよ。」

と言うのであった。

・・・

シンジはミサトの誘導に従って一つの部屋に入った。

部屋に入るとゲンドウが一人で立っていた。

「父さん!?!」

「シンジ、よくここまでたどり着いた。」

ゲンドウはシンジに向かってやさしく微笑む。

「こつちだ。」

シンジはレイを降ろすとゲンドウに従って行動する。

「隠し通路だ。ここなら大丈夫だろう。」

「父さん、ありがとう。」

そう言つてシンジはレイの手を繋いで隠し通路に向かった。

だが、シンジは止まる。

「…父さん？」

「なんだ。」

「父さんは来ないの？」

「私はここに残る。少しでも足止めが必要だ。」

その言葉にシンジが叫ぶ。

「父さん!?! 相手はコウスケさんだよ!?! いくら父さんでも…」

「そんなことはわかつている。」

「なら、どうして……」

ゲンドウはシンジに近づき、肩をつかんだ。

「私はお前に父親として接してこれなかった。……だが、シンジの父親として、今できる

「こと……それはお前の幸せを願うことだ。」

「父さん……」

「そしてお前の幸せを壊そうとする者がいる。……父親として看過できん。」

するとゲンドウはシンジとレイを通路の方に突き放す。

シンジとレイは通路にしりもちをつく形になっていた。

「父さん!?!」

「碓司令!?!」

「行け! シンジ!」

ゲンドウは振り返る。

「……レイと幸せにな。」

その言葉を最後にドアが閉まった。

「父さん!」

シンジはドアに拳を叩きつけるがびくともしなかった。

「とうさん……」

シンジは泣き崩れてしまう。

「……碓君、行きましょう。」

「父さんを見捨てていくなんてできないよ!」

「それでは碓司令の思いを無駄にすることになるわ。」

レイの言葉にシンジがはつと顔を上げる。

「行きましよう。」

シンジは強く頷くとレイとともに通路の奥に向かって進んだ。

・・・

「次は碓司令直々のお出ましですか。」

ゲンドウがシンジとレイを送り出した後、コウスケがようやくたどり着いた。

「綾波特務一尉、君の暴走もここまでだ。」

ゲンドウがサングラスをかけなおしながら言う。

「自分を止められるとでも?」

「無理なのは百も承知だ。」

コウスケとゲンドウは睨み合う。

コウスケは少し戸惑っていた。

(碓司令は何もしてこない……いつもの予兆がないからな。しかし、あの碓ゲンドウだぞ?) 何の準備なしにここにいるわけがない。)

ゲンドウはただ立っている。

不意にゲンドウがニヤリと笑う。

それにコウスケは悪寒を感じた。

(……まさか、誘い込まれたのか!?)

辺りを見回しても何も無い。

それが返って不気味であった。

「碓司令、いったい……」

コウスケが言いきる前に何らかの刺激を感じた。

(なんだ? この不愉快な感じは……)

刺激はどんどん強くなっていく。

刺激はコウスケの舌を中心に広がっていく。

どこかで感じたことがあった。

そう、確か……

ヤシマ作戦前の……

そこまで考えが及んだ時、コウスケは気付いた。

「まさか、MC! 既に完成していたのか!」

コウスケは思い出した。

あの時(第7話参照)、冗談で言ったことをリツコが本気で研究していたということ。コウスケは必死にあたりを見回す。

出口は見つからなかった。

ゲンドウはすでに立ち膝になっていた。

「よもやこれほどとは…」

ゲンドウは苦痛にまみれた顔になっていた。

コウスケも立っていることができなかった。

「……フフフ、碇司令。」

「……なんだ。」

「あなたに敬意を表します。」

「……光栄に思う。」

そう言うとゲンドウは倒れる。

それを見届けたコウスケも気を失った。

・
・
・

この事件は「荒波の暴走」と言われるようになる。

荒波と言われる理由は「荒れた綾波」からである。

ゲンドウの計らいでテロを受けたときの抜き打ち訓練ということになった。

あの後、コウスケは減俸一か月の処分を受けた。

名目はやり過ぎ。

だが、こんな記録が残されている。

「綾波特務一尉、何か言いたいことはあるか？」

「ありますよ。」

「言ってみろ。」

「今回の件は確かに自分の暴走ではあります。」

「認めるのだな。」

「認めます。ただ……」

「なんだ。」

「碓司令ならわかっていただけるものと思います。」

「……わからんな。」

「そうですか……残念です。」

「……言ってみろ。」

「仮にシンジ君が女の子だったとしましょう。」

「そんな仮定は無意味だ。」

「わかっています。ただ、あの顔ですからね……レイほどの美少女になったかもしれませんが……」

「……」

「そんな娘が男と接吻していたらどう思われます。」

「……無意味だ。」

「そして男を連れてきて好きな人ですなんて紹介されたら？」

「……………むう……………」

「ましてや押し倒されて、しかも裸だったなんて……」

「止めたまえ！」

「……………お分かりいただけましたか。」

「わかった。……確かに綾波特務一尉の言うことにも一理ある。」

「よかったです。碇司令ならお分かりいただけるものと信じておりました。」

後日、その記録を確認したNERV副司令は総司令にさんざん説教をしたとかしなかつたとか。

ちなみにコウスケの誤解はリリスの説明で解けた。

ヤシマ作戦前のレイはリリスと同化しており、そのためレイが体験したことをリリスも知っているのだ。

今は分離していて、互いに共有しようとしなければできない。

リリスは

「レイはいいな……」

なんてコメントを残したとか…

あと、以下のようなコウスケとシンジの会話の記録が残されている。

「すまんが、謝る気になれない。」

「いいですよ。事故とはいえ押し倒したのは事実ですし…」

「そうか…まあ、今回の件で少しは見直したよ。俺から逃げ切ったんだからな。」

「僕も驚いています。」

「だが、変なこととはするなよ。」

「し、しませんよ!」

「本当だな?」

このような会話である。

ともかく無事に解決した。

ただ、諜報部と零課は「荒波を乗り切れ!」を掲げているらしい。

いつになく訓練を行う黒服たちがよく確認されているようだ。

…MCの効果が密かに認められてNERVに実戦配備されたとの噂もあるが、真実は往々にして隠されるものである。

それを知った加持はMCの正体をしつこく問うミサトに

「真実は君とともにある。」

などと言っ
たらしい。

EX3 コウノトリはいつ来るの

綾波家

言わずと知れたコウスケの家である。

とは言ってもコウスケが購入したのではなく、NERVによって管理されているコンフォートシリーズの一つである。

そのシリーズの一つであるコンフォート17には綾波家の他に葛城家と加持家があるだけである。

「特務一尉、キャベツ畑はどこにありますか？」

自宅にて食事中であったレイは唐突にそのようなことを聞いてきた。

「いきなりなんだ？」

コウスケはレイを見やるが、レイは黙ったままじつと見つめてきていた。

「キャベツ畑？ そんなものはここにはないぞ。」

「では、どこに行けばありますか？」

「そうだな……ここなら愛知県が一番近いかな？ 生産量も日本が多いからな。」

「そうですか……」

レイは何かを考え始めた。

「キャベツ畑がどうしたのよ。」

横にいるリリスがレイに聞いた。

「どうしてもキャベツじゃなきゃいけないのか？」

「はい。」

レイは即答した。

そしてレイは食卓に並んでいるキャベツを見ながら、黙々と考え始めた。

「どうしたのかしら？」

「いいんじゃないか？ 何かに興味を持つのはいいことだ。」

そう言うところウスケは箸を進めた。

今までのレイは余りにも知らないことが多すぎた。

だからこうして何かに興味を持つことはレイにとってマイナスにはならないだろう

とウスケは考えていた。

・
・
・

第三新東京市立第壱中学校

言わずとも知れているチルドレン三人が通う中学校である。

その特殊性からそこに勤務する教師たちは当然ながらNERVの存在を知っており、

チルドレン三人がいる2―Aは特に最重要のクラスとして認識されている。

最もそこに通うクラス全員がチルドレン候補だとは知らないが……

そんなクラスに通う最重要人物の一人である碓シンジは少し気になることがあった。

「せんせ、どうしたんや?」

シンジの親友であるトウジが言う。

「うん、ちよつとね……」

「ずつと綾波の方を見てるだろ。」

ケンスケの言うとおり、シンジはここ数日間レイの方を見ていたのだ。

「なんや? 最近相手にされとんから寂しいんとちゃうか?」

「そんなんじゃないよ。」

シンジはそういうものの顔を真っ赤にしているので説得力がなかった。

寂しいというのはあながち間違いではないのかもしれない。

「こここのところ図書室に行ってるみたいだしな。」

それはシンジも知っている。

だが、なぜ図書室に行くのかまではわからなかった。

レイ本人に聞いても

「私、頑張るから……」

としか答えてくれないのだ。

シンジはそんなレイに疑問しか浮かばないが、図書室に行く以上何か調べていることはすぐに検討が付いた。

(これもコウスケさんのおかげなんだね。)

そう思うとシンジはコウスケに頭が上がらないなと思った。

レイが能動的に何かを調べるのはいいことだとシンジは思っているが、その比率が多くなっていることに少し寂しく感じていた。

・
・
・

N E R V 総司令執務室

ここは特務機関 N E R V の長である碓ゲンドウの執務室である。

N E R V の総司令と言えば国の大統領であろうとそう簡単に手を出せる相手ではない。
い。

そんな彼もコウスケたちと同じように雑務からは逃げられない。

大体は彼の傍らにいる良き理解者である N E R V 副司令の冬月コウゾウに押し付ける。
る。

だが、冬月のお小言が増えてきているとゲンドウは感じており、今日ばかりは自分でやろうとしていたのだ。

「……………問題ない。後は部下がやってくれるだろう。」

そうしてゲンドウは次の資料の検討に入った。

しばらくしてゲンドウは悩むことになる。

いつもなら

「問題ない。」

でサインしてしまうのだ。

それでも書類の内容はちゃんと確認している。

と言うかそうしろと冬月に怒られたのだ。

とにかくゲンドウは悩んでいる。

書類には農家の見学を行いたいという内容が書かれていた。

どこの誰がこんな馬鹿げた事を上申するのかと名前を確認した。

「……………レイ?」

上申者の欄には綾波レイと書いてあった。

詳しく内容を確認すると、愛知県にあるキャベツ畑に見学に行きたいと言うことだった。

それもシンジと二人で…………

ゲンドウは何が何だかわからなかった。

何故、この時期にそんなところに見学に行きたいのか…

パイロット三人ともなれば社会見学と納得できるが、シンジとレイだけなのだ。

「……レイもいろんなことに興味が出てきたのか。」

ゲンドウはそう呟くと不意に笑みがこぼれた。

やはりあの男に任せてよかったと考えていた。

しかし

「レイには悪いが、許可は出せん。」

ゲンドウは不許可のハンコを押す。

レイが自分から願ひ出たことなので叶えてやりたいのだが、今は使徒との戦いがある。

そのためレイを含むパイロットたちは第三新東京市から離れるわけにはいかないのだ。

「しかし、何故キャベツなのだ……」

農家なら第三新東京市の郊外にもある。

しかし、レイはわざわざ愛知県のキャベツ畑と名指しで提出したのだ。

「何故だ……」

これでゲンドウは再び悩むことになる。

・
・
・
N E R V本部 ジオフロント

使徒との最前線にある第三新東京市の地下に広がる広大な空間である。

ここにはN E R Vの最後の防衛ラインである、通称「Zライン」が構築されている場所でもある。

先に現れた第十四使徒との戦闘で大破したものの、現在では復旧しており以前に比べ強固に出来上がっていた。

そんな場所に土が掘り返された部分があるのだ。

「さて、ここまで来れば後は定植だけだな。」

そう呟きながら加持リョウジは満足そうに耕された畑を見やった。

加持はN E R Vの制服を腕まくりしながら鍬を掲げていた。

加持はコウスケに命を助けられた後もここでスイカを栽培していた。

現在の加持は特殊監査部ではなく、作戦本部本部長付きの秘書だ。

ミサトから押し付けられる雑務をこなしながらも、スイカの栽培を行っているのだ。

最前線にあるジオフロントでそんなものを作るなど本来はあり得ないことである。

もとは兵装ビルが建てられる予定であったのだが、加持が先に陣取ってしまったのである。

「先の使徒戦で一度全滅したのを幸いにコウスケがもとのプランを実行しようとしたのだが……」

「綾波、お前は許可しただろうか？」

とやわれてしまいコウスケは閉口するしかなかった。(第32話 おまけ)

「後、半年ほどだな……待ち遠しい……」

この時の加持の頭には畑一杯に広がるスイカたちだった。

前回はあと少しと言うところで全滅したのでかなり悔しい思いをしたのだ。

そんな彼に声をかける者がいた。

「加持三尉。」

加持がその声に気づき、振り向くと

「なんだ、レイちゃんか。」

前回のスイカが全滅する原因であったレイがいた。

とは言っても加持はそんなに恨んではない。

使徒との戦いがジオフロントで起こったのだから致し方ないという気持ちと、その分の請求は目の前の少女の保護者にしたので、すべて終わったこととして処理されているのだ。

「どうしたんだ？」

「……畑。」

「ああ、俺のスイカ畑だよ。とは言ってもまだスイカは植えてないけどな。」

「スイカだけですか？」

「スイカだけだが？」

「……そうですか。」

レイは何かを考えている。

「何か育ててみたいのか？」

「はい……キャベツを育てたいんです。」

「キャベツ？ それはどうして？」

加持が聞くとレイは

「……碇君……」

と頬を赤くさせながら呟いた。

(…さては栽培したキャベツでシンジ君に料理を作つてやりたいんだな。)

レイの様子から加持はそう予測した。

「何かを作つたり何かを育てるってのはいいぞ。色んなことが見えてくるし、わかつてくる。楽しいことかな。」

そう言う加持にレイは何か感銘を受けているようだった。

(最初、資料で見たときとはだいぶ変わったな。…これも綾波のおかげか……)
「それにそうしてやればシンジ君も喜ぶだろう。」

「碓君が喜ぶ……………」

そう言うときレイは赤くなりながら俯いた。

「もし、畑を使いたいのなら一言言ってくれ。」

「……………わかりました。ありがとうございます。」

そう言うときレイは去って行った。

「シンジ君は良いね……………キャベツか……………挑戦してみてもいいな……………」

・
・
・

NERV食堂

戦いにおいて重要事項の一つが食の問題である。

食事をきちんととれるか、また食事の質がどうかで戦う兵士たちの士気は大幅に違ってくるだろう。

それは民間においても同じことである。

とにかくNERV職員のやる気を担っている食堂にアスカは注文した料理をつつきながら対面に座っているレイを見ていた。

レイは本を読むのに夢中になっている。

そのタイトルには

「初心者でもできる野菜の栽培」

と書いてあった。

「ねえ、レイ。」

と声をかけるとレイは本を閉じた。

「何？」

「あんた、野菜でも栽培するの？」

アスカがそう聞くとレイはこくりと頷いた。

「どうして？ 夏休みの宿題でもないのに……」

「碓君との絆だから……」

とレイは赤くなりながら答えた。

「シンジとの絆？」

「うん。」

（シンジとの絆ってどういうこと？ ……野菜の栽培……ああ、そういうこと。）

アスカは加持とまったく同じ答えにたどり着いた。

「そう言うことね。頑張りなさいよ。」

「頑張る。」

実にやる気に満ちたレイの顔であった。

「私にできることがあつたら遠慮なく言いなさい。」

するとレイは悲しい表情になる。

「ごめんなさい。私にしかできないことだから……」

「レイがそう言うならいいわ。」

「ごめんなさい……」

「そんな顔をするんじゃないわよ！ シンジのためにも頑張りなさい。」

「ありがとう。」

そう言うとレイは再び読書に集中した。

（人って変わるのね。）

アスカはそう思わずにいられなかった。

ドイツにいた時、アスカはファーストチルドレンであるレイのことをよく聞かされて

いたのだ。

いまだに起動させられないゲンドウの人形であると

NERV本部に来てその評価が全くのたためでもなかったことを知った。

だが、レイは最初に比べて明らかに変わっていた。

その根幹にはレイの保護者がいることをアスカは感じていた。

(ま、あたしが変わったのもコウスケのおかげね。)

レイは懸命に本の内容を一字一句理解しようと奮闘していた。

「……あたしも、ああなれるのかな……」

・
・
・

NERV通路

特務機関NERVの通路は白に赤いラインが入っているのが特徴だ。

だが、通路自体は迷宮のようになっている。

テロリストなどが侵入した場合に阻止できるようになっているのだ。

そんな通路でリリスはレイと出会っていた。

「ねえ、レイ。」

「はい。」

「どうしてそんなにキャベツのことを調べてるの？」

リリスはレイの行動が疑問でならなかったのだ。

そしてレイは答えた。

.....

.....

.....

.....
「そうだったんだ……」

リリスは驚きのあまりそう答えるしかなかった。
「それであんなに知らべてたのね……」

レイは赤くなりながらこくりと頷いた。

「……………コウスケに頼んでみましょう！」

「特務一尉に？」

「そうよ！ コウスケなら何とかしてくれるわ。」

「大丈夫でしょうか……」

「大丈夫よ。それに私も……………」

.....

綾波家

コウスケは夕食が終わり紅茶をすすっていた。

そんな時にリリスがコウスケに向けて言う。

「コウスケ、お願いがあるの。」

「なんだ？」

「……………キャベツ畑が欲しいの。」

「今度はお前か……どうしてキャベツなんだ？」

「そ、それは………」

リリースは赤くなりながら黙ってしまった。

「……レイ、リリースに何を言ったんだ？」

レイは何も答えなかった。

「そういや、お前さん上申書出したろ。あれは却下されたぞ。」

そう言うレイは明らかに落胆していた。

するとリリースが口を開いた。

「あのね………」

コウスケはリリースの言葉を待った。

「……コウスケとの愛のためなの。」

「………は？」

コウスケには理解ができなかった。

キャベツ畑と愛が何の関係が有るのだろうかと

最も自分のために何かをしてくれるというのはかなり嬉しく思っていたが……

「私も碓君との愛のために……」

レイは少し小さな声で言っていた。

「よくわからん。キャベツと愛が何の関係が有るんだ？」

コウスケがそう言うのとレイとリリスは驚いていた。

「特務一尉……知らないんですか？」

「何が？」

「リリンの子供ってキャベツ畑から取ってくるんでしょ？」

.....

.....

.....

.....

.....

暫く時間が止まった。

「子供がキャベツ畑から？」

「そうよ。」

「伊吹二尉から教えてもらいました。」

コウスケは二人の顔を見る。

二人とも全く同じ顔をしていた。

真面目に言っているようだ。

「……………ぶっ……………」

コウスケはプルプルと震えだしていた。

コウスケの様子がおかしいことに二人が気付いた。

「特務一尉？」

「コウスケ？」

「ぶわはははははははは……………」

突然腹を抱えて笑いだしたコウスケに二人は驚いていた。

「どうしたの？」

「何故、笑うのですか？」

「あく、おかしい……………ぶっ……………子供が……………キャベツ畑から……………」

そう言うコウスケにリリスが恐る恐る聞いてきた。

「もしかして違うの？」

「当たり前だろ！ キャベツの子供はキャベツだ！ 人になるわけがないだろ！ どこ

のおとぎ話だよ！ あははは……………」

笑うコウスケをよそにレイとリリスはこれ以上ないというほど落胆していた。

「そ、そんな……………」

「嘘だったなんて……………」

すると二人からメラメラと炎が舞い上がってきた。

「伊吹二尉……許さない……」

「LCLに還してあげましょう……」

・・・

同時刻

「くしゅん……」

伊吹マヤがくしゅみを一つ上げた。

「どうしたの？ 風邪かしら？」

赤木リツコが心配そうに伊吹を見ていた。

「いえ、大丈夫です。」

「ここのところ残業が多いからね。」

技術開発部技術局一課に所属する二人は何かしらと多忙であった。

「今日はここまでにしていきましよう。」

「いいんですか？」

「明日もあるのし、ここで倒れたら大変ですもの。」

「わかりました。先輩、お疲れ様です！」

・・・

同時刻

NERV第二発令所

「これは……」

「第三新東京市内にてATフィールドの発生を確認！」

MAGIの警告を受けて青葉と日向が同時に動いた。

「場所はどこだ！」

発令所にいた冬月が問う。

（夜襲か！）

時刻はすでに夕方になっていた。

今までの使徒は必ずと言っていいほど昼に襲来していた。

（奴らも知恵を見につけたということか……うかうかしてられんな。）

冬月がそう思うと青葉が報告する。

「出ました……これは……」

「報告を続けろ。」

「すみません。コンフォート17……綾波特務一尉の家です！」

青葉の報告に発令所の時が止まった。

「それってリリースじゃないのか？」

日向がそのように言う。

「……MAGIもリリスであると判断しています。」

冬月はため息をついた。

「……誤報だ。日本政府にはそう伝える。」

（綾波特務一尉、何をしているのかね……）

冬月はそう考えながらSEELEにどのように報告するか考えをまとめることにした。

・・・

綾波家

怒りに震えている二人にコウスケはさすがに焦った。

……………リリスのATフィールドでテーブルがきしみ始めていたのだ。

リビングには罪のないテーブルの悲鳴が響いていた。

「お、落ち着けよ。」

「落ち着いていられないわよ！」

「そうです！」

リリスはおろかレイもいつにない強い口調であった。

「伊吹二尉はその手の話を嫌うからな。だからそのようにごまかしたんだろ。そんなに

怒るな。」

そう言うのと二人は少し落ち着いた。

「コウスケとの子供ができると思つたのに……」

「私も碓君との……」

明らかに落胆していた。

するとリリスが

「コウスケ！ 教えて！ どうすれば子供ができるの！」

とコウスケに近づきながら言うのであつた。

「へ？」

「特務一尉、教えてください！」

レイも詰め寄ってくる。

「お、おい！ 落ち着け！」

「教えて！」

「教えてください！ 愛し合えば子供ができると言うのも嘘なんですか！」

なかなかの剣幕で二人が詰め寄ってくる。

「特務一尉は教えてくれると言つていた。でも、まだ教えてくれない。」

「そうよ！ 嘘はよくないわよ！」

じつと二人が見つめてくる。

コウスケは人知れず汗をかいていた。

(不味い……これは教えるまで逃がしてくれそうにない……)

退路を確認したが、どこにも逃げ場がなかった。

それにリリースにはATフィールドがある。

それで拘束されてしまえばコウスケは逃げられない。

かと言って事実を言うのもさすがに恥ずかしかった。

それに言ってしまうと二人はすぐに実行するだろう。

ふとコウスケは気付いてしまった。

既にATフィールドで拘束されていることに……

「わかった！ 教えるから！ 少し離れてくれ！」

「本当ですか？」

「ああ！」

「わかったわ。」

不意に体が自由になった。

少し安心したがコウスケは完全に安心しきれていない。

(どうする!? ……どうすればいいんだ！)

「早く教えて。」

「特務一尉。」

二人がじつと睨みながらせかしてくる。

逃げることもできない。

「実はな……………」

コウスケが口を開くと二人が息を飲んだ。

（どうする！）

「ハ……………」

「ハ？」

「……………コウノトリが運んできてくれるんだよ。」

切羽詰まったコウスケはするように口走っていた。

コウスケの言葉に二人は驚いていた。

「コウノトリが運んできてくれるのですか？」

「そ、そうだよ。」

「でも、どうやって？」

「人が愛し合うとな、子供の国からコウノトリが二人に合う子供を運んでくれるんだ。」

（やっちまった…………）

驚いている二人をよそにコウスケは内心で罪悪感に囚われていた。無論コウノトリが運んで来てくれるわけがない。

だが、こうするしかコウスケは逃げられないと思ったのだ。

「それじゃ、いつか運んできてくれるのね。」

「ああ……」

「私にも……」

もはやコウスケは何も言えなかった。

何故ならレイとリリスは期待で目を輝かせているのだから……

……

「まだ来ないわね。」

「早く来てほしい。」

レイとリリスは家に帰ると必ずベランダに出るようになった。

……コウノトリを待っているのだ。

そんな二人の後ろではコウスケが何とも言えない表情で紅茶をすすっている。

嘘だというのは簡単だ。

だが、その後の処理が大変難しいのだ。

嘘だと知られた時が怖くてどうしようもないのだ。

そのことを相談しても

「妻と娘にそう言うことを教えるのは夫であり、父である綾波の仕事だろ？」

「コウスケ君も大変ね。」

「リリスには実践しちやえば？」

「いつか本当のことを教えないといけないですね……」

「コウスケ、頑張つてね。」

「……問題ない。リリスとレイに関しては君に任せる。」

「綾波特務一尉、すまないが君に任せるよ。」

「ぼ、僕に聞かれても……」

「いつそのこと事実を話せばいいんじゃないですか？ 俺は嫌ですけど……」

「不潔……」

「綾波特務一尉が悪いですよ。第一、そうやっていつも……（省略）」

「知るか。」

「そんなことを私に聞かないでください。」

『綾波特務一尉、期待している。』

などと返ってきた。

（誰か！ 何とかしてくれ！）

内心でそのように叫ぶしかないコウスケであった。

・
・
・

後日、本当のことを知った二人がコウスケをどのように扱ったのかは記されていない。

ただ、コウスケとシンジは二人を説得するのにだいぶ苦労させられてということだけは確認されている。

何も起こらなかつたことに落胆したゲンドウとキールをはじめとするSEELメンバーがそのことを議題にしているとの情報もあるようだ。

レイの弟か妹ができる日も近いかもしれない……

それともゲンドウが狂喜乱舞する日の方が近いのかもしれない……

読者の皆さんはどちらがいいでしょうか？

EX 4 行き違い

「よし、揃ったな。」

NERVの会議室でコウスケは皆を見ながら言う。

皆と言ってもコウスケの他に四人いるだけだ。

「準備の方はどうだ？」

「いきなりの話だったからちよつち慌てたけど、あの日には間に合うわよ。」

「場所の確保はできてるし、人数も多くないけど確保済みよ。」

コウスケの後にミサトとリツコが続けて言う。

リツコはコウスケに何かのリストを差し出した。

「あまり人が多すぎても困るだろうからこれくらいでいいだろう。」

コウスケはリストに満足すると一人の少年の方に向いた。

「それでシンジ君の方はどうだ？」

「それが……まだちよつと……」

「いまだに悩んでるわよ。全くそんなに悩む必要は無いって言ってるのに。」

歯切れの悪いシンジの言い方にアスカがきっぱりと言い放った。

「しょうがないだろ！　こういうのは初めてなんだから……」

「本当にバカね。あの娘ならあんたのあげるものなら何でも喜ぶわよ。」

「そうかな……」

そう言つてシンジは悩み始める。

「……まあ、時間はまだあるからじっくりと考えてくれ。」

そう言いつつもシンジの態度にコウスケは少し満足そうだった。

「そういうコウスケ君はどうなの？」

ミサトは少しにやけながら言う。

「……俺もまだだ。」

「あら、以外ね。この話を持ってきた時にはもう考えてあると思つてたのに。」

リツコがコウスケの答えを聞いて言う。

「いつそのこと自分にしちやええば？」

「既に夫婦となつてるのに俺をあげるなんて葛城は何を考えてるんだ？」

「コウスケ君も言うようになったわね。」

リツコがからかうように言った。

だが、コウスケ以外には少し残念そうに聞こえるのであった。

「とにかくあの二人には情報が漏れないようにしてくれ。」

「別にいいけど……隠れながらやる必要はないんじゃないの？」

アスカの声に一同は少し頷いた。

「あの二人に取ってこれは初めてのことだろう？ できるだけ喜ばせてやりたいんだ。」

「そうね……レイにこんなことをするなんてあの時は考えられなかったから……」

リツコは自嘲するように言い放った。

「もう済んだことをくよくよ言ったところで何も変わらないだろう？」

「そうよ、リツコ。今、大事なものはこれからでしょ？」

「そうね……ありがとう、二人とも。」

そう言うとりツコは優しく微笑んでいた。

「もう時間も遅いから今日はこれくらいにしよう。各員、準備を怠るなよ。」

・
・
・

同時刻

綾波家ではコウスケを除いた三人が夕食を取っていた。

リリースはコウスケが帰ってくるまで待っているつもりだったのだが……

「帰りが遅くなるかもしれないから、先に食べていてくれ。」

とコウスケに言われたため先に食べることにしたのだ。

最もその姿はかなり寂しそうにしていた。

「渚君。」

レイが不意にカヲルを呼んだ。

「どうしたんだい？」

「……碓君……いったい何をしてるの？」

「変なことを聞くね。」

「そう……」

レイはそう呟くと視線を落とした。

「ねえ、カヲル？ コウスケも何をしてるの？」

「今度はリリスですか？ あなたたちがなんで……」

カヲルはそこで言葉を切ると少し考え込んだ。

「……そう言うことですか。」

カヲルは納得したという顔つきになった。

カヲルがふと気づくと二人は全く同じ顔でカヲルを見ていた。

瞳からは少し不安が見て取れる。

「そんなに心配しなくてもいいですよ。」

「渚君は知っているの？」

「知っているよ。」

「どうして私たちには何も言ってくれないのかしら……」

リリスの言葉を聞いたカヲルは困ったような顔つきになった。

「失礼ですが、自分のことをもう少しよく知ったほうがいいですよ？」

それを聞いたリリスは頭に疑問符が浮かんでいる。

一方レイはあきれたような顔つきになっていた。

「それはあなたにも言えることだわ。」

「僕？ いったいどういうことだい？」

レイはかなりあきれていた。

これがアスカなら

「あんだ、バカ〜？」

と言われていただろう。

いや、この場合はビンタかもしれない。

「渚君はアスカのことどう思っているの？」

「よく畑仕事を手伝ってくれるし、太陽みたいで明るいリリンだね。でも、シンジ君みたいに繊細な心の持ち主だよ。」

「へえ、よく見てるわね。」

一見するとカヲルは無関心そうに見えるのだが、思った以上に人を見ていることにリ

リスは感心していた。

「ただ……」

カヲルは顔を顰めながら実に不可解そうにしていた。

「僕の前だとすぐに逃げ出すんですよ。」

それを聞いたレイはニヤリと笑った。

アスカをからかういいネタが上がったとでも思っているのだろう。

そこら辺はレイの父親たるコウスケの影響である。

最もそれを指摘されるとレイは否定する。

だが、レイを知る者にとってはそれ以外に考えられない。

あの碓シンジですらそうだと思っている。

シンジは当初、シンジの父親である碓ゲンドウの影響だと考えていた。

だが、レイがそのように笑うようになったのはコウスケと同居した後からである。

そのように理屈で考えた結果、コウスケの影響であると結論を出したのであった。

時々、そのように笑いながら洞木ヒカリをからかう姿を見ながら、それは真似しない

でほしいとはシンジが内心で思っていたりする。

「被写体としてはかなりいいのに、あの笑い方はないよな。」

とは相田ケンスケの言葉である。

そのように言うもののケンスケは既に写真を用いた小遣い稼ぎを止めており、カメラにかなり熱意を持って取り組んでいる。

とは言っても写真を頼まれたら断るようなことはせず、本人の許可をもらってそれを譲渡したりはしているらしい。

「他のリリンの前ではそんなことないのに……」

カヲルは考え込んでしまった。

その姿にレイはあきれていた。

「そう……あなたも特務一尉と同じなのね。」

「どういうことだい？ 僕がルシファーと同じ？」

「レイの言いたいことはわかるわ。」

納得するリリスをよそにカヲルは首をひねっていた。

「僕がルシファーと同じ……戦闘機には乗れないし、煙草を吸うわけでもないし、綾波でもない……リリンについてよく知るわけでもない。だから今回、ルシファーが考えた作戦には参加できないのだし……」

「コウスケが考えた作戦って何？」

カヲルが呟いた言葉の中にリリスに取って聞き捨てならないものがあつた。

「どうしてリリスが知っているんですか？ さつきまでは知らないはずだったのに」

……」

カヲルは大真面目に返していた。

「渚君……口から出ていたわ。」

「なんてことだ……僕としたことが……」

そのように和やかな雰囲気であるが、リリスの心の中では一つのこと集中させていた。

（コウスケが考えた作戦って何なのかしら……どうして私には何も言ってくれないの？）

それがもやもやとなってリリスの頭に引っかかっている。

コウスケが帰宅してもそれについて聞くことができなかった。

……

「うゝむ……」

コウスケは自分の執務室で唸っていた。

それをリリスは横から見ている。

「さつきから何を悩んでいるの？」

「む……いや、何でもない。」

「そう……」

ずっとこの調子である。

それでも業務に支障が生じるようなことは無い。

コウスケは何かを悩みつつもきつちりと仕事をこなしているからだ。

だが、そのようなコウスケを見るたびにリリースには先日、カヲルが言っていたことが頭の中をよぎる。

「コウスケ。」

「なんだ？」

「私に何か隠していない？」

そう言われたコウスケは少し動揺していた。

傍目からはわからないだろうが、コウスケをよく見ているリリースには感じられることだった。

「どうして私には何も言ってくれないの？」

「い、いや……そんなに大した事じゃ……いや、大した事でもあるんだが……」

コウスケはしどろもどろになっていた。

リリースはじつとコウスケを睨んでいる。

コウスケは冷や汗をかいていた。

「コウスケ君。ちよつち……」

執務室にミサトが入ってきたが、リリスを見て不味いという表情を隠さなかった。「あ、ああ……葛城か。」

そう言うとコウスケは立ち上がった。

「どこに行くの……」

かなり冷ややかなリリスの声であった。

「ちよつと……ほら……葛城の今後について話し合おうだよ。」

「なら、私も……」

「い、いや……リリスは大丈夫だ。ここで休んでくれ。」

そう言うとコウスケは逃げるようにミサトを連れて執務室を出ていった。

コウスケたちが出ていった後にリリスは受話器を手を取った。

『私だ。』

受話器からゲンドウの声が聞こえてきた。

『私よ。』

『リリスか。どうした。』

「コウスケがミサトと今後について話し合うと言っていたけど、何か聞いてる？」

コウスケは作戦局の二課課長、ミサトは一課課長であり、二人とも作戦本部の部長と

副部長でもあるのだ。

その二人が今後について話し合うということはNERVに取って重大なことでもある。

そのためそう言うことについてはNERVの総司令である碓ゲンドウに日時と結果を報告するようになっていた。

コウスケが来る前はすべて部下に投げっていた。

だが、総司令としてそれは不味いので結果だけでも知っておいた方がいいというコウスケの提言を受け入れたのだ。

最もすべてを知ることが不可能に近いので管理職レベルの重要な事は報告が行くようになっていた。

『いや、何も聞いていない。』

「そう……」

ここでリリスはコウスケが嘘をついたことを確信した。

『はっ……リリスま……』

ゲンドウが何かを言っていたが、リリスは構わず受話器を置いていた。

・
・
・

リリスは一人で第三新東京市に出ていた。

リリスの視線の先にはコウスケがいる。

今日もコウスケから先に帰っているように言われたのだが、コウスケが何をしていたのか知るために追ってきたのだ。

「いったい何を隠しているの？」

先ほどからそれしかリリスは呟いていない。

リリスの視線の先にいるコウスケは心なしかどこか嬉しそうだった。

本来ならばコウスケは人の気配を察知できるのだが、この時のリリスは自身のATフィールドを巧みに使い自身の気配を遮断していた。

こういう使い方はリリスがコウスケと付き合ううちに体得していたのだ。

コウスケが不意に止まった。

リリスはとつさに物陰に隠れた。

そつと様子を窺うとコウスケは何かを待っているように見えた。

それも嬉しそうに……

「何を待っているのかしら……」

それが不安でたまらない。

かなり長く感じられた。

するとコウスケに駆け寄る一人の女性が見えた。

NERVの制服を着ていた。

「あれは……………マヤ？」

NERV発令所のオペレータでリツコの助手をしている伊吹マヤだった。

「どうしてマヤが……………」

それ以上にリリスは言葉を続けられなかった。

伊吹が何かを喋った後にコウスケは頭を掻きながら少し赤くなっていたのだ。

そしてそのままどこかに行ってしまった。

信じられない光景にリリスは呆然としていた。

「どうして……………」

そこまで言うとりリスは先日見たTVを思い出していた。

リリスの主な情報入手方法は自宅のTVである。

休日などもコウスケと一緒にいる傍らでTVを見ることは日常となっていた。

コウスケ自身はあまり好ましく思っていないが、昼間にやるドラマなどもリリスは鑑

賞している。

「……………もしかして……………これが……………不倫？」

自分のことを妻とも言ってくれたし、夫婦だとも言ってくれた。

そんなコウスケが不倫をしているなど考えたくもない。

だが、今見たものはそのようにしか見えない。

帰りたくなくてもそこしか帰る場所がないリリスは力なく帰宅するのであった。

・
・
・

帰宅したりリスが見たものは困り果てた様子のカヲルと力なく椅子に座っているレイだった。

「遅かった……リリス、どうしたのですか？」

「………何でもないわ………」

そう言うとりリスは力なく椅子に座った。

本来なら喜んで夕食を準備するリリスだが、この時はそんな気分になれなかった。

「コウスケ………どうしてマヤと………」

リリスの呟きを聞いたレイが反応する。

「リリスも？」

「レイ？」

「碓君………洞木さんとどこかに行ってた……」

レイの口から衝撃的な言葉が出ていた。

「碓君………嬉しそうだった……」

レイもリリスと似たようなことをしていた。

シンジが隠れて何かをしている

それが頭に引っかかり、リリスと同じくシンジの後をつけていたのだ。そしてリリスと同じく衝撃的なシーンを見てしまったと言うわけだ。

「どうして？ 鈴原君の事も裏切る気なの？」

レイの言葉が重くのしかかる。

綾波家ではいつにない暗い雰囲気であった。

そんな雰囲気の中、カヲルがたまらずに口を開いた。

「もつとルシファーを信じていいと思いますよ。レイ君も……」

だが、実際に見たものから信じていいのかどうかわからない。

「……どうすればいいの……」

「おっい、今帰ったぞ。」

コウスケが帰宅してきた。

「ん？ どうしたんだ？ 二人とも。」

コウスケはいつになく明るく話しかけていた。

「……何でもないわ。」

いつになく暗いリリスにコウスケは疑問を感じる。

だが、深入りは避けるべきだとコウスケは判断した。

「ん？ 夕食はまだなのか？」

「ええ、まだです。」

答えない二人の代わりにカヲルが答えた。

「そうか……久しぶりに俺が作るとしよう。」

そう言つてコウスケは冷蔵庫の中を見る。

「……私はいらないわ……」

「……私も要りません……」

そう言うのとレイとリリスは立ち上がつて部屋に戻つて行つてしまった。

「お、おい……」

それを呆然と見送ることしかできないコウスケ

「いったい何なんだ？」

「ルシファー、あの二人は気づき始めてますよ。」

コウスケの眩きにカヲルが答えた。

「何!?!」

「ただ、変な誤解をしているようです。リリスはルシファーと伊吹二尉が一緒にいるところを目撃したようです。」

それを聞いたコウスケは慌てていた。

「なんだつて!?! じゃあ……」

「何をしていたかまでは見ていないようです。」

「そうか……」

コウスケは複雑そうにリリスたちが入った部屋を見ていた。

・・・

「なあ、リリス……」

「なに。」

翌日の綾波執務室はかなりぎすぎすした雰囲気であった。

その主たる原因は不機嫌そうな表情を隠そうとしないリリスにある。

「お前さんは誤解してる。伊吹二尉とは何でもないんだ。」

朝からこの調子なのである。

コウスケはあれこれと弁明しているのだが、リリスは一向に聞こうともしなかった。

「なら、何をしてたの？」

「それは……その……」

「もういいわ。」

そう言うとりリスは立ち上がって部屋を出ていこうとする。

この事態を解決するにはやはり真実を話すしかない。

コウスケがそう思い至るまでさほど時間はかからなかった。

「すまん。ちゃんと訳を話すから……」

そう言つてコウスケはリリスに駆け寄るが、何かに阻まれた。

コウスケは勢い余つて尻餅をつくことになる。

「もういいつて言つたでしょ。」

リリスの前にATフィールドが張られていた。

コウスケはリリスが部屋を立ち去るのを呆然と眺めることしかできなかつた。

その後もコウスケはめげずに何度もリリスと話そうとするが、そのたびにATフィールドに阻まれることになる。

・
・
・

夜、綾波家にはコウスケを除く三人が席に座っていた。

ただ、リリスが一向に不機嫌であり雰囲気は最悪であった。

「特務一尉、遅い。」

「どうせマヤや他の人とよろしくやってるのでしょ!？」

それを聞いたカヲルの顔に明らかかな表情が出ていた。

怒りだ。

「リリス、それではルシファーがかわいいそうですよ。今日と言う日をどれだけ楽しみにしていたかあなたにはわからないのですか？」

「どういふこと？」

首をひねっているリリスにレイが答える。

「……今日、お祝い事をする予定だった。碓君がそう言ってた。」

「お祝い事？」

「そしてリリスとレイ君はこういうことは初めてだろうから驚かせて喜んでもらいたかったそうですよ。」

「碓君が洞木さんと一緒に居たのも、その準備だと言ってた。」

そこまで聞いてリリスの頭の中で物事が自然と整理されていった。

「それじゃ、この前マヤと一緒に居たのも……」

「そう考えるのが自然ですね。」

その時、綾波家の玄関が開いた。

「おい、しつかりしろ。」

「お前らしくないぞ。」

「俺だつてこういう日があるに決まってるだろ！」

加持と剣崎に続いてコウスケの声が聞こえてくる。

少しろれつが回っていないようだ。

コウスケの脇を二人が支えながら中に入ってきた。

「すまん。綾波がどうしても今日は飲みたいてっついて行ったんだが……」
「予想以上に飲んで酔っているんです。」

加持と剣崎は少し赤くなっているもののしつかりした足取りであった。

それに比べてコウスケはふらふらしており自分の足で歩くこともできないようだった。

「ちよつと、大丈夫なの？」

リリスの声を聞いたコウスケは赤くなっている顔をあげた。

「なんでこんな所に連れてきたんだ！」

「ここがお前の家だろ。」

加持の言葉にコウスケは鼻を鳴らした。

「どうせもう俺の居場所はないんだ！ こんな所に連れてくるな！」

「お前は酔ってるんだ。少し冷静になれ。」

剣崎がコウスケを咎める。

「そうよ。少し休みましょう。」

「うるさい！」

コウスケの大声にリリスがびくりと反応した。

「昼間はあんなに……虫けらのように追い払ったくせに……今更、女房面するな！」

「綾波！ いい加減にしろ！」

「一時の感情に身を任せるなんてお前らしくないぞ。」

加持と剣崎に言われてコウスケはしおらしくなった。

「……………そうだな。すまん。」

コウスケは二人の手を振りほどくとふらふらとしながらもどこかに行こうとした。

「どこに行くんだ。」

「NERVに行つて……………少し頭を冷やしてくる。」

そう言つてコウスケは出ていった。

「ねえ……………コウスケ……………どうだったの？」

「最初は静かだったんだけどな……………」

「その後なだめるのに苦労しました。」

コウスケは飲み始めていくらかたつた頃、急に怒り出したようだ。

「伊吹二尉と一緒にいただけで浮気なんて決めつけやがって！」

その後、急に暗くなり

「まあ、俺が悪いんだな……………変にこだわり過ぎた。」

などと言つていたようだ。

そして最後には

「昼間のあいつの態度はつらかった……俺にはリリースしかいないのに……あいつはそうじゃないのかもしれない……」

などと言いつつ泣き出したそうさ。

それを何とかなだめつつここまで連れてきたそうさ。

「二人とも……ごめんささい。」

「別に大丈夫さ。俺と綾波の仲だからな。」

「あれだけ感情を爆発させるなんて……綾波はそうとう今日のパーティーを楽しみにしていたんですね。」

それを聞いたリリースは胸が痛くなるのを感じた。

それと同時にそこまでコウスケがこだわった事とは何なのか

それが疑問だった。

・
・
・

翌日

NERVに登庁したりリリースはさつそくコウスケを探すことにした。

最初はいつもの執務室に向かったのだが、その主はどこにもいなかった。

なのでNERV職員に聞きまわりコウスケを探すことにした。

コウスケはジオフロントに出ている

それを聞いたリリスは速足でジオフロントに出ていた。

暫く探しているとコウスケはジオフロントにある湖のほとりで一人たたずんでいた。

その姿は完全に覇気がなくどことなくどんよりした感じであった。

「コウスケ……」

リリスが声をかけるとコウスケは気付いた。

だが、振り返ることは無かった。

「リリスか……昨日はすまん。酔っていたとはいえ愚にもつかないことを言っ

まった。」

「私も……ごめんなさい……」

コウスケは何も答えない。

リリスもこれ以上何を言えればいいのかわからない。

暫く沈黙が続いた。

「私……怖い……あなたは私のことをリリンだと言ってくれるけど、私はリリンとは

違う。」

コウスケはそれを静かに聞いていた。

「だからそれが理由でいつかはあなたが離れていくんじゃないのかって……」

「知っている。」

コウスケの答えにリリスは驚いていた。

「お前さんの言動にはどこかしら人とは違うなんて言うニュアンスが少し感じとれたからな。それを不安がっていることも知っていたさ。」

コウスケは自嘲気味に嗤っていた。

「だというのにお前さんを不安がらせるようなことをしたんだ……」

コウスケは振り返ると真剣にリリスを見つめていた。

「リリスは人だ……それは自分自身に言い聞かせていたのかもしれない。」

「コウスケ……」

「リリスはリリスでここにいるのにな……無理やり人の枠に当てはめようとかどこかで思っていたのかもしれない。」

それを聞いたリリスはコウスケに抱き付いていた。

「お、おい……」

「ありがとう……今までそんな風に真剣に考えてくれるリリンなんていなかったから……」

「俺だってお前さんみたいにまっすぐ見てくれる人はいなかったからな。」

そう言うときコウスケはリリスの頭を撫でていた。

何故かわからないがこうするべきだと思ったのだ。

「昨日……楽しみにしてたって聞いたわ。」

「はあく……あいつら喋ったんだな。」

コウスケは少し困ったように頭を掻いていた。

「それで何をしようとしたの？」

「そこまで聞いて無いのか？」

「昨日、お祝い事するほどのことなんてあったの？」

それを聞いたコウスケは突然笑い始めた。

「そうか……わかってなかったんだな。」

「へ？」

「実際は違うだろうが、昨日はお前さんとレイの誕生日になっているんだ。」

そう言われてリリスは思い出した。

昨日は3月30日であることに

「だからお前さんの言うリリン式のお祝いをしようと考えたんだ。」

「そうだったんだ……」

「全くあんなことになるなんて……策士、策に溺れるとはこのことだな。」

コウスケは困ったような表情になった。

するとコウスケははっと何かを思い出した。

「そうだ。一日遅れたが……」

そう言うところウスケはポケットから小さな箱を取り出した。

「誕生日のプレゼントだ。」

リリスはそれを受け取ると箱を開けた。

中にはなんの飾り気のないがどことなく気品がある指輪が一つ飾ってあった。

「これは？」

「うむ………所謂、婚約指輪ってところかな。」

コウスケは恥ずかしそうに続けた。

「戸籍上は夫婦になつてゐるが、今までそれらしいものをあげたことは無かつたからな

……」

相当、照れくさいようでコウスケはリリスとは違う方向を向いていた。

「ありがとう……」

もはやリリスはそれしか言えなかつた。

他の職員たちが呼びに来るまでコウスケたちはそのままの姿でずっといたそうだ。

コウスケがあげた指輪は今もリリスの左手の薬指にはめられている。

第38話 I f 選択

遙か昔

神は七日間でこの世を作ったとされる。

1日目 暗闇がある中、神は光を作り、昼と夜が出来た。

2日目 神は空（天）を創った。

3日目 神は大地を作り、海が生まれ、地に植物を生えさせた。

4日目 神は太陽と月と星を創った。

5日目 神は魚と鳥を創った。

6日目 神は獣と家畜をつくり、神に似せた人を創った。

7日目 神は休んだ。

神は赤き土から自らを模った一組の男と女―人を作った。

男と女は神の作った楽園で過ごすのが、長く続かなかつた。

女は男に對等の地位を要求するが、男がそれを断った。

女はそれに絶望し、男のもとを離れる。

………

もし、対等の立場を求めたのが男であったのなら
女はどうしたであろうか

・
・
・

最近のリリスの様子がおかしい

コウスケは執務室で業務を行いながらそう考えていた。

コウスケとリリスが会う時間は家以外にあまりない。

レイが出てくる時間はシンジと一緒にいるときが多い。

そのため、コウスケといるときはリリス、シンジといるときはレイなどという構図が
出来上がっていた。

レイが出ているときはリリスは眠るようになっている。

そう言う取り決めが二人の間であつたらしい。

原因はリリスのことを初めて紹介した時のことだ。

リリスがレイの心情を吐露したことをレイ自身が恨んでいた。

そのための取り決めなのだ。

最もリリスが出ているときにレイの心情がリリスに漏れているんじゃないかとコウ
スケは疑問に思ったが……

コウスケ自身レイという時間が減っていることに多少不満はあるものの、リリスに面

として言うことは無かった。

それが何故かはわからない。

一つ言えることはコウスケがリリスとの時間をそれなりに大事に思っていることは確かだ。

そんな時間にふと感じたことであつた。

「……リリス、いったいどうしたんだ？」

「何が？」

「……いや、なんでもない。」

そう言つてコウスケはリリスを見ていた。

どことなく悲しそうに見えた。

何かを思いつめているように思えた。

リリスの異変を感じ取つたのは、加持リョウジを救出した後である。

どんなに揺さぶつても口を割らないためコウスケは断念するが、やはり気になつてしまふのであつた。

そんな時、コウスケの執務室にリツコが現れた。

「ん？ 赤木か。……休憩時間じゃないよな。」

コウスケは時間を確認しながら言う。

コウスケが休憩するにはまだ早かった。

「……あなたに見てもらいたいものがあるの。」

そう言つてリツコは一つの資料を差し出した。

表情がないリツコに疑問を感じる。

こういう表情のリツコは何か嫌なことがあつた時のものである。

「……レイの定期検診の結果？」

レイはリツコのもつで定期的に検診を受けている。

とは言つてもコウスケと同居してからというものの特に異常がないため、その頻度は大きく減つていた。

先日、リリースが現れてから初めての検診があつた。

そのデータをリツコは持つてきたのだろう。

「なんでわざわざ持つてきてくれたんだ？ データを送信してもよかつたら。」

コウスケのPCはNEERVのネットワークに繋がっている。

そのためこうしたデータはネットで送信した方が早いのだ。

実際、レイの定期検診のデータはずつとネットで送られてきていた。

「（ ）がことだけに直接渡しに来たのよ。」

「……そうか。」

どこことなく釈然としないものを感じるが、コウスケは資料を見ることにした。

「……………そう言うことか。これは本当なんだな。」

「……………ええ。」

「これを知っているのは？」

「私とコウスケ君だけよ。」

「……………手立てはあるのか？」

「今のところないわ。」

「そうか……………」

表向きでは平然としているコウスケを見てリツコが不思議そうに言う。

「もっと怒ると思ったのだけど……………」

「それでどうにかなる問題なのか？」

「それもそうね。」

．．．

家に帰宅したコウスケの前にはレイとシンジがいた。

リスにはシンジとレイに話したいことがあると言って代わってもらった。

「すまないな。急に呼び出して。」

「いえ、大丈夫です。」

レイはぴつとりとシンジの横に座っていた。

既に夕食は済ませておりシンジの前には紅茶があった。

「……これは、綾波が入れたものですね。」

一口飲んだシンジが答えた。

「よくわかったな。」

「何となくですけど……」

「愛は格別の調味料と言うやつかな？」

そう言うとシンジはお約束通り赤くなってしまった。

「愛が調味料になるんですか？」

レイはきよとんとししながら聞いてくる。

「ああ、そうだよ。」

コウスケがそう答えるとレイは紅茶を一口飲んだ。

「……特務一尉のと変わリません。」

「そりゃ、そうだ。自分の愛しい人が作ってくれたものなら嬉しいし、おいしく感じるものさ。」

そう言うとレイは少し考え込んだ。

「……リリースが作ったものもそうなのですか？」

「……………は？」

思わず間拔けな返し方をしてしまった。

「リリスが作った料理もそう感じるのですか？」

「……………誰が。」

「特務一尉。」

コウスケは少し動揺していた。

まさかレイがこんなことを言ってくるとは思わなかったのだ。

横にいるシンジも目を丸くしていた。

「そんなわけではないだろ。」

「……………嘘。今日の夕食を食べてる時、とても嬉しそうだった。」

レイの言葉にコウスケは疑問を持った。

「……………レイが準備したものだろ？」

「違います。リリスが準備しました。」

レイはニヤッと笑っていた。

そう思うと確かに味がいつもと違うものだった。

「どうでした？」

「どうだったと聞かれてもな……………」

今までで一番、美味かった。

そう言うのをグツと堪えた。

「……まあまあだな。」

そう答えたがレイは相変わらずニヤッと笑っている。

「……よくわかりました。」

納得しているレイに釈然としないものを感じる。

するとシンジが口を開いた。

「……コウスケさん。」

「なんだ？」

「今、すごく嬉しそうでしたよ。」

「……何を言ってるんだ。」

そうは言うが実はコウスケは嬉しかったりする。

リリスが料理の練習をしていることは知っていたが、まさかこんな短期間で上達するとは思わなかったのだ。

黒焦げの何かを食べさせられた時が一番死を覚悟したときだった。

……ATフィールドで拘束されてはコウスケも抵抗できなかつたのだ。

その後の記憶はコウスケには無い。

気付いたら朝になっていて、リビングで起きた。

横にはレイが寝ていたが、目がかなり腫れていた。

コウスケが倒れたことに驚いてリリスは泣いていたのだ。

「コウスケさん……もしかして……」

シンジが言おうとしていることを察知したコウスケはすぐに反応した。

「そんなこと……」

「あります。」

レイに妨害された。

「何を根拠に言ってるんだ？」

「特務一尉はリリスという時、一番嬉しそう。」

「それはレイが勝手にそう思っているだけだろ。」

「そんなことない。……リリスが抱き付く時、特務一尉は優しく受け止めてる。」

「それは……しようがないだろ。」

「嫌なら嫌だと特務一尉は言える。でも言わない。」

実際コウスケは危ないとは言いが嫌だとは言わなかった。

「それにリリスを見ている時の特務一尉の目は私の時よりも優しい。」

思わぬレイからの猛攻であった。

レイはニヤリと笑っている。

「そうだったんだ。コウスケさんってリリースさんのことが好きだったんだ…」

シンジは意外だという表情を隠さなかった。

「そんなことない。」

「本当にそうですか？」

レイがじっと見つめてくる。

「当たり前だろ。」

「リリースに代わっても同じことが言えますか？」

「ぐ……」

(本人を目の前にして……)

そう考えたときリリースの悲しそうな顔が浮かんだ。

コウスケは何も言えなくなった。

二人はそんなコウスケを楽しそうに見ていた。

・
・
・

コウスケはなんとか切り抜けた。

レイが学校に登校する前に鏡の前で笑顔を作る練習をしていることをばらすという、かなり大人げない切り抜け方だった。

レイは真つ赤になっりながらコウスケに謝ることになる。

「シンジ君、何故レイがそんなことしているのかわからないって顔だな。特別に教えてやろう。レイはな、いか…」

「特務一尉ごめんささい。私が悪かったです。敗北を認めます。だからそれ以上言わないで…」

「別いいだろ？ それにもうばれたみたいだしな。」

「……特務一尉のいじわる……………」

ちなみにレイがそんな練習をしている理由は、とある少年のためにだ。

シンジは夜遅くになったということで葛城家に帰って行った。

レイはリリスと代わっている。

コウスケはリビングで残業を片付けていた。

「ねえ、コウスケ。」

そんなコウスケにリリスが声をかける。

「どうしたんだ？」

「シンジを呼んだのって何か話したいことがあったのよね。」

リリスがいつになく真面目な顔になっていた。

「……そうだよ。」

「何の話だったの？」

「……………レイは？」

「寝てるわ。」

「そうか。」

コウスケはP Cを閉じた。

「今日、赤木がレイの定期検診の結果を持ってきてくれた。」

「どうだったの？」

「……………」

これを言うべきなのか

コウスケは迷っていた。

これを信じたくないという心情が働いていた。

だが、決心してコウスケは口を開いた。

「一か月後にレイは死ぬ。」

リリースは目をぱちぱちさせていた。

「死ぬ？ ……レイが？」

「心臓の組織が衰弱し始めているらしい。 ……M A G Iの計算では持つても一か月だそうだ。」

「どうして？　今まではそんなことなかったんでしょ？」

コウスケは一枚の資料を差し出した。

レイの体の組織の活性度を示すものだ。

「この日を境に変わった。」

折れ線グラフは三つの坂で出来ていた。

一つ目は下り坂になっていて、コウスケと同居する前

最もコウスケと同居した日に近づくにつれて下り坂は緩慢になっていた。

真ん中は同居した後

緩やかながら上向きになっていた。

だが、それも突然下り坂に変わっていった。

それが三つ目の坂だ。

二つ目と三つ目の坂の境目をコウスケは差していた。

「この日って……」

「そう、俺とリリスが初めて会話をした日だ。」

忘れるわけがなかった。

あの時ほどコウスケが焦ったことは無かった。

「……もしかして私が原因なの？」

リリスの声は恐る恐ると言う表現が正しいほど震えていた。

「あくまで推測に過ぎないが、リリスが表に出てきたことが原因らしい……」

「なら、私がいなくなれば……」

コウスケは首を横に振った。

「そうしてもダメらしい。……衰弱が思ったより進行している。リリスが離れても一年がやっとだそうだ。」

「そんな……」

「……親より先に死ぬなんて親不孝な奴だな…………」

リリスは黙っている。

コウスケもそれ以上言う言葉が見つからなかった。

……

翌日

綾波執務室

コウスケはいつも通りに執務室にいた。

朝、レイはいつも通りに学校へ登校していった。

その様子から昨日の話をレイは知らないようだった。

ただ、コウスケは気がかりな事があった。

あの後、黙っていたリリスは

「ねえ、私が何かしても信じてくれる？」

などと言ったのだ。

いきなり何を言いだすのかと言いたかったが、リリスの目が真剣であったためコウスケは頷いていた。

ふと時計を見るとレイたちはNERVに登庁している時間だった。

「いったい何をするんだ？」

コウスケの眩きは人知れず消えていった。

・
・
・

同時刻

NERV第6ゲージ

ここにはアスカの搭乗機であるEVA式号機が格納されている。

初号機のある第7ゲージと作りは同じでEVAの顔の前にブリッジがある。

そこに青い髪の少女が一人

「行きましよう。アダムの分身、リリンの僕。」

その言葉と同時に式号機の目が光る。

・
・
・

NERV第二発令所

コウスケは警報を聞きつけて発令所に駆け付けた。

「状況は？」

コウスケの声に日向がすぐに応答した。

「EVA弐号機が起動しています！」

（弐号機が起動？ どういうことだ…）

発令所からの発進命令が出ていなければ、弐号機を使った実験もない。

弐号機が何故、起動したのかわからなかった。

「アスカは！」

「確認済みです。パイロット控室に移動中です。」

「無人です！ 弐号機にはエントリープラグが挿入されていません！」

（無人……ダメーでもないな…）

尚更わからなかった。

弐号機が何故、動けるのか…

この時、コウスケの脳裏にピンと来るものがあった。

（まさか…）

「セントラルドグマ周辺にATフィールドの発生を確認！ パターンブルー……使徒で

す！」

日向の報告を聞いてコウスケは誰が式号機を動かしているのかわかった。「モニターに出ます。」

発令所のメイソモニターを見てコウスケ以外の全員が驚いていた。ゲンドウや冬月ですら唸っていた。

「れ、レイちゃん!?!」

伊吹がかろうじて声を出せたようだ。

モニターにはNERV職員なら誰でも知っている蒼い髪の少女がひどく無表情で映っていた。

式号機はそれを守る騎士のようにそびえ立っている。

(リリス……何故だ。)

発令所にミサトとリツコも駆け込んできた。

「……レイ!?!」

「……………」

リツコは黙ってモニターを見ていた。

「これはどういうこと? コウスケ君!」

「綾波特務一尉……」

視線がコウスケに集まる。

前からは憐れみと同情

後ろからはどう責任を取るのか

上からは成すことを成し遂げろ

「……あれを第十五使徒と識別……个体名はリリスと名づける……」

「でも……」

「あれは使徒だ。レイの体に寄生したんだろ。……殲滅だ。」

「しかし……」

日向が何かを言おうとするが言えなかった。

コウスケが無表情でモニターを見つめていたからだ。

・・・

セントラルドグマ メインシヤフト

リリスは式号機を従えて下に降下している。

「今頃大騒ぎだね……」

リリスは悲しそうな表情になるが、それも一瞬だった。

「でも、あなたにとつては一石二鳥のはず……」

リリスが下を見ると、隔壁が閉まっていった。

「……来てくれるかな……」

その眩きは誰にも聞こえない。

・
・
・

NERV第二発令所

「初号機で追撃だ。……構いませんね。」

コウスケはゲンドウに確認を取った。

初号機は凍結処分が下されている。

その撤回を求めたのだ。

「わかった。初号機に追撃させろ。」

その指示を聞いてオペレーターが一斉に動き出した。

「何故、弐号機なのかしら?」

ミサトが言わんとしていることはわかる。

レイの体ならば零号機で行くこともできたはずだ。

「単純な計算だ。零号機で行けば追撃が増える……だからだろう。」

「それにシンジ君のことも考えてるのね。」

リツコが付け加えるように言った。

「シンジ君?」

「そうよ。使徒とは言えレイの体よ。」

「……そう言うことね。」

それを聞いたコウスケは

「すまんが、後を頼む。」

とミサトに言う。

「なんで？」

「……子供の尻拭いは親の務めさ。」

そうしてコウスケはゲンドウを見た。

「構わん。」

ゲンドウは一言言った。

コウスケは発令所を出ようとした。

「コウスケ君！」

ミサトが止める。

「大丈夫よね？」

「……刺し違えてでも止めて見せるさ。」

それだけを言うとコウスケは走り出した。

・
・
・

初号機エントリープラグ内

シンジは表立って騒ぐことは無かったが、内心では平然としていられなかった。
(綾波なわけがない……リリスさんどうして……)

そう思っていると式号機の姿を確認した。

「いた……」

初号機は式号機に迫いつくと式号機に掴みかかった。

式号機もそれに応じる。

初号機と式号機で取っ組み合いになった。

「リリスさん、どうして……」

「レイのためよ。」

「綾波の?」

シンジにはわけがわからなかった。

レイのためならば何故こんなことをするのか

「それなら止めてよ! どうしてこんなことをするんだよ!」

「ダメよ。……私の本体が必要なのよ。」

この時、シンジはこれもリリスの計画だったのではと考え始めていた。

サイドインパクトを起こすのに障害となるものを排するために人に近づいたのでは

「……リリスさんは裏切ったんだ……僕たちを……なによりコウスケさんを！」

「……あなたに何がわかるの……」

「そうじゃないか！ 今こうして……」

シンジは言葉を続けられない。

……リリスが泣いていたのだ。

「あなたに何がわかるの？ ……私はリリンと一緒に成れない。……リリンはリリンに惹かれ合うもの……コウスケだって……」

シンジはハツとなってリリスを見た。

「そんなことない！ コウスケさんだって……」

「下手な慰めはいらないわ。」

式号機がプログレッシブナイフを取り出し、初号機の胸に突き刺した。

その痛みがシンジにも伝わる。

「ぐ……このー！」

初号機も負けじと式号機の首に突き刺す。

「リリンにとつて忌むべき存在……それを使ってまで生きようとする……不完全でありながら不完全ではないのね……」

リリスは目を瞑った。

・
・

NERV第二発令所

突如大きな振動に見舞われた。

「どうしたの？」

「これまでにない強力なATフィールドです！」

「光波、電磁波、粒子も遮断しています！ 何もモニターできません！」

オペレータの報告を聞いたミスアトは呟く。

「まさに結界か……」

横ではリツコが何とかモニターしようと伊吹に指示を出している。

ミスアトは一人の男を思い出した。

「コウスケ君は？」

「ダメです。反応をロストしました。」

「……頼んだわよ。」

・
・

NERV通路内

コウスケは走っていた。

あと少しでターミナルドグマ最深部直通エレベーターにたどり着く

そう思った時、大きな振動が起こった。

「……やり過ぎだ。」

それをリリスがやったことを直感で感じた。

「……あのバカ野郎……」

コウスケはエレベーターに飛び乗った。

・
・

ターミナルドグマ　ヘブンズドア前

コウスケはついにたどり着いた。

後ろでは何かの音が聞こえてくる。

式号機と初号機が戦闘しているのだろう。

だが、徐々に近づいていることはわかった。

コウスケは暗い通路を進んでいく。

いつもなら嚴重な隔壁があるのだが、今は開いていた。

その隔壁を越えるとLCLの池と目的の人物がいた。

「リリス……」

コウスケが声をかけるとリリスは振り返った。

「来てくれたのね。」

よく見ると白い巨人に刺さっていたロンギヌスの槍が無くなっていた。

コウスケは特に気にせずリリスに近づいた。

「何をするんだ。」

「レイの治療よ。」

「レイの？」

「そのためには私の本体が必要なのよ。」

そう言うとりリスは白い巨人の方に振り返った。

「……止めないの？」

「何言ってるんだ。信じろと言ったのはリリスだろう？」

コウスケの方からリリスの顔は窺えなかったが、嬉しいという感情だけは伝わった。

「そうよね……ありがとう。」

リリスの体から一つの紅い光が離れた。

コウスケは膝から崩れ落ちるレイの体を抱きとめる。

赤い光は白い巨人に呑み込まれていった。

白い巨人―リリスが楔から離れてLCLの池に降り立った。

LCLが雨のようにコウスケたちを打ち付ける。

リリスが腕をコウスケの方に向ける。

途端にレイの体が光った。

光は徐々に薄くなり、やがて消えた。

コウスケはとっさにレイの状態を確認する。

「……見た目、脈、呼吸音ともに異常なし。」

そう言うときコウスケはほっとした。

それと同時に何かが倒れる音がした。

式号機だった。

頭には初号機のプログレッシブナイフが刺さっていた。

その先には初号機がこつちに歩いて来ていた。

『コウスケさん！』

「シンジ君か。」

『綾波は？』

「大丈夫だ。」

レイを確認した初号機はリリスに目を向けていた。

『リリスさん……ですね。』

『そうよ。』

レイと似ているがレイとは違う声が聞こえた。

リリスのどこから声を発しているのかわからなかった。

まるで心に直接語り掛けてくるような感覚だった。

『さて、私のしたいことは終わったし……その槍で刺してくれば元通りになるわ。』

初号機は動かなかった。

『……間違ってますよ。そんなこととしてコウスケさんが喜ぶわけないじゃないですか……』

「何を言ってるんだ？」

『リリスさんは死ぬ気なんですよ！』

「何!？」

コウスケはリリスに視線を送る。

「死ぬだと? いったいどういことだ!」

リリスはコウスケを見ていた。

なかなかの威圧を感じるが、コウスケはそれどころではなかった。

『そのままの意味よ。使徒を倒して終わり……ただ、それだけよ。』

「使徒って……まさか……」

『さあ、早くしてちょうだい。』

リリスは両手を広げていた。

『……やっぱりダメなのね。でも……』

コウスケはリリスの言葉にはつととなった。

「シンジ君！ 式号機を止めろ！」

コウスケの声に初号機が式号機の方に振り返る。

いつの間にか式号機はロンギヌスの槍のそばにいた。

初号機が止めに入る。

式号機はロンギヌスの槍を手にした。

初号機が式号機を後ろから羽交い締めにする。

『どうして邪魔するの？ あなたたちNERVの仕事でしょ？』

「なんでこんなことをするんだよ。」

『……こうすれば使徒として私が記録に残るわ。そうすれば覚えてくれるでしょ？』

「……バカ野郎……」

『何？』

「お前さんはバカ野郎だ。……こんなことするバカなんて一瞬で忘れるわ。」

コウスケの言葉にリリスは狼狽していた。

『……レイは治療したし、使徒は殲滅される。それに私がいなければサードインパクト

も阻止できるのよ。』

「だから死ぬのか？」

『そうよ。』

コウスケは俯いた。

後ろでは初号機と貳号機の争いが続いている。

「……初めてだったんだよ。」

コウスケはぼつりとはつきりと言う。

「俺のために何かをしてくれた人はお前さんが初めてだったんだよ。」

『それはコウスケが気づいてないだけ……』

「そうだよ。だからだ。」

『いったいなんのこと？』

「……昨日、料理を作ったのはお前さんだろ？ レイから聞いた。」

『それがどうしたの……料理ならレイだって……』

「確かに……でも今までで一番うまいと思った。」

レイの顔に滴がぼつり、ぼつりと落ちていた。

「もう、俺のために作ってくれないのか……」

リリスはただじつと聞いているだけだった。

・
・
・

NERV第二発令所

「……………綾波コウスケ特務一尉、只今戻りました。」

「〔綾波特務一尉！〕」

コウスケは発令所に戻っていた。

コウスケの姿を確認したミスアトが声をかける。

「コウスケ君！ 無事だったのね。」

「ああ、心配かけたな……………」

「全くですよ。反応がロストした時はもう終わりだと思いましたよ。」

青葉が軽い口調で言っていた。

「綾波特務一尉。」

発令所の上段にいるゲンドウが声をかけ。

「なんででしょうか？」

「……………リリースはどうした？」

ゲンドウの言葉に発令所のメンバーがじっとコウスケを見ていた。

「……………殲滅しました……………」

「……………そうか。」

「申し訳ありません。」

傍目からではよくわからないが、ゲンドウはかなり落胆していた。

すべてが終わればリリスがユイを救出してくれる

それが崩れてしまったのだ。

そんなゲンドウに落ち込むなど言う方が無理な話だろう。

「じゃあ、レイちゃんは……」

ゲンドウたちの会話を聞いた伊吹が恐る恐る声をかけた。

「レイは無事だ。」

コウスケの言葉に伊吹はほっとしていた。

彼女を含むオペレーターにはレイに寄生したとしか知らされていないからだ。

「今回はヘブンズドアまで侵入したからな。」

「人に寄生するなんて、使徒もバカじゃないんだな。」

「ともあれ、サードインパクトが阻止されてよかったです。」

発令所の所々からそんな声が上がってた。

「その……コウスケ君？」

「どうした。」

「大丈夫？」

「俺はいたって平常だ。使徒を殲滅できた。サードインパクトを阻止できた。レイも無

事だ。それでいいじゃないか……」

それでもミサトはコウスケをじつと見ていた。

瞳からはどう声をかければいいのかわからないと言いたげだった。

何故ならコウスケはいつも以上に……そう第十三使徒を指揮した時以上に無表情で佇んでいる。

そんなコウスケを見て、そしてリリースのことを知っているミサトがそのように反応したとしてもおかしくはない。

オペレーターたちもそんなコウスケをおかしく思っていたが、心労が重なったからだと考えていた。

その時、発令所にリツコが現れる。

それに伊吹がかなり素早く反応した。

「先輩！ レイちゃんはもうどうでしたか？」

「検査の結果、レイは無事よ。ただ……」

リツコは途中で言い淀んだ。

コウスケを見ながら今、ここで言うべきなのか迷っているようであった。

「どうしたんですか？」

「まさか……使徒に寄生されて何かあったんじゃない……」

青葉と日向がそのように言う。

それに促されるようにリツコはつづけることにした。

「コウスケ君……あなた、名実ともにレイの父親よ。」

リツコを言葉に発令所が騒がしくなった。

一方、コウスケは全く関心を示していないように見えた。

「ん？ 綾波特務一尉が父親なら、母親は誰なんですか？」

青葉がリツコの言葉を聞いて疑問に思ったことを話していた。

「……わからなかったわ。」

「わからない？」

「MAGIには世界中の人のデータが登録されているのにわからなかったの。……いたい誰なのかしら？」

とリツコは言うが大凡の見当はついていた。

ただ、目に見えて確証に繋がるものがないのと、殲滅されたりリスに係わるかもしれないことなのでそのように答えた。

だが、コウスケには自分がレイの父親になったという話が出た時から何となく予想はしていた。

それが今、確信に変わった。

「……あのバカ……こんな残し方しやがって……」

そうコウスケが呟いたのを聞いた者はいなかった。

発令所では使徒の殲滅とレイの無事を喜ぶ声で満ち満ちていたからだ。

コラボ記念 異世界からの来訪者

SEELEとの決戦が終結して数か月

今日も綾波家は平穏な朝を迎えていた。

家主であるコウスケはのんびりとテレビを見ていた。

「今日も変わらず世界は回るか……いいことだな。」

そんな暢気なことを呟きながらテレビを見ているなんて光景は綾波家の一員以外知らない。

最もそれを見たからと言って咎めるものなど誰もいない。

使徒と呼ばれる巨大生物との壮烈な戦争に勝ち残った今、NERVをどうするかなどの問題があるがそんなことはコウスケにとってNERVの存続だけ何とかなればどうでもいいのだ。

今のコウスケには国連軍からのスカウトがたびたび来るものの、そのすべてを断っている。

コウスケはもう国連軍に戻るつもりなどないし、生活の基盤が第三新東京市に完全にできているからである。

それにそんなことをすれば必ず騒ぎが起こるだろうし、場合によってはそれだけで人類滅亡なんてこともありうるのである。

人類の命運とイコールになっているコウスケはNERVに登庁する前にまったりとしていた。

「コウスケ？ 準備できたわよ。」

そんな声が聞こえた方向からリリスが現れた。

「それじゃ、行くか。」

コウスケはテレビの電源を落とし、玄関へと向かった。

そんなコウスケの横にはリリスがぴったりとくっついてる。

綾波家にリリスが来てからこのような光景はもはや当たり前となっていた。

こんなことになるとはNERVに来た当初は考えもできなかった。

今ではこんな日常が少しでも続いてくれればいいし、その努力を惜しむべきではないと考えている彼らである。

．．．

「今日は多いな。」

コウスケは自分のデスクにつまれている書類たちを見ながらつぶやいた。

「そうね。でも、大丈夫よ。」

そう言うリリスにコウスケは自然と微笑んでいた。

リリスがここに来た当初は全く戦力にならなかつたのだが、リリスの努力のかいもあつて今ではコウスケを十分にサポートできるようになっていいる。

ひらがなも書けなかつたことを考えれば、かなりの進歩である。

「そうだな。とつとと片づけるか。」

そう言うコウスケはいつもの仕事に取り掛かる。

コウスケの仕事ぶりはいたく真面目であり、些細なミスなどをかなり正確に見つけ出す。

無論、それで厳しく注意などはしないがあまりにもひどい場合は呼び出したりなんかもする。

それは冬月クラスの説教などと呼ばれており、一般職員はおろか上級職員にも恐れられていることだったりする。

そのため次期NERV副司令は綾波コウスケであるなんて言う冗談がNERV職員の中では飛び交っている。

「……………リリス、この書類と関係あるものがあつたよな?」

「え〜と……………これね。あと、これも関係ありそうだけど……………」

「そうだな……………それはそつちで預かつててくれ。」

このように基本的にはコウスケとリリスの二人で仕事に取り掛かっている。仕事中的コウスケは少し目つきが鋭くなる。

NERVの職員たちはそんなコウスケの姿しか知らない。

一方、レイやカヲルたちはぼーとしていた姿をよく見かける。

コウスケのそんな二つの顔を平均的に見ているのはリリス以外にいない。

ちなみにリリスの評価は「いつ見ても見飽きない顔」だそう。

「そう言えば、カヲルのテストは午後からだったな。」

「ええ、行くんでしょ？」

「まあ、あいつが帰ってくるまで俺が預かっているからな。」

コウスケがあいつと言った時にリリスの顔が若干曇った。

「……たのむから、あいつが帰ってきた時に喧嘩なんてするなよ？」

「……わかってるわ。」

リリスが顔を曇らせる相手が誰なのかはここでは追及しない。

ただ、言うことはリリスがその相手と喧嘩すればNERVの総力を挙げて止めなければならぬとだけ言っておく。

リリスにとってはライバルとも言える相手なのだから……

そういう意味では綾波コウスケは世界の中で要注意人物と言っても過言ではない。

「さて、少し早いけど昼食にでもするか。」

そう言うのとコウスケは一つの弁当箱を取り出す。

コウスケたちは昼食を自分の執務室でとるようにしている。

本人たちは全くそんな風に考えていないのだが、周りの職員たちには神聖不可侵なリア充フィールドなどと呼ばれており、コウスケたちが昼食をとる時間を誰も邪魔しないようにしているらしい。

コウスケたちが昼食をとり始めるとMAGIが察知し、全職員にそれを知らせることだが真偽は定かではない。

とにかくコウスケはNERVに来る前には考えられなかった平穏な生活を送っていた。

・
・
・

リリースとの昼食を終えたコウスケは暫く雑務をこなした後、EVAの起動実験棟の管制室にいた。

「赤木、どうだ？」

「渚君は相変わらず好調みたいね。」

とリツコはモニターを見ながら言う。

モニターには各計測器から送られてくるデータとプラグ内の様子が映し出されている

る。

黒いプラグスーツを着ているカヲルは目を閉じていて神経をテストに集中させていた。

「抑止力としてのEVAか……」

「早く解体処分したいところだけど、SEELEの残党が残っている今は無理ね。」

それを聞いたコウスケは少し難しい顔をした。

「別にSEELEだけじゃないさ。今やEVAの技術の一部は世界に知れ渡っているからな。」

「あなたの親友も大変なことをしてくれたわよね。」

「しょうがないさ。あの時はな……」

そう言うコウスケはため息をついた後に首を横に振った。

「とにかく何事も起きなければそれで良し。」

そこまで言つてコウスケはカヲルが映し出されているモニターを見た。

「カヲル……」

と呼びかけると突然カヲルがはっと目を見開いた。

「なんだ？ カヲル、どうしたんだ？」

『ルシファー、さつきとてつもない強さのATフィールドを感知した。おそらく使徒だ

と思われるが……………」

そこまで言つてカヲルは不思議そうに顔を顰めていた。

「何か変なのか？」

『これは……………リリースと似ている……………だが、何か違う……………しかもすぐに消えた……………』

「なんだと!? どういうことだ……………まだ使徒が来るのか!?」

「もう使徒は来ないはずよ! ありえないわ!」

カヲルの使徒という言葉にリツコやコウスケはさすがに動揺した。

使徒との戦争は既に集結しているはずなのだ。

だが、カヲルがそんな嘘を言うはずもない。

そのため二人は混乱していた。

「……………すぐにその反応があつた場所を調査するぞ!」

そう言うが否やコウスケは管制室を急いで後にした。

・
・
・

「それじゃ、リリースも感知したんだな?」

自分の執務室に戻つたコウスケはリリースにそう聞いた。

「ええ……………ただ、少しおかしいのよ。」

「おかしい？」

「なんていうのかしら……リリンとあまり変わらないのよ。」

リリースの言葉を聞いたコウスケは少し考え込んだ。

「……つまるどころ、人であることには違いないんだな？」

「でもね、いきなり現れたのよ。」

「人がいきなりね……」

そう言われてコウスケはますます考えが整理できなくなっていた。

「本当にいきなり現れたのよ。」

「……心配するな。お前さんがそんな嘘を言うなんて思っていないから。」

「えへへ、ありがとう。」

とリリースははにかんでいたが、途端にコウスケにジト目を向けた。

「でも、コウスケは嘘をついて私を騙してたのよね。」

そう言われたコウスケはすぐに何を言っているのかを理解することができた。

「まだ、あのことを根に持つてるのか？」

「当たり前よ。私はずっとコウノトリが来ることを信じて待つてたのに……」

「だから、それは悪かった。」

「別にいいわ。」

そうやってリリースはコースケに視線を向けた。

コースケにはその視線に含まれているものを正確に把握している。

つまるところ

早く子供が欲しい

ということだ。

「そ、それよりも、そろそろ着く頃だろう。」

「あ、逃げた。」

コースケのこのような姿は今のところリリース以外知らない。

もし、リリース以外の人物が目撃すればこう言われるだろう。

「ヘタレ」

それはともかく、コースケは無線を操作し始めた。

「剣崎、指定のポイントについていたか？」

『こちら剣崎。現在、指定ポイント付近を捜索中。誰かがいた痕跡を発見。』

「数は特定できるか？」

『大凡4名と思われる。痕跡に尻餅でも付いたような細工がされていて正確な人数は特

定できない。』

「……………相手はプロだな。」

『それ以外に痕跡が見つからないことからプロだと判断できる。』

それを聞いたコウスケは暫く考え込んだ。

「……………ここに来るな。」

『こつちもかなりの確率でNERVに侵入する部隊だと推測している。』

「わかった。すぐに帰投してくれ。」

コウスケが無線を切るとすぐにリリースが声をかけた。

「敵なの？」

「わからない。敵でないならいいんだが……」

そこまで言いかけた時にコウスケの携帯電話が鳴り響いた。

「ん？ レイ？」

相手はコウスケの娘である綾波レイであった。

「もしもし、どうした？」

『特務一尉、市内で怪しい4人組を発見しました。』

「怪しい4人組？」

『碓君とアスカで追跡したのですが、巻かれました。』

「追跡って……お前らな………まあいい、その4人組がどこに向かったかわかるか？」

『方角的にNERV本部だと思われれます。』

「わかった。お前たちは本部に来てくれ。」

コウスケは携帯電話を切るとリリースに視線を向けた。

「俺たちも発令所に行くぞ。」

...

コウスケたちが発令所に行くといつももの通りにオペレーターたちが仕事をしていた。

「綾波特務一尉、どうしたのですか?」

中央の席に座っている日向マコトが言う。

「日向三尉、メインモニターに監視カメラの映像を映してくれ。」

「どうしたんですか? 何か気になることでも……」

「侵入者だ。」

コウスケの言葉に一同の顔に緊張が走った。

日向はコウスケの言うとおりにメインモニターにすべての監視カメラの映像を映し出していた。

青葉はすぐさまに総司令執務室とミサトに連絡を入れる。

伊吹はMAGIのチェックを行い、異常がないかを確かめている。

「それと零課課長の権限で第一種警戒態勢を発令する。」

『総員、第一種警戒態勢! 繰り返し、総員、第一種警戒態勢!』

『MAGIと外部端末の接続を解除完了!』

『メイン通路の隔壁、閉鎖完了!』

『警備、防衛部隊ともに配置完了!』

『NERV本部、警戒態勢に移行完了しました。』

日向の報告とともに発令所の上段にゲンドウと冬月が現れた。

「状況は？」

「NERV本部に侵入者ありとのことですよ。」

「それは本当か？」

冬月の顔は少し驚いていた。

「はい。カヲルとリリスが察知し、レイ、アスカ、シンジの三人が市内にて怪しい人物を見たとのことですよ。」

「わかった。綾波特務一尉、任せる。」

ゲンドウが言い終わるとミサトとリツコが発令所に駆け込んできた。

「状況は日向君から聞いたわ。今はどうなの？」

「特に何も変化はなしだ。」

「そう……とにかく警戒は怠らないでね。」

そしてミサトはモニターを見つめ始めた。

刻一刻と時は過ぎていく。

「……変化なし。」

「こちらにも異常ありません。」

「どういうことだ？ 狙いはここじゃないのか？」

発令所のメインモニターにはなんら異常はなく、また上がってくる報告にも何ら異常はなしだけであった。

(変化なし……どういうことだ?)

このまま何も起きないのではないか

そんな風に皆が考え始めた時、リリスが一つのモニターに注目していた。

「どうしたんだ？」

「………いるわ。それも4人。」

コウスケははっとなりリリスが見ているモニターに注目した。

だが、通路以外何も映し出されていなかった。

「……葛城、お前には見えるか？」

「………ダメ。」

「私にも見えないわ。」

ミサトに続いてリツコまで言う。

「私には感じるの。……リリンのようで少し違う4人だわ。」

リリスはいたく真面目に言っていた。

「わかった。その場所まで行ってみよう。」

「待って！ 二手に分かれたわ。」

リリスは目を瞑った。

「……一人は……私たちの執務室に向かっているみたい。」

「意外とやりますね。」

リリスの言葉を聞いた日向がそのように呟いた。

「不味いわね。」

「ええ、コウスケ君の部屋ってMAGIに直接アクセスできるどころか、すべての情報が集まってるって言ってもいいからね。」

「……相当の腕前みたいだな。」

そう言うコウスケは胸からグロッキー7を取り出した。

「取りあえず俺は執務室に向かう。もう片方は……」

「私が行くわ。」

とリリスが言う。

「……無茶はするなよ。」

「大丈夫よ。それより、コウスケも気をつけてね。」

「ああ。零課の第二班と四班はリリスに続け。残りは俺について来い。」

・・・

「にやゝ、いったいどうなってるにや。」

「こつちの姿は見えてないんじゃないの?」

「どないなつとるんや!」

NERVに侵入した真希波・マリ・イラストリアス、鈴原トウジ、天田里奈は焦っていた。

向こうからは姿が見えないはずなのに何故か正確に追撃してくるのだ。

しかも完全武装した集団である。

この集団は無論、作戦局零課のメンバーである。

「うわつ、前からもくるじゃん。」

「そやかてこの人数相手は分が悪すぎるわ。」

「こつちならいけそうだよ。」

もう何度こんなやり取りをしているのかもわからない。

取りあえず何とか囲まれずに逃げてはいるが、このままではいずれ捕まる。

それがわかるからこそ焦りもするのだ。

「さすがに疲れてきたよ……」

「そやかて次々湧いて出てくるさかい、どうもならへんで。」

この状況をどうやって打開すべきなのか

そう考えているうちにマリがふと気が付いた。

「ん？ 偽装されてる……ここなら隠れられそう。こつちに入るよ！」

そうして三人は偽装された隠し部屋に入ってしまった。

少しして部屋の扉の前に吹雪シンゴと剣崎キョウヤが現れた。

「作戦完了ですね。」

「そうだな。まさか、こんな手を使うなんて驚いたぜ。」

「私たちは相手の姿が見えない。でも、位置は特定できている。だったら面で押してし

まえばいい。」

「さすがはリリス……あいつの妻と言うのは伊達じゃないな。」

……

「もう追ってこないね。」

「は、一安心。」

「ほな、ちよつくら休憩しよか。」

「残念、そういうわけにはいかないわ。」

三人が慌てて声が出した方に振り返ると、そこにはリリスが一人で立っていた。「もう、堪忍してや。」

「でも、一人だよ？」

「なら……」

そう言うが否やマリとトウジは同時に動いた。

左右からリリスを挟むように攻めかかる。

だが、いとも簡単にリリスに避けられてしまった。

リリスは余裕の表情を見せている。

「あなたたち面白いものを持ってきているわね。でも、私にはわかるわよ？」

「なら、正々堂々と勝負しよか！」

「こつちのほうか人数は多い……いける！」

二人は力を開放し再びリリスに迫る。

だが……

「ATフィールド!？」

「そないアホな話があるかい！」

リリスは依然として微笑んだままである。

二人もATフィールドを扱い、またも攻めかかるが一向にリリスのATフィールドを

破ることができない。

「ATフィールドが固すぎる。」

「こんなもん……根性で……」

必死な二人に対してリリスは少し飽きているように見えた。

「もう終わりなの？　じゃあ、こつちから行くわね。」

そう言うが否や二人は途端に体が動かなくなる。

「な、なんで!？」

「か、体が動かへん……」

「ATフィールドにはこんな使い方もあるのよ。」

そう言うとりリスはもう一人の侵入者である里奈に視線を向けた。

「あとはあなただけ……あら?」

リリスは里奈をじつと見ていた。

「な、なに?」

「……………そう、そう言うことなのね。」

…

一方コウスケは執務室の前に立っていた。

「ミツヒサ、ユキ。配置は済んでるな?」

『僕の方は大丈夫ですよ。』

『私も。』

榛名ミツヒサと長良ユキは執務室を取り囲むように部隊を配置していた。

『でも、課長。本当に一人で行かれるのですか？』

ミツヒサが心配そうな声で言う。

「出来れば、平和的解決が望ましいからな。大人数で行くと警戒される。」

『わかっています。くれぐれも無茶はしないでください。』

『課長に何かあつたらリリスさんに申し訳ないですから。』

「大丈夫だ。心配するな。」

コウスケは執務室のドアを調査した。

「中からロックをかけているか……だが、こんなこともあるのかと……」

コウスケは自分のカードを取り出して、偽装されたカードリーダーに通した。

ここにコウスケのカードを通すと手で開けられるようになっていたのだ。

コウスケは少しドアを開けて中の様子を窺った。

中にはレイイときほど変わらない歳の少年がPCの前で何かをしていた。

だが、コウスケはその姿にどこか見覚えがあった。

暫く考えているうちに思い当たる出来事があった。

以前、夢の中で会ったことのある少年だった。

「あの時……夢の中でいじけてた……確か、竜崎……青空と言ったか？」

正直に言うとかウスケは信じられないという心情が大きく働いていた。

妙に現実感があつたとはいえ、夢の中での話である。

その夢の中に出てきた少年が目の前にいるのだ。

また考え込みそうなのを振り払う。

「とにかく、彼の目的を知るべきだな。」

すると中にいる青空が何かに驚いていた。

「うわ……やばいことしちゃまったな……はやいところ逃げなきや……」

「まずい……また姿を隠されたら追撃できんな……仕方ない。」

そう言うとかウスケは中に突入して、グロック17を青空に向ける。

「今の状況で逃げられると思うか？」

青空ははつとなりコウスケの方を向いた。

「はあ……お久しぶりですね、コウスケさん。」

「まさか、ここに君が来るとは思わなかったよ、竜崎青空君。」

とかウスケが言い終わった瞬間に青空はPCからUSBメモリーを引き抜く。

それと同時にコウスケはグロック17をはじかれてしまった。

しかし、その感触にはどこか物覚えがあつた。

(まさか……ATフィールド!?)

「なに!? 君も使徒なのか?」

「いや、違いますよ、俺は人間です、人間でも出せるやつはいるんですよ……」

青空の答えにコウスケは呆然としてしまった。

その際に青空は部屋を飛び出し、刀を構え床を切つて下層フロアに逃げてしまった。

「しまった!」

『どうしましたか?』

「目標が下層に逃げ込んだ。」

『わかりました。急いで追撃します。』

「たのむ。」

とはいえ下層に行くまでにそれなりに時間が掛かってしまう。

一番の近道は……

「……仕方ない。飛び込むか!」

コウスケは青空が作った穴に飛び込んだ。

コウスケは何とか床に着地することに成功した。

青空の姿は見えなかったが何か走る音は聞こえていた。

「足音……こつちか！」

コウスケは足音を頼りに追撃する。

暫く走っていると何かアクシデントでもあったのか立ち止まっている青空がいた。

「うそやん!?! ああーあ………」

青空のそんな声と同時にリリスから通信が入った。

『コウスケ、三人は捕まえたわ。』

「そうか。お前さんは無事なんだな？」

『大丈夫よ。』

「そうか、それは良かった。」

コウスケは通信を切ると青空に近づいた。

「いっしょに来てもらえるかな？」

「いつでも逃げられるけどね……まあ今はついて行きますよ。」

・・・

コウスケは捕まえた4人を総司令執務室に案内した。

総司令執務室にはレイをはじめとするEVAパイロットたちも呼び出されていた。

そこでコウスケたちは驚くべき事実と遭遇することになる。

青空をはじめとする4人はこことは違う異世界から来たというのだ。

ゲンドウや冬月などは信じられないと言いたそうであったが、3人がこの世界に持ち込んだEVAをジオフロントに召喚することで納得したようだ。

特に五号機と六号機の姿を見て納得したようだった。

コウスケどころかゲンドウすら知らないEVAである。

この世界では五号機以降はすべて量産機となっているからである。

現実に存在しないEVAがいる。

そして青空たちが言う異世界の話をつなぎ合わせた方が確かに納得できるものなのだ。

そんな中、青空たちはこちらと協定を結びたいと申し出てきた。

それにゲンドウはすぐに了承する。

ゲンドウからしてみれば別に悪い話ではないのだ。

うまくいけば青空たちの世界の技術を学べるからだ。

それに異世界の自分に会ってみたいなんて考えもあるのだろう。

とにかくコウスケたちは異世界のNERVと協定を結ぶことになった。

「ところで、この世界ってアスカは誰かと付き合ってるの?」

不意に青空がそんなことをアスカに聞いていた。

「はあ?! そんなわけないでしょ!」

とは言うもののコウスケをはじめとするこちらの世界のメンバーはアスカが何故ジオフロントにある畑にちよくちよく顔を出しているのか知っている。

コウスケはそんなアスカの反応に思わず笑いが出そうになった。

「そうなのかい、一応こっちは青空君と付き合ってるけどね。」

などとマリがさりりと说つてのける。

青空は嬉しそうにしていた。

一方リリスは……………

「まさか私が私に会うなんてね……………不思議な気分ね……………」

「そうだねー」

と里奈とニコニコしていた。

このカナルのような銀髪に青い瞳を持った里奈と言う女性は青空の世界のリリスだそうだ。

そんな里奈にコウスケは少し興味を持っていた。

(里奈とか言う女性は向こうのリリスなんだよな……………となるとこっちのリリスみたいにはつぺたが……………)

と言うことだ。

触つてみたいなんてことをコウスケが考えていると……………

「コウスケ？ ダメよ。」

「な、何の事だ？」

「私は私。里奈は里奈……わかるでしょ？」

「だが……」

「わ、か、る、で、しょっ？」

とにこやかに言われてしまった。

「……………はい。」

コウスケはそう答えるしかなかった。

そうやってお互いの世界についていろいろ話し合っている時に何かの呼び出し音が

鳴り響いた。

その音を聞いて青空が携帯電話と取り出していた。

何やら驚いているようで、彼らの世界で何かが起こったのだろう。

総司令執務室には不穏な空気が流れ始めていた。

I F 綾波カルテット

日本 第三新東京市

2004年に行われた国会で第二次遷都計画で承認され、2006年に建設が開始された。

2015年を目処に着工されたこの都市は新たなる日本の首都として期待を担うことになる。

だが、その実態はセカンドインパクトを起こしたとされる使徒を迎撃するための迎撃要塞都市で都市の中には偽装された砲台などが隠されている。

何故、首都をここまで武装させるのか……

一般市民の中からそんな声上がるのも無理はないが、これは非常時に備えたものとして説明がされる。

そしてその説明の際に今は放棄された旧東京があげられる。

そんな都市の管理は日本政府ではなく、第三新東京市に本部を置く特務機関NERVの一部署に任されている。

この話はその部署を任されている一人の男の奇妙な物語である。

コンフォート17

第三新東京市にあるマンションの一つである。

とは言っても現在入居しているのは二世帯のみでNERVにとってVIPたちが暮らすマンションである。

この二世帯はお隣さん同士であり、その片方には綾波と言う表札がかかっている。

世帯主は綾波コウスケ

165cmと平均より少し小柄ながら、見た目よりがっしりとした体を持っている。

普段はぼーっとしたような顔の彼は特務機関NERVで特務一尉と言う特殊な階級を持っている。

NERVでの役職は作戦本部の副部長、作戦局二課の課長であり意識されていないが、ただ一人の航空隊でもある。

結婚はしていないどころか一度も付き合ったことがない。

そんな彼は自宅の台所で朝食を用意していた。

「さて……そろそろ帰ってくるか……」

コウスケがそう呟くと玄関から圧搾音が聞こえていた。

「ただいま。」

そう言つて入つていたのはコウスケの被保護者となつてゐる綾波レイである。

「お帰り。今日は誰だつた？」

「葛城三佐です。」

大変奇妙な会話であるが、この二人にとつては挨拶みたいなものである。

レイがコウスケと同居するようになってから真夜中にいつの間にか部屋から抜け出してゐるのである。

行く場所はコウスケの部屋の他にシンジ、アスカ、ミサトの部屋がある。

レイ本人は全くの無自覚で当初はコウスケがどうかしようとしたが、一向に治る気配がない。

一人の少年を除いて特に害があるわけでもないので保護者であるコウスケは放置することにした。

「そろそろできるから席についておけ。」

「わかりました。」

そう言ふとレイは三つある席の一つに腰かけた。

それと同時にレイの部屋からふすまを開ける音が聞こえてくる。

「うゝ……眠い……」

と言つて出てきたのはレイと瓜二つの少女だつた。

「こら、挨拶をちゃんとしろ。」

コウスケがそう言うのと少女ははっとなり嬉しそうに言う。

「あつ、特務一尉！ おっはようございませす！」

「おはよう。……寝癖を直して来い。」

「へ……きやくー！」

少女は髪を手で触って確認すると慌てて洗面台に駆け込んだ。

「……騒がしい。」

「まあ、元気なのはいいことだ。」

レイとコウスケは少し呆れながら言う。

するとコウスケの袖が少し引つ張られた。

「ん？ お前さんが起こしてくれたのか？」

コウスケの視線の先にはこれまたレイと瓜二つの少女がいた。

大凡4歳くらいであり、第三使徒をデフォルメした人形を手に使っていた。

少女はこくりと頷いた。

「そうか。」

そう言うのとコウスケは少女の頭を撫でる。

少女は少し嬉しそうに口元を綻ばせていた。

現在の綾波家はコウスケを家主とした4人が暮らしている。玄関から現れたのは言うまでもなく綾波レイである。

それでは寝癖をつけた少女と使徒の人形を持った幼女は誰なのか実は彼女らも綾波レイである。

つまるところ綾波家には三人の綾波レイがいるわけである。

偽名でも無く戸籍登録のミスと言うわけでもない。

さらに言うのであれば遺伝子レベルでのレイとの一致率は100%である。

もうおわかりであろうが、彼女ら二人はレイのクローン体である。

「うう……もうお嫁に行けないよ……」

「トロワ、お前さんが寝癖をつけるのはいつものことだろう。」

洗面所で寝癖を直してきた少女をコウスケはトロワと呼んだ。

「それもそうだね。」

「早く座れ。今日はお前さんが好きな卵焼きだ。」

「やった〜!」

そう言うところトロワはすでに座っていたレイの横に座る。

「ドウ、おはよう。」

「おはよう。」

トロワはレイのことをドウと呼んでいた。

幼女の方はカトルである。

つまるところこうなる。

家主：綾波コウスケ

長女：綾波レイ（ドウ）

次女：綾波レイ（トロワ）

三女：綾波レイ（カトル）

コウスケはトロワが座るのを見ると最後の料理をテーブルに置き、ドウの対面に座る。

そこにカトルがちよこちよここと走っていき、コウスケの膝の上に座った。

それをトロワが羨ましそうに見ている。

「いつもいつも思うんだけど、カトルだけずるい！」

「何を言ってるんだ。第一、お前さんじゃ前が見えなくなるだろ。」

「そうよ。トロワ、諦めなさい。」

ドウの言葉にカトルが少し勝ち誇ったような顔をしながら頷いていた。

トロワはそんなカトルを見て少し膨れていたが、反撃の矛先を他に向けることにした。

「何よ、ドウだって碓君にああしてもらいたいでしょ？」

「そ、それは関係ないわ。」

「嘘ついちゃって、目が泳いでるわよ。」

そう言われたドウはさっとトロワと反対の方向に顔を向けた。

トロワはさらなる追撃を試みる。

「碓君の膝……柔らかいんだろうな……」

トロワの言葉を聞いてドウは徐々に赤くなっていた。

「そして碓君が後ろからぎゅっと……いたっ！」

トロワの頭に丸めた紙が飛んできた。

「そこまですておけ。時間が無くなるぞ。」

「は〜い。」

「レイも妄想に浸ってないでさっさと食べる。」

「……………はい。」

コウスケはドウのことをレイと呼んでいる。

何故、コウスケがドウと呼ばないのかと言うとトロワやカトルはまだ人の名前に聞こえるのだが、ドウとなるとそのように聞こえないからである。

人を指す言葉でドウを使うことがあるが、この時は名前がわからない人物に使う。

なのでコウスケはどうしてもドウという響きがいいイメージを持つことができないため、ドウだけはこれまで通りにレイと呼んでいる。

こうしてコウスケは結婚どころか恋人すらいない状況ながらも三人の保護者として一日の始まりを過ごすのである。

・
・

NERVに登庁したコウスケはいつも通り仕事をこなしていた。

だが、昼食が済んだ後はボーとしているのである。

「コウスケ君、いる?」

そう言つてコウスケの執務室に入ってきたのは葛城ミサトである。

彼女はコウスケの上司にあたるが、それは表の話である。

「なんだ、葛城か。」

「なんだはないでしょう?」

「あまり気にするな。それで何の用だ?」

コウスケがそう聞くとミサトは執務室に置いてあるポットから紅茶をカップに注いだ。

「お前な……一言くらい言えよ。」

「別にいいでしょ? 減るもんじゃないし。」

「……………消耗品だから減るぞ。」

「そんなことばかり言ってるともてないわよ。」

「知ったことか。」

そう言うところウスケは煙草を取り出ししていた。

ミサトはそんなウスケを見ながら少し呆れた表情を浮かべていた。

この綾波ウスケと言う男は他人から他人への好意などは敏感に感じ取るが、自分に対する好意に関しては妙に鈍感なのだ。

ミサトが見たところでは仕事上の付き合い、よくても友情程度にしか思わないようである。

そしてそれを裏付けるエピソードもミサトは知っている。

あるNERVの女性職員が何かしらウスケの手伝いなどをしていた。

傍から見ればその職員がウスケに好意を持っていることがすぐにわかるのだが、ウスケ本人は全く気付いていなかった。

なかなか振り向いてくれない彼にその職員は私と付き合い合ってくださいと告白する。

ウスケは意外なほど簡単にOKし、その職員はかなり喜ぶのだが……

「この時間に付き合ってくれと言うことは……残業か？ 大変だな。」

などと真面目な顔で言われたので慌てて否定するが……

「残業じゃないなら……：戦闘訓練か？ それなら俺じゃなくて葛城の方が適任だろう。ああ、葛城は忙しいから俺に来たのか。ふむ、それなら長良三尉の方がいいだろう。」

そう言つてコウスケは長良ユキを呼び出した。

その職員はユキの指導によりハンドガンの命中率が大幅に上がったそうだ。

「なんで気付いてくれないのよ！　なんて叫びながら訓練してたわ。可哀想に……」

とは長良ユキの言葉である。

そうやってコウスケは無自覚ながらも撃墜数を増やしていくのだ。

全くの余談ながら、綾波コウスケを射止めるのは誰かと言うことで賭けの対象にされている。

「なんだ？　何か俺に言いたいことでもあるのか？」

コウスケは呆れた表情のミサトに言う。

「……：はあ、あなたは恋人とか作らないの？」

「俺だつていればいいなくらいは思うさ。でもな、俺は転属でここに来たんだ。使徒との戦いが終わつたらここから離れることになるだろう。それに……」

そう言うコウスケはどこか遠いところを見る目つきになった。

「……この人たちは俺の戦場での姿を知らない。」

そう言って自嘲するコウスケを見ながらミサトは好意に気付いてないふりをしてるだけなのかと疑った。

「まあ、俺に好意を寄せるような人なんていないだろう。」

「それ、本気で言ってるの？」

「冗談に聞こえたか？」

コウスケはいたって真面目に答えていた。

そんなコウスケにミサトはため息しか出ない。

(こりや、本物だわ……リツコとアスカが相談しに来るわけね……)

「なんだ？ 言いたいことがあるならはつきり言ってくれ。」

「……もういいわ。この話は終わりにしましょう。」

ミサトの呆れ顔にコウスケはただただ困惑するだけであった。

「それにしてもこの時間にコウスケ君が仕事してないなんて珍しいわね。」

ミサトがそう言うとかウスケはため息をついた。

「多分、そろそろだと思ってるな。」

「何が？」

「すぐに……」

コウスケがそう言いかけると警報が鳴り響いた。

「まさか……使徒!？」

ミサトは慌てて発令所に向かおうとするが、コウスケが止めた。

「何してるのよ!」

「葛城、落ち着け。これの音だ。」

そう言つてコウスケが取り出したのは携帯電話だった。

よく聞くと確かに携帯電話から警報がなっていた。

「携帯のアラーム?」

「ああ。」

「………なんで?」

ミサトがそう聞くとコウスケは少し答えづらそうに言う。

「………学校からの連絡だ。」

そう言つてコウスケは携帯電話に応答する。

暫くするとコウスケは携帯電話を切りため息をついた。

「………なんだったの?」

「学校でレイとアスカ、トロワが問題を起こしてくれた。犠牲者はシンジ君だ。」

「なんですつて!?!」

「話を聞いた限りではこういうことらしい。」

そう言つてコウスケはこの説明を始めた。

最初はトロワがアスカを怒らせて鬼ごっこが始まった。

これはトロワが学校に登校してからと言うもののいつも起こることだ。

だが、今回はトロワの逃亡先にシンジが偶然、現れたことだ。

トロワはひよいとシンジを避けたのだが、車が急に止まれないようにアスカも止まる
ことができずシンジと激突することになる。

そこにドウが現れる。

無論、ドウが一部始終を知るわけがなくその終わりだけを見ることになる。

そしてドウがトロワとアスカを追いかけてまわしたようだ。

その姿はまるで修羅のようだったとは相田ケンスケの言葉である。

その騒動は担任である根府川により鎮圧されている。

そのようにコウスケが説明を終えた時、またもや携帯電話から警報が鳴り始めた。

その警報はアニメにあるもので地球を救うために16光年を旅した宇宙戦艦の警報
だった。

「今度は何かしら?」

「……………幼稚園からだ。」

「ああ、あの子ね。」

コウスケは再び携帯電話を手を取った。

暫くしてコウスケは携帯電話を切ると、やはりため息をついた。

「すまん、少し席を外す。」

「どうして?」

「カトルの迎えに行ってくる。……俺がいなくて泣きわめいているらしい。」

「そ、そう……」

ミサトはそう答えるしかなかった。

コウスケもカトルを迎えに行くために部屋を後にする。

「……まあ、本人も嫌がつてるわけじゃなさそうね。」

部屋を出ていくときのコウスケの顔は本当に嫌がつているものではなく、出来の悪い娘をどう説教してやろうかと言う顔だった。

・
・
・

コウスケはカートレインに乗り、NERV本部の出口に向かっていった。

「幼稚園に迎えに行く……ちよつと前までは考えられなかったな。」

そう言いつつコウスケはこのような事態になった事件のことを思い返していた。

「はあ、あれはターミナルドグマに潜入したときだったな……」

・
・
・

綾波コウスケはセントラルドグマの奥深くにある、ターミナルドグマの一つの部屋にいた。

そこにはLCLに浮かんでいる無数の「綾波レイ」たちが浮かんでいる。

コウスケを止めようとしたリツコを振り払うと目に見えたバルブに手をかけていた。

その少し後ろでは碇シンジが呆然と立っていた。

最近、心を寄せ始めた少女のともでもない真実

それをつきつけられて実の父親に対する感情やその少女に対する感情が複雑に入り混じっていた。

一方、この事態を引き起こした赤木リツコ自身はすすり泣いていた。

ミサトの昇進。パーティでレイの姿を見た時、どうしようもないほどの黒い感情が働いた。

無論、自分がしていることはただの八つ当たりであることを知ってはいた。

でも感情を押さえることができない。

それが今回、このような暴挙に出た理由でもあった。

それをコウスケに改めて指摘されたことによりどうしようもない後悔に襲われていたのだ。

「すまんな。」

コウスケはそう言うと言悟を決めてバルブを回そうとした。
のだが……

「……赤木博士。」

「何？ こんな私にいったい何の用があるの？」

「一人……動いているんだが……」

「何を言っているのよ。」

そう言いつつもリツコはコウスケの方に視線を向けた。

「そんな……あり得ないわ！」

コウスケの視線の先にはニコニコと笑いながら手を振っている「綾波レイ」がいた。

その「綾波レイ」はすいっとLCLの中を泳ぐと一人くらい入れそうなチューブの中に入る。

「これは……どういうことだ？」

「わからないわ。」

コウスケたちが困惑していると「綾波レイ」がドンドンとチューブを叩き始める。

「早く開けろ！」

コウスケの声にリツコはすぐに反応しチューブを開けた。

「やっと開けてくれた。」

「一応聞くが……レイ……なのかな？」

「ん、私自身は綾波レイだと認識してるよ。」

コウスケの目の前にいる「綾波レイ」は少し首を傾げながら言う。

「……何か違うな。」

「当たり前じゃない。あの子はあの子、私は私なんだから。」

この時、リツコは一人で黙々と何かを考えていた。

その間に「綾波レイ」はシンジの方に小走りで向かった。

「あなたがあの子のお気に入りのお碇君ね。」

「は、はい……」

シンジが返事をする。「綾波レイ」は何か品定めをするような目でシンジを見ていた。

「ん、私の好みじゃないわね。」

その言葉にシンジは少なからずショックを受けるのだが、そんなことよりもっと重大なことがあった。

「どうしたの？」

「い、いや……」

シンジの態度を怪訝そうに見ていた「綾波レイ」はシンジの視線がどこかに固定されていることに気が付いた。

「……………いや〜ん！ 碇君のエッチー！」

「はっ、ご、ごめんなさい!!」

LCLの中にいた「綾波レイ」が服を着ているわけがなかった。シンジとて健全な男子である。

ある意味、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

「赤木！ 白衣を貸せ！」

コウスケはそう言うのとリツコから半ば強引に白衣を借りると「綾波レイ」に着せた。

「すまん。今はこれしかない。」

すると「綾波レイ」はじつとコウスケを見つめていた。

「なんだ？」

「こつちのほうが私の好みだな。」

「何を言っているんだ。」

そんなことをしているうちにシンジは必死に「綾波レイ」から視線をさげようとLCLの方を向いていた。

「……………コウスケさん。」

「どうした？」

「こつちの小さい綾波も動いています……………」

「なに!？」

シンジの視線の先をコウスケが追うと大凡4歳くらいの「綾波レイ」が確かに動いていた。

「赤木! もう一人出てくるぞ! 注水急げ!」

コウスケの言葉にリツコが慌てて注水を行う。

そして小さな「綾波レイ」もまた外に出てきた。

「…………お前さんもレイなのか?」

小さな「綾波レイ」はこくりと頷いた。

コウスケはその反応を見ると自分が着ているジャケットを小さな「綾波レイ」に着せた。

「取りあえずどうするべきなんだ?」

……

「大まかな話はわかった。」

その場でどうこうできるわけもなく結局、総司令執務室に向かい碇ゲンドウに報告することにした。

ゲンドウの傍らには冬月も立っている。

「赤木君、すまなかった。」

「いえ、私が勝手に思い詰めただけです。」

「それでもきつかけは私だ。その償いはいずれ行おう。」

ゲンドウはいつものポーズを崩していない。

だが、いつものような高圧的なものの言い方では無かった。

「シンジ、レイの秘密を知ってしまったのだな。」

「うん……」

「レイには罪はない。その罪は私にある。」

「わかってるよ。正直、父さんのこと許せないと思ったよ。」

シンジはしっかりとした目でゲンドウを見ていたが、すぐに複雑そうな表情を見せた

「でも、父さんたちがこんなことをしなかったら、僕は綾波に会えなかったんだよね。そ

う思うと……」

「レイをどうこうするつもりはない。……レイを頼む。……今まですまなかった。」

すべてののわだかまりが解けたわけではない。

それでもこの親子にはこのような一歩から始めるのが一番なのではないか

コウスケにはそのように感じられた。

「ところで、君たちはどうしたいのかね？」

ゲンドウの隣でじっと立っていた冬月が「綾波レイ」たちに問いた。

「私はこの人と一緒に暮らしたいな。」

そうやって「綾波レイ」がコウスケの腕にしがみついた。

その反対側では小さな「綾波レイ」がしがみついている。

「とのことだが……」

「自分ですか？」

「……他に適任はいまい。」

この「綾波レイ」たちの特殊な出で立ちを考えればおいそれと任せられるような人はいない。

そういう意味ではこの場ではコウスケ以外に引き受けられる人もいないのが事実だった。

「………わかりました。」

「ついでに今いるレイの世話も任せる。」

「はい？」

コウスケは一瞬、何を言われたか理解できなかった。

「ふむ………確かにその方がいいだろう。」

「何故、レイまでも自分が？」

「そのレイたちは姉妹ということにする。便宜上、今までいたレイを長女としよう。」

「一人だけ違うところに住んでいるのは変だからな。」

「いえ、ですから……」

コウスケを置いてけぼりにし、ゲンドウと冬月の会話が進んでいく。

「となると住むところだな。綾波特務一尉の家では狭いだらう。」

そう言う冬月にリツコが口を開いた。

「葛城三佐のとなりはどうでしょうか？」

「ふむ……警備も一括で扱えるな。」

「そのように手配しよう。」

そこまで話が進んでゲンドウがコウスケに言う。

「綾波特務一尉には本日付でレイたちの保護監察官に任命する。」

「よろしく頼むよ。」

ここまで来てコウスケは何も言えなくなった。

そして

(面倒事を押し付けられた気がするんだが……気のせいだよな。)

そう思うコウスケの横では喜んでいる「綾波レイ」たちがいた。

・
・
・

そういうわけでコウスケは三人の綾波レイと暮らしている。

いま、思い返してもどうも納得がいかない。

だが、コウスケは三人との生活に対してさほど嫌な感情は持っていないかった。

一般常識を持つていないことでいろいろと面倒事が起こりはするものの、なんだかんだで根気よく面倒を見ているのだ。

そして本人は気付いていないが、三人と接するときのコウスケはいつになく穏やかな表情なのだ。

そんな騒がしいながらも平穏な日々を暮らすコウスケは一つ心配事があつた。

「また一人出てきたらどうするつもりなんだ？」

ターミナルドグマの「綾波レイ」たちは破棄されずに残っている。

破棄も考えられたのだが、今回のようなことが起きるかもしれないと考えられたため現状を維持している。

その副産物としてダミープラグの開発も完全にストップしている。

「俺と同居することに……なるだろうな……」

何となくそう感じているコウスケだが、それは事実でそのための準備もすでに完了していたりする。

「まあ、なるようにしかならないか。」

そう呟きながらもコウスケはカトルの迎えに行くために幼稚園へと向かう。

後に綾波家にもう一人の同居人が現れ、トロワとカトルと熾烈なバトルを繰り広げる
ことになる。

「あなたたちにコウスケは渡さないわ！」
とのことだが、それはまた別の話である。